岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第641集

津軽石大森遺跡（つがるいしおおもり）発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

２０１５

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
（公財）岩手県文化振興事業団

津軽石大森遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

遺跡遠景（南から撮影。写真中央やや下方。）

26号竪穴建物跡出土遺物

16号竪穴建物跡出土遺物

22号竪穴建物跡出土遺物（右側５個体がカマド２右脇出土）

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発に当たっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本書は、三陸沿岸道路建設事業に関連して平成25年度に行われた宮古市津軽石大森遺跡の発掘調査成果報告書です。今回の調査により、縄文時代早期から近代に至る過去の人々の痕跡が見つかりました。特に古墳時代から奈良時代にかけての集落は、岩手県沿岸部での集落遺跡調査としては、大規模の調査となり、大きな成果となりました。この時代の三陸沿岸地域に関わる文献上の記載として、六国史の一つ『続日本紀』の霊亀元年（西暦715年）の条に、閉村の蝦夷、須賀君古間比留が郡家の設置を願い出たとあります。本遺跡は、須賀君古間比留の時代と合致する遺構・遺物が数多く見つかっており、当時の律令国家と三陸沿岸部の蝦夷との歴史を考えるうえでも貴重な資料と思われます。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成27年３月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長　菅　野　洋　樹

例　　言

1　本報告書は、岩手県宮古市津軽石第４地割73－４ほかに所在する津軽石大森遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2　本遺跡の調査は、「三陸沿岸道路建設事業」に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所との協議を経て、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3　本遺跡の調査成果の概略は、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第630集『平成25年度発掘調査報告書』に公表しているが、本書の内容を優先するものとする。

4　本遺跡の岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡コード番号並びに遺跡略号は、以下の通りである。

　津軽石大森遺跡　番号：LG53-1207　略号：TO-13

5　各遺跡の調査期間・調査面積（調査対象面積）・担当者は、以下のとおりである。

野外調査

野外調査期間	調査面積	担当者
平成25年４月10日～ 平成25年８月27日	3,455㎡	米田　寛、佐藤淳一、 中村隼人、立花雄太郎

室内整理

室内整理期間	担当者
平成25年６月24日～６月30日 平成25年８月１日～平成26年３月31日	米田　寛、中村隼人

6　野外調査での遺構写真撮影は調査担当者、遺物写真撮影は当センター写真撮影を専門とする期限付職員が担当した。

7　本報告書の執筆は、第１章第１節を国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所が、その他を米田が執筆し、編集は米田が担当した。

8　石器実測は（株）ラングに委託した。

9　出土遺物の鑑定・分析・保存処理業務委託は次の機関に委託した。

　放射性炭素年代測定…… 株式会社 加速器分析研究所

　種子・炭化物同定分析…… 古代の森研究舎

　鉄製品科学分析・保存処理…… ＪＦＥテクノリサーチ株式会社

　貝類同定…… パリノ・サーヴェイ株式会社

　なお、貝類同定の再検討のため、斉藤慶吏氏（青森県埋蔵文化財調査センター：平成25年度復興支援により岩手県教育委員会派遣）に助言を賜った。

10　本報告書に掲載した地図は以下の通りである。

　国土交通省国土地理院１：25,000地形図「津軽石」（ＮＪ－54－13－３－２）

　国土交通省国土地理院１：50,000地形図「宮古」（ＮＪ－54－13－３－３）

11　野外調査及び報告書作成にあたり、次の方々及び関連機関の協力を得た（敬称略・順不同）。

　岩手県教育委員会、宮古市教育委員会、宇部保則、小針大志、高倉　純

12　本遺跡から出土した遺物及び調査資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

凡　　例

（1）図版構成

遺構図版は竪穴建物跡、土坑、陥し穴状土坑、柱穴の順で種類ごとに掲載した。遺物図版は、種別ごとに掲載し、各図版中に出土地点を明記した。土器破片資料の一部と鉄滓・琥珀は表・写真掲載した。遺物番号は、図版と写真図版とも同一番号とした。

（2）図版縮尺

A）遺構図版　　遺構平面・断面は1/50を基本とし、大型遺構については1/60など適宜変更し、版面にスケールを付した。カマド断面図は1/20で統一した。

B）遺物図版　　縄文・弥生土器、土師器、須恵器、礫石器、陶磁器：1/3、土製品・鉄製品：1/2、鉄製品、剥片石器：2/3。出土地点別土器修正図は縮尺を約1/10を基本としている。

C）写真図版　　遺構・遺物とも縮尺不定である。特に土師器・須恵器は、立体復原資料を優先して全体形状把握可能な任意サイズで掲載した。礫石器・陶磁器は・土製品・鉄製品は、図版縮尺とほぼ同縮尺で掲載している。

（3）図版凡例

図中に使用した記号とアミ掛け濃度の凡例は以下のとおりである。

＜遺構＞

地山

礫・石

焼土範囲

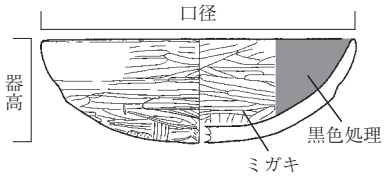
＜遺物＞

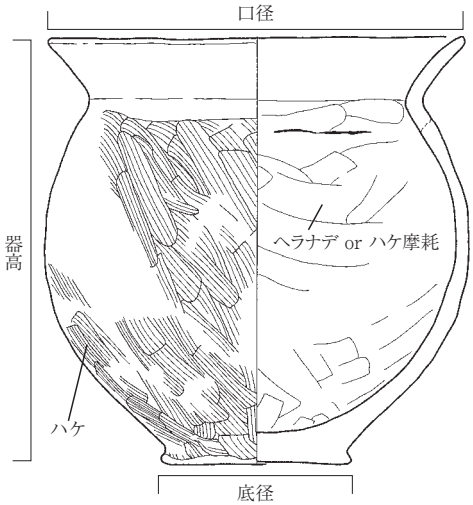
礫石器磨面

礫石器黒色付着物範囲

土師器赤色処理

土師器黒色処理





目　　次

Ⅰ　調査に至る経過

1　調　査　経　緯 …… 1

2　調　査　経　過 …… 1

Ⅱ　立 地 と 環 境

1　遺 跡 の 位 置 …… 2

2　地 理 的 環 境 …… 2

3　歴 史 的 環 境 …… 4

4　基　本　層　序 …… 8

Ⅲ　遺 構 と 遺 物

1　概　　要 …… 11

2　調査・整理の方法

（1）野　外　調　査 …… 12
（2）室　内　整　理 …… 12

3　検　出　遺　構

（1）竪 穴 建 物 跡 …… 14
（2）土　　坑 …… 109
（3）陥し穴状土坑 …… 111
（4）柱　穴　群 …… 115

4　出　土　遺　物

（1）縄　文　土　器 …… 116
（2）弥　生　土　器 …… 116
（3）土　師　器 …… 116
（4）須　恵　器 …… 117
（5）石　　器 …… 117
（6）土　製　品 …… 117
（7）鉄　製　品 …… 117
（8）陶　磁　器 …… 117
（9）その他（琥珀・鉄滓） …… 117

Ⅳ　自然科学分析

1　津軽石大森遺跡における放射性炭素年代（AMS測定） …… 179

2　津軽石大森遺跡の出土骨貝類 …… 185

3　津軽石大森遺跡から出土した炭化種実 …… 192

4　鉄製品保存処理及び鉄製品分析 ……195
5　分析結果所見 ……202

Ⅴ　総　　括

1　調査成果概要 ……203
2　遺　　構
（1）竪穴建物跡 ……203
（2）土　　坑 ……208
（3）陥し穴状土坑 ……208
（4）柱　　穴 ……208
3　出土遺物
（1）縄文～弥生時代の遺物 ……208
（2）土　師　器 ……209
（3）須　恵　器 ……218
（4）石　　器 ……218
（5）土　製　品 ……218
（6）鉄　製　品 ……219
（7）陶　磁　器 ……219
（8）その他（琥珀・鉄滓）……219
4　古墳時代末～奈良時代の三陸沿岸部 ……219
報告書抄録 ……297

図版目次

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　周辺遺跡 …… 5
第３図　基本土層図 …… 9
第４図　遺構配置全体図 …… 11
第５図　１号竪穴建物跡 …… 15
第６図　２号竪穴建物跡（１）…… 18
第７図　２号竪穴建物跡（２）…… 19
第８図　２号竪穴建物跡（３）…… 20
第９図　３号竪穴建物跡（１）…… 22
第10図　３号竪穴建物跡（２）…… 23
第11図　４号竪穴建物跡 …… 25
第12図　５号竪穴建物跡 …… 27
第13図　６号竪穴建物跡 …… 29
第14図　７号竪穴建物跡（１）…… 32
第15図　７号竪穴建物跡（２）…… 33
第16図　８号竪穴建物跡 …… 34
第17図　９号竪穴建物跡（１）…… 36
第18図　９号竪穴建物跡（２）…… 37
第19図　10号竪穴建物跡 …… 39
第20図　11号竪穴建物跡 …… 41
第21図　12号竪穴建物跡 …… 43
第22図　13号竪穴建物跡 …… 45
第23図　14号竪穴建物跡 …… 46
第24図　15号竪穴建物跡 …… 48
第25図　16号竪穴建物跡（１）…… 51
第26図　16号竪穴建物跡（２）…… 52
第27図　16号竪穴建物跡（３）…… 53
第28図　17号竪穴建物跡 …… 55
第29図　18号竪穴建物跡 …… 57
第30図　19号竪穴建物跡 …… 59
第31図　20号竪穴建物跡（１）…… 60
第32図　20号竪穴建物跡（２）…… 61
第33図　21号竪穴建物跡（１）…… 64
第34図　21号竪穴建物跡（２）…… 65
第35図　22号竪穴建物跡（１）…… 70
第36図　22号竪穴建物跡（２）…… 71
第37図　23・24号竪穴建物跡 …… 72
第38図　23号竪穴建物跡 …… 73
第39図　24号竪穴建物跡 …… 74
第40図　25号竪穴建物跡（１）…… 79
第41図　25号竪穴建物跡（２）…… 80
第42図　26号竪穴建物跡（１）…… 81
第43図　26号竪穴建物跡（２）…… 82
第44図　27号竪穴建物跡 …… 85
第45図　28号竪穴建物跡（１）…… 88
第46図　28号竪穴建物跡（２）…… 89
第47図　29号竪穴建物跡 …… 90
第48図　30号竪穴建物跡（１）…… 93
第49図　30号竪穴建物跡（２）…… 94
第50図　31号竪穴建物跡 …… 96
第51図　32号竪穴建物跡 …… 98
第52図　33号竪穴建物跡 …… 100
第53図　34号竪穴建物跡 …… 102
第54図　35号竪穴建物跡（１）…… 104
第55図　35号竪穴建物跡（２）…… 105
第56図　36号竪穴建物跡 …… 107
第57図　37号竪穴建物跡 …… 109
第58図　１・２号土坑 …… 110
第59図　３号土坑 …… 112
第60図　１～４号陥し穴状土坑 …… 114
第61図　５・６号陥し穴状土坑 …… 115
第62図　縄文土器・弥生土器１ …… 118
第63図　縄文土器・弥生土器２ …… 119
第64図　縄文土器・弥生土器３ …… 120
第65図　縄文土器・弥生土器４・土師器１ …… 121
第66図　土師器２ …… 122
第67図　土師器３ …… 123
第68図　土師器４ …… 124
第69図　土師器５ …… 125
第70図　土師器６ …… 126
第71図　土師器７ …… 127
第72図　土師器８ …… 128
第73図　土師器９ …… 129
第74図　土師器10 …… 130
第75図　土師器11 …… 131
第76図　土師器12 …… 132
第77図　土師器13 …… 133
第78図　土師器14 …… 134
第79図　土師器15 …… 135
第80図　土師器16 …… 136
第81図　土師器17 …… 137
第82図　土師器18 …… 138
第83図　土師器19 …… 139
第84図　土師器20 …… 140

第85図　土師器21 ……141
第86図　土師器22 ……142
第87図　土師器23 ……143
第88図　土師器24 ……144
第89図　土師器25 ……145
第90図　土師器26 ……146
第91図　須恵器 ……147
第92図　石器１ ……148
第93図　石器２ ……149
第94図　石器３ ……150
第95図　石器４ ……151
第96図　石器５ ……152
第97図　石器６ ……153
第98図　石器７ ……154
第99図　土製品 ……155
第100図　鉄製品・陶磁器 ……156
第101図　古代建物の床面積 ……205
第102図　古代土器集成図１ ……211
第103図　古代土器集成図２ ……212
第104図　古代土器集成図３ ……213
第105図　古代土器集成図４ ……214
第106図　古代土器集成図５ ……215
第107図　古代土器集成図６ ……216
第108図　古代土器集成図７ ……217

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧 ……６
第２表　遺構名対応表 ……13
第３表　１号竪穴建物跡観察表 ……15
第４表　１号竪穴建物跡土層観察表 ……15
第５表　２号竪穴建物跡観察表 ……17
第６表　２号竪穴建物跡土層観察表（１）～（３）
……17・19・21
第７表　３号竪穴建物跡観察表 ……23
第８表　３号竪穴建物跡土層観察表 ……24
第９表　４号竪穴建物跡観察表 ……24
第10表　４号竪穴建物跡土層観察表（１）・（２）…25・26
第11表　５号竪穴建物跡観察表 ……26
第12表　５号竪穴建物跡土層観察表（１）・（２）…27・28
第13表　６号竪穴建物跡観察表 ……28
第14表　６号竪穴建物跡土層観察表 ……29
第15表　７号竪穴建物跡観察表 ……30
第16表　７号竪穴建物跡土層観察表 ……31
第17表　８号竪穴建物跡観察表 ……35
第18表　８号竪穴建物跡土層観察表 ……35
第19表　９号竪穴建物跡観察表 ……35
第20表　９号竪穴建物跡土層観察表 ……37
第21表　10号竪穴建物跡観察表 ……40
第22表　10号竪穴建物跡土層観察表 ……40
第23表　11号竪穴建物跡観察表 ……41
第24表　11号竪穴建物跡土層観察表 ……42
第25表　12号竪穴建物跡観察表 ……42
第26表　12号竪穴建物跡土層観察表 ……43
第27表　13号竪穴建物跡観察表 ……45
第28表　13号竪穴建物跡土層観察表 ……45
第29表　14号竪穴建物跡観察表 ……47
第30表　14号竪穴建物跡土層観察表 ……47
第31表　15号竪穴建物跡観察表 ……47
第32表　15号竪穴建物跡土層観察表 ……49
第33表　16号竪穴建物跡観察表 ……50
第34表　16号竪穴建物跡土層観察表（１）・（２）…53・54
第35表　17号竪穴建物跡観察表 ……55
第36表　17号竪穴建物跡土層観察表 ……56
第37表　18号竪穴建物跡観察表 ……56
第38表　18号竪穴建物跡土層観察表 ……56
第39表　19号竪穴建物跡観察表 ……58
第40表　19号竪穴建物跡土層観察表（１）・（２）…58・60
第41表　20号竪穴建物跡観察表 ……62
第42表　20号竪穴建物跡土層観察表 ……62
第43表　21号竪穴建物跡観察表 ……63
第44表　21号竪穴建物跡土層観察表 ……66
第45表　22号竪穴建物跡観察表 ……69
第46表　22号竪穴建物跡土層観察表 ……75
第47表　23号竪穴建物跡観察表 ……75
第48表　23号竪穴建物跡土層観察表 ……76
第49表　24号竪穴建物跡観察表 ……76
第50表　24号竪穴建物跡土層観察表 ……76
第51表　25号竪穴建物跡観察表 ……78
第52表　25号竪穴建物跡土層観察表（１）・（２）…78・79
第53表　26号竪穴建物跡観察表 ……82
第54表　26号竪穴建物跡土層観察表 ……83
第55表　27号竪穴建物跡観察表 ……84
第56表　27号竪穴建物跡土層観察表 ……84
第57表　28号竪穴建物跡観察表 ……86

第58表　28号竪穴建物跡土層観察表 ……87
第59表　29号竪穴建物跡観察表 ……90
第60表　29号竪穴建物跡土層観察表 ……91
第61表　30号竪穴建物跡観察表 ……92
第62表　30号竪穴建物跡土層観察表（1）・（2）…92・95
第63表　31号竪穴建物跡観察表 ……95
第64表　31号竪穴建物跡土層観察表 ……97
第65表　32号竪穴建物跡観察表 ……97
第66表　32号竪穴建物跡土層観察表 ……99
第67表　33号竪穴建物跡観察表 ……100
第68表　33号竪穴建物跡土層観察表 ……100
第69表　34号竪穴建物跡観察表 ……101
第70表　34号竪穴建物跡土層観察表 ……101
第71表　35号竪穴建物跡観察表 ……103
第72表　35号竪穴建物跡土層観察表 ……105
第73表　36号竪穴建物跡観察表 ……106
第74表　36号竪穴建物跡土層観察表（1）・（2）…106・108
第75表　37号竪穴建物跡観察表 ……108
第76表　37号竪穴建物跡土層観察表 ……108
第77表　1号土坑土層観察表 ……110
第78表　2号土坑土層観察表 ……110
第79表　3号土坑土層観察表 ……112
第80表　1号陥し穴状土坑土層観察表 ……113
第81表　2号陥し穴状土坑土層観察表 ……114
第82表　3号陥し穴状土坑土層観察表 ……115
第83表　4号陥し穴状土坑土層観察表 ……115
第84表　5号陥し穴状土坑土層観察表 ……115
第85表　6号陥し穴状土坑土層観察表 ……115
第86表　土坑・柱穴観察表 ……116
第87表　縄文土器・弥生土器観察表 ……157
第88表　土師器観察表 ……160
第89表　須恵器観察表 ……174
第90表　石器観察表 ……175
第91表　土製品観察表 ……177
第92表　鉄製品観察表 ……178
第93表　陶磁器観察表 ……178
第94表　その他（鉄滓・琥珀）観察表 ……178

写真図版目次

巻頭カラー写真1　遺跡遠景、26号竪穴建物跡出土遺物
巻頭カラー写真2　16・22号竪穴建物跡出土遺物
写真図版1　遺跡遠景、調査区全景 ……222
写真図版2　基本層序、調査区完掘 ……223
写真図版3　1号竪穴建物跡 ……224
写真図版4　3号竪穴建物跡 ……225
写真図版5　2号竪穴建物跡（1） ……226
写真図版6　2号竪穴建物跡（2） ……227
写真図版7　4号竪穴建物跡 ……228
写真図版8　5号竪穴建物跡 ……229
写真図版9　6号竪穴建物跡 ……230
写真図版10　7号竪穴建物跡 ……231
写真図版11　8号竪穴建物跡 ……232
写真図版12　9号竪穴建物跡 ……233
写真図版13　10号竪穴建物跡 ……234
写真図版14　11号竪穴建物跡 ……235
写真図版15　12号竪穴建物跡 ……236
写真図版16　13号竪穴建物跡 ……237
写真図版17　14号竪穴建物跡 ……238
写真図版18　15号竪穴建物跡 ……239
写真図版19　16号竪穴建物跡・3号土坑（1） …240
写真図版20　16号竪穴建物跡・3号土坑（2） …241
写真図版21　17号竪穴建物跡 ……242
写真図版22　18号竪穴建物跡 ……243
写真図版23　19号竪穴建物跡 ……244
写真図版24　20号竪穴建物跡 ……245
写真図版25　21号竪穴建物跡 ……246
写真図版26　23号竪穴建物跡 ……247
写真図版27　22号竪穴建物跡（1） ……248
写真図版28　22号竪穴建物跡（2） ……249
写真図版29　24号竪穴建物跡 ……250
写真図版30　25号竪穴建物跡 ……251
写真図版31　26号竪穴建物跡 ……252
写真図版32　27号竪穴建物跡 ……253
写真図版33　28号竪穴建物跡 ……254
写真図版34　29号竪穴建物跡 ……255
写真図版35　30・37号竪穴建物跡（1） ……256
写真図版36　30・37号竪穴建物跡（2）、31号竪穴建物跡 ……257
写真図版37　32号竪穴建物跡 ……258
写真図版38　33号竪穴建物跡 ……259
写真図版39　34・35号竪穴建物跡（1） ……260
写真図版40　35号竪穴建物跡（2） ……261
写真図版41　36号竪穴建物跡 ……262

写真図版42　１・２号土坑、１～６号陥し穴状土坑 …263
写真図版43　縄文土器・弥生土器１ ……264
写真図版44　縄文土器・弥生土器２ ……265
写真図版45　縄文土器・弥生土器３ ……266
写真図版46　土師器１（１・３号土坑、１・２号竪穴建物跡） ……267
写真図版47　土師器２（３・５・７号竪穴建物跡）… ……268
写真図版48　土師器３（７号竪穴建物跡） ……269
写真図版49　土師器４（９～11号竪穴建物跡） …270
写真図版50　土師器５（12・14号竪穴建物跡） …271
写真図版51　土師器６（15・16号竪穴建物跡） …272
写真図版52　土師器７（16号竪穴建物跡） ……273
写真図版53　土師器８（16号竪穴建物跡） ……274
写真図版54　土師器９（17・19号竪穴建物跡） …275
写真図版55　土師器10（20・21号竪穴建物跡）……276
写真図版56　土師器11（21号竪穴建物跡） ……277
写真図版57　土師器12（22号竪穴建物跡） ……278
写真図版58　土師器13（22号竪穴建物跡） ……279
写真図版59　土師器14（23・24号竪穴建物跡） …280
写真図版60　土師器15（24・25号竪穴建物跡） …281
写真図版61　土師器16（26号竪穴建物跡） ……282
写真図版62　土師器17（27号竪穴建物跡） ……283
写真図版63　土師器18（28号竪穴建物跡） ……284
写真図版64　土師器19（30号竪穴建物跡） ……285
写真図版65　土師器20（31・32号竪穴建物跡） …286
写真図版66　土師器21（33・34号竪穴建物跡） …287
写真図版67　土師器22（35･36号竪穴建物跡､遺構外） ……288
写真図版68　土師器23（遺構外） ……289
写真図版69　須恵器（２・５・７・10・35号竪穴建物跡、遺構外） ……290
写真図版70　石器１ ……291
写真図版71　石器２ ……292
写真図版72　石器３ ……293
写真図版73　土製品（７・９・16・17・21～24・28・30号竪穴建物跡、１号土坑、遺構外）… ……294
写真図版74　鉄製品、陶磁器、琥珀 ……295
写真図版75　貝類（８・16・35号竪穴建物跡） …296

Ⅰ　調査に至る経過

1　調　査　経　緯

津軽石大森遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（山田～宮古南）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成25年２月１日付け国東整陸一調第1102号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成25年２月４日～５日にわたり試掘調査を行い、平成25年２月18日付け教生第1574号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成25年４月１日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所）

2　調　査　経　過

平成25年４月10日より調査を開始した。調査地は周知の遺跡範囲のほぼ中央を南東方向から北西方向へと縦断する。調査区現況は畑地である。当初の調査面積は、3,200㎡であったが、調査区の北東側に遺構の分布が確認できたため、５月22日の協議により255㎡の追加調査を行うこととなった。したがって調査面積計は3,455㎡となった。５月22日に岩手県教育委員会生涯学習文化課、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによる部分終了確認検査が行われ、260㎡を終了した。７月６日に現地説明会を開催し、周辺住民を中心とした160名近い来客があった。現地説明会の案内が、事前に受けた新聞社の取材記事として掲載されたことから、周辺住民から高い関心が寄せられ盛況となった。８月９日に終了確認検査を実施し、すべての遺構について調査を終了した。８月10日からのお盆期間中は現場閉鎖し、お盆明けに調査区埋戻し作業を開始した。８月27日に埋め戻し作業及び、プレハブ小屋等の調査器材の撤去が完了し、野外作業を終えた。

平成25年６月24日より室内整理作業を開始した。平成26年２月15日に、平成25年度遺跡報告会において、津軽石大森遺跡調査成果の報告及び出土遺物の展示を行った。平成26年３月31日に室内整理作業を終了した。

（米田）

Ⅱ　立 地 と 環 境

1　遺 跡 の 位 置

津軽石大森遺跡は、宮古市津軽石第４地割に所在する。宮古市は岩手県の最東端に位置し、東側には三陸海岸を擁し太平洋が広がる。平成26年２月現在、市域面積1259.89㎢、人口57,405人である。宮古市は下閉伊郡川井村との合併により、北の下閉伊郡岩泉町、西の盛岡市と花巻市、南の下閉伊郡山田町、大槌町、遠野市と境界を接することとなった。

宮古市は古くから太平洋上の海上交通や漁業における寄港地として栄え、現在も幾多の港が存在しており、各種船舶が出入りしている。これは三陸海岸でも随一の大きく入り込んだ宮古湾に面するためである。しかし、三陸海岸に面するため津波の被害にも悩まされてきた過去があり、2011年３月11日の東日本大震災において、堤防の破損、家屋の流失、多くの人命も失われ、大きな被害を受けた。

宮古市の産業としては、海産物資源に恵まれ岩手県における水産加工の拠点としても重要な位置を占めている。さらに、観光資源豊富で、海岸沿いには陸中海岸国立公園をはじめとして、多くの景勝地が存在し、県内外から多くの観光客が訪れている。また、海岸から離れると山地が連なり、そのため林業や木材資源を利用した木材加工業も盛んである。

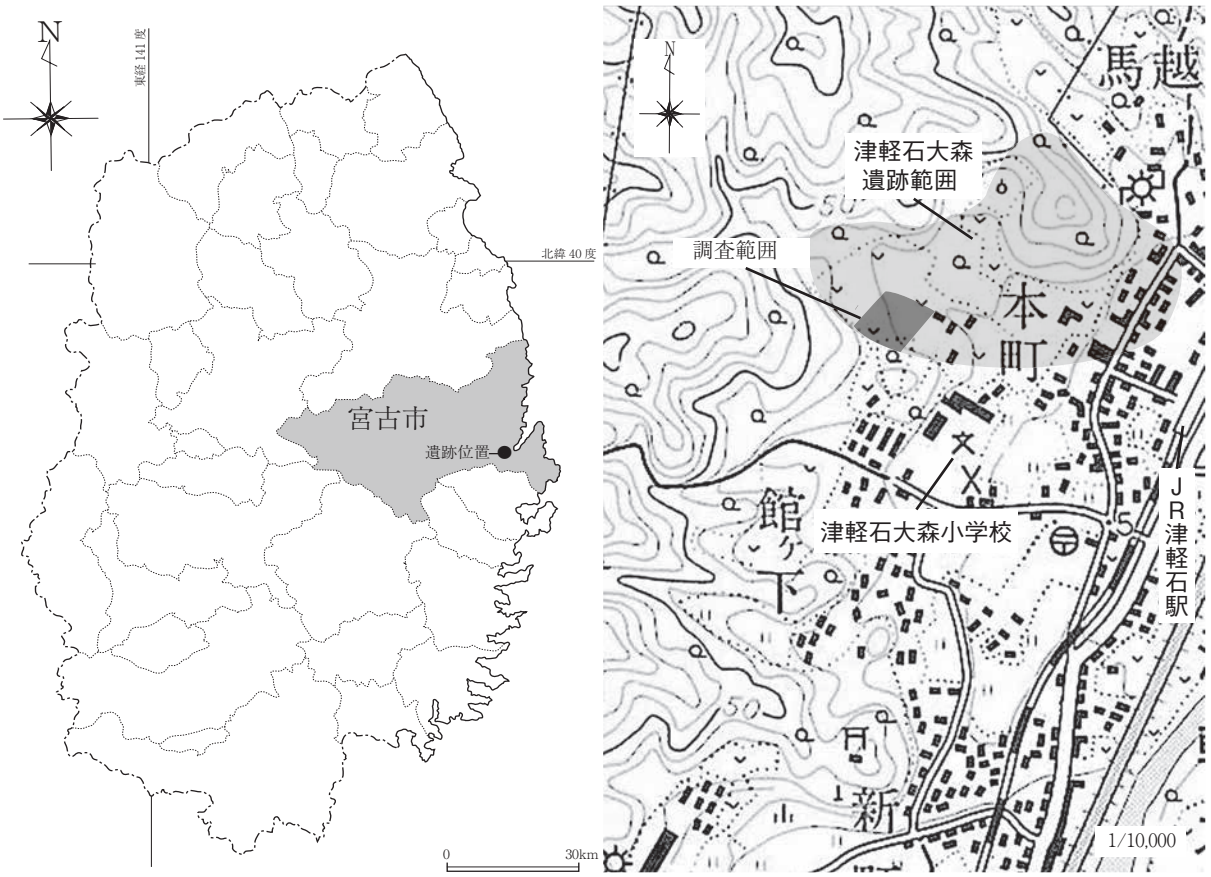
遺跡は、JR山田線津軽石駅から西方200ｍの丘陵地から低地へと続く緩斜面地に位置する。その位置は　国土地理院発行の地形図1/25,000「津軽石」NJ-54-13-3-2図幅に含まれており、北緯39度34分57秒、東経141度56分00秒付近〔世界測地系〕である。遺跡の北側には、丘陵地から津軽石川向かってに沢が流れ込み、南東側には宮古市立津軽石小学校が位置する。遺跡範囲は、植林された造成林、畑地、宅地である。本遺跡の南側は沼里遺跡があり、そのさらに南側に沼里館跡が位置する。眺望環境として、遺跡の高い地点からは東方に重茂（おもえ）半島と宮古湾最奥部及び津軽石川河口付近をそれぞれ良好に望むことができる（巻頭カラー写真参照）。また、岩手県沿岸地方北部特有のヤマセによる霧は、この眺望環境の変化により可視的に感じることができる。

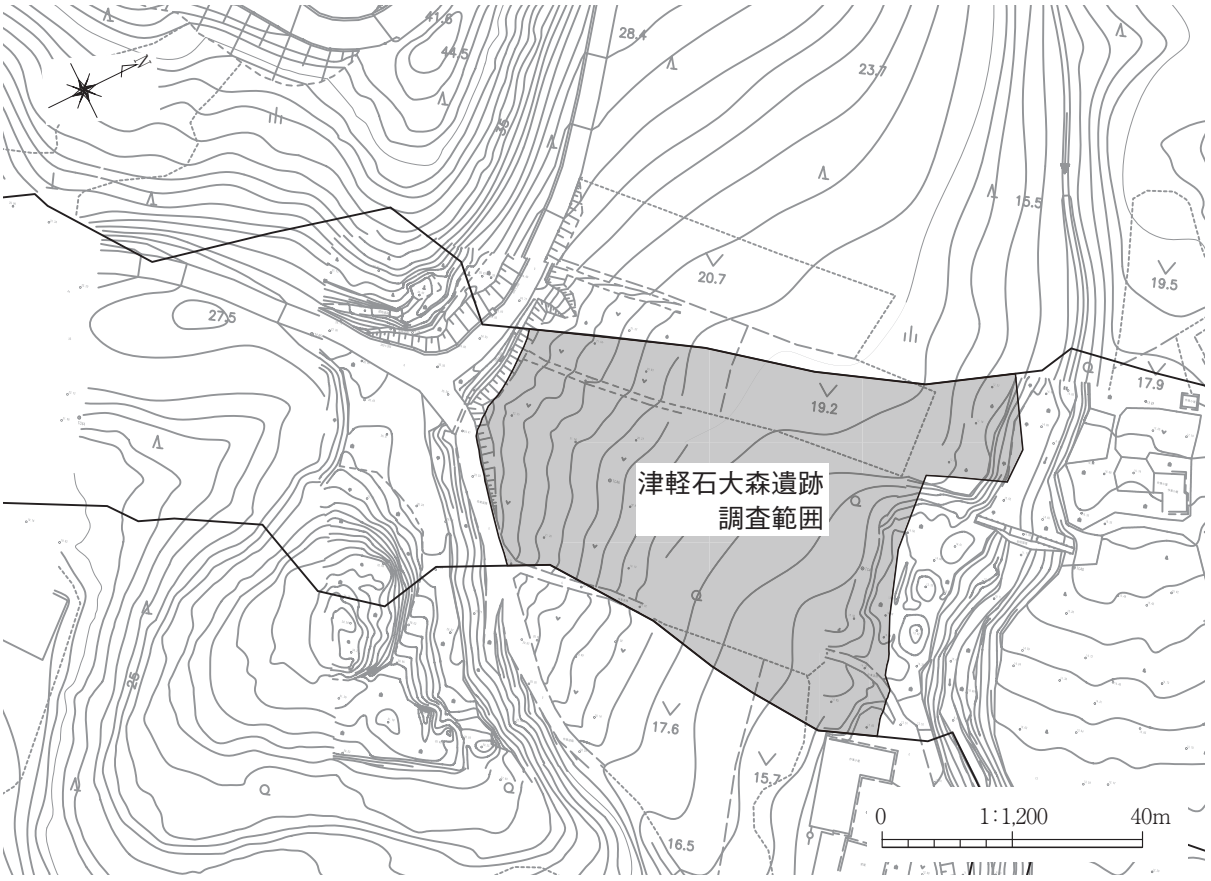
2　地 理 的 環 境

宮古市街地は市街地南西に広がる小起伏山地を南北に分断する閉伊川流域を中心に形成されており、さらに閉伊川支流の近内川・長沢川・山口川、宮古湾に注ぐ津軽石川・八木沢川によって形成された沖積平野へと広がっている。しかし、市街地の平野部は狭く、有史以来人々は生活の場を求めて平野部から丘陵地、さらには山地にまで進出している。本遺跡の所在する宮古市津軽石地区は、宮古湾へと注ぐ津軽石川西岸河口付近に発達した沖積平野に位置している。

小起伏山地が連なる三陸沿岸道路建設予定地周辺の地質は、角閃石黒雲母花崗閃緑岩～トーナル岩（中生代白亜紀前期）で占められており、この岩帯は通称宮古花崗岩として知られている。一方、市の東側の重茂半島でも通称大浦花崗岩して知られる中生代白亜紀前期に堆積した岩帯が見られるが、角閃石黒雲母アダメロ岩、デイサイト質火砕岩、泥岩が多く、閉伊川流域とは様相が異なる。

遺跡周辺は、西側の小起伏山地と山地から流れる小渓流によって形成された小支谷、津軽石川の氾濫平野をその範囲とし、基盤堆積層は宮古花崗岩と呼称される角閃石黒雲母花崗閃緑岩（以下、花崗岩帯と呼称）である。この花崗岩帯を起源とする風化層は通称マサ（真砂）土と呼ばれており、今回


N
東経 141 度
北緯 40 度
宮古市
遺跡位置
0
30km
N
馬越
津軽石大森
遺跡範囲
調査範囲
本町
館ノ下
津軽石大森小学校
JR津軽石駅
新
1/10,000


津軽石大森遺跡
調査範囲
0
1:1,200
40m

第１図　遺跡位置図

の調査では基本土層第Ⅴ層として認識している。花崗岩帯風化層の色調と層厚は地形によって異なる。花崗岩帯の色調は黄褐色を基調とし、風化層も黄褐色～灰白色を呈するが、尾根部では風雨の影響が強く、風化層の白色化が進行している。特に宮古湾方向から吹きつける強い海風の当たる南側及び東側斜面部でその傾向がある。これらの場所では北側斜面地に比べて風雨の影響が強く、山肌が一旦露出してしまうと風化層の崩落が頻繁に起こり、砂礫や土砂が谷部へと流れ込んだと考えられる。

3　歴 史 的 環 境

縄文・弥生時代

旧宮古市域では、縄文時代早期の遺跡および散布地がいくつか確認されている。現段階では、この縄文時代早期が、当地域における人々の活動を考古学的に確認できる最古の例である。菅ノ沢遺跡、小沢貝塚などの遺跡が挙げられる。その他にも縄文時代早期の土器が確認されている遺跡や散布地は存在するが、総じて詳細な様相が把握できる状況ではない。しかし、縄文時代前期に入ると、確認されている遺跡および遺構・遺物の数は増加し、中期にはさらに増加する。宮古市指定史跡磯鶏蝦夷森貝塚や上村貝塚が知られている。両遺跡とも遺存状態良好な貝塚であり、特に人骨を始めとする有機質遺物に恵まれている。また、国指定史跡崎山貝塚は、縄文時代中期の集落や前期～中期の貝塚、遺物包含層などが確認されている。

弥生時代では、上村貝塚において前期の集落が確認されており、木戸井内Ⅲ遺跡では後期の土器が出土している。

古墳・奈良・平安時代

奈良時代の遺跡では、長根Ⅰ遺跡の群集墳が調査されている。蕨手刀や直刀など鉄製武器類や和同開珎が出土している。県内における和同開珎の出土例は少なく、律令制下で下閉伊地域を治める有力者の墓域であると考えられる。山口館跡、八木沢地区の木戸井内Ⅳ遺跡、津軽石川流域では、払川Ⅰ遺跡（38）、南の山田町内では、沢田Ⅰ遺跡、間木戸Ⅱ遺跡、房ノ沢Ⅳ遺跡がある。このうち、木戸井内Ⅳ遺跡は、沿岸部の古代人がいかなる食糧資源を得ていたのかを明らかにした遺跡で、ムギ、アワ、ヒエ、キビなどの雑穀類のほか、堅果類などが出土した。奈良時代にはムギの検出量が多く、平安時代になると炭化米が多い傾向にある。

平安時代の遺跡は前代に比べると増加する傾向である。特に、集落跡において鉄生産に関連する遺構や遺物が認められる例が多く、当地域で鉄生産が本格的に始まったと考えられる。特に、地質上花崗岩地帯に分類される地域においては製鉄関連の遺跡が顕著である。八木沢地区の島田Ⅱ遺跡は、岩手県内屈指の平安時代鉄生産関連遺跡であることが発掘調査により明らかになっている。特に製鉄、精錬、鍛錬の各工程を読み取ることができる遺構と工房跡など内容が充実している。このことは、当地域において製錬から鉄製品の加工までの一連の生産が、盛んに行われていたことを物語る例として重要である。津軽石川周辺では、赤前地区の赤前Ⅲ遺跡（52）で大規模な集落が見つかっている。

中世・近世

中世では、城館跡が多く確認・調査されている。これら中世の城館跡は、旧宮古市域において広範囲に点在し、それぞれ防御的施設を有し、おもに閉伊氏・一戸千徳氏などの氏族が関係とされている。八木沢地区では、八木沢古館・八木沢新館が確認されており、これらはいずれも八木沢氏に関わるものと考えられている。また、前代から引き続き、鉄生産に関連する遺構・遺物が認められる遺跡も多くあり、城館跡とセットで確認される例もある。近年、調査された山口館跡は、城館跡であるととも

金浜
法之脇
馬越
本町
館下
新町
津軽石
駒形通
藤畑
宮古運動公園
赤前中
赤前下
赤前
堀内
高浜一丁目
高浜二丁目
高浜三丁目
高浜四丁目
津軽石川
宮古市

第２図　周辺遺跡

第１表　周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地	備考
1	八木沢中田		近世	銭貨	大字八木沢	宮埋文報67集（2006）
2	八木沢ラントノ沢Ⅱ		縄文	焼土遺構、土坑跡、陥し穴跡、縄文土器、石器	大字八木沢第３地割・第７地割	
3	八木沢ラントノ沢Ⅰ		縄文	陥し穴状遺構.土坑	大字八木沢第７地割・第８地割	岩埋文報第528集（2008）
4	八木沢駒込Ⅰ	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器、鉄滓	八木沢第８地割駒込	
5	八木沢駒込Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（前）	八木沢第８地割駒込	
6	八木沢野来	集落跡	縄文	縄文土器（早・前）	八木沢第９地割駒込	旧八木沢Ⅲ野来
7	下大谷地Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器（前・中期）	八木沢第９地割大谷地	
8	下大谷地Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器（前・中期）	八木沢第９地割大谷地	
9	下大谷地Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器、鉄滓	八木沢第９地割大谷地	
10	下大谷地Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	八木沢第９地割大谷地	
11	下大谷地Ⅴ	散布地	縄文	鉄滓	八木沢第９地割大谷地	
12	賽の神	散布地	縄文	縄文土器（前・中・後）	金浜第１地割西角地	
13	金浜Ⅰ	散布地	縄文・平安	縄文土器（前～後）、石器、土師器	金浜第２地割古館、第３地割妻の上	
14	高浜Ⅰ坂ノ下	散布地	縄文	縄文土器	高浜第１地割坂ノ下	旧坂ノ下
15	高浜Ⅱ今ヶ洞	散布地	縄文	縄文土器（前・中・後）	高浜第２地割今ケ洞	旧今ヶ洞
16	高浜Ⅲ熊野	散布地	縄文	縄文土器	高浜第３地割熊野	旧熊野
17	高浜Ⅳ横須賀	散布地	縄文	縄文土器（中・後）	高浜第５地割大沢第４地割横須賀	
18	高浜Ⅴ下地神	散布地	縄文	縄文土器（早・前・中）	高浜第６地割下地神、地神	
19	高浜Ⅵ地神	散布地	縄文	縄文土器（中）	高浜第６地割下地神、地神	
20	金浜堤ケ沢	製鉄跡		鉄滓	金浜第１地割堤ケ沢、西角地	
21	金浜館	城館跡	中世・縄文	主郭、帯郭、空堀、フラスコ状ピット	金浜第１地割西角地、堤ケ沢	宮埋文報７集（1986）
22	金浜Ⅱ	集落跡	古代	土師器	金浜第２地割古館、第３地割妻の上	
23	金浜Ⅲ	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器	金浜第４地割鋤ケ崎	
24	金浜Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	金浜第４地割鋤ケ崎	
25	金浜Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器（中期）、鉄滓	金浜第５地割馬越、第７地割船川原	
26	山崎館	城館跡	中世	主郭、腰郭、砦	津軽石第３地割馬越、第１地割法ノ脇	
27	馬越Ⅰ	散布地	縄文・古代	縄文土器（後）、土師器、鉄滓	津軽石第３地割馬越	
28	馬越Ⅱ	集落跡	古代	土師器、鉄滓	津軽石第３地割馬越	
29	津軽石大森	集落跡	縄文・古代		津軽石第４地割大森	本書
30	沼里	集落跡	縄文・奈良	縄文土器、土師器、竪穴住居跡	津軽石第４地割大森、第６地割沼里	
31	沼里館	城館跡	中世	主郭、腰郭、堀	津軽石第６地割沼里、第19地割穴田	
32	根井沢穴田Ⅰ	散布地	縄文・古代	縄文土器（中期）、土師器	津軽石第19地割穴田	
33	根井沢穴田Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（前～後）、石器、土師器	津軽石第19地割穴田	
34	根井沢穴田Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	津軽石第19地割穴田	
35	根井沢穴田Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器（前・中）	津軽石第19地割穴田	
36	高平館	城館跡	中世	主郭、二の郭、腰郭、五輪塔	津軽石第９地割吉原、第10地割向川原	

No.	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地	備考
37	払川館 （津軽石館）	城館跡	中世	砦、空堀、主郭、 二の郭、三の郭、 腰郭	津軽石第14地割払川、 第10地割向川原	
38	払川Ⅰ	集落跡	縄文 ・奈良 ・中世	縄文土器（前・中・晩）、 土師器	津軽石第14地割払川	宮埋文報29集 （1991）
39	払川Ⅱ	集落跡	縄文 ・古代	縄文土器、 土師器	津軽石第14地割払川	
40	払川Ⅲ	散布地	縄文 ・古代	縄文土器（前・中・後）、 土師器、須恵器	津軽石第14地割払川	
41	荷竹日向Ⅰ	散布地	縄文 ・古代	縄文土器（前・中・晩）、 土師器、須恵器	津軽石第16地割 荷竹日向	
42	堀内Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	赤前第17地割柳浜	
43	堀内Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	赤前第16地割堀内	
44	堀内Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器（前・中）	赤前第16地割堀内	
45	堀内Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器	赤前第15地割堀内	
46	小堀内Ⅰ	集落跡	縄文 ・弥生 ・奈良	縄文土器（前～晩）、 弥生土器、土師器、 石Ⅲ	赤前第14地割小堀内	
47	小堀内Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	赤前第14地割小堀内	
48	小堀内Ⅲ	散布地	縄文 ・奈良	縄文土器、土師器、 須恵器	赤前第14地割小堀内	宮埋文報53集 （1999）
49	赤前Ⅵ釜屋ヶ沢	散布地	縄文 ・古代 ・近世	縄文土器、土師器、 須恵器、陶磁器	赤前第13地割 釜屋ヶ浜	宮埋文報53集 （1999）、 旧赤前Ⅵ
50	赤前Ⅴ柳沢	散布地	縄文 ・古代	縄文土器、土師器	赤前第12地割 柳沢	宮埋文報53集 （1999）
51	赤前Ⅳ八枚田	集落跡	縄文 ・平安	縄文土器（早～中）、 竪穴住居、 羽口、鉄滓	赤前第11地割 八枚田	宮埋文報５集 （1984）、 宮埋文報53集 （1999）
52	赤前Ⅲ	集落跡	縄文 ・平安	縄文土器（前・中）、 竪穴住居、 羽口、鉄滓	赤前第７地割 御蔵、 第10地割山崎	宮埋文報５集 （1984）、 宮埋文報53集 （1999）
53	赤前館	城館跡	中世	主郭、二の郭、 腰郭、砦	赤前第５地割 神田	
54	赤前Ⅰ牛子沢	散布地	縄文	縄文土器（前～後）	赤前第３地割 牛子沢	宮埋文報42集 （1995）
55	久保田	散布地	縄文 ・古代	縄文土器、土師器	赤前第２地割 久保田	
56	藤畑	集落跡	縄文 ・古代	縄文土器、土師器、 須恵器	津軽石第12地割 藤畑	宮埋文報52集 （1998）

に鍛冶工房や製鉄関連遺構が検出されている。また、黒森町遺跡では、鉄鋳物師関連も確認されている。津軽石川流域では、金浜地区に金浜館跡、津軽石地区では沼里館跡（31）があるほか、津軽石大森遺跡（29）でも輸入青磁碗が出土している。

近世では、津軽石地区は、国指定有形文化財の『盛合家主屋・庭園』があり、浜街道沿いの宿場町の繁栄の一端が残されている。盛合家には、寛政９年（1797）沿岸部の巡察で南部藩主利敬が宿泊しており、近世期の沿岸部において有数の豪商であった。造酒屋、問屋、質屋業を営み、江戸との往来をする運搬船を２艘保有していたとの記載が、岩手県史に残されている。津軽石地区を通る浜街道は、現在の国道45号とは異なり、北の宮古市街地へは盛合家前を通り、馬越地区の山中を通って、金浜地区へと至るルートである。地元の方によれば、現在の国道45号付近は整備されるまで、湿地帯が広がっていたようである。

東日本大震災と津軽石地区浸水域

2011年３月11日の東日本大震災の被害は、宮古市津軽石地区でも甚大で、地区内の半数以上の家屋が浸水した。宮古市役所ホームページ等で、被害状況の一部は把握可能なので参照されたい。野外発

掘調査は、現地住民を直接雇用して実施しているため、当時の状況をお聞きする機会が度々あった。一部住民という制約はあるが、津軽石地区の歴史に関する事実記載として最小限の報告を行う。

津軽石地区では、地震後に、宮古湾から津軽石川を逆流してくる水流が水門で一旦遮られたあと、堤防から溢れ、さらに各小河川へと流れ込んでいき、地区内の堰が溢れ返っていった。JR山田線津軽石駅は被災し、線路が剥がれ落ち、停泊中の車両が脱輪した。震災から３年を経過した2014年でも復旧の目途は立っていないが、山田線復旧に向け、行政とJRとの調整が続いている。集落内では堰に近い宅地ほど被害が大きい。集落内の避難所は、標高８m付近の津軽石小学校に指定されていたが、児童及び教職員たちは大事をとって標高の高い本遺跡調査区付近（標高15～23m）まで避難したという。実際、標高７～８m付近に位置する津軽石小学校と同標高の津軽石交番は浸水しなかった。しかし、わずか50m先の標高５～６m付近には水が押し寄せ、津軽石保育園や宮古市役所津軽石出張所を含む多くの家屋が被災している。しかし、津軽石大森遺跡と関連する調査区北側の沢へ、どのあたりまで逆流してきたかは確認が取れなかった。なお、調査区には津波痕跡と考えられるような海砂層や海底の泥を含む地層はない。この点では、昨今話題に上がる平安時代の貞観の津波（西暦869年）は、津軽石大森遺跡の所在する標高まで達していないと考えられる。

4　基　本　層　序

今回調査対象とされた津軽石地区一帯には花崗閃緑岩基盤層が分布しており、またこの基盤層は地表に向かうに連れ、風化作用を受けている。この風化層はその度合いにより下層の岩塊層と上層の砂層に分けられ、土壌の流出が顕著な地区では、森林腐植土（現表土）以下の堆積は見られず、表土直下に風化花崗岩砂層あるいは岩塊層が現れることが多い。小起伏山地帯では、丘陵尾根部の黒色土の発達が弱く、緩斜面下部から谷部にかけて厚く堆積する傾向にある。津軽石大森遺跡では、谷状地形に堆積した黒色～黒褐色土の堆積が良好であった。

本遺跡は、遺跡範囲中央を流れる沢に形成された斜面地段丘面よって南北に分けられるが、今回の調査地はこのうち沢の南岸である。

５層に大別し、ローマ数字表記している。基本土層範囲の堆積厚は良好であったが、畑地造成の影響を受けた範囲では表土（Ⅰ層）と花崗岩風化土層（Ⅴ層）のみの堆積となっている。

Ⅰ層は表土層で、畑地の耕作土と森林土壌を一括した。ビニールハウス等の機材や廃物が堆積していた。

Ⅱ層は遺物包含層である。縄文～古代の遺物が出土した。古代の生活面はこの層内と想定される。

Ⅲ層は十和田中掫テフラ（以下、To-Cu）に関連すると考えられる堆積層である。

Ⅲａ層は土壌化層で微量のTo-Cuが混入する。遺物包含層であるが、古代の遺物は微量で、縄文土器の出土量が主体を占める。

Ⅲｂ層はⅢａ層より若干明るい地層で、To-Cuの混入量が多い。

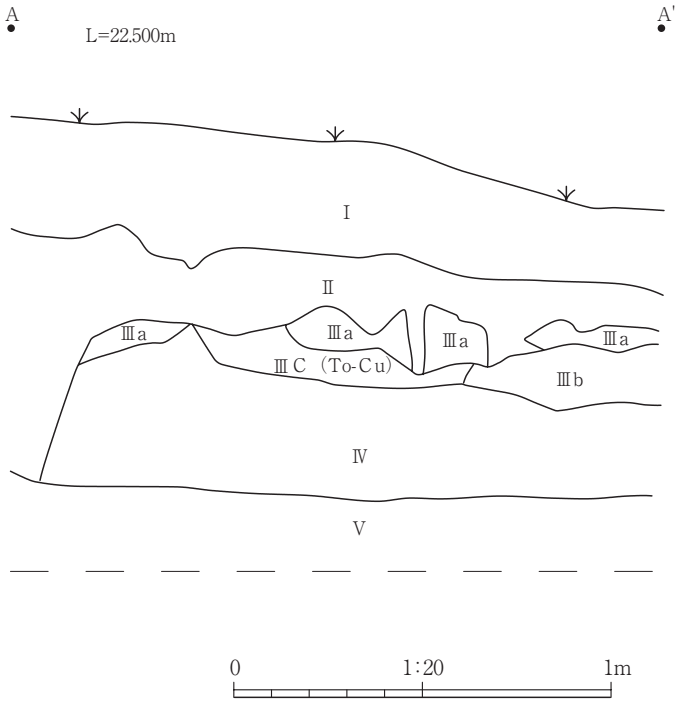
Ⅲｃ層はTo-Cu層である。基本層序を作成した調査区南側の谷底地形部分と、北東側で堆積が良好であった。To-Cuが遺構内堆積層となっていたのは、20号竪穴建物跡（縄文早期末～前期初頭）と３号陥し穴状土坑（縄文前期以前）である。なお、To-Cuの降下年代は約6,000年前とされる。最近の報告では、暦年較正値で6,200年前がある。

Ⅳ層は黒褐色土層である。古代の遺物は微量で、縄文土器の包含量が多い。

Ⅴ層は花崗岩風化土層である。斜面地には、岩盤の崩落による１m以上の大礫が含まれている。

基本土層（中央尾根部）

層№	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
Ⅰ	10YR2/3黒褐色土	弱	やや粗	風化花崗岩粒3%	土師器、縄文土器包含
Ⅱ	10YR3/1黒褐色土	弱	やや粗	風化花崗岩粒1%	土師器、縄文土器包含
Ⅲa	10YR3/3暗褐色土	弱	やや密	To-Cu1%	古代の遺構検出面、To-Cuの土壌層？ 土師器、縄文土器包含
Ⅲb	10YR3/4暗褐色土	弱	やや密	To-Cu2%	To-Cuの土壌層で土師器、縄文土器包含
Ⅲc	2.5Y7/8黄色火山灰	無	密		To-Cu層
Ⅳ	10YR3/1～2/2黒褐色土	無	やや密		縄文時代早期末～前期初頭土器包含
Ⅴ	10YR6/8明黄褐色土	無	密		上面を最終遺構検出面とした



第３図　基本土層図

引用・参考文献

岩手県企画開発室　1974『土地分類基本調査　－宮古・鉈ヶ崎－』

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1990『長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第146集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1998『房の沢Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第287集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1999『島田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第337集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1991『上村貝塚発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第158集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2000『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第318集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2004『島田Ⅱ遺跡第２～４次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第450集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2006『山口館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第485集

宮古市教育委員会　1983『宮古市遺跡分布調査報告書１』宮古市埋蔵文化財調査報告書３

宮古市教育委員会　1984『宮古市遺跡分布調査報告書２』宮古市埋蔵文化財調査報告書４

宮古市教育委員会　1985『宮古市遺跡分布調査報告書３』宮古市埋蔵文化財調査報告書６

宮古市教育委員会　1986『宮古市遺跡分布調査報告書４』宮古市埋蔵文化財調査報告書８

宮古市教育委員会　1986『宮古市遺跡分布図』宮古市埋蔵文化財調査報告書９

宮古市教育委員会　1992『金浜Ⅰ遺跡・大付遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書30

宮古市教育委員会　1999『千鶏Ⅳ遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書54

宮古市教育委員会　1999『崎山貝塚』宮古市埋蔵文化財調査報告書55

宮古市教育委員会　2002『山口館跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書57

宮古市教育委員会　2006『崎山貝塚第20次調査・早稲栃Ⅱ遺跡第７次調査』宮古市埋蔵文化財調査報告書66

宮古市教育委員会　2006『木戸井内Ⅳ遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書68

宮古市教育委員会　2006『菅ノ沢遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書69

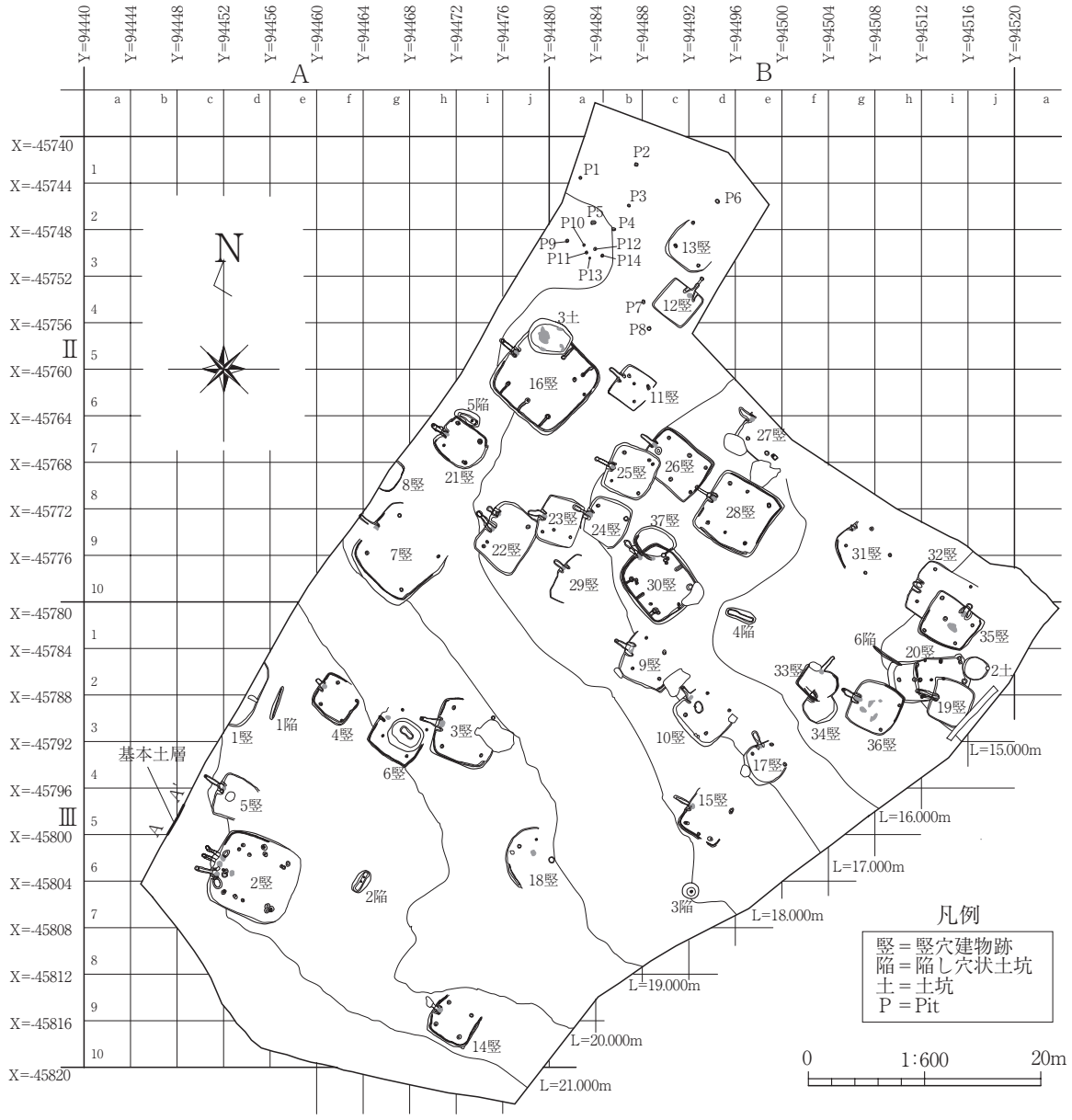
Ⅲ　遺構と遺物

1　概　　要

調査区は3,455㎡である。検出遺構は、竪穴建物跡37棟、陥し穴状土坑６基、土坑３基、柱穴14個である。竪穴建物跡は縄文時代早期末～前期初頭１棟、縄文時代中期前葉１棟、古墳時代後期後半～奈良時代33棟、平安時代２棟である。陥し穴状土坑は縄文時代、土坑は奈良時代１基と時期不明２基、柱穴は時期不明である。

出土遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、剥片石器、礫石器、土製品、鉄製品、鉄滓、陶磁器、琥珀片、炭化種子、貝殻である。

人工物の総重量は約250kgである。



第４図　遺構配置全体図

２　調査・整理の方法

（1）野　外　調　査

任意打設の３級基準点から世界測地系座標（座標系10）にしたがってグリッドを組み、遺物の取り上げを行っている。設置した基準点は以下のとおりである。

３級基準点

基１：X=-45743.169m、Y=94499.371m、H=17.309m
基２：X=-45821.533m、Y=94447.160m、H=25.475m

区画点

Ａ１：X=-45745.000m、Y=94485.000m、H=18.064m
Ａ２：X=-45790.000m、Y=94480.000m、H=18.810m
Ａ３：X=-45790.000m、Y=94464.000m、H=20.250m
Ａ４：X=-45790.000m、Y=94494.000m、H=17.005m
Ａ５：X=-45764.000m、Y=94493.000m、H=17.190m

調査区は、真北を基準とした大グリッド40×40m、小グリッド４×４ｍを基準として区割りした。大グリッドはローマ数字Ⅰ～Ⅳとアルファベット大文字Ａ・Ｂの組み合わせで、ⅡＡ、ⅡＢ、ⅢＡ、ⅢＢ等がある。小グリッドは数字の１～10とアルファベット小文字ａ～ｊの組み合わせで、1a、5ｃ、9h等と表記している。

遺構はレベル水準器、光波測量器と電子平板システム（Cubic社製実測支援システム「遺構くん」）を用いて図化した。

グリッド設定後はグリッドごとに遺物を回収したが、表土除去時出土資料は、地区ごとに回収した。調査区の地形に沿って北から沢（標高10m）→北側谷部（15～18mで13・14・16・28・30・33・34号竪穴建物等が位置する）→中央尾根部（19～23mで１～６号竪穴建物等が位置する）→中央谷部（18～23mで３号陥し穴状土坑が位置する）に区分している。

（2）室　内　整　理

遺構図面は電子データを加工して、版下を作成した。遺物は洗浄、接合、復元作業を経て実測、計測、実測図トレースを行い、図版の作成を行った。図化は出土遺物のうち、遺構内出土遺物を優先し、その中でも口径推定可能な資料を優先したが、適宜破片資料も掲載した。

ａ）遺構名称の変更

野外調査時は竪穴建物＝SI、陥し穴状土坑＝SKT、土坑＝SK、柱穴＝Pの各略号で登録し、室内整理作業に置いて、次表のごとく名称変更を行った。なお、本書の竪穴建物の概念は、竪穴を構築し、その中で何らかの構築物が存在したと認識可能な建物である。建物内構築物としては、壁溝、柱穴、カマド、貯蔵穴、鍛冶炉などが該当する。既存の竪穴住居跡、竪穴住居状遺構、工房跡等はこの概念に含まれる遺構である。

第２表　遺構名対応表

野外調査時		報告書掲載名
ＳＩ01	→	１号竪穴建物跡
ＳＩ02	→	２号竪穴建物跡
ＳＩ03	→	３号竪穴建物跡
ＳＩ04	→	４号竪穴建物跡
ＳＩ05	→	５号竪穴建物跡
ＳＩ06	→	６号竪穴建物跡
ＳＩ07	→	７号竪穴建物跡
ＳＩ08	→	８号竪穴建物跡
ＳＩ09	→	９号竪穴建物跡
ＳＩ10	→	10号竪穴建物跡
ＳＩ11	→	11号竪穴建物跡
ＳＩ12	→	12号竪穴建物跡
ＳＩ13	→	13号竪穴建物跡
ＳＩ14	→	14号竪穴建物跡
ＳＩ15	→	15号竪穴建物跡
ＳＩ16	→	16号竪穴建物跡
ＳＩ17	→	17号竪穴建物跡
ＳＩ18	→	18号竪穴建物跡
ＳＩ19	→	19号竪穴建物跡
ＳＩ20	→	３号土坑
ＳＩ21	→	21号竪穴建物跡
ＳＩ22	→	22号竪穴建物跡
ＳＩ23	→	23号竪穴建物跡
ＳＩ24	→	24号竪穴建物跡
ＳＩ25	→	25号竪穴建物跡
ＳＩ26	→	26号竪穴建物跡
ＳＩ27	→	27号竪穴建物跡
ＳＩ28	→	28号竪穴建物跡
ＳＩ29	→	29号竪穴建物跡
ＳＩ30	→	30号竪穴建物跡

野外調査時		報告書掲載名
ＳＩ31	→	31号竪穴建物跡
ＳＩ32	→	32号竪穴建物跡
ＳＩ33	→	33号竪穴建物跡
ＳＩ34	→	34号竪穴建物跡
ＳＩ35	→	35号竪穴建物跡
ＳＩ36	→	36号竪穴建物跡
ＳＩ37	→	37号竪穴建物跡
ＳＩ38	→	20号竪穴建物跡
ＳＫＴ01	→	１号陥し穴状土坑
ＳＫＴ02	→	２号陥し穴状土坑
ＳＫＴ03	→	３号陥し穴状土坑
ＳＫＴ04	→	４号陥し穴状土坑
ＳＫＴ05	→	５号陥し穴状土坑
ＳＫＴ06	→	６号陥し穴状土坑
ＳＫ01	→	１号土坑
ＳＫ02	→	２号土坑
Ｐ01	→	P01
Ｐ02	→	P02
Ｐ03	→	P03
Ｐ04	→	P04
Ｐ05	→	P05
Ｐ06	→	P06
Ｐ07	→	P07
Ｐ08	→	P08
Ｐ09	→	P09
Ｐ10	→	P10
Ｐ11	→	P11
Ｐ12	→	P12
Ｐ13	→	P13
Ｐ14	→	P14

ｂ）注記記載事項

色　　調：小山正忠・竹原秀雄編2006『新版　標準土色帖2006年度版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に基づいた。

形成要因：判断可能な限り、備考欄に記載した。例えば（カマド袖部）、（人為堆積）等。

粘　　性：強＝５、やや強＝４、やや弱＝３、弱＝２、微＝１、無＝０の６段階で区分し、観察表には数値を記載した。例えば砂層では「無」と「微」が、粘土層では「強」と「やや強」の区分が多くなる。

し ま り：硬く密＝５、密＝４、やや密＝３、やや粗＝２、粗＝１の５段階に区分した。地層の含水量によって少なからず左右されるが、粘土層や細粒の砂では「密」や「やや密」に、粗粒の砂や土では「やや粗」や「粗」の区分が多くなる。

包 含 物：炭化物、焼土、遺物、礫、植物根、火山灰、ベースとなる土壌以外の混入土壌・砂・粘土等の量と形状を記載した。混入量等の記載にあたっては、上記の『新版　標準土色帖2006年度版』に従った。

c）遺物番号

図版の各遺物番号と写真図版の各遺物番号は対応している。

縄文・弥生土器		1〜 72	鉄製品		416〜427
土師器		73〜334	陶磁器		428〜431
須恵器		335〜351	鉄滓		432〜436
石器		352〜396	琥珀		437
土製品		397〜415			

d）観察表の記載

①縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器の器面色調は、外面で広く分布する色調を記載した。外面がスス等の付着物に覆われている場合は内面の色調を記載した。

②（　）内の数値は推定値を示す。＜　＞内の数値は残存値を示す。

③掘形類型　A類＝建物内周縁部を掘り窪める　　B類＝建物内中央部を掘り窪める
　　C類＝建物内の片側を掘り窪める　　D類＝建物内全体を掘り窪める

3　検　出　遺　構

（1）竪 穴 建 物 跡

37棟の調査を行った。帰属時期は縄文時代：18・20号、古墳後期〜奈良時代：１〜11・13〜17・19・21〜34・36・37号、平安時代：12・35号である。

各遺構観察表には、位置、規模、形状、面積等を記載した。

１号竪穴建物跡（第５図、写真図版３・43・46）

＜検出状況＞調査区西壁で竪穴建物範囲の四角形の２隅と思われる暗褐〜黒褐色土範囲を検出した。

＜規模・形状＞北西側が調査区外へと続くと考えられる。

＜掘形＞全体形状は不明であるが、建物壁に近いほど若干深くなる。類似規模の建物は外縁部を掘り窪めるタイプ（本書分類のA類）が多い。

＜堆積土＞黒褐色土主体である。４層に分離した。１層が床面上の堆積土で、２・３層が壁際の堆積土、４層が貼床堆積土である。

＜遺物分布＞土師器坏・壺が堆積土下部から床面にかけて出土している。流れ込みによる自然礫が多く、人工物は少ない。

＜調査所見＞土層断面図にもある大礫が建物廃絶後の混入であるのか、大礫の上に建物を構築したのかは判断する根拠を見出せなかった。

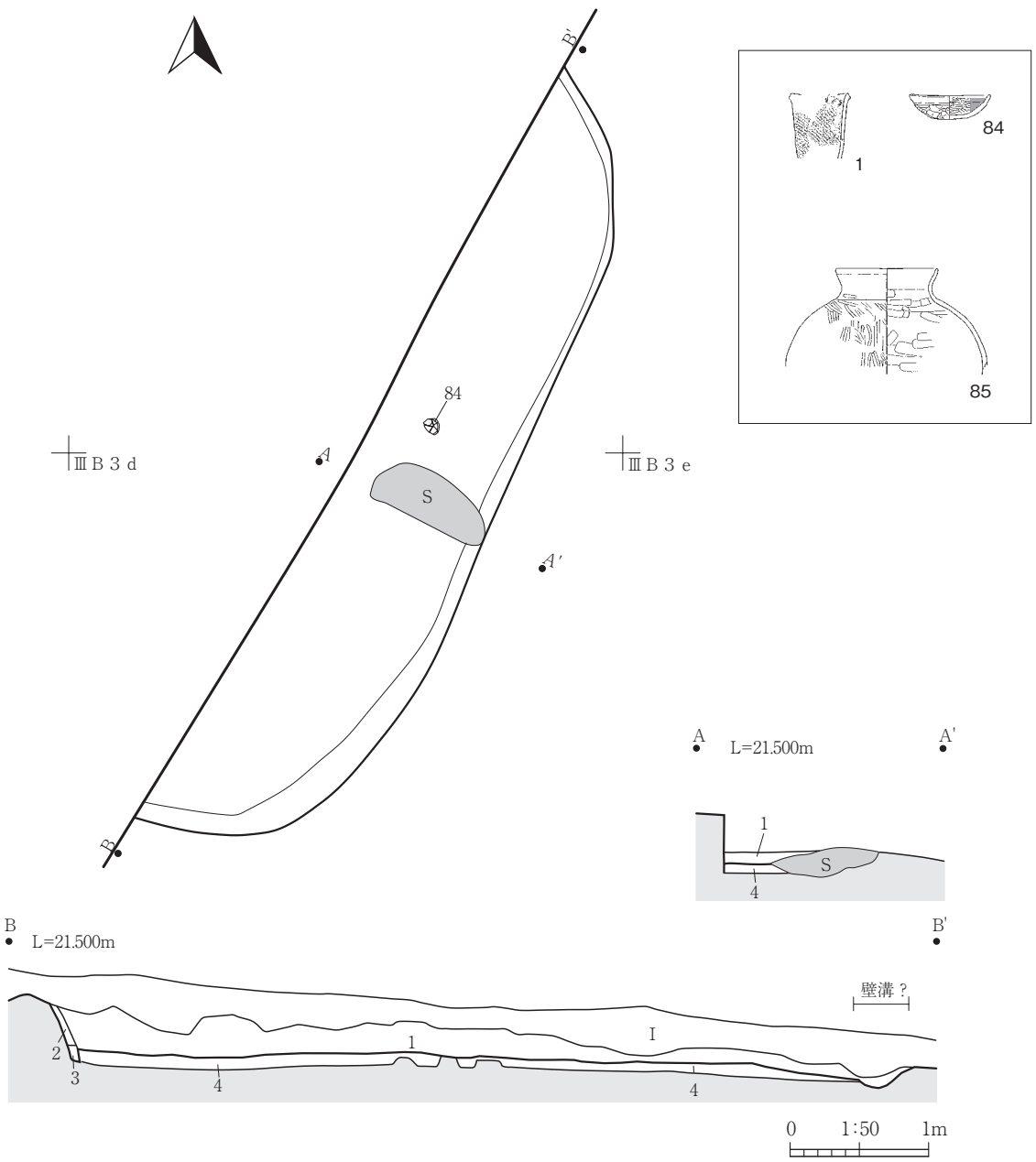
＜遺物＞縄文土器56.41g、土師器672.3gが出土した。

【縄文土器】１は堆積土出土で大木７a〜7b式の特徴を有する。

【土師器】84の坏は床面出土で、外面ヘラケズリ調整、内面黒色処理されている。内面にはわずかに稜がある。85の壺は外面ミガキで頸部の屈曲は強くない。

＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、７世紀末〜８世紀前半と考えられる。

＜所見＞遺跡内古代建物の中では大型と考えられる。大型は、２・７・16号竪穴建物が該当する。これらは７世紀後半〜８世紀前半の建物で、本遺構も同時期の建物の特徴を有する可能性が高い。



第５図　１号竪穴建物跡

第３表　１号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45788.015	ⅢＡ２ｄ	Z＝20.700	不明	方形
	Y＝ 94453.968				
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	6.07	1.25	59.40	A：5.567　　B：39.28	

第４表　１号竪穴建物跡土層観察表

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/3暗褐色土	2	2	黄褐色土粒3%	人為
2	10YR3/1黒褐色土	2	2		
3	10YR3/2黒褐色土	2	2		
4	10YR2/2黒褐色土	3	3	黄褐色土粒5%	貼床部

２号竪穴建物跡（第６～８図、写真図版５・６・46・69・71・72・74）

＜検出状況＞調査区南西部で隅丸方形の黒色～黒褐色プランを検出した。北側は試掘トレンチにかかり、試掘時に焼土と土師器が発見されている。試掘トレンチが建物北側の焼土層に及んでいたので、試掘時のトレンチは壁際の焼土層を検出したものと判断される。

＜規模・形状＞平面形は隅丸方形である。建物の１辺は長さ7mを超える。本遺跡の中では大型竪穴建物に属する。建物南西壁の立ち上がりラインは明瞭だったが、北東壁は不明瞭であった。壁溝、主柱穴６個が伴い、カマド、土坑等の付属施設がある。床面と考えられる硬質面が２面ある。

＜掘形＞Ａ類で、中央部も明瞭に窪む。

＜堆積土＞黒～黒褐色土主体である。北西壁の北側と北東壁の堆積土中に焼土が帯状に分布する。また、硬質面から10㎝程度上方から炭化材が出土している。このことから、本建物が火災によって廃棄された可能性と、廃絶後の付け火の可能性が考えられる。硬質面は２面あり、上から第１硬質面、第２硬質面とした。硬質面は主柱穴で囲まれた範囲に分布する。

＜構成要素・付属施設＞第１硬質面上で、主柱穴６個、カマド１基を検出した。第２硬質面上では、煙道部のみ残存するカマド２基と土坑２基を検出した。カマド１は第１硬質面上で、建物廃絶時まで使用していたと考えられる。煙道部は掘込式で上部の一部を黄褐色粘土で覆われている。カマド２・３は第２硬質面上で燃焼部焼土を検出した。残存する堆積土では重複関係を判断できなかった。土坑１・２とも浅く、遺物は微量であった。主柱穴は四隅コーナーに近い柱穴が深く規模もやや大きい。

＜遺物分布＞カマド左脇にあたる南西側に遺物が集中する。また、人頭大の礫は北半部に混入している。７・16号竪穴建物等の他の大型建物と比べて遺物量は少ない。図化したのは、第１硬質面とその上位の堆積土出土資料である。第２硬質面上の付属施設内出土遺物で図化可能な破片はなかった。

＜遺物＞土師器7617.3g、須恵器213.9g、石器2305.8g、鉄製品28.4gが出土した。

【土師器】86～89を図示した。坏の小破片も出土しているが図示していない。86の高坏と89の壺が第一硬質面上から出土している。88の甕はカマド１の支脚として転用されている。87の壺は堆積土出土で胴下部がケズリ調整である。

【須恵器】335の須恵器坏がカマド１左手前の床面近くから、336の須恵器坏がカマド１内から出土している。いずれも底面を回転ケズリ調整し、８世紀第１～２四半期の特徴を有する。

【石器】368の敲磨器が堆積土から、374の磨石が第1硬質面上から出土している。

【鉄製品】421の刀子と425の鉄鏃は第一硬化面から出土している。425は反しが小さく柄が長い。

＜時期＞遺構の特徴と、床面出土遺物の年代から、７世紀末～８世紀前半と考えられる。

＜所見＞本建物はカマド２・３・１と造り替えを行っており、存続期間が相対的に長い可能性がある。他の同時期の建物と比べて鉄製品や須恵器など、本地域では貴重品が出土する。しかし、貯蔵穴と推定されるような深い床面施設の数は多くなく、建て替えの痕跡も明確ではない。

第５表　２号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝−45803.749 Y＝ 94454.427	ⅢＡ６ｃ	Z＝20.600	A	方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）　A：残存値、B：推定値	
	7.63	6.99	73.80	A：44.437	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド1	1.33×0.42	0.78×1.04	礫	1個	甕
	煙道部造成方法		軸方向	設置位置	
	掘込		W-77.48°-N	北西壁	

壁溝	最大幅（m）	床面からの深（cm）
	0.18	17.20

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
土坑1	不明			
土坑2	0.48×0.38	11.20	不整形	
土坑3	0.39×0.33	7.40	不整形	
土坑4	0.70×0.46	14.40	楕円形	
P1	0.37×0.35	44.00	楕円形	○
P2	0.30×0.26	33.00	隅丸方形	
P3	0.42×0.39	49.40	楕円形	
P4	0.33×0.27	56.20	楕円形	○
P5	0.46×0.34	34.20	楕円形	○
P6	0.45×0.32	58.60	不整形	○
P7	0.42×0.30	48.20	隅丸方形	
P8	0.49×0.44	45.40	隅丸方形	
P9	0.54×0.43	62.80	隅丸方形	○
P10	0.54×0.46	26.20	楕円形	○
P11	0.32×0.25	52.20	不整形	
P12	0.29×0.25	31.20	不整形	
P13	0.26×0.22	35.00	不整形	
P14	0.32×0.28	31.40	隅丸方形	
P15	0.25×0.22	18.40	楕円形	
P16	0.26×0.16	36.20	不整形	

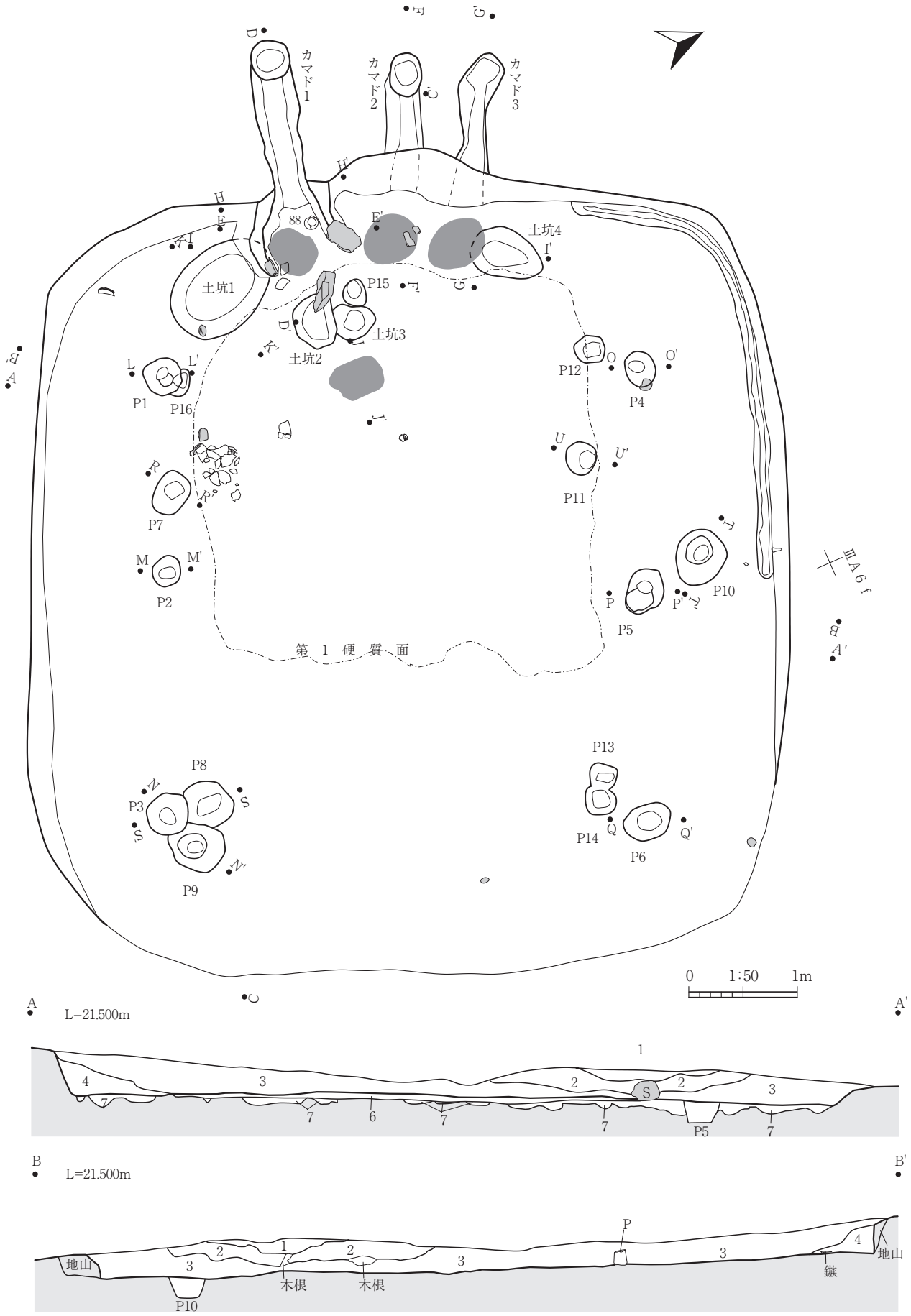
第６表　２号竪穴建物跡土層観察表（１）

A-A'・B-B'・C-C'

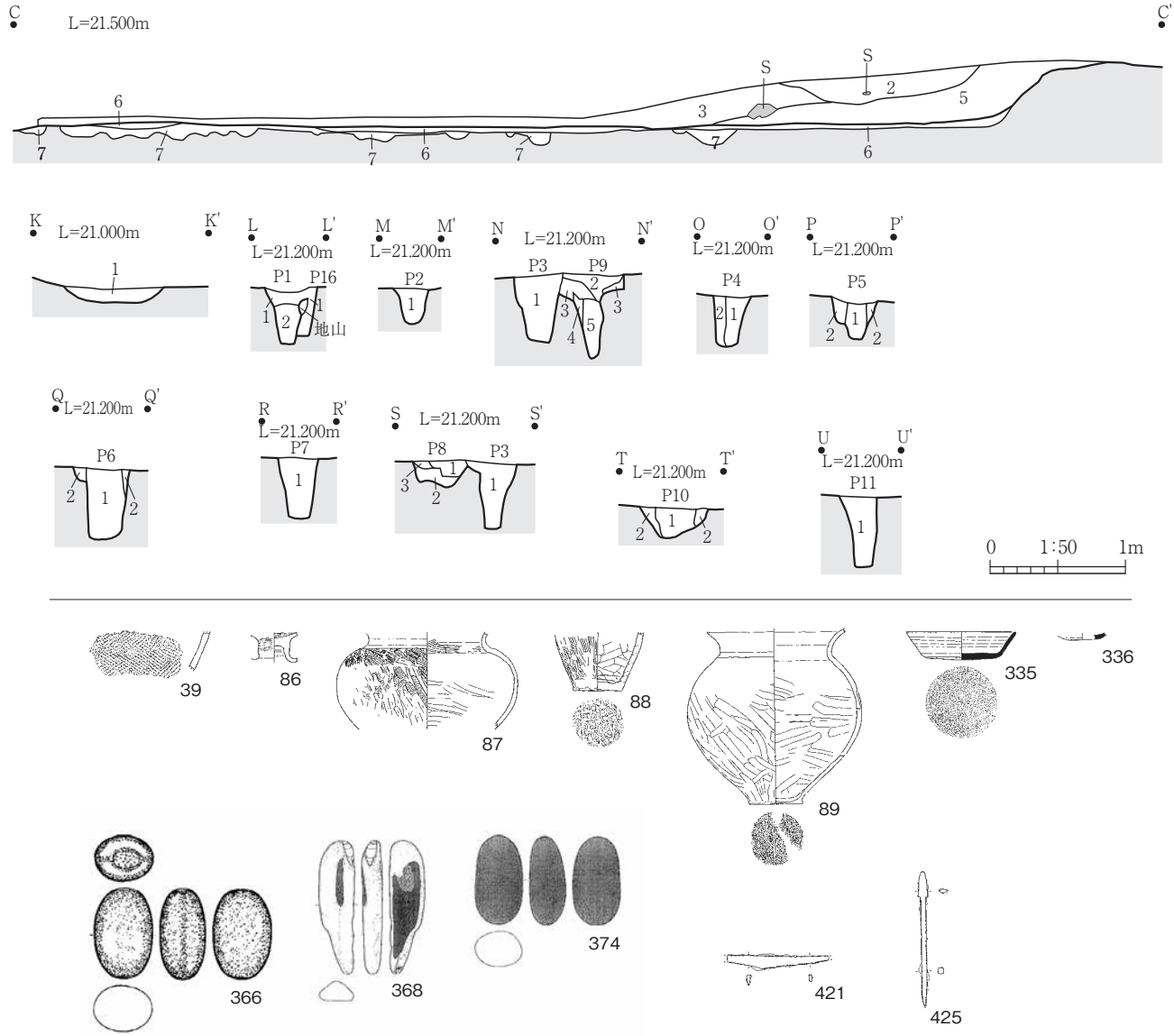
層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	7.5YR2/1黒色シルト	2	2		
2	10YR2/2黒褐色シルト	2	2	黄褐色土ブロック10%	
3	10YR2/1黒色シルト	2	3	壁側に焼土ブロック 炭化物粒微量	
4	7.5YR2/2黒褐色シルト	2	3	黄褐色土ブロック5%	
5	7.5YR2/1黒色シルト	2	3	黄褐色土ブロック5～10%	
6	7.5YR2/1黒色シルト	2	4	黄褐色土ブロック20～30%	硬質面及び貼床部
7	10YR3/2黒褐色シルト	2	2	黄褐色土粒20%、焼土・炭化物5%	貼床部

D-D'（カマド１）

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	7.5YR2/2黒褐色シルト	2	4	黄褐色土1%	
2	7.5YR2/2黒褐色シルト	1	4	黄褐色土粒極小～小3%	
3	10YR5/4にぶい黄褐色粘土	2	2	炭化物粒小1%、焼土粒	
4	10YR3/4暗褐色シルト	1	2		
5	10YR3/3暗褐色シルト	1	1	黄褐色土粒極小～小3%	
6	10YR2/3黒褐色シルト	2	4		
7	10YR4/6褐色シルト	1	2	黄褐色土1%	
8	10YR2/2黒褐色シルト	2	2	黄褐色土粒極小1 ～ 3%	
9	10YR2/1黒色シルト	2	2	黄褐色土ブロック極小1%	
10	7.5YR3/2黒褐色シルト	2	3	黄褐色土10%、焼土ブロック5%	
11	10YR4/6褐色シルト	2	2	焼土粒20%	
12	5YR3/6暗赤褐色シルト	3	5	焼土粒10%、黄褐色粘土10%	
13	2.5YR5/8明赤褐色シルト	2	5		



第6図　2号竪穴建物跡（1）



第７図　２号竪穴建物跡（２）

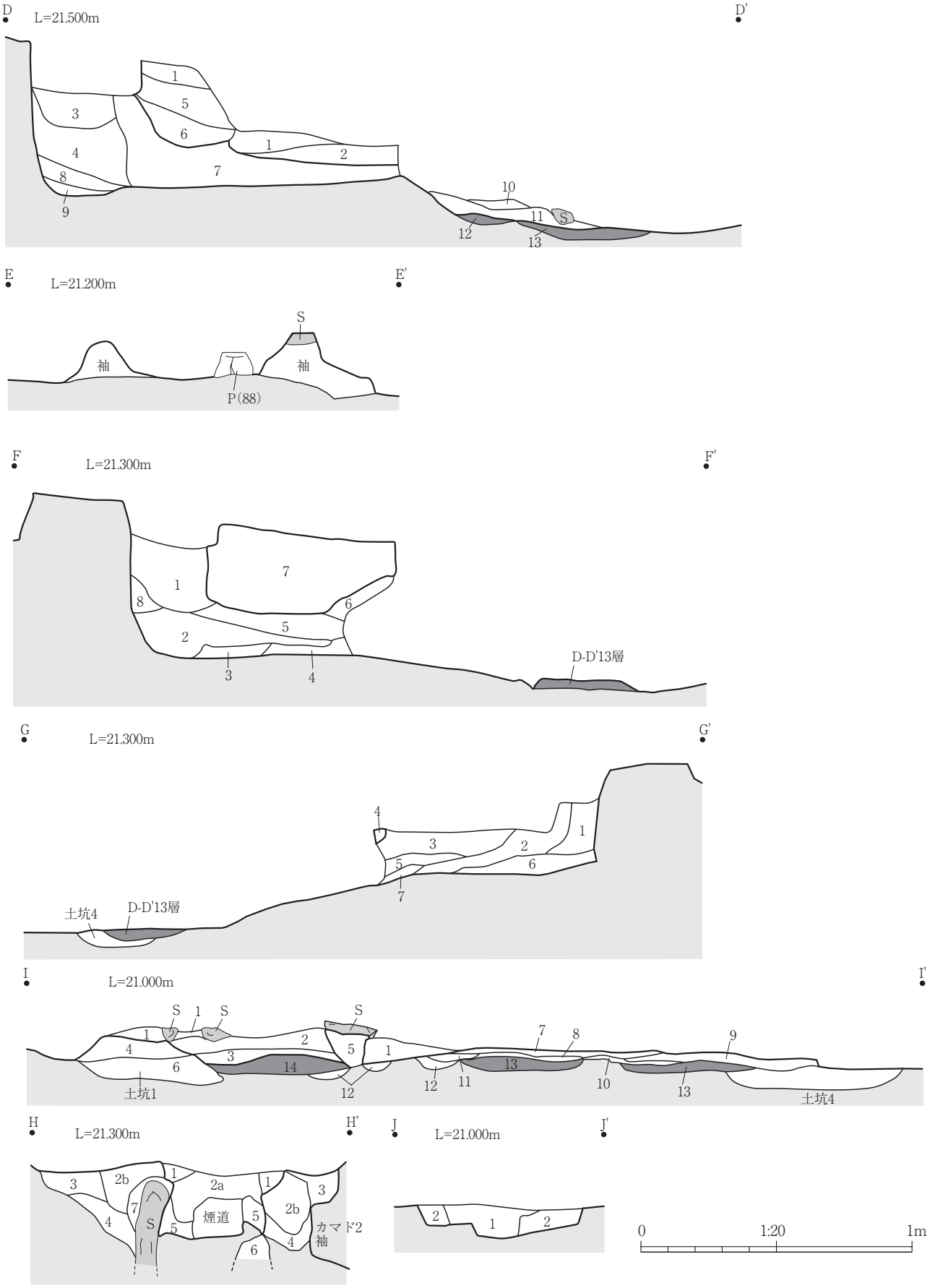
第６表　２号竪穴建物跡土層観察表（２）

F-F'（カマド２）

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	7.5YR3/2黒褐色シルト	2	3	黄褐色土10%、焼土ブロック5%	煙道部堆積土
2	7.5YR2/1黒色シルト	2	4	黄褐色土20%、焼土ブロック3%	煙道部堆積土
3	7.5YR2/2黒褐色シルト	2	4	焼土ブロック1%	煙道部堆積土
4	10YR3/4暗褐色シルト	3	4	黄褐色土粒3%	煙道部堆積土
5	10YR2/3黒褐色シルト	2	3	黄褐色土ブロック5～10%	煙道部堆積土
6	10YR5/8黄褐色シルト	2	4	黄褐色土ブロック20～30%	
7	10YR2/2黒褐色シルト	2	2	黄褐色土粒20%、焼土・炭化物5%	地山
8	7.5YR2/3黒褐色シルト	2	3	黄褐色土粒20%、焼土・炭化物6%	

G-G'（カマド３）

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	7.5YR2/3極暗褐色シルト	2	4	焼土ブロック中20%	
2	10YR2/3黒褐色シルト	1	2	黄褐色土粒極小30%	
3	7.5YR2/2黒褐色シルト	2	4	黄褐色土粒小3%、炭化物粒極小	
4	7.5YR3/2黒褐色シルト	2	5		地山
5	7.5YR2/1黒色シルト	2	4	黄褐色土50%	
6	7.5YR2/2黒褐色シルト	2	5	炭化物粒極小10%未満	
7	10YR3/2黒褐色シルト	2	3		



第８図　２号竪穴建物跡（３）

第６表　２号竪穴建物跡土層観察表（３）

H-H'（カマド１）

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/3黒褐色シルト	1	4	黄褐色土粒極小5%	
2a	10YR5/8黄褐色シルト	2	4	風化花崗岩粒極小1%	天井崩落土
2b	10YR5/8黄褐色シルト	2	4	風化花崗岩粒極小2%	袖構築土
3	7.5YR3/3暗褐色シルト	1	4		
4	10YR2/2黒褐色シルト	1	3	黄褐色土粒極小1～3%	
5	5YR4/6赤褐色シルト	1	2		煙道壁の崩落土
6	7.5YR3/3暗褐色シルト	1	2		袖石の抜取痕
7	7.5YR3/2黒褐色シルト	2	4		

I-I'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色シルト	2	5	黄褐色土10%、焼土10%	
2	10YR4/6褐色シルト	2	2	焼土粒20%	
3	5YR3/6暗赤褐色シルト	3	5	焼土粒10%、黄褐色粘土10%	
4	10YR3/4暗褐色シルト	2	5	黄褐色土20～30%、黒色土20～30%	カマド袖貼り付け土
5	10YR3/4暗褐色シルト	1	2		
6	10YR2/3黒褐色シルト	3	4	焼土粒1%、炭化物1%、黄褐色土5%	
7	10YR5/4にぶい黄褐色粘土	5	5	風化花崗岩粒1%	貼床層
8	5YR4/3にぶい赤褐色シルト	2	4	黄褐色土粒極小1%	
9	7.5YR3/2黒褐色シルト	2	4	黄褐色土粒3%、炭化物粒1%	
10	7.5YR4/4褐色シルト	3	4	黄褐色土粒極小～小5%	
11	10YR5/4にぶい黄褐色粘土	2	4	炭化物粒1%、焼土粒	
12	10YR3/4暗褐色シルト	1	3		カマド２の袖石の抜取り痕
13	2.5YR5/6明赤褐色シルト	2	5		カマド２・３燃焼部焼土
14	2.5YR5/8明赤褐色シルト	3	5		カマド１燃焼部焼土

J-J'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	5YR4/4にぶい赤褐色シルト	1	5	黄褐色土粒極小 焼土粒極小1～3%	
2	7.5YR2/2黒褐色シルト	2	5	黄褐色土ブロック小～中5%	

K-K'（土坑1）

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/3暗褐色シルト	2	5	黄褐色土ブロック40%	

L-L'（P1・P16）

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/1黒色シルト	2	3	黄褐色土ブロック小～中10%	
2	10YR4/6褐色シルト	3	2		

M-M'（P2）

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色シルト	2	3	黄褐色土粒小5～10%	

N-N'（P3・P9）

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/3黒褐色シルト	3	3	黄褐色土粒極小5%	
2	10YR5/4にぶい黄褐色シルト	3	3		
3	10YR2/3黒褐色シルト	3	4	黄褐色土粒極小1%	
4	10YR4/6褐色シルト	2	2	黄褐色土粒極小10%	
5	10YR2/1黒色シルト	2	5	黄褐色土粒極小1%	

O-O'（P4）

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色シルト	3	3	黄褐色土粒極小～小1～3%	
2	10YR2/3黒褐色シルト	3	3	黄褐色土粒極小～小5～10%	

P-P'（P5）

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色シルト	2	3	黄褐色土粒極小～小1%	
2	10YR3/3暗褐色シルト	3	3	黄褐色土粒小～中10%	

Q-Q'（P6）

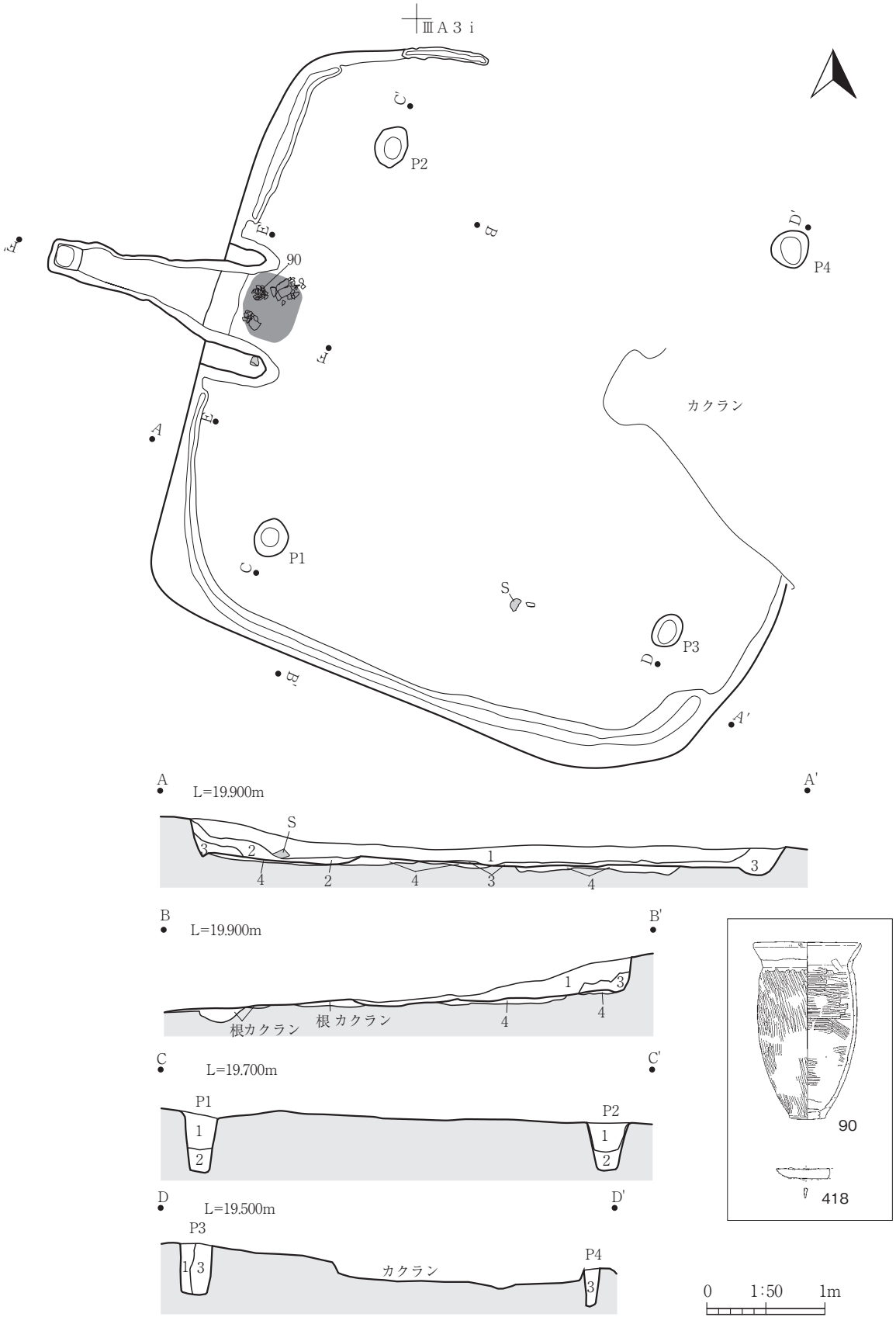
層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/3黒褐色シルト	2	3	黄褐色土粒極小1%	
2	10YR3/4暗褐色シルト	3	3	黄褐色土ブロック小～中10%	

R-R'、S-S'、T-T'、U-U'（P3・8・7・10・11）

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/3黒褐色シルト	2	3		
2	10YR3/3暗褐色シルト	3	4	黄褐色土ブロック小～中10%	
3	10YR2/2黒褐色シルト	3	2		

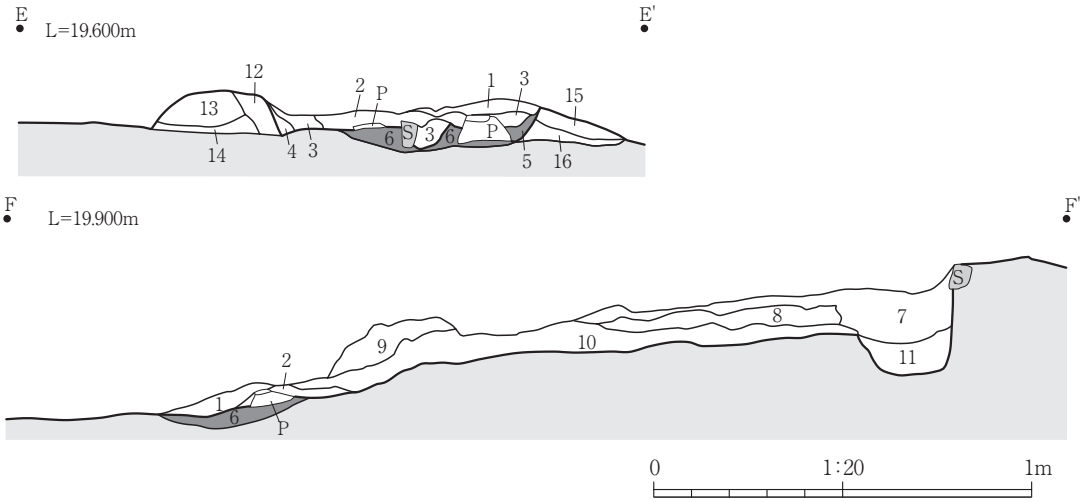
3号竪穴建物跡（第9・10図、写真図版4・47・74）

＜検出状況＞調査区中央尾根部の6号竪穴建物跡の東側で方形の黒褐～暗褐色プランを検出した。



第9図　3号竪穴建物跡（1）

＜規模・形状＞平面形は隅丸方形であるが、谷側の北東壁と南東壁の一部が消失している。根痕跡が多い地区のため堆積土の攪乱が著しい。壁溝、主柱穴４個が伴い、カマドがある。
＜堆積土＞黒～黒褐色土主体である。Ⅳ層に由来する砂粒や花崗岩粒が混入する。木根が床面上に北西壁の北側と北東壁の堆積土中に焼土が帯状に分布する。硬質面は主柱穴で囲まれた範囲に分布する。
＜構成要素・付属施設＞硬質面上で、主柱穴４個、カマド１基を検出した。カマドは残存状態が悪いが、ソデの芯材は礫で、燃焼部中央に小礫が1点出土した。支脚として使用された可能性がある。煙道部は内部に粘土が張り付いていたことから掘込式と考えられる。
＜遺物分布＞カマド手前に90の甕が出土したが、それ以外の場所では土器破片が散漫に分布する。
＜遺物＞縄文土器21.6g、土師器2077.9g、鉄製品8.4gが出土している。
【土師器】90の土師器甕は、カマド前の床面上から出土し、外面ミガキ、内面ハケ調整で、口唇部が受け口状となる長胴甕である。外底面に木葉痕がみられる。
【鉄製品】418の刀子は床面出土で、柄部を欠損している。
＜時期＞遺構の特徴と、床面出土遺物の年代から、７世紀後半～８世紀前半と考えられる。



第10図　３号竪穴建物跡（２）

第７表　３号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45791.27 Y＝ 94472.824	ⅢＡ３ｈ	Z＝19.300	A	方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	5.32	5.29	48.30	A：21.709　B：25.702	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	1.42×0.68	0.58×1.23	礫	横位2個	甕
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-74.97°-N	北西壁	

壁溝	最大幅（m）	床面からの深（cm）
	0.12	44.60

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.34×0.28	31.20	円形	
P2	0.36×0.28	45.40	楕円形	
P3	0.30×0.24	45.20	楕円形	○
P4	0.34×0.31	29.40	楕円形	

第８表　３号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2	砂粒1%	
2	10YR5/4にぶい黄褐色土	2	2	炭化物粒1%	
3	10YR3/3暗褐色土	2	2	風化花崗岩粒3%	
4	10YR3/2黒褐色土	2	4		貼床

C-C'・D-D'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2		
2	10YR3/3暗褐色土	2	2		
3	10YR3/2黒褐色土	2	2	黄褐色土粒5%	柱痕跡

E-E'・F-F'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	3	カマド崩落土10%	
2	10YR3/4暗褐色土	2	2	焼土粒1% 黄褐色土粒3%	
3	10YR2/3黒褐色土	2	2	焼土粒1% 炭化物粒1%	
4	10YR2/2黒褐色土	2	2		
5	10YR2/2黒褐色土	2	2	焼土粒3%	
6	5YR2/4極赤褐色土	2	3	焼土粒20% 炭化物粒5%	焼土
7	10YR3/3暗褐色土	2	2		
8	10YR5/6黄褐色土	4	4		地山の崩落部分
9	10YR3/2黒褐色土	2	2		
10	10YR2/2黒褐色土	2	2	焼土粒1%	
11	10YR3/2黒褐色土	2	2	黄褐色土粒3%	
12	7.5YR4/6褐色土	4	5	黒褐色土10%	袖部焼成面
13	10YR6/6明黄褐色土	4	5		袖部
14	10YR3/2黒褐色土	3	5		
15	10YR6/8明黄褐色土	3	5	黒褐色土5%	
16	10YR5/6黄褐色土	3	5	焼土粒1%	

４号竪穴建物跡（第11図、写真図版７）

＜検出状況＞調査区南西部の６号竪穴建物の西側で方形の黒褐～暗褐色プランを検出した。

＜規模・形状＞平面形は方形である。建物南西壁の立ち上がりラインは明瞭だったが、北東壁は不明瞭であった。壁溝、主柱穴４個が伴い、カマドがある。

＜堆積土＞黒褐～暗褐色土である。堆積土が薄く、硬質面も一部木根によりカクランされている。

＜構成要素・付属施設＞主柱穴４個、カマド１基、壁溝を検出した。カマド残存状況は不良である。

＜遺物分布＞散漫に微量出土した。

＜遺物＞縄文土器23.8g、土師器7.7gが出土している。図化資料はない。

＜時期＞遺構と堆積土の特徴から、７世紀後半～８世紀と考えられる。

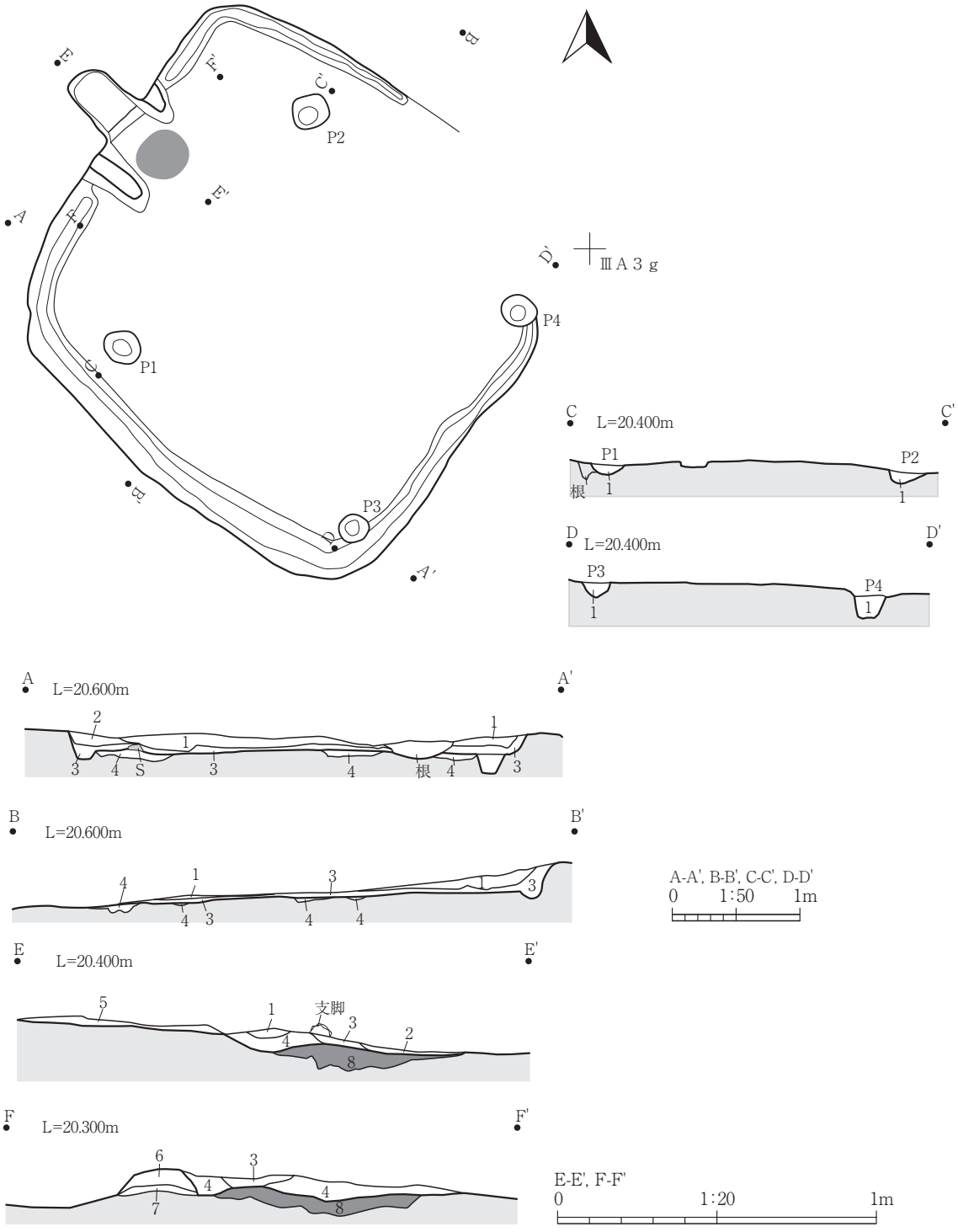
第９表　４号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45788.429	ⅢＡ２ｆ	Z＝20.120	D	方形
	Y＝ 94461.650				
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡） A：残存値、B：推定値	
	3.65	3.62	33.20	A：11.100　B：11.414	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置
カマド	0.54×0.38	0.54×0.94	無	不明
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁
	掘込		W-46.92°-N	北西壁

	最大幅（m）	床面からの深（cm）
壁溝	0.16	15.20

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.30×0.26	10.80	楕円形	
P2	0.29×0.26	12.20	円形	
P3	0.24×0.22	13.20	楕円形	
P4	0.28×0.25	12.20	円形	



第11図　４号竪穴建物跡

第10表　４号竪穴建物跡土層観察表（１）

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2	炭化物粒1%	
2	10YR3/3暗褐色土	2	2		
3	10YR3/2黒褐色土	2	3	黄褐色土粒1%	
4	10YR3/3暗褐色土	2	5	暗褐色土1%	貼床

第10表　４号竪穴建物跡土層観察表（２）

C-C'・D-D'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/3暗褐色土	2	2		

E-E'・F-F'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2		建物堆積土
2	10YR4/3にぶい黄褐色土	2	2	黄褐色粘土10% 焼土粒3%	カマド崩落土
3	10YR3/4暗褐色土	2	2	焼土粒10% 炭化物粒3%	
4	10YR3/3暗褐色土	2	2	焼土粒3% 炭化物粒1%	
5	10YR4/3にぶい黄褐色土	2	2		煙道
6	10YR5/6黄褐色粘土	5	4	暗褐色土粒10%	袖部
7	10YR5/8黄褐色粘土	5	5	風化花崗岩粒3%	袖部
8	5Y5/6明赤褐色土	3	5		

５号竪穴建物跡（第12図、写真図版８・47・69）

＜検出状況＞調査区中央尾根部の２号竪穴建物の北側で方形の黒褐～暗褐色プランを検出した。本遺構東側が試掘トレンチにかかる。

＜規模・形状＞平面形は台形と推定される。試掘時に東壁の２カ所のコーナー部分が確認された。カマドが北西壁に構築されている。

＜堆積土＞黒褐色土主体である。Ⅳ層に由来する砂粒や花崗岩粒が混入する。硬質面は床面中央部に分布する。

＜構成要素・付属施設＞硬質面上で、カマド１基を検出した。カマドの芯材は礫で黒色土や黄褐色粘土を貼付けている。91の小型甕は支脚として転用されている。

＜重複関係＞視認可能な重複関係はない。周堤帯が建物壁から外側に１ｍ程度幅を持っていたと仮定すれば、２号竪穴建物跡と重複関係があると考えられる。

＜遺物分布＞カマド内の支脚として91の甕、カマド左脇に92の甕が出土した。

＜遺物＞縄文土器4.9g、土師器1035.8g、須恵器31.8gが出土している。

【土師器】91の土師器甕は、カマド内支脚で、ハケ調整で頸部の屈曲が明瞭である。92の甕は胴部～底部破片で、外面がミガキ調整である。

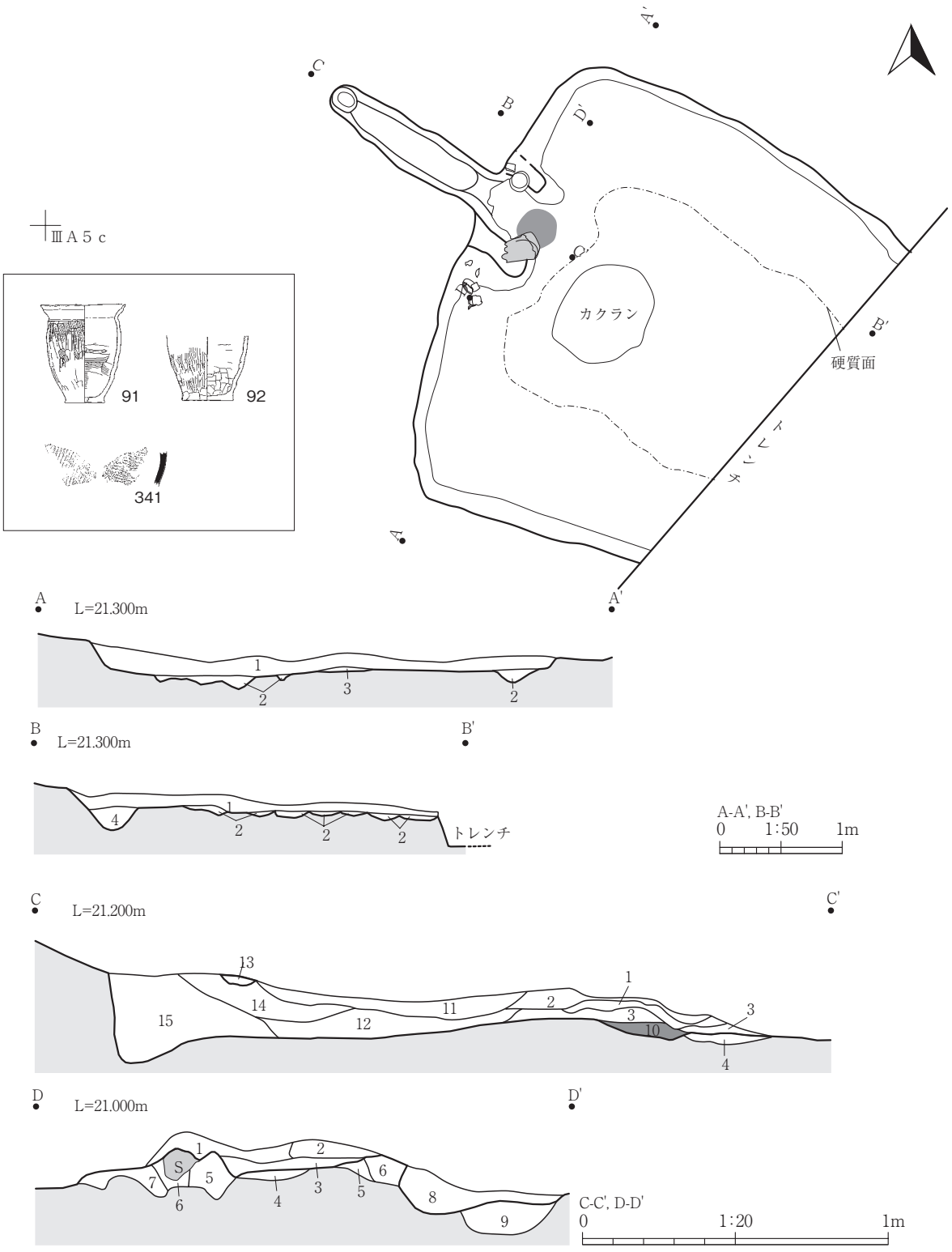
【須恵器】341の甕は胴部破片で、タタキ痕が明瞭である。

＜時期＞遺構の特徴と、出土遺物の年代から、７世紀末～８世紀前半と考えられる。

第11表　５号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45797.039 Y＝ 94453.008	ⅢＡ４ｃ	Z＝20.750	A	方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡） A：残存値、B：推定値	
	3.81	3.06	37.90	A：9.021　B：不明	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	2.51×0.39	0.58×1.06	礫	1個	甕
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-57.06°-N	北西壁	



第12図　５号竪穴建物跡

第12表　5号竪穴建物跡土層観察表（１）

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色土	2	2	炭化物粒1% 黄褐色土粒3%	
2	10YR3/1黒褐色土	3	2	黄褐色土10%	
3	10YR4/6褐色土	3	3		カマド崩落土
4	7.5YR3/3暗褐色土	3	2	黄褐色土粒1%、焼土粒1%	

第12表　５号竪穴建物跡土層観察表（２）

C-C'・D-D'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	7.5YR2/2黒褐色シルト	2	2		
2	7.5YR2/1黒色シルト	2	3		
3	10YR3/2黒褐色シルト	2	2	黄褐色土粒極小～小5%	
4	10YR2/2黒褐色シルト	2	2	黄褐色土粒極小～小10% 焼土粒極小～小3%	
5	10YR3/2黒褐色シルト	2	2	黄褐色土粒極小～小5 ～ 10% 焼土粒包含	
6	10YR6/6明黄褐色シルト	2	2		天井崩落土
7	5YR5/6明赤褐色シルト	2	2		天井被熱面崩落土
8	7.5YR3/4暗褐色シルト	2	2	黄褐色土粒極小5% 焼土粒極小1%	
9	10YR2/3黒褐色シルト	2	3	黄褐色土粒極小5%	
10	2.5YR5/6明赤褐色シルト	2	3		焼成面
11	7.5YR4/6褐色シルト	2	3	黄褐色土粒小5%	カマド袖部
12	10YR3/4暗褐色シルト	2	2	黄褐色土粒極小1 ～ 3%	
13	7.5YR2/2黒褐色シルト	2	2		地山
14	10YR3/2黒褐色シルト	2	2	黄褐色土粒5%	
15	10YR2/2黒褐色シルト	2	2	黄褐色土粒10%	

６号竪穴建物跡（第13図、写真図版９）

＜検出状況＞調査区中央尾根部の３・４号竪穴建物跡の間に位置する。黒褐～暗褐色プランを検出した。範囲内に黒色土の１号土坑プランが視認可能であった。

＜規模・形状＞地形改変の進んだ地区にあるため、残存状況は悪かった。カマドの煙道部と右袖部は確認できなかった。平面形は方形と推定される。北東側と南東側の一部の壁が削平されている。壁溝、主柱穴４個が伴い、カマドがある。

＜堆積土＞黒褐～暗褐色土主体である。硬質面は不明瞭であった。

＜構成要素・付属施設＞主柱穴４個、カマド１基を検出した。カマドは残存状態が悪く、芯材は礫で、燃焼部焼土がわずかに残存していた。

＜重複関係＞１号土坑と重複し、これに切られる。したがって、１号土坑堆積土出土資料の一部は、本来６号竪穴建物帰属の可能性がある。

＜遺物分布＞土器破片が散漫に分布する程度であった。

＜遺物＞縄文土器11.58g、土師器18.1gが出土している。図化遺物はない。

＜時期＞遺構の特徴と重複関係から、７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

第13表　６号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45791.074 Y＝ 94467.258	ⅢＡ３ｇ	Z＝19.880	A	方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	4.49	3.36	33.90	A：16.546　B：19.852	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置
カマド			礫	不明
	煙道部造成方法			建物内設置壁
				北西壁

	最大幅（m）	床面からの深（cm）
壁溝	0.09	

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.24×0.17	30.60	不整形	
P2	0.24×0.22	38.80	方形	
P3	0.24×0.20	30.60	円形	
P4	0.22×0.20	28.80	楕円形	

第14表　６号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2	砂粒1%	
2	10YR3/4暗褐色土	0	2		
3	10YR3/3暗褐色土	2	3		
4	10YR4/4褐色土	2	3	炭化物粒1%	
5	10YR5/4にぶい黄褐色土	2	5		貼床

C-C'

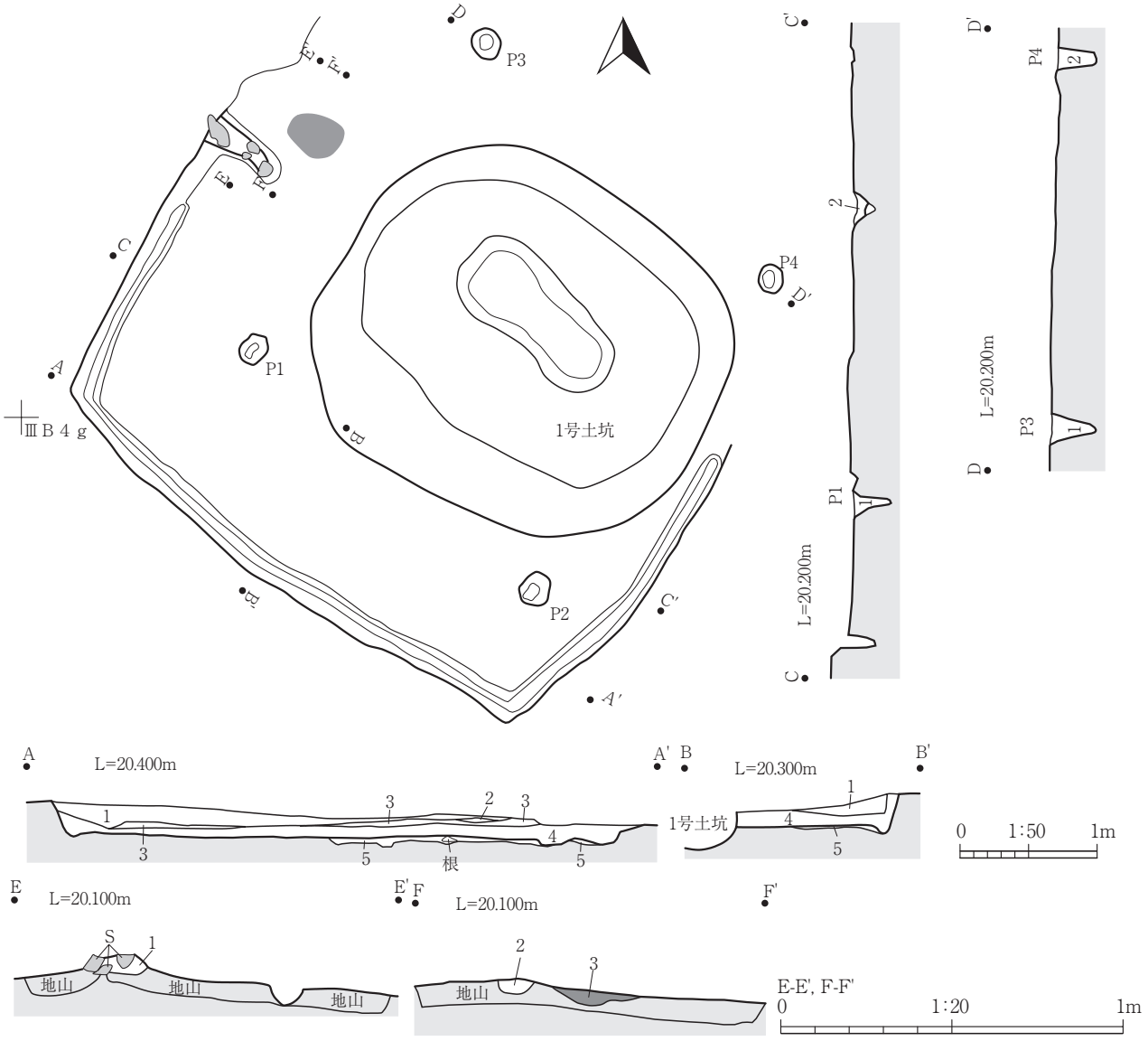
層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/3黒褐色シルト	1	5	黄褐色土粒極小～小1%	
2	10YR2/2黒褐色シルト	1	5	黄褐色土粒極小3%	

D-D'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/4暗褐色シルト	1	5	黄褐色土粒小1%	
2	10YR2/3黒褐色シルト	2	5	黄褐色土粒極小10%	

E-E'・F-F'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR5/4にぶい黄褐色土	2	5		袖部
2	10YR3/2黒褐色土	2	5	焼土1%	袖部
3	5YR5/6明赤褐色土	2	5		焼土



第13図　６号竪穴建物跡

７号竪穴建物跡（第14・15図、写真図版10・43・47・48・69・72・73）

＜検出状況＞谷状地形西側のうち、斜面から谷部への傾斜変換ライン付近で、竪穴建物の壁ラインと考えられる黒褐色プランを検出した。また、本遺構中央に設定された試掘トレンチを掘り返したところ、床面ライン、カマド堆積土を断面で観察できた。試掘時は「焼土あり」として登録された範囲である。

＜規模・形状＞平面形は方形と推定される。北西壁が不明瞭であるが、竪穴建物の４隅のうち、３箇所を検出したことから、２号竪穴建物跡と同規模の大型建穴建物と判明した。４個の柱穴とカマド１基がある。

＜堆積土＞黒褐～暗褐色土主体である。Ⅳ層に由来する砂粒や風化花崗岩粒が混入する。硬質面範囲は広く、床面中央部に分布する。建物堆積土第１層が厚く堆積している。斜面部上方からの流入土と考えられる。

＜構成要素・付属施設＞硬質面上で、カマド１基、柱穴４個を検出した。カマドの芯材は残っていなかった。構築材は黒褐色土や黄褐色粘土を貼付けている。煙道部の全体形状は分からないが、煙出部の上部堆積土が明黄褐色土で覆われることから、掘込式で造り出され、上部を粘土材で覆ったと考えられる。柱穴はＰ１～３から柱痕跡を検出した。Ｐ４は抜取痕状である。

＜重複関係＞視認可能な重複関係はない。周堤帯が建物壁から外側に１ｍ程度幅を持っていたと仮定すれば、８号竪穴建物跡と重複関係があると考えられる。

＜遺物分布＞堆積土内は、建物中央から北東側にかけて遺物が多いが、斜面上方からの流入土と関係があると考えられる。床面上での遺物密集分布範囲はない。112～114の甕は床面上に破片がまとまるが、堆積土上部出土の破片もある。

＜遺物＞縄文土器1865.7g、土師器8925.9g、須恵器10.62g、石器3293.5g、土製品135.7gが出土している。

【縄文土器】２・３は縄文早期末～前期初頭で胎土に繊維が混入する。

【土師器】93～114である。堆積土下部出土が99、103、107、床面出土は112～114である。93～103は坏で、外面にハケ、ケズリ、内面黒色処理が主体である。93は口縁外反で、内面に屈曲を持つ小型坏である。内外面黒色処理されている。内面有段が不明瞭な資料が多いが、明瞭な資料のうち93と102

第15表　７号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45775.730	ⅡＡ９ｇ	Z＝18.240	A	方形
	Y＝ 94467.305				
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	7.01	6.53	119.00	A：41.205　B：44.199	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	1.34×0.35	不明	無		
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-54.81°-N	北西壁	

壁溝

	最大幅（m）	床面からの深（cm）
壁溝	0.12	19.00

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.34×0.30	49.80	方形	○
P2	0.33×0.27	50.60	方形	○
P3	0.33×0.29	52.80	楕円形	○
P4	0.30×0.21	50.60	楕円形	

は内面のミガキ方向が段を境に異なる。98は外面ケズリ調整で、口縁が直線的に開く器形で、高坏の坏部の可能性もある。104・105は高坏脚部である。106～108が壺で、108は球胴タイプである。109～114の甕は外面ハケ調整で、このうち113・114はハケ調整後のミガキが見られる。

【須恵器】338の甕は胴部破片で、タタキ痕が明瞭である。

【石器】380の磨石は床面出土で、偏平礫を素材とし表裏面を中心に磨面が形成されている。

【土製品】397・398は紡錘車である。

＜時期＞遺構の特徴と、出土遺物の年代から、７世紀末～８世紀前半と考えられる。

第16表　７号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

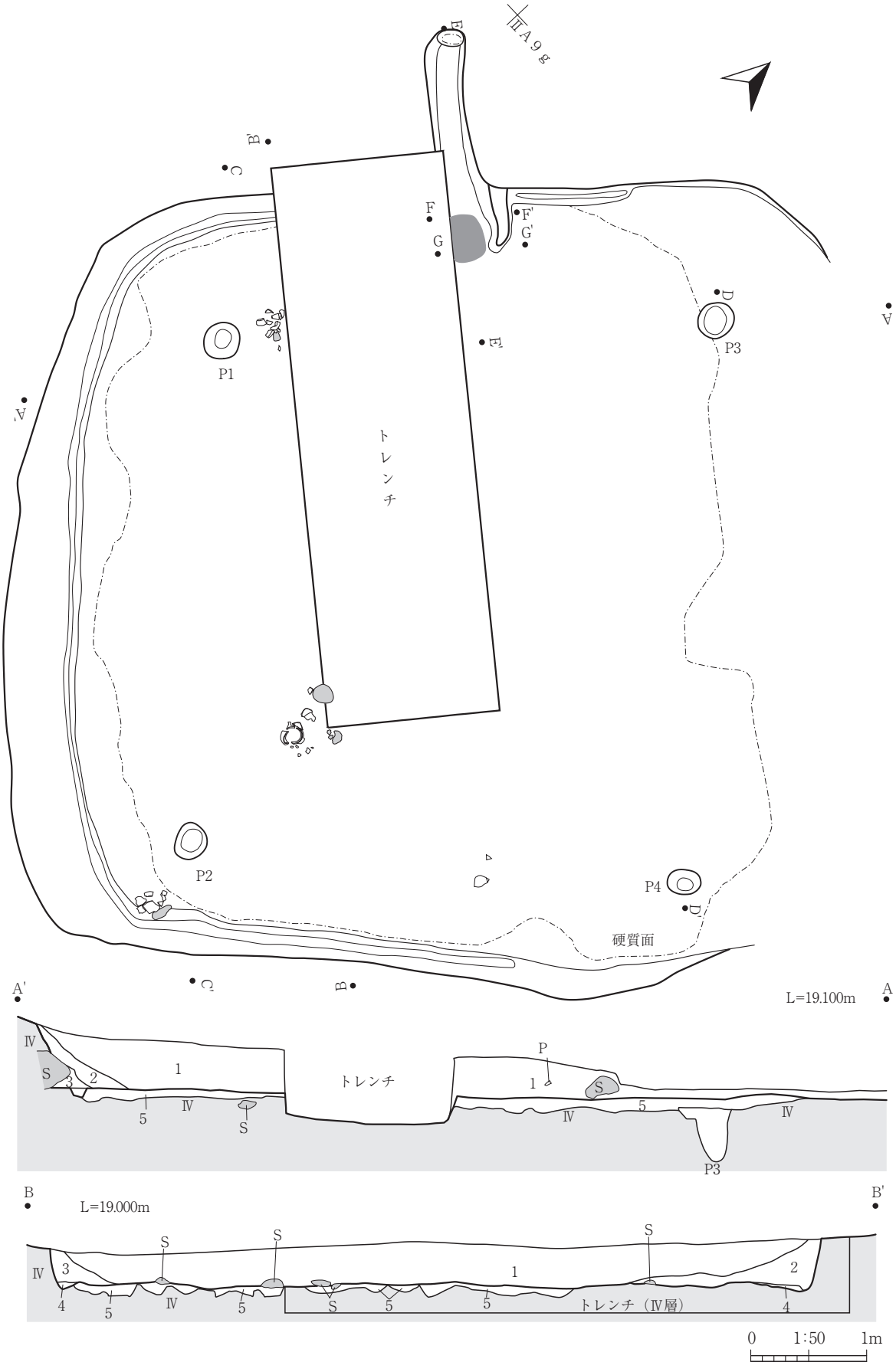
層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2	遺物少量 炭化物粒1%	
2	10YR2/3黒褐色土	2	2	風化花崗岩粒1%	
3	10YR2/3黒褐色土	2	2	風化花崗岩粒5%	
4	10YR3/3暗褐色土	2	3		
5	10YR3/4暗褐色土	2	4	風化花崗岩粒3%	貼床

C-C'・D-D'

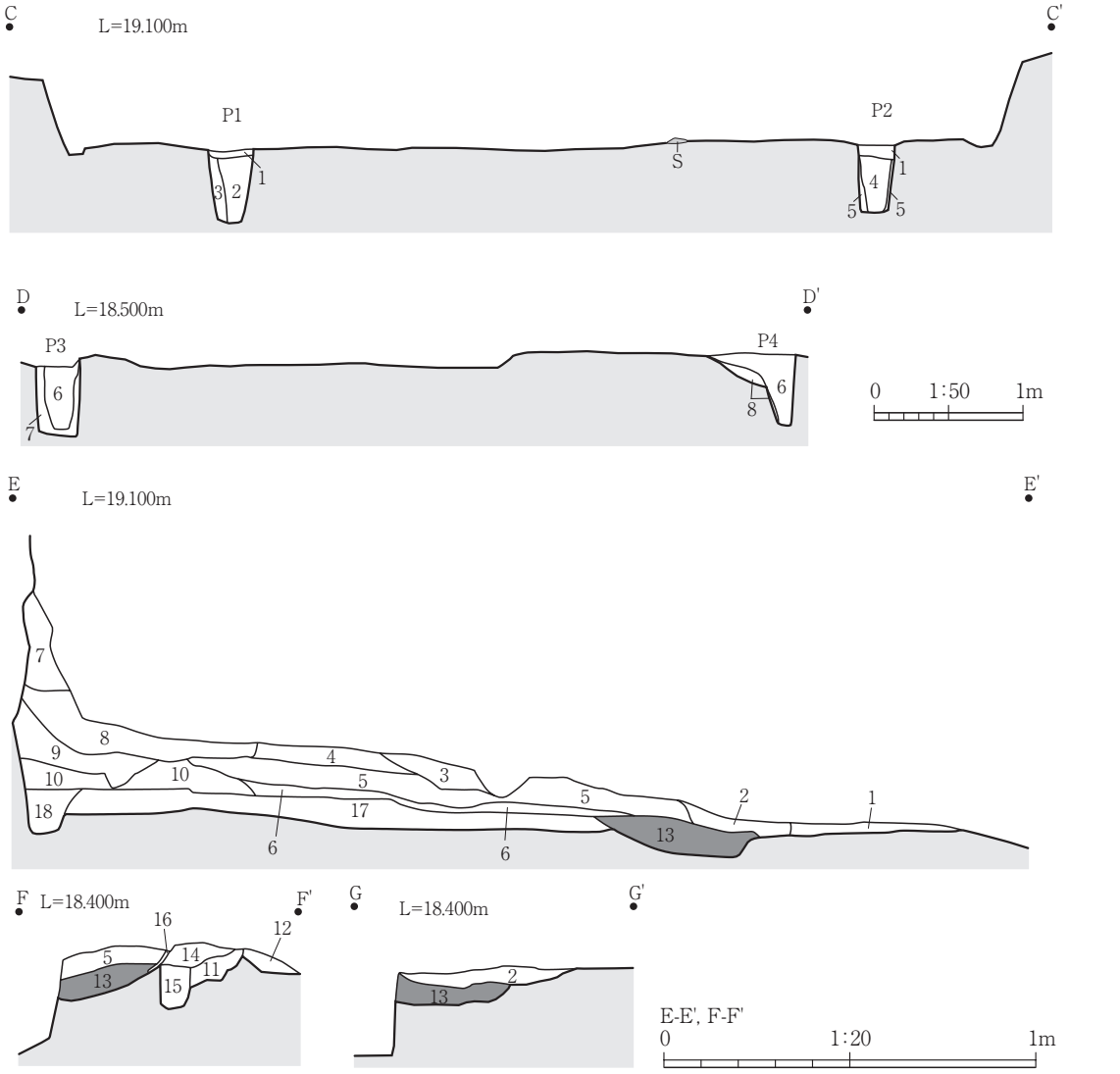
層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2		
2	10YR4/2灰黄褐色土	2	2		柱痕跡
3	10YR3/4暗褐色土	2	4		
4	10YR4/4褐色土	2	2		柱痕跡
5	10YR3/4暗褐色土	2	4		
6	10YR2/3黒褐色土	2	2		柱痕跡
7	10YR3/3暗褐色土	2	3		
8	10YR3/3暗褐色土	2	3		

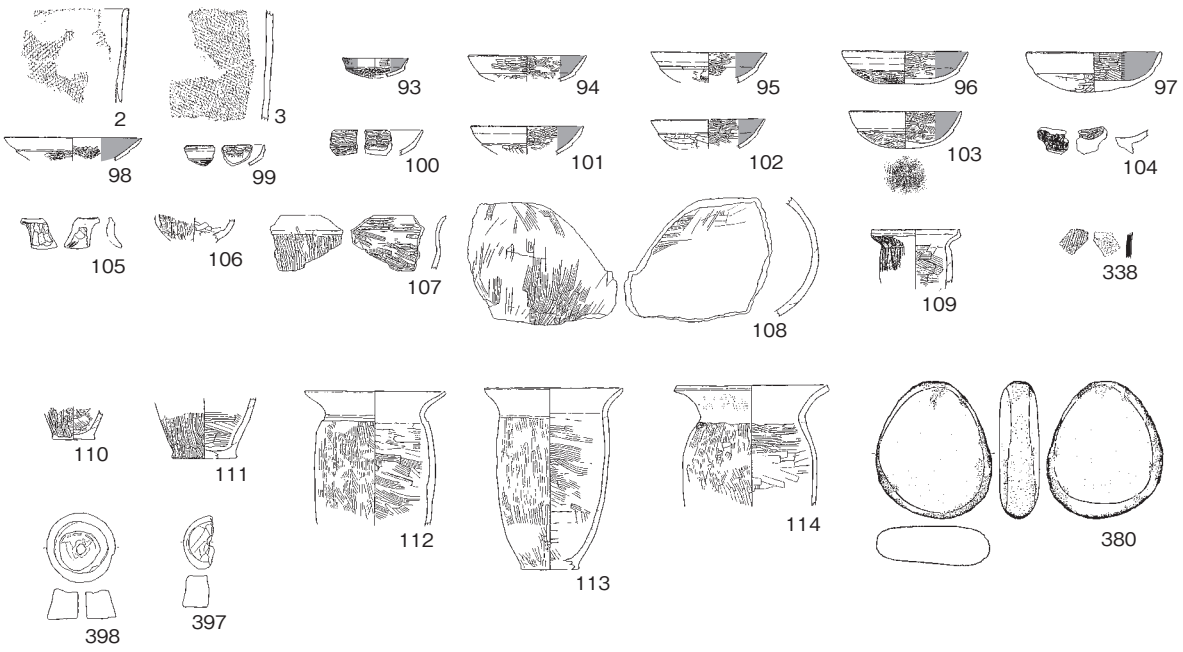
E-E'・F-F'・G-G'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/3黒褐色土	2	4	炭化物粒1% 焼土なし 風化花崗岩粒3%	
2	10YR4/4褐色土	0	2	炭化物粒1% 焼土5% 風化花崗岩粒1%	掛口堆積土含む
3	10YR2/3黒褐色土	0	3		煙道覆土
4	10YR3/1黒褐色土	2	3	焼土5%	
5	10YR4/6褐色土	2	2	炭化物粒1% 焼土10%	崩落土及び焼土層
6	10YR2/3黒褐色土	2	2		
7	10YR5/8黄褐色土	0	4		黄褐色土充填？
8	10YR6/6明黄褐色土	4	4		天井崩落土
9	10YR5/6黄褐色土	0	3		
10	10YR3/1黒褐色土	3	2		6層とつながるか？
11	10YR5/6黄褐色土	5	5		袖部
12	10YR5/6黄褐色土	5	5	焼土3%	
13	5YR5/6明赤褐色土	2	5		燃焼部焼土
14	10YR6/6明黄褐色土	2	5		
15	10YR4/6褐色土	2	2	焼土粒3%	抜取痕
16	5YR4/6赤褐色土	2	5		被熱土
17	10YR2/3黒褐色土	2	3		
18	10YR2/2黒褐色土	2	2		



第14図　７号竪穴建物跡（１）





第15図　７号竪穴建物跡（２）

８号竪穴建物跡（第16図、写真図版11・43・71・74・75）

＜検出状況＞調査区西壁沿いで竪穴建物の壁ラインと考えられる黒褐色プランと貝層を検出した。また、調査区壁のクリーニング作業により、竪穴建物の断面を確認した。

＜規模・形状＞遺構範囲の大半が調査区外に存在すると考えられる。平面形は方形と推定される。竪穴建物の４隅のうち、２隅を検出できたので、壁１辺の長さが判明した。規模は33・34号と同規模の小型竪穴建物と考えられる。

＜堆積土＞黒褐～暗褐色土主体である。Ⅳ層に由来する砂粒や風化花崗岩粒が混入する。床面上に貝層硬質面範囲は広くは床面中央部に分布する。建物堆積土第１層が厚く堆積している。斜面部上方からの流入土と考えられる。

＜構成要素・付属施設＞未検出である。

＜重複関係＞視認可能な重複関係はない。周堤帯が建物壁から外側に１ｍ程度幅を持っていたと仮定すれば、７号竪穴建物跡と重複関係があると考えられる。

＜遺物分布＞貝層が北東部から中央に向かって分布する。人工遺物は散漫な分布であった。

＜遺物＞縄文・弥生土器19.9g、土師器358.6g、石器336.5g、鉄製品19.9g、貝類9552.6gが出土している。

【縄文土器】５は堆積土出土で、中期の大木７a～7b式相当である。

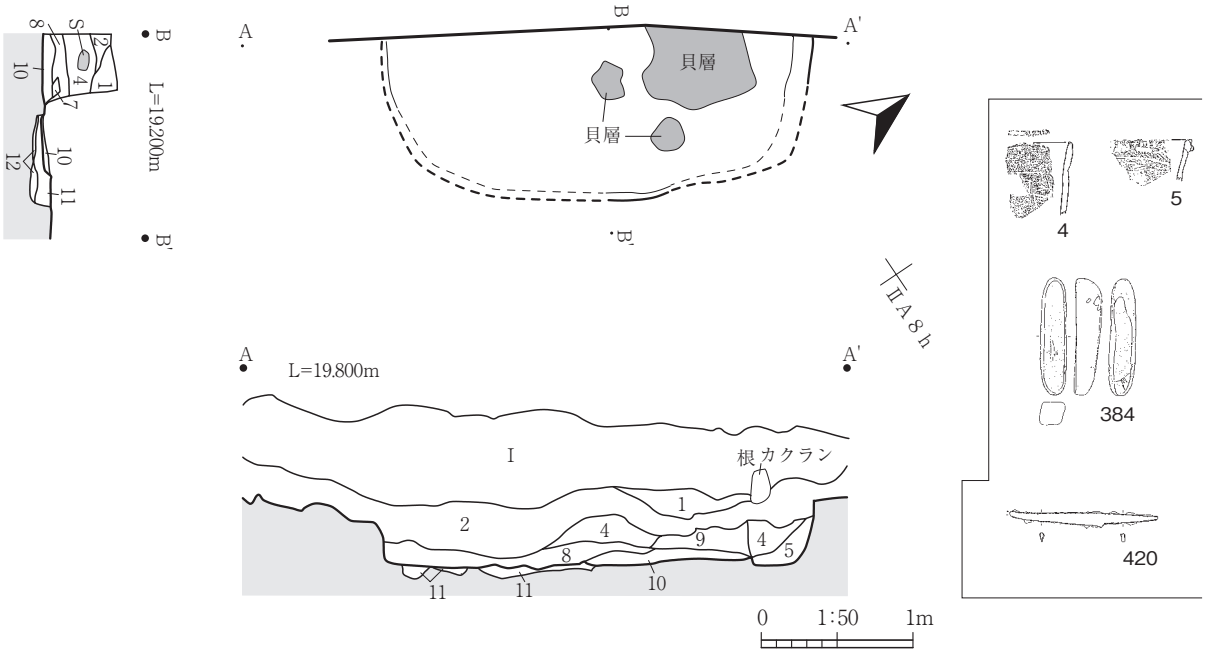
【弥生土器】４は堆積土から出土した沈線区画が特徴的な中期土器である。

【石器】384は堆積土出土の磨石で、表裏面に磨面が形成されている。

【鉄製品】420は堆積土出土の刀子で先端部がわずかに欠損する。

【貝類】貝層は、土ごと一括採取し、そのなかの貝種の同定とその個数、重量を記載した。貝種はイガイが９割を占めるが、ムラサキインコ、フジツボ、ウニなど岩礁性の貝類が主体である。また、サケ科と考えられる魚骨もある。貝種については第Ⅳ章で詳細を記載している。

＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、７世紀末～８世紀と考えられる。



第16図　８号竪穴建物跡

第17表　８号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝−45768.871 Y＝ 94465.883	ⅡＡ８ｇ	Z＝17.480	不明	方形
	長（m）	幅（m）	深（㎝）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	2.84	1.15	80.40	A：2.420　B：不明	

第18表　８号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
Ⅰ	10YR2/3黒褐色				
1	10YR3/3暗褐色土	2	2	風化花崗岩粒3%	
2	10YR2/2黒褐色土	2	2	風化花崗岩粒1%	
4	10YR3/2黒褐色土	2	2		3層に類似
5	10YR2/3黒褐色土	2	3	風化花崗岩粒1%	
6	10YR2/3黒褐色土	2	3		
7	10YR3/3暗褐色土	2	3	風化花崗岩粒1%	
8	10YR2/3黒褐色土	5	3	焼土20% イガイ5%	
9	10YR4/1褐灰色土	0	2		貝層（イガイが主体）
10	10YR7/4にぶい黄橙色土	5	3	焼土5% イガイ片5%	
11	10YR2/2黒褐色土	3	5		貼床
12	10YR3/1黒褐色土	3	4		

９号竪穴建物跡（第17・18図、写真図版12・49・70～74）

＜検出状況＞谷状地形範囲内のうち斜面から谷部への傾斜変換ライン付近で、方形の黒褐色プランを検出した。また、カマド構築材の分布も遺構北西側で確認した。

＜規模・形状＞平面形は方形と推定される。北東壁と南東壁の一部が不明であるが、竪穴建物の４隅のうち、２隅を検出した。１辺の長さからは10・21・25号建穴建物跡と同じ中型建物である。主柱穴４個、南東壁に壁溝、カマドがある。

＜堆積土＞黒褐色土主体である。Ⅳ層に由来する黄褐色土や風化花崗岩粒が混入する。建物堆積土第１層が厚い。斜面部上方からの流入土と考えられる。巨礫が南東壁を破壊している。

＜構成要素・付属施設＞硬質面上で、カマド１基、柱穴４個を検出した。カマドは燃焼部の天井が崩落していたが、掛口形状を把握可能で横位に２個あり、掛口直下に支脚転用の甕片が配置される。煙道は掘込式の長煙道である。

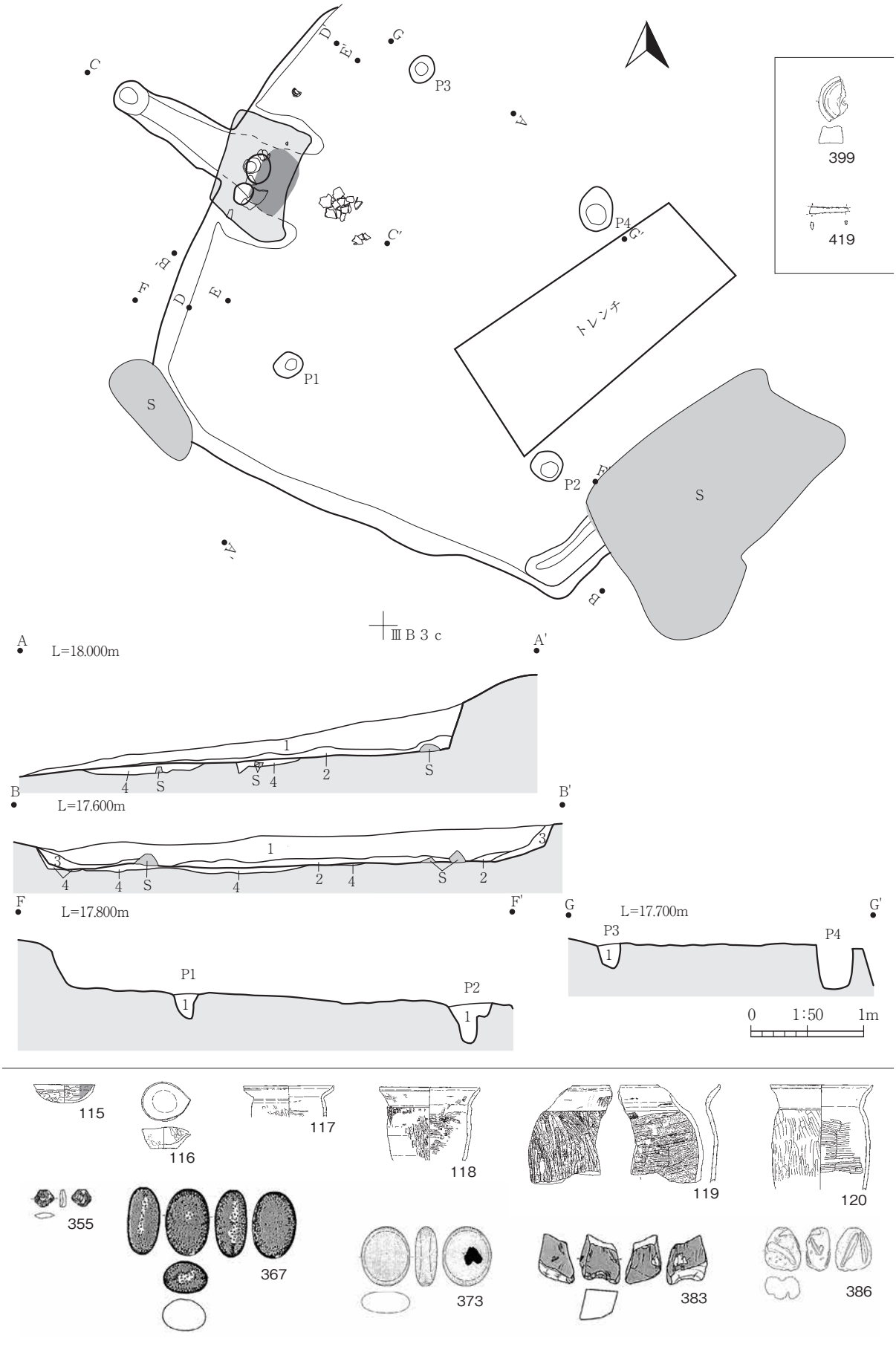
第19表　９号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝−45785.055 Y＝ 94488.797	ⅢＢ２ｂ	Z＝17.040	不明	方形
	長（m）	幅（m）	深（㎝）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	4.46	4.04	63.3	A：14.674　B：20.359	

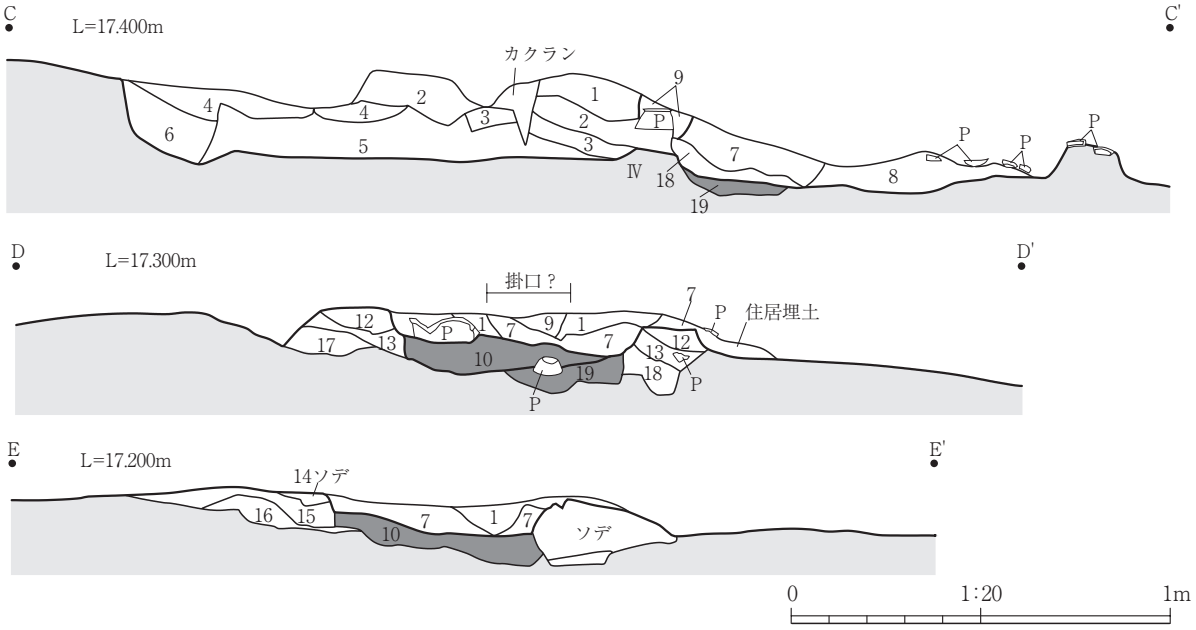
	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	1.10×0.43	0.80×1.20	無	１個	甕
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-62.96°-N	北西壁	

壁溝	最大幅（m）	床面からの深（㎝）
	0.08	37.8

	規模（m）	深（㎝）	底面形状	柱痕跡
P1	0.27×0.22	23.4	円形	
P2	0.29×0.27	34	円形	
P3	0.26×0.22	24.4	円形	
P4	0.39×0.29	43.4	円形	



第17図　９号竪穴建物跡（１）



第18図　９号竪穴建物跡（２）

第20表　９号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2	風化花崗岩粒1%	
2	10YR2/3黒褐色土	2	2	黄褐色土粒1% 炭化物粒1%	
3	10YR3/2黒褐色土	2	2	黄褐色土粒3%	
4	10YR2/2黒褐色土	2	5		貼床

C-C'・D-D'・E-E'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR6/6明黄褐色土	2	5	黒褐色土20%	天井崩落土
2	10YR2/3黒褐色土	2	2	焼土1%	煙道部堆積土
3	5YR3/6暗赤褐色土	2	4	焼土20%	煙道部堆積土
4	5YR4/6赤褐色土	2	4	焼土20%	煙道部堆積土 煙道部天井か
5	10YR3/2黒褐色土	2	2		Ⅳ層か
6	5YR3/4暗赤褐色土	2	2	焼土5%	煙出部堆積土
7	10YR5/4にぶい黄褐色土	2	3	焼土1%	天井崩落土
8	10YR4/6褐色土	2	2	焼土1%	天井崩落土
9	10YR3/2黒褐色土	2	2		掛口堆積土
10	5YR4/6赤褐色土	2	4	炭化物3%	燃焼部焼土 崩落土5% 天井壁被熱土含む
11	10YR3/1黒褐色土	2	2	焼土1%	掛口堆積土
12	10YR7/6明黄褐色土	2	5	黒褐色土10%	カマド袖部
13	10YR6/8明黄褐色土	2	5	焼土3%	カマド袖部
14	10YR4/4褐色土	2	5	黒褐色土3%	カマド袖部
15	10YR6/8明黄褐色土	2	5	焼土1%	カマド袖部13層と同じ
16	10YR3/3暗褐色土	2	4	焼土1%	カマド袖部
17	10YR3/4暗褐色土	2	4	焼土1%	カマド袖部
18	10YR5/3にぶい黄褐色土	2	4	焼土3%	
19	2.5YR5/8明赤褐色土	2	5		焼土層

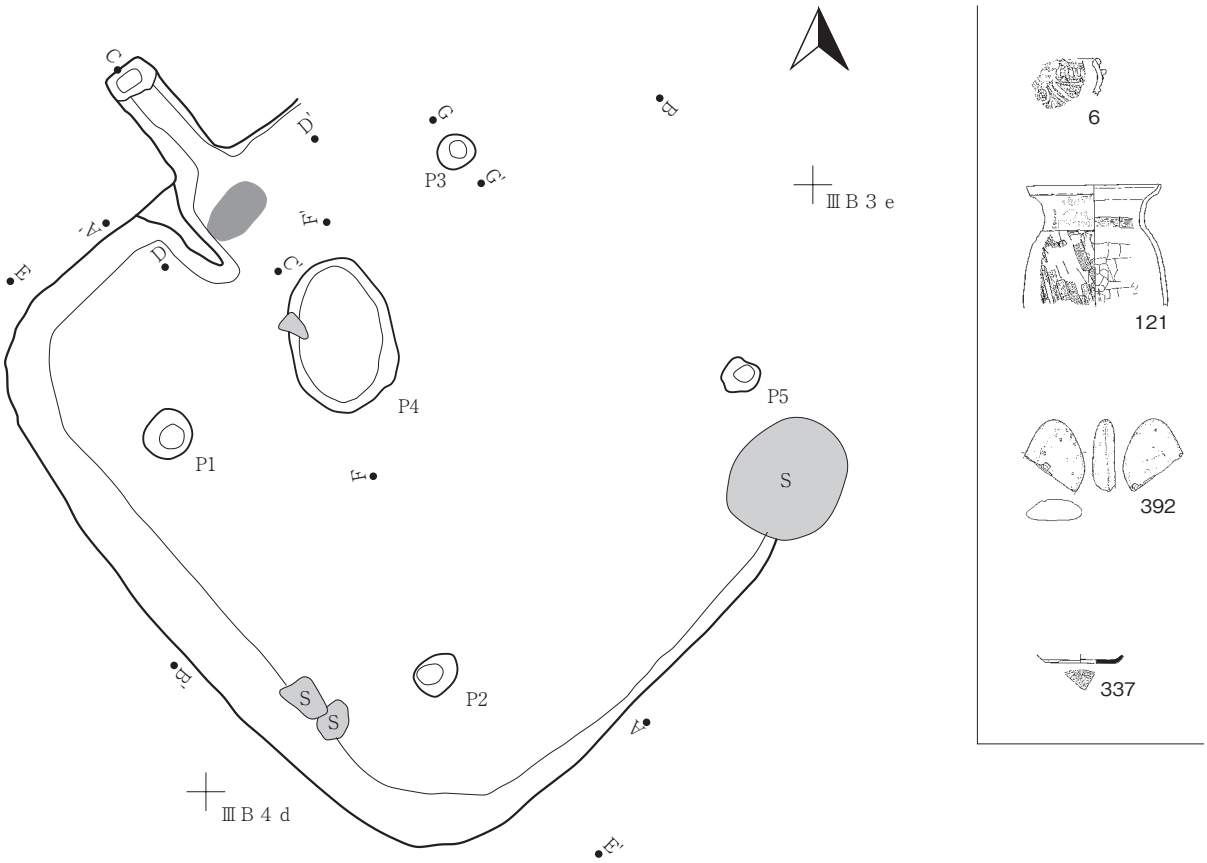
F-F'・G-G'

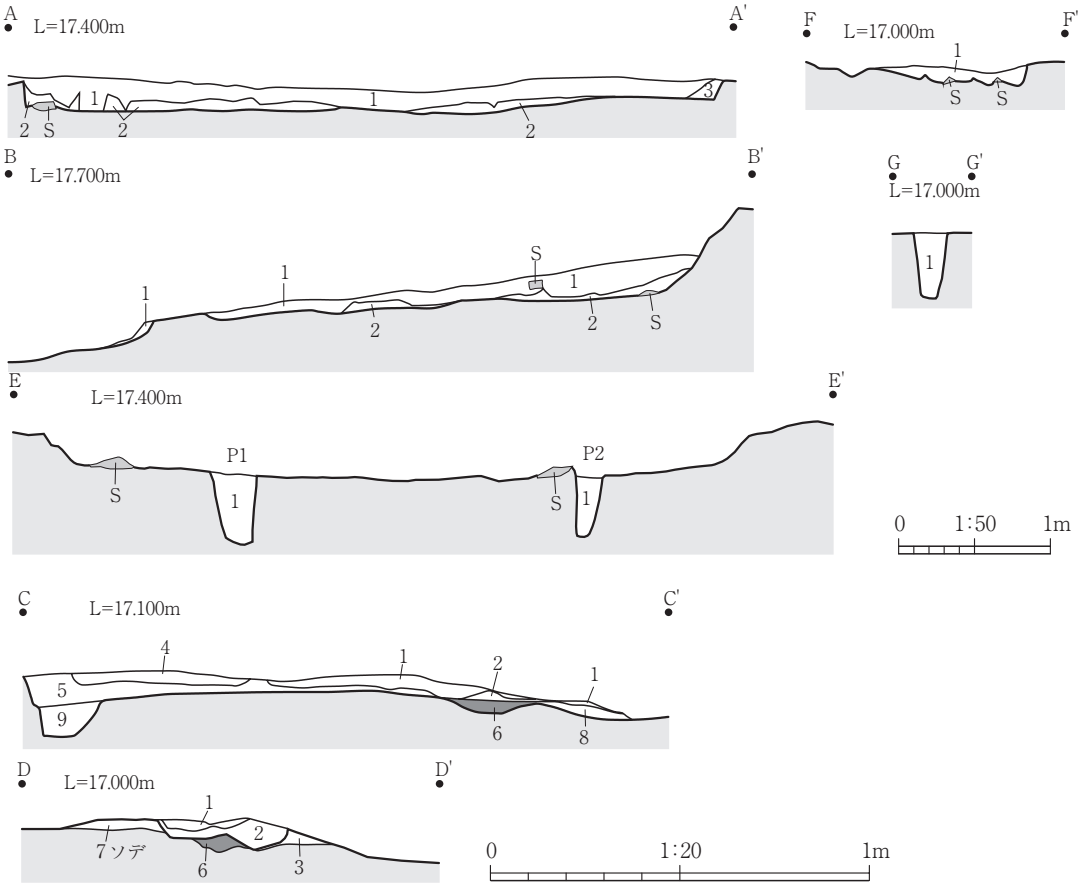
層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色土	2	3	花崗岩粒3%	

＜遺物分布＞カマド内及びカマド周辺に遺物が密集する。
＜遺物＞縄文土器402.9g、土師器5829.4g、石器1584.4g、土製品34.3g、鉄製品3.32gが出土している。
【土師器】115は外傾有段坏で、外面ケズリ調整である。116は小型の片口で、外面指ナデ調整である。内面にコゲが付着する。117～120は甕で、すべての口縁形状が受口状である。外面ハケ調整が主体であるが、117の外面はミガキ調整、120は外面ハケ調整後に胴上部をヘラナデ、胴央部をミガキ調整される。117と120はカマド内出土資料で、支脚転用土器である。
【石器】石器はすべて堆積土から出土している。355は不定形石器、367は敲磨器、373は磨石、383・386は砥石である。373の裏面には黒色付着物がある。
【土製品】399は紡錘車である。
【鉄製品】419は刀子の柄部である。両端を欠損する。
＜時期＞遺構の特徴と、出土遺物の年代から、７世紀末～８世紀前半と考えられる。

10号竪穴建物跡（第19図、写真図版13・43・49・69・72）
＜検出状況＞谷状地形範囲のうち斜面から谷部への傾斜変換ライン付近で、方形の黒褐色プランを検出した。
＜規模・形状＞平面形は方形と推定される。北西壁の一部と北東壁が不明であるが、竪穴建物の４隅のうち、２隅を検出した。１辺の長さから９・21・25号建穴建物跡と同じく中型竪穴建物である。主柱穴４個とカマド、カマドの手前に土坑がある。
＜堆積土＞黒褐色土主体である。Ⅳ層に由来する黄褐色土や風化花崗岩粒が混入する。建物堆積土第１層が厚い。斜面部上方からの流入土と考えられる。巨礫が流入して北東壁隅を破壊している。
＜構成要素・付属施設＞カマド１基、柱穴４個、土坑１基を検出した。カマドは残存状態が不良で、南側の袖部がわずかに残存していた。
＜遺物分布＞カマド燃焼部手前から121の土師器甕が出土している。
＜遺物＞縄文土器692.3g、土師器1570.4g、須恵器8.8g、石器240.7gが出土している。
【縄文土器】６は堆積土出土の大木７b式である。
【土師器】121は頸部が長く、屈曲も明瞭である。口縁部はハケ調整後にヨコナデ調整されている。
【須恵器】337は堆積土出土の坏で、底部の切り離し技術は回転ケズリである。
【石器】392は堆積土出土の方割石と考えられる分割礫である。磨面は確認できない。
＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、８世紀前半と考えられる。

11号竪穴建物跡（第20図、写真図版14・49）
＜検出状況＞谷状地形範囲のうち標高の高い西側で、カマド構築材と方形の黒褐色～暗褐色プランを検出した。
＜規模・形状＞南東壁の一部が不明だが、平面形は方形である。１辺の長さから中型竪穴建物であるが、中型の中でも床面積は33・34号竪穴建物跡等の小型竪穴建物に近い。柱穴５個とカマドがある。
＜堆積土＞黒褐色土主体である。Ⅳ層に由来する黄褐色土や風化花崗岩粒が混入する。また、根によるカクランの影響がある。
＜構成要素・付属施設＞カマド１基、柱穴５個を検出した。カマドは残存状態が良好で、芯材に礫を使用している。主柱穴は配置からＰ１・３・５と考えられる。
＜遺物分布＞カマド右手前に123の土師器壺が出土している。口縁をわずかに欠損するが、土圧によ





第19図　10号竪穴建物跡

第21表　10号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45789.770	ⅢＢ３ｃ	Z＝16.820	不明	方形
	Y＝ 94493.406				
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	4.65	3.10	70.60	A：14.456　B：17.628	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	0.84×0.33	不明	無	不明	
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-39.47°-N	北西壁	

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.33×0.30	48.00	円形	
P2	0.31×0.24	40.00	楕円形	
P3	0.26×0.22	57.80	円形	
P4	1.02×0.69	16.00	楕円形	
P5	0.27×0.24	32.20		

第22表　10号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2	花崗岩粒3%	
2	10YR4/3にぶい黄褐色土	2	3	黄褐色土5%	
3	10YR3/2黒褐色土	2	2		

C-C'・D-D'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	4	黄褐色粘土5% 焼土粒1%	
2	10YR2/2黒褐色土	2	2	焼土粒5%	
3	10YR3/3暗褐色土	2	5	黄褐色土ブロックφ1cm3%	袖部の残存か？
4	10YR3/1黒褐色土	2	2		
5	10YR3/2黒褐色土	2	2	根少量	
6	5YR5/6明赤褐色土	2	4		焼土
7	10YR6/6明黄褐色土	2	5	黒褐色土3%	袖部
8	10YR3/3暗褐色土	2	2	焼土1%	
9	10YR3/3暗褐色土	2	2		

E-E'・G-G'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色土	2	2		

F-F'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2		

る器面のひび割れもない。

＜遺物＞縄文土器198.9g、土師器2124.3g、石器35.8gが出土している。

【土師器】122は床面出土の坏で外底部をケズリ調整、口縁をミガキ調整しているが摩耗が著しい。内面有段で黒色処理されている。123は外面を丁寧にミガキ調整された壺で、口縁をわずかに欠損するが土圧による破損がない。箱に納められていた可能性も考えられる。頸部が長く、胴部が球形である。須恵器広口長頸壺を模倣した器形と考えられる。124は堆積土出土の口縁が直線的に広がる小型甕である。

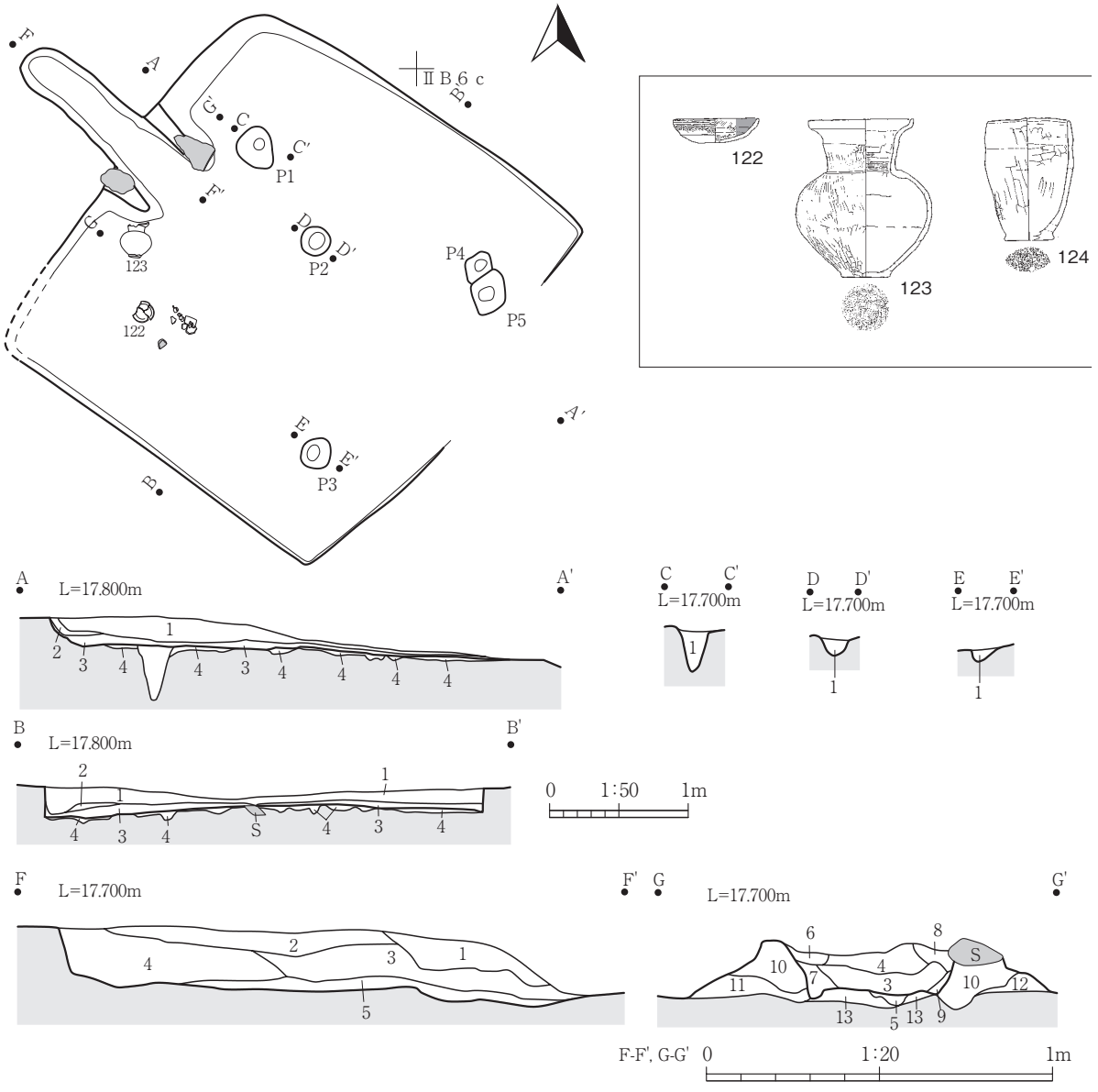
＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、7世紀後半～８世紀前半と考えられる。

第23表　11号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45761.535	ⅡＢ６ｂ	Z＝17.340	A	方形
	Y＝ 94487.039				
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	3.18	3.09	26.20	A：8.803　B：	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	1.0×0.33	0.6×0.82	礫	不明	
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-48.59°-N	北西壁	

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.32×0.27	31.80	円形	
P2	0.22×0.20	11.60	楕円形	
P3	0.24×0.22	29.80	楕円形	
P4			方形	
P5	0.26×0.18	26.80		



第20図　11号竪穴建物跡

第24表　11号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2	焼土粒1%	
2	10YR3/3暗褐色土	2	2	風化花崗岩粒3%	
3	10YR3/4暗褐色土	2	3	炭化物粒1%	
4	10YR5/4にぶい黄褐色土	2	5	黒褐色土10%	貼床

C-C'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色土	2	2		

D-D'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/2黒褐色土	2	2		

E-E'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/2黒褐色土	2	2		

F-F'・G-G'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/2黒褐色土	2	2	黄褐色粘土5% 焼土3%	
2	10YR3/1黒褐色土	2	4		煙道覆土
3	10YR2/2黒褐色土	2	2	焼土1%	
4	10YR3/2黒褐色土	2	2	黄褐色粘土3%	
5	10YR3/3暗褐色土	2	2	焼土1%	
6	10YR3/2黒褐色土	2	2	焼土3%	抜取痕
7	10YR2/2黒褐色土	2	2	焼土1%	抜取痕
8	10YR6/6明黄褐色粘土	4	5	焼土1%	カマド崩落土
9	10YR3/3暗褐色土	2	4		
10	10YR3/1黒褐色土	2	4		
11	10YR3/2黒褐色土	2	4		
12	10YR5/6黄褐色粘土	5	5	焼土1%	
13	10YR2/2黒褐色土	2	5		

12号竪穴建物跡（第21図、写真図版15・43・50）

＜検出状況＞調査区北側を流れる沢に隣接する平坦面上で方形の黒褐色～暗褐色プランを検出した。

＜規模・形状＞平面形は方形でカマドが北東壁に設置されている。

＜堆積土＞黒褐色土主体である。Ⅳ層に由来する黄褐色土が混入する。根カクランの影響がある。

＜構成要素・付属施設＞カマド１基を検出した。カマドは残存状態が不良で芯材等は未確認である。煙道部は刳貫式である。

＜遺物分布＞カマド周辺から土師器甕が出土している。

＜遺物＞縄文土器372.6g、土師器667.6g、鉄製品10.2g、石器21.2gが出土している。

【縄文土器】7は堆積土出土で胎土に繊維を微量含む早期末～前期初頭の土器である。

【土師器】125・126は甕で口縁部の短い、くの字に屈曲するタイプである。

＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、９世紀～10世紀前半と考えられる。

第25表　12号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45754.324 Y＝ 94491.109	ⅡＢ４ｃ	Z＝17.410	A	方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡） A：残存値、B：推定値	
	3.36	3.21	49.50	A：9.437　B：	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	1.42×0.33	0.81×1.30	無	不明	
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-38.55°-N	北東壁	

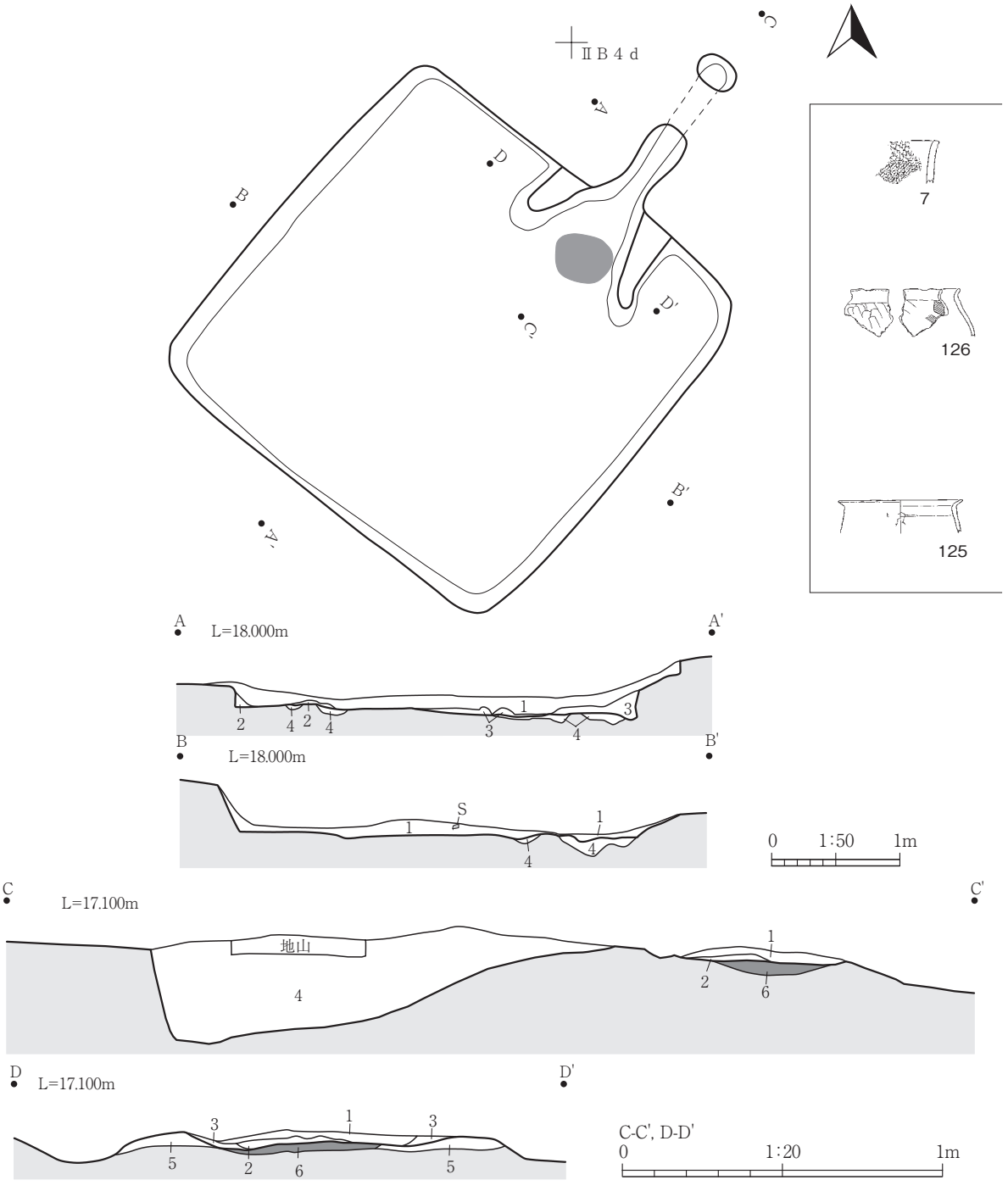
第26表　12号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色シルト	2	2	根カクラン多 炭化物粒1%	
2	10YR2/3黒褐色シルト	2	2	黄褐色シルト粒3%	
3	10YR3/3暗褐色シルト	2	2		
4	10YR4/4褐色土	2	5		貼床

C-C'・D-D'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	7.5YR4/3褐色土	0	2	焼土粒10% 炭化物粒5%	
2	5YR4/3にぶい赤褐色土	0	2	炭化物粒1%	
3	10YR3/4暗褐色土	2	3	焼土粒1%	
4	10YR3/2黒褐色土	2	2	炭化物粒1%	
5	10YR4/4褐色土	4	4	炭化物粒1%	袖部
6	5YR4/6赤褐色土	2	4	炭化物粒3%	焼土

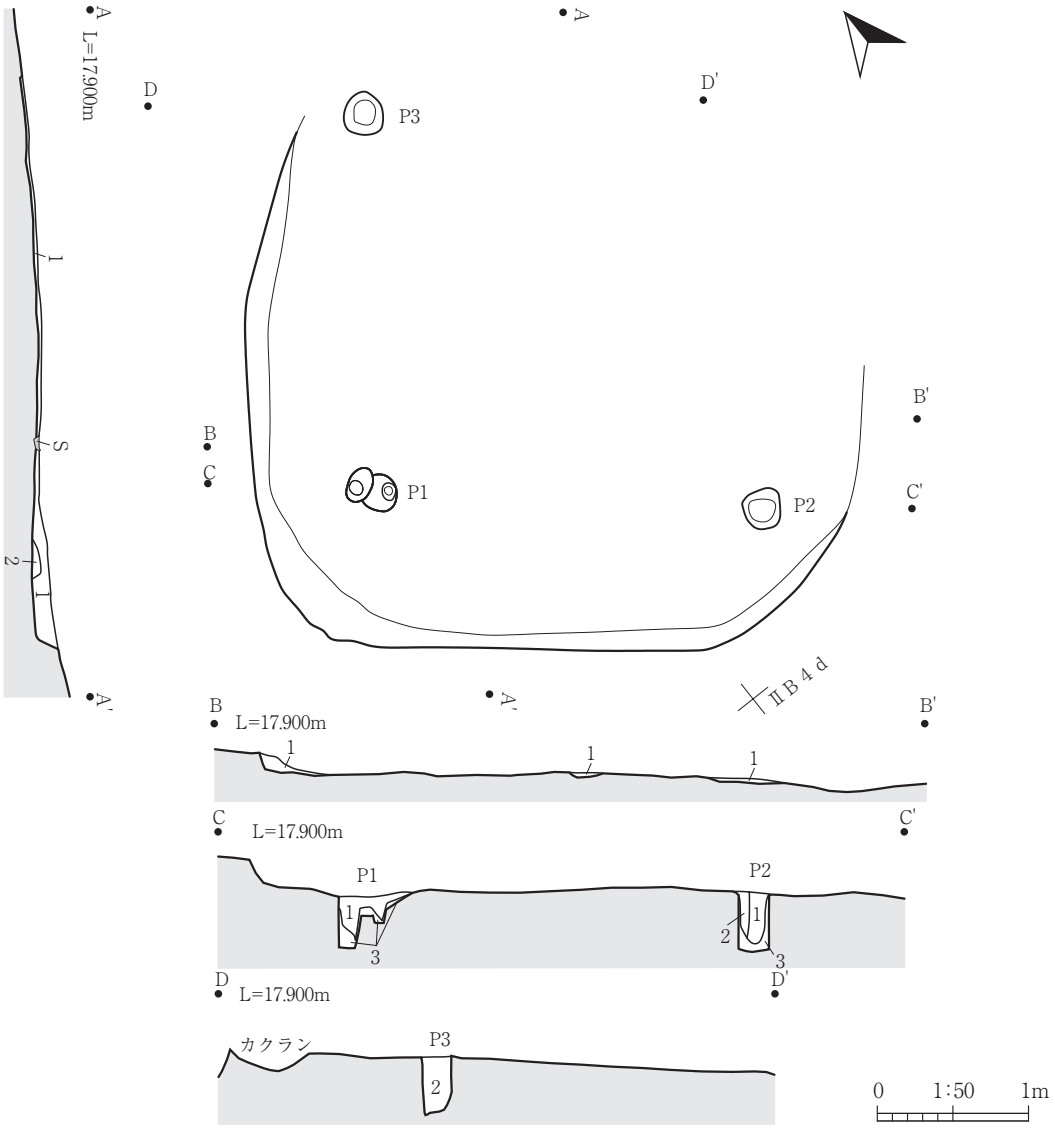


第21図　12号竪穴建物跡

13号竪穴建物跡（第22図、写真図版16）
＜検出状況＞調査区北側を流れる沢に隣接する平坦面上で方形の黒褐色プランを検出した。
＜規模・形状＞平面形は方形で、柱穴３個を検出した。北東壁と南東壁が消失している。
＜堆積土＞黒褐色が壁際にわずかに残存する。根カクランにより床面が乱れている。
＜構成要素・付属施設＞柱穴３を検出した。
＜重複関係＞視認可能な重複関係はない。周堤帯が建物壁から外側に１ｍ程度幅を持っていたと仮定すれば、12号竪穴建物跡と重複関係があると考えられる。
＜遺物＞なし。
＜時期＞遺構の特徴から、古代と考えられる。

14号竪穴建物跡（第23図、写真図版17・50）
＜検出状況＞調査区南東隅の緩斜面上で、カマド構築材と方形の黒褐色プランを検出した。北側に沢跡が隣接する。
＜規模・形状＞北東壁が消失しているが、平面形は方形と考えられる。１辺の長さから中型竪穴建物である。柱穴４個とカマドがある。
＜堆積土＞黒褐色土主体である。Ⅳ層に由来する黄褐色土や風化花崗岩粒が混入する。硬質面は明瞭で、建物中央部に分布する。堆積土のうち第２層は斜面上方からの流入である。
＜構成要素・付属施設＞壁溝、カマド１基、主柱穴４個を検出した。カマドは燃焼部の残存状態が良好であったが、煙道部はカクランを被る。燃焼部は芯材に礫を使用している。主柱穴は４個とも柱痕跡がある。
＜遺物分布＞カマド付近に密集する。
＜遺物＞縄文土器2.33g、土師器3590.7gが出土している。
【土師器】128～130は堆積土出土の坏、131は床面出土の椀、132は堆積土出土の壺、133はカマド内出土の甕、134～138は堆積土出土の甕である。甕は外面ハケ→ミガキ調整資料が主体である。129は平底風丸底で外底面ハケ調整である。130は口縁外傾で、内面に屈曲部をもつ。131は椀で、ケズリ→ミガキ調整である。133はカマド内出土で、破片の一部は貼床土から出土している。138は口縁部最大径と胴部最大径が近似値の中型甕である。
＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

15号竪穴建物（第24図、写真図版18・51）
＜検出状況＞中央尾根部東側のⅣ層面上で検出した。方形の黒褐色プランを検出した。
＜規模・形状＞北東壁と南東壁が消失している。また、南西壁の一部は根カクランにより消失している。１辺の長さから中型竪穴建物である。柱穴４個とカマドがある。
＜堆積土＞黒褐色土主体である。Ⅳ層に由来する黄褐色土や風化花崗岩粒が混入する。
＜構成要素・付属施設＞カマド１基、柱穴４個を検出した。カマドは残存状態が不良で、右袖部が消失している。右袖部下位には抜取痕がみられた。支脚には礫を使用している。主柱穴は配置からＰ１～３で、Ｐ４は形状から近現代等の別時期の可能性がある。
＜遺物＞土師器446.8gが出土している。
【土師器】127は堆積土出土の鉢である。なお、本書では口径20㎝前後以上の坏形を鉢に分類している。内外面ミガキ調整である。



第22図　13号竪穴建物跡

第27表　13号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝−45749.484 Y＝ 94492.422	ⅡB３c	Z＝17.550	不明	方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	4.08	3.45	24.70	A：11.044　B：14.969	

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.34×0.25	35.30	楕円形	
P2	0.28×0.26	38.60	方形	○
P3	0.29×0.25	49.40	方形	

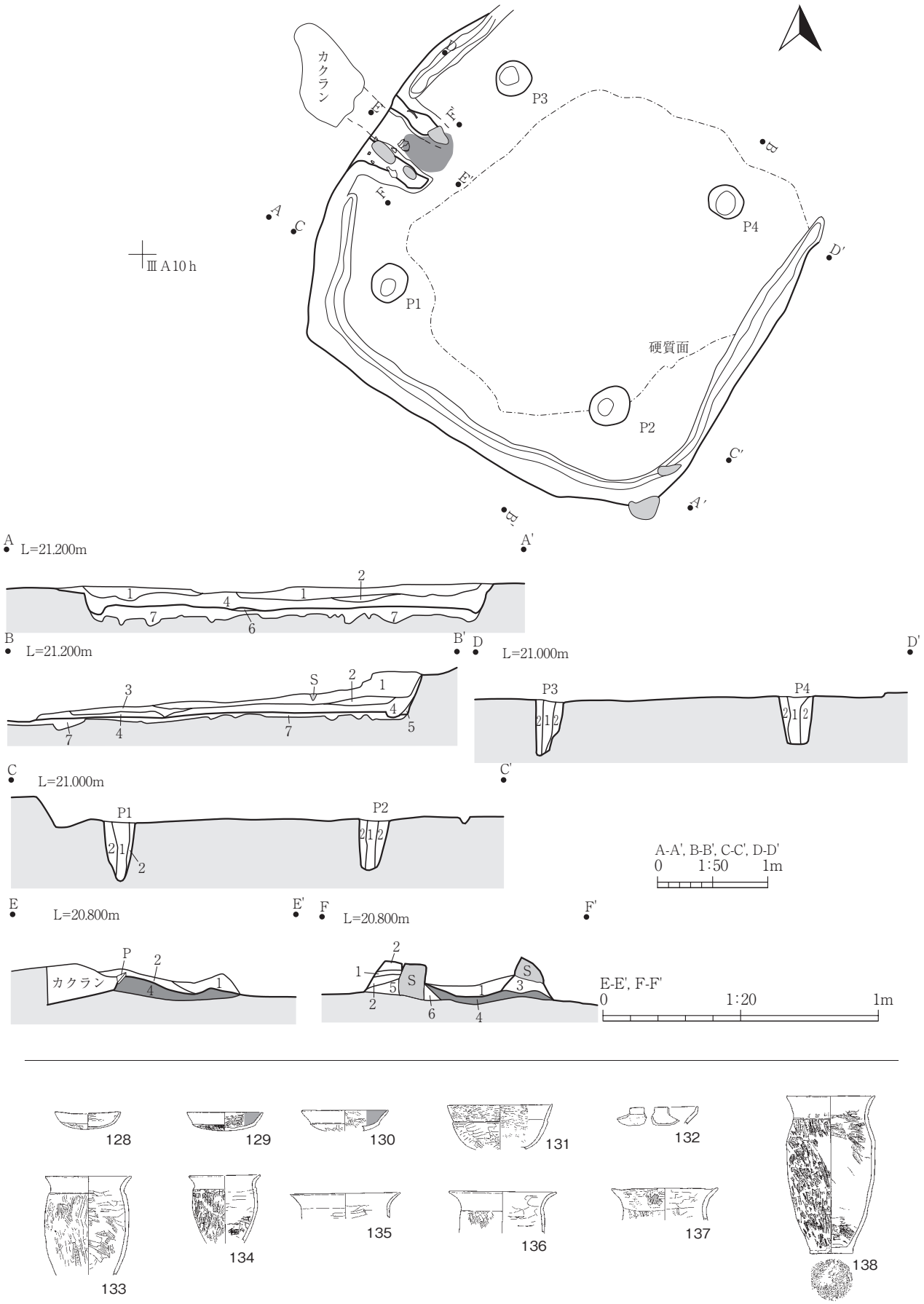
第28表　13号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色土	2	2	黒色土5% 根カクラン多	
2	10YR4/6褐色土	3	2	ブロック状に堆積	

C-C'・D-D'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2		柱痕跡
2	10YR3/3暗褐色土	2	2		
3	10YR3/4暗褐色土	2	2		貼床堆積土



第23図　14号竪穴建物跡

第29表　14号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝−45815.875 Y＝ 94471.852	Ⅲ A 9h	Z＝20.670	A	方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡） A：残存値、B：推定値	
	4.00	3.59	38.80	A：12.657　B：13.310	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド		0.70×0.80	礫	不明	
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
			W-54.61°-N	北西壁	

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.35×0.31	55.00	楕円形	○
P2	0.40×0.35	47.80	方形	○
P3	0.33×0.31	49.80	方形	○
P4	0.32×0.31	47.40	楕円形	○

第30表　14号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/2黒褐色土	2	2	焼土粒3% 炭化物粒3%	投げ込み焼土か
2	10YR5/4にぶい黄褐色土	2	2		
3	10YR4/4褐色土	2	2	風化花崗岩粒3%	
4	10YR2/3黒褐色土	2	2	炭化物粒1%	
5	10YR6/6明黄褐色土	2	3		壁崩落土
6	10YR3/3暗褐色土	2	5		貼床か
7	10YR3/2黒褐色土	2	5		貼床

C-C'・D-D'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/3黒褐色土	2	2		
2	10YR3/3暗褐色土	2	4	黄褐色土10%	貼床

E-E'・F-F'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/2黒褐色土	2	2	焼土粒3%	掛口堆積土
2	10YR6/6明黄褐色土	2	5	黒褐色土5% 焼土粒2%	天井崩落土
3	10YR3/1黒褐色土	2	2	焼土粒1%	
4	10YR3/3暗褐色土	2	2	焼土粒30%	
5	10YR3/2黒褐色土	2	2		
6	10YR4/4褐色土	2	2		

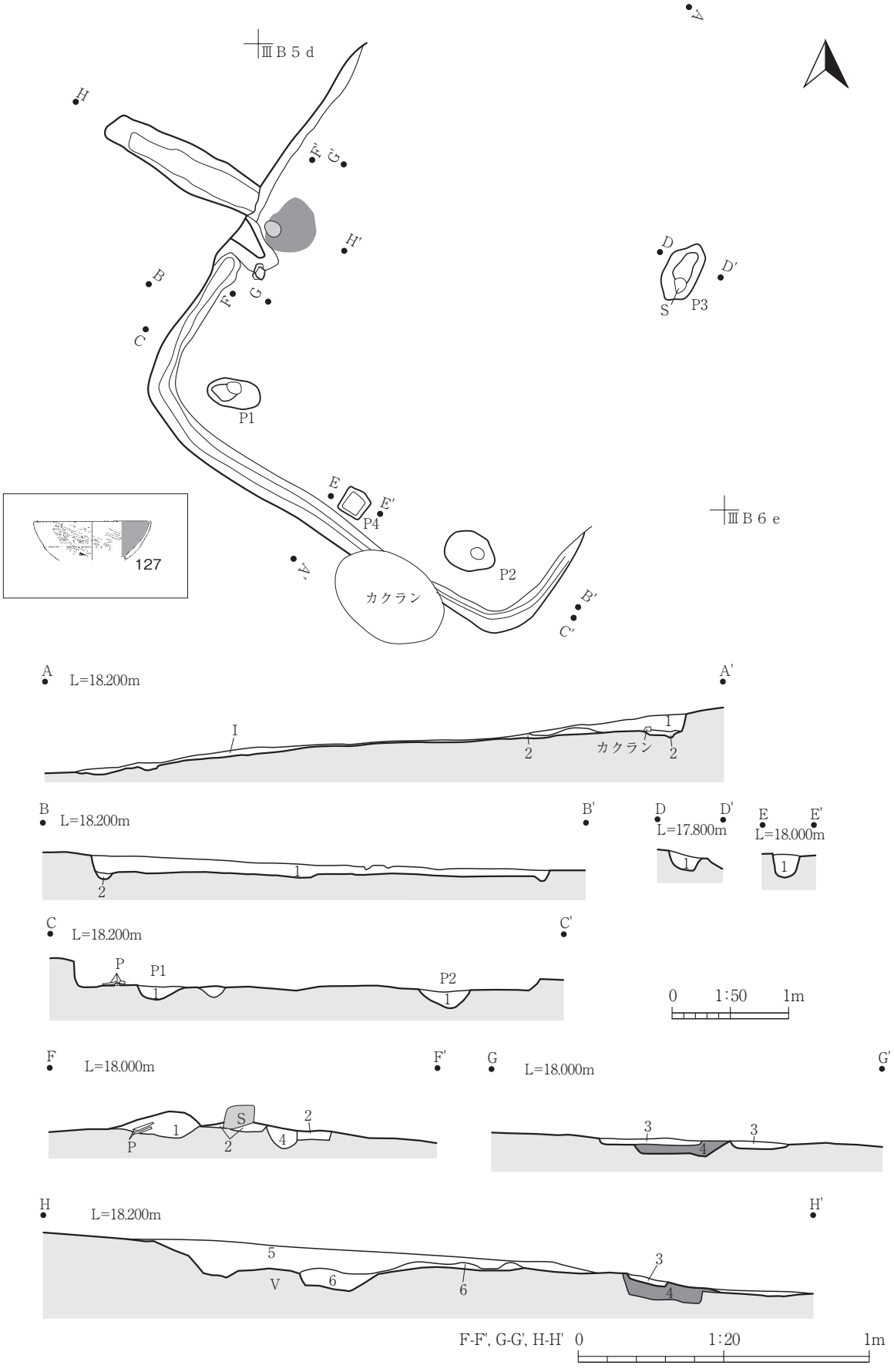
第31表　15号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝−45798.352 Y＝ 94493.820	Ⅲ B 5 d	Z＝17.650	A	方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡） A：残存値、B：推定値	
	3.92	3.81	52.10	A：13.884　B：15.133	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	1.43×0.38	不明	礫		
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-62.00°-N	北西壁	

壁溝	最大幅（m）	床面からの深（cm）
	0.1	7.80

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.47×0.25	12.00	楕円形	
P2	0.44×0.33	16.40	円形	
P3	0.55×0.29	24.20	不整形	
P4	0.23×0.23	15.80	方形	



第24図　15号竪穴建物跡

第32表　15号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/2黒褐色土	2	2		
2	10YR5/3にぶい黄褐色土	2	3		

C-C'・D-D'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/3暗褐色土	2	2		

E-E'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色土	2	2		

F-F'・G-G'・H-H'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR5/4にぶい黄褐色土	2	5	黒褐色土5%	袖部
2	10YR3/2黒褐色土	2	2		芯材礫抜取痕
3	10YR3/4暗褐色土	2	2		
4	5YR4/8赤褐色土	2	5	炭化物粒1%	
5	10YR3/4暗褐色土	2	3		
6	10YR2/2黒褐色土	2	3		

＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、7世紀後半～８世紀前半と考えられる。

16号竪穴建物跡（第25～27図、写真図版19・20・43・51～53・71～75）

＜検出状況＞谷状地形範囲のうち標高の高い西側で、カマド構築材と方形の黒褐色～褐色プランを検出した。検出時は、２～３棟の建物の重複を想定して、数か所のベルトを設定した。検出面上で、カマド構築粘土と考えられる黄褐色粘土がカマド位置から建物中央に向かって帯状に分布していた。カマド構築材の流出痕跡と考えられる。

＜規模・形状＞北西隅が３号土坑と重複する。本遺構は、本遺跡内竪穴建物のうち推定床面積が最大である。硬質面が床面中央に分布し、主柱穴５個に仕切り溝が付属する。なお、仕切溝は転ばし根太痕跡の可能性も指摘されている付属施設である。硬質面上が土間空間、根太痕跡の可能性もある仕切溝のある壁際の空間が板間空間の可能性が考えられる。

＜堆積土＞黒褐色土主体である。Ⅳ層に由来する黄褐色土や風化花崗岩粒、砂粒が混入する。堆積土から３号土坑が新しく、本遺構が古い。前述のごとく、カマド方向から建物中央に向かってカマド粘土材が流入している。これら粘土材は検出面上で視認したことから、建物廃絶後もカマドは一定期間崩れず、埋没が堆積土上部に及んでから崩壊したと考えられる。また、北東隅の堆積土上部～中部にかけて貝層が形成されている。

＜構成要素・付属施設＞カマド１基、柱穴７個を検出した。カマドは残存状態が良好で、芯材に礫、支脚に甕を横位に２個配置している。煙道部は掘込式である。主柱穴は配置からＰ１～５で転ばし根太痕の可能性のある溝が付設される。

＜重複関係＞３号土坑と重複し、これに切られる。また、周堤帯が建物壁から外側に１ｍ程度幅を持っていたと仮定すれば、11号竪穴建物跡と重複関係があると考えられる。

＜遺物分布＞堆積土中からは、縄文土器と土師器が建物中央に多く出土した。北東隅に貝層が形成され、マガキ主体である。南東ではコハク塊が出土した。床面ではカマド付近と、中央部に遺物が分布する。

＜遺物＞縄文・弥生土器1234.6g、土師器12302.8g、石器4722.8g、土製品94.4g、鉄製品4.4g、貝類458.9gが出土している。

【縄文・弥生土器】8・9は堆積土出土の弥生土器で対向刺突文等の後期赤穴式の特徴を有する。10は貼床堆積土出土の繊維微量混入する早期末～前期初頭の土器である。

【土師器】139～153・155～157が坏、160・163が高坏、154・159が鉢、158がミニチュア、161.162が壺、164～170が甕である。坏類の出現頻度の高い遺構である。坏のうち、堆積土出土が139～141・146～148・150・152・153・156・157である。床面出土が142～144、カマド内が145・151である。外面底部ハケ調整が主体であるが、外面底部ミガキ調整も増加している。160・163は堆積土出土の高坏で、160は内面に稜をもつ。163は脚部に透し孔が４個ある。口径10㎝前後の小型坏は丸底だが、151～156などの中型～大型は平底風が主体である。157の坏は堆積土上部出土の内外面黒色処理の坏である。床面及びカマド内出土土師器坏は丸底で外面の段が明瞭であるが、堆積出土の155・156は平底風で、157は内外面黒色処理で、やや後出の特徴を有する。16号竪穴建物廃絶後は、貝類が堆積土上部に廃棄されることから、別建物で使用された土師器類についても本遺構に廃棄された可能性がある。162は胴部最大径が上部にある。167～170はカマド内出土の甕で内外面ハケ調整である。

【石器】378は堆積土出土の磨石、381・382は床面出土の磨石で381は磨面に黒色付着物がある。385は床面出土の砥石である。387・390は堆積土出土の敲石である。

【土製品】400は堆積土出土の紡錘車である。

【鉄製品】427は堆積土出土の環状鉄製品で留金具等と推定される。

【貝類】堆積土上部から出土した。マガキ・クボガイが主体である。

＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、７世紀末～８世紀前半と考えられる。

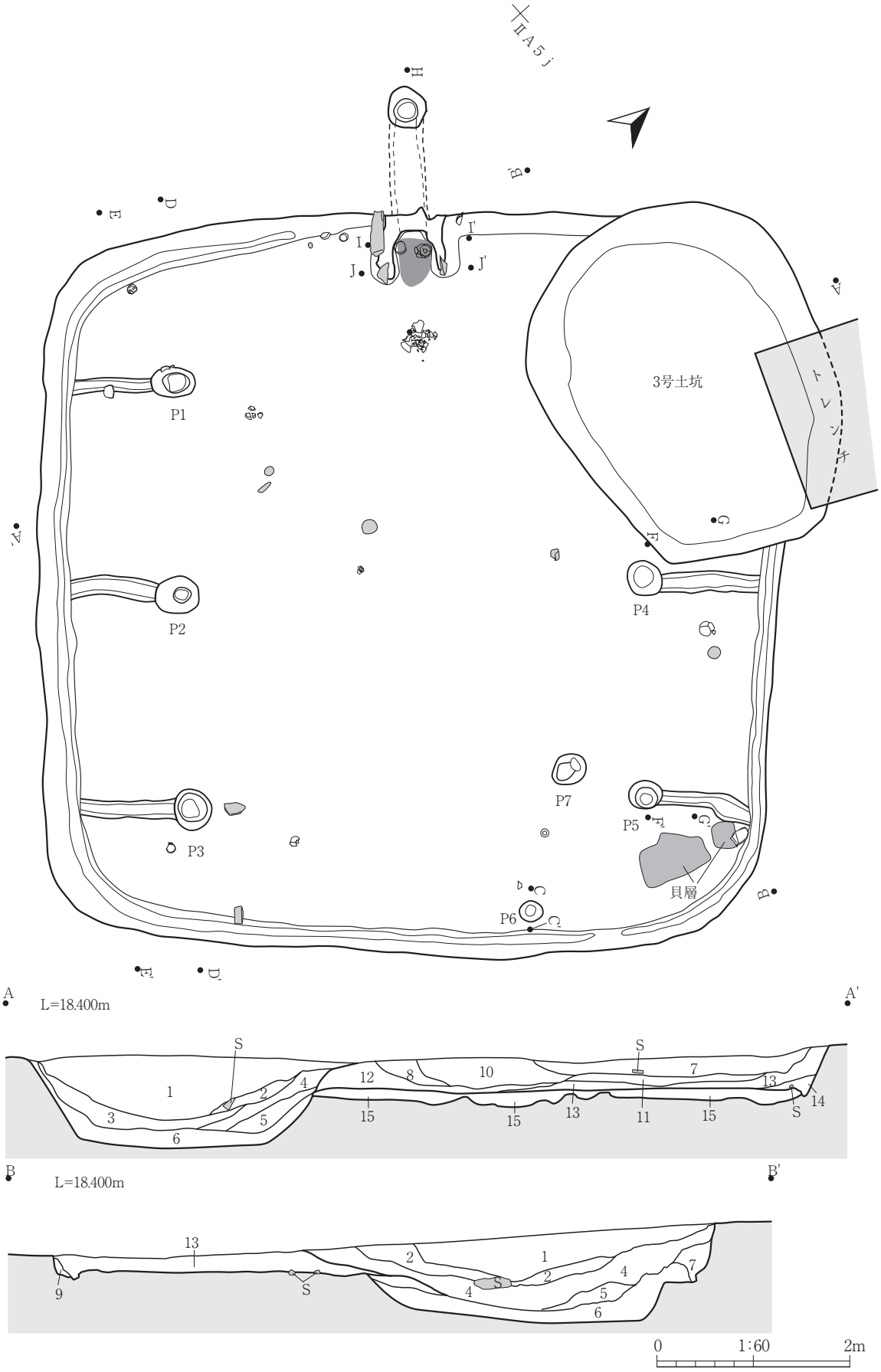
第33表　16号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45760.836	ⅡA5 j	Z＝17.390	A	方形
	Y＝ 94479.883				
	長（m）	幅（m）	深（㎝）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	7.78	7.66	102.50	A：47.752　B：	

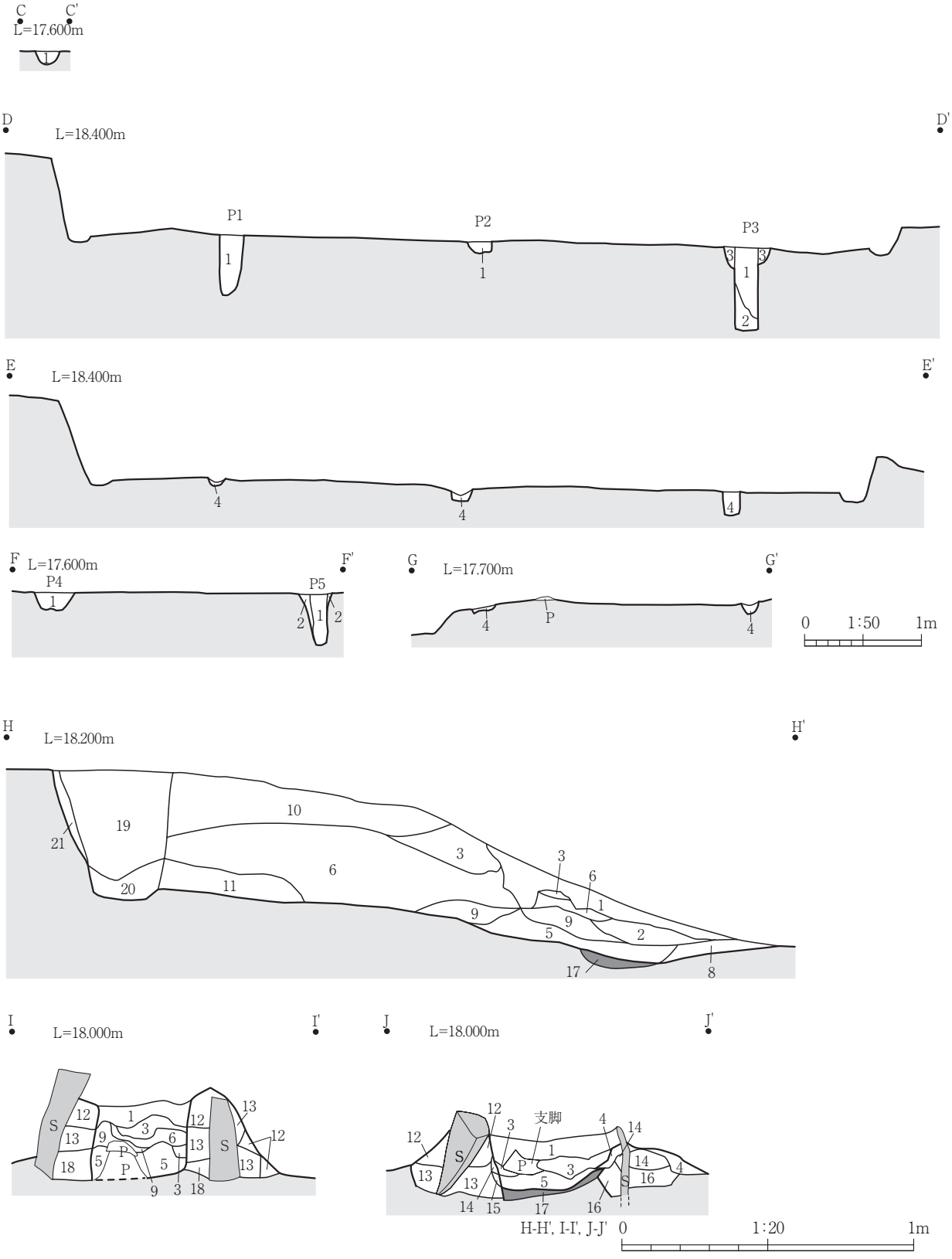
	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	1.33×0.39	0.71×0.93	礫	横位2個	甕
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-50.13°-N	北西壁	

壁溝	最大幅（m）	床面からの深（㎝）
	0.15	31.20

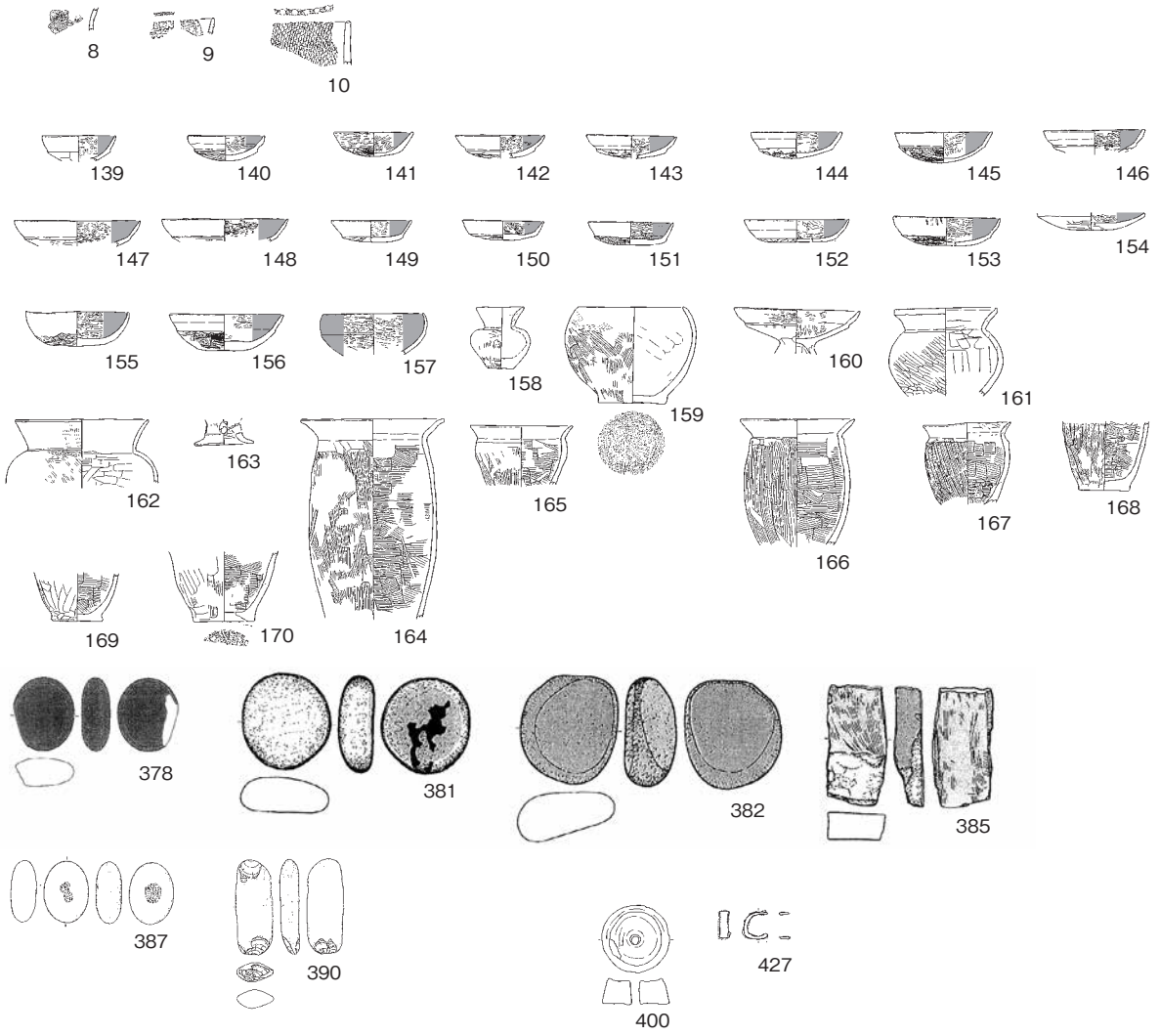
	規模（m）	深（㎝）	底面形状	柱痕跡
P1	0.45×0.31	52.60	不整形	
P2	0.45×0.39	19.00	方形	
P3	0.43×0.39	72.20	不整形	○
P4	0.40×0.35	16.60	円形	
P5	0.34×0.29	45.80	円形	○
P6	0.25×0.22	22.40	楕円形	
P7	0.38×0.32	18.40		



第25図　16号竪穴建物跡（1）



第26図　16号竪穴建物跡（2）



第27図　16号竪穴建物跡（３）

第34表　16号竪穴建物跡土層観察表（１）

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/2黒褐色土	2	2	砂粒5%、φ1cm礫3%	3号土坑
2	10YR2/2黒褐色土	2	2	砂粒1%	3号土坑
3	10YR3/1黒褐色土	2	2		3号土坑
4	10YR3/1黒褐色土	2	2	砂粒1%	3号土坑
5	10YR3/3暗褐色土	2	2	砂粒3%、黄褐色土5%	3号土坑
6	10YR4/4褐色土	2	2	黄褐色土5%	3号土坑
7	10YR3/3暗褐色土	2	2		3号土坑
8	10YR3/1黒褐色土	2	2	砂粒3%	16号竪穴
9	10YR2/2黒褐色土	2	2	砂粒1%	16号竪穴
10	10YR4/4褐色土	2	2	黄褐色土5%	カマド崩落土、16号竪穴
11	10YR2/2黒褐色土	2	2		16号竪穴
12	10YR3/2黒褐色土	2	2		16号竪穴
13	10YR2/3黒褐色土	2	2		16号竪穴
14	10YR3/3暗褐色土	2	2		16号竪穴
15	10YR3/1黒褐色土	2	5		16号竪穴　貼床

C-C'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2		柱痕跡

第34表　16号竪穴建物跡土層観察表（2）

D-D'・E-E'・F-F'・G-G'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/2黒褐色土	2	2		柱痕跡
2	10YR3/3暗褐色土	2	2		柱痕跡
3	10YR3/1黒褐色土	2	4		
4	10YR3/3暗褐色土	2	2		

H-H'・I-I'・J-J'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/2黒褐色土	2	2		
2	10YR2/2黒褐色土	2	2		
3	10YR5/4にぶい黄褐色粘土	5	4		崩落土
4	10YR2/2黒褐色土	2	3	焼土1%	
5	5YR3/4暗赤褐色土	2	2	炭化物粒1%	
6	10YR3/1黒褐色土	2	2		
7	10YR5/4にぶい黄褐色土	5	5	焼土1%	
8	10YR3/2黒褐色土	2	2		崩落土
9	10YR5/4にぶい黄褐色粘土	5	4		崩落土
10	10YR2/3黒褐色土	2	3		
11	10YR5/4にぶい黄褐色粘土	5	4		9に類似
12	10YR3/2黒褐色土	2	5		
13	5YR4/4にぶい赤褐色土	2	3		
14	10YR7/6明黄褐色粘土	5	5		カマド構築土
15	5YR4/8赤褐色土	4	4		カマド被熱土
16	10YR3/3暗褐色土	2	4		
17	5YR5/6明赤褐色土	2	5		被熱土
18	10YR3/3暗褐色土	2	4	焼土3%	
19	10YR3/1黒褐色土	2	2		煙出部
20	10YR2/2黒褐色土	2	2		煙出部
21	10YR2/3黒褐色土	2	2		煙出部

17号竪穴建物跡（第28図、写真図版21・54・71・73）

＜検出状況＞谷状地形範囲のうち斜面から谷部への傾斜変換ライン付近で、方形の黒褐色プランを検出した。

＜規模・形状＞平面形は方形と推定される。北東壁の一部が不明であるが、竪穴建物の４隅のうち、３隅を検出した。１辺の長さから21・25号建穴建物跡と同じく中型竪穴建物である。主柱穴３個とカマドがある。

＜掘形＞C類。標高の低い北東側を掘り込む。

＜堆積土＞黒褐色土主体である。Ⅳ層に由来する黄褐色土が混入する。建物堆積土第１層が厚く、２・３層は壁際の三角堆積層である。巨礫が流入し、南西壁の一部を破壊している。

＜構成要素・付属施設＞カマド１基、柱穴３個を検出した。カマド燃焼部内で支脚転用の甕が２個横位で出土した。

＜遺物分布＞カマド内とその周辺に分布する。

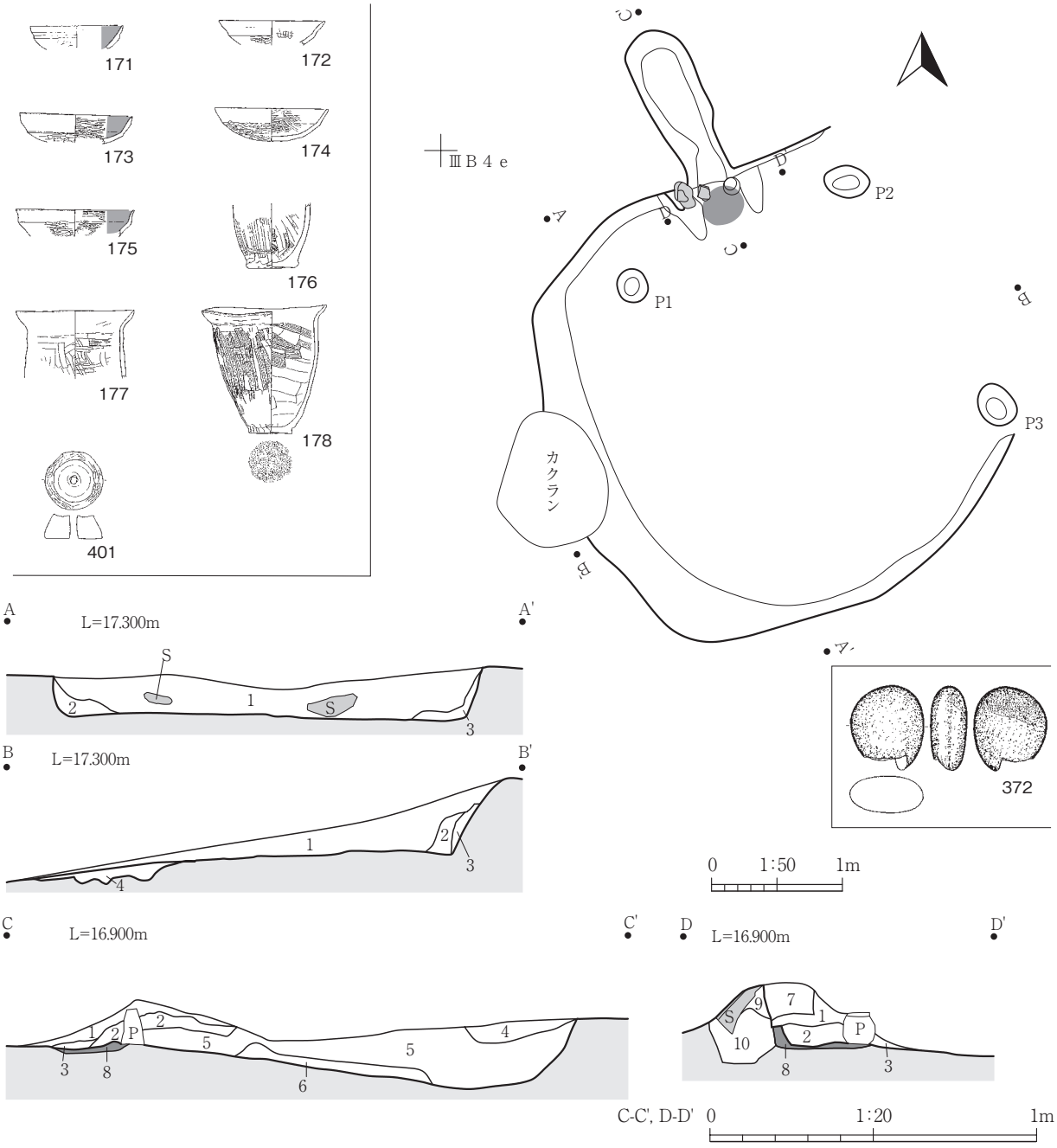
＜遺物＞縄文土器59.2g、土師器2788.3g、石器1148.8g、土製品92.3gが出土している。

【土師器】171～178を図示した。172～174・176～178がカマド内及びカマド内出土破片を含む堆積土中の出土で、他は堆積土出土である。坏はヨコナデされる口縁部よりも底部幅の方が広い資料が主体である。172は外傾有段坏で内面に段をもち外面底部はミガキ調整である。176と178は支脚転用甕で、外面ハケ調整の摩耗が著しい。

【土製品】401は堆積出土の紡錘車でミガキ調整である。

【石器】372は堆積土出土の磨石で磨面上にスス状黒色付着物がある。

＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、７世紀末～８世紀前半と考えられる。



第28図　17号竪穴建物跡

第35表　17号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝−45793.762 Y＝　94498.602	ⅢＢ４ｅ	Z＝16.550	C	方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	3.47	3.08	79.90	A：8.308　B：9.240	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	1.22×0.47	0.43×0.77	礫	1個	甕
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-25.32°-N	北西壁	

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.27×0.23	10.50	楕円形	
P2	0.35×0.25	25.50	楕円形	
P3	0.33×0.26	19.00	楕円形	

第36表　17号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色土	2	2	10YR2/1黒色土10% 炭化物粒1%	
2	10YR2/2黒褐色土	2	2	10YR7/8黄橙色土粒5% 10YR3/4暗褐色土10%	
3	10YR2/1黒色土	2	2	10YR7/8黄橙色土塊30%	
4	10YR5/4にぶい黄褐色土	2	4		貼床部

C-C'・D-D'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/2黒褐色土	2	4	焼土3%	カマド崩落土
2	5YR3/3暗赤褐色土	2	2	炭化物粒1%	
3	10YR2/2黒褐色土	2	4		
4	10YR4/4褐色土	2	2		
5	10YR2/2黒褐色土	2	2		
6	10YR3/3暗褐色土	2	5		Ⅳ層相当
7	10YR7/6明黄褐色粘土	5	5		カマド崩落土
8	5YR4/8赤褐色土	2	4		燃焼部焼土
9	10YR3/3暗褐色土	2	2		抜取痕
10	10YR2/3黒褐色土	2	2		抜取痕

18号竪穴建物跡（第29図、写真図版22・43・70）

＜検出状況＞調査区北東の緩斜面地で、石囲炉の石組みと考えられる配石を検出した。

＜規模・形状＞平面形は円形と推定される。東壁が不明である。柱穴３個と石囲炉がある。

第37表　18号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝−45801.977 Y＝ 94478.766	Ⅲ A 6j	Z＝19.200	不明	円形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡） A：残存値、B：推定値	
			50.60	A：15.076　B：	

壁溝	最大幅（m）	床面からの深（cm）
	0.15	21.20

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.31×0.31	26.20	円形	×
P2	0.20×0.17	32.80	円形	×
P3	0.53×0.49	24.80	方形	×

第38表　18号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/2黒褐色土	2	2	花崗岩粒1%	
2	10YR3/3暗褐色土	2	2		
3	10YR3/1黒褐色土	2	2		

C-C'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2		

D-D'・E-E'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色土	2	2		

F-F'・G-G'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	5YR3/6暗赤褐色土	2	4	炭化物粒1%	
2	10YR4/4褐色土	2	3		
3	10YR2/3黒褐色土	2	4		Ⅳ層？
4	10YR3/4暗褐色土	2	2		抜取痕

＜堆積土＞黒褐色土と暗褐色土である。Ⅳ層に由来する花崗岩粒が微量混入する。堆積土の色調はⅡ層に類似する。根カクランが多い範囲であった。

＜構成要素・付属施設＞石囲炉１基、柱穴３個を検出した。石囲炉は偏平で細長い大礫を組み合わせており、短軸南側の礫は拭き取られていた。柱穴はどれも浅い。

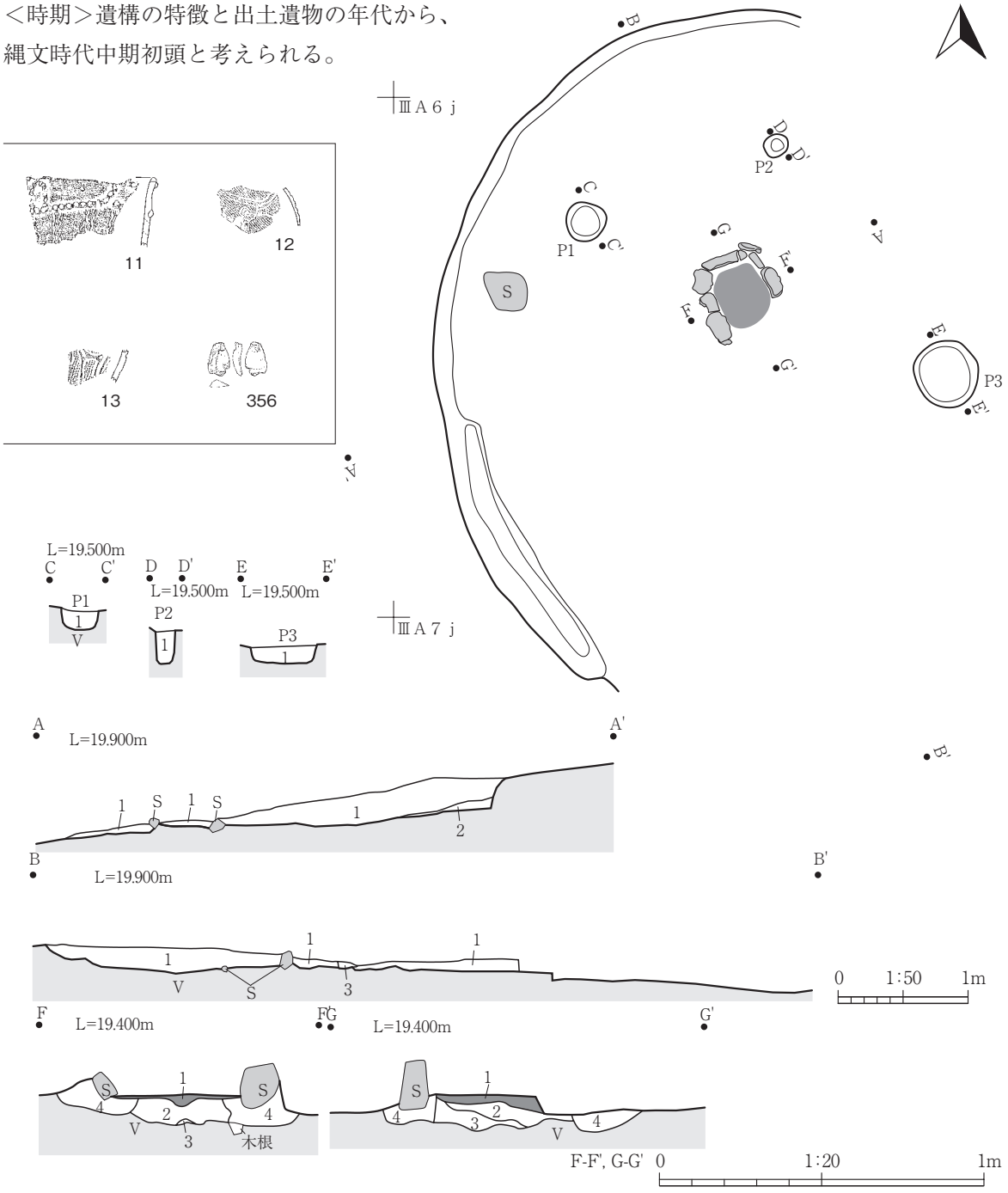
＜遺物分布＞建物範囲では土器や剥片が散漫に分布していた。また、石囲炉付近にやや大型の縄文中期初頭の土器片が分布していた。

＜遺物＞縄文土器641.9g、石器21.6gが出土している。

【縄文土器】11は隆帯上に刺突をもつ中期初頭の深鉢、12は沈線文を特徴する後期前葉の壺、13は中期中葉の深鉢である。

【石器】356は堆積土出土の微細剥離痕のある剥片である。

＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、縄文時代中期初頭と考えられる。



第29図　18号竪穴建物跡

19号竪穴建物跡（第30図、写真図版23・43・54・71・72）

＜検出状況＞調査区南東の谷状地形範囲でカマド粘土範囲及び黒褐色プランを検出した。

＜規模・形状＞平面形は方形と推定される。南東壁の一部が近現代の溝によって消失している。竪穴建物の４隅のうち、３隅を検出した。１辺の長さから21・25号建穴建物と同じく中規模である。貼床面と想定される高さに達したところで一旦掘削をやめたが、床が非常に柔らかいことから、掘削を再開した。その結果、カマド以外の範囲を掘り過ぎたと考えられる。床面の硬化しない原因として20号竪穴建物（縄文時代早期末～前期初頭）の堆積土を掘り込んで造成されたこと、建物構築時に掘削がⅢ層内で終わっており、Ⅳ層まで掘削深度が及んでいないこと、谷状地形内の黒褐色土は雨天時の流水を含み軟化していることが考えられる。床面施設では柱穴を検出するに至らなかったが削平してしまった可能性も考えられる。

＜堆積土＞黒褐色土主体である。１層直下が床面ライン、３層が貼床堆積土と考えられる。

＜構成要素・付属施設＞カマド１基を検出した。煙道部が刳貫式である。カマド燃焼部の構築粘土は楕円状に残存していた。天井部崩落範囲に礫が存在していたことから、天井部芯材に礫を使用していた可能性がある。

＜重複関係＞20号竪穴建物跡（縄文時代早期末～前期初頭）を掘り込む。そのため、本遺構堆積土からは縄文土器が多く出土した。

＜遺物分布＞中央部に礫、炭化材が分布するが、人工物は少ない。

＜遺物＞縄文・弥生土器1015.6g、土師器552.8g、石器889.2gが出土している。

【縄文土器】14は堆積土出土の早期末～前期初頭の尖底土器で微量の繊維を含む。20号竪穴建物跡に帰属する可能性が高い。

【土師器】179・180は堆積土出土の甕で、179は外面にコゲ付着している。

【石器】371は磨石で磨面に黒色付着物がある。

【礫】393は堆積土出土の有孔礫である。

＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

第39表　19号竪穴建物跡観察表

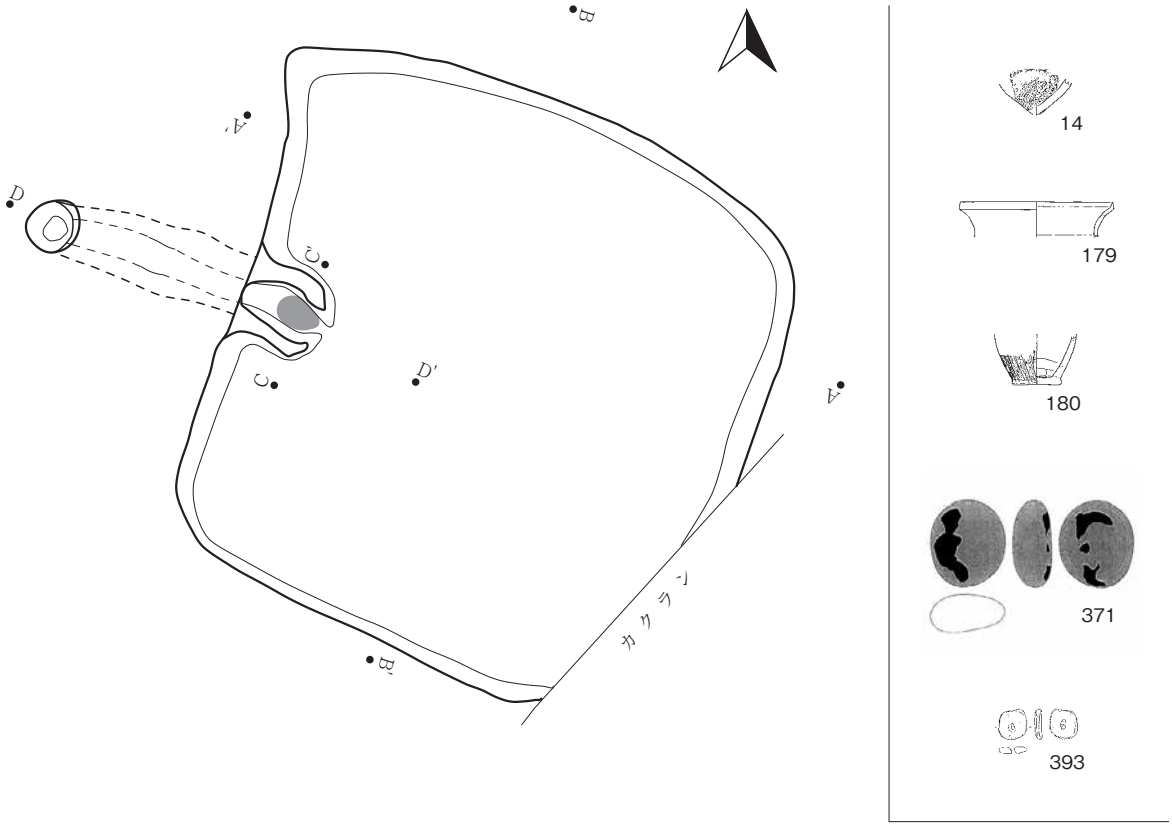
	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45788.652 Y＝ 94514.578	Ⅲ B 2i	Z＝14.470	不明	方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	3.75	3.51	49.00	A：10.835　B：	

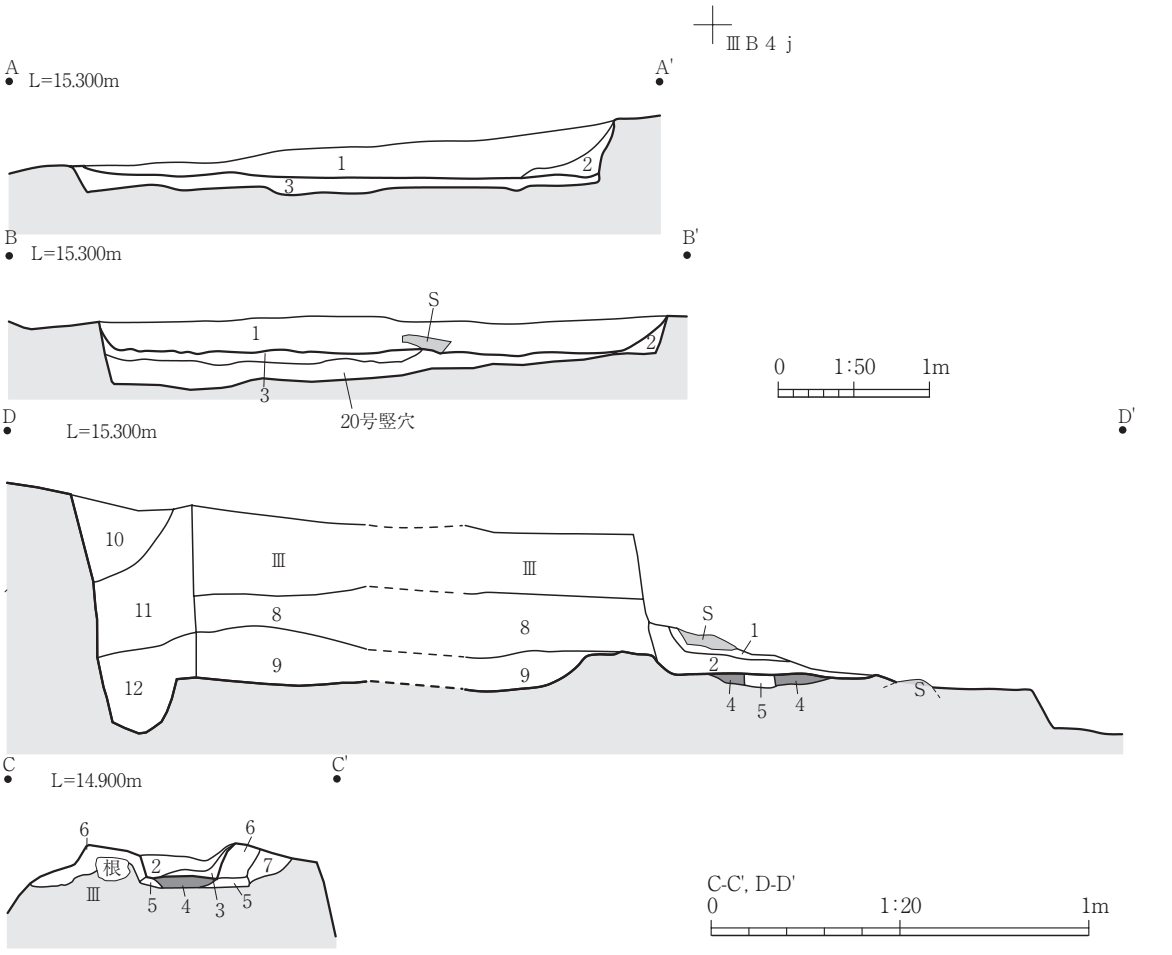
	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	1.49×0.46	0.63×0.61			
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-71.70°-N	北西壁	

第40表　19号竪穴建物跡土層観察表（１）

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色土	2	2		
2	10YR3/1黒褐色土	2	2	根多	
3	10YR3/2黒褐色土	2	4	風化花崗岩粒3%	貼床
4	10YR3/1黒褐色土	2	3		20号竪穴堆積土





第30図　19号竪穴建物跡

第40表　19号竪穴建物跡土層観察表（2）

C-C'・D-D'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR6/8明黄褐色粘土	4	5	焼土5%	天井
2	10YR3/1黒褐色土	2	3		
3	10YR4/4褐色土	2	2	骨片5% 炭化物粒1%	
4	5YR5/8明赤褐色土	3	5		
5	10YR3/2黒褐色土	2	2		抜取痕か
6	10YR6/8明黄褐色粘土	5	5		袖部
7	10YR5/4にぶい黄褐色土	4	5		袖部
8	10YR3/2黒褐色土	2	3		2に類似
9	10YR3/3暗褐色土	2	2	焼土3%	
10	10YR2/2黒褐色土	2	2		
11	10YR4/4褐色土	2	2		
12	10YR3/3暗褐色土	2	2		

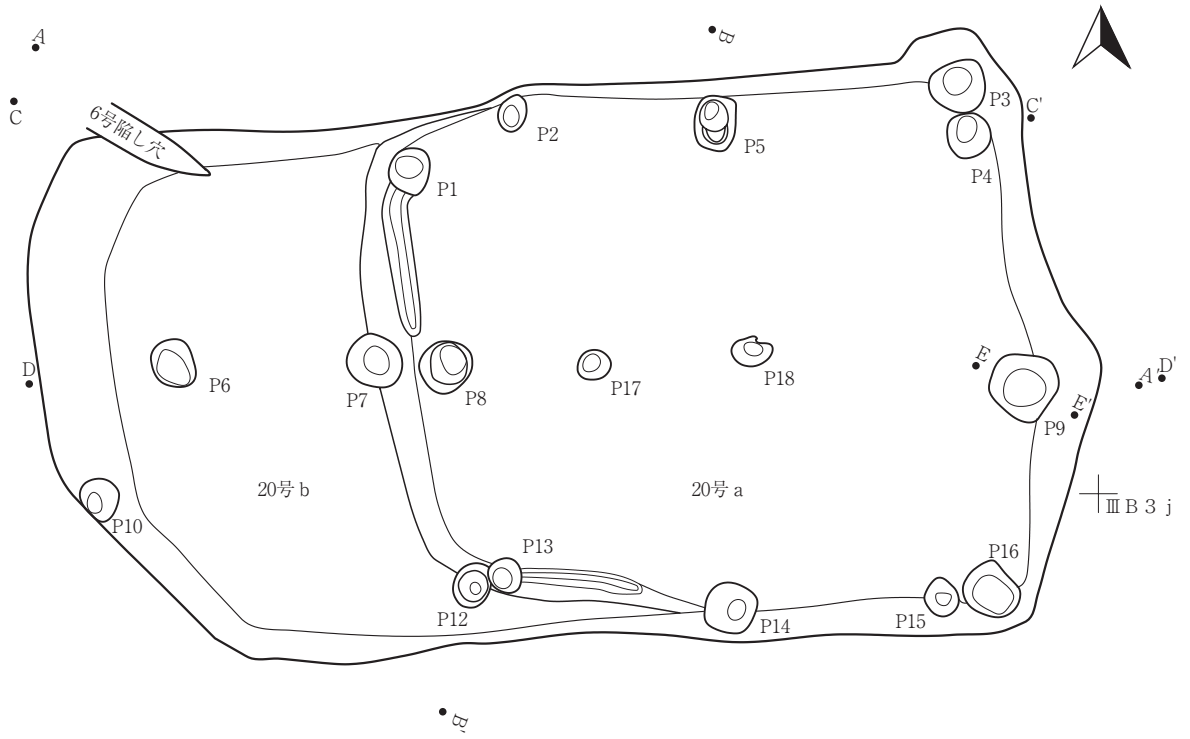
20号竪穴建物跡（第31・32図、写真図版24・43）

＜検出状況＞調査区南東の谷状地形範囲で19号竪穴建物調査時に、本遺構の南東部の堆積土が確認できた。また、古代面の調査を終了してから、To-Cuの分布を検出したところ、東西に細長く筋状に分布していることが確認できた。To-Cu分布範囲内と建物範囲が重なると想定し、掘削を行った。

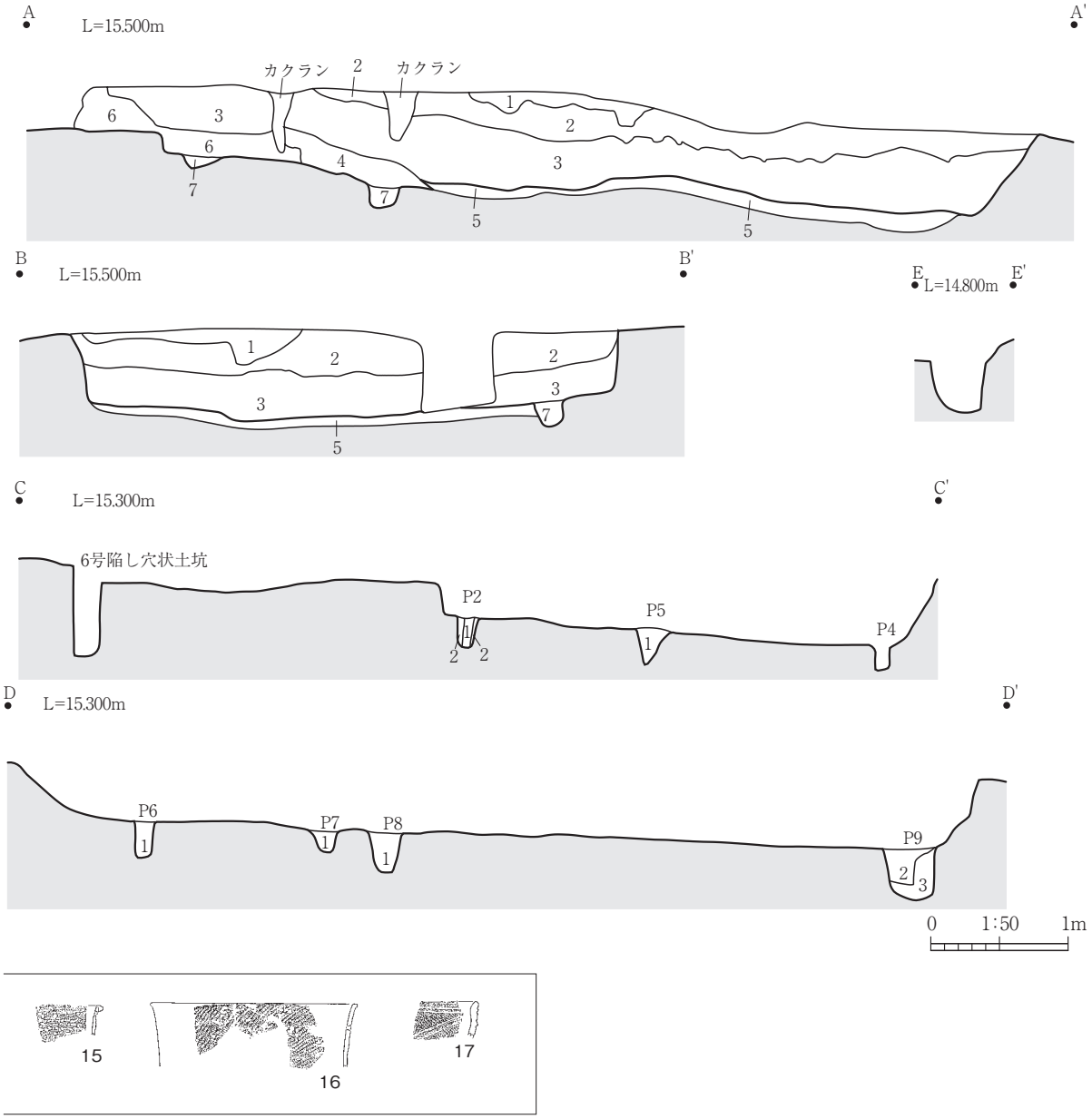
＜規模・形状＞平面形は長方形である。堆積土から、当初は4.5×3.7mの規模の建物（20ａ号竪穴建物）で、それを西側へ6.8×3.7mの規模に拡張（20ｂ号竪穴建物跡）したと考えられる。当初規模の20ａ号竪穴建物は主柱穴９本と考えられる。壁溝を伴い、20ｂ号竪穴建物床面とは北側で僅かに高低差が生じている。

＜堆積土＞黒褐色土主体である。２層がTo-Cuを包含する。３～６層は斜面上方からの流入土と考えられる。

＜構成要素・付属施設＞柱穴17個を検出した。床面での焼土、炭化物範囲は確認できなかった。柱穴は列状配置となり、建物の東西軸中央ラインに６個配置される。



第31図　20号竪穴建物跡（1）



第32図　20号竪穴建物跡（２）

＜重複関係＞６号陥し穴状土坑に北西コーナーを削平されている。19号竪穴建物（古代）に南東部を削平されている。

＜遺物分布＞Ｐ３・４のある北東部にやや大型の土器片が床面上から出土している。

＜遺物＞縄文土器1470.8g、土師器4.71gが出土している。

【縄文土器】15・17は堆積土、16は床面出土である。15は口縁部に結節回転文のある大木２a式で、16は繊維混入する早期末～前期初頭の羽状縄文土器である。17は隆帯と沈線が特徴的な中期の土器である。

＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、縄文時代早期末～前期初頭である。最近の年代測定成果では、To-Cu降下年代が6300年前（較正年代で表記）、早期末～前期初頭が較正年代は6500年前となる。したがって、本遺構の年代は約6500年前（較正年代）と捉えておく。

第41表　20号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45787.000	ⅢB2h	Z＝14.230	不明	方形
	Y＝ 94512.609				
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	6.70	3.98	102.70	A：19.426　B：	

壁溝	最大幅（m）	床面からの深（cm）
	0.07	8.6

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.34×0.27	29.80	楕円形	○
P2	0.25×0.18	25.20	楕円形	
P3	0.38×0.34	43.20	円形	
P4	0.29×0.29	33.80	楕円形	
P5	0.36×0.28	55.20	楕円形	
P6	0.32×0.27	53.00	不整形	
P7	0.37×0.33	40.40	円形	
P8	0.35×0.35	37.00	方形	
P9	0.46×0.45	47.80	円形	
P10	0.29×0.25	42.80	楕円形	
P11	欠			
P12	0.29×0.24	48.20	円形	
P13	0.23×0.21	49.80	円形	
P14	0.33×0.32	25.80	楕円形	
P15	0.27×0.23	17.20	不整形	
P16	0.39×0.32	44.60	方形	
P17	0.21×0.19	21.20	楕円形	
P18	0.27×0.19	21.60	楕円形	

第42表　20号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/3黒褐色土	2	2	10YR5/8黄褐色土粒5%	
2	10YR3/4暗褐色土	2	5	10YR6/8明黄褐色火山灰（To-Cu）30% 10YR2/2黒褐色土10%	
3	10YR3/3暗褐色土	2	2	花崗岩粒5% 10YR2/2黒褐色土5%	
4	10YR3/3暗褐色土	2	2	花崗岩粒1% 10YR2/2黒褐色土5% 10YR6/8明黄褐色土5%	
5	10YR3/3暗褐色土	2	5	10YR6/8明黄褐色土粒10%	貼床土
6	10YR2/2黒褐色土	2	2	花崗岩粒5% 10YR6/6明黄褐色土5%	
7	10YR2/3黒褐色土	2	2		壁溝堆積土

C-C'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/3黒褐色土	2	2		
2	10YR2/2黒褐色土	2	2		

D-D'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/3黒褐色土	2	2		
2	10YR2/1黒色土	2	2		
3	10YR3/4暗褐色土	2	2	10YR5/8黄褐色土15%	

21号竪穴建物跡（第33・34図、写真図版25・43・44・55・56・72・73）

＜検出状況＞谷状地形範囲のうち標高の高い西側で、カマド構築材と隅丸方形の黒褐色～褐色プランを検出した。また、その北東側は試掘トレンチ範囲内であった。

＜規模・形状＞平面形は隅丸方形である。23・24号竪穴建物とほぼ同規模で、本遺跡内の古代建物のなかでは中規模である。カマド、主柱穴４個に壁溝が伴う。

＜掘形＞Ａ類。

＜堆積土＞黒褐色土主体である。Ⅳ層に由来する黄褐色土や風化花崗岩粒が混入する。

＜構成要素・付属施設＞カマド１基、柱穴４個、壁溝を検出した。カマドは残存状態が良好で、芯材に礫、支脚に甕を横位に２個配置している。カマド内から多数の甕が出土している。

＜重複関係＞５号陥し穴状土坑と重複し、これを切る。

＜遺物分布＞床面上ではカマド付近を中心として放射状に分布する。

＜遺物＞縄文・弥生土器1123.2g、土師器9442.4g、石器344.2g、土製品173.0gが出土している。

【縄文・弥生土器】19は堆積土出土の縄文後期前葉の深鉢、20は堆積土出土のRL縄文施文の弥生土器である。

【土師器】181～202の22点を図示した。カマド内が181・189・190・194・195・202、床面が183・184・193・199、堆積土下部が185・191・196、堆積土が182・186～188・192・197・198・200・201である。181～189が坏、190が鉢、191が高坏、192・193が壺、194～202が甕である。坏は丸底に限られ、平底風はない。カマド内出土の坏は、本来天井部に置かれていたものが、カマド崩落時に混入したと考えられる。181の坏は外傾し、内面ミガキ調整は底部付近がタテ方向で口縁部がヨコ方向である。そのほかの坏は直線的に開く器形である。192・193は胴部中央に最大径がある壺で、192の口縁は受け口状である。198は口縁部に鋸歯状沈線がある。195と202は支脚転用の甕で、202と同一個体の201が堆積土から出土している。これら支脚転用甕の底部は摩耗している。

【石器】391は堆積土出土の磨石で、方割石の可能性がある。

【土製品】402～404は紡錘車で、402・403が床面、404が堆積土下部から出土している。

＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

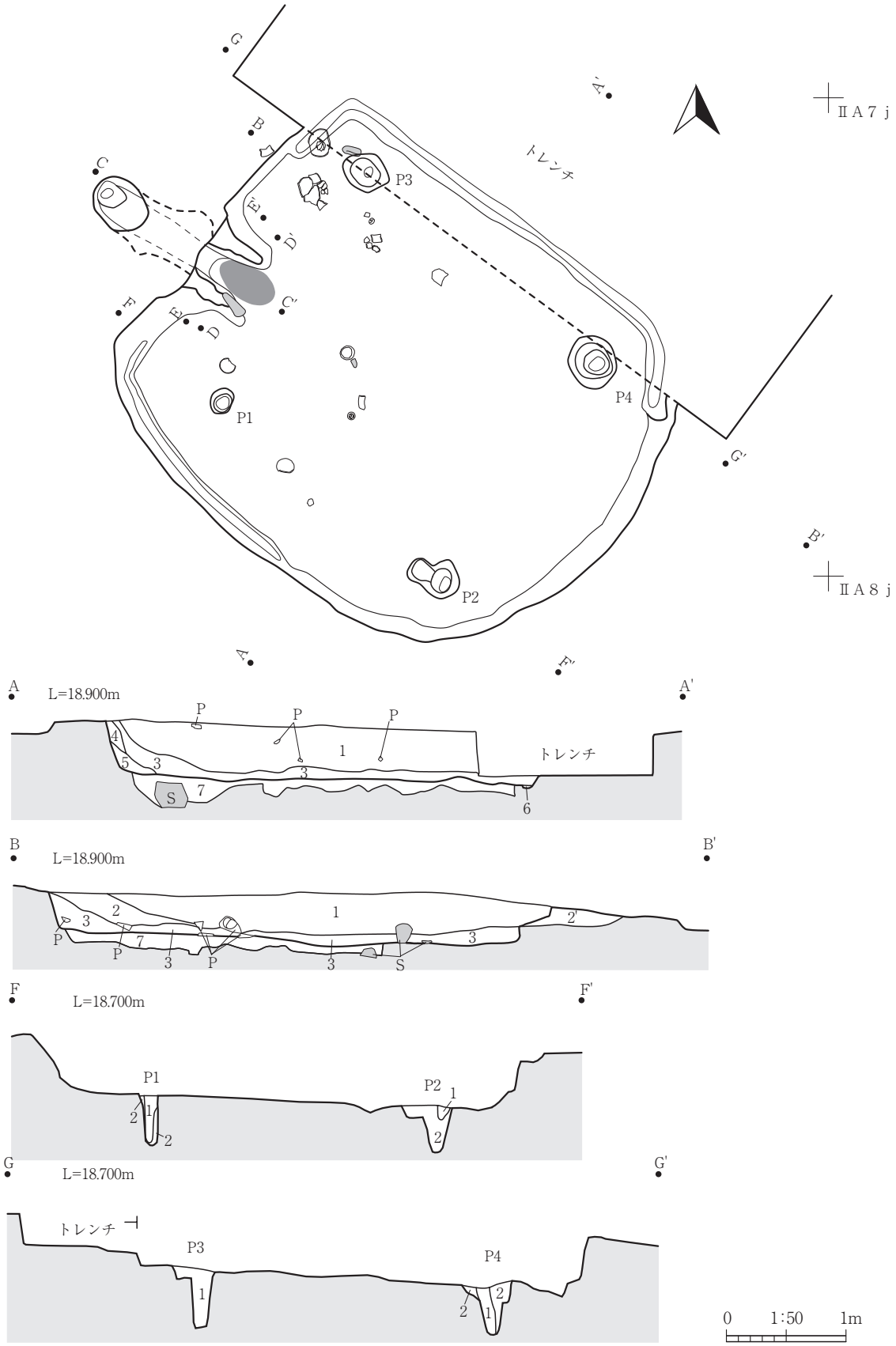
第43表　21号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝45766.457 Y＝94472.430	ⅡＡ７ｈ	Z＝18.210	A	方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	4.29	3.58	74.20	A：12.518　B：	

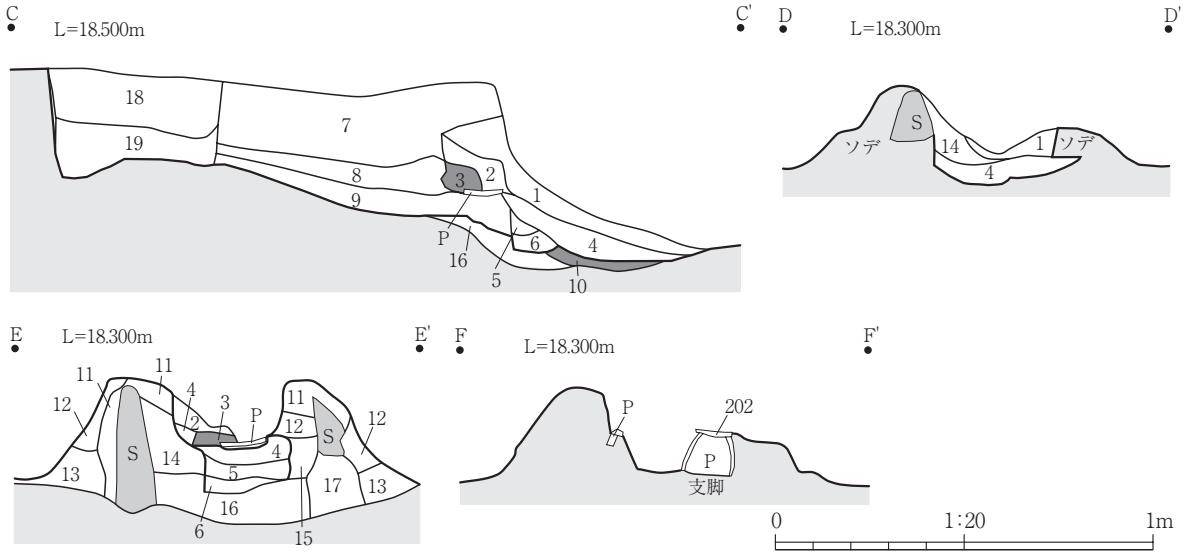
	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	1.07×0.49	0.60×0.71	礫	不明	
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-55.91°-N	北西壁	

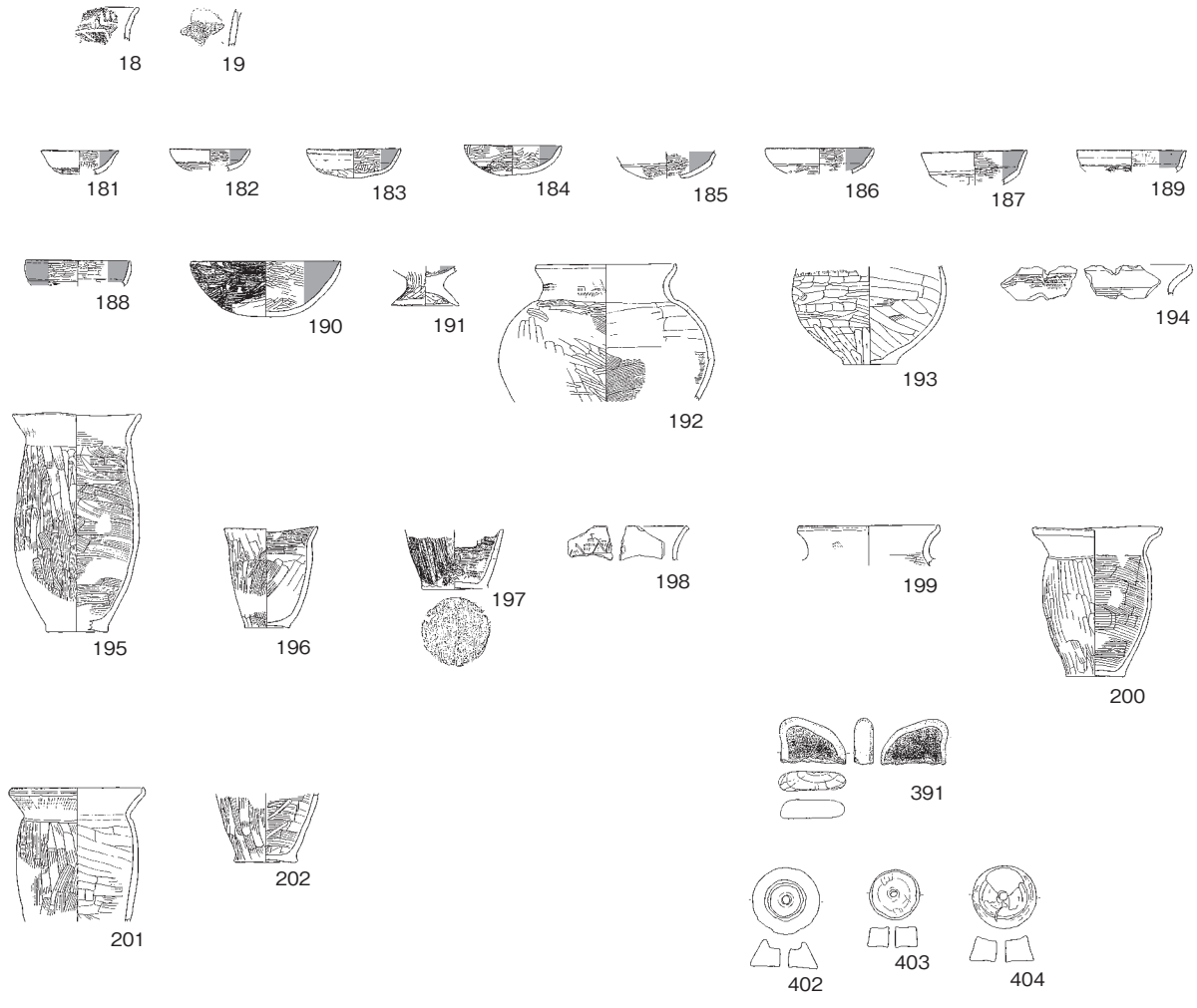
壁溝	最大幅（m）	床面からの深（cm）
	0.1	4.66

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.23×0.19	10.60	方形	○
P2	0.47×0.33	40.20	楕円形	
P3	0.41×0.32	56.40	円形	
P4	0.45×0.39	46.60	方形	○



第33図　21号竪穴建物跡（1）





第34図　21号竪穴建物跡（2）

第44表　21号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2	花崗岩粒3%	
2	10YR2/3黒褐色土	2	2	花崗岩粒1%　黄褐色土粒1%	
3	10YR3/4暗褐色土	2	2	遺物少量	
4	10YR3/1黒褐色土	2	2	焼土粒1%	
5	10YR3/2黒褐色土	2	2	花崗岩粒1%	
6	10YR3/1黒褐色土	2	2		
7	10YR3/2黒褐色土	2	5	黄褐色土粒5%	貼床土

C-C'・D-D'・E-E'・E-D'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2		
2	10YR7/6明黄褐色粘土	5	4		天井崩落土
3	10YR3/2黒褐色土	2	2	炭化物粒3%	堆積土 第1焼土面
4	5YR4/6赤褐色土	2	2		
5	5YR3/6暗赤褐色土	2	4		
6	10YR3/3暗褐色土	2	2		
7	10YR2/3黒褐色土	2	2		
8	5YR4/3にぶい赤褐色土	2	2		
9	10YR3/3暗褐色土	2	2		
10	5YR4/6赤褐色土	2	5		
11	10YR7/6明黄褐色土	5	5		袖部
12	10YR3/2黒褐色土	2	5		袖部
13	10YR7/6明黄褐色粘土	5	5	黒褐色土10%	袖部
14	5YR3/6暗赤褐色土	2	2		袖部
15	5YR3/6暗赤褐色土	2	2	炭化物粒1%	袖部
16	10YR3/3暗褐色土	2	2		
17	10YR3/3暗褐色土	2	2		抜取痕
18	10YR3/3暗褐色土	2	2	黄褐色粘土5%	
19	10YR3/1黒褐色土	2	2		

F-F'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色土			10YR7/8黄橙色土粒5%	柱痕跡
2	10YR7/8黄橙色土			10YR7/8黄橙色土粒20% 花崗岩粒5%	

G-G'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色土			10YR7/8黄橙色土粒5%	柱痕跡
2	10YR2/2黒褐色土				

22号竪穴建物跡（第35・36図、写真図版27・28・44・57・58・73・74）

＜検出状況＞谷状地形範囲のうち標高の高い西側で、カマド構築材と方形の黒褐色～褐色プランを検出した。検出時にカマドが２基確認できたので、２棟の建物の重複の可能性を考慮した。

＜規模・形状＞平面形は方形である。北西壁ラインは明瞭であったが、南東部と北東部が不明瞭であった。なお北東部は23号竪穴建物との重複によって消失している。２基のカマドが別々の建物に付属すると想定しても、どちらか一方の建物によって削平されてしまう事例が多いが、本遺構では２基とも燃焼部の残存状況は良好で、構築材や土器が遺棄されていた。また、北西壁は直線的であり目立った段差もなく２棟の切合いとするには根拠に欠ける。床面深度も同一であった。当該期では珍しい事例ではあるが、１棟の建物のなかで２基のカマドを使い分けていたと考えざるを得ない。カマド設置壁が建物長軸側にある。

＜堆積土＞黒褐色土主体である。Ⅳ層に由来する黄褐色土や風化花崗岩粒が混入する。８層が貼床土と考えられるが、硬化していない。前述のごとく、２棟の重複関係があると仮定して調査を進めていたが、土層断面からは判別できなかった。

＜構成要素・付属施設＞カマド２基、柱穴３個を検出した。北西壁中央をカマド１、北西壁北側をカマド２とした。カマドは残存状態が良好で、芯材に礫、カマド１では支脚に甕を横位に２個配置し、カマド２では礫を支脚としている。どちらのカマドも煙道部は掘込式で、カマド２煙道部の最上部には構築材の明黄褐色粘土が堆積している。カマド２の燃焼部は袖部と天井部の芯材礫が残存している。天井部に楕円形の焚口が形状を留めていたが、傾斜して刺さっている芯材礫の状況から、天井部そのものは燃焼部内に黒色土（カマド２第１層）が堆積していく途中で崩れたと考えられる。２基のカマドの直接的な重複関係は不明である。カマド１の煙道は長煙道なのに対し、カマド２の煙道は短煙道である。完形に近い遺物のほとんどが、カマド２の左脇に集中していたが、カマド１付近でも完形の坏が出土している。

＜重複関係＞23号竪穴建物跡と重複し、これに切られる。23号との境界にベルトを組んで断面観察を行った結果、23号竪穴建物跡の北西壁が破壊されていないことを確認できた。したがって、新旧関係は22号→23号竪穴建物と考えられるが、明瞭な土色差を伴った重複関係とは言えず、２棟の新旧を論ずるには根拠不足である。

＜遺物分布＞床面～堆積土下部では２基のカマド内、カマド両脇、カマド手前に分布する。

＜遺物＞

【縄文・弥生土器】21は堆積土出土の縄文早期末～前期初頭の尖底土器、22は堆積土出土の縄文中期の土器である。

【土師器】203～216の14点を図示した。カマド１内の支脚転用が214、カマド内出土遺物片を含むのが210、床面が203・205・207・209・211～213・215・216、堆積土が204・206・208である。203・204が坏、205が椀、206が片口、207・208が壺、209～216が甕である。203・204の坏はカマド１付近の出土で、丸底である。205の椀は、カマド２の脇から出土している。厚手の器壁で、内面黒色処理されている。同器形は8世紀後半に多い器形であるが、7世紀末頃にも存在するようである。206の片口は外面に赤色付着物、内面にコゲがある。207・208の壺はハケ・ミガキが主に縦方向に見られる。209～214・216の甕は口縁部に最大径を持つ。210・211は口縁部に段状沈線を有し、211は口唇部を指頭圧痕により、花弁状に装飾される。この２個体は胴部長が非常に長い。

【土製品】405～407は紡錘車で、405が床面、406・407が堆積土出土である。405は他の資料に比べて薄い。407は有孔部が窪んでいる。

【鉄製品】426は堆積土出土の鎌である。
＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、７世紀後半～８世紀前半と考えられる。甕の長胴化が顕著であることを示す209～211が存在し、最大径が口縁にある点では、７世紀後半～末の特徴を示すものと考えられる。しかし、坏の段の消失は、８世紀以降に顕著であることから、上記の年代幅とした。

23号竪穴建物跡（第37・38図、写真図版26・43・44・59・70・73・74）
＜検出状況＞谷状地形範囲のうち標高の高い西側で、22号竪穴建物跡の下方から、カマド構築材と方形の黒褐色～褐色プランを検出した。また､22・24号竪穴建物跡との重複も想定される範囲であった。カマド構築粘土のほか、多数の礫が散在していた。
＜規模・形状＞平面形は方形で長軸方向の壁にカマドが設置されている。西壁ラインは明瞭であったが、東壁は消失していた。西壁南側が22号竪穴建物跡と接し、東壁消失ライン付近で、24号竪穴建物と重複する。規模は24号竪穴建物跡とほぼ同じ中型である。
＜堆積土＞黒褐色土主体である。Ⅳ層に由来する黄褐色土や風化花崗岩粒が混入する。22号竪穴建物との境界にベルトを設定し壁面ラインの重複を確認したが、23号竪穴建物跡の壁の損傷は見られなかった。また、24号竪穴建物跡のカマド煙出部は、床面調査中に見つからず、掘形調査時に認識できたことから、23号→24号竪穴建物跡の新旧関係が考えられる。
＜構成要素・付属施設＞カマド1基、柱穴３個を検出した。カマドは西壁中央に設置され、煙道部が折れ曲がる。粘土材は燃焼部から煙道・煙出部にまで使用されており、煙出部上部は大礫が３点配置されていた。堆積状況からは、大礫で廃絶時に煙出部を塞いだか、それとも煙出部を補強するために使用されていたかは判断できなかった。
＜重複関係＞22・24号竪穴建物跡と重複し、22号竪穴建物跡を切ると考えられるが、決定的な根拠に欠ける。また24号と重複は、カマド煙出部の検出状況から24号→23号の新旧が考えられる。
＜遺物分布＞堆積土内からの遺物が大半でカマド周辺で密集する。
＜遺物＞
【縄文・弥生土器】18・23は堆積土出土の弥生後期の土器で、23は赤穴式に特徴な刺突を有する。
【土師器】217～227の11点を図示した。217～224は坏、225～227は甕である。すべて堆積土出土資料である。217～220の坏は口径が9.8～12.2㎝と小型である。底部はケズリ調整が多く、内面の段は強調されていない。226・227の甕はハケ調整を多用し口縁部に最大径がある。
【石器】365は敲磨器で、全面が磨面の中央部に敲打痕がある。
【土製品】408は堆積土出土の紡錘車で破損している。
【鉄製品】417の短刀は、堆積土出土で刃部は反りを有する。竪穴建物から出土した刀類のなかでは、最長である。
＜時期＞遺構の特徴と重複関係、出土遺物の年代から、７世紀末～８世紀前半と考えられる。遺物はすべて堆積土出土資料のため、建物廃絶時期を反映していない可能性もある。遺構の重複は甕の長胴化が顕著であることを示す209～211が存在し、最大径が口縁にある点では、７世紀後半～末の特徴を示すものと考えられる。しかし、坏の段の消失は、８世紀以降に顕著であることから、上記の年代幅と捉えた。

24号竪穴建物跡（第37・39図、写真図版29・59・60・73）
＜検出状況＞谷状地形範囲のうち標高の高い西側で、23号竪穴建物跡の下方から、カマド構築材と方

形の黒褐色～褐色プランを検出した。また、23号竪穴建物跡との重複も想定される範囲であった。検出範囲南側に試掘トレンチが位置していた。

＜規模・形状＞平面形は方形である。南壁は試掘トレンチで削平されている。床面の硬化はカマド付近から北半部にかけて確認された。カマドの設置されている西壁が23号竪穴建物跡と接している。規模は23号竪穴建物跡とほぼ同じ中型である。平面形状は方形で、長軸方向の壁にカマドが設置されている。

＜堆積土＞黒色～黒褐色土主体である。Ⅳ層に由来する黄褐色土が微量混入する。4層直下が床面である。貼床は中央部が若干薄く、建物縁辺部が深い。カマド煙道部の上部堆積土は、23号竪穴建物跡構築によって削平されている。

＜構成要素・付属施設＞カマド1基、柱穴２個を検出した。カマドは西壁中央に設置されている。カマドの構築粘土材の明黄褐色粘土（カマド1層）が燃焼部から煙出部にまで残存しており、煙道部では23号竪穴建物跡との重複により、上部層が削平されたと考えられる堆積状況であった。燃焼部の芯材には大礫が使用され、黄褐色粘土と黒褐色土を交互に貼りつけている。支脚は礫が１点使用されている。煙道部は掘込式と考えられる。24号竪穴建物跡のカマド煙出部は、床面調査中に見つからず、23号竪穴建物跡の掘形調査時に認識できたことから､23号→24号竪穴建物跡の新旧関係が考えられる。

＜重複関係＞23号竪穴建物跡と重複し、本遺構のカマド煙道部が23号竪穴建物跡に切られる。したがって、24号竪穴建物跡→23号竪穴建物跡と考えられる。また、建物外縁部に周堤帯があったと仮定すると、25・29・30・37号竪穴建物跡との新旧関係があったと考えられる。

＜遺物分布＞床面上では、カマド周辺とカマドと正対する東側で遺物の密集が見られた。

＜遺物＞

【土師器】228～234の７点を図示した。228・229は坏、230～234は甕である。229・230・232・234が床面から、228・231・233が堆積土から出土している。228は口径が9.8㎝で段がない。229は平底風丸底坏で、ミガキが横方向に多い。230～233は最大径が口縁部にある。このうち、230・231は胴部が直線的に立ち上がり、233は胴部上半が開く器形となっている。甕の調整はハケを多用する。

【土製品】409は堆積土出土の紡錘車である。

＜時期＞遺構の特徴と重複関係、出土遺物の年代から、７世紀末～８世紀前半と考えられる。

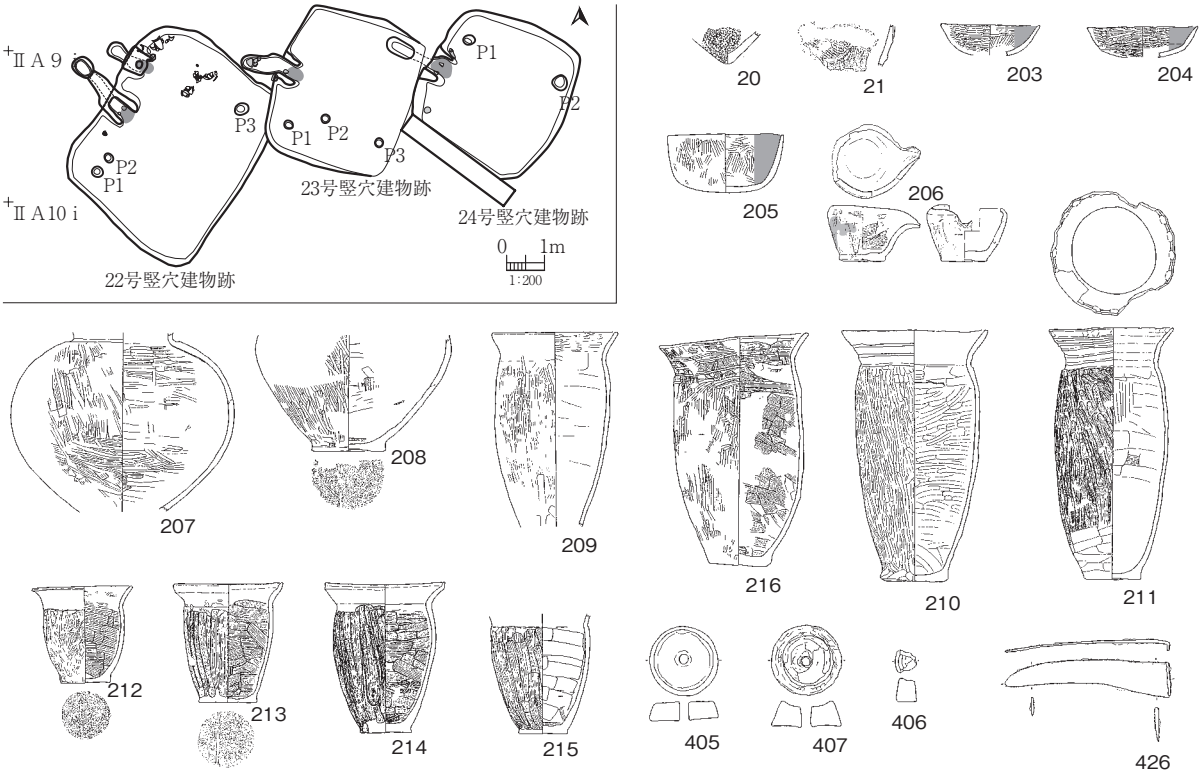
第45表　22号竪穴建物跡観察表

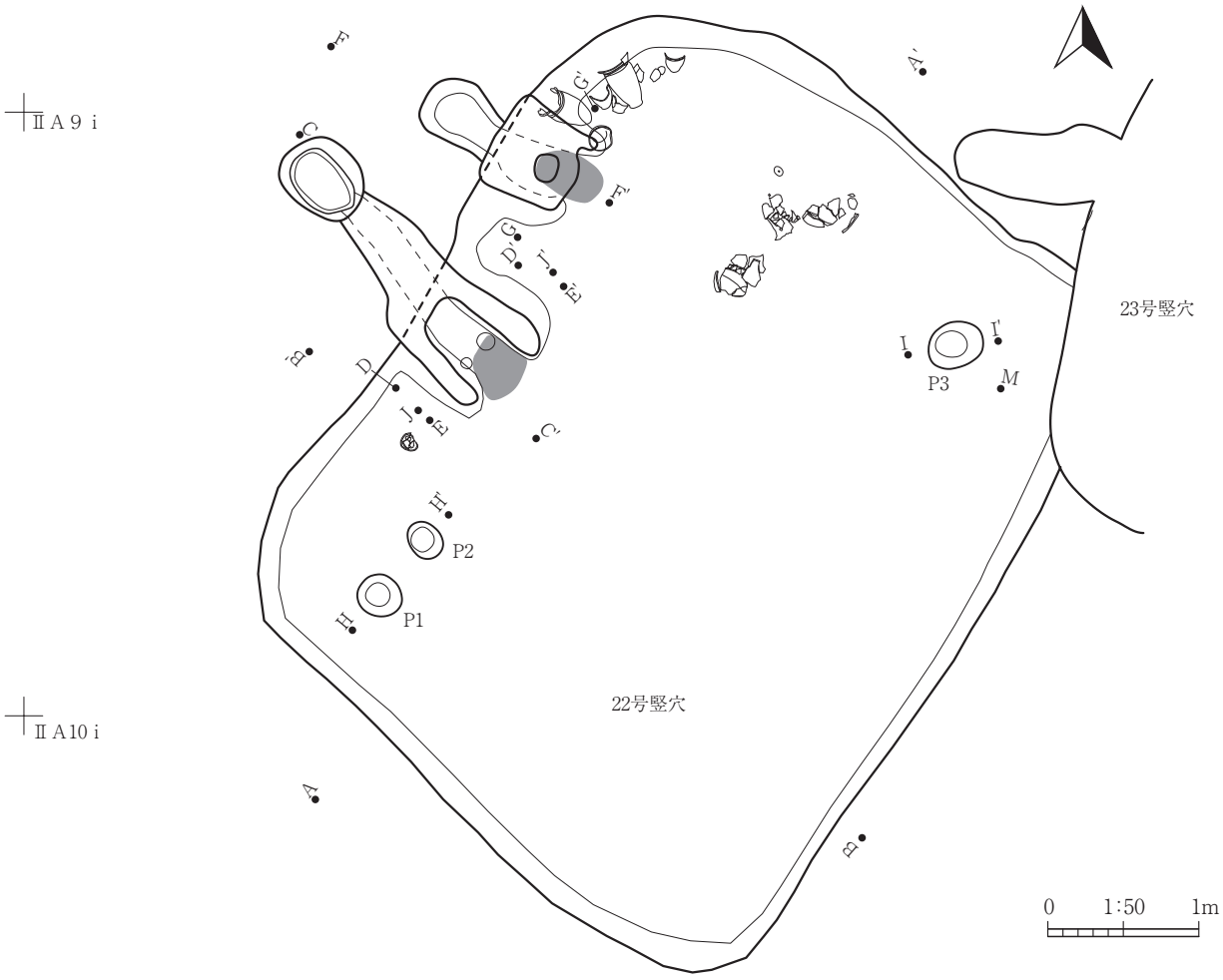
	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45774.328 Y＝ 94476.234	ⅡＡ９ｉ	Z＝17.350	不明	方形
	長（m）	幅（m）	深（㎝）	床面積（㎡）Ａ：残存値、Ｂ：推定値	
	5.41	4.30	96.60	Ａ：19.503　Ｂ：	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド１	1.33×0.54	0.84×0.94	無	横位2個	甕
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-42.41°-N	北西壁	

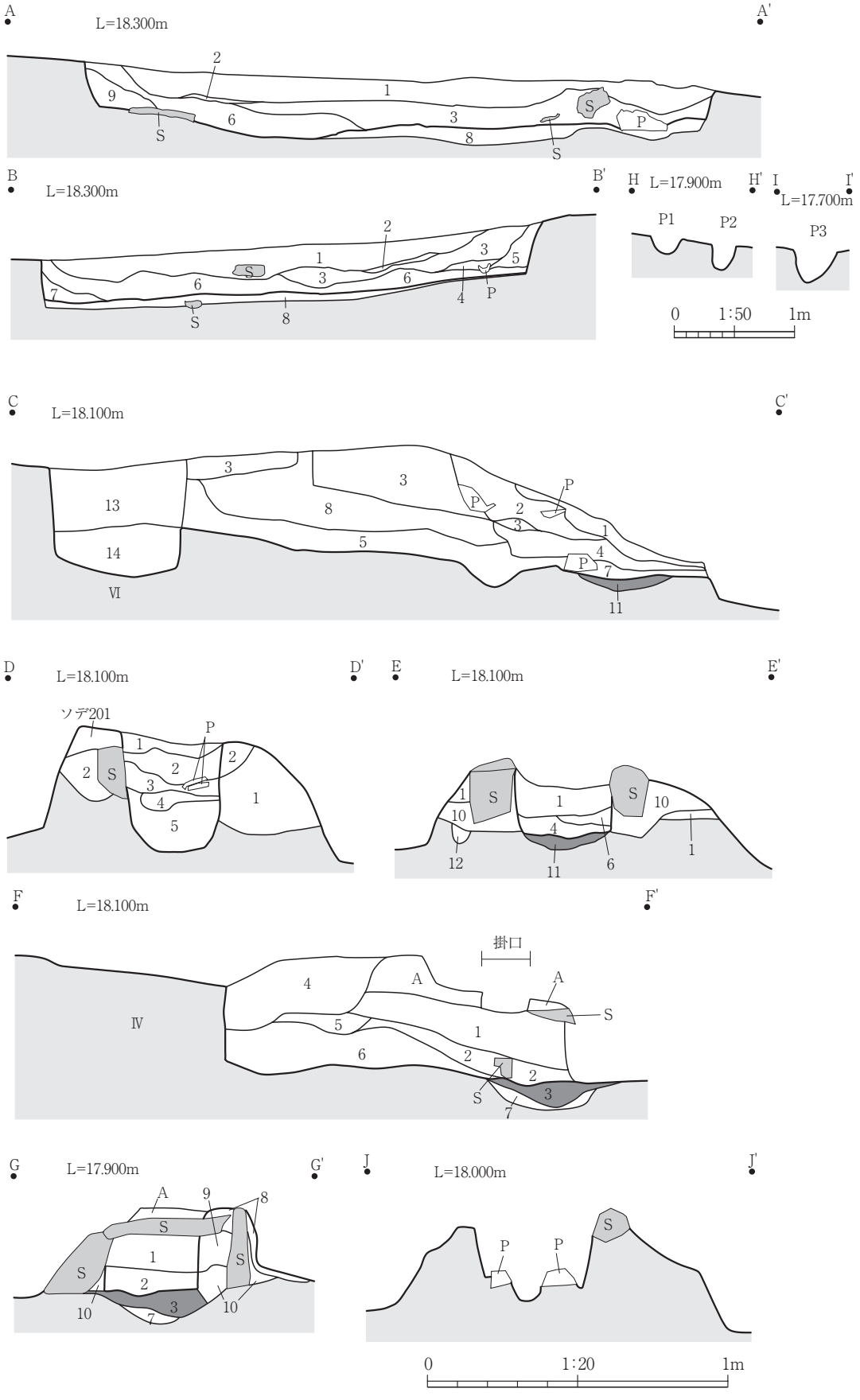
	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド２	0.53×0.42	0.60×0.80	無	1個	甕
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-58.96°-N	北西壁	

	規模（m）	深（㎝）	底面形状	柱痕跡
P1	0.29×0.27	15.20	円形	
P2	0.27×0.21	23.20	円形	
P3	0.38×0.30	25.00	楕円形	

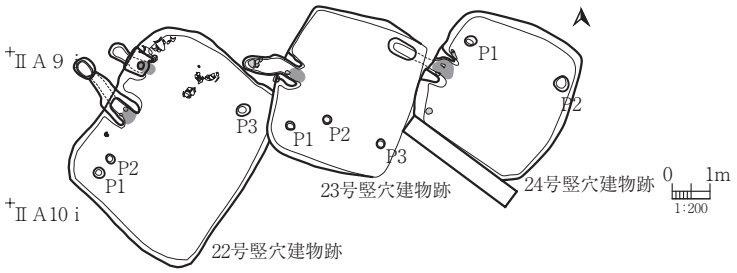


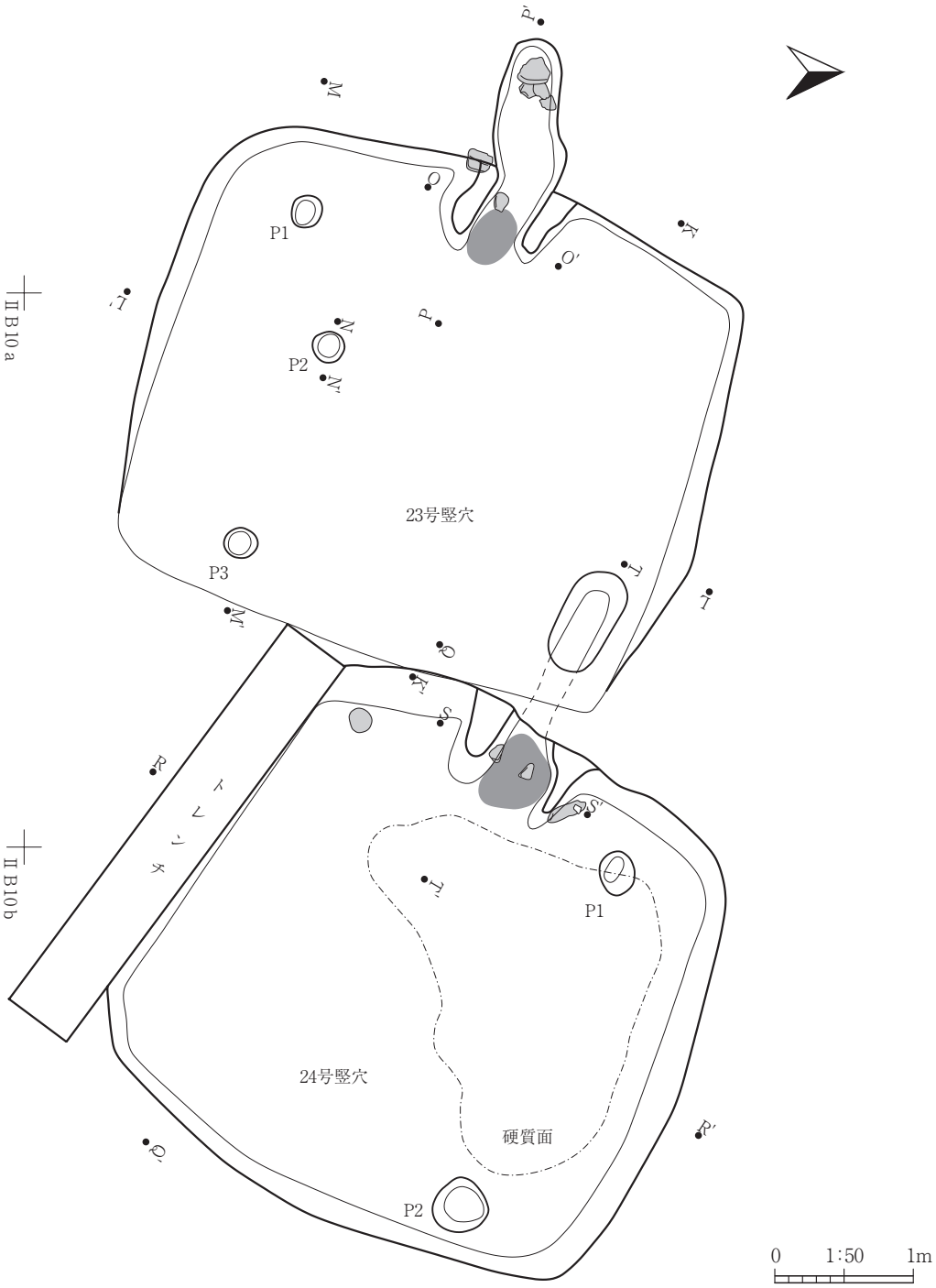


第35図　22号竪穴建物跡（1）

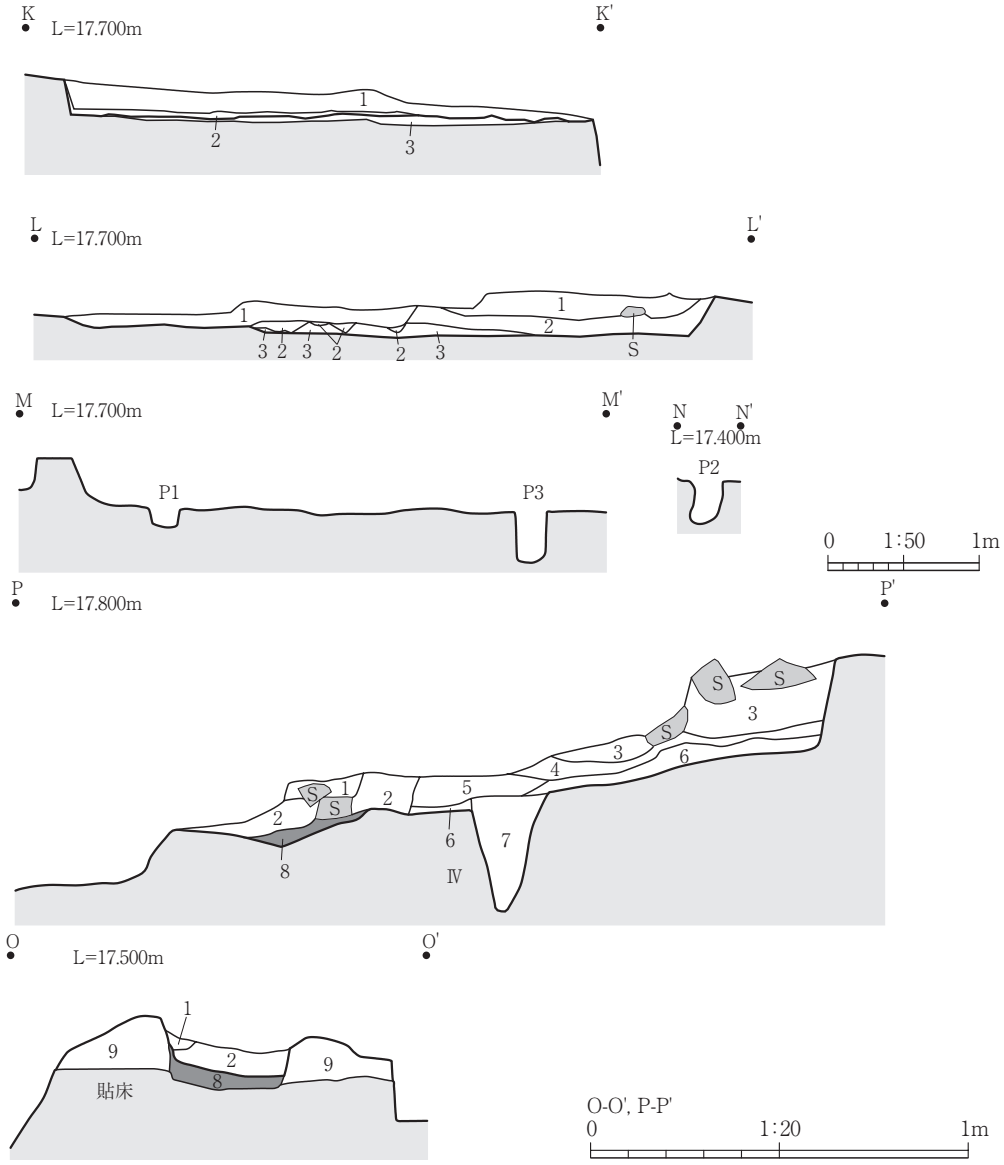


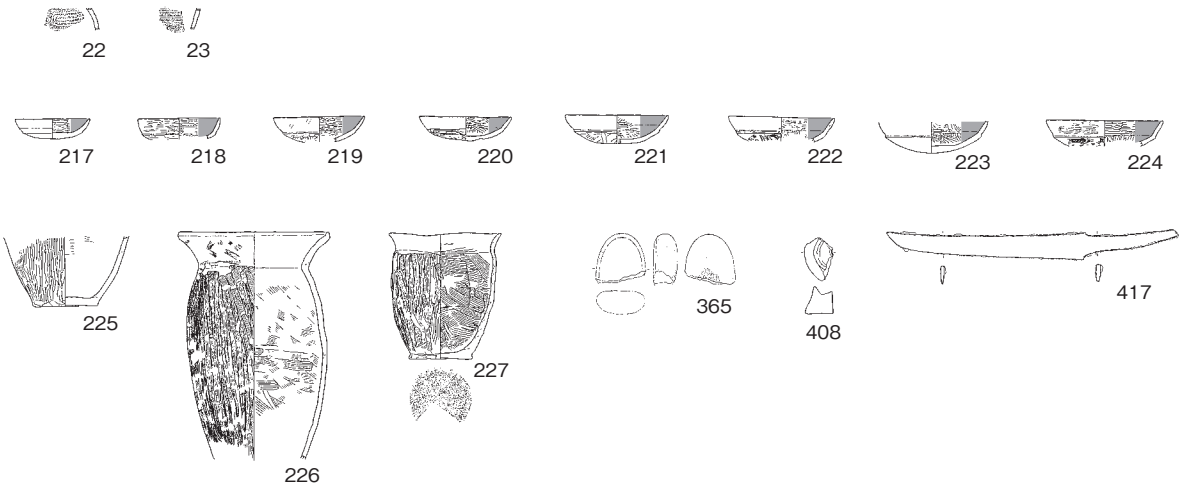
第36図　22号竪穴建物跡（2）



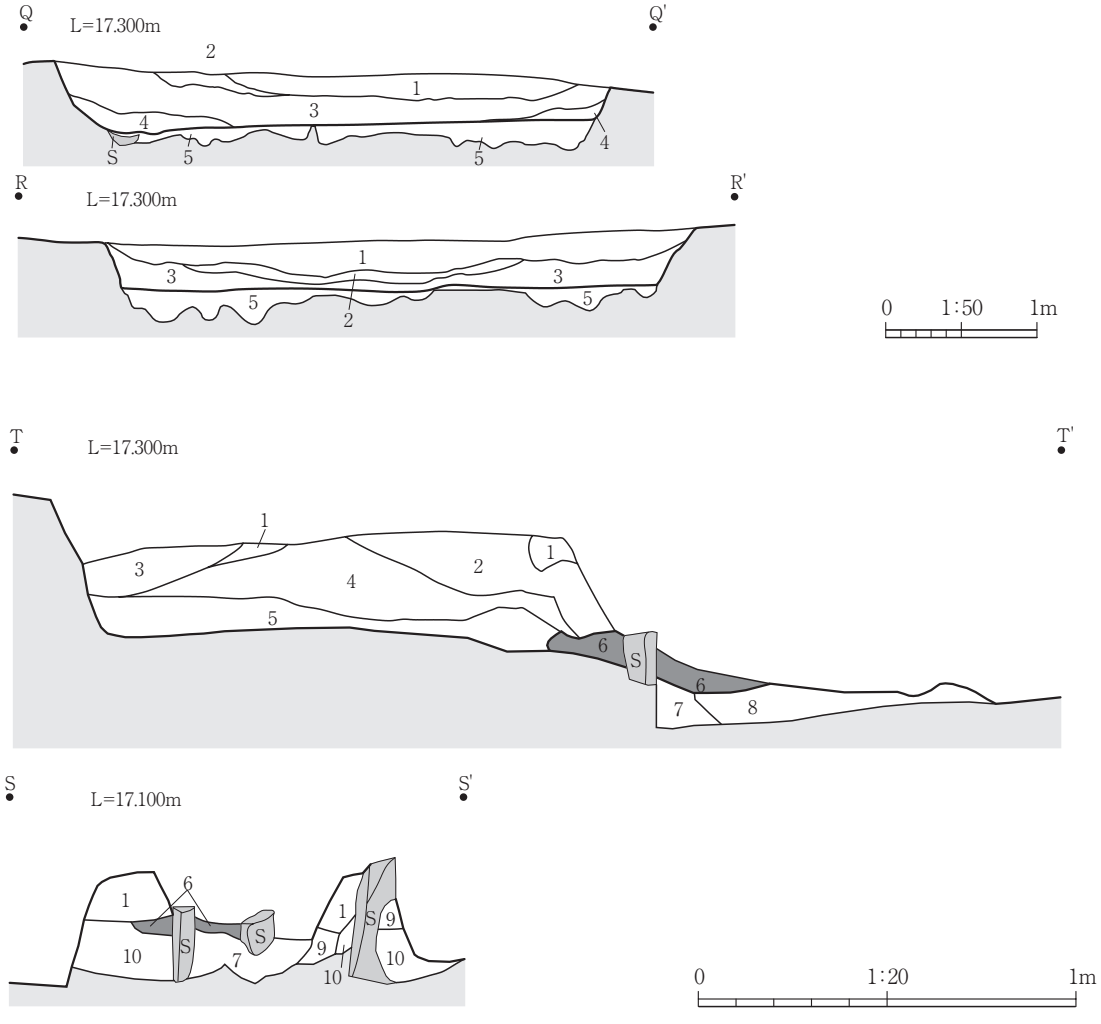


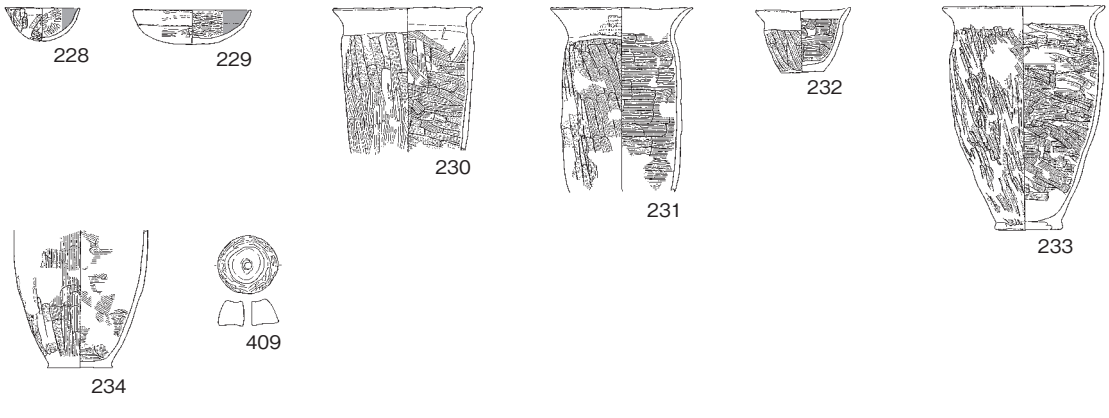
第37図　23・24号竪穴建物跡





第38図　23号竪穴建物跡





第39図　24号竪穴建物跡

第46表　22号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2	砂粒3%　花崗岩礫3%	
2	10YR5/4にぶい黄褐色土	4	3		カマド崩落土
3	10YR2/2黒褐色土	4	2		
4	10YR3/2黒褐色土	4	2	カマド崩落土3%	
5	10YR3/1黒褐色土	4	2	花崗岩粒1%	
6	10YR3/1黒褐色土	4	3	花崗岩粒3%	
7	10YR2/2黒褐色土	4	2		
8	10YR2/2黒褐色土	4	4		貼床？ やや固い
9	10YR3/2黒褐色土	4	2		

C-C'・D-D'・E-E'・J-J'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2		
2	10YR5/4にぶい黄褐色土	5	3	黒褐色土20%	崩落土
3		2	2		
4	5YR5/8明赤褐色土	2	2		
5	10YR3/2黒褐色土	2	2	炭化物粒1%	
6	5YR3/6暗赤褐色土	2	2	炭化物粒1%	
7	5YR5/8明赤褐色土	5	5	炭化物粒3%	焼土
8	5YR5/6明赤褐色土	2	4		煙道部焼土
9	10YR5/2灰黄褐色土	2	2		
10	5YR5/6明赤褐色土	2	2	黄褐色土20%	カマド補修土？
11	5YR5/8明赤褐色土	2	2		焼土
12	5YR5/6明赤褐色土	2	2		
13	10YR2/2黒褐色土	2	2		
14	10YR3/2黒褐色土	2	2		

F-F'・G-G'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
A	10YR7/6明黄褐色粘土	5	5	黒色土10%	カマド構築土
1	10YR3/1黒褐色土	2	2		
2	5YR4/3にぶい赤褐色土	2	2		
3	5YR5/8明赤褐色土	2	2	炭化物粒3%	
4	10YR3/2黒褐色土	2	2		
5	5YR4/6赤褐色土	2	2		
6	10YR3/1黒褐色土	2	2	炭化物1%	
7	5YR3/3暗褐色土	2	3		
8	10YR7/6明黄褐色粘土	5	5	焼土1%	
9	10YR3/2黒褐色土	2	4	焼土3%	
10	5YR3/6暗赤褐色土	2	3	焼土3%	

第47表　23号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝45773.121 Y＝94480.828	ⅡＡ9j	Z＝17.060	A	方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	4.22	3.63	31.20	A：12.783　B：	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	0.97×0.53	0.67×0.89	礫	不明	
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-79.11° -N	北西壁	

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.25×0.22	11.80	楕円形	
P2	0.24×0.23	31.60	円形	
P3	0.25×0.23	34.60	円形	

第48表　23号竪穴建物跡土層観察表

K-K'・L-L'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/2黒褐色土	2	3		
2	10YR2/2黒褐色土	2	3	黄褐色粘土1%	
3	10YR3/3暗褐色土	2	4		貼床

O-O'・P-P'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色土	2	5	焼土粒10% 炭化物粒5%	袖部崩落土
2	7.5YR5/8明褐色焼土	2	5	5YR5/8明赤褐色焼土10% 炭化物粒5%	
3	10YR2/2黒褐色土	2	2	10YR4/6褐色粘土質土30%	
4	10YR2/2黒褐色土	2	2	10YR4/6褐色粘土質土粒5%	
5	10YR2/2黒褐色土	2	3	10YR2/1黒色土30% 10YR4/6褐色焼土15% 炭化物粒1%	
6	10YR3/2黒褐色土	2	2		
7	10YR1.7/1黒色土	2	2	10YR4/6褐色土5%	カクラン
8	5YR5/8明赤褐色土	2	4		燃焼部焼土
9	10YR6/6明黄褐色粘土	5	5	焼土ブロックφ1cm5%	焼土混入土での補修か？

第49表　24号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45773.055 Y＝ 94485.078	ⅡＢ9a	Z＝16.650	A	方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡） A：残存値、B：推定値	
	3.99	3.89	59.00	A：11.413　　B：	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド			礫	不明	
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-63.52° -N	北西壁	

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.33×0.25	21.20	楕円形	
P2	0.41×0.38	16.40	不整形	

第50表　24号竪穴建物跡土層観察表

Q-Q'・R-R'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/1黒色土	2	4	10YR7/8黄橙色土粒1% 炭化物塊1%	
2	10YR3/1黒褐色土	2	4	10YR7/8黄橙色土粒5% 炭化物塊20% 焼土粒1%	
3	10YR2/1黒色土	2	4	10YR7/8黄橙色土粒1%	
4	10YR2/1黒色土	2	4	10YR1.7/1黒色土塊5% 10YR7/8黄橙色土塊5%	
5	10YR3/2黒褐色土	2	4	風化花崗岩粒3%	貼床

S-S'・T-T'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR6/8明黄褐色粘土	5	5	黒褐色土ブロック5%	被熱痕あり カマド構築土
2	10YR3/1黒褐色土	2	2	黄褐色土粒5%	
3	5YR5/3にぶい赤褐色土	2	2	焼土ブロック10%	
4	5YR4/6赤褐色土	2	2	黒褐色土10%	
5	10YR3/4暗褐色土	2	2	黄褐色土粒5%	
6	5YR4/4にぶい赤褐色土	2	4	炭化物ブロックφ1cm3%	
7	10YR2/3黒褐色土	2	4		貼床土
8	10YR3/3暗褐色土	2	4		貼床土
9	10YR5/4にぶい黄褐色粘土	5	5	焼土3%	袖部
10	10YR2/2黒褐色土	2	3		抜取痕堆積土
11	10YR3/1黒褐色土	2	2		2層に類似

25号竪穴建物跡（第40・41図、写真図版30・44・60・70・72）

＜検出状況＞谷状地形範囲のうち標高の高い西側で、24号竪穴建物跡の北東から、カマド構築材と方形の黒褐色～暗褐色プランを検出した。また、26号竪穴建物跡との重複も想定される範囲で、検出時に26号竪穴建物跡との境界が明瞭に観察可能で、25号が新しいとの認識で掘削を開始した。

＜規模・形状＞平面形は方形である。東側が26号竪穴建物跡と重複している。規模は23・24号と同規模で中型の範疇である。

＜堆積土＞黒色～黒褐色土主体である。Ⅳ層に由来する黄褐色土と風化花崗岩粒が微量混入する。５層直下が床面である。貼床堆積土は８層で建物中央部は薄く、外縁部が厚い。

＜構成要素・付属施設＞カマド1基、柱穴４個を検出した。なお、Pit ４の北西に26号竪穴建物跡のPit ６が位置する。カマドは西壁中央に設置されている。カマドの構築粘土材はにぶい黄褐色粘土が微量混入するが、黒褐色土主体である。煙道部は西壁面をトンネル状に刳り貫いている。燃焼部は大礫を芯材としている。柱穴は４個とも主柱穴と考えられる。

＜重複関係＞26号竪穴建物跡と重複し、本遺構の東側が26号竪穴建物跡を切る。

＜遺物分布＞床面上では、カマド周辺と床面南側に分布していた。

＜遺物＞

【縄文・弥生土器】24～26の堆積土出土資料を図示した。24は縄文中期大木8式、25は縄文後期か弥生土器と考えられる。26は弥生後期の赤穴式に特徴的な沈線文と刺突文がみられる。

【土師器】235～237の３点を図示した。いずれも床面出土の壺である。235は最大径が胴部中央にあるハケ調整の壺である。236は最大径が胴下部にあるタイプである。237はナデ調整で最大径は胴部中央から下部にあると考えられる。

【石器】358・359・395は堆積土出土資料である。358・359は頁岩製打製石斧である。395は表裏面に磨面を有する方割石の可能性がある。

＜時期＞遺構の特徴と重複関係から、８世紀中頃～後半と考えられる。

26号竪穴建物跡（第42・43図、写真図版31・44・61）

＜検出状況＞谷状地形範囲のうち標高の高い西側で、25号竪穴建物跡の東側から、カマド範囲とその脇に赤彩壺が出土したことから、建物範囲として検出を行った。その結果、25号竪穴建物と重複する長方形の黒褐色プランを検出した。

＜規模・形状＞平面形は長方形で、建物コーナー部分は角張る。主柱穴が６個ある。カマドが建物短軸にあたる西壁に設置されている。カマド焚口前にPit ７が位置する。床面の硬化は顕著ではなかった。規模は中型で床面積が３・９号竪穴建物跡とほぼ同じであるが、これらの竪穴建物跡とは形状が異なる。

＜堆積土＞黒色～黒褐色土主体である。Ⅳ層に由来する黄褐色土が微量混入する。重機による粗掘段階で厚めに掘削したため上部堆積土が削られたと考えられる。残存した堆積土は床上と貼床部の２層に分離した。貼床堆積土は標高の高い西側は薄く、東側は厚い。

＜構成要素・付属施設＞カマド1基、柱穴７個を検出した。カマドは西壁中央に設置されている。カマド燃焼部に構築粘土材が残存していたが、芯材は見られなかった。支脚として転用された甕（240）が燃焼部に設置されていた。煙道部は掘込式と考えられる。柱穴はPit １～６が主柱穴である。Pit ６は25号竪穴建物跡の掘形調査時に検出した。

＜重複関係＞25号竪穴建物跡と本遺構南西部が重複し、本遺構が切られる。また、28号竪穴建物跡カ

マド煙出部と重複し、本遺構の堆積土がこれを切る。したがって、28号→26号→25号竪穴建物跡の新旧関係と考えられる。

＜遺物分布＞床面上では、カマド周辺とカマド右脇に遺物の密集が見られた。

＜遺物＞

【縄文・弥生土器】27は、弥生後期の深鉢片である。

【土師器】238～243の７点を図示した。238・239は壺、240～243は甕である。240がカマド内の支脚転用土器で、胴上部を欠損する。器面調整はヘラナデ範囲が認識できるが、摩耗が著しい。238・242・243は床面出土、239・241は堆積土出土である。238は小型の赤彩壺で、口縁部を梯子状に赤色塗布する。口唇は受口状となり、胴部は肩が張るタイプである。241・242の甕は最大径が口縁部にある。外面のハケ調整は胴上部から底部にかけて縦方向で統一され、内面の調整は横方向が主体である。

＜時期＞遺構の特徴と重複関係、出土遺物の年代から、８世紀前半～中頃と考えられる。

第51表　25号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45768.824 Y＝ 94486.945	ⅡB7b	Z＝16.780	A	方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	4.35	4.13	58.90	A：14.510　B：	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	1.22×0.37	0.64×0.79			
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-62.94°-N	北西壁	

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.21×0.19	46.00	楕円形	
P2	0.29×0.26	39.80	円形	
P3	0.33×0.29	39.00	楕円形	
P4	0.27×0.23	27.80	楕円形	

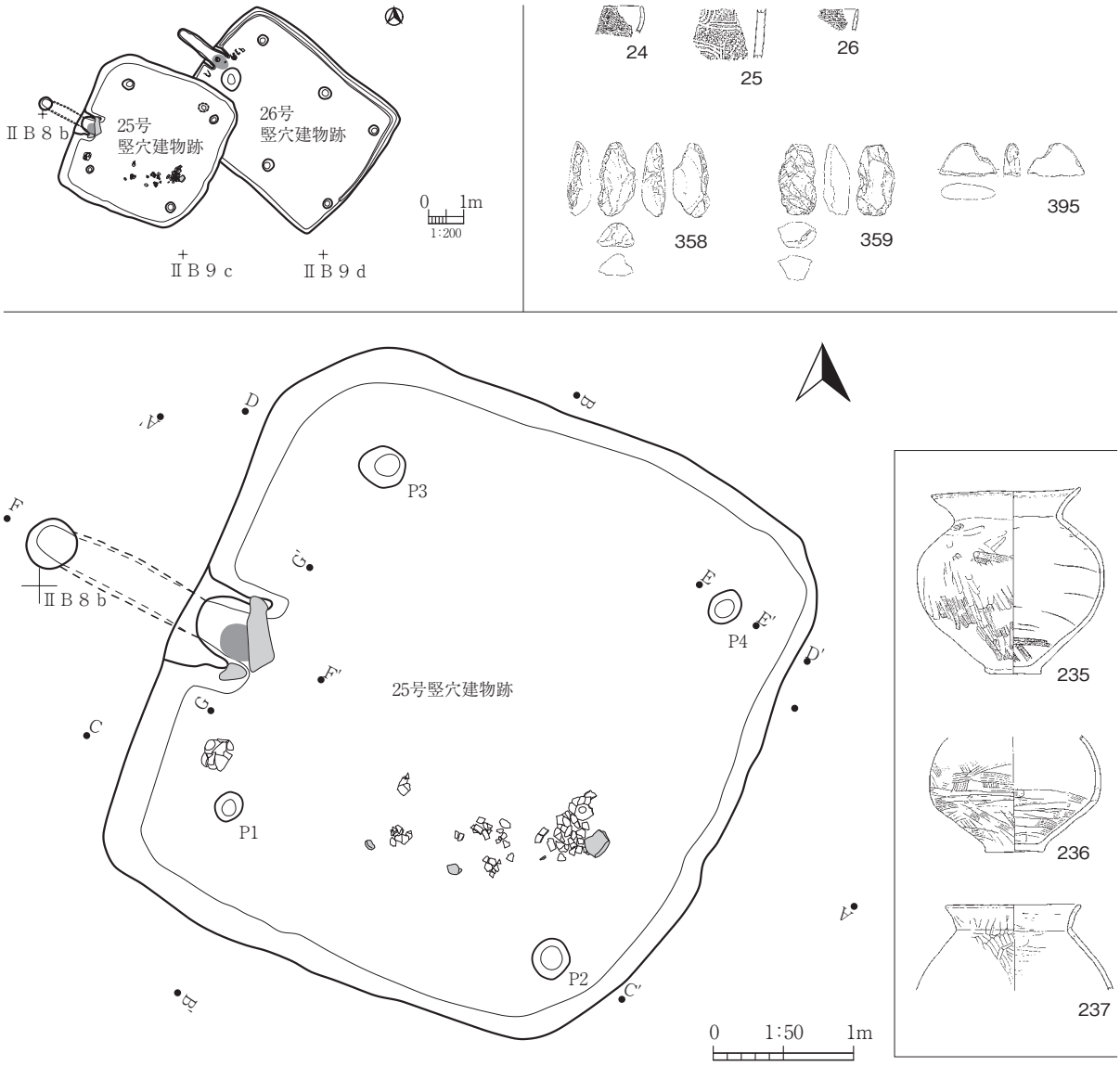
第52表　25号竪穴建物跡土層観察表（１）

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色シルト	2	4	黄褐色土粒及びブロック小5%	木根の撹乱
2	10YR2/1黒色シルト	2	4	花崗岩風化粒極小1 ～ 3%	
3	10YR3/3暗褐色シルト	2	4	黄褐色土粒及びブロック小～中10%	周堤の流れ込み？
4	10YR2/2黒褐色シルト	2	4	花崗岩風化粒極小1%未満	
5	10YR2/2黒褐色シルト	2	5	花崗岩風化粒極小5%	一部花崗岩風化砂層含む
6	10YR3/4暗褐色シルト	1	4	花崗岩風化粒極小5%	
7	10YR2/1黒色シルト	2	4	花崗岩風化粒極小1%未満	
8	10YR3/1黒褐色シルト	2	5	黄褐色土ブロック小1% 花崗岩風化粒極小1%	
9	10YR3/2黒褐色シルト	2	5	黄褐色土ブロック小10%	
10	10YR2/1黒色シルト	2	4		

C-C'・D-D'・E-E'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	7.5YR2/2黒褐色シルト	2	5	風化花崗岩粒極小1%	
2	10YR2/3黒褐色シルト	2	4	黄褐色土粒極小1 ～ 3%	
3	7.5YR2/2黒褐色シルト	1	5	風化花崗岩粒極小1%	
4	7.5YR2/2黒褐色シルト	2	5	風化花崗岩粒極小1%	
5	10YR2/2黒褐色シルト	2	4	黄褐色土粒極小3%	



第40図　25号竪穴建物跡（１）

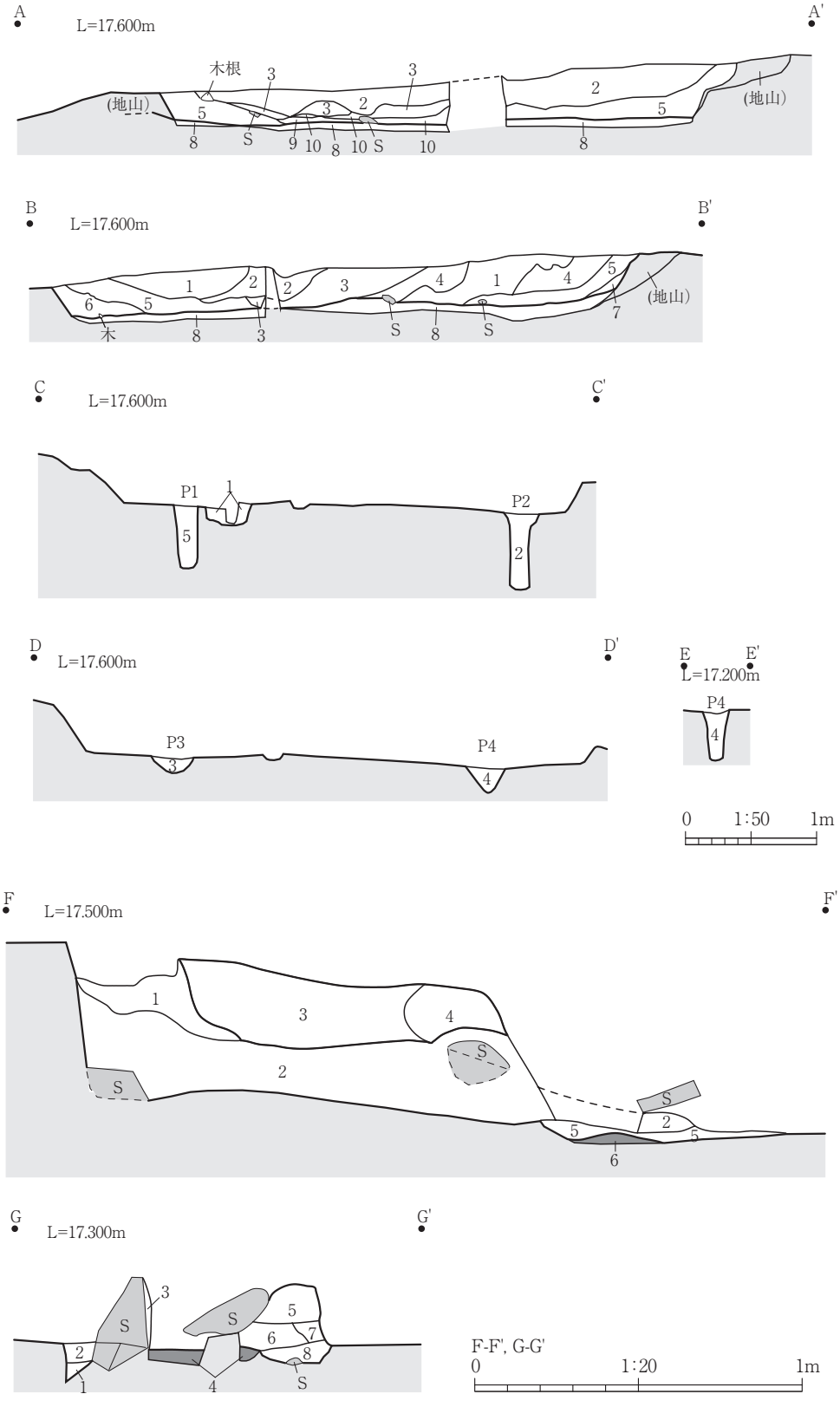
第52表　25号竪穴建物跡土層観察表（２）

F-F'

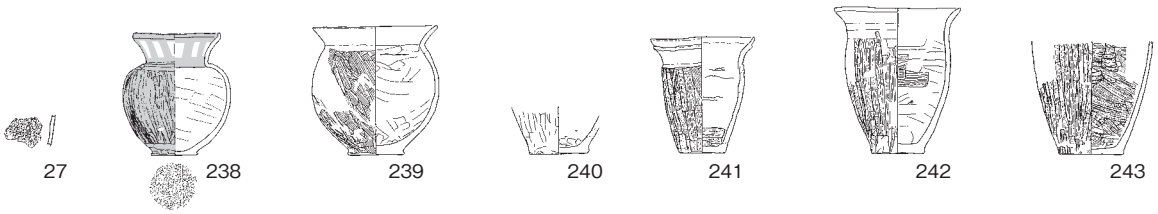
層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR4/3にぶい黄褐色シルト	2	4	黄褐色土ブロック小～中1 ～ 3%	
2	10YR2/2黒褐色シルト	2	4	黄褐色土粒極小1 ～ 3%	
3	10YR2/2黒褐色シルト	2	5	花崗岩風化粒極小1 ～ 3%	地山
4	10YR2/1黒色シルト	2	5	花崗岩風化粒極小1 ～ 3%	地山
5	7.5YR3/4暗褐色シルト	1	4	焼土粒極小～小3% 炭化物粒極小～小1 ～ 3% 黄褐色土粒極小1 ～ 3%	
6	5YR4/4にぶい赤褐色シルト	1	4		焼成面

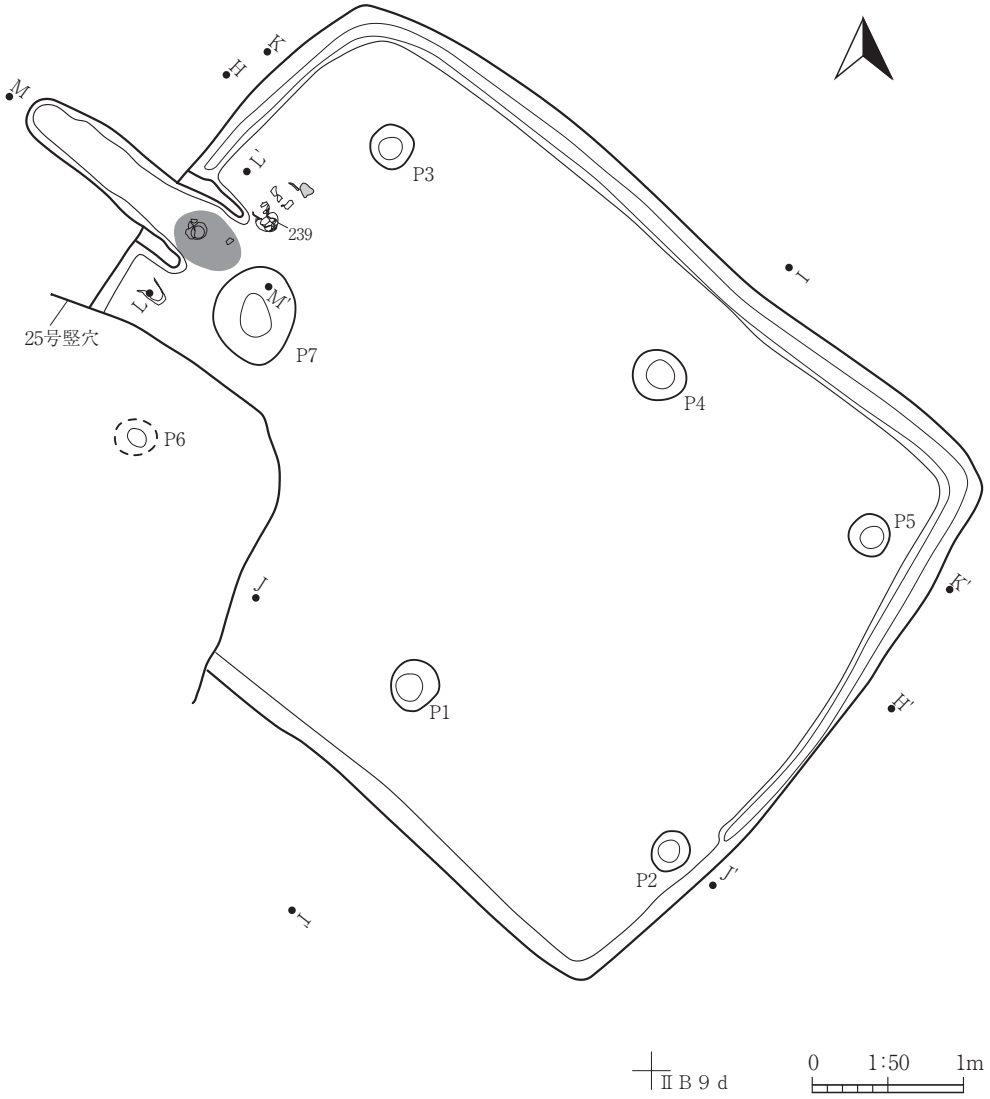
G-G'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/1黒色シルト	2	5		
2	10YR2/3黒褐色シルト	2	4	黄褐色土粒極小3% 焼土粒極小3%	
3	10YR2/2黒褐色シルト	2	4	花崗岩風化粒極小1%	
4	7.5YR3/3暗褐色シルト	1	5	焼土粒極小3 ～ 5% 炭化物粒極小3 ～ 5%	F-F'の6層対応
5	10YR2/3黒褐色シルト	2	5	花崗岩風化粒極小3%	
6	10YR2/2黒褐色シルト	2	5		
7	10YR4/6褐色シルト	2	5		
8	10YR3/3暗褐色シルト	1	5	黄褐色土粒極小～小3%	貼床土？



第41図　25号竪穴建物跡（2）





第42図　26号竪穴建物跡（1）

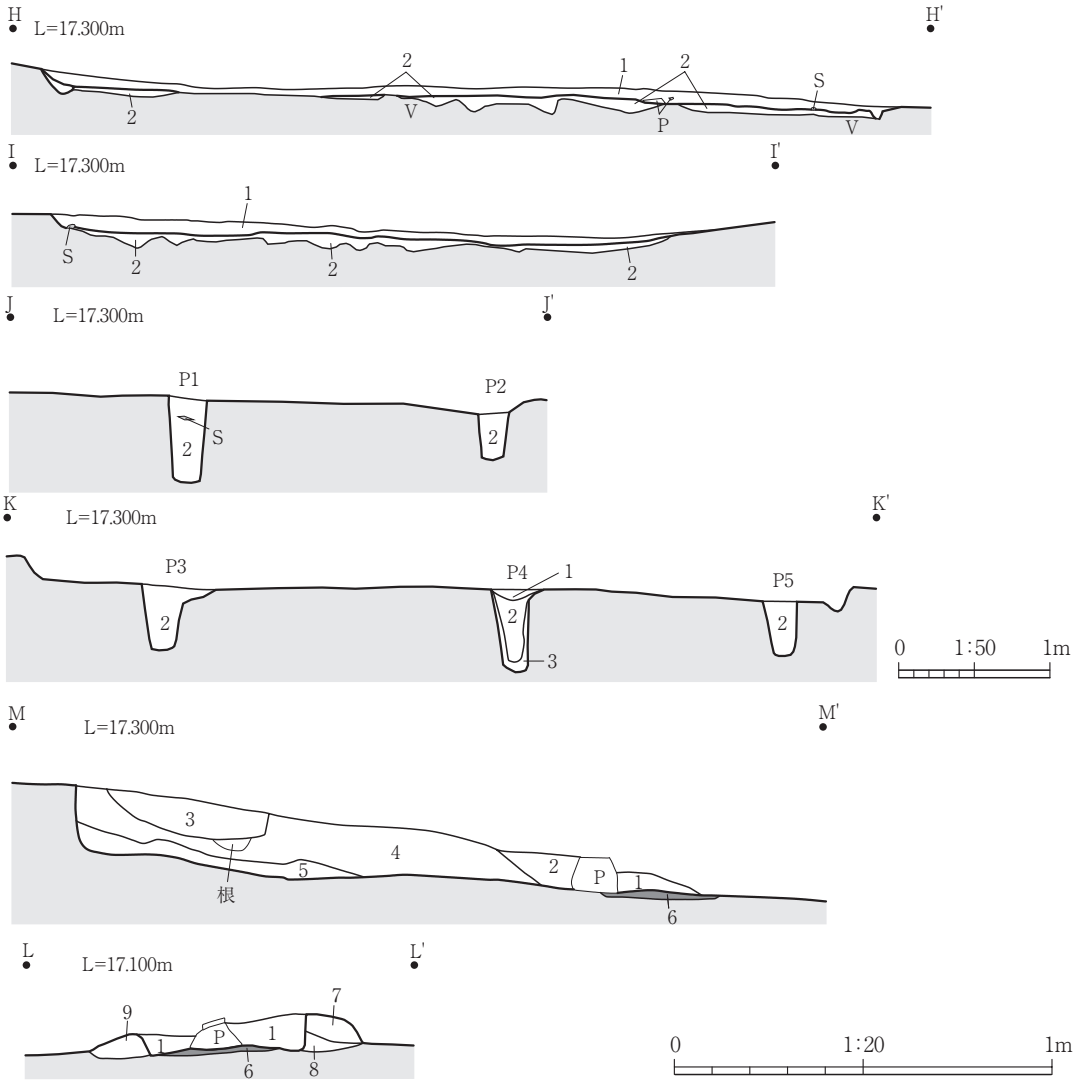
第53表　26号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝−45768.242 Y＝　94491.203	ⅡＢ７ｃ	Ｚ＝16.83	Ａ	方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）Ａ：残存値、Ｂ：推定値	
	5.63	4.282	33.5	Ａ：20.923　Ｂ：21.701	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	1.06×0.38	0.53×0.68			
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
			W-52.15°-N	北西壁	

	最大幅（m）	床面からの深（cm）
壁溝	0.12	36.6

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.33×0.31	50.60	円形	
P2	0.27×0.23	50.40	円形	
P3	0.27×0.27	47.00	円形	
P4	0.35×0.33	55.40	方形	○
P5	0.29×0.27	35.60	円形	
P6	0.29×0.23	21.60	楕円形	
P7	0.65×0.56	17.40	不整形	



第43図　26号竪穴建物跡（２）

第54表　26号竪穴建物跡土層観察表

H-H'・I-I'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色シルト	0	3	風化花崗岩粒3～5%	
2	10YR3/2黒褐色土	2	5	風化花崗岩粒10%	貼床部

J-J'・K-K'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色シルト	2	4	黄褐色土粒極小～小3%	
2	10YR3/3暗褐色シルト	2	5	黄褐色土粒極小10%	
3	10YR4/4褐色シルト	2	4	風化花崗岩粒1%	

L-L'・M-M'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/3暗褐色土	2	2	焼土10%、カマド崩落土30%	燃焼部堆積土
2	10YR2/2黒褐色土	2	2	焼土粒3%、カマド崩落土5%	燃焼部堆積土
3	10YR3/3暗褐色土	2	2	焼土粒3%、炭化物粒1%	
4	10YR3/1黒褐色土	2	2		
5	10YR5/4にぶい黄褐色土	2	4		
6	5YR4/6赤褐色土	1	5	炭化物粒3%	燃焼部焼土
7	10YR6/6明黄褐色土	3	5		袖部
8	10YR3/3暗褐色土	2	2		建物貼床部？
9	10YR3/3暗褐色土	2	2		建物貼床部？

27号竪穴建物跡（第44図、写真図版32・62・70）

＜検出状況＞谷状地形範囲のうち標高の高い西側で、26・28号竪穴建物跡の東側から、カマド範囲が検出された。木根の多い範囲であり、検出範囲東半部は沢地形により流出が予想された。

＜規模・形状＞平面形は長方形と考えられるが、木根やカクランによって建物壁長が把握できなかったため規模は不明である。南東部と北東部は消失していた。

＜堆積土＞黒褐色土主体である。Ⅳ層に由来する黄褐色土が微量混入する。貼床堆積土は標高の高い西側は薄く、東側は厚い。

＜構成要素・付属施設＞カマド1基、柱穴３個を検出した。カマドは北西壁中央に設置されたと考えられる。カマド構築粘土は煙道部～燃焼部上部まで混入していたが、構築土の主体は黒褐色～褐色土であった。芯材に礫が使われている。煙道部は掘込式と考えられる。柱穴はPit １・２が主柱穴と考えられる。

＜重複関係＞視認可能な重複関係はない。建物外縁部に周堤帯が存在していたと仮定すると、28号竪穴建物跡との重複関係が想定される。

＜遺物分布＞カマド周辺に遺物の密集が見られた。カマド内で遺物が出土しているが、支脚として原位置を保持した遺物はなかった。

＜遺物＞

【土師器】244～254の11点を図示した。244～247は坏、248～254は甕である。245・248・250・252がカマド内出土、244・246・247・249・251・253・254が堆積土出土である。坏は丸底有段で占められる。247は内面のミガキ方向が口縁は横方向で胴～底部が縦方向である。また外底面に線刻がある。カマド内の支脚として原位置を保持した遺物はなかったが、胴下部～底部残存資料である248と250は支脚転用甕の可能性が考えられる。253・254の長胴甕は最大径が口縁にあるが、胴部最大径mの近似値である。

【石器】361の頁岩製打製石斧と363の頁岩製磨製石斧と370の花崗岩製敲磨器は堆積土出土である。370の敲打痕は素材長軸両端部に集中している。

＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、７世紀末～８世紀前半と考えられる。

第55表　27号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45765.781 Y＝ 94498.477	ⅡＢ７e	Z＝16.440	A	方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	4.12	2.88	34.00	A：7.989　B：	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	1.05×0.57	0.59×0.85	礫	横位2個	甕
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-52.70°-N	北西壁	

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡	
P1	0.33×0.30	44.60	楕円形		
P2	0.41×0.36	19.20	方形		
P3	0.55×0.36	30.20	方形		

第56表　27号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

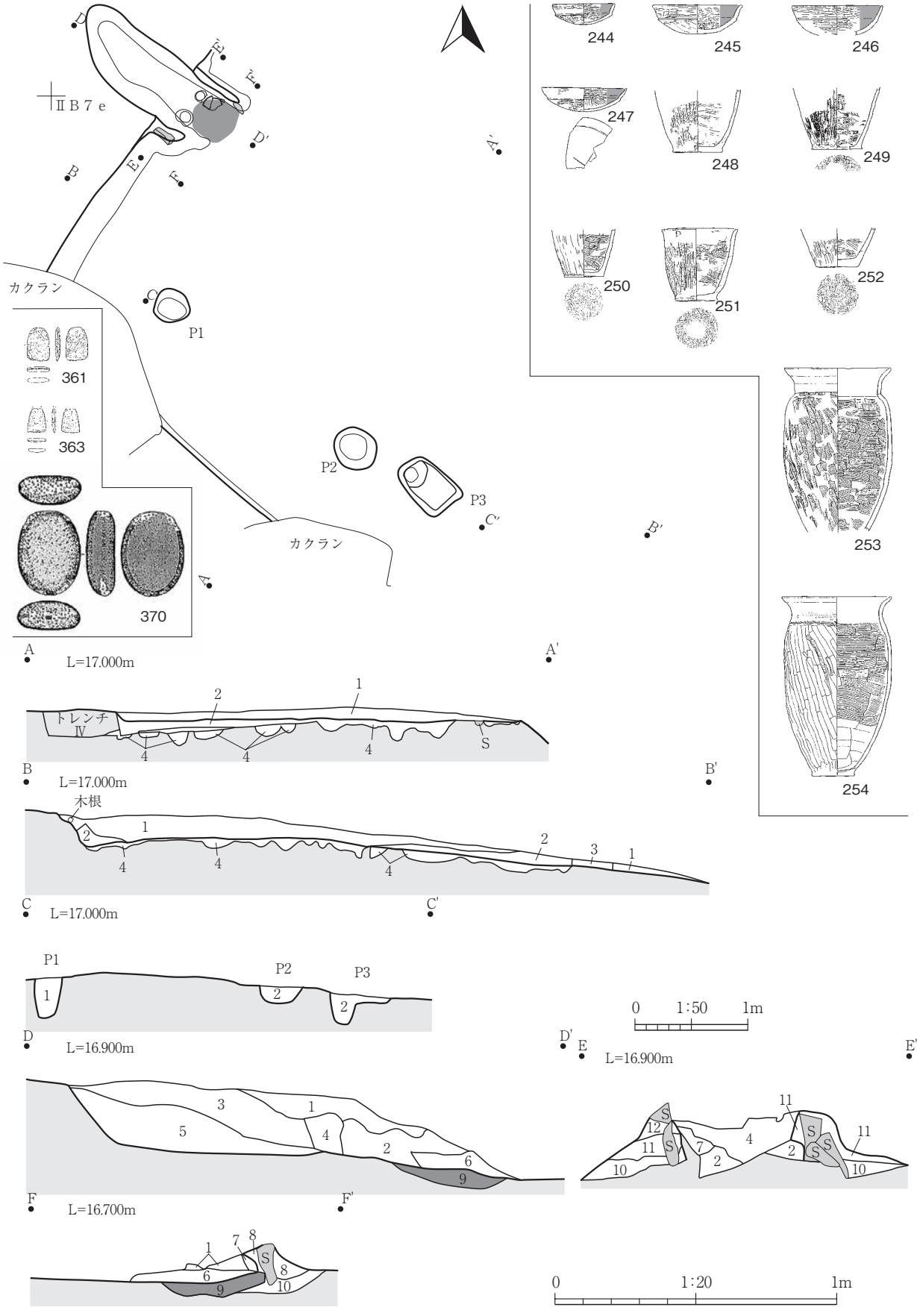
層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色シルト	2	3	風化花崗岩粒3%	
2	10YR2/3黒褐色シルト	1	3	風化花崗岩粒1%	
3	10YR2/3黒褐色シルト	2	4	風化花崗岩粒極小1%	
4	10YR3/2黒褐色土	2	5	風化花崗岩粒3%	貼床部

C-C'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2		
2	10YR3/1黒褐色土	2	2		

D-D'・E-E'・F-F'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2	黄褐色粘土3%	
2	10YR3/2黒褐色土	2	2	焼土1%	
3	10YR2/2黒褐色土	2	2		
4	10YR4/6褐色土	5	4		崩落土
5	10YR3/3暗褐色土	2	2	黄褐色土3%	
6	5YR4/6赤褐色土	2	3	炭化物粒1%	
7	10YR4/4褐色土	5	5	焼土3%	
8	10YR3/1黒褐色土	2	2		
9	10YR5/8黄褐色土	2	4		燃焼部焼土
10	10YR3/2黒褐色土	2	2		
11	10YR7/6明黄褐色粘土	5	4		袖部
12	10YR2/2黒褐色土	2	2		



第44図　27号竪穴建物跡

28号竪穴建物跡（第45・46図、写真図版33・44・63・70・73・74）

＜検出状況＞谷状地形範囲のほぼ中央部で、26号竪穴建物跡の南東側から、カマド範囲と方形の黒～黒褐色土が検出された。検出範囲北東側一部はカクランされていた。

＜規模・形状＞平面形は長方形で、カマドは北西壁に設置され、建物短軸側である。主柱穴は６個で、壁溝は北西壁で一部途切れている。四隅コーナーは角が明瞭である。規模は中型の範疇である。

＜堆積土＞黒褐色土主体である。最上位の第１層中に焼土粒が混入しており、カマド範囲崩落による焼土流出が建物廃絶後に進行したと考えられる。

＜構成要素・付属施設＞カマド1基、柱穴６個を検出した。カマドは北西壁中央に設置されている。カマド構築粘土は燃焼部崩落範囲に混入しており、煙道内には堆積していなかった。煙道部は建物壁のⅤ層を刳貫いて構築されたトンネル式であり、煙出上部は26号竪穴建物跡の掘形ラインで削平されている。燃焼部の芯材は礫で、支脚転用の甕が横位に２個配置されている。柱穴６個は主柱穴である。平面形は円形が主体であるが、Pit06は平面形が長方形で、抜取痕状の堆積であった。

＜重複関係＞26号竪穴建物跡の掘形調査時に、本遺構カマド煙出部が確認されたことから、本遺構が古く、26号竪穴建物跡が新しいと考えられる。また、建物外縁部に周堤帯が存在していたと仮定すると、27号竪穴建物跡との重複関係が想定される。

＜遺物分布＞カマド周辺と建物中央部、南東壁周辺に遺物の密集が見られた。カマド内で258と260の土師器甕が支脚に転用されている。

＜遺物＞

【縄文・弥生土器】28・29は堆積土出土で、縄文中期大木７式の範疇である。

【土師器】255～268の14点を図示した。255～257は坏、258～268は甕である。258・260がカマド内出土、266・268が床面出土、255～257・259・261～265・267が堆積土出土である。坏は丸底有段だが、内面の段は明瞭ではない。口縁部が残存する甕のうち、262を除いて最大径が口縁にある。266・267は長胴甕で、口縁部が外傾する。頸部に屈曲はあるものの、明瞭な段を形成していない。支脚転用の258・260は残存器高が異なり、258が10.3㎝、260が16.4㎝であるが、燃焼部内で標高は258が260よりも高い位置に設置されている。

第57表　28号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45772.621 Y＝ 94496.180	ⅡB8d	Z＝16.220	A	方形
	長（m）	幅（m）	深（㎝）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	6.12	5.88	44.90	A：31.693　B：	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	1.19×0.31	0.89×0.88	礫	横位2個	甕
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-57.09° -N	北西壁	

	最大幅（m）	床面からの深（㎝）
壁溝	0.13	33.80

	規模（m）	深（㎝）	底面形状	柱痕跡
P1	0.30×0.29	25.60	方形	○
P2	0.25×0.21	17.40	楕円形	○
P3	0.33×0.29	38.80	方形	
P4	0.34×0.32	36.20	円形	
P5	0.29×0.24	20.40	楕円形	
P6	0.39×0.29	42.20	不整形	

第58表　28号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/1黒色土			焼土粒 炭化物粒1%	
2	10YR2/2黒褐色土			10YR7/8黄橙色土粒5%	
3	10YR3/1黒褐色土			焼土粒 炭化物粒3%	
4	10YR2/2黒褐色土			10YR7/8黄橙色土塊3%	
5	10YR2/2黒褐色土			10YR7/8黄橙色土粒20%	
6	10YR3/1黒褐色土	2	4	10YR6/8明黄褐色土塊15% 10YR2/1黒色土塊10%、焼土粒1% 炭化物粒1%	貼床

C-C'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/3暗褐色シルト	0	2	黄褐色土粒極小1%	
2	10YR6/8明黄褐色シルト	0	5		
3	10YR3/2黒褐色シルト	0	4		
4	10YR2/3黒褐色シルト	2	5	花崗岩風化粒極小1%	

D-D'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/3黒褐色シルト	2	5	花崗岩風化粒極小1%	
2	10YR4/4褐色シルト	0	4	黒色土粒極小5%	
3	10YR2/3黒褐色シルト	0	5	花崗岩風化粒極小1%	
4	10YR2/2黒褐色シルト	0	5	花崗岩風化粒極小3%	

E-E'・F-F'・G-G'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/3暗褐色土	2	2	焼土粒3% 炭化物粒1%	
2	10YR3/2黒褐色土	2	2		
3	5YR3/6暗赤褐色土	2	2	焼土粒3%	
4	5YR4/6赤褐色土	2	4	炭化物粒3%	
5	10YR3/3暗褐色粘土	5	5		抜取痕堆積土
6	10YR4/6褐色土	2	4		袖部
7	5YR3/6暗赤褐色土	2	4		袖部
8	10YR7/6明黄褐色粘土	5	4		袖部
9	10YR7/6明黄褐色粘土	5	5		カマド崩落土
10	10YR3/1黒褐色土	2	2		
11	10YR3/2黒褐色土	2	2		
12	10YR2/2黒褐色土	2	2	焼土粒1%	
13	10YR3/1黒褐色土	2	2		

【石器】353は堆積土出土の頁岩製掻器である。375は床面出土の磨石で被熱の可能性のある痕跡が裏面下半に残存している。394は床面出土の敲石である。

【土製品】410は床面出土の紡錘車である。

【鉄製品】422は堆積土出土の刀子で、柄の木質部が残存している。

＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、７世紀末～８世紀前半と考えられる。

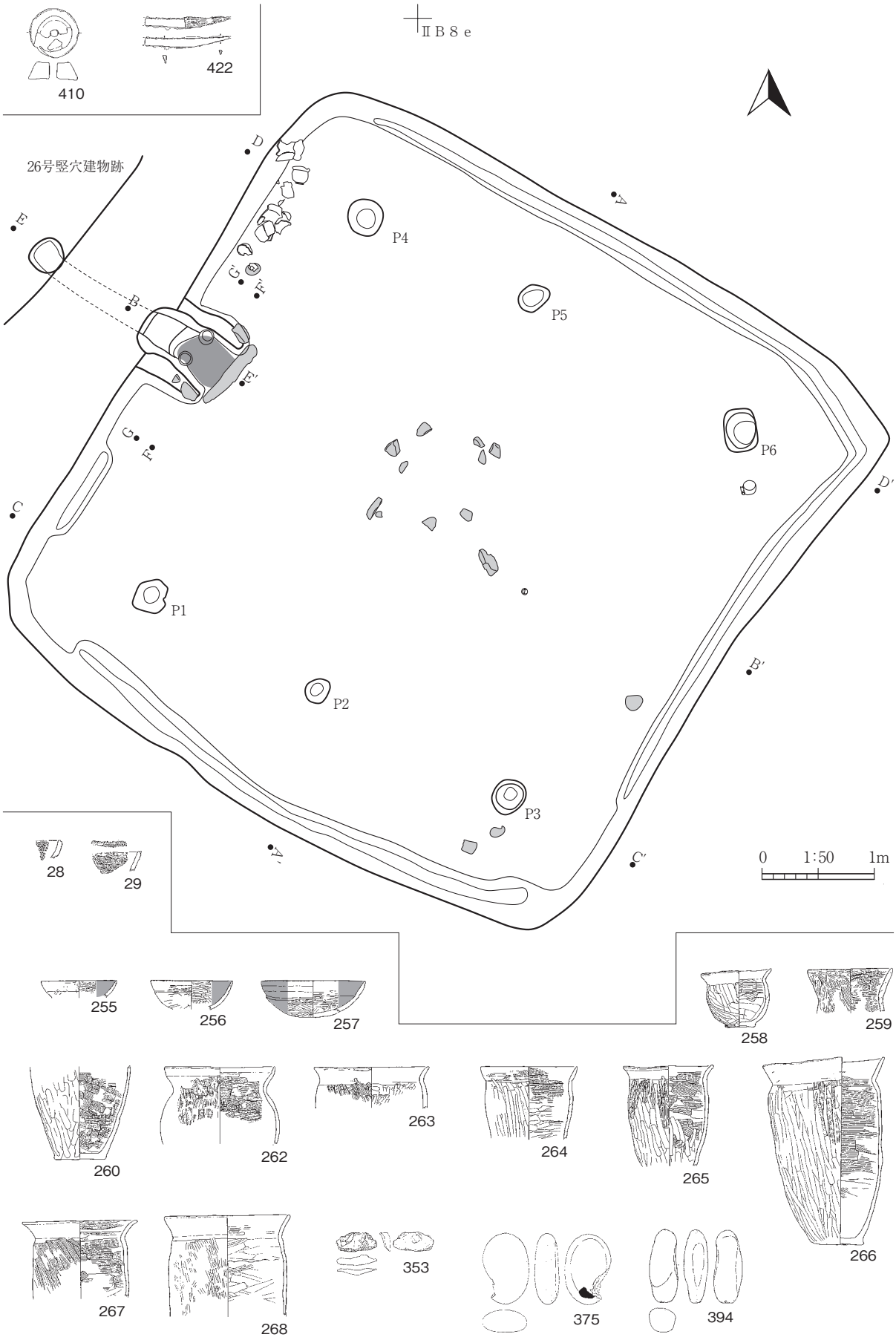
29号竪穴建物跡（第47図、写真図版34）

＜検出状況＞谷状地形範囲の西側で、23・24号竪穴建物跡の南側から、カマド範囲が検出された。建物が方形と想定して検出作業をおこなったが、カマド範囲以外は削平が進んでいた。22号竪穴建物跡と同様に、西側にあたる斜面上方での壁の立ち上がりが不明瞭であった。

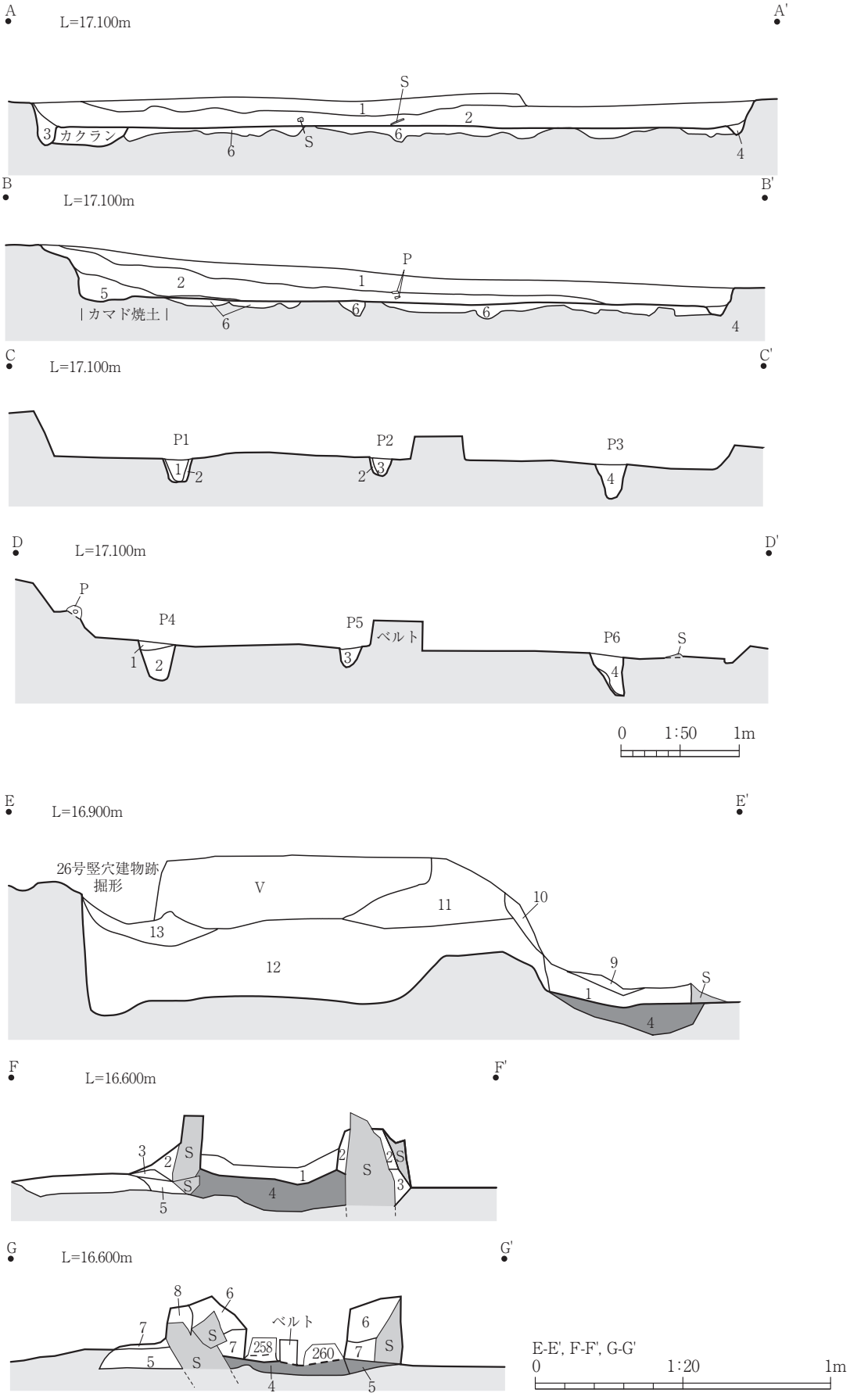
＜規模・形状＞平面形は方形と考えられるが、カマド設置壁以外は消失している。カマド設置壁も北半は明瞭であったが、南半はサブトレンチを複数設置して確認作業を行ってみたが不明瞭であった。

＜堆積土＞黒褐色土主体である。黄褐色土が微量混入している。

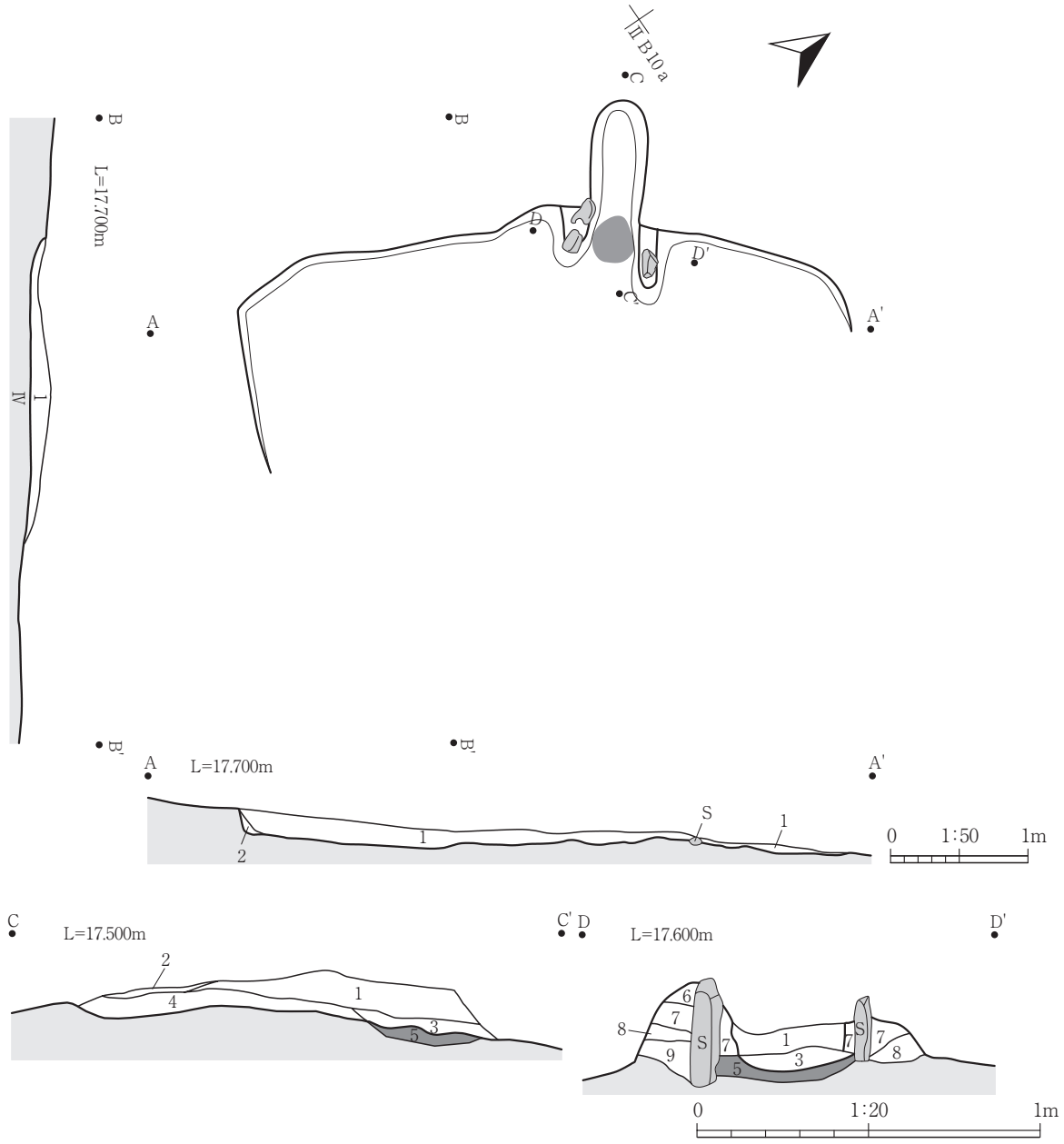
＜構成要素・付属施設＞カマド1基を検出した。カマドは北西壁に設置されている。燃焼部の芯材は



第45図　28号竪穴建物跡（1）



第46図　28号竪穴建物跡（2）



第47図　29号竪穴建物跡

礫で、カマド構築土は明黄褐色粘土と黒褐色土が交互に積み上げられている。

＜時期＞遺構の特徴から、７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

第59表　29号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45777.898 Y＝ 94481.625	ⅡB10a	Z＝17.200	不明	方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	4.45	1.42	33.70	A：5.276　B：	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	0.87×0.40	0.54×0.84	礫	不明	
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
			W-53.38°-N	北西壁	

第60表　29号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色土	3	3	黄褐色土ブロック1%	
2	10YR3/3暗褐色土	2	2		

C-C'・D-D'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色土	2	2	5YR5/8明赤褐色焼土塊30% 10YR4/6褐色粘土質土10% 炭化物粒 焼土粒1%	
2	7.5YR4/6褐色土	2	2		焼土層
3	7.5YR4/6褐色土	0	5	10YR2/2黒褐色土15%	焼土層
4	10YR2/2黒褐色土	2	2		
5	5YR5/8明赤褐色土	2	5	骨片状白色粒1%	燃焼部焼土層
6	10YR7/8黄橙色粘土	5	5		袖部
7	10YR3/1黒褐色土	2	4	黄褐色土粒3%	袖部
8	10YR7/6明黄褐色粘土	5	5	焼土粒1%	袖部
9	10YR3/1黒褐色土	2	4		袖部

30号竪穴建物跡（第48・49図、写真図版35・36・44・64・70・73）

＜検出状況＞谷状地形範囲のほぼ中央部で、37号竪穴建物跡と重複していた。建物壁ラインは北西と北東が明瞭で、南西と南東が不明瞭であった。方形の黒～黒褐色土が検出された。検出範囲南東端部はカクランされていた。

＜規模・形状＞平面形は長方形で、四隅は丸みを帯びる。カマドは建物短軸にあたる北西壁に設置されている。規模は中型の中でも大きい部類に入る。

＜堆積土＞黒褐色土主体である。硬質面上は、風化花崗岩粒が混入し、他の竪穴建物跡床面よりも硬く締まっていた。堆積土の観察から、37号竪穴建物跡とは床面の高さが明瞭に異なる。

＜構成要素・付属施設＞カマド1基、柱穴13個、壁溝、間仕切溝もしく転ばし根太痕と考えられる溝跡を５条検出した。カマドは北西壁中央に設置されている。37号竪穴建物跡にカマド東側の燃焼部が破壊されている。カマド構築粘土は燃焼部から煙道内に堆積していた。燃焼部～煙道部南半までは礫を芯材とするトンネル形状が良好に残存していた。本遺跡検出の他のカマドと異なり、燃焼部範囲が縦長となる。カマド内から甕片が出土したが、支脚転用甕はなかった。主柱穴は４個で、壁溝はカクラン範囲以外で検出されたことから全周すると考えられる。間仕切溝もしくは転ばし根太痕跡と考えられる溝は主柱４個のうち、３個に接している。床の硬質面は主柱穴に囲まれた範囲を中心に分布する。Pit12・13は梯子穴の可能性が考えられる。

＜重複関係＞37号竪穴建物跡と重複し、本遺構が古い。本遺構のカマド燃焼部が37号竪穴建物跡西壁に構築時に削られていることと、断面観察により判断できた。床面標高は37号竪穴建物跡が高く、本遺構が低い。

＜遺物分布＞カマド周辺と建物中央部に遺物の密集が見られた。

＜遺物＞

【縄文・弥生土器】30・31・32は堆積土出土の弥生後期の土器で、RL縄文、刺突文、沈線文を特徴とする。

【土師器】269～282の14点を図示した。269～272は坏、273・274は高坏、275は壺、276～282は甕である。269～273・275～282が堆積土出土、274が貼床内出土である。坏は小型の丸底有段だが、内面の段は明瞭でない。273の高坏は脚部が中空である。275の壺は胴部中央に最大径を有し、口縁部は受け口状となっている。甕はハケ調整の長胴甕で、最大径が口縁部にある。ハケ調整後にミガキのある

のは282のみである。甕は口縁外傾（276～280）と受け口状（281・282）に分かれる。

【石器】369は堆積土出土の蛇紋岩製敲磨器である。379は堆積土出土の花崗斑岩製磨石で、偏平面な磨面上に黒色付着物がみられる。396は堆積土出土の磨石素材と考えられる。縁辺の敲打痕は器体成形途上の痕跡と考えられる。

【土製品】411・412は堆積土出土の紡錘車である。

＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、７世紀末～８世紀前半と考えられる。

第61表　30号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝−45778.430	ⅡB9b	Z＝16.320	A	方形
	Y＝ 94489.750				
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	6.35	5.54	62.60	A：27.491　B：28.268	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	1.43×0.64	0.45×	礫	不明	
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-42.02° -N	北西壁	

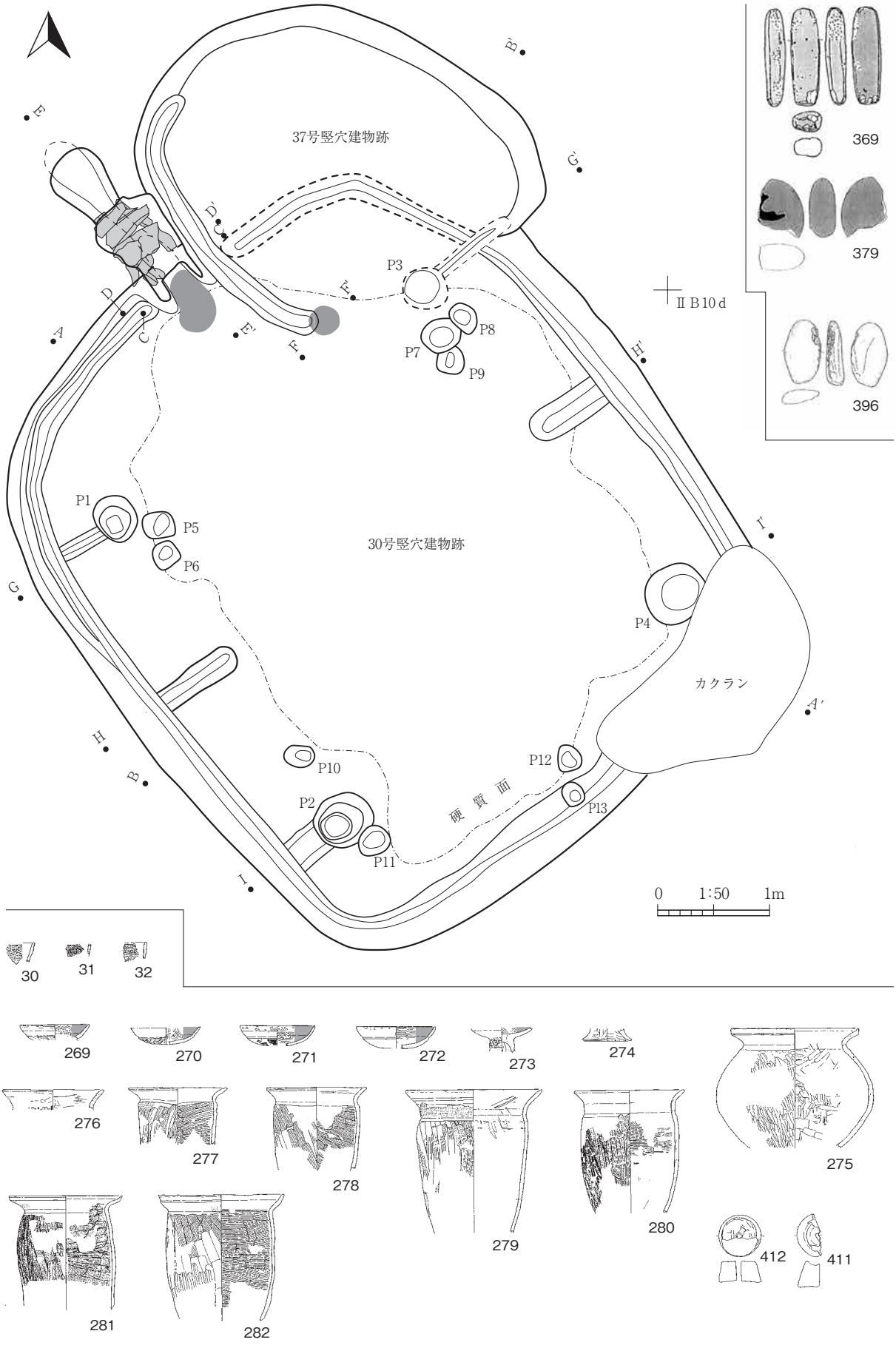
	最大幅（m）	床面からの深（cm）
壁溝	0.1	25.20

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.43×0.36	52.20	方形	
P2	0.52×0.47	49.80	楕円形	
P3	0.41×0.40	58.80	円形	
P4	0.56×0.50	29.50	円形	
P5	0.29×0.23	32.80	楕円形	
P6	0.24×0.22	17.80	不整形	
P7	0.32×0.31	53.40	楕円形	
P8	0.29×0.21	16.20	方形	
P9	0.25×0.24	27.20	楕円形	
P10	0.28×0.20	34.80	不整形	
P11	0.30×0.25	25.20	楕円形	
P12	0.25×0.23	21.20	不整形	
P13	0.22×0.19	23.00	円形	

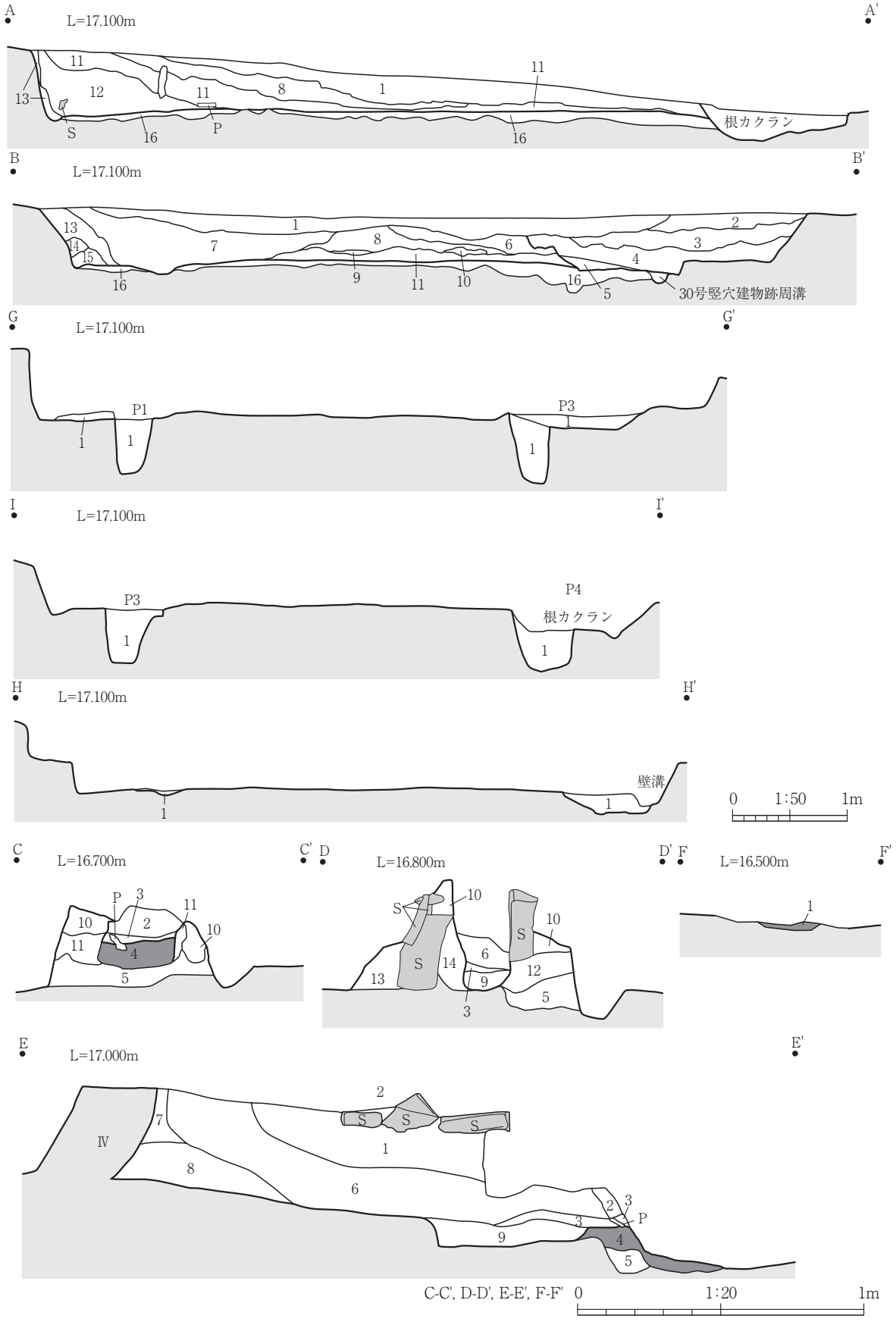
第62表　30号竪穴建物跡土層観察表（１）

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色土	0	3	花崗岩粒3%	37号竪穴建物跡堆積土
2	10YR2/3黒褐色土	0	2	花崗岩粒1%	37号竪穴建物跡堆積土
3	10YR3/2黒褐色土	0	2	花崗岩粒1%	37号竪穴建物跡堆積土
4	10YR3/1黒褐色土	0	5		37号竪穴建物跡堆積土
5	10YR3/3暗褐色土	0	2		37号竪穴建物跡貼床部
6	10YR3/2黒褐色土	0	2	花崗岩粒3%	
7	10YR3/1黒褐色土	2	2		
8	10YR2/3黒褐色土	2	3	花崗岩粒3%	
9	10YR2/2黒褐色土	2	4		
10	10YR5/4にぶい黄褐色土	5	4		カマド崩落土
11	10YR3/2黒褐色土	2	2		
12	10YR3/1黒褐色土	2	2		
13	10YR2/2黒褐色土	2	2		
14	10YR3/1黒褐色土	2	2		
15	10YR2/3黒褐色土	2	2	花崗岩粒1%	
16	10YR2/2黒褐色土	2	5	花崗岩粒1% 10YR4/6褐色土5%	貼床部



第48図　30号竪穴建物跡（1）



第49図　30号竪穴建物跡（2）

第62表　30号竪穴建物跡土層観察表（２）

C-C'・D-D'・E-E'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	3	黄褐色土粒1%	
2	10YR6/8明黄褐色粘土	5	5		構築土
3	5YR4/6赤褐色土	2	4		天井被熱の崩落層
4	5YR5/6明赤褐色土	2	4		燃焼部焼土
5	10YR3/2黒褐色土	2	5		貼床土
6	10YR5/4にぶい黄褐色土	2	2	黄褐色土粒10% 黒褐色土粒30%	
7	10YR3/2黒褐色土	2	2		
8	10YR2/2黒褐色土	2	2		
9	10YR3/3暗褐色土	2	2	黄褐色土5%	
10	10YR7/8黄橙色粘土	2	5	黒色土5%	
11	5YR4/4にぶい赤褐色土	2	4	黄褐色土10%	
12	10YR3/2黒褐色土	2	3	黄褐色土5%	抜取痕堆積土
13	10YR3/3暗褐色土	2	3		抜取痕堆積土
14	10YR3/2黒褐色土	2	2		抜取痕堆積土

F-F'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	5YR3/6暗赤褐色焼土	2	5		

G-G'・H-H'・I-I'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2		

31号竪穴建物跡（第50図、写真図版36・65・72・74）

＜検出状況＞谷状地形範囲の東側のうち、表土の薄い範囲で見つかった。当初この範囲は、畑地造成によって削平されている地形的特徴があった。木根によるカクランや電柱等もあった。検出作業によって、カマド範囲と柱穴が確認されたことから、竪穴建物と認識して調査を進めた。

＜規模・形状＞全体形状及び規模は不明である。平面形は方形と推定され、隅は丸みを帯びる。カマドの上部構造と建物東壁及び南壁は消失している。

＜堆積土＞黒褐色土がカマド周辺に僅かに残存していた。

＜構成要素・付属施設＞カマド1基、柱穴４個、壁溝を検出した。カマドは北壁中央に設置されている。カマド構築粘土はソデ部分に残存していたが、芯材は確認できなかった。煙道部は削平されており、煙道部構造は不明である。検出した柱穴はいずれも主柱穴で、底面標高差が少ない。

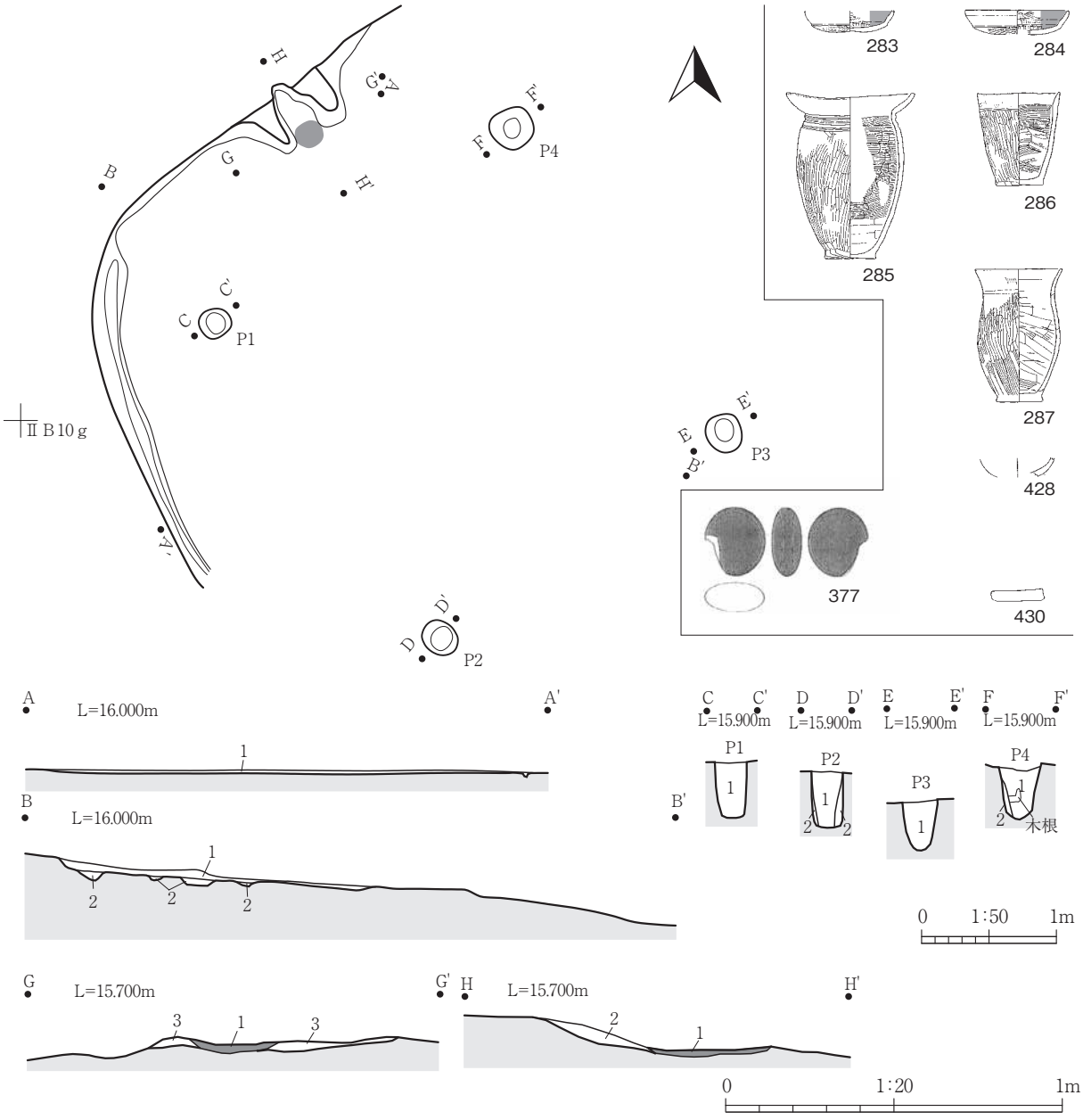
第63表　31号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝−45775.484	ⅡＢ９ｇ	Z＝15.470	不明	方形
	Y＝　94506.969				
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	3.21	2.74	24.10	A：14.704　B：	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド		0.53×0.74			
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
			W-36.92°-N	北西壁	

	最大幅（m）	床面からの深（cm）
壁溝	0.09	21.00

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.24×0.22	47.60	円形	
P2	0.28×0.24	43.60	方形	○
P3	0.29×0.26	38.20	楕円形	
P4	0.31×0.30	43.00	方形	



第50図　31号竪穴建物跡

＜遺物分布＞カマド周辺に遺物の密集が見られた。

＜遺物＞

【土師器】283～287の５点を図示した。283・284は坏、285～287は甕である。すべて堆積土出土である。坏は有段丸底で、口縁部が直線的に開く器形である。285の甕は口縁部に最大径があり、頸部に段状沈線が３条ある。外面調整のミガキは、工具の幅が広く縦方向に施されている。286は小型甕で胴部から口縁まで直線的に立ち上がる器形である。287は頸部のくびれが小さい。

【石器】377はPit01の底面出土の細粒閃緑岩製磨石である。

【陶磁器】428・430は堆積土出土である。428は龍泉窯系青磁碗で無文であることから16世紀代の特徴を有する。430は肥前産陶器皿で近世後半～末頃の特徴を有す。

＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

第64表　31号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2	遺物微量	
2	10YR3/2黒褐色土			10YR7/8黄橙色土5%	貼床

C-C'・D-D'・E-E'・F-F'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/1黒色土				
2	10YR7/8黄橙色土				Ⅴ層崩落土

G-G'・H-H'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	5YR4/6赤褐色土	2	2	焼土5%	
2	10YR3/2黒褐色土	2	2		
3	10YR6/6明黄褐色土	2	5		袖部

32号竪穴建物跡（第51図、写真図版37・65）

＜検出状況＞谷状地形範囲の東側の調査区境界付近に位置する。35号建穴建物跡と重複する黒～黒褐色土範囲を検出した。検出時の重複状況は明瞭で、35号竪穴建物跡が新しく、本遺構が古い。

＜規模・形状＞平面形は長方形と考えられる。建物隅はやや丸みを帯びるが北西隅は角張っている。南側が35号建穴建物跡と重複しているが、重複範囲内の主柱穴（Pit02）は残存していた。北東壁の一部と南東壁は消失しているが、残存壁からの推定規模は中型で、26号竪穴建物跡に近い。

＜堆積土＞黒～黒褐色土主体である。黄褐色土粒が混入している。

＜構成要素・付属施設＞カマド1基、柱穴４個を検出した。カマドは北西壁中央に設置されている。燃焼部の芯材は礫である。煙道は短く、建物壁を僅かに掘り込んで立ち上がる。柱穴は４個とも主柱穴である。

＜重複関係＞35号竪穴建物跡と重複し、本遺構が古い。本遺構の南部が35号竪穴建物跡構築時に削られていることが、検出時及び断面観察により判断できた。

＜遺物分布＞カマド周辺に遺物の密集が見られた。

＜遺物＞

【土師器】288・289の２点を図示した。いずれも床面出土の長胴甕である。288は口縁部が最大径となる器形で頸部の屈曲は弱い。289は口縁部が直線的に立ち上がり甑に多い器形である。

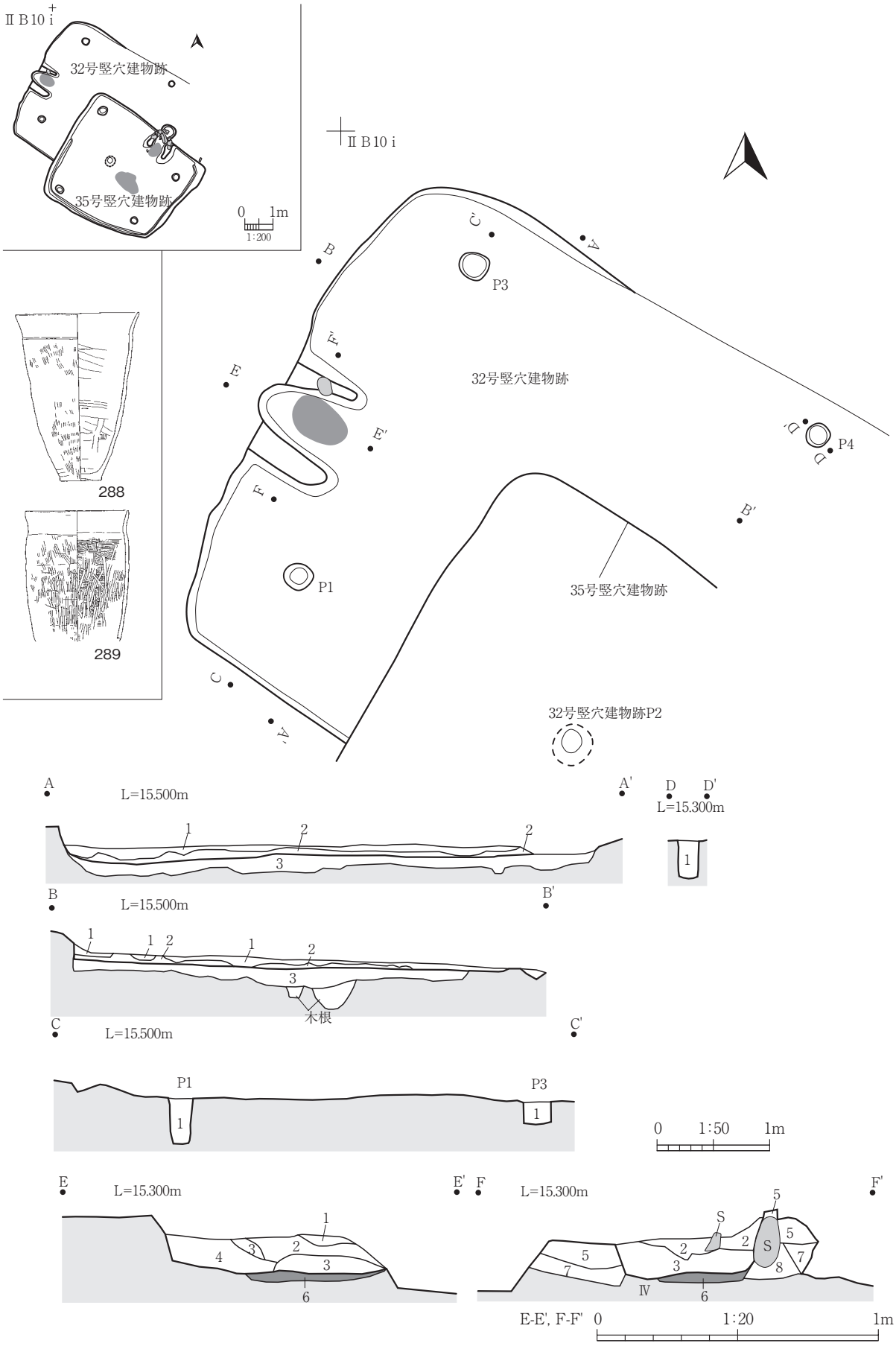
＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

第65表　32号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45779.152 Y＝ 94513.586	ⅡB10 i	Z＝14.810	不明	方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡） A：残存値、B：推定値	
	4.84	4.77	27.90	A：19.457　B：22.889	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド		1.00×1.03	礫		
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
			W-62.78°-N	北西壁	

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.26×0.24	42.20	方形	
P2	0.37×0.33	13.80	楕円形	
P3	0.26×0.24	23.80	円形	
P4	0.22×0.20	37.20	円形	



第51図　32号竪穴建物跡

第66表　32号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/1黒色土	2	2	10YR6/8明黄褐色土塊15%	Ⅰ層相当
2	10YR3/1黒褐色土	2	2	10YR6/8明黄褐色土粒5%	
3	10YR2/2黒褐色土	2	5	10YR6/8明黄褐色土粒5%	貼床

C-C'・D-D'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/2黒褐色土	2	2	風化花崗岩粒3%	

E-E'・F-F'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR7/6明黄褐色粘土	5	4	黒色土10%	崩落土
2	10YR2/2黒褐色土	2	2		
3	5YR3/6暗赤褐色土	2	2	焼土70% 骨片状白色粒1%	
4	10YR3/3暗褐色土	2	3	風化花崗岩粒3%	
5	10YR6/8明黄褐色粘土	5	5	黒色土5%	袖部
6	5YR5/8明赤褐色土	2	3	炭化物粒1%	燃焼部焼土
7	10YR2/3黒褐色土	2	4	焼土1%	袖部
8	10YR3/2黒褐色土	2	4		袖石抜取痕堆積土

33号竪穴建物跡（第52図、写真図版38・66）

＜検出状況＞谷状地形範囲の東側に位置する。34号建穴建物跡と重複する黒～黒褐色土範囲を検出した。検出時の重複状況は不明瞭で新旧関係は分からなかった。

＜規模・形状＞平面形は方形と考えられるが、壁の立ち上がりが明瞭だったのは西側で、南側は重複により消失しており、東側は不明瞭であった。北東壁にカマドが設置されている。建物隅は西側が角張っているが、東側は丸みを帯びる。規模は小型である。当初、本遺構の調査を先行したため34号竪穴建物跡の北東隅とカマド煙道部を削ってしまった。

＜掘形＞Ｄ類。

＜堆積土＞黒褐色土主体である。黄褐色土粒が混入している。

＜構成要素・付属施設＞カマド1基、壁溝を検出した。カマドは北東壁の中央よりやや北側に設置されている。燃焼部の残存状況は不良であった。煙道は長煙道タイプである。壁溝は34号竪穴建物跡カマド範囲では34号竪穴建物跡カマド調査後に確認できた。

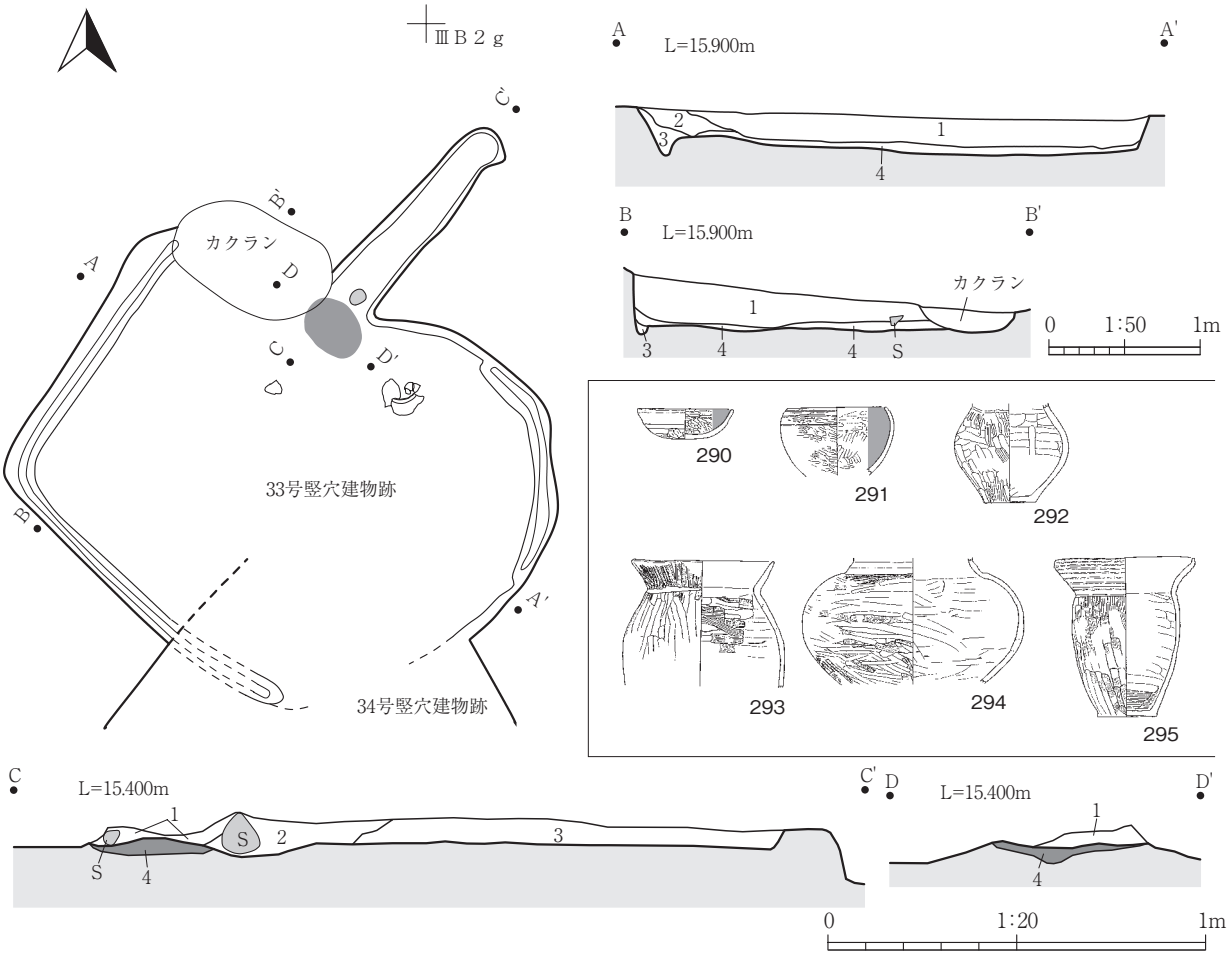
＜重複関係＞34号竪穴建物跡と重複し、本遺構が古い。本遺構の南部が34号竪穴建物跡に削られている。34号竪穴建物跡カマドが本遺構に構築により破壊されず残存していたことから、新旧関係が判断できた。また、建物外縁部に周堤帯が存在していたと仮定すると、36号竪穴建物跡との重複関係が想定される。

＜遺物分布＞カマド周辺に遺物の密集が見られた。

＜遺物＞

【土師器】290～295の６点を図示した。290は坏、291は椀、292・294は壺、293・295は甕である。290～293は堆積土、294・295は床面出土である。290は平底風で、段が不明瞭である。291は底部が破損しているため判断しがたいが、平底風丸底の可能性が高い。292の壺はハケ調整が主体で、外底部付近に僅かにミガキ調整が残る。294の壺は横方向のハケ調整が顕著で、頸部の段は明瞭で、胴部中から上部にかけて最大径を有する。293の長胴甕は最大径が胴部上半に有する。縦方向のハケ調整が顕著で胴部の調整は摩耗している。295の甕は最大径が口縁部にあり、口縁に段状沈線が廻る。

＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、８世紀前半～中頃と考えられる。



第52 図　33号竪穴建物跡

第67表　33号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45786.844 Y＝ 94502.969	ⅢＢ２ｆ	Z＝15.170	D	方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	3.33	2.67	31.80	A：7.238　B：	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	1.45×0.36				
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-40.94°-N	北東壁	

	最大幅（m）	床面からの深（cm）
壁溝	0.09	13.40

第68表　33号竪穴建物跡土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/1黒色土	2	2	10YR5/8黄褐色土粒5%	
2	10YR2/2黒褐色土	2	2	10YR5/8黄褐色土塊15%	
3	10YR2/2黒褐色土	2	2		
4	10YR2/2黒褐色土	2	5	10YR2/3黒褐色土30%	貼床

C-C'・D-D'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR6/8明黄褐色土	2	2		カマド構築材崩落土
2	10YR2/2黒褐色土	2	2	焼土粒10%	
3	10YR2/3黒褐色土	2	2		
4	2.5YR4/6赤褐色土	2	4		燃焼部焼土

34号竪穴建物跡（第53図、写真図版39・66）

＜検出状況＞谷状地形範囲の東側に位置する。33号建穴建物跡と重複する黒～黒褐色土範囲を検出した。検出時の重複状況は不明瞭で新旧関係は分からなかった。

＜規模・形状＞平面形は方形と考えられるが、壁の立ち上がりが明瞭だったのは西側で、北東側は重複により消失していた。北西壁にカマドが設置されている。建物隅は丸みを帯びる。規模は小型である。当初、本遺構の調査を先行したため北東隅とカマド煙道部を削ってしまった。

＜掘形＞Ｄ類。

＜堆積土＞黒褐色土主体である。黄褐色土粒が混入している。

＜構成要素・付属施設＞カマド1基を検出した。カマドは北西壁の中央に設置されている。カマド燃焼部の残存状況は良好で、心材に礫を使用している。煙道は長煙道タイプである。

＜重複関係＞33号竪穴建物跡と重複し、本遺構が新しい。本遺構のカマドが残存し、カマド調査後に33号竪穴建物跡の壁溝が確認されたことから、新旧関係が判断できた。岩手県内の調査事例では、古墳時代末～奈良時代末のカマド設置壁が北もしくは西方向が古く、東方向にあるものは新しい傾向にあるが、33・34号の重複関係はこの傾向に合致しない事例である。また、建物外縁部に周堤帯が存在していたと仮定すると、36号竪穴建物跡との重複関係が想定される。

＜遺物分布＞カマド周辺に遺物の密集が見られた。

＜遺物＞

【土師器】296～298の３点を図示した。296は坏、297は高坏の坏部、298は甕の口縁部である。296はカマド内､297・298は堆積土出土である｡296の小型坏は底部がケズリ調整で､内面の段が僅かに残る。297の高坏は296とほぼ同様の断面形状である。298は長胴甕で、口縁が外反する。

＜時期＞遺構の重複関係から、８世紀中頃以降と考えられるが、遺物の特徴は小型有段坏、高坏の残存など、８世紀前半段階の特徴を有する。

第69表　34号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45788.926 Y＝ 94503.289	ⅢＢ３ｆ	Z＝15.280	D	方形
	長（m）	幅（m）	深（㎝）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	2.80	2.74	70.00	A：5.253　B：	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド		0.69×0.97			
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
			W-40.04°-N	北西壁	

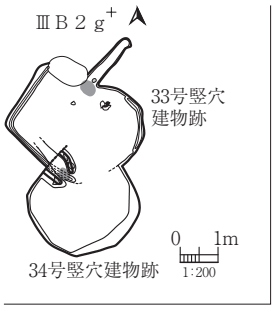
第70表　34号竪穴建物跡土層観察表

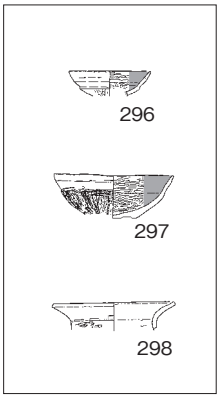
E-E'・F-F'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/1黒色土		2	10YR4/4褐色土粒5%	
2	10YR2/1黒色土	2	2	10YR4/4褐色土粒5% 炭化物粒1%	
3	10YR3/1黒色土	2	2	焼土粒1% 炭化物粒1%	
4	10YR2/2黒褐色土	2	5		貼床

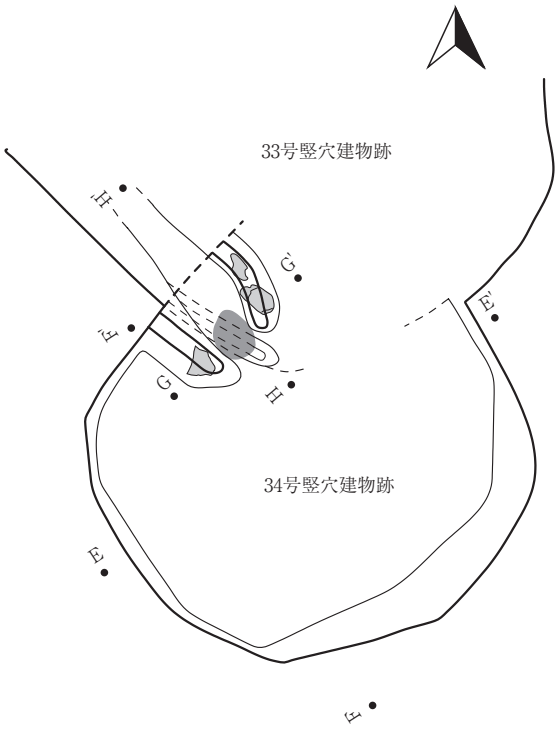
G-G'・H-H'

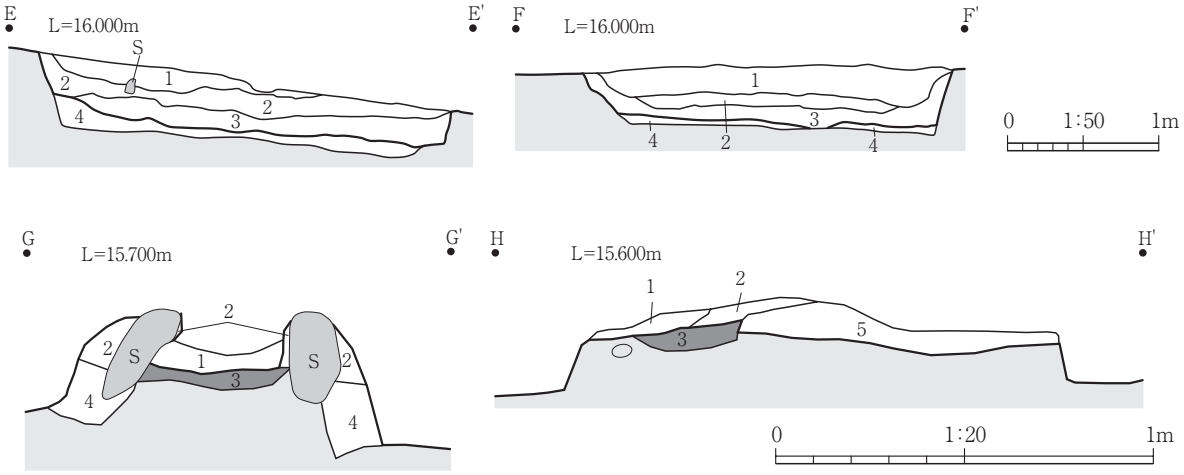
層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色土	2	2	黄褐色土30%	
2	10YR5/6黄褐色土	2	4		
3	2.5YR4/6赤褐色土	2	2		燃焼部焼土
4	10YR3/1黒褐色土	2	2		貼床土含む
5	10YR3/1黒褐色土	2	2		





ⅢB３f





第53図　34号竪穴建物跡

35号竪穴建物跡（第54・55図、写真図版39・40・67・69・70）

＜検出状況＞谷状地形範囲の東側の調査区境界付近に位置する。32号竪穴建物跡と重複する黒～黒褐色土範囲を検出した。検出時の重複状況は明瞭で、32号竪穴建物跡が古く、本遺構が新しい。

＜規模・形状＞平面形は概ね長方形であるが、南東壁長が北西壁より短く台形に近い。建物隅は角張っている。北西側が32号建穴建物跡と重複している。規模は中型の範疇でもやや小さい部類に入る。建物長軸側の北東壁にカマドが設置される本遺構が新しく、建物短軸側の北西壁にカマドが設置されている32号竪穴建物跡が古い。

＜堆積土＞黒～黒褐色土主体である。

＜構成要素・付属施設＞カマド1基、柱穴４個、壁溝、建物中央部に焼土範囲を検出した。カマドは北東壁中央に設置された短煙道タイプである。燃焼部の芯材は礫で、煙道部上部にも礫が設置されている。柱穴は４個とも主柱穴である。壁溝はカマド設置壁で未検出である。

＜重複関係＞32号竪穴建物跡と重複し、本遺構が新しい。本遺構の北部が32号竪穴建物跡を削って構築されていることを検出時及び断面観察により判断できた。

＜遺物分布＞カマド周辺と建物中央部に遺物の密集が見られた。

＜遺物＞

【土師器】299～312の14点を図示した。299～307・309・310は坏、308はミニチュア、311・312は甕である。303・311・312はカマド内、それ以外は堆積土出土である。299～304は回転ナデ調整の坏で、器壁が薄く内面黒色処理されている。305は小型坏でミニチュアの可能性もあるが、須恵器坏蓋模倣の可能性も考えられる器形である。307は丸底坏で外面底部はハケ調整である。311・312は胴部径が広くヘラナデ調整である。

【須恵器】339・304・342・343の４点を図示した。すべて堆積土出土である。339と340は同一個体と考えられる。底部を回転ケズリ調整、口縁～上部を回転ナデ調整している。342は壺もしくは甕の胴部片、343は339・340と同一個体の可能性のある胴部片である。

【石器】364は堆積土出土のヒン岩製磨製石斧である。

＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、９世紀後半～10世紀初頭と考えられる。

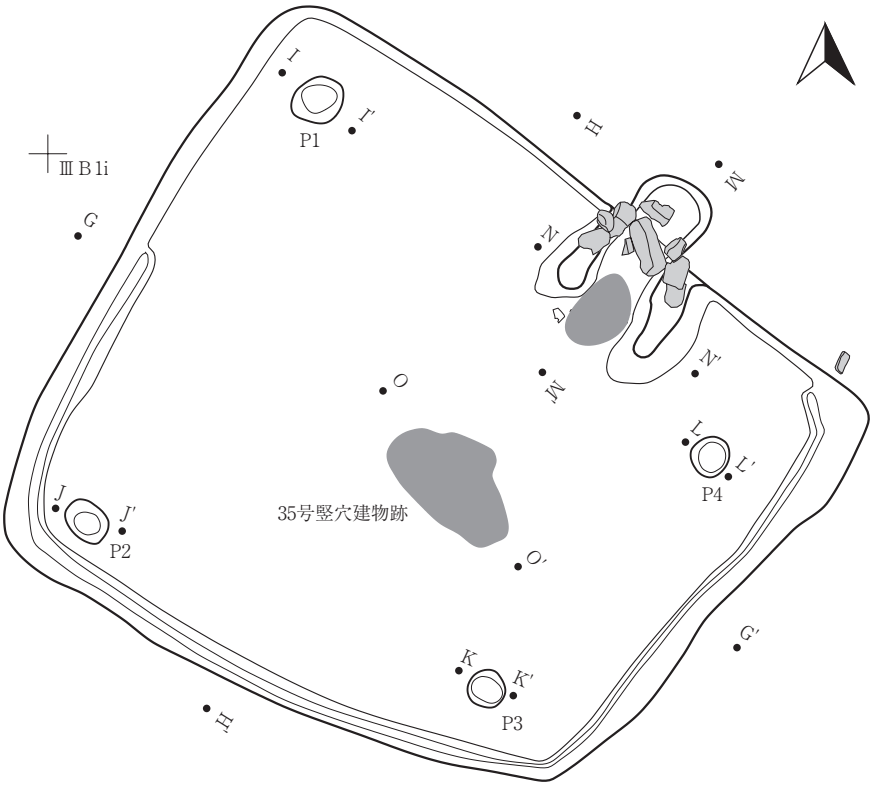
第71表　35号竪穴建物跡観察表

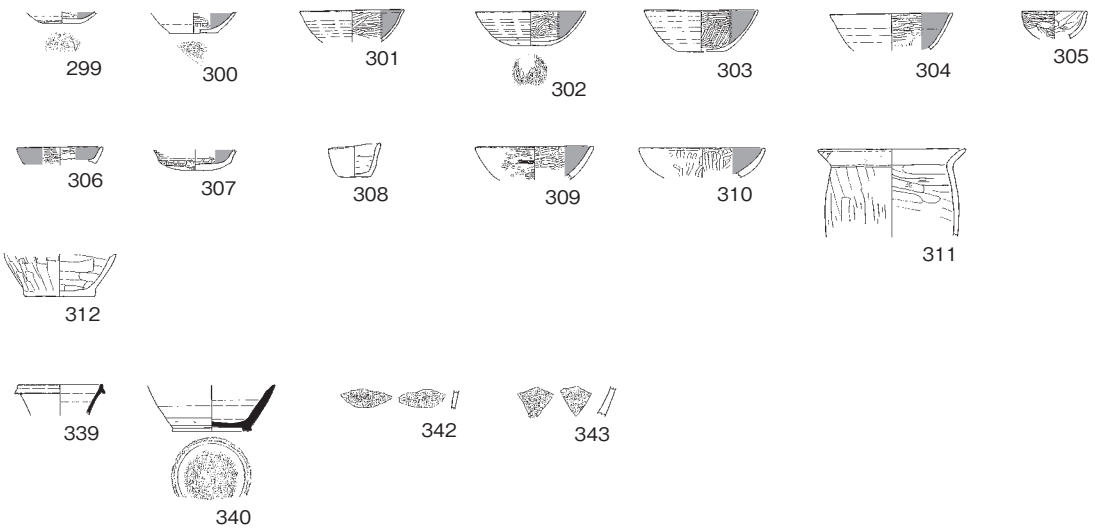
	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45781.902	ⅢＢ１ｉ	Z＝14.690	A	方形
	Y＝ 94514.438				
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	4.87	4.19		A：16.052　　B：	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	0.45×0.51	0.87×1.12	礫		礫
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-33.56°-N	北東壁	

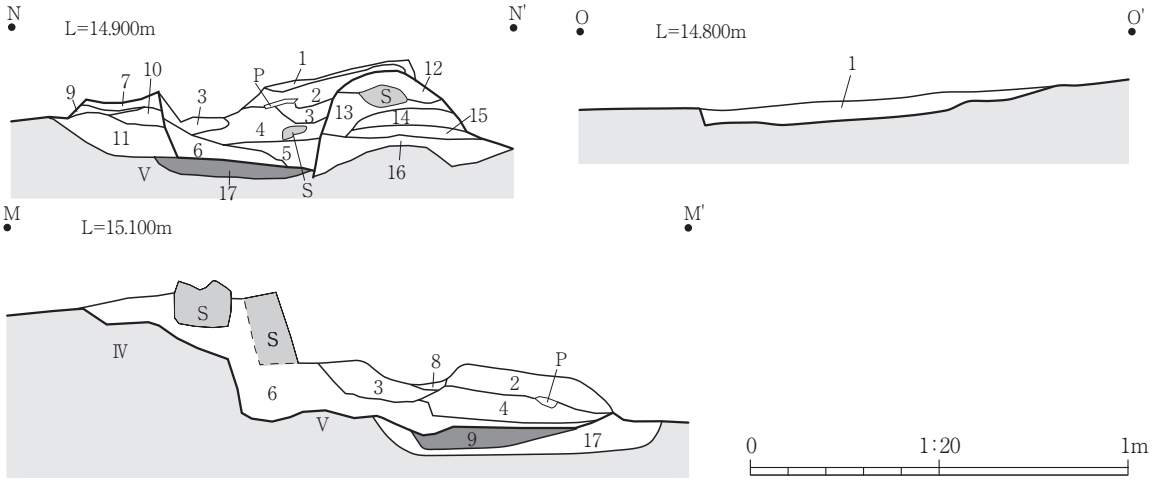
	最大幅（m）	床面からの深（cm）
壁溝		27.20

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.47×0.31	9.60	不整形	
P2	0.30×0.23	16.20	楕円形	
P3	0.25×0.25	24.80	楕円形	
P4	0.27×0.27	11.40	楕円形	





第54図　35号竪穴建物跡（1）



第55図　35号竪穴建物跡（2）

第72表　35号竪穴建物跡土層観察表

G-G'・H-H'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/2黒褐色土	2	2	砂粒1%	
2	10YR3/1黒褐色土	2	2		
3	10YR5/4にぶい黄褐色土	2	2	砂粒5%	
4	10YR2/3黒褐色土	2	2	黄褐色土1%	
5	10YR2/1黒色土			炭化物塊5% 焼土粒5%	
6	10YR2/2黒褐色土	2	5		貼床

I-I'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/1黒色土	2	2	炭化物粒5%	
2	7.5R4/8赤色焼土	2	2		
3	10YR2/1黒色土	2	2	炭化物粒5%	

J-J'・K-K'・L-L'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/1黒色土	2	3	炭化物粒 焼土粒5%	

M-M'・N-N'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR5/6黄褐色粘土	5	5		カマド崩落土
2	10YR3/2黒褐色土	2	5		
3	10YR5/6黄褐色粘土	4	3	焼土1%	カマド崩落土
4	10YR3/3暗褐色土	2	2	焼土1%	
5	5YR3/6暗赤褐色土	2	2		
6	10YR3/2黒褐色土	2	2	炭化物粒3%	
7	10YR5/6黄褐色土	4	3		カマド崩落土
8	10YR3/1黒褐色土	2	2	黄褐色土1%	
9	5YR2/4極赤褐色土	2	2		燃焼部焼土
10	10YR5/6黄褐色粘土	5	5	焼土5%	袖部
11	10YR3/4暗褐色土	4	5		
12	10YR3/2黒褐色土	4	5		
13	10YR7/6明黄褐色粘土	4	5		
14	10YR3/2黒褐色土	2	5		
15	10YR5/6黄褐色粘土	5	5		
16	10YR3/3暗褐色土	5	5		
17	5YR4/6赤褐色土	0	5		燃焼部焼土

O-O'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	5YR5/8明赤褐色土	2	5	炭化物1%	

36号竪穴建物跡（第56図、写真図版41・44・67）

＜検出状況＞谷状地形範囲の東側に位置する。20号建穴建物跡と重複するが、検出時は本遺構の黒～黒褐色土範囲とカマド範囲が確認できた。検出時のカマド煙道部範囲は33号竪穴建物跡に及んでいなかった。

＜規模・形状＞平面形は方形で、建物隅は丸みを帯びる。建物中央に炭化材が多量に出土したことから、焼失家屋の可能性がある。規模は中型である。

＜堆積土＞黒～黒褐色土主体である。堆積土下部から床面にかけて炭化材と焼土が出土したことから、本遺構は焼失家屋出会った可能性が考えられる。

＜構成要素・付属施設＞カマド１基、柱穴２個、西側に壁溝を検出した。カマドは北西壁中央に設置された長煙道タイプである。燃焼部の芯材は礫で、支脚は礫が使用されている。支脚の位置から、掛口２ヵ所を有するタイプと考えられる。燃焼部上部と煙出部上部に黄褐色～明黄褐色粘土が堆積していることから、煙道部は掘込式である。柱穴は２個とも主柱穴と考えられる。

＜重複関係＞縄文時代早期末～前期初頭の建物である20号竪穴建物跡と重複し、本遺構が新しい。また、また、建物外縁部に周堤帯が存在していたと仮定すると、33・34号竪穴建物跡との重複関係が想定される。

＜遺物分布＞カマド周辺と建物中央部に遺物の密集が見られた。

＜遺物＞

【縄文・弥生土器】33は堆積土出土の縄文中期大木7式相当の土器である。

【土師器】313～315の３点を図示した。313は坏、314・314は甕である。314が床面、313・315が堆積土出土である。313は外面ミガキ調整の内面黒色処理された坏で、内面の段が明瞭である。314・315の甕は頸部の段がなく、口縁部が直線的に立ち上がる器形で、外面ハケ調整である。

＜時期＞遺構の特徴と出土遺物の年代から、７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

第73表　36号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45781.137	ⅢＢ３ｇ	Z＝14.870	A	方形
	Y＝ 94508.086				
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡）A：残存値、B：推定値	
	4.32	4.21	68.6	A：15.203　B：	

	煙道部規模（m）	燃焼部規模（m）	芯材種類	支脚位置	支脚
カマド	1.07×0.48	0.73×0.86	無		
	煙道部造成方法		軸方向	建物内設置壁	
	掘込		W-58.64°-N	北西壁	

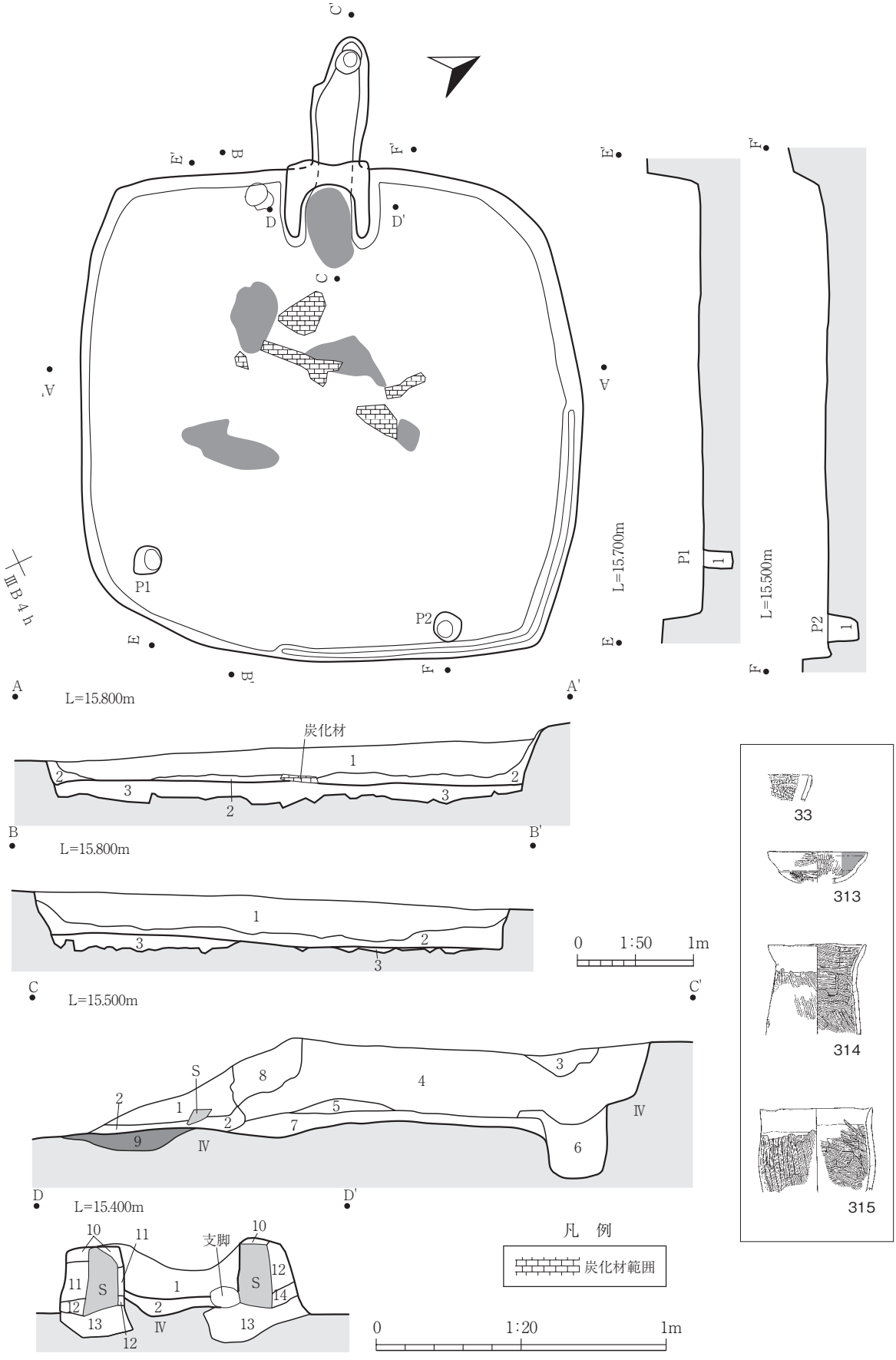
	最大幅（m）	床面からの深（cm）
壁溝		15.80

	規模（m）	深（cm）	底面形状	柱痕跡
P1	0.24×0.23	32.20	楕円形	
P2	0.23×0.23	28.20	円形	

第74表　36号竪穴建物跡土層観察表（１）

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/1黒色土	2	2		
2	10YR2/2黒褐色土	2	2	炭化物多量	
3	10YR3/1黒褐色土	2	4		貼床部



第56図　36号竪穴建物跡

第74表　36号竪穴建物跡土層観察表（2）

C-C'・D-D'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/2黒褐色土	2	2	黄褐色粘土30%	カマド崩落土
2	5YR3/4暗赤褐色土	2	2	炭化物粒1%	焼土上部層
3	10YR5/8黄褐色土	0	2		
4	10YR2/2黒褐色土	2	2		
5	5YR3/3暗赤褐色土	2	2		
6	10YR2/3黒褐色土	2	2		
7	10YR2/2黒褐色土	2	2		
8	10YR7/6明黄褐色粘土	5	5	黒色土5%	カマド構築土
9	5YR5/8明赤褐色土	3	3	骨片状粒子1%	燃焼部焼土
10	10YR3/1黒褐色土	2	3	黄褐色粘土5%	袖部
11	10YR7/6明黄褐色粘土	5	5	焼土1%	袖部
12	10YR3/2黒褐色土	2	5		袖部
13	10YR2/2黒褐色土	2	2		抜取痕堆積土
14	10YR6/6明黄褐色土	5	5	焼土1%	袖部

E-E'・F-F'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色土	2	2		

37号竪穴建物跡（第48・57図、写真図版35・36）

＜検出状況＞谷状地形範囲の東側に位置する。30号竪穴建物跡と重複する。

＜規模・形状＞硬質面があることから、床面が存在したと考えられる。平面形は隅丸方形である。

＜堆積土＞黒～黒褐色土主体である。堆積土下部から床面にかけて、30号竪穴建物跡のカマドからの崩落土が流入している。本遺構構築時に30号竪穴建物跡カマド範囲を掘削していると判断される。

＜構成要素・付属施設＞西側に壁溝を検出した。

＜重複関係＞30号竪穴建物跡と重複し、本遺構が新しい。

＜遺物分布＞堆積土から、土師器が出土するが、30号竪穴建物跡帰属の遺物が混入した可能性が考えられる。

＜遺物＞【石器】376は堆積土出土の磨石である。

＜時期＞堆積土の特徴から、古代と考えられる。

第75表　37号竪穴建物跡観察表

	座標	グリッド	床面標高	掘形類型	平面形
竪穴	X＝-45774.848 Y＝ 94489.070	Ⅲ B 9 c	Z＝16.28	D	隅丸方形
	長（m）	幅（m）	深（cm）	床面積（㎡） A：残存値、B：推定値	
	3.07	2.90	22.2	A：6.488　B：	

壁溝	最大幅（m）	床面からの深（cm）
	0.23	17

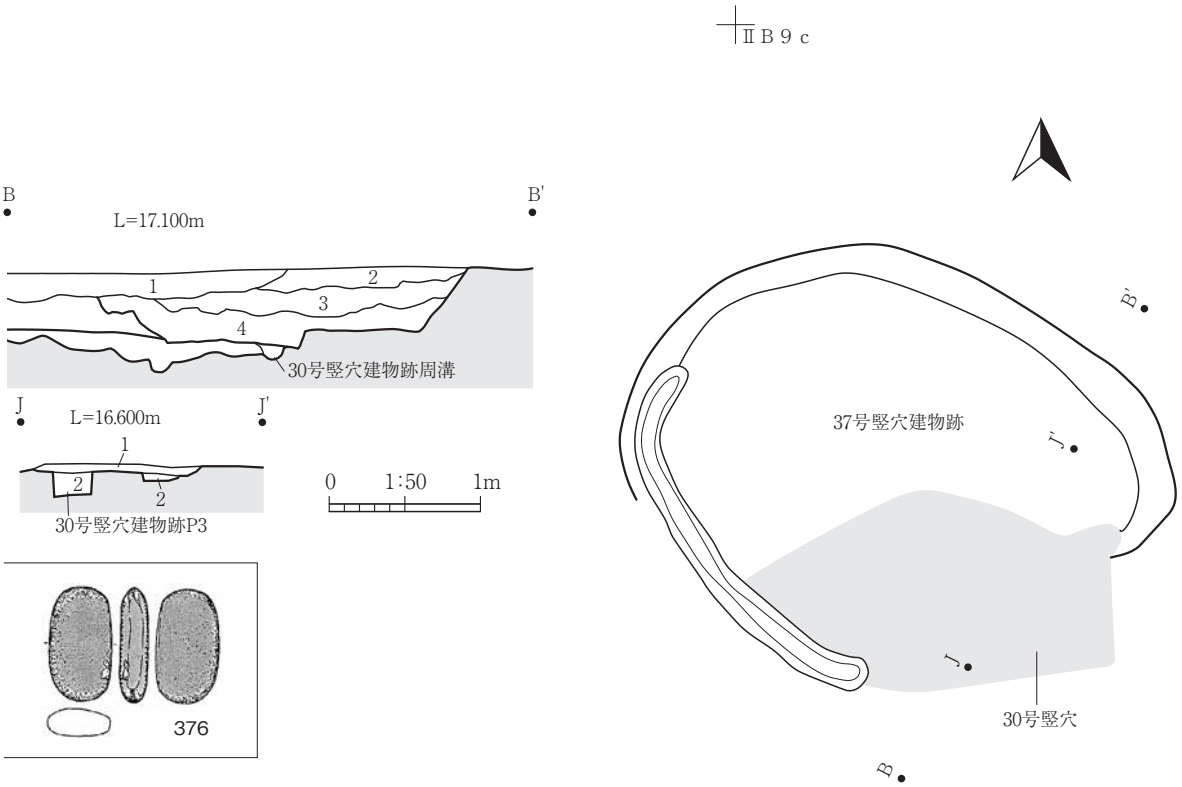
第76表　37号竪穴建物跡土層観察表

B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/1黒色土	2	2		
2	10YR2/2黒褐色土	2	2	炭化物多量	
3	10YR3/1黒褐色土	2	2		
4	10YR2/2黒褐色土	2	3	炭化物粒3%	

J-J'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色土	2	5	10YR5/8黄褐色土15% 花崗岩粒1%	37号竪穴貼床
2	10YR2/2黒褐色土	2	5	10YR5/8黄褐色土粒 焼土粒1% 炭化物粒1% 10YR3/3暗褐色土10%	30号竪穴貼床



第57図　37号竪穴建物跡

（2）土　　坑

1号土坑（第58図、写真図版42・46・73・74）

＜検出状況＞調査区中央尾根部の３号竪穴建物跡と重複する楕円形の黒褐～暗褐色プランを検出した。

＜規模・形状＞平面形は楕円形で、底面に長楕円形の掘込みをもつ。規模としては土壙墓の可能性が考えられるが、根拠となる明確な遺物はない。長軸が３号竪穴建物カマド煙道軸とほぼ同じ北西方向である。

＜堆積土＞３号竪穴建物跡と同様の黒～黒褐色土主体である。Ⅳ層に由来する砂粒や花崗岩粒が混入する。堆積土下部を中心に遺物が出土した。

＜付属施設＞底面に長楕円形の掘込みがある。埋葬施設の可能性も考えられるが、明確な根拠はない。

＜重複関係＞３号竪穴建物跡と重複し、これを切る。断面調査時に明瞭に切り込むラインが確認できた。したがって、３号竪穴建物跡廃絶後に、本遺構が構築されたと言える。

＜遺物分布＞土師器片のうち、大型の破片は堆積土中部～下部から纏まって出土した。３号竪穴建物跡に帰属する遺物が含まれている可能性が考えられる。

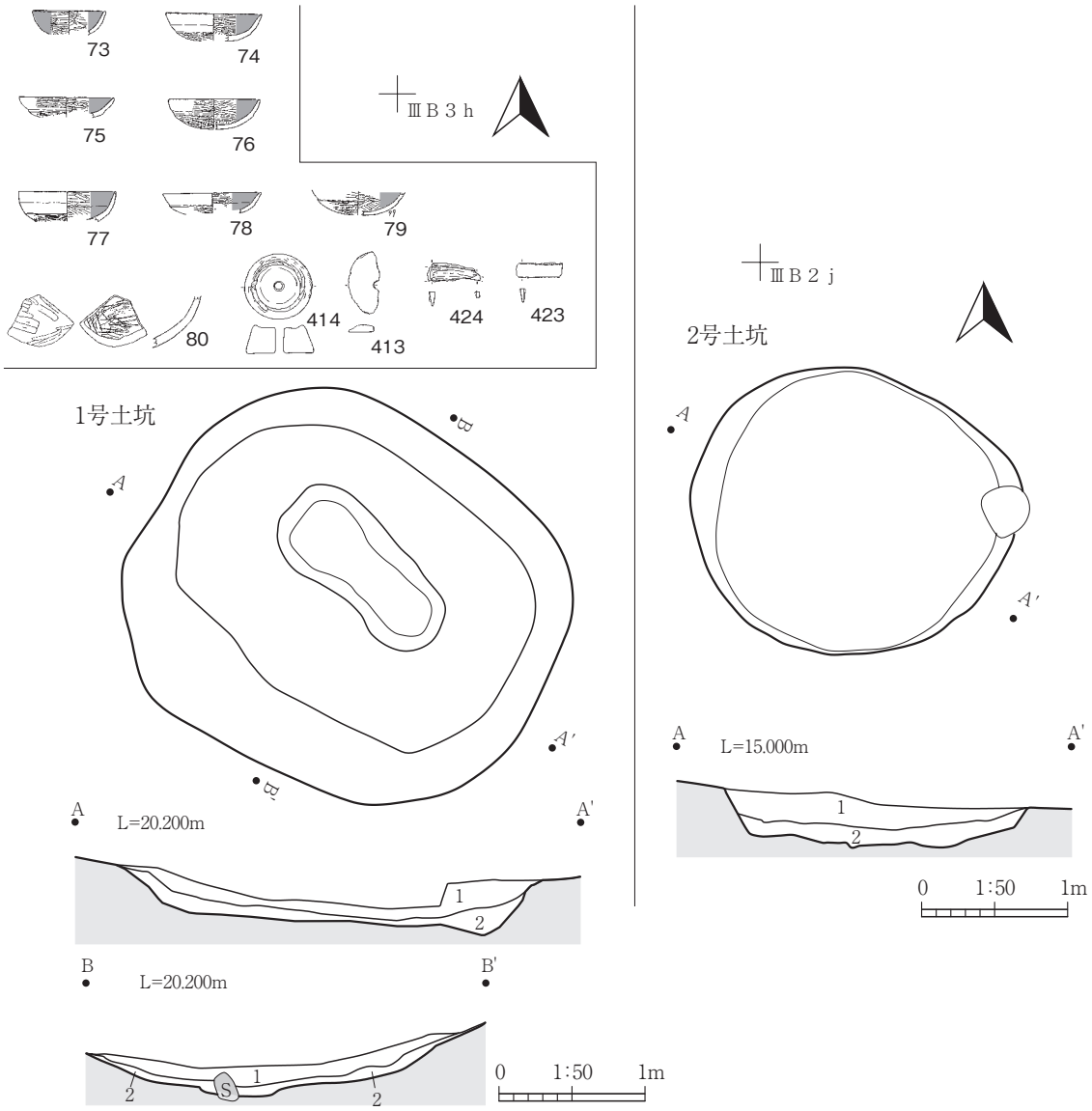
＜遺物＞

【土師器】73～81の９点を図示した。すべて堆積土出土で、73～79が坏、80が鉢である。坏はすべて内面黒色処理されており、小型で内面の段は不明瞭である。80は口径が20㎝程度見込まれることから鉢とした。ケズリの上からミガキ調整されている。

【土製品】414・413は堆積土出土の紡錘車である。

【鉄製品】423・424は堆積土出土の刀子で、424は木質部が残存する。

＜遺構の性格＞不明である。出土土師器が小型坏類に限られることと、土製品・鉄製品が伴うことか



第58図　１・２号土坑

第77表　１号土坑土層観察表

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2	根カクラン多 遺物少量	
2	10YR2/3黒褐色土	2	3	根カクラン少	

第78表　２号土坑土層観察表

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/1黒褐色土	2	2	根多	
2	10YR3/2黒褐色土	2	4	黄褐色土粒1%	

ら、土壙墓の可能性も考えられるが、底面の掘込みからは遺物が出土していない。埋め戻されたような土層堆積も確認できなかったので、廃棄土坑との明確な性格差を示すに至らなかった。
＜時期＞堆積土から、７世紀～８世紀と考えられる。

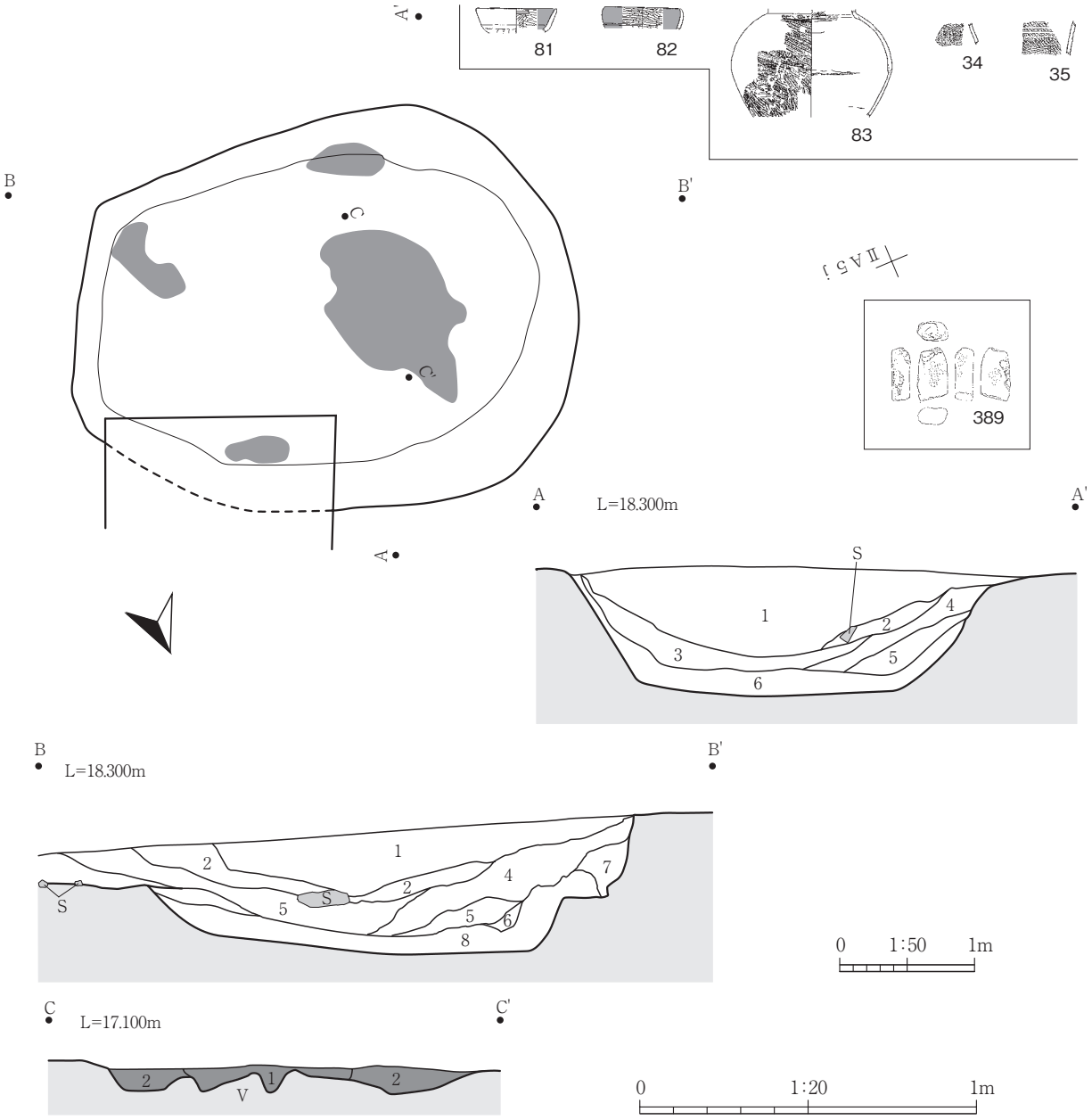
２号土坑（第58図、写真図版42）
＜検出状況＞調査区西端部で円形の黒褐色プランを検出した。
＜規模・形状＞平面形は楕円形で、底面は凹凸がある。
＜堆積土＞黒褐色土主体で根によるカクランが多い。
＜重複関係＞20号竪穴建物跡と重複し、これを切る。
＜遺構の性格＞不明である。堆積土がⅡ層に類似することから、近世以降と考えられる。また、円形であることから、肥溜跡の可能性が有力であるが、現代肥溜のような化学肥料の混入痕跡等も見られないことから不明とした。
＜時期＞近世以降と考えられる。

３号土坑（第59図、写真図版19・20・46・72）
＜検出状況＞調査区谷部西側の16号竪穴建物跡と重複する楕円形の黒褐～暗褐色プランを検出した。
＜規模・形状＞平面形は楕円形で、底面と壁面が被熱し、焼土が分布している。
＜堆積土＞16号竪穴建物跡を切るように構築されたことから、16号竪穴建物跡堆積土の流入があると考えられる。概ね自然堆積によって形成されている。堆積土上部を中心に遺物が出土した。
＜重複関係＞16号竪穴建物跡と重複し、これを切る。断面調査時に明瞭に切り込むラインが確認できた。したがって、16号竪穴建物跡廃絶後に、本遺構が構築されたと言える。
＜遺物分布＞すべて堆積土出土で、遺構の構築年代を反映していない可能性が考えられる。
＜遺物＞
【縄文・弥生土器】34・35は堆積土出土で、34は弥生後期、35は縄文後期前葉の十腰内Ⅰ式の特徴を有する。
【土師器】81～83の３点を図示した。すべて堆積土出土で、16号竪穴建物跡から流入した可能性もある。81・82は小型坏、83は壺である。
【石器】389は堆積土出土の細粒閃緑岩製敲石である。
＜遺構の性格＞不明である。底面と壁面に被熱痕跡があることから、近世以降の炭窯の可能性も考えられたが、炭化材の出土量が微量であったため根拠に乏しい。底面から遺物が出土しなかったことから判断できない。製鉄関連遺構と捉える根拠もない。
＜時期＞不明である。

（3）陥し穴状土坑

１号陥し穴状土坑（第60図、写真図版42）
＜検出状況＞調査区南西側の１号竪穴建物跡の東側で溝状の黒褐色プランを検出した。
＜規模・形状＞平面形は溝状で、底面は平坦で幅が狭い。
＜堆積土＞黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。
＜遺構の性格＞陥し穴である。単独で構築されるよりは２～３基１セットとして構築されることが多いため、調査区外に対となる陥し穴状土坑の存在が想定される。
＜時期＞縄文時代である。

２号陥し穴状土坑（第60図、写真図版42）
＜検出状況＞調査区南西側の２号竪穴建物跡の東側で長楕円形の黒褐色プランを検出した。



第59図　3号土坑

第79表　3号土坑土層観察表

A-A'・B-B'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/2黒褐色土	2	2	砂粒5%、φ1cm礫3%	
2	10YR2/2黒褐色土	2	2	砂粒1%	
3	10YR3/1黒褐色土	2	2		
4	10YR3/1黒褐色土	2	2	砂粒1%	
5	10YR3/3暗褐色土	2	2	砂粒3%、黄褐色土5%	
6	10YR4/4褐色土	2	2	黄褐色土5%	
7	10YR3/3暗褐色土	2	2		
8	10YR5/3にぶい黄褐色土	2	3		壁崩落土

C-C'

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	5YR5/6明赤褐色土	2	4		
2	10YR3/3暗褐色土	2	2	焼土10%	

＜規模・形状＞開口部平面形は長楕円形で、底面は長方形である。底面は平坦で２個の副穴がある。
＜堆積土＞黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。
＜時期＞縄文時代である。県内調査事例からは縄文時代前期に多い傾向にある。

３号陥し穴状土坑（第60図、写真図版42）
＜検出状況＞調査区南東側の15号竪穴建物跡の南側で楕円形の褐色プランを検出した。
＜規模・形状＞開口部平面形は楕円形である。底面は平坦で中央に１個の副穴がある。
＜堆積土＞黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。最上部層にTo-Cu層が堆積していた。
＜時期＞To-Cu堆積前の構築であることから、縄文時代前期前葉以前である。

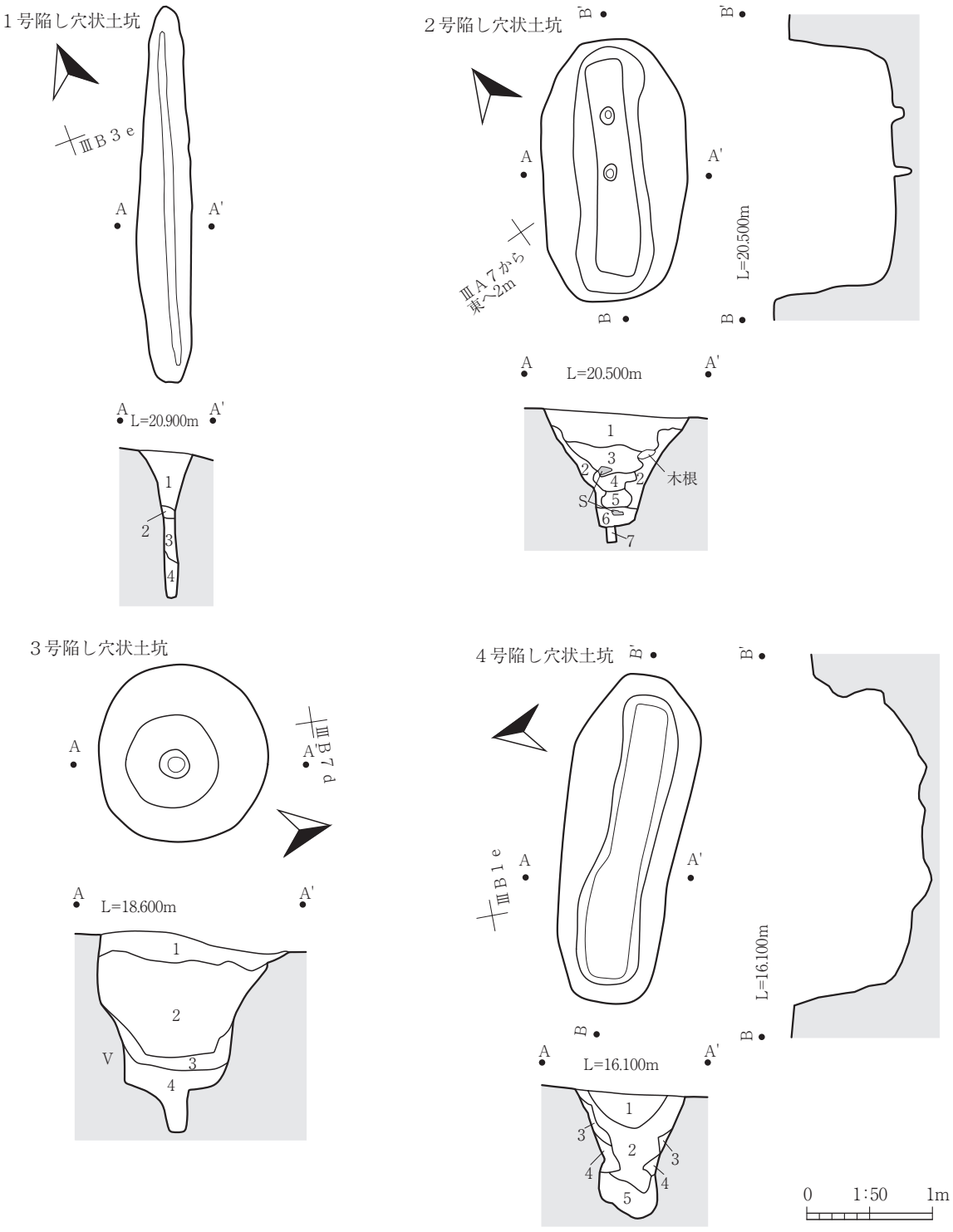
４号陥し穴状土坑（第60図、写真図版42）
＜検出状況＞谷状地形の中央に位置する30号竪穴建物跡の東側でトレンチ調査によって長楕円形の黒褐色プランを検出した。
＜規模・形状＞開口部平面形は長楕円形である。底面は凹凸があり、東端部の壁が一部崩落している。底面は平坦で、平面は長方形である。
＜堆積土＞黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。
＜時期＞２・５号陥し穴状土坑と同じ縄文時代である。県内調査事例からは縄文時代前期に多い。

５号陥し穴状土坑（第61図、写真図版42）
＜検出状況＞谷状地形の西側に位置する21号竪穴建物跡の東側で、長楕円形の黒褐色プランを検出した。この範囲は試掘トレンチによって21号竪穴建物跡の北東壁が調査されており、試掘トレンチを掘り返したところ、Ⅳ層面で本遺構を確認することができた。
＜規模・形状＞開口部平面形は長楕円形である。底面平面形は長方形で、副穴が３個ある。
＜堆積土＞黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。
＜時期＞３・４号陥し穴状土坑と同じ縄文時代である。県内調査事例からは縄文時代前期に多い。

６号陥し穴状土坑（第61図、写真図版42）
＜検出状況＞谷状地形東側の20号竪穴建物跡の西壁を切るような溝状の黒褐色プランを検出した。
＜規模・形状＞平面形は溝状で、底面は平坦で幅が狭い。
＜堆積土＞黒褐色土を主体とする自然堆積によって形成されている。
＜遺構の性格＞陥し穴である。単独で構築されるよりは２～３基１セットとして構築されることが多いため、調査区外に対となる陥し穴状土坑の存在が想定される。
＜時期＞縄文時代である。

第80表　1号陥し穴状土坑土層観察表

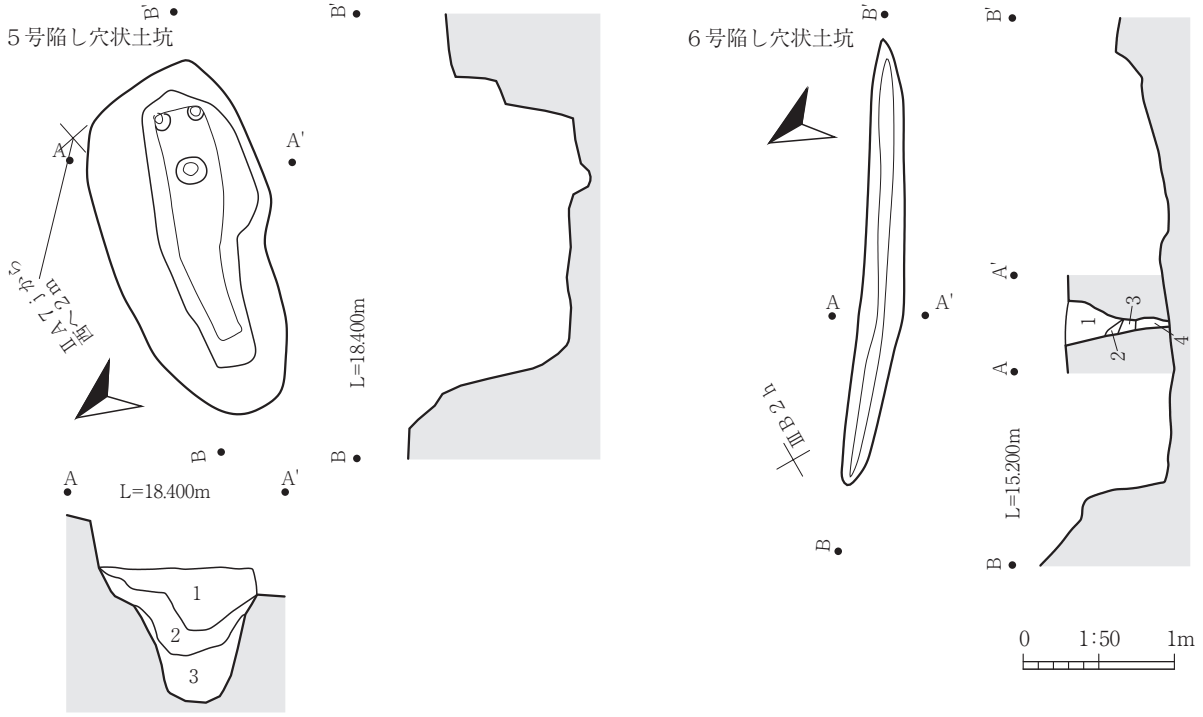
層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/1黒色土	2	2		
2	10YR3/2黒褐色土	2	2	黄褐色土粒1%	
3	10YR2/2黒褐色土	2	2		
4	10YR3/3暗褐色土	2	2	黄褐色土粒1%	



第60図　1～4号陥し穴状土坑

第81表　2号陥し穴状土坑土層観察表

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/3黒褐色シルト	2	5	風化花崗岩粒極小1%	
2	10YR4/4褐色シルト	3	5		
3	10YR2/2黒褐色シルト	2	5	風化花崗岩粒極小1%	
4	10YR2/3黒褐色シルト	3	5	黄褐色土粒極小1%	
5	10YR2/2黒褐色シルト	3	5	黄褐色土粒極小1%	
6	10YR2/1黒色シルト	3	5		
7	10YR2/2黒褐色シルト	1	4		



第61図　５・６号陥し穴状土坑

第82表　3号陥し穴状土坑土層観察表

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR4/4褐色土	2	5	風化花崗岩粒極小1%	
2	10YR2/3黒褐色土	3	5		
3	10YR3/3暗褐色土	2	5	風化花崗岩粒極小1%	
4	10YR3/1黒褐色土	3	5	黄褐色土粒極小1%	

第83表　4号陥し穴状土坑土層観察表

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/3黒褐色シルト	2	5	風化花崗岩粒極小1%	
2	10YR2/2黒褐色シルト	2	5	風化花崗岩粒極小1%未満	
3	10YR3/4暗褐色シルト	2	5	風化花崗岩粒極小1%未満	
4	10YR5/8黄褐色シルト	3	5	黄褐色土粒極小～小1%	地山ブロック
5	10YR3/2黒褐色シルト	2	2	黄褐色土粒ブロック小1%	

第84表　5号陥し穴状土坑土層観察表

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR3/2黒褐色土	2	5		
2	10YR5/8黄褐色土	2	5	黒褐色土30%	
3	10YR6/8明黄褐色土	2	3		互層

第85表　6号陥し穴状土坑土層観察表

層	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
1	10YR2/2黒褐色土	2	2	10YR5/8黄褐色土30%	
2	10YR3/2黒褐色土	2	2	10YR5/8黄褐色土40%	
3	10YR5/8黄褐色土	2	2	10YR3/2黒褐色土30%	
4	10YR2/2黒褐色土	2	2	10YR5/8黄褐色土30%	

（4）柱　穴　群（第４図）

調査区北端部で14個検出した。これら柱穴から遺物が出土していないため構築時期を判断できない。調査区北端部は堆積が薄く、畑地造成時に削平が進んだと考えられる。

第86表　土坑・柱穴計測表

遺構名	開口部（m）	深（cm）	底面標高（m）	備考
1号土坑	2.93×2.55	78.0	19.42	副穴（長方形）
2号土坑	2.16×1.94	68.5	14.32	
3号土坑	2.97×3.73	140.0	16.90	壁面焼土
1号陥し穴状土坑	0.43×3.00	140.0	19.50	
2号陥し穴状土坑	1.15×2.07	125.0	19.25	副穴有
3号陥し穴状土坑	1.34×1.41	181.0	16.79	副穴有
4号陥し穴状土坑	2.74×1.00	124.0	14.86	
5号陥し穴状土坑	2.37×1.21	139.0	17.01	副穴有
6号陥し穴状土坑	2.93×0.30	103.0	14.17	
P1	0.25×0.23	23.4	17.74	
P2	0.32×0.32	15.6	17.29	
P3	0.24×0.23	15.6	17.71	
P4	0.29×0.26	23.4	17.77	
P5	0.42×0.32	23.4	17.86	
P6	0.37×0.28	36.0	16.90	
P7	0.34×0.24	40.8	17.41	
P8	0.33×0.31	31.2	17.26	
P9	0.28×0.25	19.2	18.02	
P10	0.21×0.18	19.2	18.01	
P11	0.24×0.21	21.0	17.97	
P12	0.27×0.23	12.0	18.00	
P13	0.14×0.13	12.0	17.97	
P14	0.27×0.23	13.8	17.92	

4　出　土　遺　物

ここでは、前節の検出遺構内出土遺物の詳述を割愛し、主に遺構外出土遺物について記載する。

（1）縄　文　土　器

早期末～前期初頭、前期前葉、中期初頭～前葉、後期前葉の土器が出土している。

遺物包含層出土資料で主体を占めるのは、前期末～中期中葉の土器で、谷状地形中央部に多く出土した。

遺構外出土遺物は36～64を図示した。37は早期の尖底土器、36・38～40は早期末～前期前葉の羽状縄文土器、42～44は大木２a式、45・46は大木２b式、47～51・53～64は大木７～８式である。

（2）弥　生　土　器

主体は後期の沈線区画と対向刺突を特徴とする赤穴式土器である。古代建物の堆積土出土資料（９・23・26・30・31・32）と遺物包含層出土資料（69～71）で占められる。

（3）土　師　器

古墳時代後期～平安時代の土師器が出土している。遺物量は７世紀後半～８世紀前半を主体とし、８世紀後半、９世紀後半～10世紀初頭がそれに次ぐ。

遺構外出土遺物は316～334である。316～328が坏、329～334が甕である。328は椀型を呈し、口縁部が直線的に立ち上がる須恵器模倣坏と考えられる。317・321～323・325は内面に段があり、段の上下でミガキ調整方向が異なる。322の外面底部はケズリ調整である。甕類はハケ調整が多い。

（4）須　恵　器

坏が２号竪穴建物跡（７世紀後半～８世紀前半）、壺が35号竪穴建物跡（９世紀後半～10世紀初頭）、甕が５・７号竪穴建物跡（７世紀後半～８世紀前半）と、35号竪穴建物跡から出土している。

遺構外では344～351を図示した。すべて甕片である。344の内底面にはコゲが付着している。

（5）石　　器

竪穴建物跡出土資料の内、床面出土資料は非常に少ない。剥片石器は遺構外と古代竪穴建物跡堆積土から出土しており、帰属時期は明確でない。

剥片石器は、石鏃、石匙、掻器、不定形石器、剥片類が出土している。遺構外では352の石鏃と354の石匙を図示した。

礫石器は、打製石斧、磨製石斧、磨石、敲磨器、敲石、砥石が出土している。礫石器は、堆積土出土資料については判断できないが、床面出土資料については、古代に帰属すると捉えて問題ない。このなかで、磨石が特徴的である。磨石のなかには、磨面にススやタール状黒色付着物の見られる資料が一定量存在する。これらの資料の特徴は、総じて亀裂状の磨痕が発達することが稀で、磨面が自然摩耗か人為的か判断しがたい点にある。遺構外では357・360の打製石斧、362の磨製石斧、388の砥石を図示した。

（6）土　製　品

すべて紡錘車である。糸紡ぎの道具と考えられているが、本書で図示した底面部が、使用時は機能面と考えられているが、慣例に従って断面が台形になるように掲載している。本書図示の底面部は、平坦で摩耗が著しい。上面有孔部が窪むものが主体である。また偏平な資料もある。遺構外では415を図示した。

（7）鉄　製　品

鏃、短刀、刀子、鎌、環状製品がある。425の鏃は先端部が小さい古墳時代からの伝統的な形態で２号竪穴建物跡から出土した。短刀（416・417）は遺構外（416）と23号竪穴建物跡の堆積土から出土（417）している。426の鎌は22号竪穴建物跡の北壁付近の堆積土上部から出土している。刀子片は出土数が多く、すべて破損品である。427の環状製品は16号竪穴建物跡から出土している。

（8）陶　磁　器

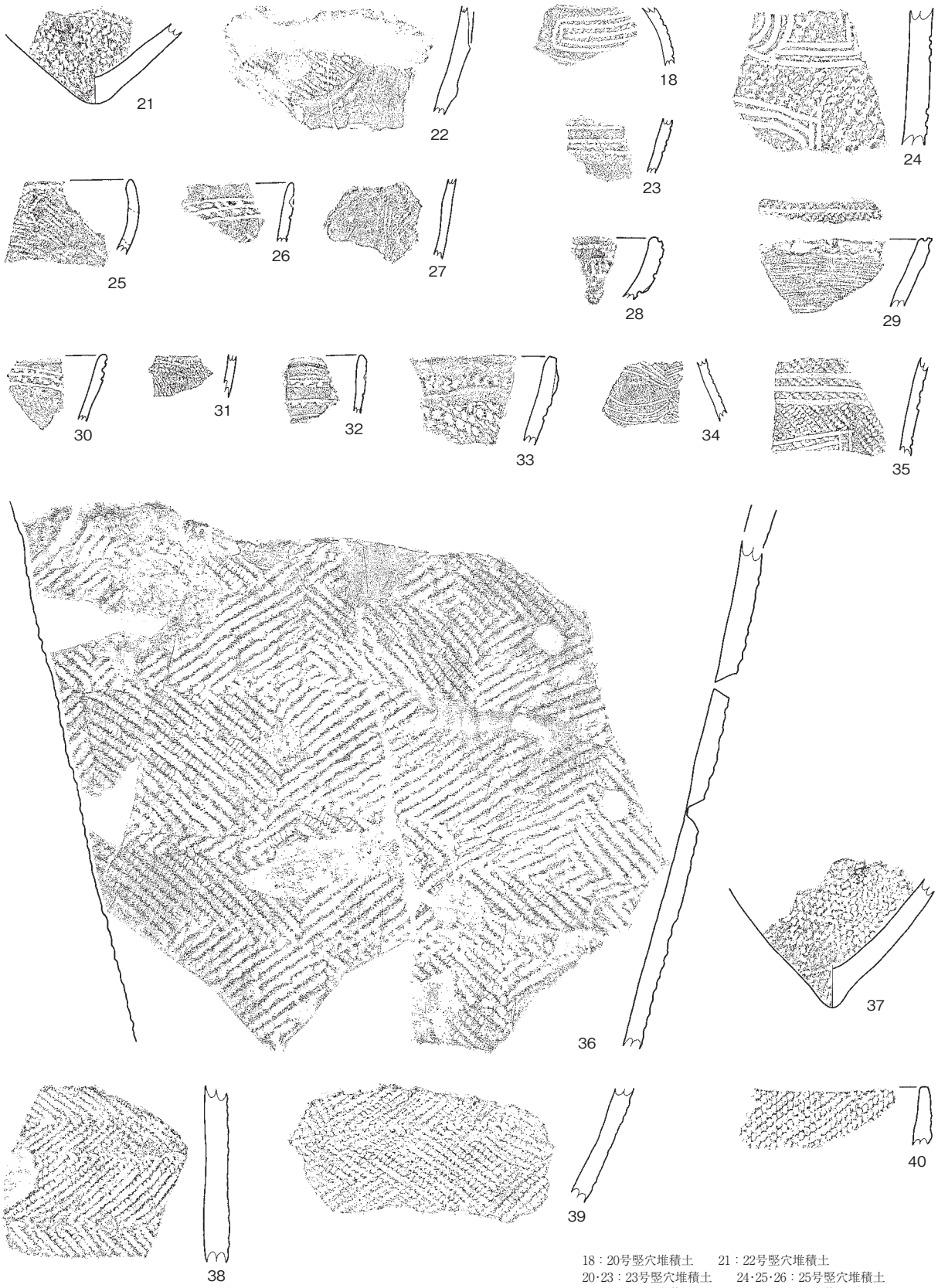
中世～近世である。428は無文の龍泉窯系青磁碗で16世紀、429は中国産天目碗で15～16世紀、430は肥前産陶器皿で18末～19世紀、431は肥前産染付磁器皿で18後半～19世紀である。これらは古代の竪穴建物跡堆積土か遺構外の出土である。

（9）その他（琥珀・鉄滓）

表・写真掲載資料である。437の琥珀塊が16号竪穴建物跡堆積土から出土している。出土位置は間仕切り溝もしくは根太痕と想定される溝２条に挟まれた範囲内である。

432の鍛冶滓が12号竪穴建物跡（９世紀後半～10世紀初頭）、433の鍛冶滓が35号竪穴建物跡（９世紀後半～10世紀初頭）から出土した。遺構外では沢跡に隣接する調査区北端部の斜面地から435の流動滓が見つかっている。

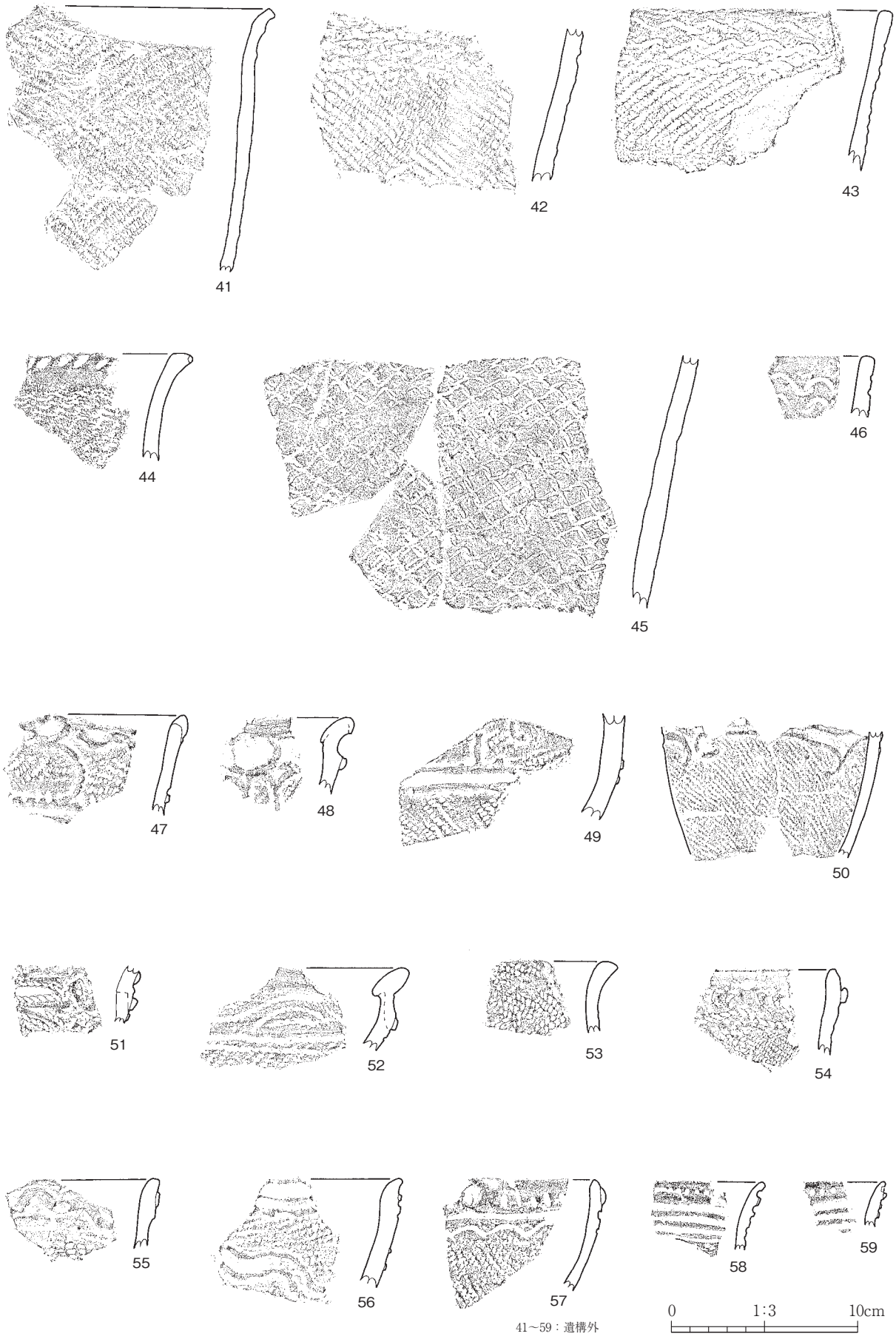
第62図　縄文土器・弥生土器1



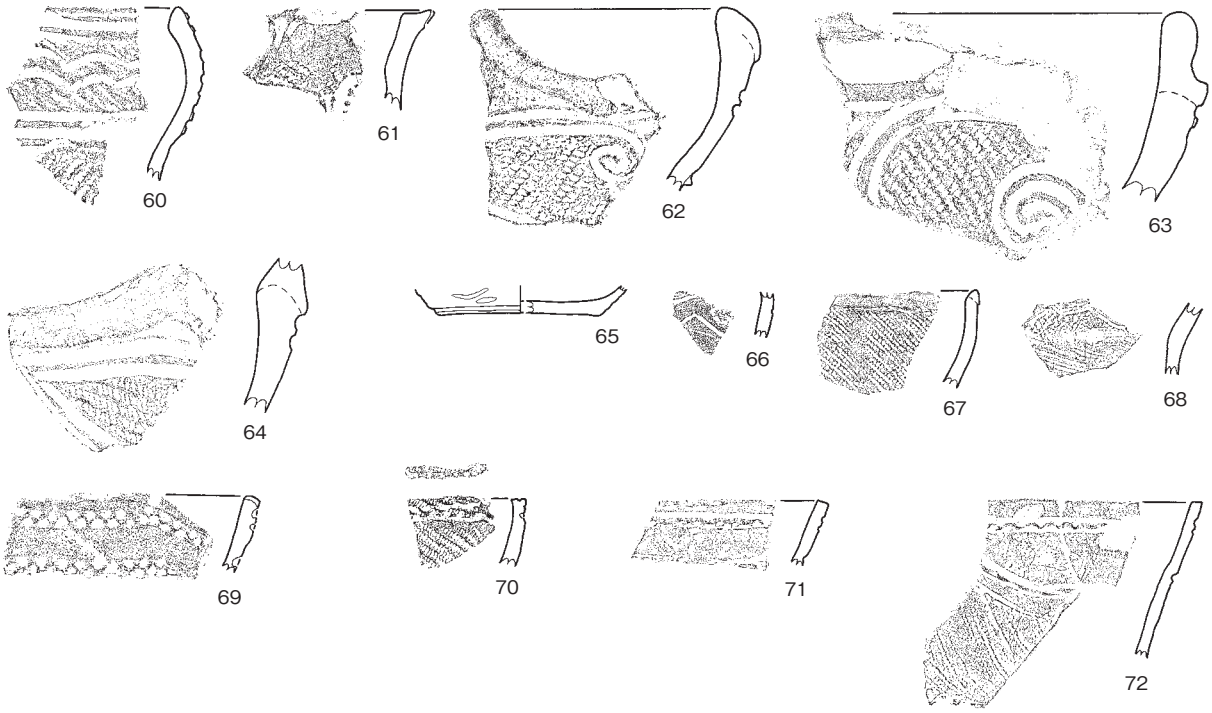
18：20号竪穴堆積土　　21：22号竪穴堆積土
20·23：23号竪穴堆積土　　24·25·26：25号竪穴堆積土
27：26号竪穴堆積土　　28·29：28号竪穴堆積土
30·31·32：30号竪穴堆積土　　33：36号竪穴堆積土
34·35：３号土坑　　36～40：遺構外

0　1:3　10cm

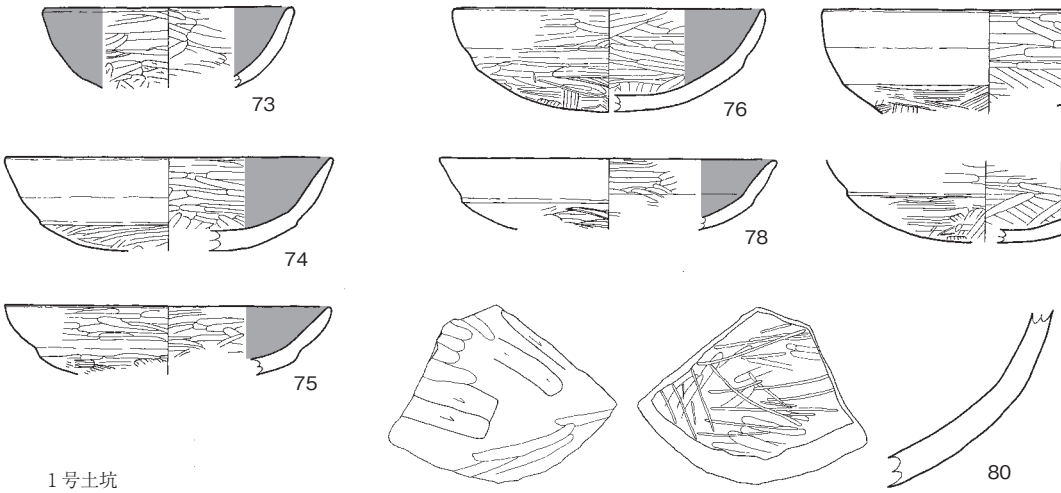
第63図　縄文土器・弥生土器２



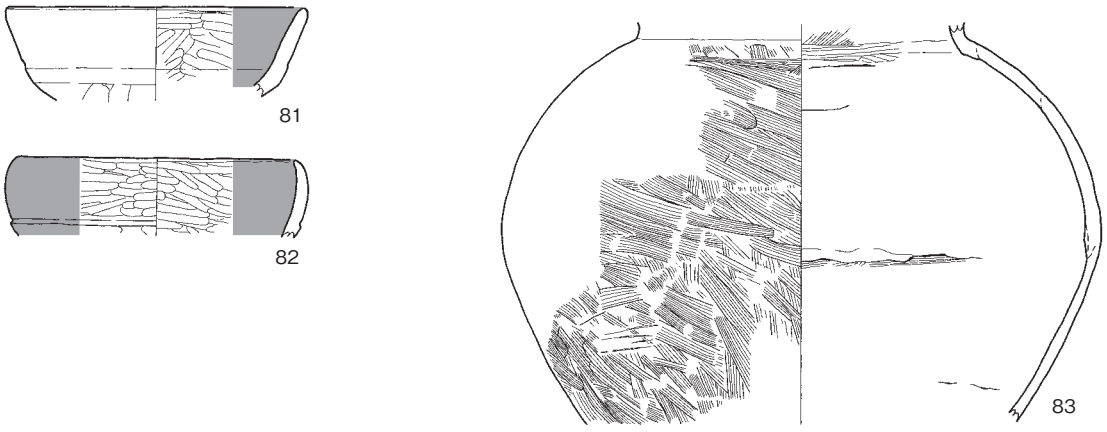
第64図　縄文土器・弥生土器３



60～72：遺構外



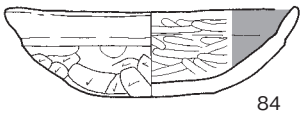
1号土坑



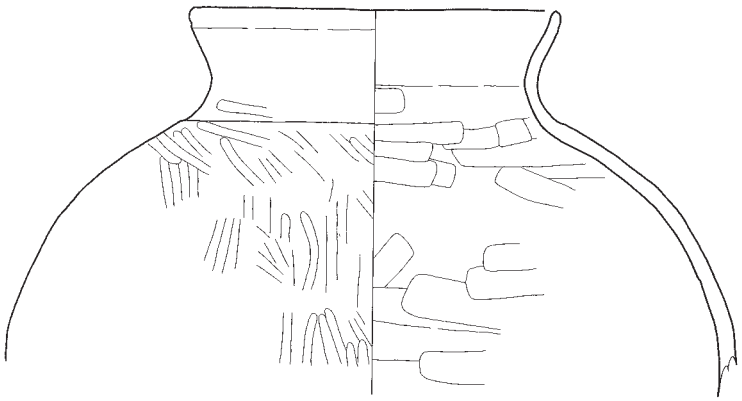
3号土坑

0　1:3　10cm

第65図　縄文土器・弥生土器４・土師器１



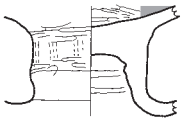
84



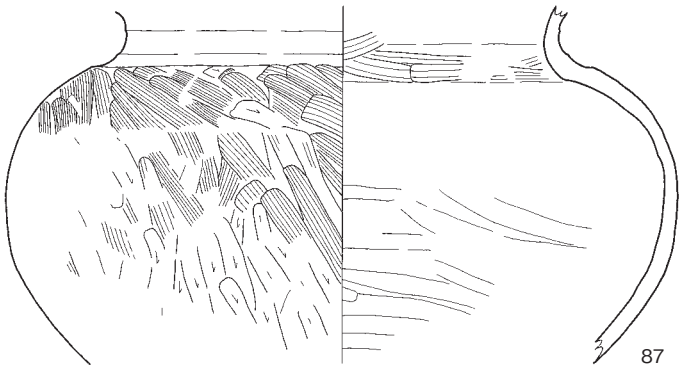
85

1号竪穴建物跡

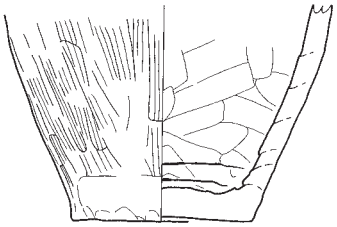
84：1号竪穴床面
85：1号竪穴堆積土



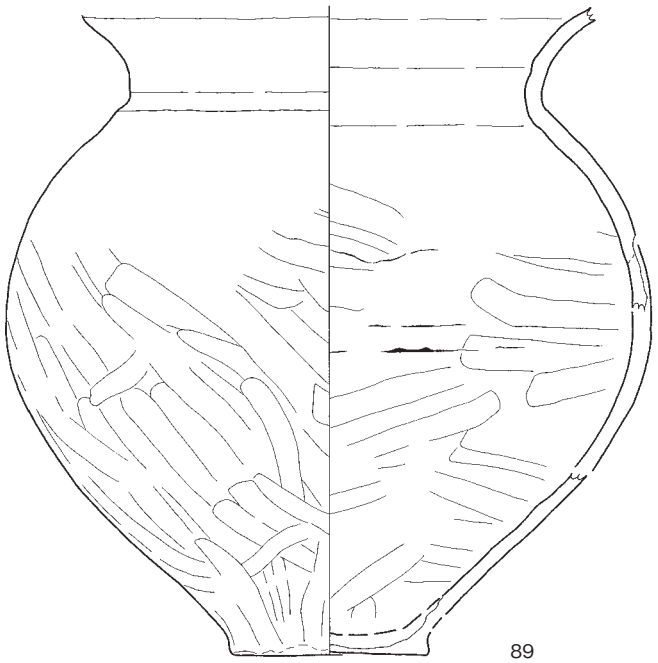
86



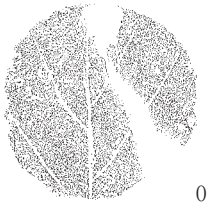
87



88



89

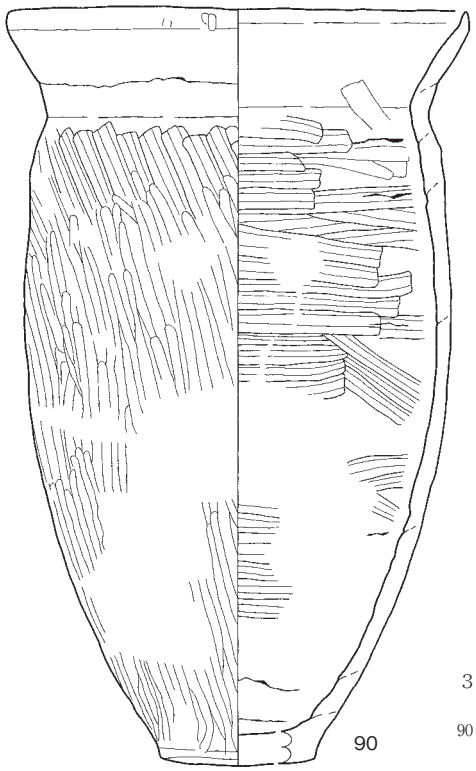


86·89：2号竪穴床面
87：2号竪穴堆積土
88：2号竪穴カマド支脚

2号竪穴建物跡

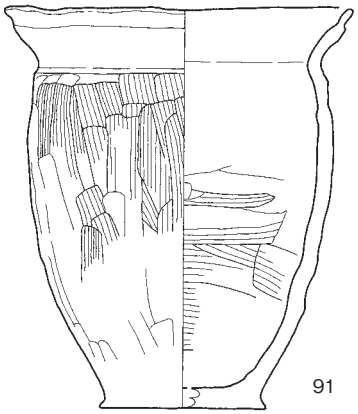
0　1:3　10cm

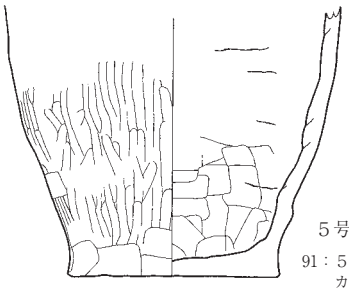
第66図　土師器2



3号竪穴建物跡

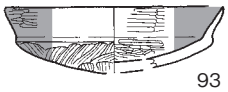
90：3号竪穴建物
床面堆積土

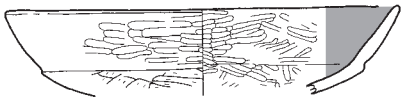


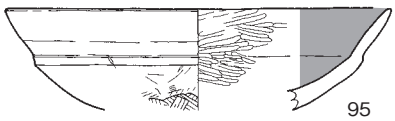


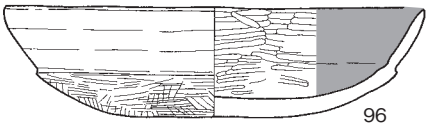
5号竪穴建物跡

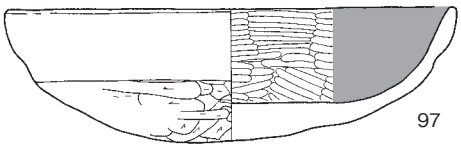
91：5号竪穴建物
カマド支脚
92：5号竪穴建物堆積土

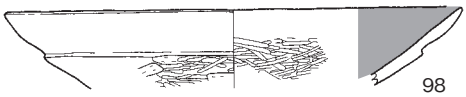




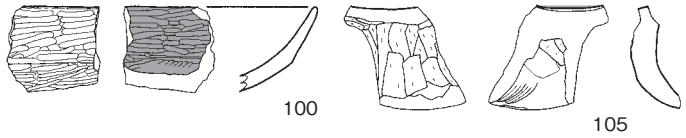


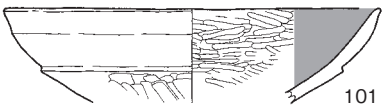


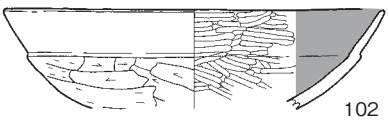


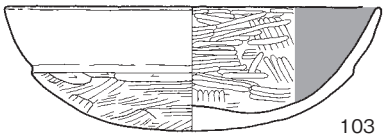


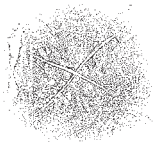
7号竪穴建物跡







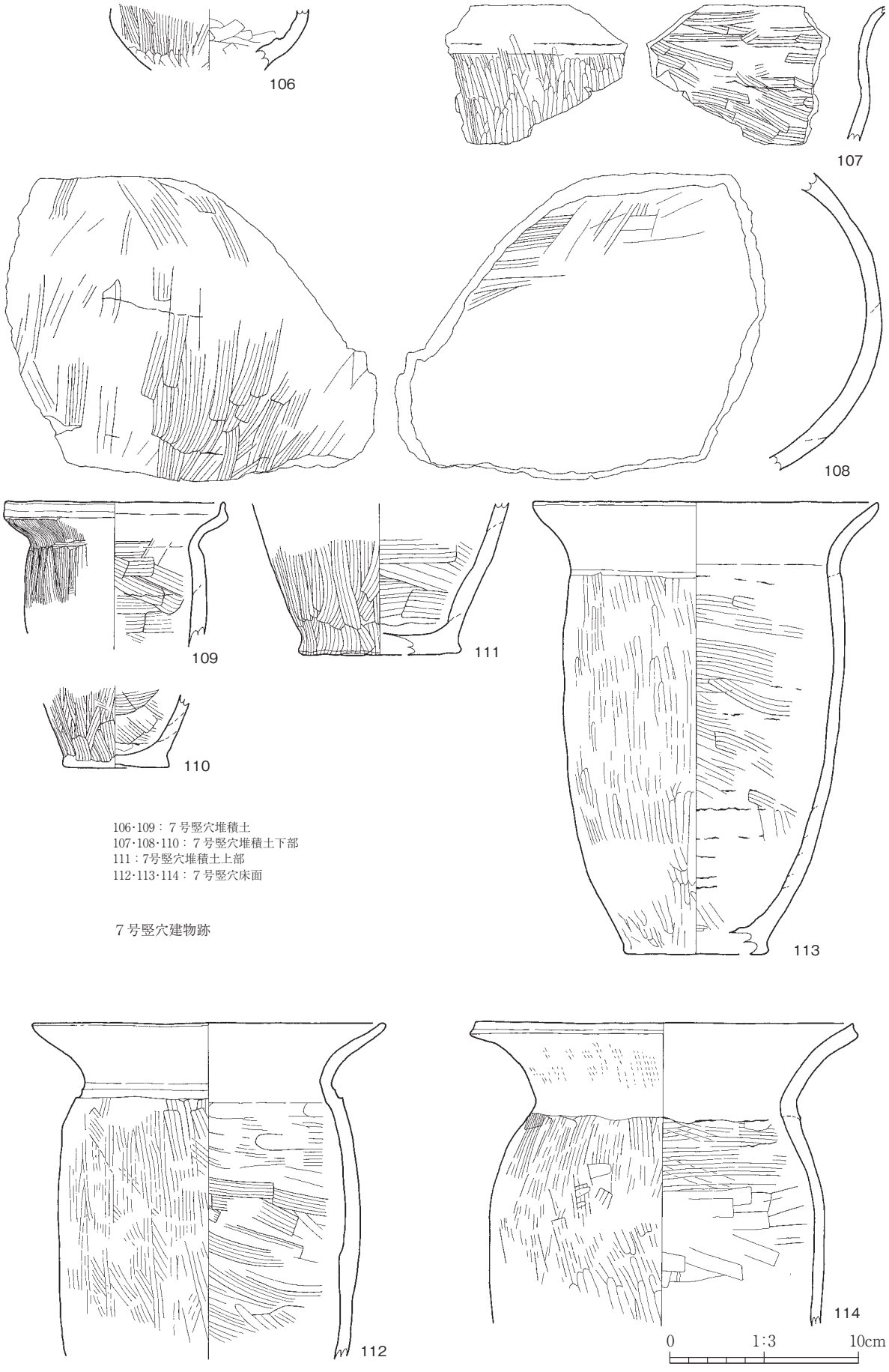




93·96·97·99·103：7号竪穴堆積土下部
94·95·98·100·101·105：7号竪穴堆積土
102·104：7号竪穴堆積土上部

0　1:3　10cm

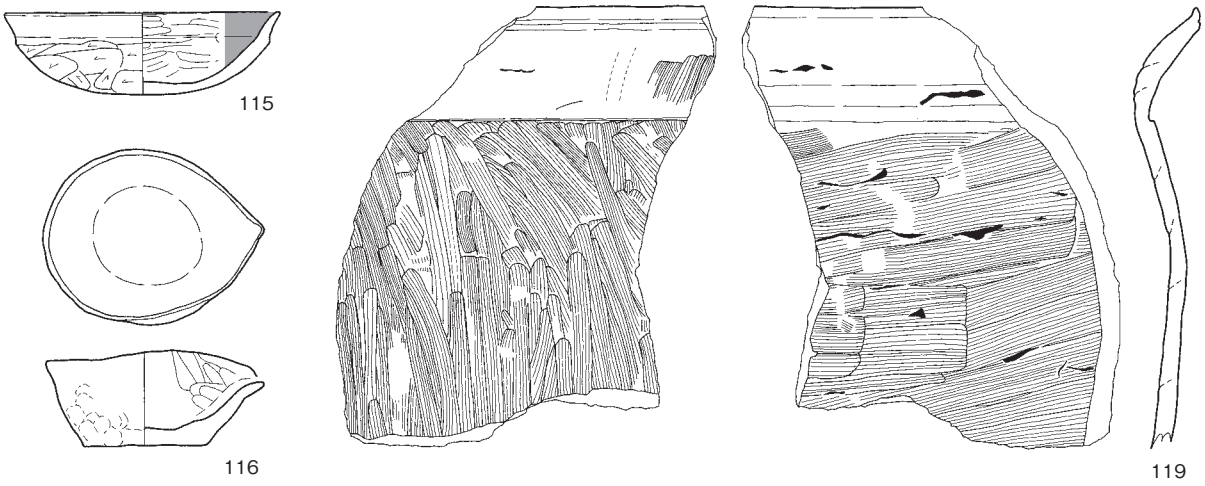
第67図　土師器3

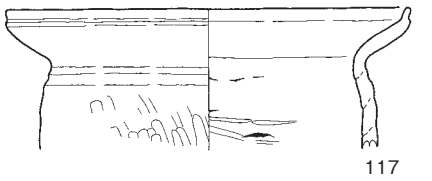


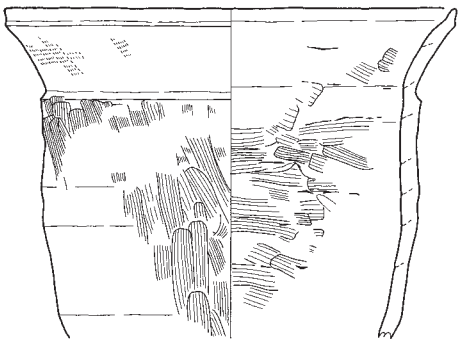
106･109：７号竪穴堆積土
107･108･110：７号竪穴堆積土下部
111：7号竪穴堆積土上部
112･113･114：７号竪穴床面

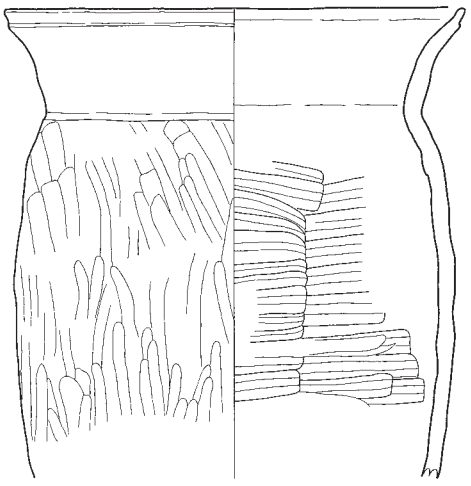
７号竪穴建物跡

第68図　土師器４



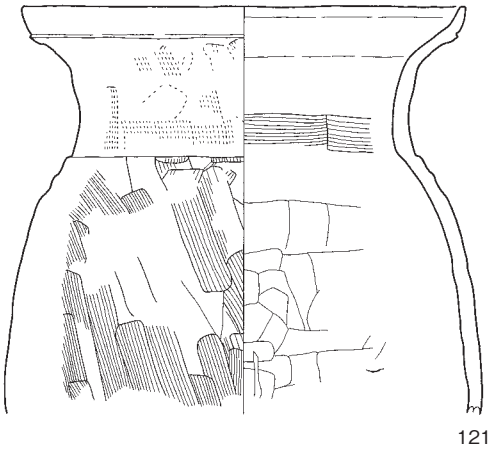






115･118：９号竪穴堆積土
116･119：９号竪穴
117･120：９号竪穴カマド内

９号竪穴建物跡

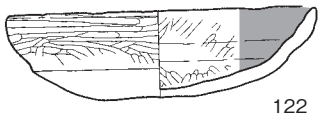


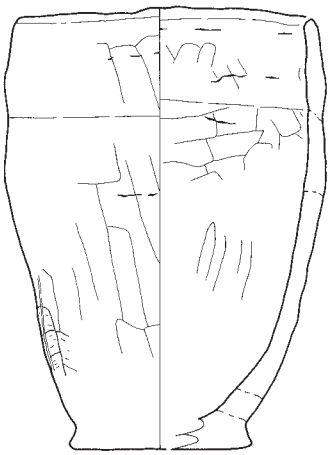
121：10号竪穴堆積土

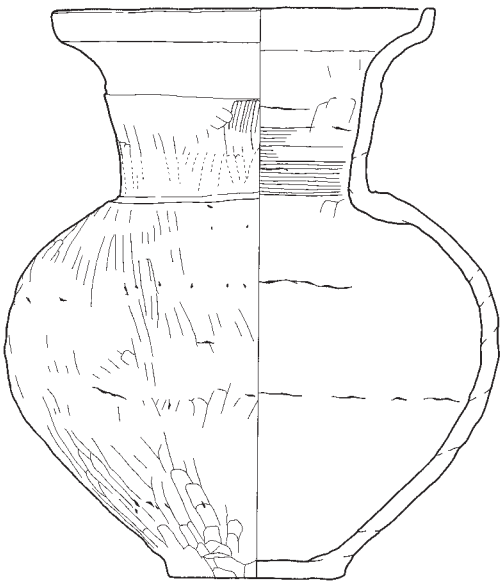
10号竪穴建物跡

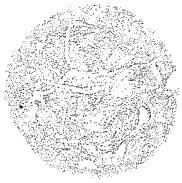
0　1:3　10cm

第69図　土師器５


122

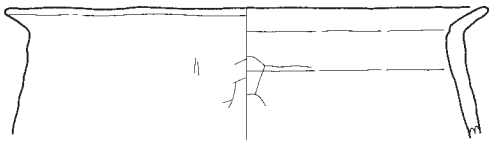

124

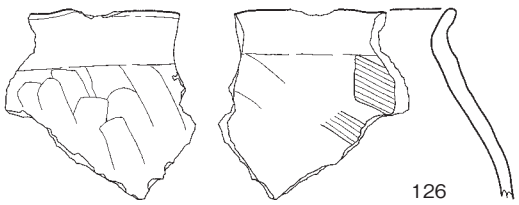

123



122·123：11号竪穴床面
124：11号竪穴堆積土

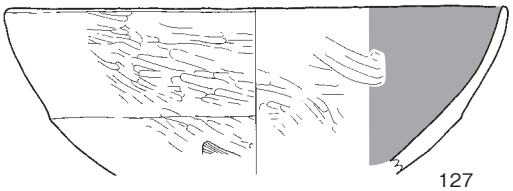
11号竪穴建物跡


125


126

125·126：12号竪穴堆積土

12号竪穴建物跡

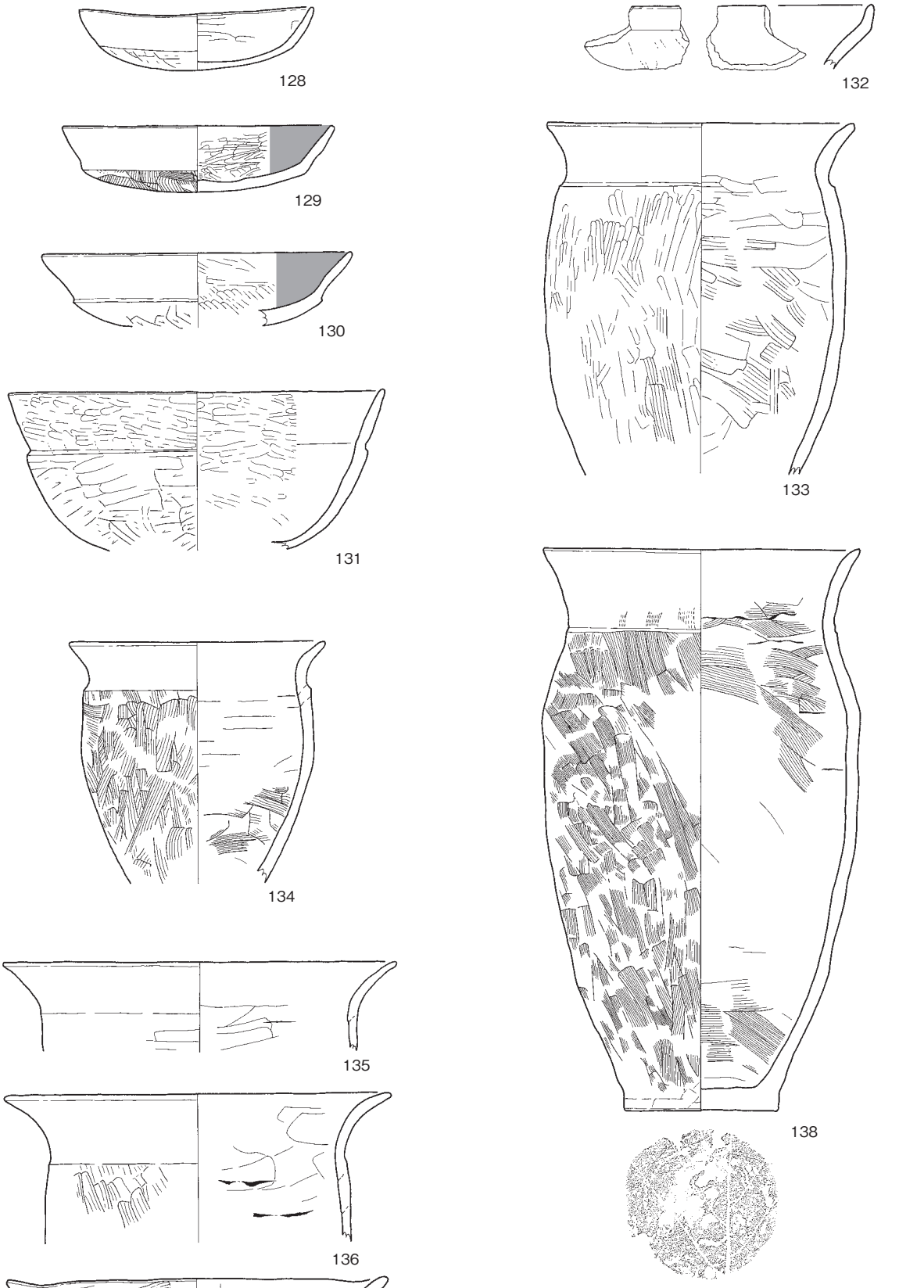

127

127：15号竪穴堆積土

15号竪穴建物跡

0　1:3　10cm

第70図　土師器6

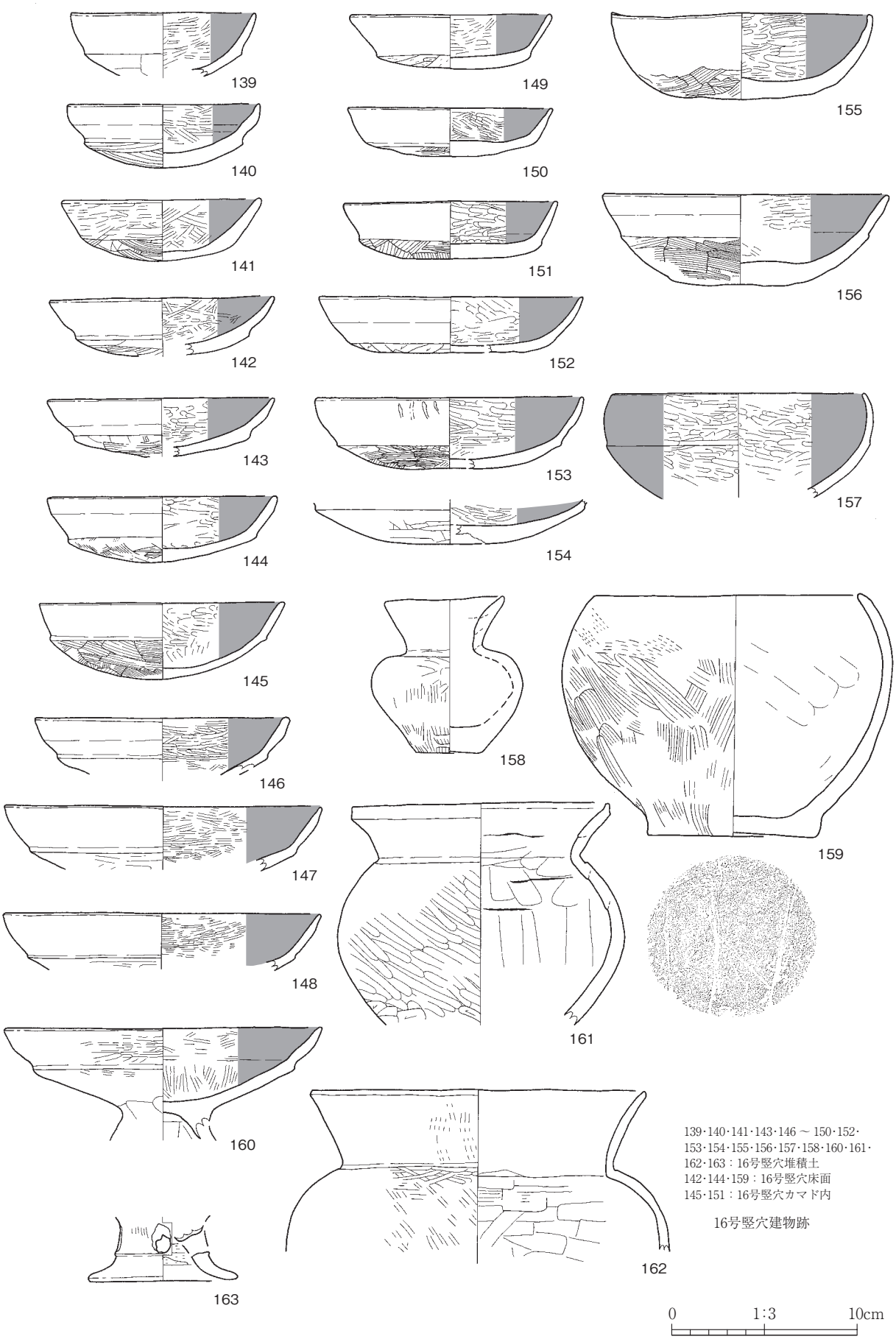


128·129·130·132·134～138：14号竪穴堆積土
131：14号竪穴床面
133：14号竪穴カマド内

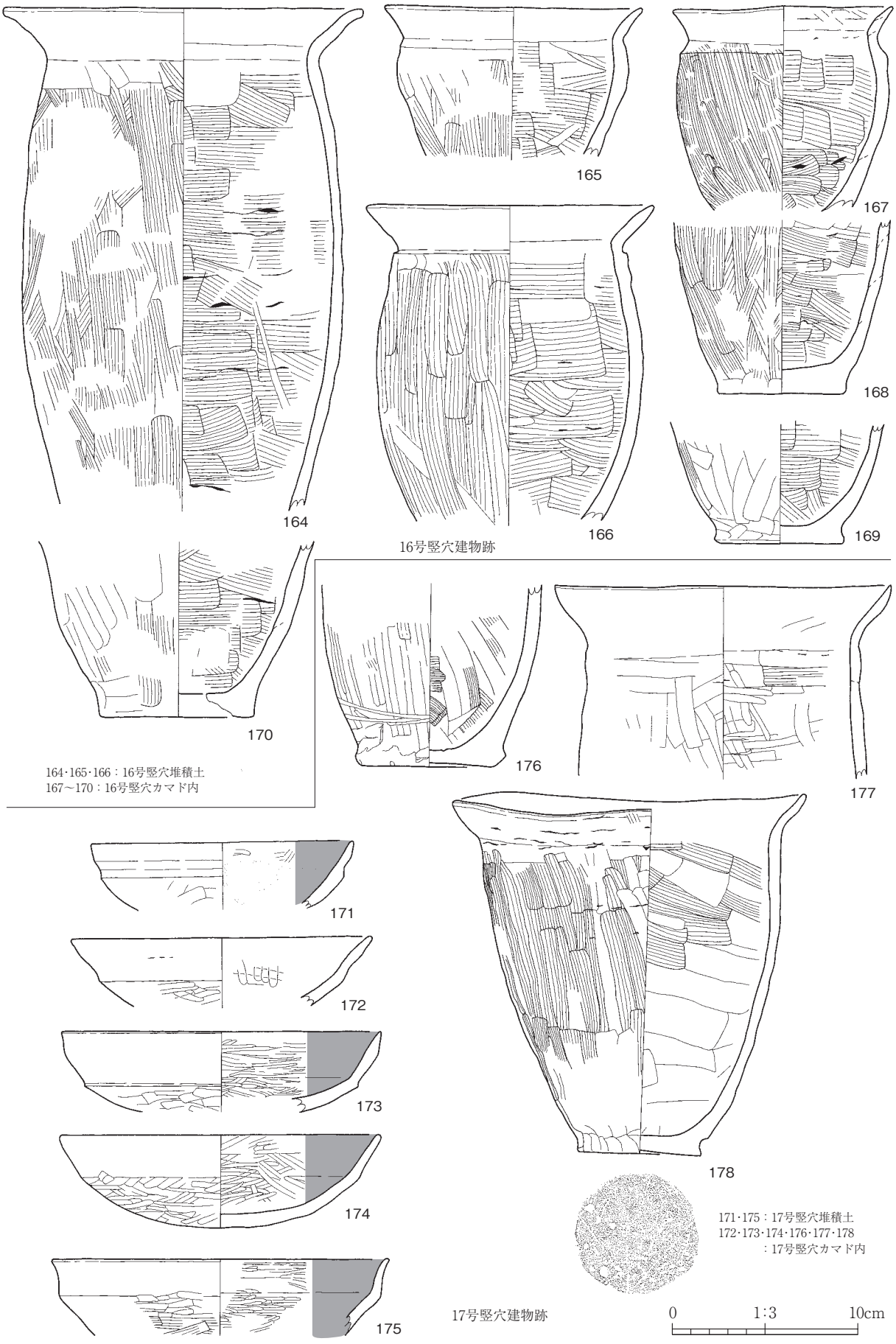
14号竪穴建物跡

0　1:3　10cm

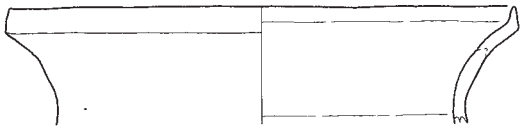
第71図　土師器７


139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
139·140·141·143·146 ～ 150·152·
153·154·155·156·157·158·160·161·
162·163：16号竪穴堆積土
142·144·159：16号竪穴床面
145·151：16号竪穴カマド内
16号竪穴建物跡
0
1:3
10cm

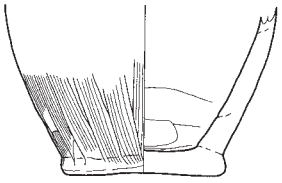
第72図　土師器８


164
165
166
167
168
169
16号竪穴建物跡
170
164・165・166：16号竪穴堆積土
167～170：16号竪穴カマド内
176
177
171
172
173
174
175
178
171・175：17号竪穴堆積土
172・173・174・176・177・178
：17号竪穴カマド内
17号竪穴建物跡
0
1:3
10cm

第73図　土師器９



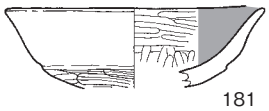
179



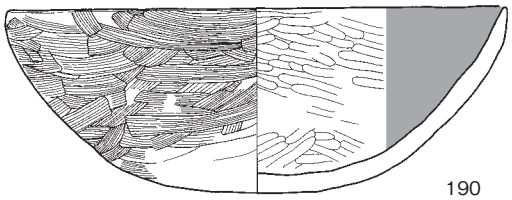
180

19号竪穴建物跡

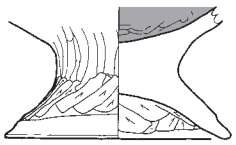
179·180：19号竪穴堆積土



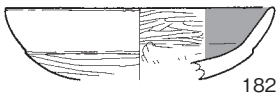
181



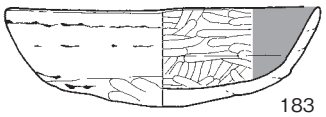
190



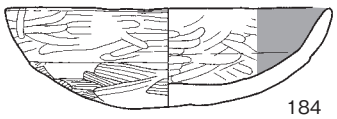
191



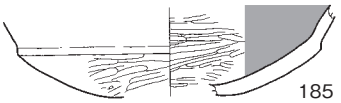
182



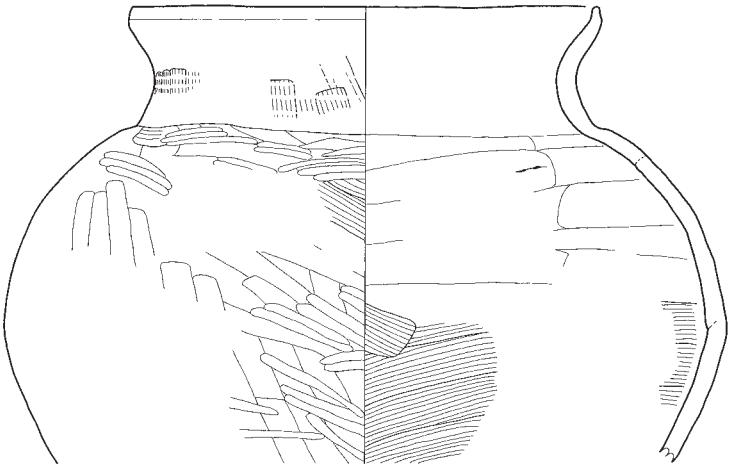
183



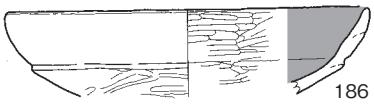
184



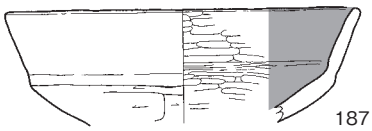
185



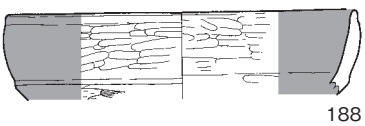
192



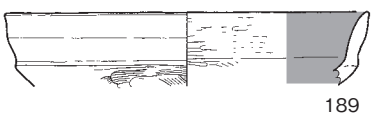
186



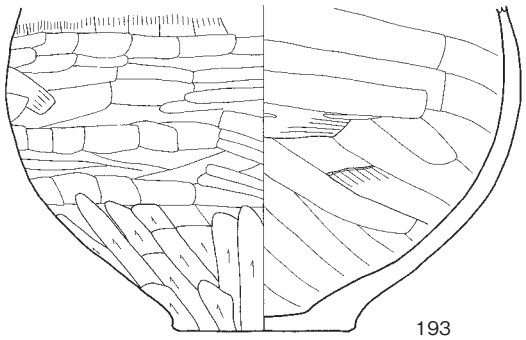
187



188



189



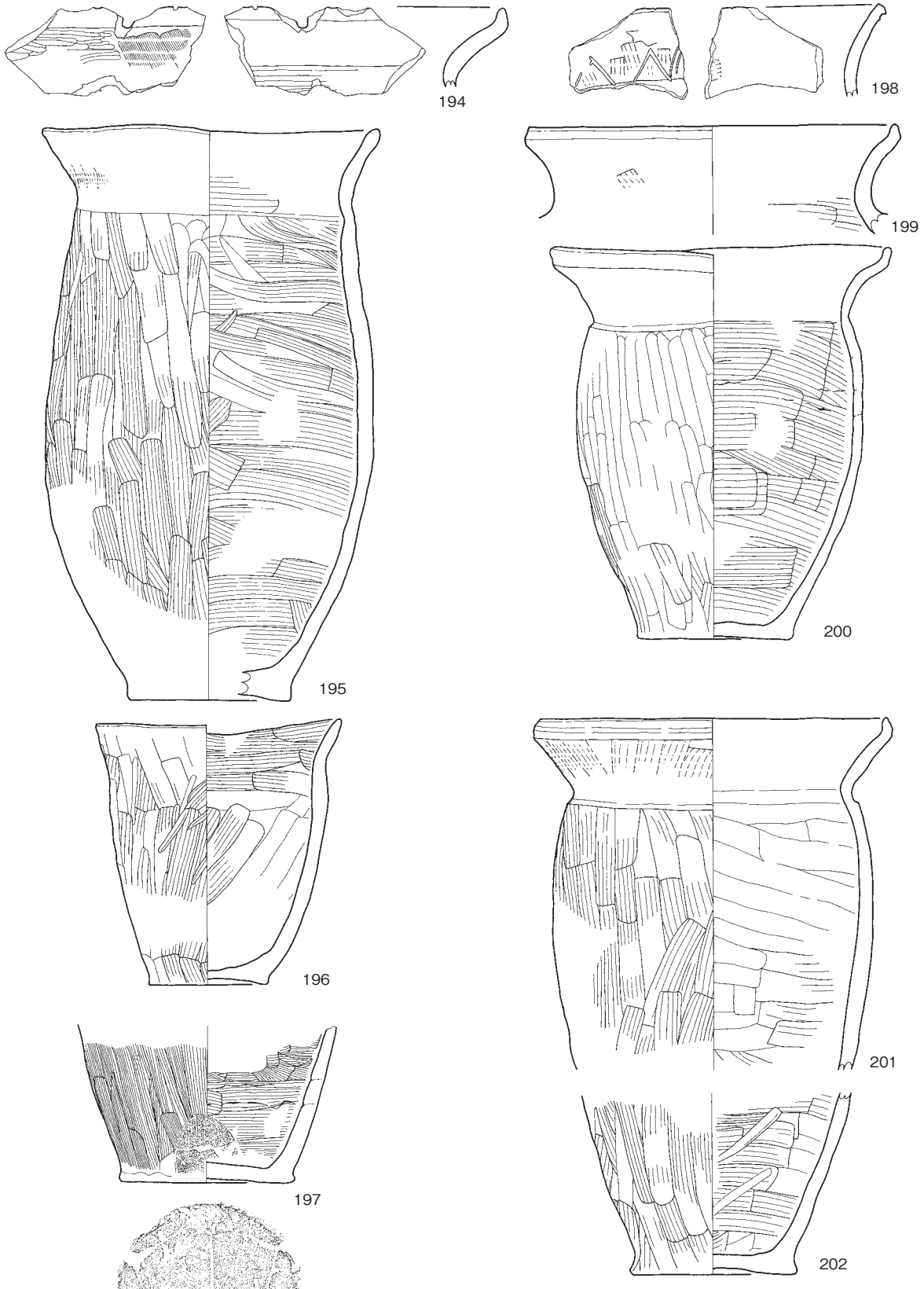
193

181·189·190：21号竪穴カマド内
182·186·187·188·192：21号竪穴堆積土
183·184·193：21号竪穴床面
185·191：21号竪穴堆積土下部

21号竪穴建物跡

0　1:3　10cm

第74図　土師器10

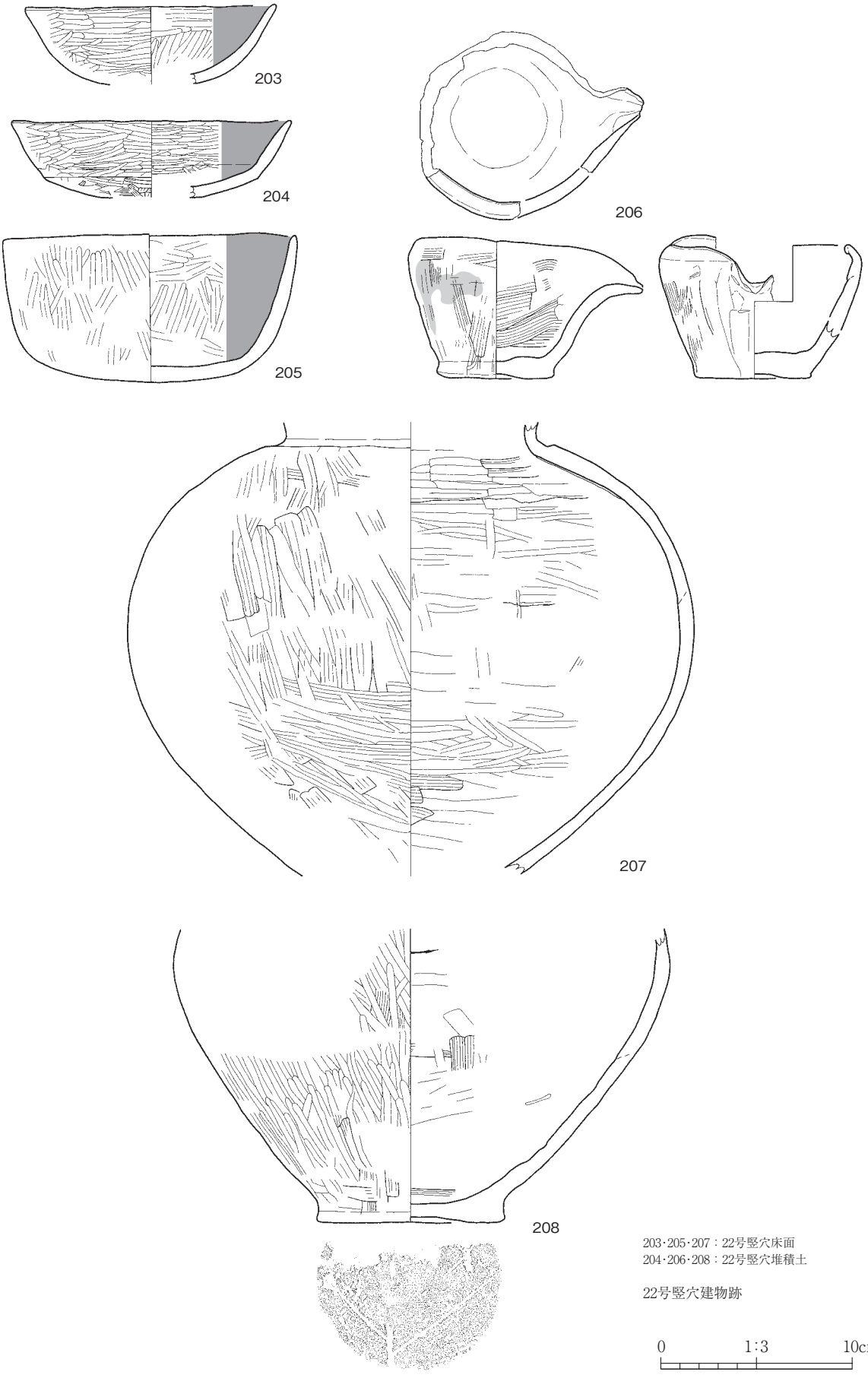


194・195・202：21号竪穴カマド内
196：21号竪穴堆積土下部
197・198・200・201：21号竪穴堆積土
199：21号竪穴床面

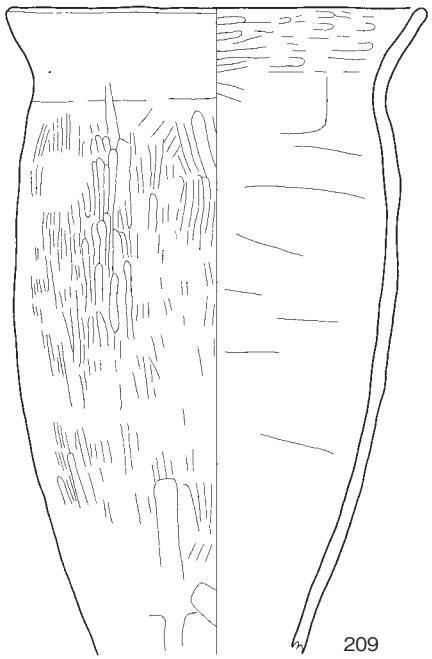
21号竪穴建物跡

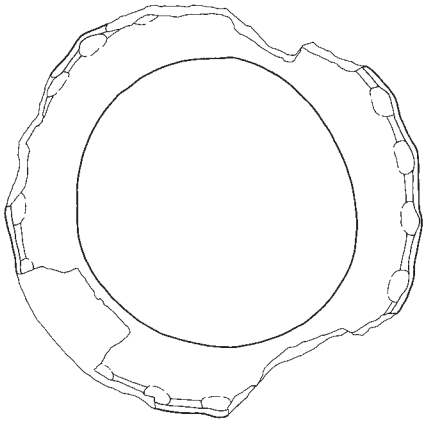
0　1:3　10cm

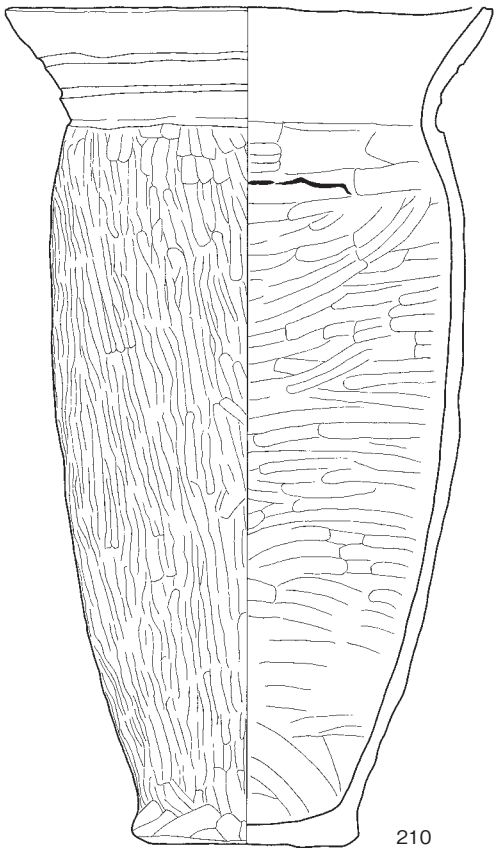
第75図　土師器11

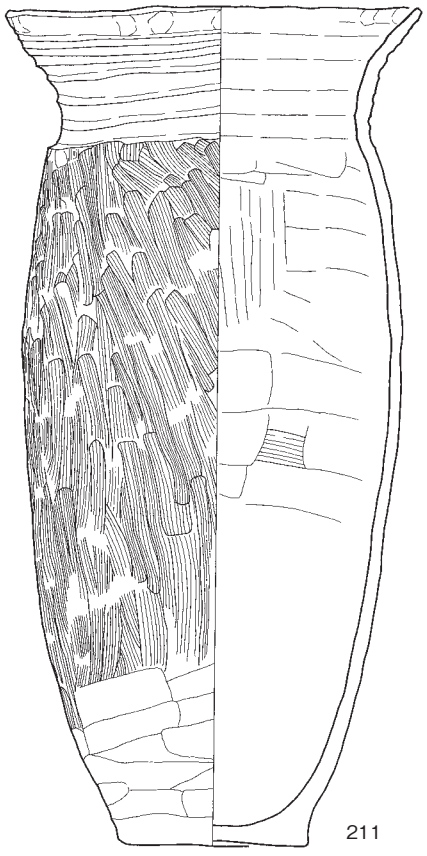

203
204
205
206
207
208
203・205・207：22号竪穴床面
204・206・208：22号竪穴堆積土
22号竪穴建物跡
0
1:3
10cm

第76図　土師器12







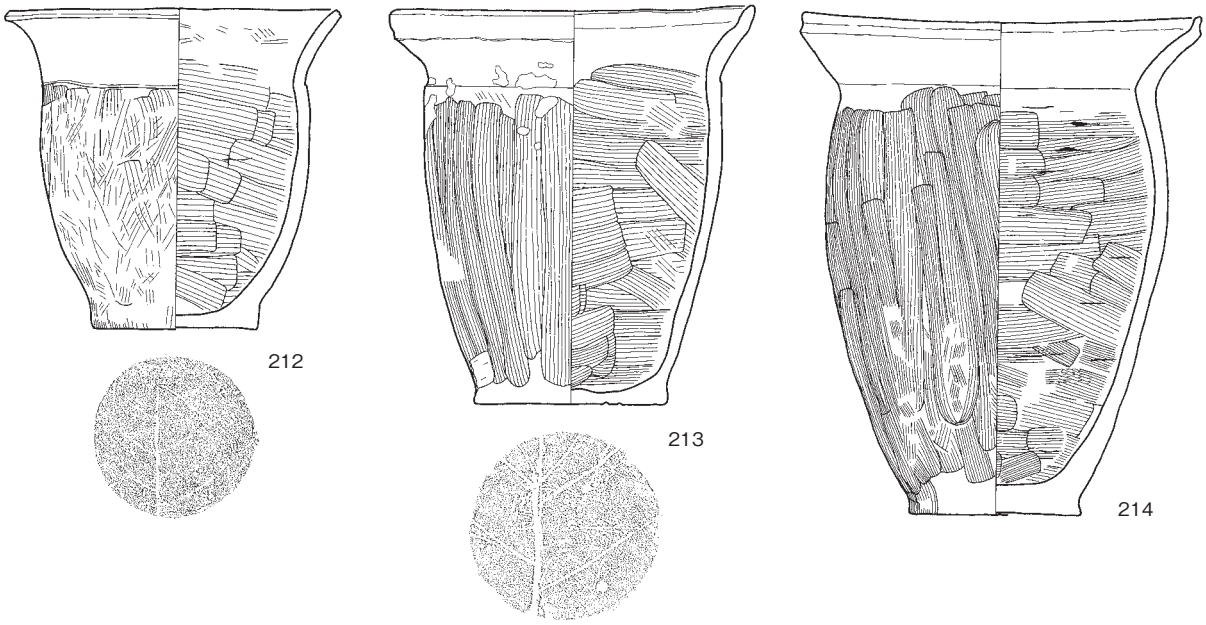


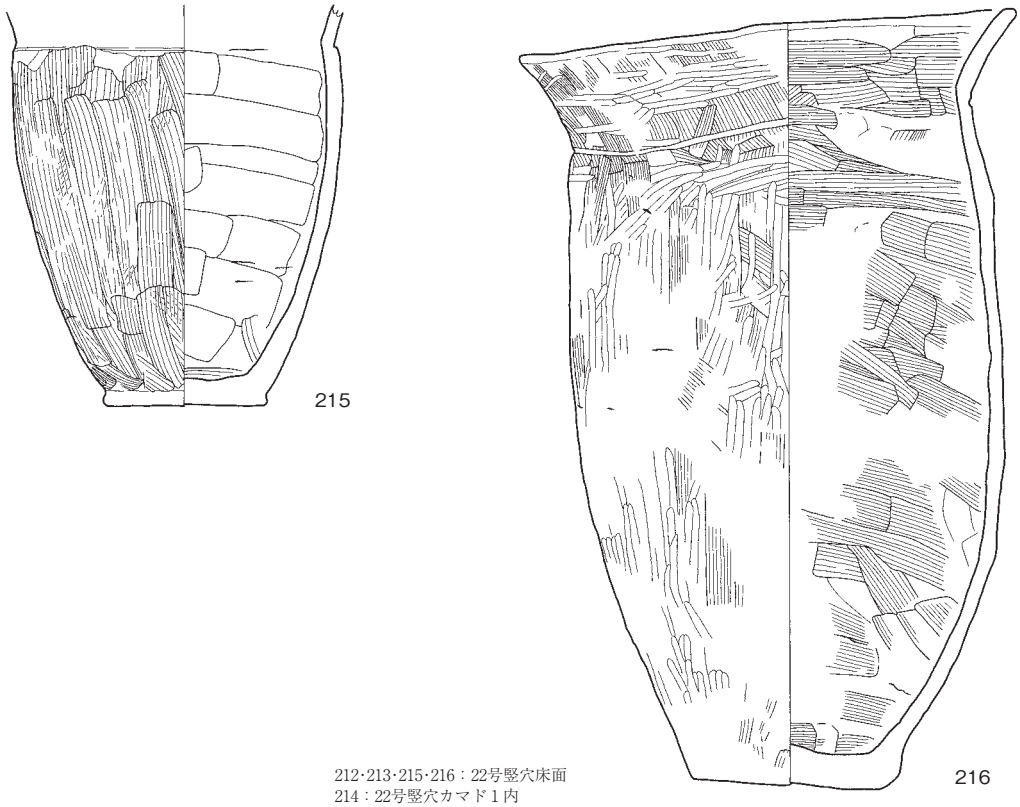
209·211：22号竪穴床面
210：22号竪穴カマド内

22号竪穴建物跡

0　1:3　10cm

第77図　土師器13



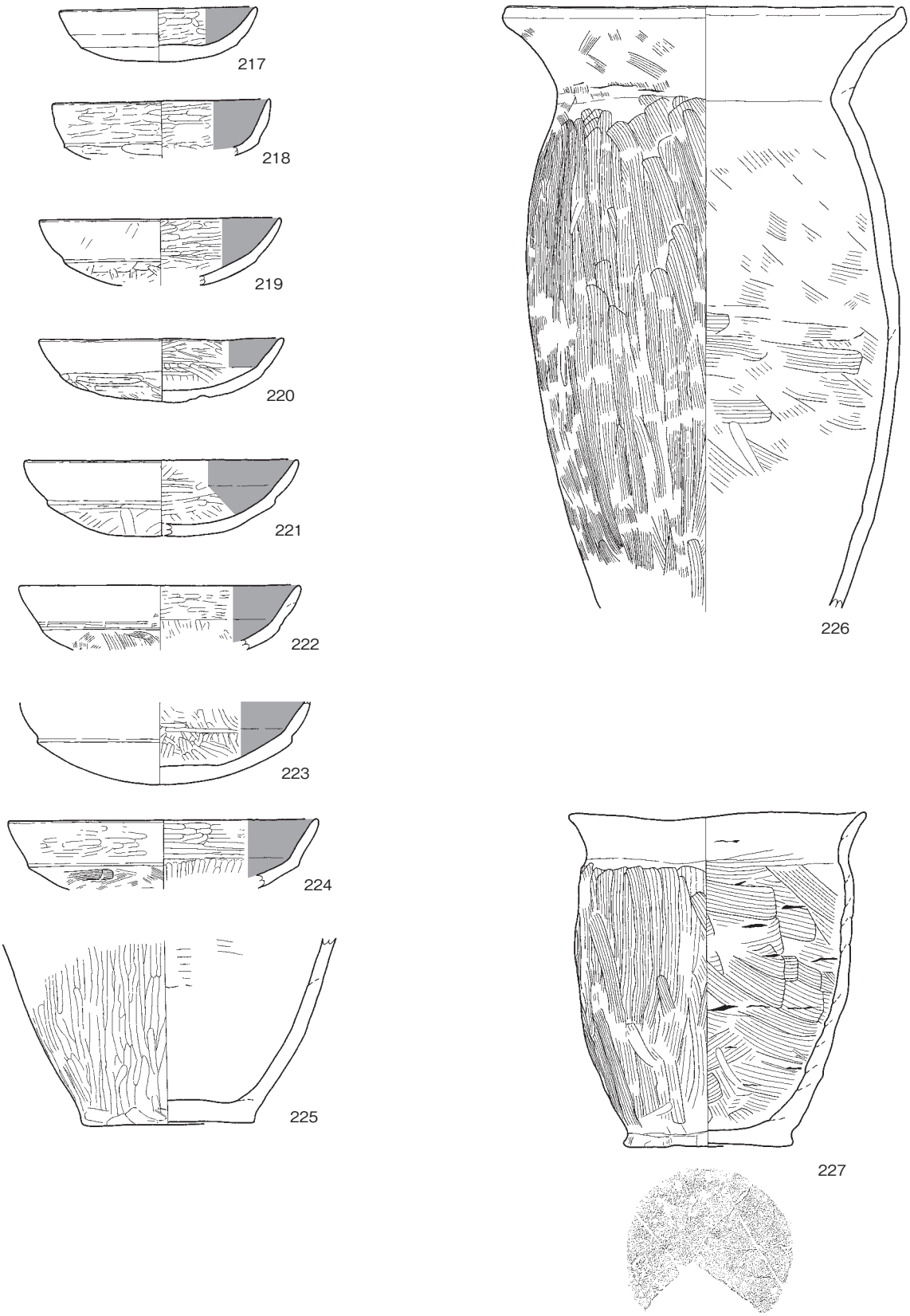


212·213·215·216：22号竪穴床面
214：22号竪穴カマド１内

22号竪穴建物跡

0　1:3　10cm

第78図　土師器14

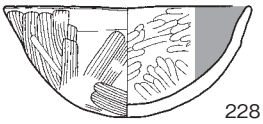


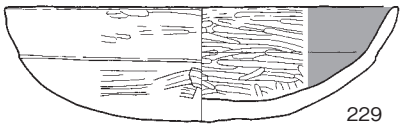
217～227：23号竪穴堆積土

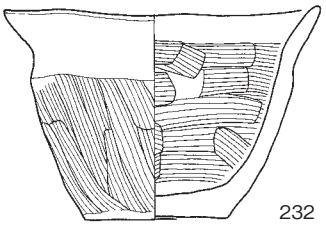
23号竪穴建物跡

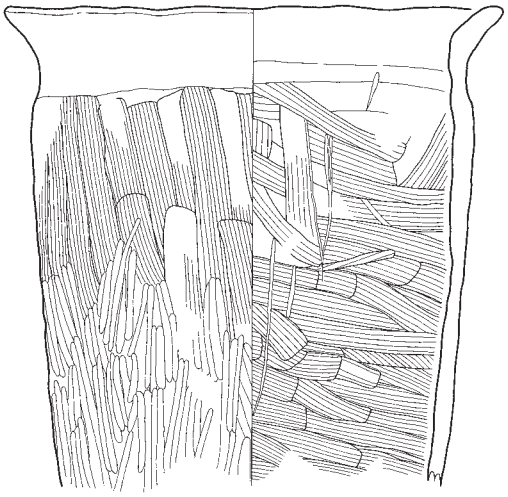
0　1:3　10cm

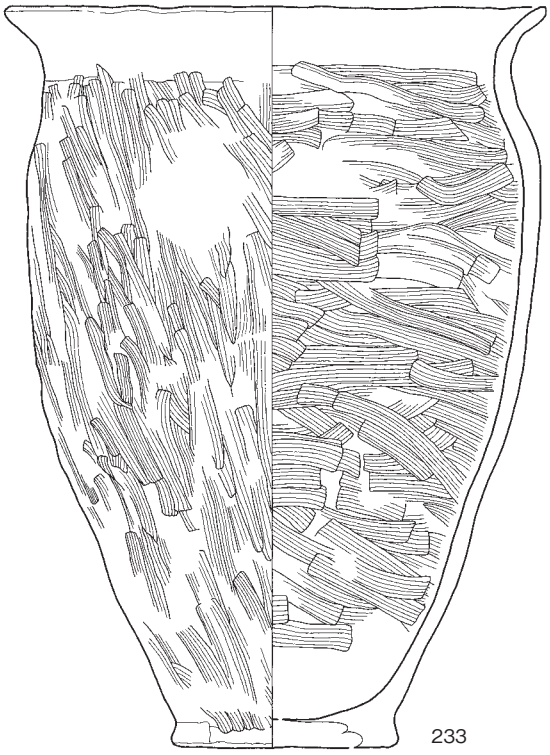
第79図　土師器15

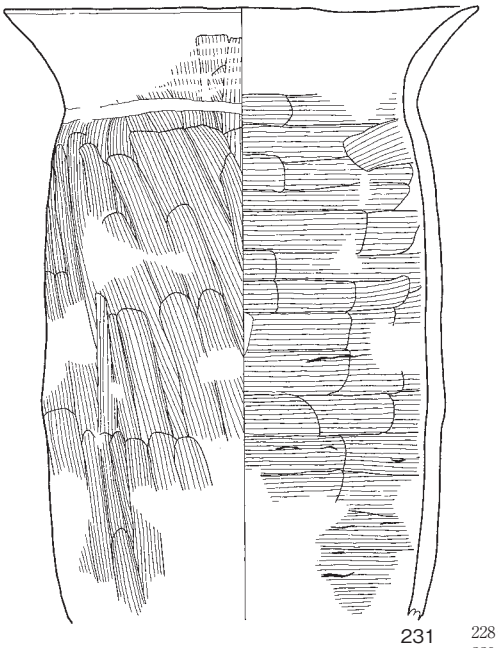

228

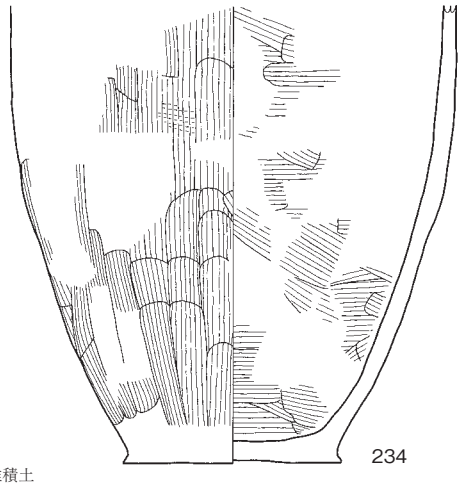

229


232


230


233


231

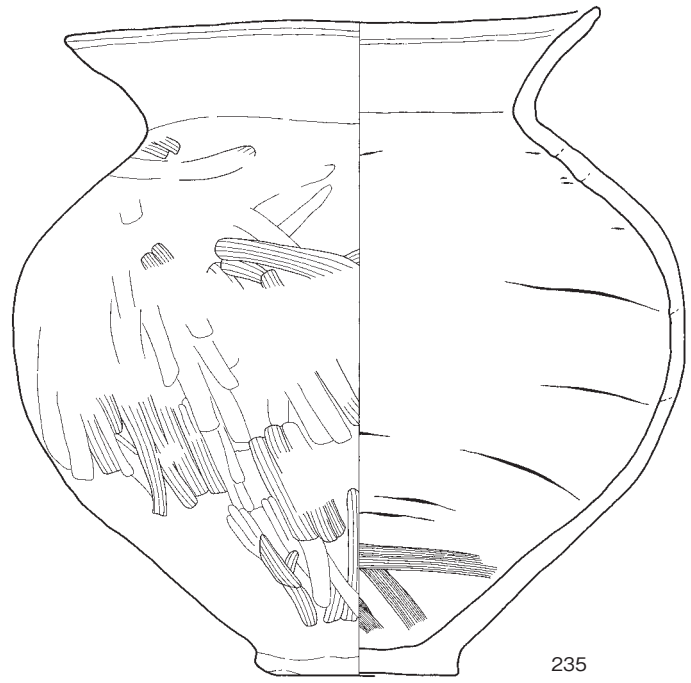

234

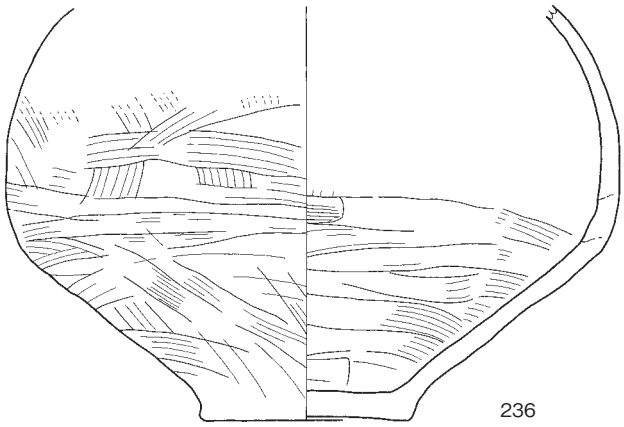
228·231·233：24号竪穴堆積土
229·230·232·234：24号竪穴床面

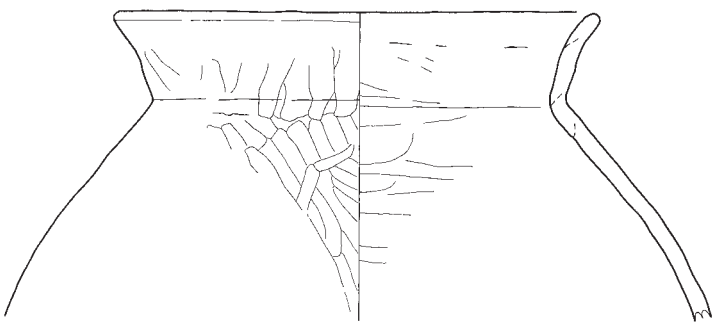
24号竪穴建物跡

0　1:3　10cm

第80図　土師器16





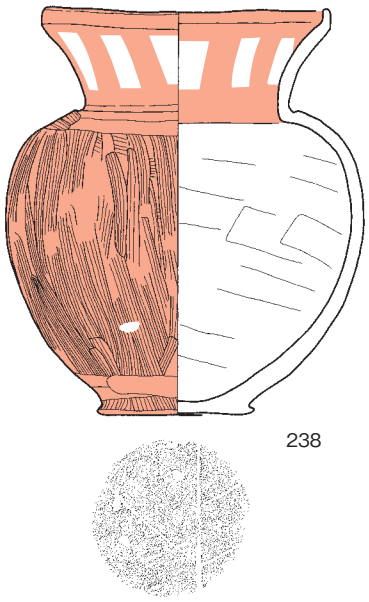


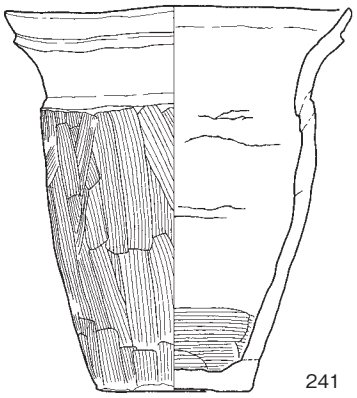
235·236·237：25号竪穴床面

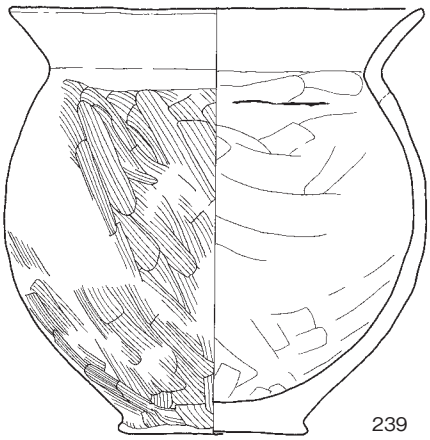
25号竪穴建物跡

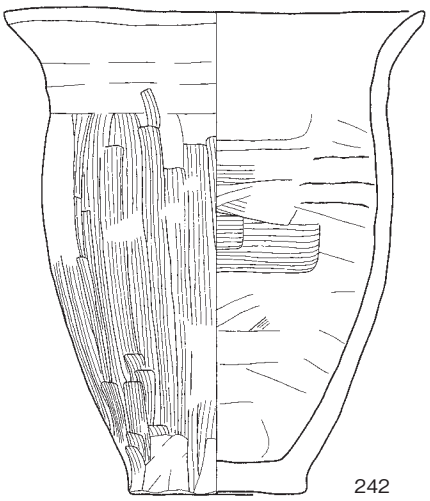
0　1:3　10cm

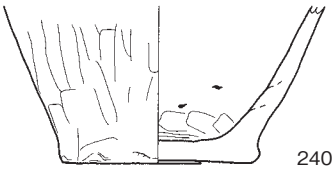
第81図　土師器17

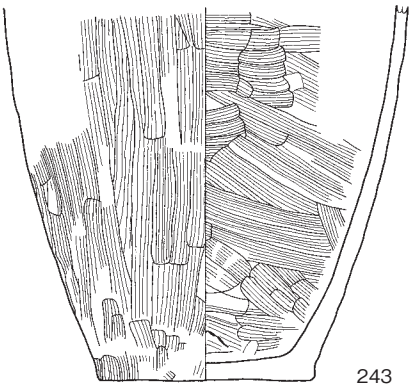










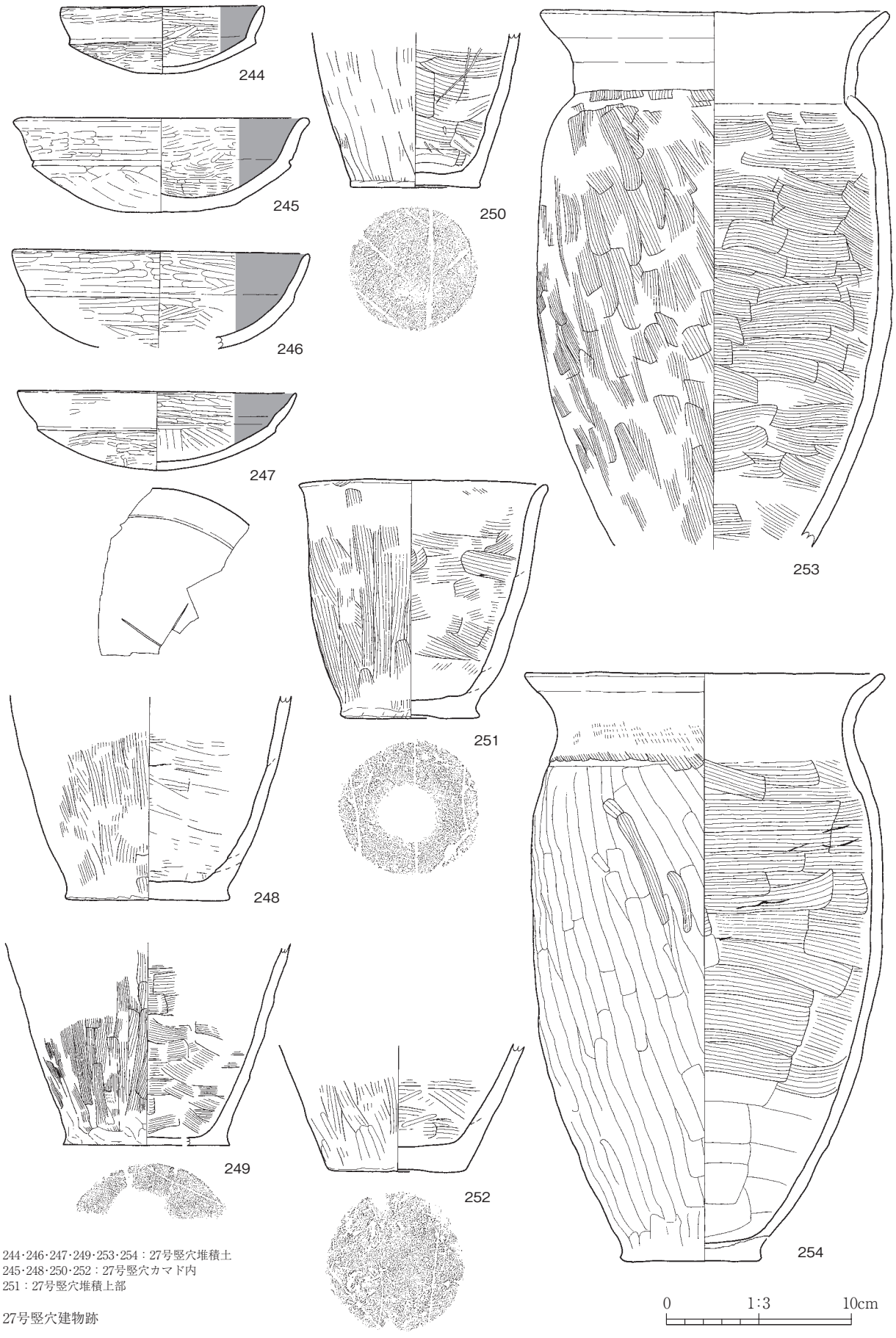


238･242･243：26号竪穴床面
239･241：26号竪穴堆積土
240：26号竪穴カマド内

26号竪穴建物跡

0　1:3　10cm

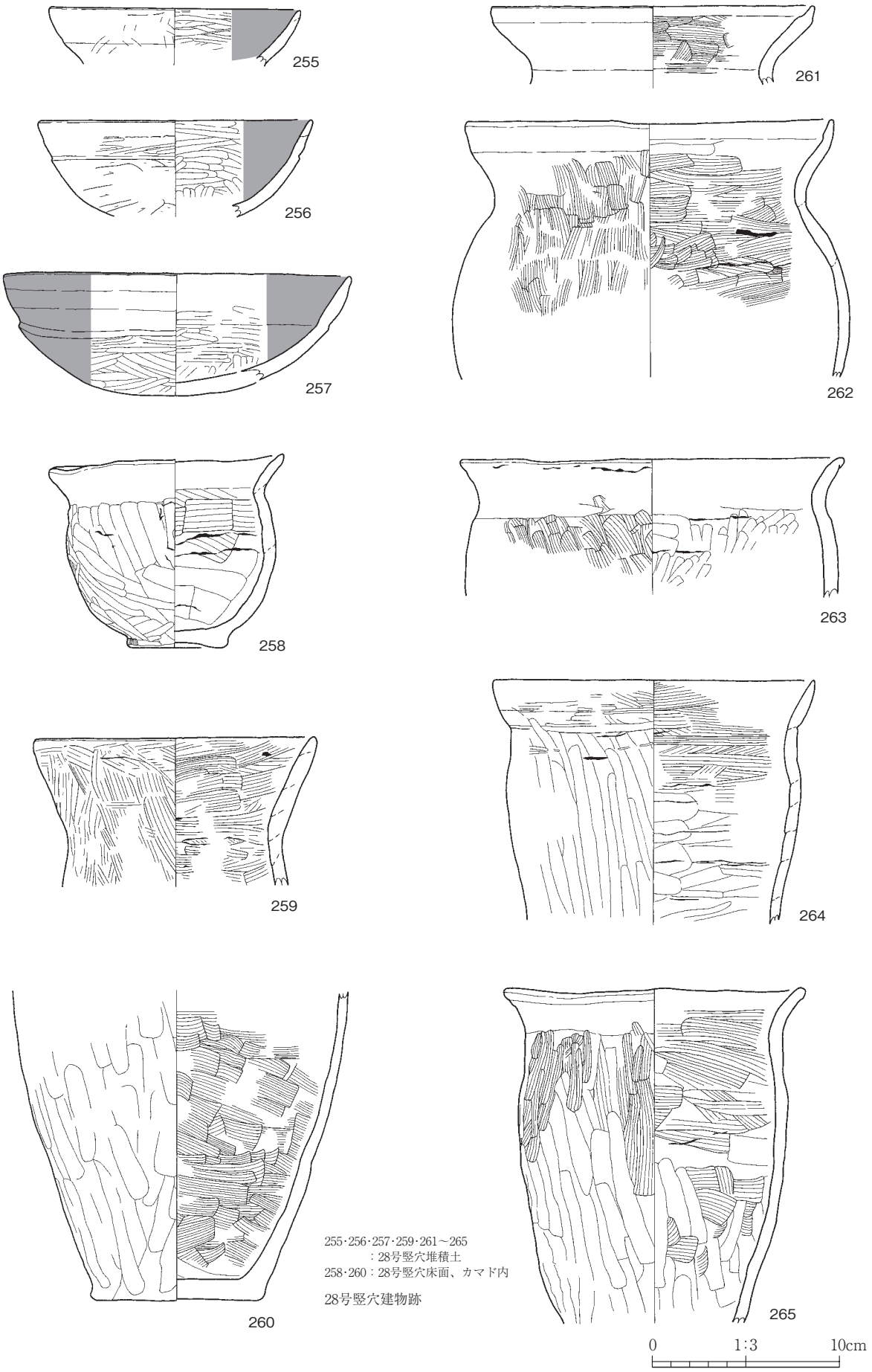
第82図　土師器18



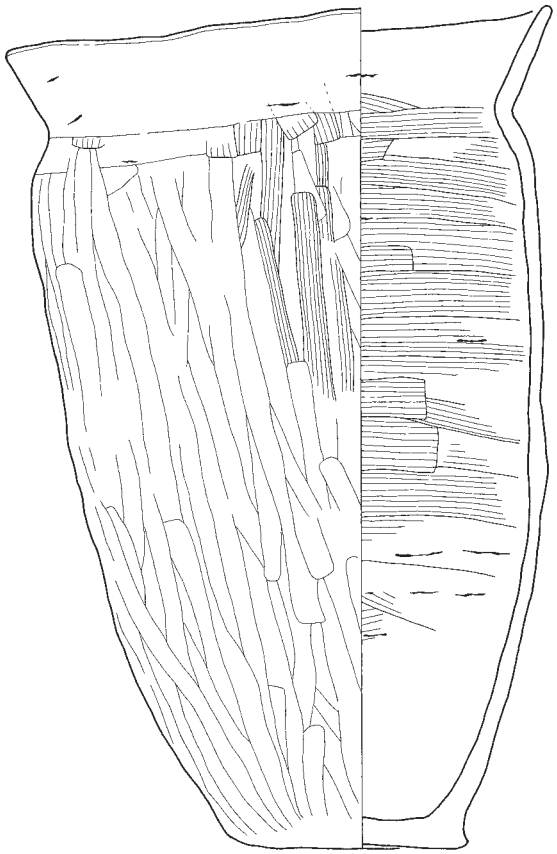
244·246·247·249·253·254：27号竪穴堆積土
245·248·250·252：27号竪穴カマド内
251：27号竪穴堆積上部

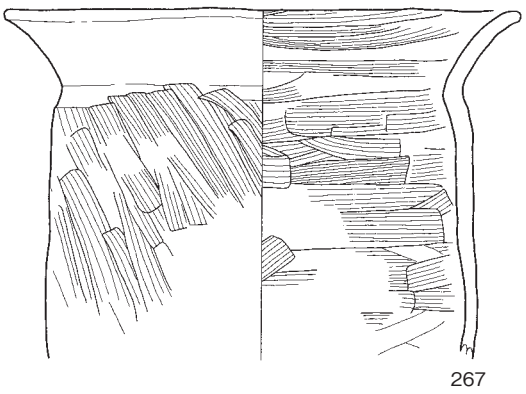
27号竪穴建物跡

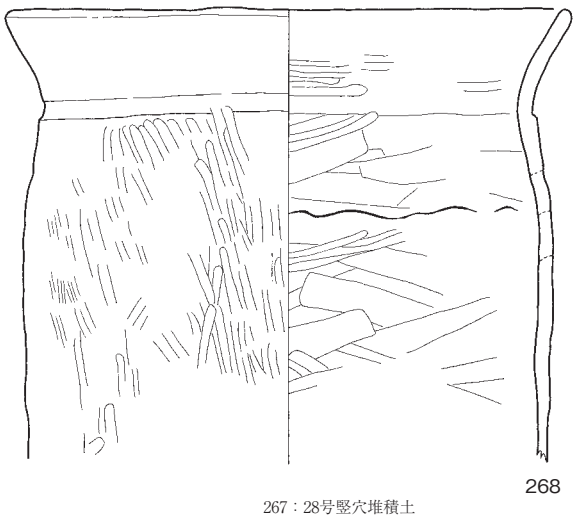
第83図　土師器19


255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
255・256・257・259・261～265
：28号竪穴堆積土
258・260：28号竪穴床面、カマド内
28号竪穴建物跡
0
1:3
10cm

第84図　土師器20

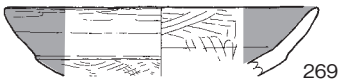


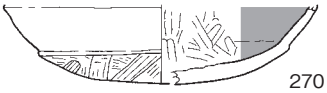


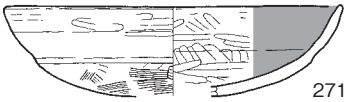


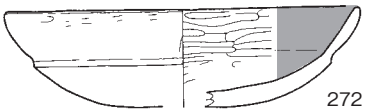
267：28号竪穴堆積土
266・268：28号竪穴床面

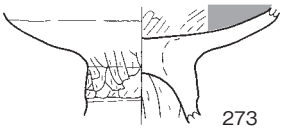
28号竪穴建物跡

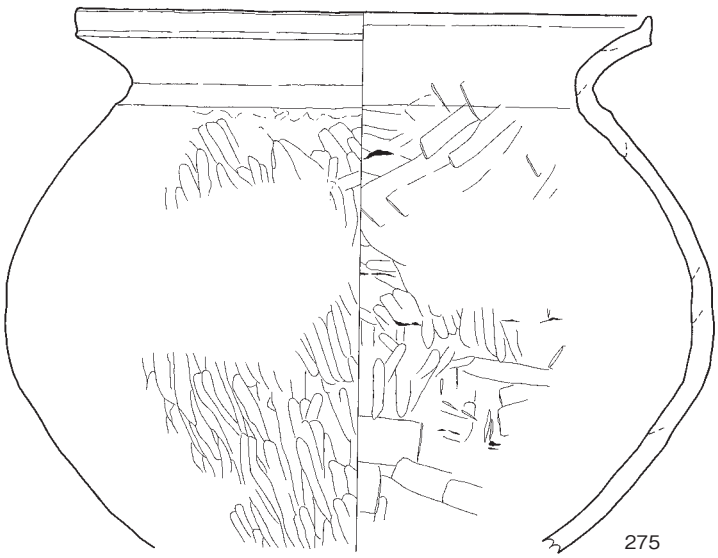












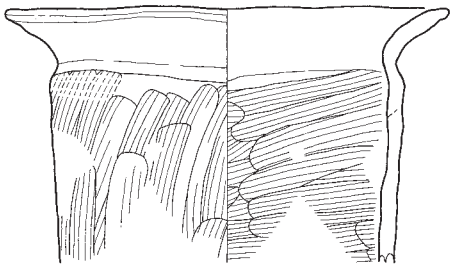
269～273・275：30号竪穴堆積土
274：30号竪穴貼床内

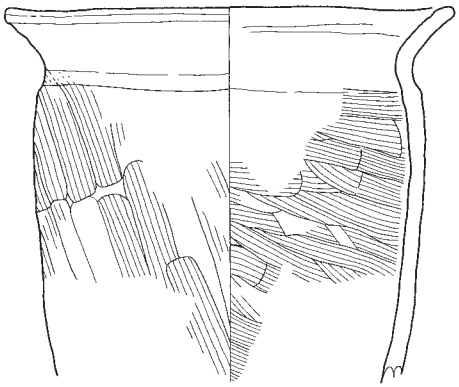
30号竪穴建物跡

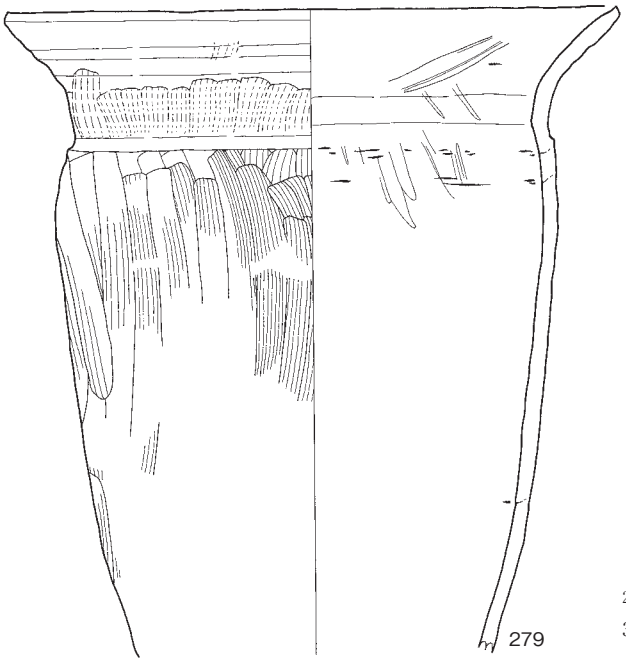
0　1:3　10cm

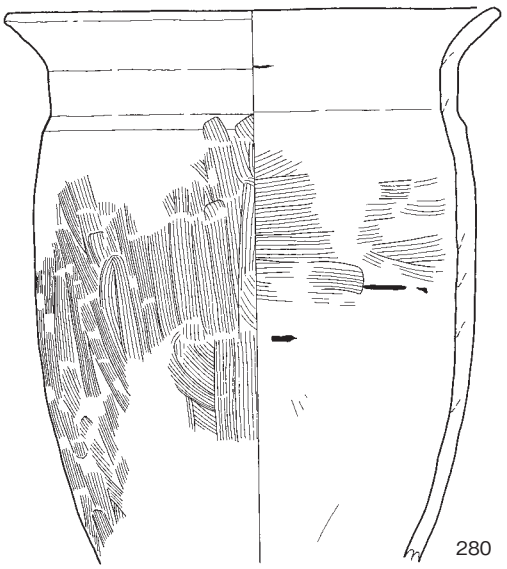
第85図　土師器21

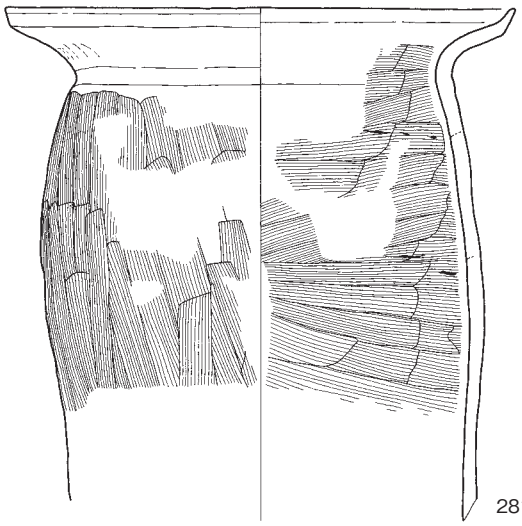
276

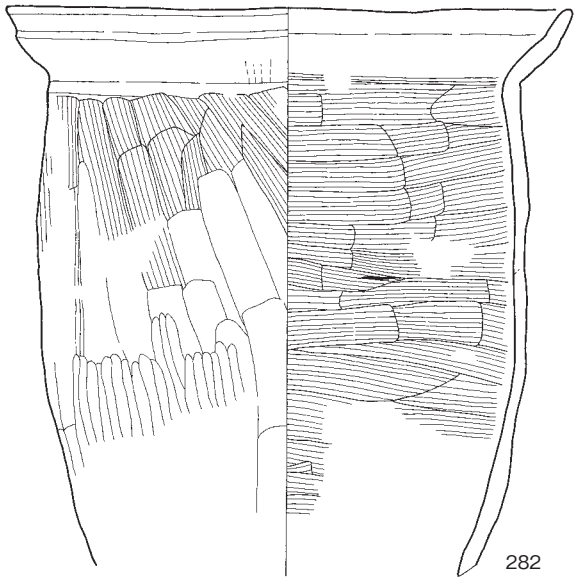

277


278


279


280

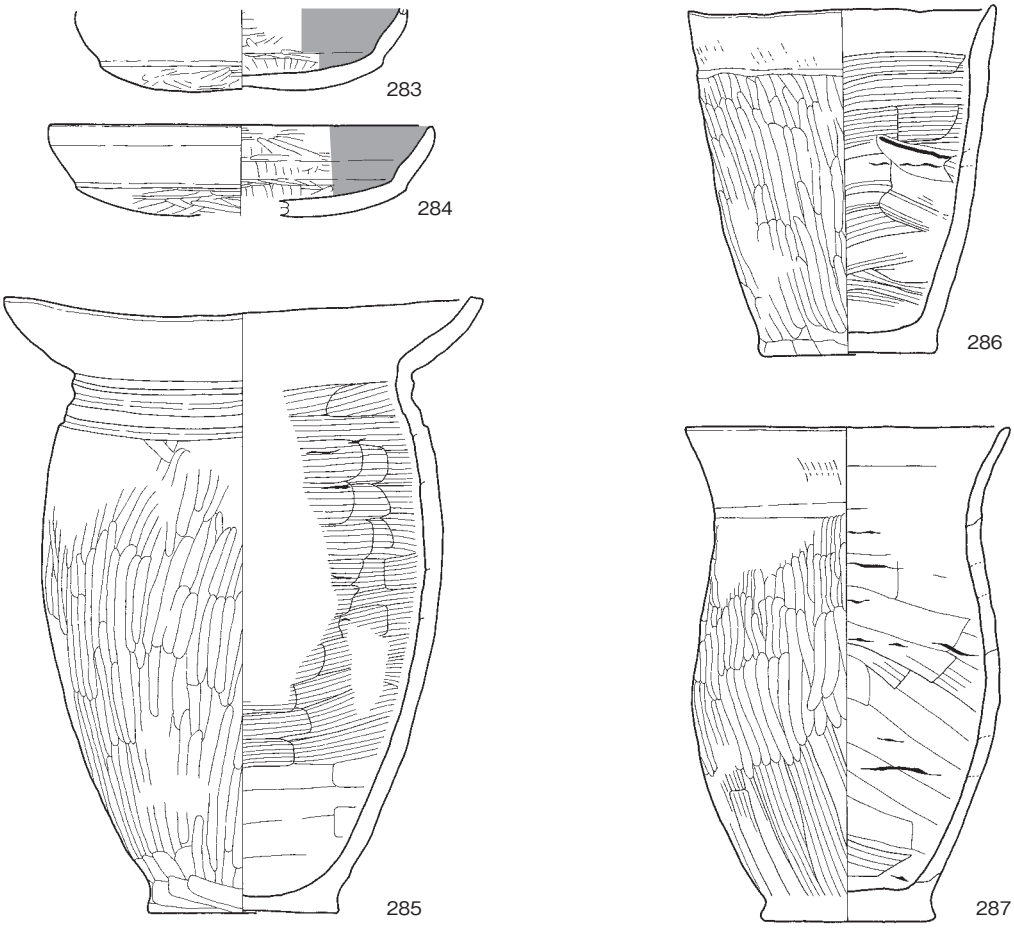

281


282

276～282：30号竪穴堆積土
30号竪穴建物跡

0　1:3　10cm

第86図　土師器22



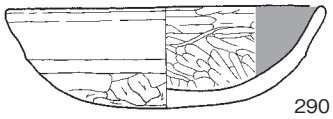
283～287：31号竪穴堆積土　　31号竪穴建物跡

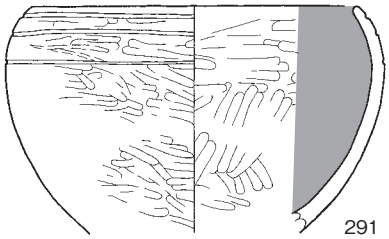
288：32号竪穴床面
289：32号竪穴カマド内

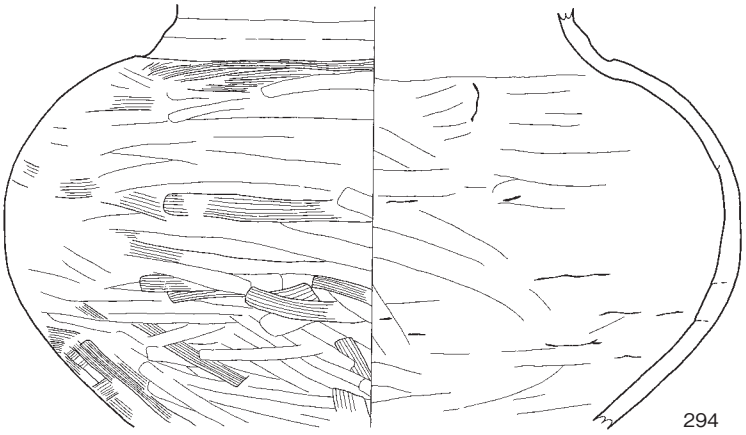
32号竪穴建物跡

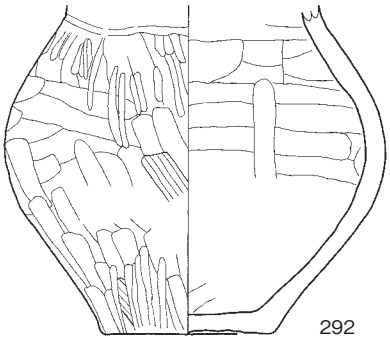
0　1:3　10cm

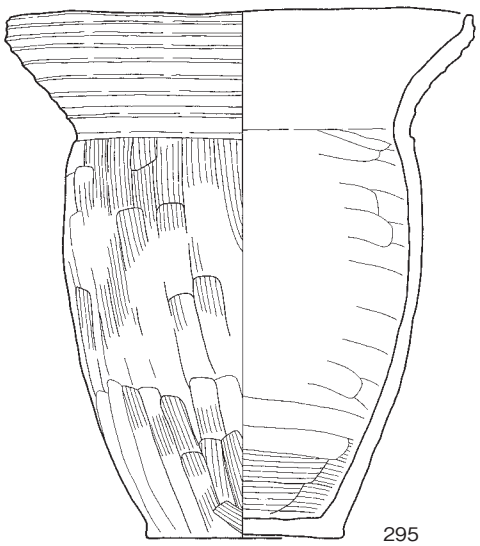
第87図　土師器23

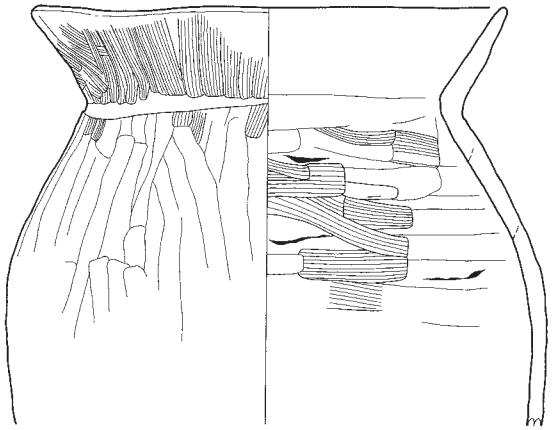






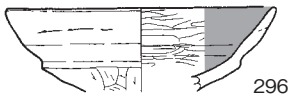


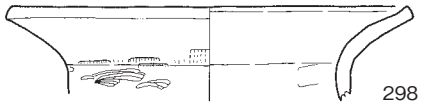


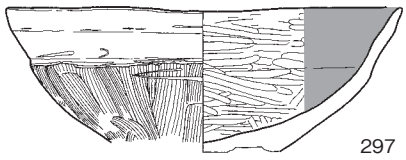


290～293：33号竪穴堆積土
294･295：33号竪穴床面

33号竪穴建物跡





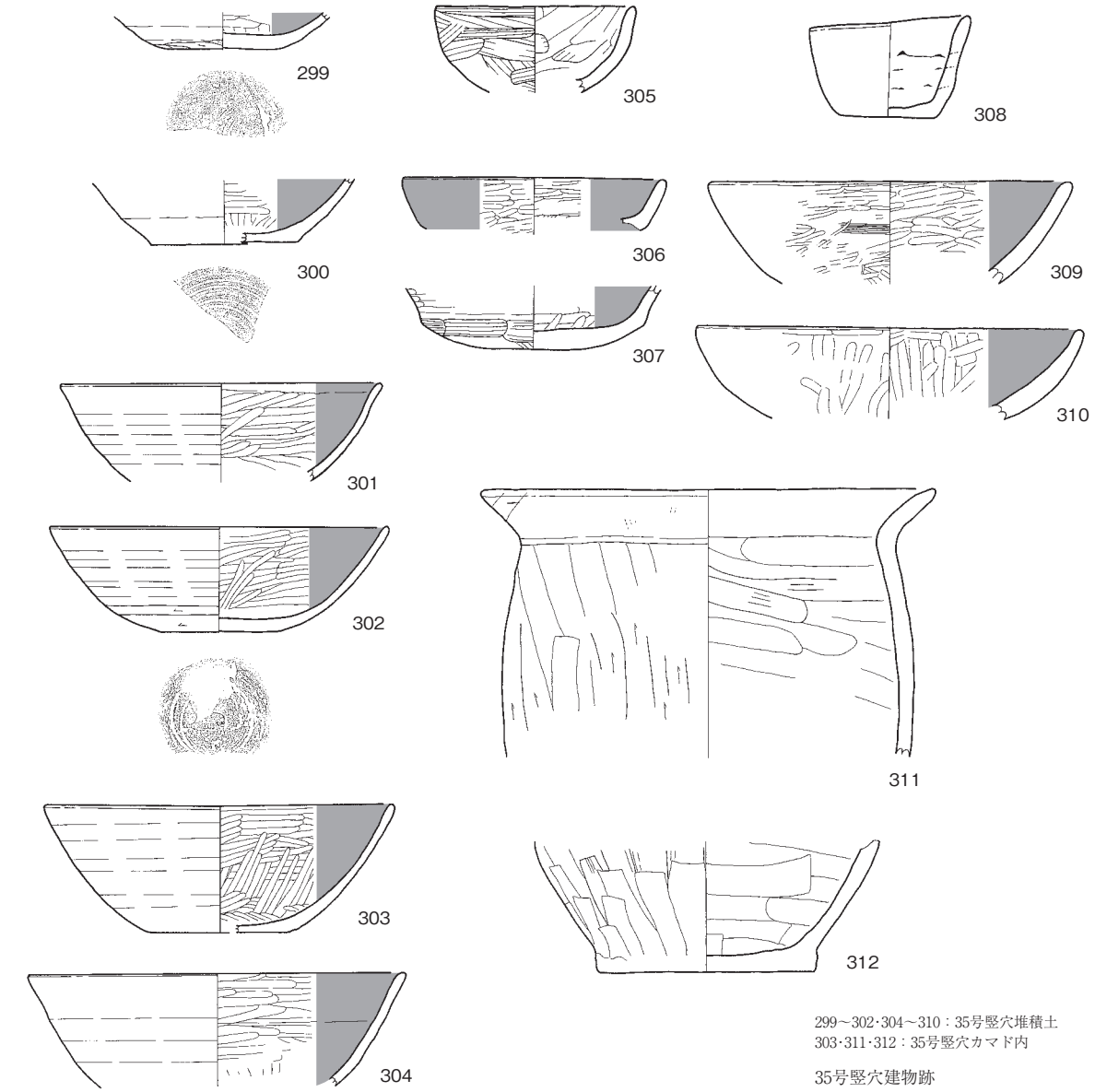


296：34号竪穴カマド内
297･298：34号竪穴堆積土

34号竪穴建物跡

0　1:3　10cm

第88図　土師器24



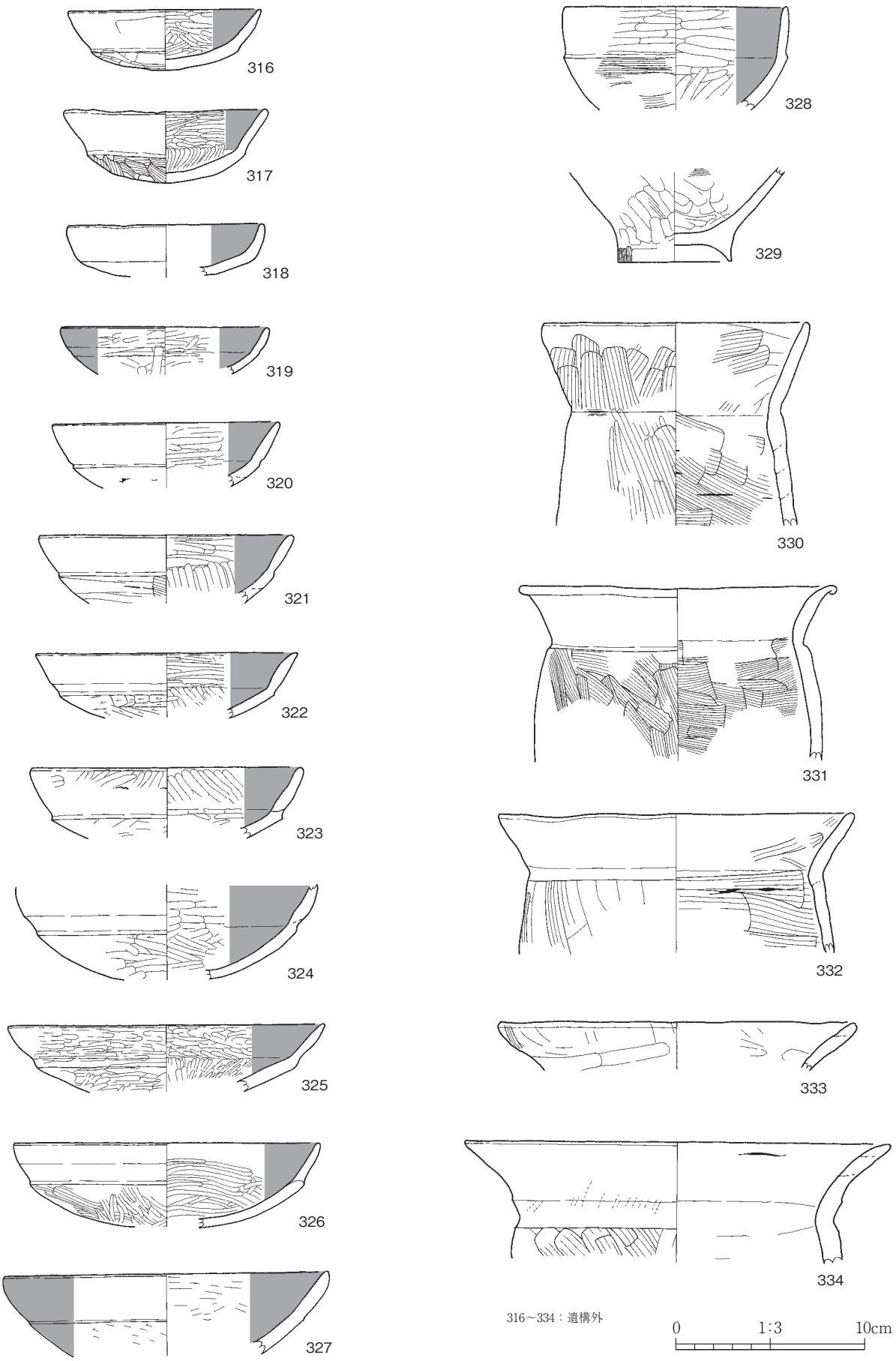
299～302・304～310：35号竪穴堆積土
303・311・312：35号竪穴カマド内

35号竪穴建物跡

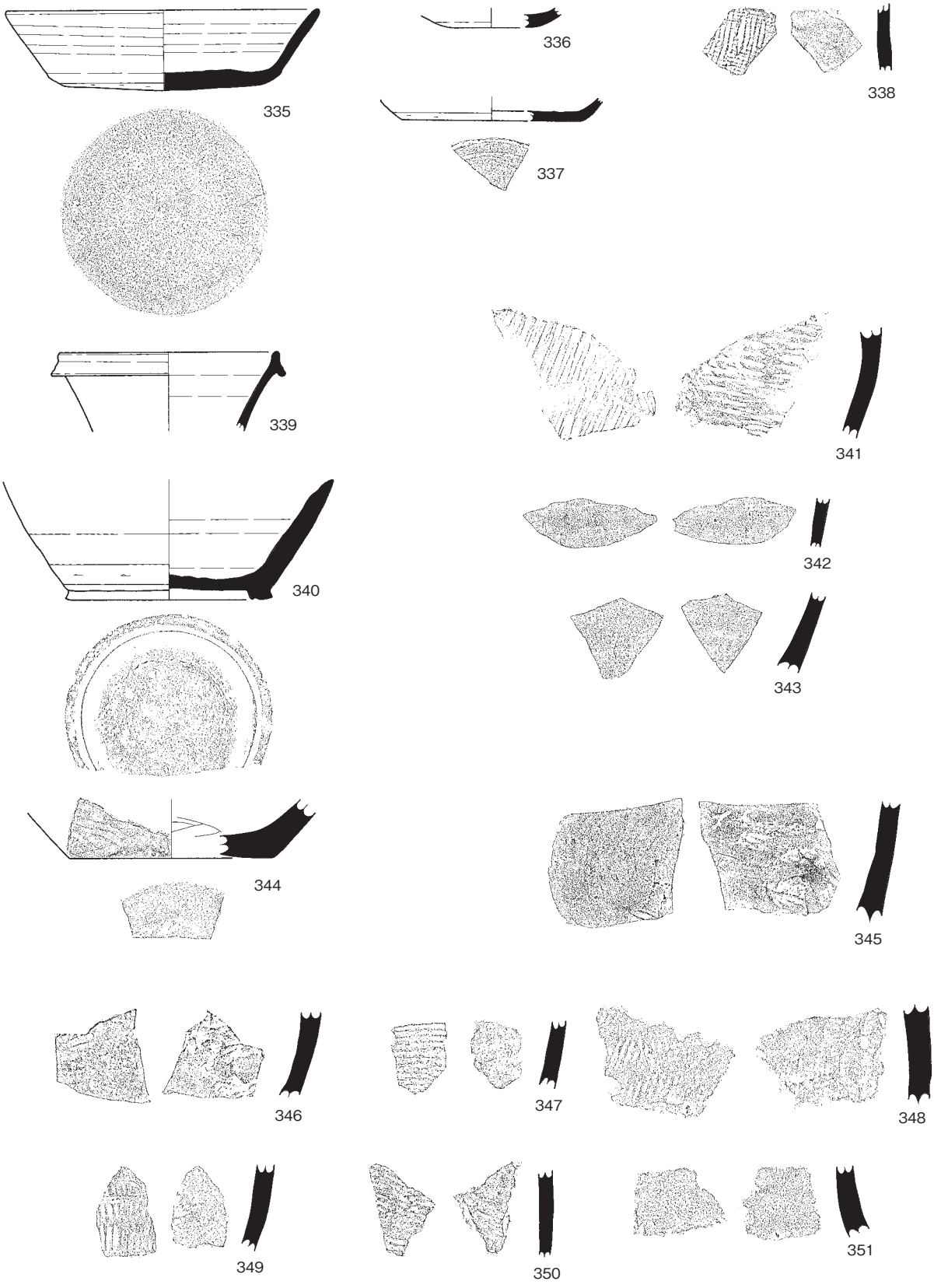
313・315：36号竪穴堆積土
314：36号竪穴床面

36号竪穴建物跡

第89図　土師器25


316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
316～334：遺構外
0　1:3　10cm

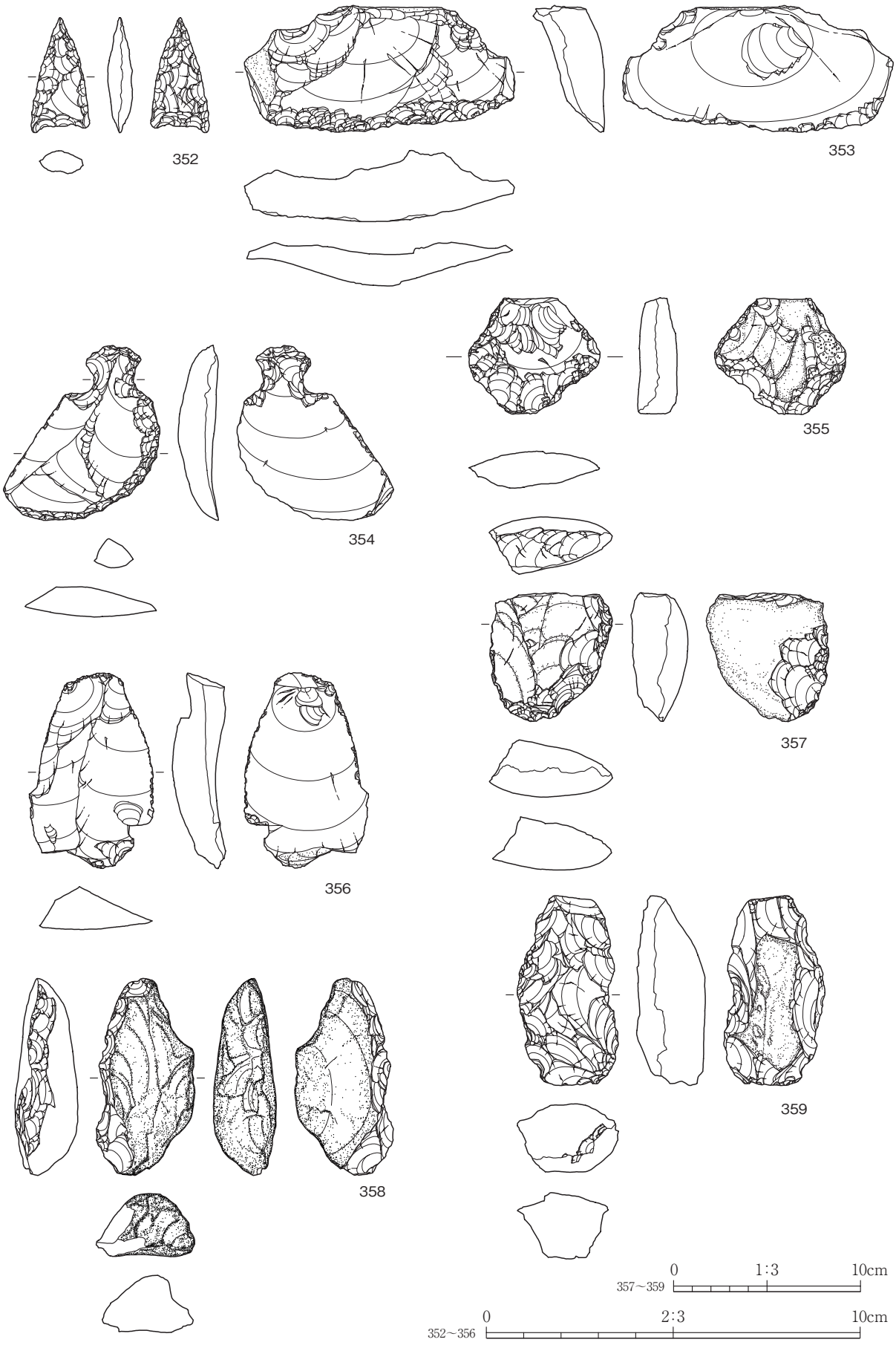
第90図　土師器26



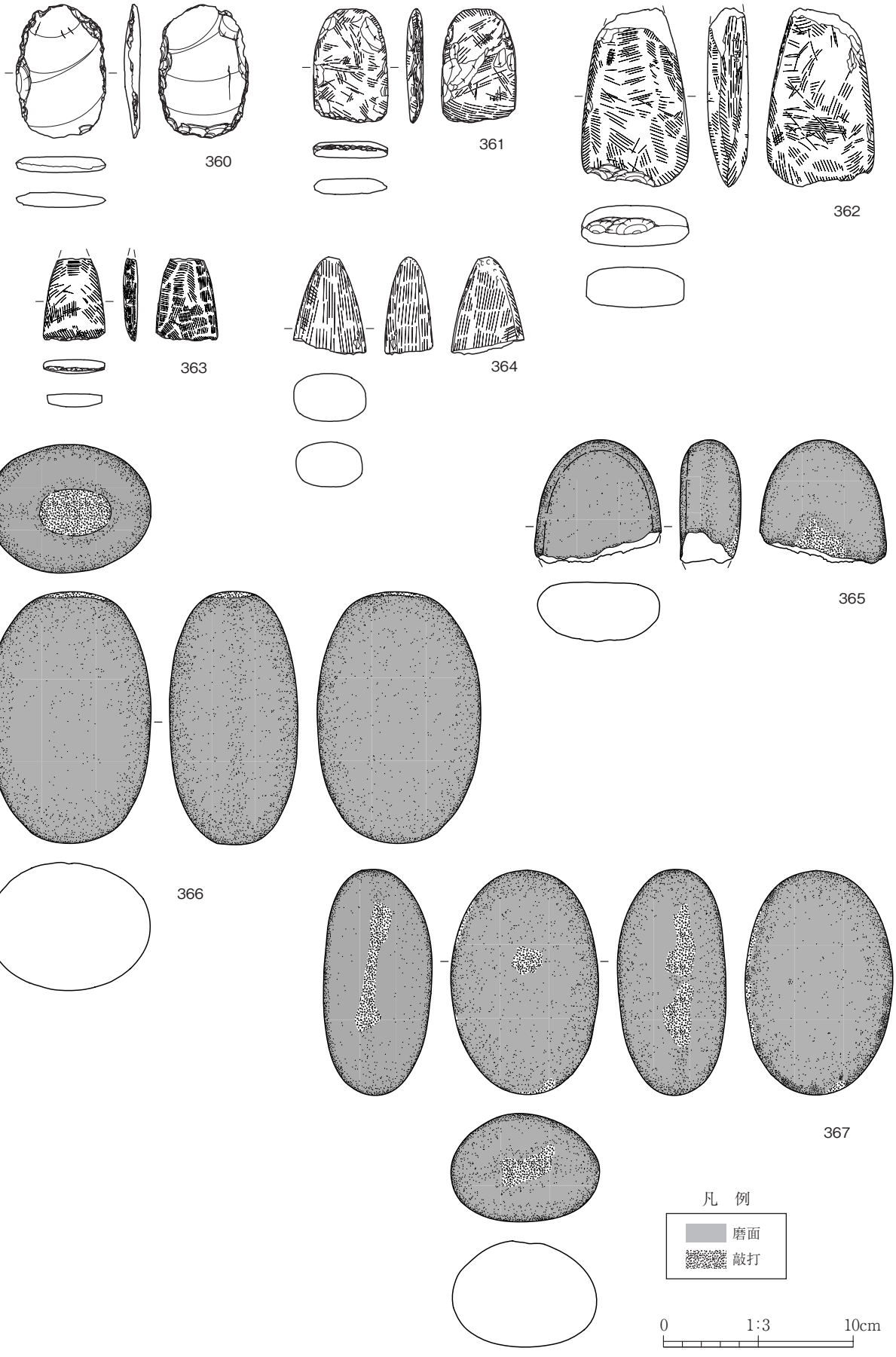
335：２号竪穴床面
336：２号竪穴カマド内
337：10号竪穴堆積土
338：７号竪穴堆積土下部
339･340･342･343：35号竪穴堆積土
341：５号竪穴堆積土
344～351：遺構外

0　1:3　10cm

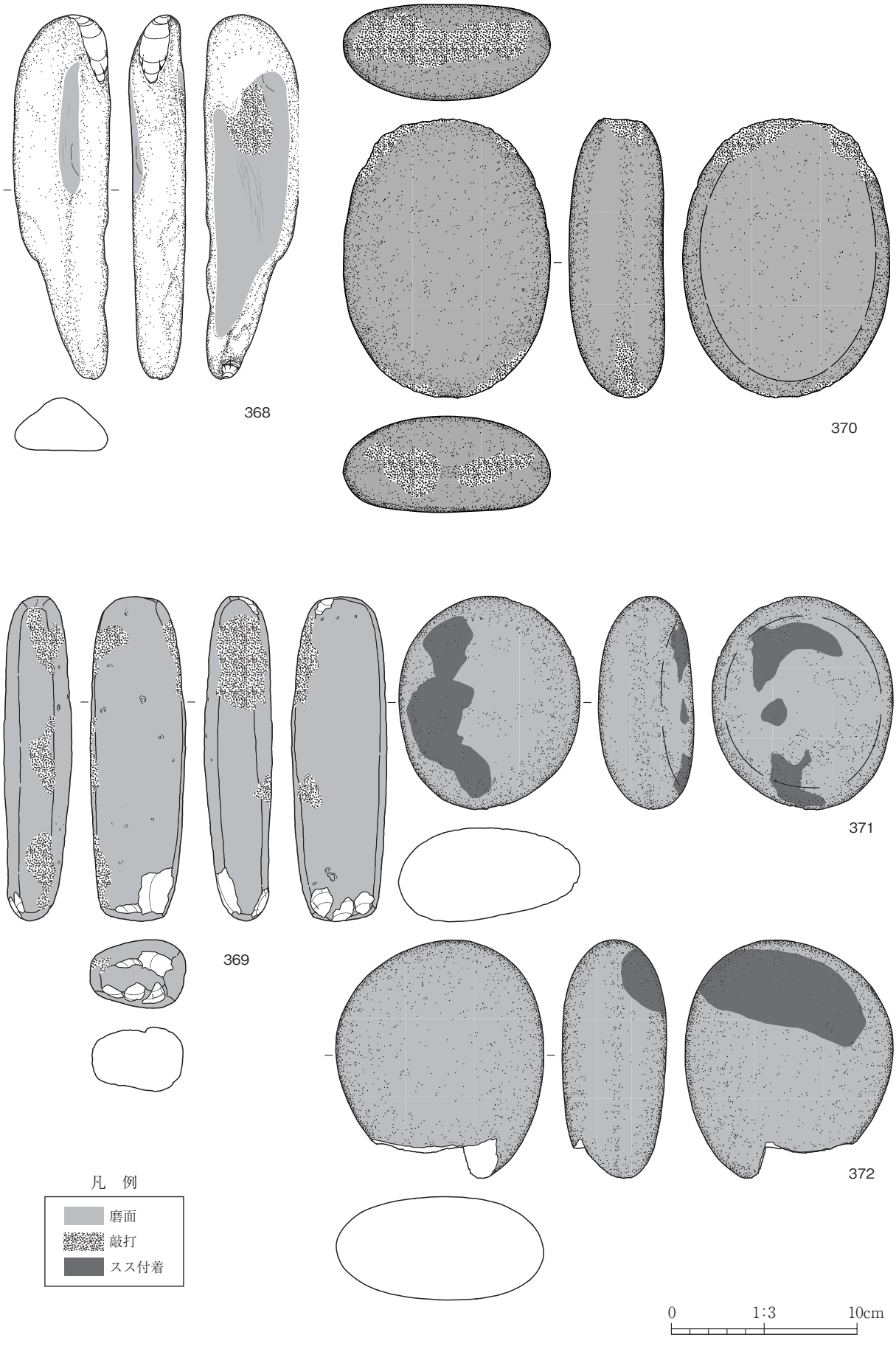
第91図　須恵器


352
353
354
355
356
357
358
359
0　1:3　10cm
357～359
0　2:3　10cm
352～356

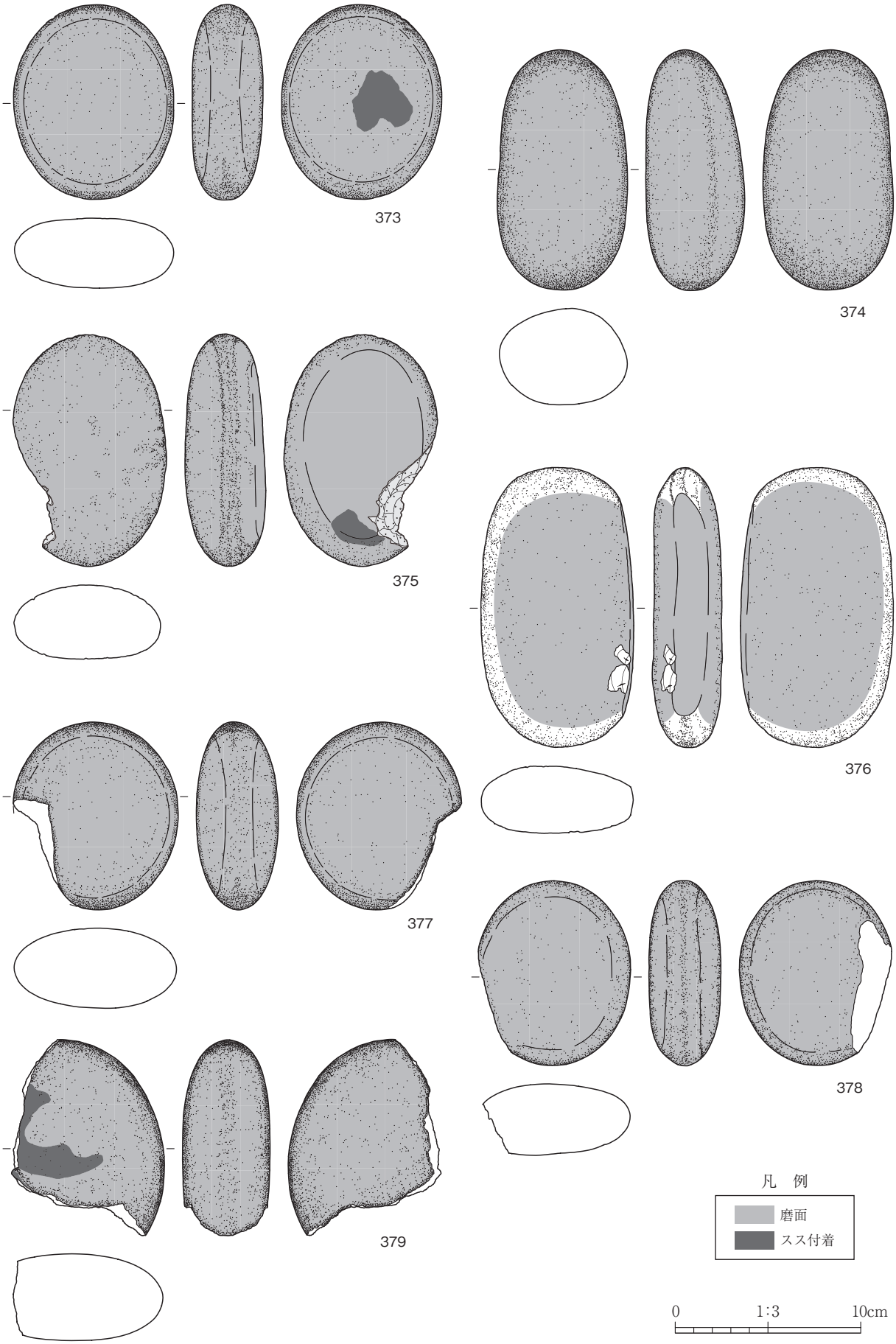
第92図　石器 1



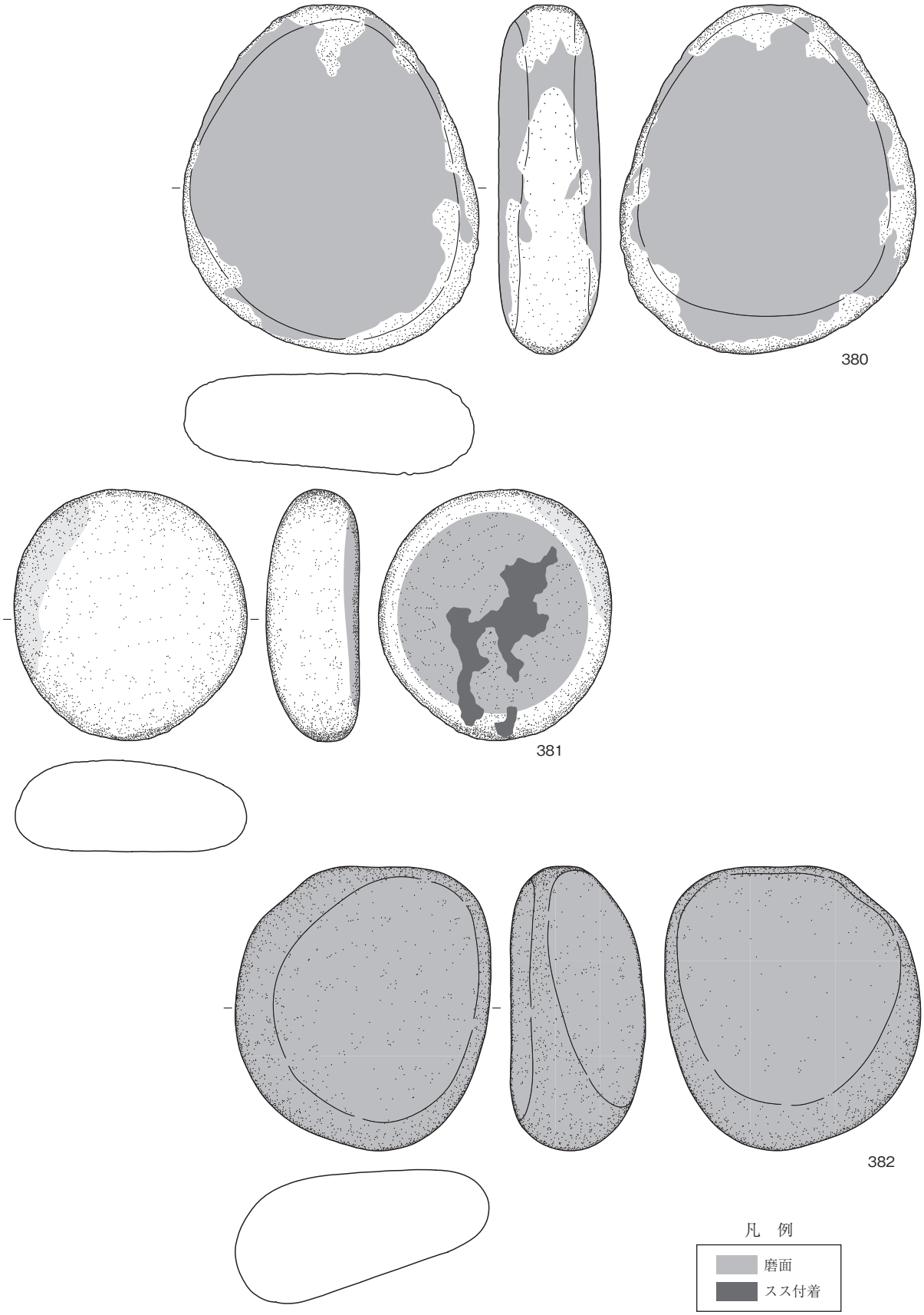
第93図　石器２



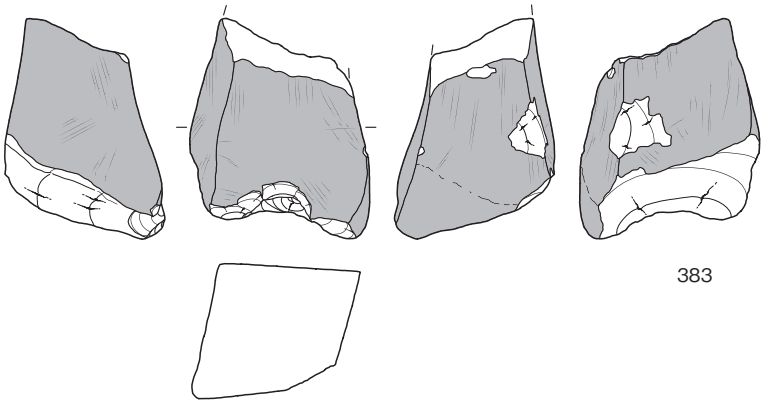
第94図　石器３

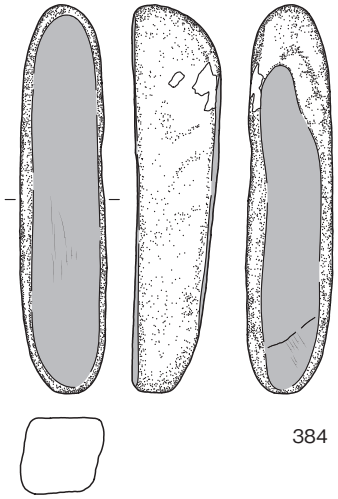


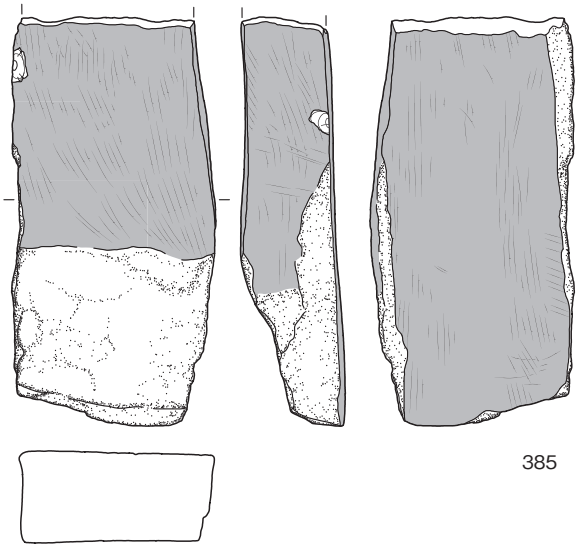
第95図　石器４

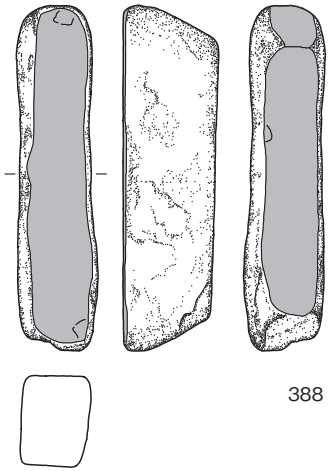


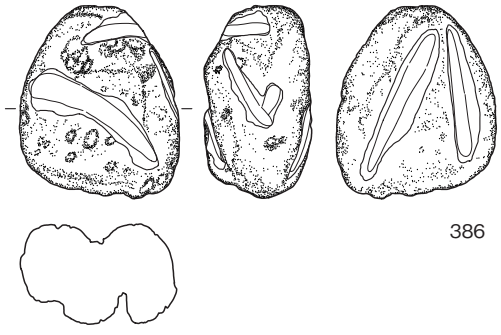
第96図　石器５

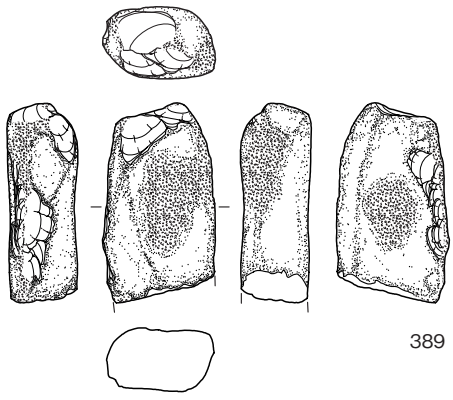


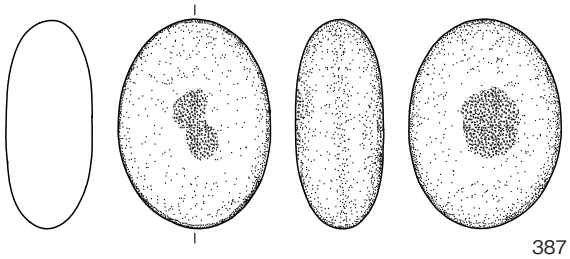


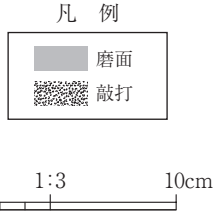




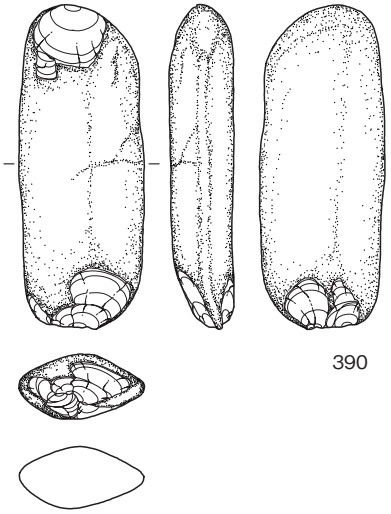


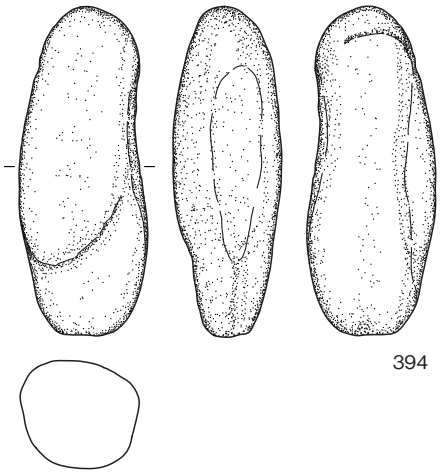


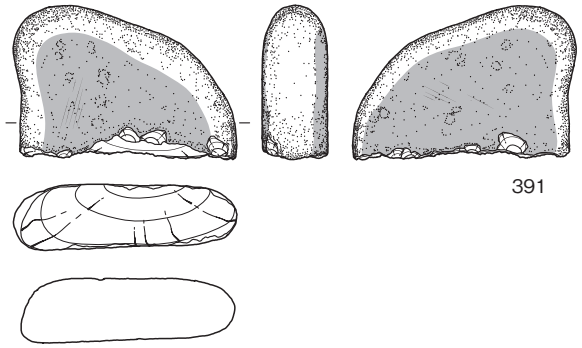


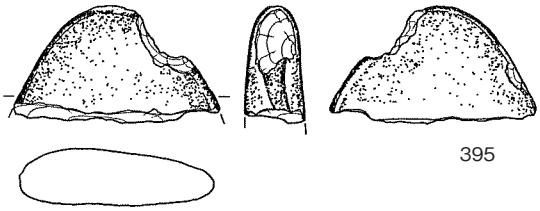


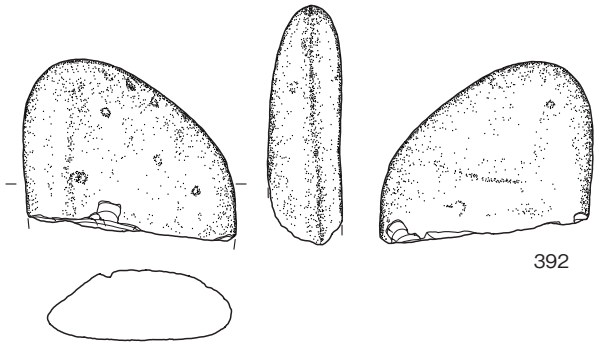
第97図　石器6

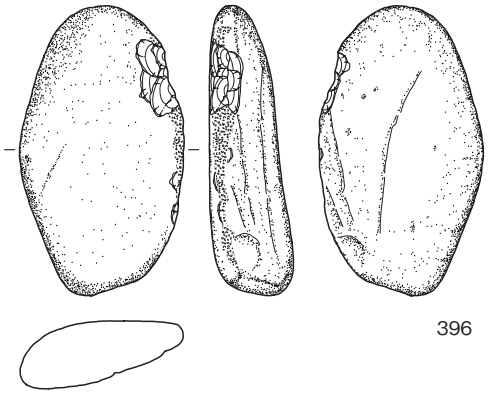


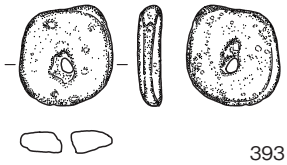


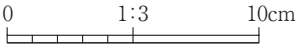




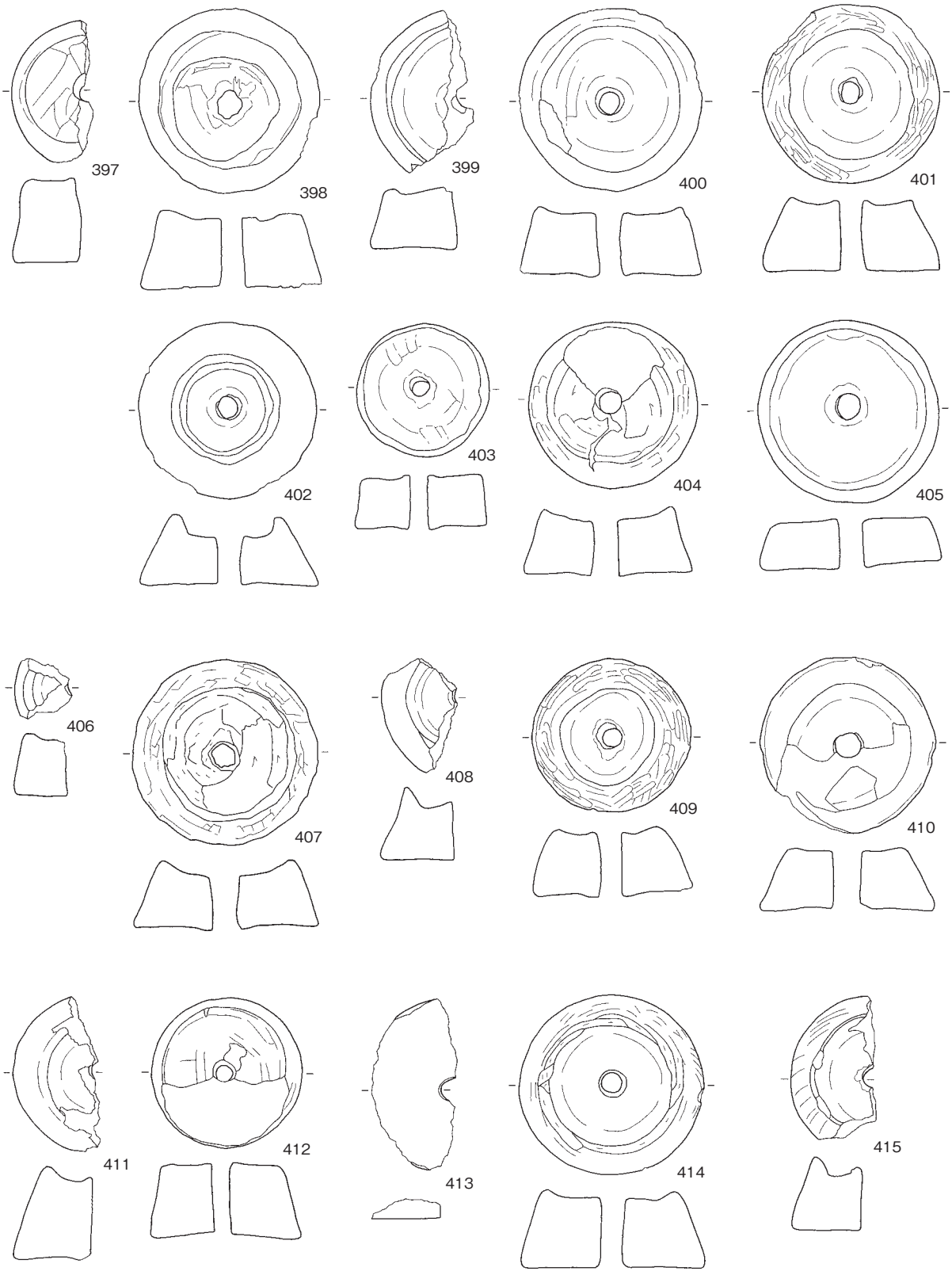








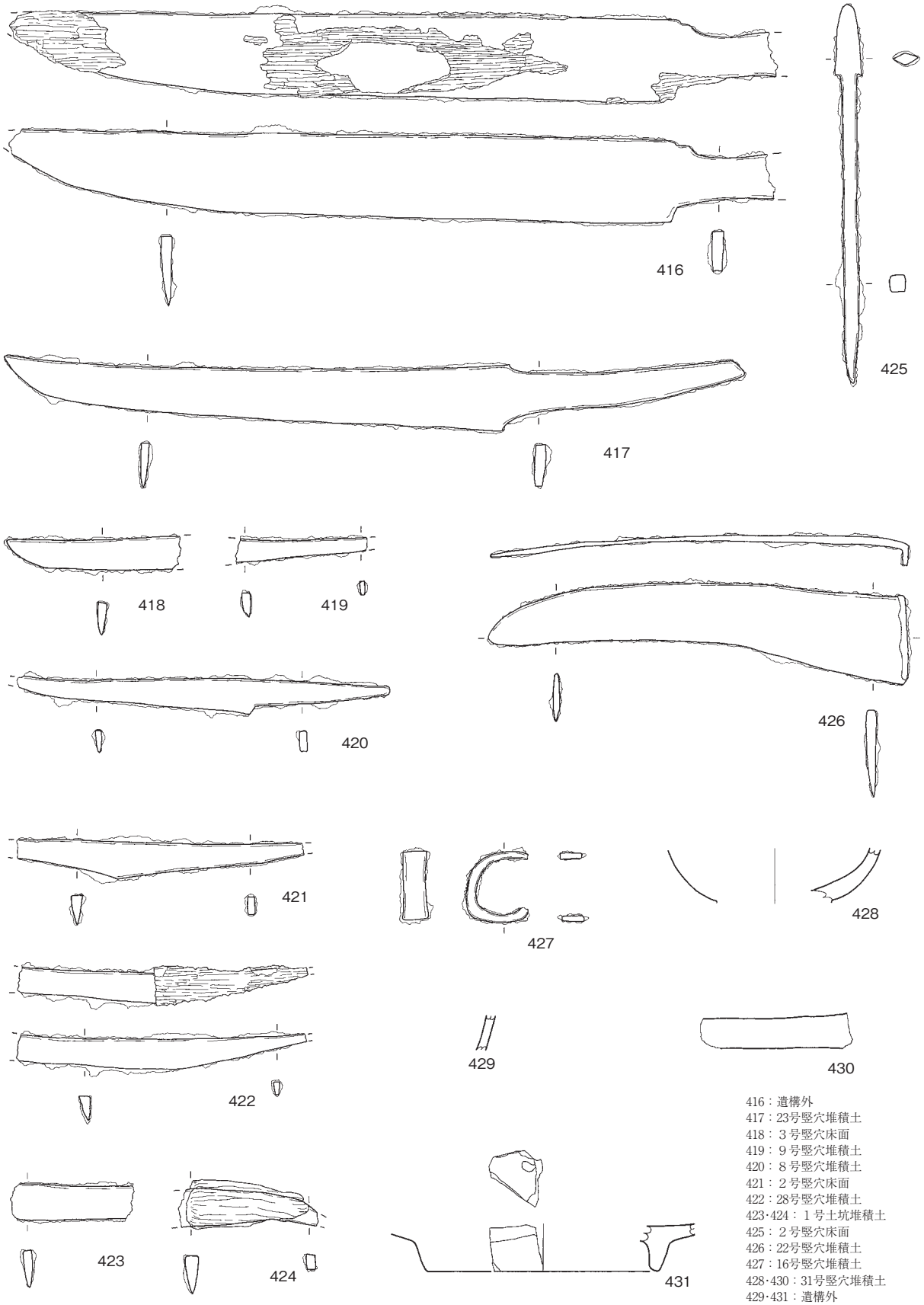
第98図　石器７



397：７号竪穴堆積土
398：７号竪穴堆積土下部
399：９号竪穴堆積土
400：16号竪穴堆積土
401：17号竪穴堆積土
402･403：21号竪穴床面
404：21号竪穴堆積土
405･406･407：22号竪穴床面
408：23号竪穴堆積土
409：24号竪穴堆積土
410：28号竪穴床面
411･412：30号竪穴堆積土
413･414：１号土坑堆積土
415：遺構外

0　1:2　10cm

第99図　土製品



第100図　鉄製品・陶磁器

第87表　縄文土器・弥生土器観察表

竪穴建物跡＝竪、陥し穴状土坑＝陥、柱穴＝ｐ　（　）は推定値、［　］は残存値

掲載	出土地点・層位	器種	残存	残存	特　　徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	重量 g	備　　考
1	1号竪 堆積土	深鉢	口縁～胴部	10	LRタテ、口縁部肥厚	(8.0)		[9.3]	56.75	縄文中期　大木7a-7b
2	7号竪 堆積土上部	深鉢	口縁～胴部	5	口唇部圧痕（棒状工具）、LRヨコ、繊維微量				116.16	縄文早期末～前期初頭
3	7号竪 堆積土下部	深鉢	胴部	5	LRLタテ、繊維微量				156.10	縄文早期末～前期初頭
4	8号竪 堆積土	深鉢	口縁～胴部	5	口唇部刺突、沈線文				51.01	弥生中期
5	8号竪 堆積土	深鉢	口縁	5	口縁部肥厚+刺突、Lタテ				39.76	大木7a-7b
6	10号竪 堆積土	深鉢	口縁	5	波状口縁、口縁部肥厚、刺突文、沈線				36.55	大木 7b
7	12号竪 堆積土	深鉢	口縁	5	Lタテ圧痕、Lヨコ、繊維微量				46.14	縄文早期末～前期初頭
8	16号竪 堆積土上部	深鉢	口縁	5	沈線文				10.15	弥生後期
9	16号竪 堆積土	鉢	口縁	5	沈線、対向刺突、隆線				4.28	弥生後期、赤穴式
10	16号竪 貼床堆積土	深鉢	口縁	5	口唇部圧痕（棒状工具）、RLLタテ（前々段多条）、金雲母微量、繊維微量				55.92	縄文早期末～前期初頭
11	18号竪 石囲炉	深鉢	口縁～胴部	5	隆帯＋刺突、波状口縁、結節縄文S字状				202.11	縄文中期、大木7a
12	18号竪 堆積土	壺	胴部	5	LRタテ、沈線				33.29	縄文後期前葉　十越内Ⅰ
13	18号竪 堆積土	深鉢	胴部	5	隆線、沈線、RLRタテ				29.51	縄文中期、大木8b-9
14	19号竪 堆積土	深鉢	頸部	5	LR、尖底土器、繊維微量			[4.7]	47.22	縄文早期末～前期初頭
15	20号竪 堆積土	深鉢	口縁	5	結節回転文、補修孔2カ所				20.76	縄文前期、大木 2a
16	20号竪 床面遺物１	深鉢	口縁～胴部	5	LRヨコ、繊維微量、補修孔1カ所	(30.0)		[9.2]	100.26	縄文早期末～前期初頭
17	20号竪 堆積土	深鉢	口縁	5	隆帯、沈線、RLヨコ				56.27	縄文中期、大木7ｂ-8
18	21号竪 堆積土	深鉢	口縁	5	波状口縁、沈線、刺突、RL				19.81	縄文後期前葉　十越内Ⅰ
19	21号竪 堆積土	深鉢	胴部	5	RL撚糸				17.39	弥生
20	21号竪 堆積土	深鉢	底部	5	LR ？、尖底、繊維微量			[4.0]	30.56	縄文早期末～前期初頭
21	22号竪 堆積土	深鉢	胴部	5	隆帯、RLヨコ、磨消縄文				49.66	縄文中期、大木9
22	23号竪 堆積土	壺	胴部	5	沈線、LR				8.24	弥生後期
23	23号竪 堆積土	深鉢	胴部	5	沈線、刺突				7.41	弥生後期、赤穴式
24	25号竪 堆積土上部	深鉢	胴部	5	沈線、LRL				81.76	縄文中期、大木8a

竪穴建物跡＝竪、陥し穴状土坑＝陥、柱穴＝ｐ　（ ）は推定値、[ ]は残存値

掲載	出土地点・層位	器種	残存	残存	特　徴	口径 cm	底径 cm	器高 cm	重量 g	備　考
25	25号竪 堆積土	深鉢	口縁	5	LR圧痕				10.45	縄文後期？弥生？
26	25号竪 堆積土上部	深鉢	口縁	5	沈線、刺突				6.61	弥生後期、赤穴式
27	26号竪 堆積土	深鉢	胴部	5	RL（撚糸）				8.57	弥生後期
28	28号竪 堆積土	深鉢	口縁	5	押引沈線				8.01	縄文中期、大木7a-7b
29	28号竪 堆積土	深鉢	口縁	5	口唇部指頭圧痕、沈線、LR				22.27	縄文中期、大木7a-7b
30	30号竪 堆積土	鉢	口縁	5	沈線、刺突				5.10	弥生後期、赤穴式
31	30号竪 堆積土	鉢	胴部	5	RL				2.87	弥生後期、赤穴式
32	30号竪 堆積土	鉢	口縁	5	沈線、刺突、RL				4.33	弥生後期、赤穴式
33	36号竪 堆積土	深鉢	口縁	5	口縁肥厚、隆帯＋刺突、LR ？				22.92	縄文中期、大木7-7b
34	3号土坑堆積土	壺？	胴部	5	沈線文				7.42	弥生後期
35	3号土坑堆積土	深鉢	胴部	5	LRタテ、沈線				21.96	縄文後期前葉　十越内Ⅰ
36	調査区東端Ⅳ層	深鉢	胴部	20	結束羽状縄文、0段多条、補習穴2カ所、繊維微量			[27.9]	1276.00	縄文早期末～前期初頭
37	中央尾根部　西側Ⅱ層	深鉢	底部	5	尖底、LR、繊維微量			[6.5]	64.11	縄文早期末～前期初頭
38	北側谷部　東側　Ⅳ層	深鉢	胴部	5	結束羽状縄文、LRL-RLR				126.75	縄文前期
39	2号竪　検出面	深鉢	胴部	5	結束羽状縄文、LR-RL、繊維微量				96.31	縄文早期末～前期初頭
40	中央尾根部　西側Ⅱ層	深鉢	口縁	5	LRヨコ、繊維微量				20.56	縄文早期末～前期初頭
41	北側谷東側拡張部Ⅳ層	深鉢	口縁～胴部	5	波状口縁、羽状縄文、LRヨコ-RL、繊維微量				92.68	縄文早期末～前期初頭
42	北側谷部　東Ⅳ層	深鉢	口縁～胴部	5	結節回転文、RLヨコ				122.58	縄文前期、大木 2a
43	北側谷部東張部Ⅳ層	深鉢	口縁	5	結節回転文、LRヨコ				101.55	縄文前期、大木 2a
44	ⅢB 7d　カクラン	深鉢	口縁	5	口唇部刺突、結節回転文				30.09	縄文前期、大木 2a
45	北側谷東側拡張部Ⅳ層	深鉢	胴部	5	S字状連鎖沈文				331.31	縄文前期、大木 2b
46	ⅢB 7d　カクラン	深鉢	口縁	5	S字状連鎖沈文				13.61	縄文前期、大木 2b
47	北側谷　Ⅱb層	深鉢	口縁	5	隆線、刺突、LRヨコ				37.45	縄文中期、大木 7b
48	北側谷　Ⅱb層	深鉢	口縁	5	口縁肥厚、隆線、LR ？				27.32	縄文中期、大木 7b

49	ⅡB 8a～8b　Ⅰ・Ⅱ層	深鉢	胴部	5	隆線、LRタテ				60.24	縄文中期、大木 7b
50	北側谷　Ⅲ層・ 中央尾根　西側Ⅱ層	深鉢	胴部	5	隆線、LRタテ				78.25	縄文中期、大木 7b
51	ⅢB 1a　Ⅱ層	深鉢	胴部	5	隆線、LR圧痕				15.79	縄文中期、大木 7b
52	北側谷　Ⅱa層	深鉢	口縁	5	口縁肥厚、隆帯、LR圧痕				47.03	縄文中期、円筒上層a
53	ⅢB 7d　カクラン	深鉢	口縁	5	RLヨコ				18.60	縄文中期
54	北側尾根　Ⅳ層	深鉢	口縁	5	口縁部肥厚、隆帯、LRタテ、LR圧痕				28.36	縄文中期、大木7b
55	中央尾根　西側Ⅱ層	深鉢	口縁	5	波状口縁、口縁部肥厚、隆帯、LR				17.21	縄文中期、大木7b
56	中央谷部　西側Ⅱ層	深鉢	口縁	5	隆線、沈線、LRヨコ				45.00	縄文中期、大木7b
57	北側谷　Ⅱ層	深鉢	口縁	5	沈線、刺突、RLRヨコ				32.62	縄文中期、大木7b
58	ⅡB 8a～8bⅠ・Ⅱ層	深鉢	口縁	5	口縁部肥厚＋刺突、隆帯、沈線				12.93	縄文中期、大木7b
59	北側谷　Ⅱ層	深鉢	口縁	5	隆線、沈線、刺突				6.03	縄文中期？
60	北側谷　Ⅱb層	深鉢	口縁	5	隆線、沈線、LR ？				30.06	縄文中期、大木7b
61	北側谷　Ⅱ層	深鉢	口縁	5	突起、沈線、LRタテ				18.36	縄文中期、大木7b ？
62	北側谷　Ⅲ層	深鉢	口縁	5	口縁部肥厚、沈線、RLタテ				67.48	縄文中期、大木8b
63	ⅢB 1a　Ⅱ層	深鉢	口縁	5	隆帯、沈線、RLヨコ				162.50	縄文中期、大木8a-8b
64	中央尾根　西側Ⅱ層	深鉢	口縁	5	波状口縁、口縁部肥厚、沈線、RLヨコ				87.44	縄文中期、大木8a-8b
65	北側谷　Ⅱ層	浅鉢	底部	5	沈線		(6.4)	[1.15]	11.19	弥生
66	ⅢB 1c　Ⅱ層	深鉢	胴部	5	沈線				2.31	弥生？
67	ⅢB 1c　Ⅱ層	深鉢	口縁	5	口縁部肥厚、LRタテ				12.62	縄文後期？弥生？
68	北側谷　Ⅱa層	鉢	胴部	5	沈線、LR、ハケメ				9.98	弥生後期
69	北側谷　Ⅱ層	鉢	口縁	5	波状口縁、沈線、対向刺突、口唇部縄圧痕				17.83	弥生後期、赤穴式
70	北側谷　Ⅱ層	鉢	口縁	5	沈線、対向刺突、RLヨコ				6.82	弥生後期、赤穴式
71	北側谷　北西部	鉢	口縁	5	沈線、対向剥離、口唇部R圧痕				9.64	弥生後期、赤穴式
72	中央尾根部西側Ⅱ層 ・ⅡA 9i・ⅡB10a	鉢	口縁	5	沈線、対向刺突、RL圧痕、口唇部LR圧痕				31.26	弥生後期、赤穴式

第88表　土師器観察表

竪穴建物跡＝竪、陥し穴状土坑＝陥、柱穴＝ｐ　（ ）は推定値、[ ]は残存値

掲載	出土地点・層位		器種	残存部位	残存率	色調	主な調整・特徴		底部	口径 cm	底径 cm	器高 cm	重量 g	備　考
							外面	内面						
73	1号土坑	堆積土	坏	口縁～底部	40	黒	ケズリ→ミガキ、黒色処理	ミガキ、黒色処理		(10.0)		[3.2]	8.12	
74	1号土坑	堆積土	坏	口縁～底部	10	橙	ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(12.8)		[3.7]	24.02	
75	1号土坑	堆積土	坏	口縁～底部	10	にぶい黄橙	ハケ→ミガキ	ミガキ、黒色処理		(12.9)		[2.7]	13.19	
76	1号土坑	堆積土	坏	口縁～底部	50	にぶい黄橙	ハケ→ミガキ	ミガキ、黒色処理		(12.4)		[4.1]	83.86	
77	1号土坑	堆積土	坏	口縁～底部	10	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(13.1)		[4.1]	32.70	
78	1号土坑	堆積土	坏	口縁～底部	10	にぶい黄橙	ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(13.4)		[2.8]	11.15	
79	1号土坑	堆積土	坏	底部	10	にぶい黄橙	ハケ→ヨコナデ、ミガキ	ミガキ、黒色処理				[3.25]	32.54	
80	1号土坑	堆積土	鉢	胴部	5	浅黄橙	ケズリ、ミガキ	ミガキ、黒色処理					87.66	
81	3号土坑	堆積土	坏	口縁～底部	5	灰白	ヘラナデ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(11.8)		[3.7]	13.27	
82	3号土坑	堆積土	坏	口縁	5	浅黄橙	ミガキ、口縁部黒色処理	ミガキ、黒色処理		(11.0)		[3.1]	12.11	
83	3号土坑	堆積土	壺	頸部～胴部	20	浅黄橙	ハケ、ヨコナデ	ハケ				[15.8]	252.77	
84	1号竪	床面	坏	口縁～底部	80	にぶい黄橙	ヘラケズリ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ヘラケズリ	11.5		3.5	119.00	
85	1号竪	堆積土	壺	口縁～胴部	5	浅黄橙	ミガキ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ		(14.4)		[15.2]	174.00	
86	2号竪	床面	高坏	脚部	10	明黄褐色	ハケ→ミガキ	ミガキ、黒色処理	ヘラナデ			[4.3]	88.13	
87	2号竪	堆積土	壺	頸部～胴部	30	浅黄橙	ハケ、ヘラケズリ→ヨコナデ	ハケ、ヘラナデ				[14.1]	546.51	
88	2号竪	カマド支脚転用　床面	甕	胴部～底部	30	浅黄橙	ハケ、ヘラナデ	ヘラナデ、ハケ	木葉痕		7.1	[8.6]	339.51	内面棒状黒斑　外面摩耗
89	2号竪	床面	壺	口縁～底部	70	橙	ヘラナデ→ヨコナデ	ヘラナデ→横ナデ	木葉痕		7.8	[25.6]	1000.21	
90	3号竪	床面	甕	口縁～底部	40	にぶい黄橙	ハケ、ミガキ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	木葉痕	(18.0)	(6.0)	30.0	570.06	

91	5号竪	カマド支脚	甕	口縁～底部	90	にぶい橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ		13.8	6.6	15.8	493.71	内面上半部焦げ付着
92	5号竪	堆積土	甕	胴部～底部	30	にぶい橙	ヘラナデ、ミガキ	ヘラナデ			8.4	［10.7］	329.06	
93	7号竪	堆積土下部	坏	口縁～底部	10	明褐	ハケ、ヨコナデ、ミガキ、黒色処理	ミガキ、黒色処理		（8.6）		［2.6］	11.66	外面口縁部黒色処理
94	7号竪	堆積土	坏	口縁～底部	10	にぶい黄橙	ケズリ、ヨコナデ→ミガキ	ミガキ、黒色処理		（15.5）		［4.4］	29.28	外面口縁部黒色処理
95	7号竪	堆積土	坏	口縁～底部	20	にぶい黄橙	ハケ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		（15.2）		［4.0］	31.46	
96	7号竪	堆積土下部	坏	口縁～底部	80	にぶい黄橙	ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		（16.6）		4.3	191.96	
97	7号竪	堆積土下部	坏	口縁～底部	70	にぶい黄橙	ヘラケズリ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		（17.8）		5.2	240.89	
98	7号竪	堆積土	坏	口縁～底部	10	灰	ケズリ→ヨコナデ→ミガキ	ミガキ、黒色処理		（18.0）		［3.1］	20.78	外面口縁部黒色処理
99	7号竪	堆積土下部	坏	口縁～底部	20	浅黄橙	ハケ、ケズリ、ヨコナデ→ミガキ	ミガキ、黒色処理					7.99	
100	7号竪	堆積土	坏	口縁～底部	10	赤褐色	ミガキ	ミガキ、黒色処理					14.58	
101	7号竪	堆積土	坏	口縁～底部	20	にぶい黄橙	ヘラナデ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		（14.8）		［3.7］	26.14	
102	7号竪	堆積土上部	坏	口縁～底部	10	にぶい黄褐色	ケズリ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		（15.0）		［3.9］	29.93	
103	7号竪	堆積土下部	坏	口縁～底部	70	にぶい黄橙	ケズリ、ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	線刻（×）	（14.8）		4.9	117.45	外底面摩耗
104	7号竪	堆積土上部	高坏	底部	10	灰黄褐	ハケ	ミガキ、黒色処理					19.36	
105	7号竪	堆積土	高坏	脚部	5	橙	ケズリ	ヘラナデ、ヨコナデ、ハケ				（4.1）	17.16	
106	7号竪	堆積土	壺甕類	胴部	10	にぶい黄橙	ハケ（摩耗）、ミガキ	ハケ、ヘラナデ				［4.05］	101.41	
107	7号竪	堆積土下部	壺	口縁～胴部	5	にぶい黄橙	ミガキ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ					52.62	
108	7号竪	堆積土下部	壺	胴部	10	浅黄橙	ハケ	ハケ、ヘラナデ					371.51	
109	7号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	50	にぶい黄橙	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ		11.50		［7.75］	136.99	
110	7号竪	堆積土下部	甕	胴部～底部	10	にぶい黄橙	ハケ	ハケ	木葉痕？		5.6	［3.8］	58.96	
111	7号竪	堆積土上部	甕	胴部～底部	30	橙	ハケ（摩耗）	ハケ			8.6	［8.0］	262.63	

竪穴建物跡＝竪、陥し穴状土坑＝陥、柱穴＝ｐ　（ ）は推定値、[ ]は残存値

掲載	出土地点・層位		器種	残存部位	残存率	色調	主な調整・特徴		底部	口径 cm	底径 cm	器高 cm	重量 g	備　考
							外面	内面						
112	7号竪	床面	甕	口縁～胴部	30	にぶい黄橙	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ		(18.6)		[17.7]	490.52	内面焦げ付着
113	7号竪	床面	甕	口縁～底部	70	浅黄橙	ハケ→ミガキ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ		(18.0)	(7.6)	23.8	810.61	
114	7号竪	床面	甕	口縁～胴部	40	にぶい橙	ハケ、ミガキ、ヨコナデ	ハケ、ヘラナデ、ヨコナデ		(19.8)		[16.0]	630.49	
115	9号竪	堆積土	坏	口縁～底部	50	にぶい橙	ケズリ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(10.8)		3.25	58.04	
116	9号竪	床面	片口	口縁～底部	90	にぶい橙	ユビナデ、ヨコナデ	ユビナデ、ヨコナデ		8.6	4.8	3.8	81.13	内面焦げ付着
117	9号竪	堆積土　カマド内	甕	口縁～胴部	10	にぶい橙	ミガキ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ		(15.9)		[5.6]	48.17	
118	9号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	20	にぶい黄橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ		(17.8)		[13.0]	243.95	内面焦げ付着
119	9号竪	床面	甕	口縁～胴部	20	浅黄橙	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ				[17.5]	248.75	内面焦げ付着
120	9号竪	カマド内	甕	口縁～胴部	50	にぶい橙	ハケ→ヘラナデ、ミガキ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ		18.0		[18.5]	715.36	内面焦げ付着
121	10号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	20	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ、ヘラナデ、ヨコナデ		(17.5)		[16.1]	197.92	
122	11号竪	床面	坏	口縁～底部	80	にぶい黄橙	ケズリ（摩耗）、ミガキ	ミガキ、黒色処理		12.1		3.5	121.13	外面口縁部黒色処理
123	11号竪	床面	壺	口縁～底部	80	浅黄橙	ハケ→ヘラナデ、ミガキ、ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	ヘラケズリ	(15.2)	7.0	22.5	1360.31	須恵器広口長頸壺模倣？
124	11号竪	堆積土	甕	口縁～底部	60	にぶい黄橙	ケズリ、ヘラナデ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ、ミガキ	木葉痕	(11.6)	(7.2)	17.4	417.91	内外面焦げ付着
125	12号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	5	にぶい黄橙	ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ		(19.0)		(5.1)	50.15	
126	12号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	5	灰白	ヘラナデ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ					40.33	
127	15号竪	堆積土	鉢	口縁～底部	10	にぶい橙	ハケ、ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(19.4)		[6.6]	54.05	
128	14号竪	堆積土	坏	口縁～底部	60	にぶい黄橙	ケズリ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理？		11.8		3.1	70.94	内面有段？

129	14号竪	堆積土	坏	口縁～底部	50	にぶい黄橙	ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ハケ	(13.6)		3.3	105.59	
130	14号竪	堆積土	坏	口縁～底部	10	にぶい黄褐	ケズリ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(15.6)		[5.7]	26.91	
131	14号竪	床面	碗	口縁～底部	50	にぶい黄橙	ケズリ、ヘラナデ→ヨコナデ→ミガキ	ミガキ、黒色処理		18.8		[8.0]	217.44	高坏坏部？
132	14号竪	堆積土	壺	口縁	5	にぶい黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ					15.05	
133	14号竪	カマド内貼床土	甕	口縁～胴部	50	にぶい黄橙	ハケ、ヘラナデ、ミガキ、ヨコナデ	ハケ、ヘラナデ、ミガキ、ヨコナデ		15.5		[17.7]	584.87	外面スス焦げ付着
134	14号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	10	にぶい橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ（摩耗）→ヨコナデ		(12.7)		[12.2]	111.33	
135	14号竪	堆積土	甕	口縁	5	にぶい黄橙	ヘラナデ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ		(19.8)		[4.5]	26.88	
136	14号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	5	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ		(19.2)		[7.5]	56.84	
137	14号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	5	にぶい黄橙	ハケ、ヘラナデ、ヨコナデ	ハケ、ヘラナデ、ヨコナデ		(19.1)		[5.7]	87.48	
138	14号竪	堆積土	甕	口縁～底部	50	にぶい黄橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	木葉痕	(16.0)	7.8	28.3	676.50	内外面焦げ付着
139	16号竪	堆積土	坏	口縁～底部	10	にぶい黄橙	ケズリ（摩耗）、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(9.8)		[3.4]	14.19	
140	16号竪	堆積土	坏	口縁～底部	60	にぶい黄橙	ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ハケ	(10.2)		3.4	98.60	
141	16号竪	堆積土	坏	口縁～底部	90	にぶい黄橙	ハケ→ミガキ	ミガキ、黒色処理	ハケ	10.4		3.3	124.13	胎土にφ2㎜礫
142	16号竪	床面	坏	口縁～底部	30	にぶい橙	ハケ→ヨコナデ	ミガキ	ハケ	(11.8)		[3.0]	46.20	内面黒色処理？
143	16号竪	堆積土	坏	口縁～底部	20	にぶい橙	ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(12.1)		[3.1]	46.32	
144	16号竪	床面	坏	口縁～底部	50	にぶい黄橙	ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(12.3)		3.55	79.27	
145	16号竪	カマド内	坏	口縁～底部	50	にぶい黄橙	ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ハケ	13.0		4.1	125.91	
146	16号竪	堆積土	坏	口縁～胴部	10	にぶい黄橙	ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(13.5)		[3.1]	31.06	
147	16号竪	堆積土	坏	口縁～底部	10	にぶい黄橙	ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ミガキ	(16.8)		[3.4]	26.09	
148	16号竪	堆積土	坏	口縁～胴部	10	にぶい黄橙	ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(16.8)		[3.0]	18.80	

竪穴建物跡＝竪、陥し穴状土坑＝陥、柱穴＝ｐ　（　）は推定値、［　］は残存値

掲載	出土地点・層位		器種	残存部位	残存率	色調	主な調整・特徴		底部	口径 cm	底径 cm	器高 cm	重量 g	備　考
							外面	内面						
149	16号竪	堆積土	坏	口縁～底部	80	黄橙	ケズリ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ケズリ	10.6		2.9	75.76	
150	16号竪	堆積土	坏	口縁～底部	50	にぶい黄橙	ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(11.0)		2.7	56.19	
151	16号竪	カマド内	坏	口縁～底部	80	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		11.4		3.1	109.55	
152	16号竪	堆積土	坏	口縁～底部	20	にぶい黄橙	ケズリ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ケズリ	(14.0)		3.0	44.48	
153	16号竪	堆積土	坏	口縁～底部	30	にぶい黄橙	ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(14.3)		3.8	69.65	口縁部に棒状圧痕？
154	16号竪	堆積土	鉢類	底部	10	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ、黒色処理				[2.35]	102.77	外底部破損
155	16号竪	堆積土	坏	口縁～底部	90	にぶい黄橙	ハケ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ハケ	13.8		4.7	236.74	
156	16号竪	堆積土	坏	口縁～底部	50	にぶい黄褐	ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ハケ	(15.1)		5.0	126.75	
157	16号竪	堆積土	坏	口縁～底部	10	にぶい黄橙	ミガキ、黒色処理	ミガキ、黒色処理		13.6		[5.6]	56.35	
158	16号竪	堆積土	ミニチュア	口縁～底部	80	浅黄橙	ハケ、ヘラナデ、ヨコナデ	ヨコナデ		(6.4)	3.5	8.4	203.00	壺型
159	16号竪	床面	鉢	口縁～底部	90	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ	木葉痕	14.1	9.1	13.1	745.07	片口鉢？
160	16号竪	堆積土	高坏	口縁～脚部	30	浅黄橙	ミガキ、口縁部黒色処理	ミガキ、黒色処理		(17.0)		[5.9]	134.78	脚部破断面多数　蓋兼用？
161	16号竪	堆積土	壺	口縁～胴部	50	浅黄橙	ケズリ、ミガキ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ		13.7		[12.3]	276.04	
162	16号竪	堆積土	壺	口縁～胴部	5	浅黄橙	ハケ→ミガキ→ヨコナデ	ハケ、ヘラナデ、ヨコナデ		(17.8)		[8.6]	61.65	
163	16号竪	堆積土	高坏	脚部	20	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ	ケズリ、ヨコナデ			(8.0)	[3.0]	53.97	透し孔4個
164	16号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	60	にぶい黄橙	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ		(19.2)		[26.9]	868.55	口縁部内外面焦げ付着　長胴甕
165	16号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	20	にぶい黄橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ		(13.6)		[8.2]	159.84	内面焦げ付着
166	16号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	30	にぶい黄橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ		(15.4)		[16.9]	315.16	内面焦げ付着

167	16号竪	カマド内	甕	口縁～胴部	70	浅黄橙	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ		11.8		［11.0］	446.82	
168	16号竪	カマド内	甕	胴部～底部	20	浅黄橙	ハケ	ハケ	木葉痕？		(6.9)	［9.3］	341.71	
169	16号竪	カマド内	甕	胴部～底部	20	にぶい橙	ハケ（摩耗）	ハケ	摩耗		6.9	［6.4］	232.61	内面焦げ付着
170	16号竪	カマド内	甕	胴部～底部	10	浅黄橙	ハケ（摩耗）	ハケ	木葉痕		8.2	［9.4］	318.68	外面焦げ付着
171	17号竪	堆積土	坏	口縁～底部	5	橙	ヘラナデ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(14.0)		［3.6］	13.39	内面焦げ付着
172	17号竪	カマド内	坏	口縁～底部	5	灰白	ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、ヨコナデ		(16.0)		［3.7］	15.63	
173	17号竪	カマド内	坏	口縁～底部	10	にぶい黄橙	ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ミガキ	(17.0)		［4.3］	56.57	
174	17号竪	カマド内	坏	口縁～底部	80	にぶい黄橙	ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ミガキ	17.0		5.0	262.53	
175	17号竪	堆積土	坏	口縁～底部	5	浅黄橙	ハケ→ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(18.0)		［4.1］	17.07	
176	17号竪	カマド内	甕	胴部～底部	30	浅黄橙	ハケ（摩耗）	ハケ（摩耗）	摩耗		7.0	［9.8］	356.22	支脚転用？
177	17号竪	カマド内	甕	口縁～胴部	10	浅黄橙	ヘラナデ→ヨコナデ	ヘラナデ、ハケ、ミガキ、ヨコナデ		(18.0)		［10.2］	169.67	口縁部外面焦げ付着
178	17号竪	カマド内	甕	口縁～底部	90	浅黄橙	ハケ（摩耗）→ヨコナデ	ハケ（摩耗）→ヨコナデ	木葉痕	18.9	6.7	19.6	698.23	口縁部内面焦げ付着
179	19号竪	堆積土	甕	口縁	5	橙	ヨコナデ	ヨコナデ		(20.0)		［4.6］	36.80	外面焦げ付着
180	19号竪	堆積土	甕	胴部～底部	30	にぶい黄橙	ハケ	ハケ（摩耗）	摩耗		6.0	［6.7］	222.43	内面焦げ付着
181	21号竪	カマド内	坏	口縁～底部	5	にぶい黄橙	ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(10.2)		［3.1］	15.06	
182	21号竪	堆積土	坏	口縁～底部	5	にぶい黄橙	ヘラナデ？、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(10.6)		［2.8］	13.07	
183	21号竪	床面	坏	口縁～底部	90	にぶい橙	ハケ→ミガキ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ミガキ	12.4		3.9	134.00	
184	21号竪	床面	坏	口縁～底部	80	浅黄橙	ハケ→ミガキ	ミガキ、黒色処理？	ハケ（摩耗）	12.9		4.0	167.52	
185	21号竪	堆積土下部	坏	口縁～底部	10	浅黄橙	ケズリ→ミガキ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理				［3.5］	24.57	
186	21号竪	堆積土	坏	口縁～底部	5	にぶい橙	ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(14.2)		［3.4］	22.76	
187	21号竪	堆積土	坏	口縁～底部	5	浅黄橙	ケズリ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(14.0)		［4.5］	23.77	
188	21号竪	堆積土	坏	口縁～胴部	5	-	ハケ→ミガキ、黒色処理	ミガキ、黒色処理		(13.8)		［3.4］	11.37	

竪穴建物跡＝竪、陥し穴状土坑＝陥、柱穴＝ｐ　（ ）は推定値、[ ]は残存値

掲載	出土地点・層位		器種	残存部位	残存率	色調	主な調整・特徴		底部	口径 cm	底径 cm	器高 cm	重量 g	備　考
							外面	内面						
189	21号竪	カマド内	坏	口縁～胴部	5	にぶい黄橙	ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(14.4)		[2.9]	12.77	
190	21号竪	カマド内	鉢	口縁～底部	40	にぶい黄橙	ハケ	ミガキ、黒色処理	ハケ（摩耗）	(19.8)		7.3	213.00	
191	21号竪	堆積土下部	高坏	脚部	20	浅黄橙	ケズリ、ヨコナデ、ミガキ	ミガキ、黒色処理	ケズリ		8.9	[5.2]	173.04	
192	21号竪	堆積土	壺	口縁～胴部	30	浅黄橙	ハケ、ヘラナデ、ミガキ、ヨコナデ	ハケ、ヘラナデ、ヨコナデ		(18.4)		[18.0]	558.50	
193	21号竪	床面	壺	胴部～底部	40	浅黄橙	ハケ、ヘラナデ、ケズリ	ハケ、ヘラナデ	ケズリ（摩耗）		6.8	[12.8]	590.91	
194	21号竪	カマド内	甕	口縁部	5	橙	ハケ→ヨコナデ→ミガキ	ハケ→ヨコナデ					48.28	外面スス付着
195	21号竪	カマド内	甕	口縁～底部	70	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	摩耗	16.8	(8.0)	28.7	1233.67	外面胴下部焦げ付着
196	21号竪	堆積土下部	甕	口縁～底部	90	にぶい黄橙	ハケ（摩耗）	ケズリ、ハケ	ケズリ（摩耗）、ハケ	12.3	5.8	13.3	380.46	
197	21号竪	堆積土	甕	胴部～底部	20	浅黄橙	ハケ	ハケ	木葉痕		8.5	[7.9]	310.26	外面胴下部木葉痕
198	21号竪	堆積土	甕	口縁部	5	灰黄褐	ハケ→ヨコナデ→波状沈線	ハケ→ヨコナデ					21.98	
199	21号竪	床面	壺	口縁部	5	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ		(18.4)		[5.5]	64.57	
200	21号竪	堆積土	甕	口縁～底部	80	浅黄橙	ハケ（摩耗）→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	木葉痕	17.0	7.6	19.9	775.68	内面口縁部焦げ付着
201	21号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	30	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ、口縁部段状沈線2条	ハケ、ヘラナデ→ヨコナデ		(17.4)		[17.7]	422.29	内面焦げ付着
202	21号竪	カマド内	甕	胴部～底部	20	にぶい橙	ハケ	ハケ	ハケ（摩耗）		8.2	[9.1]	316.69	
203	22号竪	床面	坏	口縁～底部	20	橙	ミガキ	ミガキ、黒色処理		(13.0)		[4.05]	31.34	
204	22号竪	堆積土	坏	口縁～底部	20	橙	ハケ→ミガキ	ミガキ、黒色処理		(14.5)		[4.0]	64.37	
205	22号竪	床面	椀	口縁～底部	80	橙	ミガキ	ミガキ、黒色処理	摩耗	15.20		7.70	418.25	内外面焦げ付着
206	22号竪	堆積土	片口	口縁～底部	70	浅黄橙	ハケ、ヨコナデ	ハケ	摩耗	(9.2)	6.0	7.35	184.19	外面赤色付着物あり 内面焦げ付着

207	22号竪	床面	壺	頸部～胴部	30	浅黄橙	ハケ、ミガキ、ヨコナデ	ハケ、ヘラナデ、ミガキ				［23.55］	548.54	
208	22号竪	堆積土	壺	口縁～胴部	20	浅黄橙	ハケ→ミガキ	ハケ、ヘラナデ	木葉痕		9.75	［15.3］	525.36	
209	22号竪	床面	甕	口縁～胴部	80	浅黄橙	ヘラナデ、ミガキ、ヨコナデ	ヘラナデ、ミガキ		（16.4）		［25.5］	446.73	外面焦げ付着
210	22号竪	カマド内	甕	口縁～底部	100	にぶい黄橙	ヘラナデ、ミガキ、ヨコナデ、段状沈線3条	ヘラナデ、ミガキ、ヨコナデ	摩耗	18.8	8.9	33.1	1664.36	口縁部外面焦げ付着
211	22号竪	床面	甕	口縁～底部	90	にぶい黄褐	ハケ、ヘラナデ、ヨコナデ　段状沈線4条　指頭圧痕	ヘラナデ、ハケ、ヨコナデ　指頭圧痕	摩耗	16.4	7.5	33.1	1381.90	口唇部花弁状
212	22号竪	床面	甕	口縁～底部	80	にぶい褐	ハケ→ヨコナデ	ハケ	木葉痕	（13.3）	6.4	12.7	387.61	内外面焦げ付着
213	22号竪	床面	甕	口縁～底部	70	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	木葉痕	（14.4）	7.6	15.8	470.81	内外面焦げ付着
214	22号竪	カマド１燃焼部	甕	口縁～底部	80	橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	摩耗	（15.8）	6.8	19.8	593.72	外面焦げ付着
215	22号竪	床面	甕	頸部～底部	60	浅黄橙	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヘラナデ、ヨコナデ	摩耗		6.4	15.8	501.32	外面焦げ付着
216	22号竪	床面	甕	口縁～底部	80	にぶい橙	ハケ→ミガキ 頸部沈線1条	ハケ	摩耗	19.4	7.5	30.8	1364.75	
217	23号竪	堆積土	坏	口縁～底部	30	浅黄橙	摩耗、ヨコナデ	ミガキ、 黒色処理		（9.8）		2.6	42.01	
218	23号竪	堆積土	坏	口縁～底部	10	橙	ケズリ→ヨコナデ→ミガキ	ミガキ、 黒色処理		（10.8）		［2.8］	11.63	
219	23号竪	堆積土	坏	口縁～底部	10	にぶい黄橙	ケズリ、ヨコナデ→ミガキ	ミガキ、 黒色処理		（12.0）		［3.3］	15.81	
220	23号竪	堆積土	坏	口縁～底部	80	にぶい黄橙	ケズリ→ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、 黒色処理		12.2		3.2	104.60	
221	23号竪	堆積土	坏	口縁～底部	30	にぶい橙	ハケ（摩耗）→ヨコナデ	ミガキ、 黒色処理		（13.6）		3.7	53.89	
222	23号竪	堆積土	坏	口縁～底部	10	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ	ミガキ、 黒色処理		（14.0）		［3.2］	21.02	
223	23号竪	堆積土	坏	口縁～底部	50	橙	摩耗、ヨコナデ	ミガキ、 黒色処理				［4.1］	157.37	
224	23号竪	堆積土	坏	口縁～底部	10	にぶい黄橙	ハケ→ミガキ	ミガキ、 黒色処理		（15.4）		［3.4］	29.52	
225	23号竪	堆積土	甕	胴部～底部	20	浅黄橙	ミガキ	ハケ（摩耗）	摩耗		8.5	［9.1］	336.13	
226	23号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	70	浅黄橙	ハケ、ヨコナデ	ハケ、 ヨコナデ		19.7		［29.8］	1535.31	長胴タイプ

竪穴建物跡＝竪、陥し穴状土坑＝陥、柱穴＝ｐ　（ ）は推定値、[ ]は残存値

掲載	出土地点・層位		器種	残存部位	残存率	色調	主な調整・特徴		底部	口径 cm	底径 cm	器高 cm	重量 g	備　考
							外面	内面						
227	23号竪	堆積土	甕	口縁～底部	60	灰白	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	木葉痕	(14.7)	8.4	16.6	498.83	
228	24号竪	堆積土	坏	口縁～底部	80	にぶい黄橙	ハケ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ハケ	9.8		4.4	81.62	
229	24号竪	床面	坏	口縁～底部	80	浅黄橙	ハケ（摩耗）→ヨコナデ、ミガキ、口縁部黒色処理	ミガキ、黒色処理		15.6		4.6	242.37	内外面剥落顕著
230	24号竪	床面	甕	口縁～胴部	30	にぶい黄橙	ハケ→ミガキ、ヨコナデ	ハケ→ミガキ、ヨコナデ		(19.3)		18.95	489.25	
231	24号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	50	にぶい黄橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ		(18.6)		[24.0]	622.14	長胴タイプ
232	24号竪	床面	甕	口縁～底部	80	にぶい黄橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ		12.4	5.6	8.35	274.60	内面焦げ付着
233	24号竪	堆積土	甕	口縁～底部	80	浅黄橙	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	摩耗	21.2	(8.9)	29.2	1402.62	外面スス焦げ付着
234	24号竪	床面	甕	胴部～底部	20	橙	ハケ	ハケ	木葉痕		(8.6)	[18.0]	246.10	
235	25号竪	床面	壺	口縁～底部	70	浅黄橙	ハケ→ミガキ、ヨコナデ	ハケ、ヘラナデ、ヨコナデ	摩耗	21.0	7.0	26.4	1503.60	
236	25号竪	床面	壺	胴部～底部	20	浅黄橙	ハケ	ハケ	摩耗		8.0	[16.3]	660.43	
237	25号竪	床面	壺	口縁～胴部	30	浅黄橙	ヘラナデ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ		(19.2)		[12.2]	389.09	
238	26号竪	床面	壺	口縁～底部	80	浅黄橙	ハケ、ヨコナデ、赤色塗彩	ヘラナデ、ハケ、ヨコナデ、口縁部赤色塗彩	木葉痕	11.2	6.0	16.1	466.03	外面焦げ付着（年代測定資料） 口縁部内外面赤彩文様梯子状
239	26号竪	堆積土	甕	口縁～底部	50	浅黄橙	ハケ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ	摩耗	(16.2)	7.0	16.8	383.21	外面焦げ付着、壺形
240	26号竪	カマド内	甕	胴部～底部	10	浅黄橙	ヘラナデ	ヘラナデ	摩耗		7.6	[6.2]	257.65	
241	26号竪	堆積土	甕	口縁～底部	70	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	蛇の目状	(13.8)	6.1	15.2	443.13	口縁内面焦げ付着
242	26号竪	床面	甕	口縁～底部	90	浅黄橙	ハケ、ヨコナデ	ハケ（摩耗）	ハケ	16.4	7.0	19.3	869.08	内外面焦げ付着
243	26号竪	床面	甕	胴部～底部	30	にぶい橙	ハケ	ハケ	摩耗		8.4	[14.8]	304.23	
244	27号竪	堆積土	坏	口縁～底部	50	にぶい黄橙	ヨコナデ、ミガキ、口縁部黒色処理	ミガキ、黒色処理		(11.0)		3.6	55.64	
245	27号竪	カマド内	坏	口縁～底部	50	にぶい黄橙	ケズリ（摩耗）、ミガキ	ミガキ、黒色処理	ケズリ（摩耗）	(15.3)		5.1	188.22	

246	27号竪	堆積土	坏	口縁～底部	30	浅黄橙	ケズリ→ミガキ	ミガキ、黒色処理		(15.8)		[5.2]	104.62	
247	27号竪	堆積土	坏	口縁～底部	20	浅黄橙	ヨコナデ→ミガキ	ミガキ、黒色処理	線刻「×」	(15.0)		4.2	39.04	
248	27号竪	カマド内	甕	胴部～底部	20	橙	ハケ	ハケ	ハケ（摩耗）		8.8	[10.9]	298.19	
249	27号竪	堆積土	甕	胴部～底部	10	灰黄褐	ハケ	ハケ	木葉痕		(9.0)	[10.9]	116.61	
250	27号竪	カマド内	甕	胴部～底部	20	灰白	ハケ（摩耗）	ハケ	木葉痕		6.9	[8.3]	173.51	
251	27号竪	堆積土上部	甕	口縁～底部	80	橙	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	木葉痕	13.4	7.5	12.9	545.05	
252	27号竪	カマド内	甕	胴部～底部	10	浅黄橙	ハケ（摩耗）	ハケ	木葉痕		7.2	[6.9]	262.78	
253	27号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	20	にぶい橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ		18.6		[28.8]	575.92	
254	27号竪	堆積土	甕	口縁～底部	90	浅黄橙	ハケ（摩耗）→ヨコナデ	ハケ（摩耗）→ヨコナデ		19.4	7.6	31.6	1753.72	
255	28号竪	堆積土	坏	口縁	5	明黄褐	ヨコナデ→ミガキ	ミガキ、黒色処理		(13.4)		[3.0]	16.62	
256	28号竪	堆積土	坏	口縁～底部	10	浅黄橙	ヨコナデ、ケズリ→ミガキ	ミガキ、黒色処理		(14.4)		[5.1]	32.01	
257	28号竪	堆積土	坏	口縁～底部	90	にぶい黄橙	ハケ→ミガキ、ヨコナデ、黒色処理	ミガキ、黒色処理	剥落	18.5		6.5	395.75	
258	28号竪	床面、カマド内	甕	口縁～底部	90	にぶい褐	ハケ（摩耗）、ヨコナデ	ハケ（摩耗）、ヨコナデ	蛇の目状	12.5	5.4	10.3	322.82	内面焦げ付着
259	28号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	5	橙	ハケ	ハケ		(14.6)		[7.9]	88.61	甑？
260	28号竪	床面、カマド内	甕	胴部～底部	30	にぶい黄橙	ハケ（摩耗）、ヘラナデ	ハケ	木葉痕		8.6	[16.4]	586.07	内面焦げ付着
261	28号竪	堆積土	甕	口縁部	5	にぶい橙	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ		(17.2)		[4.2]	40.88	
262	28号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	10	浅黄橙	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ		(19.3)		[13.65]	127.07	内外面口縁部ス ス焦げ付着
263	28号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	5	にぶい黄橙	ハケ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ		(20.0)		[7.2]	66.82	
264	28号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	20	浅黄橙	ヘラナデ→ミガキ	ヘラナデ、ハケ		(17.0)		[12.9]	268.00	外面ス ス焦げ付着
265	28号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	50	にぶい黄橙	ハケ（摩耗）、ヨコナデ	ハケ（摩耗）、ヨコナデ		(16.0)		[17.7]	332.36	
266	28号竪	床面	甕	口縁～底部	90	橙	ハケ（摩耗）、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	摩耗	21.4	8.5	33.2	1793.33	内外面焦げ付着
267	28号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	5	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ		(20.0)		[13.8]	161.51	内面焦げ付着

竪穴建物跡＝竪、陥し穴状土坑＝陥、柱穴＝ｐ　（ ）は推定値、[ ]は残存値

掲載	出土地点・層位		器種	残存部位	残存率	色調	主な調整・特徴		底部	口径 cm	底径 cm	器高 cm	重量 g	備　考
							外面	内面						
268	28号竪	床面	甕	口縁～胴部	10	灰白	ハケ→ヨコナデ、ミガキ	ヘラナデ、ハケ→ヨコナデ、ミガキ		(22.0)		[17.8]	344.51	内面焦げ付着
269	30号竪	堆積土	坏	口縁～底部	5	-	ハケ→ヨコナデ→ミガキ、黒色処理	ミガキ、黒色処理		(12.4)		[2.7]	13.91	
270	30号竪	堆積土	坏	口縁～底部	50	橙	ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理				[3.15]	72.36	内底面剥落
271	30号竪	堆積土	坏	口縁～底部	10	にぶい黄褐	ハケ→ヨコナデ→ミガキ	ミガキ、黒色処理		(13.4)		[3.5]	29.18	
272	30号竪	堆積土	坏	口縁～底部	30	橙	ヨコナデ、ミガキ	ミガキ、黒色処理	剥落	(14.0)		[3.9]	55.87	内外面剥落顕著
273	30号竪	堆積土	高坏	胴部～脚部	10	灰白	ケズリ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ケズリ			[4.6]	73.71	
274	30号竪	貼床内	高坏	脚部	5	にぶい黄橙	ヘラナデ、ヨコナデ	-	ヘラナデ		(8.3)	[2.2]	11.73	
275	30号竪	堆積土	壺	口縁～胴部	20	浅黄橙	ミガキ、ヨコナデ	ヘラナデ、ミガキ、ヨコナデ		(22.6)		[21.3]	375.89	
276	30号竪	堆積土	甕	口縁	5	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ		(18.0)		[3.6]	65.78	
277	30号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	20	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ		(17.4)		[10.0]	154.72	
278	30号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	20	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ		(17.4)		[14.8]	228.47	
279	30号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	40	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ、ヘラナデ、ヨコナデ		24.0		25.5	751.99	
280	30号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	30	浅黄橙	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ		(19.6)		[21.8]	369.77	
281	30号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	40	にぶい橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ		20.1		[20.2]	720.07	外面焦げ付着
282	30号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	60	浅黄橙	ハケ、ヘラナデ、ミガキ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ		22.2		[22.4]	923.82	
283	31号竪	堆積土	坏	口縁～底部	10	にぶい黄橙	ケズリ→ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理				[3.3]	48.18	
284	31号竪	堆積土	坏	口縁～底部	20	浅黄橙	ケズリ→ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(15.0)		[3.6]	49.00	内面段顕著

285	31号竪	堆積土	甕	口縁～底部	60	浅黄橙	ハケ→ミガキ、ヨコナデ、段状沈線3条	ハケ、ヘラナデ、ヨコナデ	摩耗	(19.0)	7.5	24.3	956.39	内外面焦げ付着
286	31号竪	堆積土	甕	口縁～底部	40	にぶい橙	ハケ→ミガキ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	摩耗	(12.1)	6.8	13.65	222.39	内面焦げ付着
287	31号竪	堆積土	甕	口縁～底部	50	にぶい黄橙	ハケ（摩耗）→ヨコナデ、ミガキ	ハケ、ヘラナデ、ヨコナデ		(12.8)	6.5	19.5	357.51	内面焦げ付着
288	32号竪	床面	甕	口縁～底部	40	浅黄橙	ハケ→ミガキ、ヨコナデ	ハケ、ヘラナデ、ヨコナデ		(21.4)	(7.2)	29.5	593.66	
289	32号竪	カマド内	甕	口縁～胴部	10	浅黄橙	ハケ→ミガキ、ヨコナデ	ハケ→ミガキ、ヨコナデ		(18.0)		[23.1]	414.43	
290	33号竪	堆積土	坏	口縁～底部	40	にぶい橙	ケズリ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ケズリ	(12.4)		4.0	97.41	
291	33号竪	堆積土	椀	口縁～胴部	30	にぶい橙	ミガキ、沈線3条	ミガキ、黒色処理		(12.8)		[9.0]	92.65	
292	33号竪	堆積土	壺	胴部～底部	60	橙	ハケ（摩耗）→ミガキ	ヘラナデ	摩耗		6.7	[13.0]	494.05	
293	33号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	30	浅黄橙	ハケ（摩耗）	ハケ（摩耗）、ヨコナデ		(18.8)		[16.5]	670.41	
294	33号竪	床面	壺	頸部～胴部	30	にぶい橙	ハケ（摩耗）→ヨコナデ	ヘラナデ、ハケ（摩耗）、ヨコナデ				[16.6]	649.49	
295	33号竪	床面	甕	口縁～底部	80	浅黄橙	ハケ（摩耗）→ヨコナデ、段状沈線6条	ハケ、ヘラナデ→ヨコナデ	摩耗	18.3	7.6	20.7	918.00	内外面焦げ付着　並行沈線
296	34号竪	カマド内	坏	口縁～底部	10	浅黄橙	ケズリ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	ケズリ	(10.5)		[3.3]	16.08	
297	34号竪	堆積土	高坏	坏部	60	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(15.5)		[5.7]	226.14	
298	34号竪	堆積土	甕	口縁部	5	にぶい黄橙	ハケ→ヨコナデ	ヘラナデ→ヨコナデ		(15.6)		[3.7]	36.17	
299	35号竪	堆積土	坏	底部	5	にぶい橙	回転ナデ、ケズリ	ミガキ、黒色処理	回転糸切→ケズリ		(5.2)	[1.6]	22.94	
300	35号竪	堆積土	坏	胴部～底部	5	浅黄橙	回転ナデ	ミガキ、黒色処理	回転糸切痕		(6.4)	[2.7]	17.11	内底面赤色顔料？付着
301	35号竪	堆積土	坏	口縁～胴部	20	にぶい黄橙	回転ナデ	ミガキ、黒色処理		(13.7)		[4.2]	39.20	
302	35号竪	堆積土	坏	口縁～底部	30	にぶい橙	回転ナデ、回転ケズリ	ミガキ、黒色処理	回転ヘラケズリ	(14.5)	(4.9)	4.5	65.01	

竪穴建物跡＝竪、陥し穴状土坑＝陥、柱穴＝ｐ　（　）は推定値、［　］は残存値

掲載	出土地点・層位		器種	残存部位	残存率	色調	主な調整・特徴		底部	口径 cm	底径 cm	器高 cm	重量 g	備　考
							外面	内面						
303	35号竪	カマド内	坏	口縁～底部	40	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ→ミガキ、黒色処理	回転糸切痕（右回転）	(15.0)	(5.8)	5.5	84.91	胎土に小礫含む
304	35号竪	堆積土	坏	口縁～胴部	5	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ→ミガキ、黒色処理		(16.2)		[4.9]	18.22	
305	35号竪	堆積土	坏	口縁～底部	30	橙	ハケ	ハケ、ヘラナデ		(8.4)		[3.7]	24.20	ミニチュア？、須恵器坏蓋模倣坏？
306	35号竪	堆積土	坏	口縁部	5	にぶい橙	ミガキ、黒色処理	ミガキ、黒色処理		(11.2)		[2.4]	5.72	
307	35号竪	堆積土	坏	底部	20	橙	ハケ→ミガキ	ミガキ、黒色処理	ハケ（摩耗）			[2.7]	46.02	
308	35号竪	堆積土	ミニチュア	口縁～底部	80	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		6.9	4.0	4.4	61.00	
309	35号竪	堆積土	坏	口縁～胴部	5	にぶい黄橙	ハケ？→ミガキ	ミガキ、黒色処理		(15.6)		[4.4]	26.63	
310	35号竪	堆積土	坏	口縁～胴部	10	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ、黒色処理		(16.6)		[3.9]	45.50	
311	35号竪	カマド内	甕	口縁～胴部	5	浅黄橙	ケズリ、ヘラナデ、ヨコナデ	ハケ、ヘラナデ、ヨコナデ		(19.2)		[11.5]	173.35	
312	35号竪	カマド内	甕	胴部～底部	5	にぶい黄橙	ヘラナデ、ハケ（摩耗）	ヘラナデ			9.0	[5.6]	113.72	232と同一個体？
313	36号竪	堆積土	坏	口縁～底部	10	にぶい黄橙	ハケ→ヨコナデ、ミガキ	ミガキ、黒色処理		(16.8)		[5.3]	51.89	
314	36号竪	床面	甕	口縁～胴部	40	浅黄橙	ハケ→ミガキ、ヨコナデ	ハケ		16.6		[15.4]	779.60	内外面焦げ付着
315	36号竪	堆積土	甕	口縁～胴部	5	橙	ハケ→ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ		(19.0)		[14.3]	238.71	内外面焦げ付着
316	中央谷部	Ⅱ層	坏	口縁～底部	70	浅黄橙	ケズリ、ヘラナデ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		10.0		3.2	78.57	
317	北側谷	Ⅱ層	坏	口縁～底部	30	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		10.8		3.9	51.78	
318	中央尾根	Ⅱ層	坏	口縁～底部	10	浅黄橙	摩耗	摩耗、黒色処理		(10.2)		[2.6]	18.98	
319	北側谷	Ⅱ層	坏	口縁～胴部	5	黒	ヘラナデ、ミガキ、黒色処理	ミガキ、黒色処理		(10.8)		[2.5]	6.70	

320	北側谷	Ⅱ層	坏	口縁～底部	10	浅黄橙	ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(12.0)		[3.4]	18.20	
321	北側谷	Ⅱ層	坏	口縁～底部	10	にぶい橙	ヘラナデ、ハケ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(13.4)		[3.6]	23.92	
322	北側谷	Ⅱ層	坏	口縁～底部	10	橙	ケズリ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(13.8)		[3.4]	22.35	
323	北側谷	Ⅱ層	坏	口縁～底部	10	にぶい黄橙	ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(14.1)		[3.7]	27.41	
324	北側谷	Ⅱ層	坏	口縁～底部	10	にぶい黄橙	ケズリ、ヘラナデ→ヨコナデ	ミガキ、黒色処理				[4.9]	36.30	
325	北側谷	Ⅱ層	坏	口縁～底部	10	黄橙	ミガキ	ミガキ、黒色処理		(16.6)		[3.5]	39.72	
326	ⅡB8cⅠ	Ⅱ層	坏	口縁～底部	30	にぶい橙	ケズリ→ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(16.0)		[4.4]	57.40	
327	北側谷	Ⅱb～Ⅲ層	坏	口縁～胴部	10	灰黄褐	ケズリ、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理		(17.0)		[4.3]	58.30	
328	ⅡB10c		坏	口縁～底部	10	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ、ミガキ	ミガキ、黒色処理		(11.7)		[5.45]	25.10	3号竪　検出面
329	ⅡB8c	Ⅰ・Ⅱ層	鉢類	胴部～底部	5	にぶい橙	ハケ（摩耗）	ハケ（摩耗）	ヘラナデ		6.0	[4.7]	83.15	
330	ⅢB1c	Ⅱ層	甕	口縁～胴部	5	にぶい橙	ハケ→ミガキ	ハケ		(13.7)		[10.7]	89.04	
331	ⅡB8a・8b	Ⅰ・Ⅱ層	甕	口縁～胴部	10	にぶい黄橙	ハケ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ		16.4		[9.2]	132.69	
332	中央尾根	Ⅱ層	甕	口縁～胴部	5	浅黄橙	ハケ（摩耗）→ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ		(18.5)		[7.3]	78.81	内面焦げ付着
333	ⅢB7d	カクラン	甕	口縁部	5	にぶい黄橙	ヨコナデ→ヘラナデ、ハケ	ヘラナデ		(18.5)		[2.5]	70.13	
334	北側谷	Ⅱ層	甕	口縁～胴部	5	浅黄橙	ハケ→ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ		(22.2)		[6.3]	97.17	

第89表　須恵器観察表

竪穴建物跡＝竪、陥し穴状土坑＝陥、柱穴＝ｐ　（ ）は推定値、[ ]は残存値

番号	出土地点	器種	残存部位	残存率	色調	主な調整・特徴		底部	口径 cm	底径 cm	器高 cm	重量 g	備　考
						外面	内面						
335	2号竪 床面	坏	口縁～底部	70	灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ケズリ	(15.8)	10.5	4.1	209.17	内面黒色付着物有り
336	2号竪 カマド内	坏	底部	5	灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ケズリ		(4.4)	[1.0]	4.70	
337	10号竪 堆積土	坏	底部	5	オリーブ灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ケズリ		(9.0)	[1.2]	8.82	
338	7号竪 堆積土	甕	胴部	5	灰	タタキ	当具痕					10.62	
339	35号竪 堆積土	壺	口縁	5	灰	回転ナデ	回転ナデ		(11.0)		[4.0]	32.98	内面自然釉 340,343
340	35号竪 堆積土	壺	胴部～底部	10	灰	回転ナデ、回転ケズリ	回転ナデ	回転ケズリ		10.4	[6.1]	191.99	高台部貼付 339,343と同一個体？
341	5号竪 堆積土	甕	胴部	5	にぶい橙	タタキ	当具痕					31.78	
342	35号竪 堆積土	壺甕類	胴部	5	灰	ヘラケズリ	ヘラナデ					10.67	
343	35号竪 堆積土	壺	胴部	5	灰	回転ナデ	回転ナデ						339,340と同一個体？
344	北側尾根 Ⅳ層	甕	底部	5	灰	タタキ	ヘラナデ			(10.3)	[3.0]	53.25	内底面焦げ付着
345	北側尾根 Ⅳ層	甕	胴部	5	灰	タタキ	当具痕					74.99	
346	北側尾根 Ⅳ層	甕	胴部	5	灰	タタキ	当具痕					25.90	
347	中央尾根 Ⅰ層	甕	胴部	5	灰	タタキ						12.09	
348	中央谷 Ⅰ層	甕	胴部	5	灰	タタキ	当具痕					60.60	
349	中央 トレンチ	甕	胴部	5	オリーブ黒	タタキ						15.93	
350	中央 トレンチ	甕	胴部	5	オリーブ黒	タタキ						11.11	
351	北側尾根 Ⅰ層	甕	頸部	5	灰	回転ナデ？	回転ナデ？					23.53	摩耗顕著

第90表　石器観察表

竪穴建物跡＝竪、陥し穴状土坑＝陥、柱穴＝ｐ　　（　）は推定値、［　］は残存値

掲載	器種	出土地点	層位	長 cm	幅 cm	厚 cm	重量 g	石　材	産　地	備　考
352	石鏃	中央尾根	Ⅰ・Ⅱ層	3.10	1.60	0.65	2.56	頁岩	北上山地 中生代前期	
353	掻器	28号竪	黒褐色土	3.40	7.25	1.90	26.93	頁岩	北上山地 中生代前期	
354	石匙	ⅡB8a・8b	Ⅰ・Ⅱ層	4.65	4.20	1.10	13.32	頁岩	北上山地 中生代前期	
355	不定形石器	9号竪	堆積土	3.10	3.55	1.10	11.66	頁岩	北上山地 中生代前期	
356	U.F	18号竪	堆積土	5.20	3.35	1.40	16.64	頁岩	北上山地 中生代前期	
357	打製石斧	ⅢA1a	Ⅱ層	6.90	6.60	3.10	146.53	頁岩	北上山地 中生代前期	
358	打製石斧	25号竪	堆積土	10.50	5.25	3.35	191.37	頁岩	北上山地 中生代前期	
359	打製石斧	25号竪	堆積土	10.15	5.40	3.70	223.60	頁岩	北上山地 中生代前期	
360	打製石斧	ⅢA8j	Ⅳ層	7.00	4.70	0.90	34.42	頁岩	北上山地 中生代前期	
361	磨製石斧	27号竪	堆積土	6.00	3.95	0.90	37.38	頁岩	北上山地 中生代前期	
362	磨製石斧	北側谷	Ⅱ層	9.40	5.60	2.20	194.52	頁岩	北上山地 中生代前期	
363	磨製石斧	27号竪	堆積土	4.35	3.25	0.75	17.61	頁岩	北上山地 中生代前期	
364	磨製石斧	32号竪	堆積土	5.15	3.85	2.55	64.06	ヒン岩	北上山地 中生代白亜紀	
365	敲磨器	23号竪	堆積土	6.55	6.65	3.20	203.70	花崗岩	北上山地 中生代白亜紀	
366	敲磨器	2号竪	堆積土	13.30	8.60	6.70	1157.65	花崗斑岩	北上山地 中生代白亜紀	
367	敲磨器	9号竪	堆積土	11.80	7.80	5.70	686.83	デイサイト	北上山地 中生代白亜紀	
368	敲磨器	2号竪	堆積土	19.60	5.30	3.10	387.54	頁岩	北上山地 中生代前期	
369	敲磨器	30号竪	堆積土	17.50	5.20	3.70	532.06	蛇紋岩	早池峰山系 古生代オルドビス期	
370	敲磨器	27号竪	堆積土	15.00	11.15	5.15	1331.07	花崗岩	北上山地 中生代白亜紀	
371	磨石	19号竪	堆積土	11.50	9.75	5.15	802.77	花崗岩	北上山地 中生代白亜紀	

竪穴建物跡＝竪、陥し穴状土坑＝陥、柱穴＝ｐ　（　）は推定値、［　］は残存値

掲載	器種	出土地点	層位	長 cm	幅 cm	厚 cm	重量 g	石　材	産　地	備　考
372	磨石	17号竪	堆積土	12.80	11.15	5.60	1148.77	花崗斑岩	北上山地 中生代白亜紀	磨面に黒色付着物
373	磨石	9号竪	堆積土	10.50	8.60	3.80	499.92	デイサイト	北上山地 中生代白亜紀	磨面に黒色付着物
374	磨石	2号竪	床面	13.00	7.00	5.30	725.60	花崗斑岩	北上山地 中生代白亜紀	
375	磨石	28号竪	床面	12.50	7.90	4.40	557.36	デイサイト	北上山地 中生代前期	被熱？
376	磨石	37号竪	堆積土	15.10	8.25	3.90	751.37	花崗斑岩	北上山地 中生代白亜紀	
377	磨石	31号竪 P1	底面	10.15	8.85	4.40	545.56	細粒閃緑岩	北上山地 中生代白亜紀	
378	磨石	16号竪	堆積土	10.00	8.20	3.90	464.34	細粒閃緑岩	北上山地 中生代前期	
379	磨石	30号竪	堆積土	10.55	8.20	4.75	572.05	花崗斑岩	北上山地 中生代白亜紀	磨面に黒色付着物
380	磨石	7号竪	床面	18.05	15.30	5.30	2249.54	花崗岩	北上山地 中生代前期	石皿？
381	磨石	16号竪	床面	13.00	12.10	4.80	1108.77	花崗斑岩	北上山地 中生代白亜紀	磨面に黒色付着物　被熱
382	磨石	16号竪	床面	14.70	13.25	7.10	1801.03	花崗斑岩	北上山地 中生代白亜紀	被熱
383	砥石	9号竪	堆積土	8.75	7.15	6.39	353.95	流紋岩	八木沢周辺 新生代古第三紀	
384	磨石	8号竪	堆積土	15.45	3.50	3.60	332.80	ヒン岩	北上山地 中生代白亜紀	中生代白亜紀
385	砥石	16号竪	床面	16.20	8.12	4.20	774.23	流紋岩	八木沢周辺 新生代古第三紀	
386	砥石？	9号竪	堆積土	7.70	6.40	4.30	32.03	軽石	十和田火山？	
387	敲石	16号竪	堆積土	8.35	6.05	3.50	247.31	細粒閃緑岩	北上山地 中生代前期	
388	砥石	ⅡB10b	Ⅳ層	13.70	3.30	3.85	315.73	頁岩	北上山地 中生代前期	
389	敲石	20号竪	堆積土	7.95	4.50	2.80	152.96	細粒閃緑岩	北上山地 中生代前期	
390	敲石	16号竪	堆積土	12.90	4.95	2.60	228.94	細粒閃緑岩	北上山地 中生代前期	未製品？
391	磨石	21号竪	堆積土	6.15	8.90	2.65	212.29	ヒン岩	北上山地 中生代白亜紀	方割石？

392	方割石？	10号竪	堆積土	9.50	8.40	3.00	240.67	ヒン岩	北上山地 中生代白亜紀	
393	有孔礫	19号竪	堆積土上部	4.00	3.70	1.00	19.42	砂岩	北上山地 中生代前期	
394	敲石	28号竪	床面	13.10	5.15	4.30	409.01	花崗斑岩	北上山地 中生代白亜紀	
395	方割石？	25号竪	堆積土上部	4.70	8.10	2.40	102.11	細粒閃緑岩	北上山地 中生代前期	磨面あり
396	磨石素材	30号竪	堆積土	11.50	6.55	3.31	257.33	砂岩	北上山地 中生代前期	敲打段階か

第91表　土製品観察表

竪穴建物跡＝竪、陥し穴状土坑＝陥、柱穴＝p　（ ）は推定値、[ ]は残存値

掲載	出土地点・層位		器種	色調	調　整	長さ cm	巾 cm	厚さ cm	重量 g	備　考
397	7号竪	堆積土上部	紡錘車	にぶい橙	ヘラナデ	[4.65]	[2.70]	2.8	36.23	
398	7号竪	堆積土下部	紡錘車	灰黄褐		6.10	6.05	2.65	99.44	
399	9号竪	堆積土	紡錘車	にぶい橙	ナデ	[5.45]	[3.45]	[2.05]	34.27	黒斑吸着
400	16号竪	堆積土	紡錘車	にぶい黄橙	ミガキ？	6.10	6.10	2.35	94.40	
401	17号竪	堆積土	紡錘車	にぶい橙	ミガキ	5.90	5.90	2.45	92.32	
402	21号竪	床面	紡錘車	浅黄橙		5.90	5.80	2.40	62.70	黒斑吸着
403	21号竪	床面	紡錘車	橙	ミガキ	4.45	4.40	1.90	43.51	黒斑吸着
404	21号竪	堆積土	紡錘車	にぶい橙	ヘラケズリ、ミガキ	5.50	5.60	2.40	66.83	黒斑吸着
405	22号竪	床面	紡錘車	にぶい黄褐	ミガキ？	6.10	6.05	1.70	77.64	
406	22号竪	堆積土	紡錘車	明褐		[2.00]	[1.90]	2.10	6.69	黒斑吸着
407	22号竪	堆積土	紡錘車	橙	ケズリ、ミガキ	6.20	6.20	2.30	85.88	
408	23号竪	堆積土	紡錘車	にぶい黄橙		[3.80]	[2.55]	2.40	26.80	
409	24号竪	堆積土	紡錘車	橙	ミガキ	5.10	5.30	2.30	61.91	黒斑吸着
410	28号竪	床面	紡錘車	にぶい橙		5.80	5.85	2.10	72.55	
411	30号竪	堆積土	紡錘車	黒褐		[5.15]	[2.90]	[3.10]	37.73	煤付着
412	30号竪	堆積土	紡錘車	にぶい橙	ケズリ→ミガキ	5.0	5.0	2.5	58.05	黒斑吸着
413	1号土坑	堆積土	紡錘車	にぶい黄橙		[5.65]	[2.80]	[0.65]	8.05	
414	1号土坑	堆積土	紡錘車	にぶい橙	ケズリ→ナデ、黒色処理？	6.0	6.10	2.6	101.81	
415	中央谷	Ⅱ層	紡錘車	にぶい黄橙	ミガキ	[4.7]	[2.8]	[2.45]	15.84	

第92表　鉄製品観察表

竪穴建物跡＝竪、陥し穴状土坑＝陥、柱穴＝ｐ　（　）は推定値、＜　＞は残存値　重量；保存処理前の計量値

掲載	出土地点・層位		器種	錆膨れ含む測定値			身部測定値			重量（ｇ）	備　考
				長	幅	厚	長	幅	厚		
416	ⅡＢ７ｂ	Ⅳ層	短刀	［26.5］	3.3	0.7	＜26.45＞	3.00	0.40	159.58	木質部残存
417	23号竪	堆積土	短刀	25.7	2.6	0 .7	25.70	2.50	0.35	74.93	
418	3号竪	床面	刀子	［6.05］	1.40	0.45	＜5.95＞	1.20	0.40	8.41	
419	9号竪	堆積土	刀子	［4.55］	［1.05］	0.40	＜4.55＞	0.85	0.30	3.32	
420	8号竪	堆積土	刀子	［12.90］	1.60	0.45	＜12.9＞	1.30	0.30	19.85	刃部先端欠損
421	2号竪	床面	刀子	［9.90］	1.65	0,55	＜9.9＞	1.40	0.40	14.47	
422	28号竪	堆積土	刀子	（10.0）	1.65	0.45	＜10.00＞	1.20	0.40	12.08	木質部残存
423	1号土坑	堆積土	刀子	［4.25］	1.45	0.55	＜4.25＞	1.20	0.30	7.61	
424	1号土坑	堆積土	刀子	［4.9］	1.7	0.55	＜4.90＞	身部1.30 木質部1.70	0.45	12.35	木質部残存
425	2号竪	床面	鏃	13.25	1.05	0,65	13.10	先端0.9 柄部0.55	先端0.35 柄部0.6	13.94	反し部欠損？
426	22号竪	堆積土	鎌	14.65	3.75	0.55	14.55	3.55	1.10	39.83	
427	16号竪	堆積土	環状製品	2.65	［2.30］	1.20	2.40	＜2.1＞	0.90	4.35	留金具？

第93表　陶磁器観察表

竪穴建物跡＝竪、陥し穴状土坑＝陥、柱穴＝ｐ　（　）は推定値、［　］は残存値

掲載	出土地点・層位		種別	器種	残存部位	残存率	色調	調整・特徴	産地	時期	口径	底径	器高
428	31号竪	堆積土	磁器	青磁碗	胴部～底部	5	オリーブ灰		龍泉窯系	16世紀			［2.9］
429	北東端		陶器	天目碗	胴部	5	灰	回転ナデ	中国	15～16世紀			
430	31号竪	堆積土	陶器	皿	底部	5	にぶい赤褐色	回転ナデ	肥前	18末～19世紀前半			
431	中央尾根	Ⅱ層	磁器	皿	底部	5	灰白	染付・内底面に草花文	肥前	18後半～19世紀		（12.0）	［2.5］

第94表　その他（鉄滓・琥珀）観察表

竪穴建物跡＝竪

掲載	種別	出土地点・層位		磁着	色調	重量（ｇ）	時期	備　考
432	鉄滓（鍛冶滓）	12号竪	堆積土	○	にぶい赤褐色	10.15	平安	表掲載
433	鉄滓（鍛冶滓）	35号竪	堆積土	○	褐色	39.18	平安	表掲載
434	鉄滓（鍛冶滓）	ⅡＢ8a・8ｂ	Ⅰ～Ⅱ	○	褐色	228.8		椀形滓、表掲載
435	鉄滓（流動滓）	北側沢跡	堆積土	×	灰色	38.71		表掲載
436	鉄滓（流動滓）	北側尾根	Ⅰ	×	灰色	48.1		表掲載
437	琥珀	16号竪 南東区	堆積土		暗赤褐色	3.81		写真・表掲載

Ⅳ　自然科学分析

1　津軽石大森遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

㈱加速器分析研究所

（1）測定対象試料

津軽石大森遺跡は、岩手県宮古市津軽石第4地割73-4（北緯39° 34′ 57″、東経141° 56′ 00″）に所在する。奈良～平安時代の集落遺跡で、海抜15～25mに位置し、遺跡の前面に宮古湾が広がる。測定対象試料は、住居跡から出土した土器付着炭化物と木炭の合計７点である（表１）。土器付着炭化物は、No. １、２が外面、No. ３～５、７が内面より採取された。試料が出土した遺構の時期は、７世紀後半～９世紀前半と推定されている。

（2）測 定 の 意 義

試料が出土した遺構の年代を把握し、他の遺構との関係性を検討する。

（3）化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。
３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。
４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。
５）精製した二酸化炭素と鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
６）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（4）測　定　方　法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（5）算　出　方　法

１）δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）

を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表２に示した。

４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下１桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。また、土器付着炭化物の中に海洋リザーバー効果が影響している可能性のある試料が見られるため、それらについてはMarine13データベース（Reimer et al.前掲）を用い、marine100％、ΔR=0の条件にて、OxCalv4.2較正プログラムにより算出した較正年代をあわせて提示した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2､3に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

（6）測　定　結　果

測定結果を表１～３、図版１、２に示す。

試料７点の^{14}C年代は、2060±20yrBP（土器付着炭化物No. ７）から1310±20yrBP（木炭No.10）の範囲となっている。誤差（±1σ）の範囲で一致するものも含まれるが、同じ遺構から出土した試料であっても年代値は必ずしも近くない。陸生生物由来の試料を対象とする暦年較正曲線IntCal13による較正年代（1σ）は、最も古い土器付着炭化物No. ７が111～42cal BCの範囲、最も新しい木炭No.10が665～761cal ADの間に2つの範囲で示される（表２、図版１）。試料が出土した遺構が7世紀後半～9世紀前半と推定されるのに対し、土器付着炭化物No. ２、木炭No.10は推定される範囲に重なるが、土器付着炭化物No. ５は若干古く、他の土器付着炭化物４点はいずれもかなり古い値を示した。次に、これらの結果に対して、試料の特徴を踏まえた検討を加える。まず、７点の中で最も新しい年代を示したのは木炭No.10である。また、これに次いで新しい値となった土器付着炭化物No. ２は、δ^{13}Cが木炭No.10より若干低い値となっている。これら２点に対し、古い年代値を示した他の土器付着炭化物５点のδ^{13}Cはいずれも高い。

一般的に土器付着炭化物については、内面の付着物が土器で調理された食物の焦げ付き等、外面の付着物が調理に伴う吹きこぼれや燃料由来の煤等であると推定される。今回測定された土器付着炭化物は、No. １、２が外面、No. ３～５、７が内面の付着物で、これらの試料についても土器で調理さ

れた食物に由来する炭化物が含まれる可能性があり、特に内面の付着物はその可能性が高い。さらに、津軽石大森遺跡の立地を考慮すると、食物として海産物を利用したことは十分予想される。そこで、土器付着炭化物のδ^{13}Cを食物に関するδ^{13}Cのデータ（赤澤ほか1993）に照らし合わせると、No. 2はC3植物と草食獣の範囲、No. 4は海産物の範囲に重なり、No. 1、3、7はそれらの中間、No. 5はC3植物等の範囲内であるが、海産物に比較的近い位置に当たる。土器付着炭化物の由来は単一とは限らないため、6点すべての試料に海産物由来の炭素が含まれる可能性があるが、δ^{13}Cと推定年代に対する古さを踏まえれば、特にNo. 1、3～5、7について海洋リザーバー効果の影響を考慮する必要があると判断される。

以上の検討を踏まえ、土器付着炭化物No. 1、3～5、7について、較正曲線Marine13を用いて海洋リザーバー効果を補正した較正年代を算出した（表3、図版2）。IntCal13による較正年代より全体的に300～400年程度新しい値になっている。その結果、木炭を含む試料7点の較正年代（1σ）は、最も古い土器付着炭化物No. 7が271～356cal ADの範囲、最も新しい土器付着炭化物No.5が966～1028cal ADの範囲で示され、No. 5、7以外の5点は推定年代の範囲に重なる年代値となった。

この海洋リザーバー効果を補正した較正年代値については、試料に含まれる海洋由来炭素の割合を考慮せず、一律にmarine100％として算出しているため、海洋リザーバー効果の補正が過剰に働き、新し過ぎる値が算出されている可能性がある（No. 5等）。この点で言えば、海洋リザーバー効果の影響が指摘される5点の試料については、IntCal13による較正年代とMarine13による較正年代の間に真値があると理論上は考えられる。ただし、No.7のように、海洋リザーバー効果を補正してもなお推定年代より大幅に古い試料もある。さらに、海洋リザーバー効果の海域差（ΔR）については、今回ΔR=0の条件で算出しており、厳密な検討とは言えない点に注意する必要がある。ΔRは海域によって大きく異なるため、今回扱った試料の中に本来異なる海域に属するものが何らかの要因で併存していた場合には、一律に行った海洋リザーバー効果の補正が適切に働かない可能性もある。

試料の炭素含有率を確認すると、土器付着炭化物No. 5を除く6点はすべて50％を超え、化学処理、測定上の問題は特に認められない。No. 5については、炭化物に混じって褐色粒が観察され、胎土が混入した可能性がある。炭素含有率は29％で、炭化物としては低い値であり、測定された炭素の由来に若干注意を要する。また、No. 1、2、4については、白色の微細な繊維の付着が見られ、完全に除去できなかったものもあるが、測定への影響は不明である。

なお、上の海洋リザーバー効果に関する議論は、主に試料のδ^{13}Cに基づいているが、AMSによるδ^{13}Cは必ずしも正確でないことと、海洋由来炭素の割合が必ずδ^{13}Cに的確に表れるとは限らない点に注意する必要がある。

文　献

赤澤威，米田穣，吉田邦夫 1993 北村縄文人骨の同位体食性分析，中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11　―明科町内―　北村遺跡　本文編（（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14），長野県教育委員会，（財）長野県埋蔵文化財センター，445-468

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

表１　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C補正値）

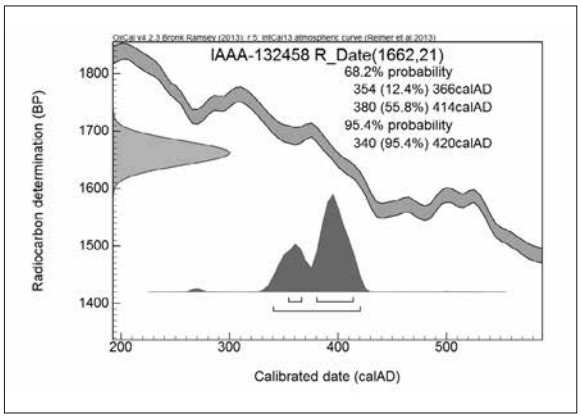
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-132458	No.1	22号建物床面	土器付着炭化物（遺物No.205椀）	AaA	−21.62 ± 0.29	1,660 ± 20	81.31 ± 0.22
IAAA-132459	No.2	22号建物床面	土器付着炭化物（遺物No.210甕）	AaA	−25.58 ± 0.26	1,340 ± 20	84.60 ± 0.23
IAAA-132460	No.3	22号建物床面	土器付着炭化物（遺物No.213）	AAA	−21.72 ± 0.26	1,750 ± 20	80.44 ± 0.22
IAAA-132461	No.4	24号建物床面	土器付着炭化物（遺物No.232）	AaA	−17.96 ± 0.28	1,600 ± 20	81.92 ± 0.21
IAAA-132462	No.5	26号建物堆積土	土器付着炭化物（土器No.241）	AaA	−23.57 ± 0.28	1,420 ± 20	83.82 ± 0.21
IAAA-132463	No.10	24号建物床面	木炭	AAA	−25.51 ± 0.24	1,310 ± 20	84.93 ± 0.22
IAAA-132464	No.7	28号建物床面	土器付着炭化物（遺物No.266）	AAA	−21.78 ± 0.24	2,060 ± 20	77.35 ± 0.22

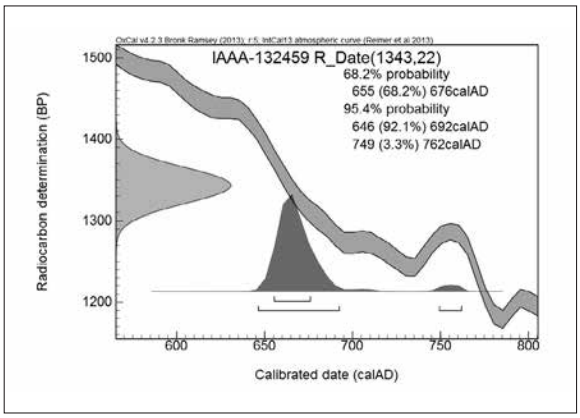
［#6251］

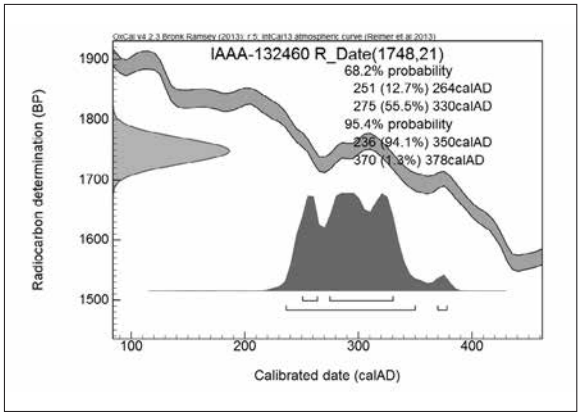
表２　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C未補正値、暦年較正用^{14}C年代、IntCal13による較正年代）

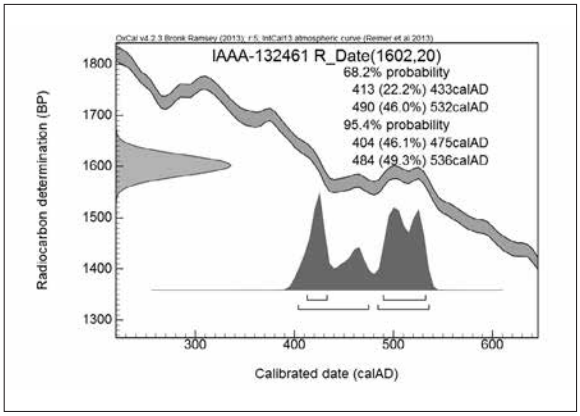
測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用（yrBP）	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-132458	1,610 ± 20	81.88 ± 0.22	1,662 ± 21	354calAD − 366calAD（12.4%） 380calAD − 414calAD（55.8%）	340calAD − 420calAD（95.4%）
IAAA-132459	1,350 ± 20	84.50 ± 0.23	1,343 ± 22	655calAD − 676calAD（68.2%）	646calAD − 692calAD（92.1%） 749calAD − 762calAD（ 3.3%）
IAAA-132460	1,690 ± 20	80.98 ± 0.21	1,748 ± 21	251calAD − 264calAD（12.7%） 275calAD − 330calAD（55.5%）	236calAD − 350calAD（94.1%） 370calAD − 378calAD（ 1.3%）
IAAA-132461	1,490 ± 20	83.11 ± 0.21	1,602 ± 20	413calAD − 433calAD（22.2%） 490calAD − 532calAD（46.0%）	404calAD − 475calAD（46.1%） 484calAD − 536calAD（49.3%）
IAAA-132462	1,390 ± 20	84.07 ± 0.21	1,418 ± 20	619calAD − 650calAD（68.2%）	603calAD − 656calAD（95.4%）
IAAA-132463	1,320 ± 20	84.85 ± 0.22	1,311 ± 20	665calAD − 690calAD（53.3%） 750calAD − 761calAD（14.9%）	660calAD − 715calAD（72.0%） 743calAD − 766calAD（23.4%）
IAAA-132464	2,010 ± 20	77.87 ± 0.22	2,062 ± 22	111calBC − 42calBC（68.2%）	166calBC − 19calBC（92.4%） 12calBC − 1calBC（ 3.0%）

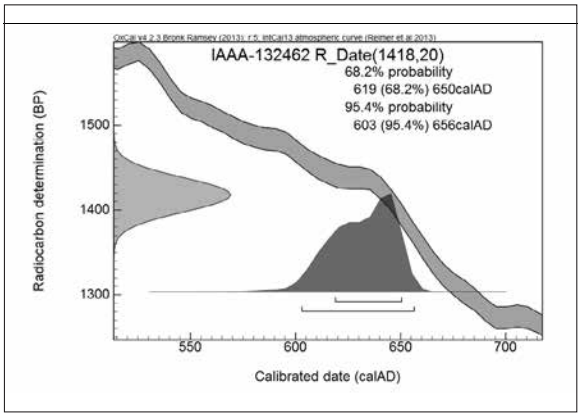
［参考値］

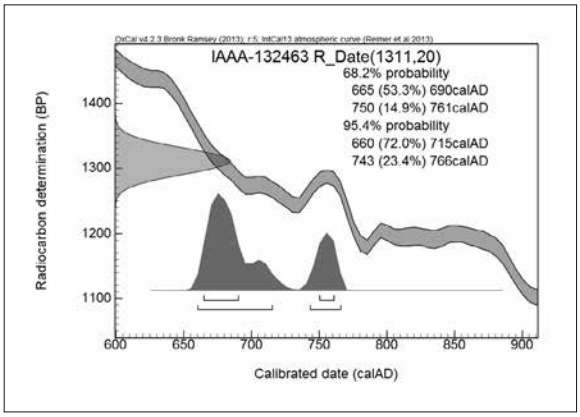


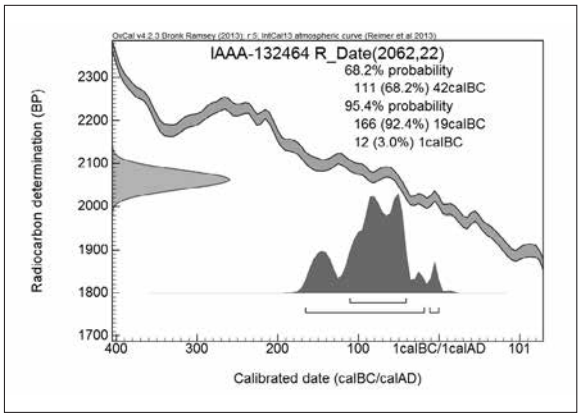










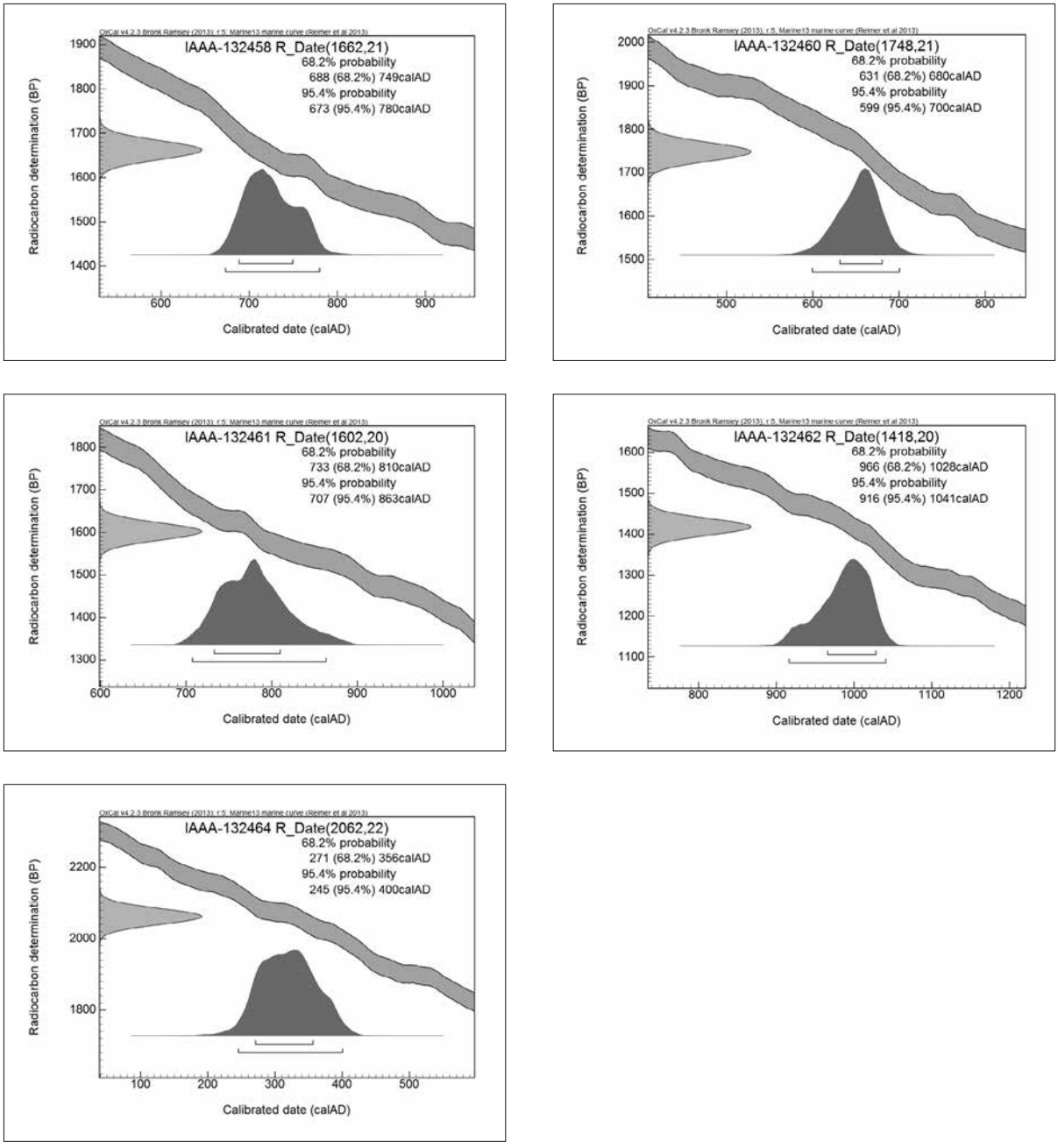


［図版１］IntCal13による暦年較正年代グラフ（参考）

表３　放射性炭素年代測定結果（暦年較正用^{14}C年代、Marine13による較正年代）

測定番号	暦年較正用（yrBP）	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
IAAA-132460	1,748 ± 21	631calAD – 680calAD（68.2%）	599calAD – 700calAD（95.4%）
IAAA-132461	1,602 ± 20	733calAD – 810calAD（68.2%）	707calAD – 863calAD（95.4%）
IAAA-132462	1,418 ± 20	966calAD – 1028calAD（68.2%）	916calAD – 1041calAD（95.4%）
IAAA-132464	2,062 ± 22	271calAD – 356calAD（68.2%）	245calAD – 400calAD（95.4%）

［参考値］



［図版２］Marine13による暦年較正年代グラフ（参考）

２　津軽石大森遺跡の出土骨貝類

（１）野外調査と室内整理時の仕分け

貝類が出土した地点は、８・16・35号竪穴建物跡である。８号は古代、16号は７世紀後半～８世紀前半、35号は平安時代である。

８号竪穴建物跡は、床面上で貝層を形成していた。野外調査時には一見しただけでも大量のイガイのなかに、アサリ、ウバガイ、フジツボ、ウニなどが目立った。貝層を土ごと一括で取り上げ、室内で２・３・４㎜と１㎜のフルイで水洗分別し、可能な限り種別分けした。

16号竪穴建物跡出土資料も貝層を形成していた。一見しただけもマガキが主体であった。建物北東部の堆積土上部に形成された貝層である。したがって16号竪穴建物跡は廃絶後に廃棄場として利用されたと考えられる。貝層の形成過程を追及する調査は行っておらず、土ごと一括で取り上げ、マガキの大型破片以外を２・３・４㎜のフルイで水洗分別し、可能な限り種別分けした。

35号竪穴建物跡からは、１点ウバガイと考えられる貝殻が出土した。

種別ごとに袋番号を付した。袋１～13・16a～ｆが８号竪穴建物跡、袋14a～cが16号竪穴建物跡、袋15が35号竪穴建物跡である。このうち、袋16はイガイをサイズごとに細分した。袋16a・16b・16cは容易にイガイと判別可能な資料を一括したので、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託せず、貝殻の左右の個体数をカウントした。残りの資料については、すべてパリノ・サーヴェイに鑑定を依頼した。

（米田）

（２）津軽石大森遺跡の出土骨貝類

パリノ・サーヴェイ株式会社

は　じ　め　に

津軽石大森遺跡（岩手県宮古市津軽石に所在）は、津軽石川の西岸の丘陵地上（標高約15～22m）に位置し、縄文時代前期の陥し穴、縄文時代中期の竪穴建物、古代（奈良時代～平安時代）の竪穴建物などが確認されている。

このうち、古代の竪穴建物では、建物廃絶後にゴミ穴として利用された場所から貝類が出土した。そこで、当時の食糧資源等に関する情報を得るために貝同定を実施する。

１）試　　料

試料は、８号竪穴建物跡の埋土下部～床面から採取された14試料（袋１～13，16）、16号竪穴建物跡の埋土上部から採取された１試料（袋14）、35号竪穴建物跡の埋土から採取された1試料（袋15）である。

８号竪穴建物跡で採取された貝類は、一括して取り上げられ、水洗選別によって9552.6gが採取され、形状が判断できるものを袋１～８a・８b・９～13に分類され、この残りが袋16a～fである。この内、袋16a・16b・16cは、今回分析の対象外であり、袋10と同一種とされる。また、分析を行った袋16e・16d・16fは、それぞれ２㎜、３㎜、４㎜で篩い別けされた試料である。SI16で採取された貝類は、土ごと一括で取り上げられ、洗浄後458.9gの貝類を回収とされ、袋14a・14b・14cおよび一括がある。35号竪穴建物跡は、単独で出土した貝類であり、１試料である。

2）分　析　方　法

袋１～15は、肉眼および実体顕微鏡で観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。また、一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合を行う。

一方、篩い別けによって得られた袋16d～fは、分析試料として乾燥重量100.0gを抽出する。粘土・シルト分を除去するため0.5㎜の篩いを用いて水洗を行い、自然乾燥させ、重量を計測する。0.5㎜の篩上に残った中から肉眼および実体顕微鏡等を用いて保存状態が良好なものを抽出して同定・計数する。その後、２㎜の篩を用いて篩別けを行い、２㎜以上のものに関しては貝類と礫・砂分等を区別し、２㎜以下のものは残渣として取り扱う。なお、貝類の生態等については、奥谷ほか（2000）、奥谷編著（2004）などを参考とする。

3）結　　果

今回確認された種類は、ウニ綱１種類（ウニ類）、多毛綱１種類（ゴカイ類）、腹足綱15種類（ヒメコザラ（ヒメコザラ型・ツボミガイ型）・クボガイ・エゾサンショウ・エゾタマキビ・タマキビ・チャツボ・タマツボ・エゾヨウラク・チヂミボラ・コウダカマツムシ・クロスジムシロ・エゾバイ科?・ホソオカチョウジガイ・コハクガイ科）、二枚貝綱７種類（イガイ・ムラサキインコ・マガキ・チリハギガイ・ウバガイ?・アサリ・マルスダレガイ目）、硬骨魚綱１種類（サケ科）である（表１）。同定結果を表２に示す。以下、試料ごとに記す。

＜袋１＞二枚貝綱の右殻である。ウバガイの可能性がある。保存状態は悪く、殻頂部付近が欠損し、細かなひび割れもみられることから被熱を受けている可能性がある。殻長98㎜前後と推定される。

＜袋２＞ほぼ完形するフジツボ類２点である。

＜袋３＞二枚貝綱のチリハギガイとアサリである。左右殻が確認される。

表１　検出分類群の一覧

棘皮動物門 Phylum Echinodermata
　ウニ綱 Class Echinoidea
　　ウニ類 Echinoidea
環形動物門 Annelida
　多毛綱 Polychaeta
　　ゴカイ類 Nereidiformia
軟体動物門 Phylum Mollusca
　腹足綱 Class Gastropoda
　　前鰓亜綱 Subclass Prosobranchia
　　カサガイ目 Order Patellogastropoda
　　エンスイカサガイ亜目 Suborder Acmaeoidea
　　ユキノカサガイ科 Family Lottiidae
　　ヒメコザラ(ヒメコザラ型) *Patelloida pygmaea* form *heroldi*
　　ヒメコザラ(ツボミガイ型) *Patelloida pygmaea* form *conulus*
　　古腹足目 Order Vetigastropoda
　　ニシキウズガイ科 Family Trochidae
　　クボガイ *Chlorostoma lischkei*
　　クボガイ/ヘソアキクボガイ/コシダカガンガラ
　　Chlostoma lischkei / C. turbinatum / Omphalius rusticus
　　サザエ科 Family Turbinidae
　　エゾサンショウ *Homalopoma amussitatum*
　　盤足目 Order Discopoda
　　タマキビ科 Family Littorinidae
　　エゾタマキビ *Littorina(Littorina) squalida*
　　タマキビ *Littorina(Littorina) brevicula*
　　チャツボ科 Family Barleeidae
　　チャツボ *Barleeia angustata*
　　リソツボ科 Family Rissoidae
　　タマツボ *Alvania*(*Alvania*) *concinna*
　　新腹足目 Order Neogastropoda
　　アッキガイ科 Family Muricidae
　　ヨウラクガイ亜科 Subfamily Ocenebrinae
　　エゾヨウラク *Ceratostoma inornatus endermonis*
　　チヂミボラ *Nucella lima*
　　フトコロガイ科 Family Columbellidae
　　コウダカマツムシ *Mitrella burchardi*
　　ムシロガイ科 Family Nassariidae
　　クロスジムシロ *Reticunassa fratercula*
　　エゾバイ科? Family Buccinidae?
　　属種不明 Gen. et. sp. indet.
　　有肺亜綱 Subclass Pulmonata
　　柄眼目 Order Sylommatophora
　　オカクチキレガイ科 Family Subulinidae
　　ホソオカチョウジガイ *Allopeas pyrgula*
　　コハクガイ科 Family Zonitidae
　　属種不明 Gen. et. sp. indet.
　二枚貝綱 Class Bivalvia
　　翼形亜綱 Subclass Pteriomophia
　　イガイ目 Order Mytiloida
　　イガイ科 Family Mytilidae
　　イガイ *Mytilus coruscus*
　　ムラサキインコ *Septifer virgatus*
　　カキ目 Order Ostreoida
　　カキ亜目 Suborder Ostreina
　　イタボガキ科 Family Ostreidae
　　マガキ *Crassostrea gigas*
　　異歯亜綱 Order Heterodonta
　　マルスダレガイ目 Order Veneroida
　　チリハギガイ科 Family Lasaeidae
　　チリハギガイ *Lasaea undulata*
　　バカガイ科 Family Mactridae
　　ウバガイ? *Pseudocardium sachalinensis*?
　　マルスダレガイ科 Family Veneridae
　　アサリ *Ruditapes philippinarum*
　　科属不明 Fam. et. gen. indet.
節足動物門 Phylum Arthropods
　蔓脚綱 Class Cirripedia
　　完胸目 Order Thoracica
　　フジツボ科 Family Balanus
　　属種不明 Gen. et. sp. indet.
脊椎動物門 Phylum Vertebrata
　硬骨魚綱 Class Osteichthyse
　　条鰭亜綱 Subclass Actinopterygii
　　サケ目 Order Salmoniformes
　　サケ科 Family Salmonidae
　　属種不明 Gen. et. sp. indet.

＜袋４＞腹足綱を集めたもので、マキビ・エゾヨウラク・チヂミボラ（およびチヂミボラの可能性がある破片）がみられる。
＜袋５＞ウニ類の殻である。なお、種実遺体のニワウルシが検出されているが、保存状態も良好であり、炭化しておらず、また渡来植物であることから現生の混入とみられる。
＜袋６＞腹足綱を集めたもので、チャツボ・タマツボ・コウダガマツムシ・クロスジムシロ（およびクロスジムシロの可能性がある破片）・ホソオカチョウジガイがみられる。
＜袋７＞微小な腹足綱を集めたもので、エゾサンショウ・タマキビ（およびタマキビの可能性がある破片）・コハクガイ科がみられる。
＜袋８a＞フジツボ類の破片である。
＜袋８b＞ゴカイ類の破片である。
＜袋９＞ウニ類の棘である。
＜袋10＞イガイを集めたものである。左右殻がみられる。
＜袋11＞ムラサキインコを集めたものである。左右殻がみられる。
＜袋12＞貝類の破片である。
＜袋13＞ヒメコザラである。ヒメコザラ型とツボミガイ型がみられる。
＜袋14＞14aがマガキ、14bがクボガイと腹足綱の破片、14cが貝類の破片、その他一括試料がマガキである。
＜袋15＞二枚貝綱の右殻である。保存状態が悪く、殻頂部が欠損し、一部灰黒色を呈する箇所がみられることから被熱を受けている可能性もある。外側表面が溶解するが、形状および大きさなどからウバガイの可能性がある。殻長推定90㎜前後とみられる。
＜袋16＞16dは、水洗後の乾燥重量77.3gである。ウニ類の棘、ゴカイ類の殻、ヒメコザラの可能性がある破片、タマキビ、チャツボ、タマツボ（およびタマツボの可能性がある破片）、コハクガイ科、腹足綱の破片、ムラサキインコの可能性がある破片、チリハギガイ、マルスダレガイ科、フジツボ類、サケ科の椎骨が検出される。サケ科の椎骨は、焼けた小さい破片である。また、種実遺体のヌカスゲ類が検出される。

16eは、水洗後の乾燥重量80.5gである。ウニ類の殻と棘、ゴカイ類の殻、エゾタマキビ、タマキビ、イガイの可能性がある破片、イガイ科、チリハギガイ、貝類破片、フジツボ類の殻などが検出される。貝類破片は、二枚貝綱が主体である。

16dは、水洗後の乾燥重量81.8gである。ウニ類の殻、チヂミボラ、エゾバイ科の可能性がある破片、コハクガイ科、腹足綱の破片、イガイの可能性がある破片、イガイ科、チリハギガイ、貝類破片、フジツボ類の殻などが検出される。貝類破片は、二枚貝綱が主体である。

４）考　　察

35号竪穴建物跡では、ウバガイの可能性がある破片が検出された。殻長約90㎜前後と推定される。一部灰黒色を呈する箇所がみられ被熱を受けている可能性もあることからも食料残滓と推定されるが、数量的にも少なく、また破片であるため詳細不明である。

16号竪穴建物跡では、マガキを主体として、クボガイを伴う。クボガイは、北海道南部以南～九州に分布し、潮間帯～水深20mの岩礁に棲息するとされる。マガキは、日本全土および東アジア全域に分布し、汽水性内湾の潮間帯から潮下帯の砂礫底・泥底に棲息するとされる。沿岸の岩礁域等で採取されたものと推測される。カキは産卵期を迎えると精巣と卵巣が非常に増大するため食用に向かない

とされており、マガキの場合は５～８月頃が産卵期とされている。よって、これらの時期を除く季節に採取された可能性がある。

８号竪穴建物跡は、検出個数・種類数も多く、16号竪穴建物跡で検出される種類とも異なることから、少なくとも16号竪穴建物跡と異なる利用状況を反映しているとみられる。検出された種類の中で、イガイ・ムラサキインコは、潮間帯から水深20～30mまでの岩礁地に棲息することから、そのような場所で採取されたと考えられる。また、ウバガイの可能性がある破片は、砂底域で採取されたとみられ、細かなひび割れもみられることから被熱を受けている可能性がある。一方、フジツボ類も岩礁などに固着して生活するが、検出されるものが比較的大型サイズであることから、意図的に採取され、可食されていた可能性もある。この他、食料として利用されていた種類では、ウニ類、硬骨魚綱のサケ科がみられた。サケ科は、被熱を受けた破片であるため計測することができないが、比較的大きな椎体とみられ、降海型のサケ科の仲間（サケ、サクラマスなど）と想像される。ただし、その採取に関しては、遺跡付近を流れる津軽石川を遡上する時か、海で生活している時かは断定できない。一方、ホソオカチョウジガイ・コハクガイ科は、陸産貝類であることから、遺構が埋積する過程において周辺から流れ込んだとみられる。また、腹足綱のヒメコザラ・エゾサンショウ・エゾタマキビ・タマキビ・チャツボ・タマツボ・エゾヨウラク・チヂミボラ・コウダカマツムシ・クロスジムシロ・エゾバイ科、二枚貝綱のチリハギガイなどは海産種であるが、小さいサイズであり、食料として採取したとは考えにくい。これらの中で比較的多く検出されるチリハギガイは、陸奥湾～琉球列島にかけて分布するとされ、イガイやムラサキインコの足糸の間に棲息していたものが剥がれ落ちたと考えられる。この点を考慮すると、先に示した種類は食料として採取した貝類に付着していた可能性もある。また、腹足綱の大半が岩礁地あるいは砂礫地に棲息する種類であることから、海浜で採取された砂・礫・岩石などとともに遺跡内に移動した可能性もある。また、ゴカイ類も食料資源としての利用でなく、同様の可能性がある。この点については、現時点で断定するには至らず、今後の課題として残したい。

引用文献

奥谷喬司・窪寺恒己・黒住耐二・斎藤寛・佐々木猛智・土田英治・土屋光太郎・長谷川和範・濱谷巌・速水格・堀成夫・松隈明彦　2000『日本近海産貝類図鑑』奥谷喬司編，東海大学出版会，1173p.

奥谷喬司編　2004『改訂新版　世界文化生物大図鑑　貝類』株式会社世界文化社，399p.

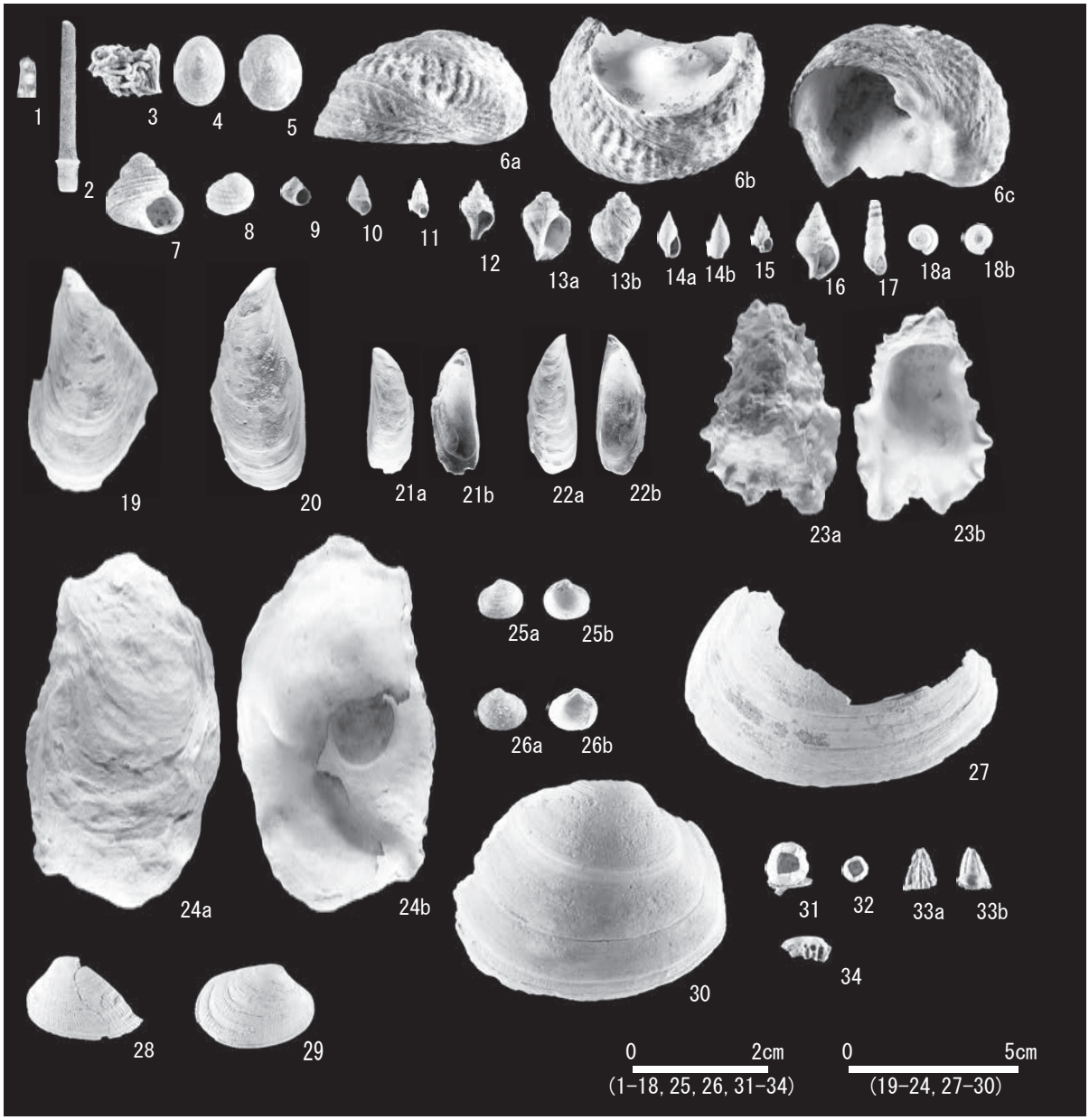
表２　同定結果（１）

遺構	出土位置	袋No.	重量(g)	種類		部位	左	右	状態等	数量	被熱	備考
8号竪穴	埋土下部～床面	1	32.5	二枚貝綱	ウバガイ?	殻		右	破片	1	○	
		2	1.3	顎脚綱	フジツボ類	殻			ほぼ完存	2		
		3	8.2	腹足綱	ヒメコザラ?	殻			破片	4		
				二枚貝綱	チリハギガイ	殻	左		ほぼ完存	48		
								右	ほぼ完存	57		
					アサリ	殻	左		破片	1		
								右	ほぼ完存	2		
								右	破片	1		
					二枚貝類	殻			破片	4		
				軟体動物門	貝	殻			破片	0.09ｇ		
		4	10.9	腹足綱	タマキビ	殻			ほぼ完存	1		
					エゾヨウラク	殻			ほぼ完存	3		
					チヂミボラ	殻			ほぼ完存	12		
					チヂミボラ?	殻			破損	1		
					腹足綱	殻			破片	3.16ｇ		
		5	0.2	ウニ綱	ウニ類	殻			破片	19		
				植物遺体	ニワウルシ	果実			ほぼ完存	1		現生の混入
				不明	不明	不明			破片	1		
		6	1.1	腹足綱	チャツボ	殻			ほぼ完存	9		
					タマツボ	殻			ほぼ完存	4		
					コウダガマツムシ	殻			ほぼ完存	4		
					クロスジムシロ	殻			ほぼ完存	8		
					クロスジムシロ?	殻			破片	2		
					ホソオカチョウジガイ	殻			ほぼ完存	4		
					腹足綱	殻			破片	2＋		
		7	1.2	腹足綱	エゾサンショウ	殻			ほぼ完存	3		
					タマキビ	殻			ほぼ完存	12		
									破片	9		
					タマキビ?	殻			破片	3		
					コハクガイ科	殻			ほぼ完存	3		
					腹足綱	殻			破片	6		
		8a	41.1	顎脚綱	フジツボ類	殻			破片	350＋		
				その他	残渣					0.22ｇ		
		8b	1.7	多毛綱	ゴカイ類	殻			破片	2＋		
		9	1	ウニ綱	ウニ類	棘			破片	106＋		
				その他	炭化物				破片	7＋		
		10	365.1	二枚貝綱	イガイ	殻	左		ほぼ完存	2		
							左		破片	25		
								右	ほぼ完存	9		
								右	破片	31		
									破片	135＋		
		11	123.9	二枚貝綱	ムラサキインコ	殻	左		ほぼ完存	20		
							左		破片	54		
								右	ほぼ完存	23		
								右	破片	36		
										72＋		
		12	0.3	軟体動物門	貝	殻			破片	1		
		13	0.1	腹足綱	ヒメコザラ(ヒメコザラ型)	殻			ほぼ完存	2		
									破片	2		
					ヒメコザラ(ツボミガイ型)	殻			ほぼ完存	2		
16号竪穴	埋土上部	14a	458.9	二枚貝綱	マガキ	殻	左		破片	1		
								右	ほぼ完存	1		
								右	破片	4		
		14b		腹足綱	クボガイ	殻			破片	1		
					クボガイ/ヘソアキクボガイ/コシダカガンガラ	殻			破片	2		
		14c		軟体動物門	貝	殻			破片	2		
		14		二枚貝綱	マガキ	殻	左		破片	1		3個が固着
							左		破片	6		
								右	破片	8		
									破片	12		
35号竪穴	埋土	15	31.5	二枚貝綱	ウバガイ?	殻		右	破片	1	○	

表2　同定結果（2）

遺構	出土位置	袋No.	重量(g)	種類		部位	左	右	状態等	数量	被熱	備考
8号竪穴	埋土下部～床面	16d篩 2mm	1110.2	ウニ綱	ウニ類	棘			破片	72		
				多毛綱	ゴカイ類	殻			破片	2		
				腹足綱	ヒメコザラ?	殻			破片	7		
					タマキビ	殻			破片	2		
					チャツボ	殻			ほぼ完存	11		
					タマツボ	殻			ほぼ完存	5		
					タマツボ?	殻			破片	2		
					コハクガイ科	殻			破片	6		
					腹足綱	殻			破片	5		
				二枚貝綱	ヒメイガイ?	殻	左		破片	3		
								右	破片	4		
					チリハギガイ	殻	左		ほぼ完存	155		
								右	ほぼ完存	190		
					マルスダレガイ科	殻	左		破片	1		
								右	破片	4		
				顎脚綱	フジツボ類	殻			破片	45		
				硬骨魚綱	サケ科	椎骨			破片	1	○	
				植物遺体	ヌカスゲ類	種子			ほぼ完存	1		
				その他	残渣					76.5 g		
		16e篩 3mm	672	ウニ綱	ウニ類	殻			破片	13		
						棘			破片	2		
				多毛綱	ゴカイ類	殻			破片	2		
				腹足綱	エゾタマキビ	殻			ほぼ完存	1		
					タマキビ	殻			ほぼ完存	3		
				二枚貝綱	イガイ?	殻	左		破片	6		
								右	破片	2		
					イガイ科	殻	左		破片	4		
								右	破片	5		
					チリハギガイ	殻	左		ほぼ完存	1		
								右	ほぼ完存	3		
				軟体動物門	貝	殻			破片	47.7 g		二枚貝綱主体
				顎脚綱	フジツボ類	殻			破片	121		
									破片	2	○	
				その他	礫・砂・炭化物等					17.04 g		
					残渣					14.36 g		
		16f篩 4mm	1188.3	ウニ綱	ウニ類	殻			破片	4		
				腹足綱	チヂミボラ	殻			ほぼ完存	1		
					エゾバイ科?	殻			破片	1		
					コハクガイ科	殻			ほぼ完存	1		
					腹足綱	殻			破片	1		
				二枚貝綱	イガイ?	殻	左		破片	3		
								右	破片	9		
					イガイ科	殻	左		破片	6		
								右	破片	6		
					チリハギガイ	殻	左		ほぼ完存	4		
								右	ほぼ完存	2		
				軟体動物門	貝	殻			破片	60.7 g		二枚貝綱主体
				顎脚綱	フジツボ類	殻			破片	24		
				その他	礫・砂・炭化物等					11.38 g		
					残渣					8.19 g		

図版１　出土骨・貝類



1. ウニ類殻（８号竪穴建物跡；5）
2. ウニ類棘（８号竪穴建物跡；9）
3. ゴカイ類殻（８号竪穴建物跡；8b）
4. ヒメコザラ（ヒメコザラ型）殻（８号竪穴建物跡；13）
5. ヒメコザラ（ツボミガイ型）殻（８号竪穴建物跡；13）
6. クボガイ殻（16号竪穴建物跡；14b）
7. エゾサンショウ殻（８号竪穴建物跡；7）
8. エゾタマキビ殻（８号竪穴建物跡；16e）
9. タマキビ殻（８号竪穴建物跡；7）
10. チャツボ殻（８号竪穴建物跡；6）
11. タマツボ殻（８号竪穴建物跡；6）
12. エゾヨウラク殻（８号竪穴建物跡；4）
13. チヂミボラ殻（８号竪穴建物跡；4）
14. コウダガマツムシ殻（８号竪穴建物跡；6）
15. クロスジムシロ殻（８号竪穴建物跡；6）
16. エゾバイ科?殻（８号竪穴建物跡；16f）
17. ホソオカチョウジガイ殻（８号竪穴建物跡；6）
18. コハクガイ科殻（８号竪穴建物跡；7）
19. イガイ左殻（８号竪穴建物跡；10）
20. イガイ右殻（８号竪穴建物跡；10）
21. ムラサキインコ左殻（８号竪穴建物跡；11）
22. ムラサキインコ右殻（８号竪穴建物跡；11）
23. マガキ左殻（16号竪穴建物跡；14a）
24. マガキ右殻（16号竪穴建物跡；14a）
25. チリハギガイ左殻（８号竪穴建物跡；3）
26. チリハギガイ右殻（８号竪穴建物跡；3）
27. ウバガイ?右殻（８号竪穴建物跡；1）
28. アサリ左殻（８号竪穴建物跡；3）
29. アサリ右殻（８号竪穴建物跡；3）
30. ウバガイ?右殻（35号竪穴建物跡；15）
31. フジツボ類殻（８号竪穴建物跡；2）
32. フジツボ類殻（８号竪穴建物跡；2）
33. フジツボ類殻（８号竪穴建物跡；8a）
34. サケ科椎骨（８号竪穴建物跡；16d）

３　津軽石大森遺跡から出土した炭化種実

吉川純子（古代の森研究舎）

（1）は　じ　め　に

津軽石大森遺跡は宮古市津軽石の宮古湾海岸線から約１㎞の南東向き斜面に立地している。本遺跡は奈良時代の竪穴建物跡30棟以上で構成され、比較的大きな集落であったと考えられている。そこで当時の植物質食料の利用状況を調査する目的で建物内堆積物の炭化種実分析をおこなった。今回分析に供した試料は12試料で、建物竈焼土９試料、竈脇の甕内堆積物が３試料である。堆積物は0.25㎜目の篩で水洗し、残渣から同定可能な植物部位を選別し実体顕微鏡で同定した。

（2）同　定　結　果

本遺跡の建物内堆積物から出土した種実同定結果を表１にまとめた。木本はオニグルミ、ウルシ属を出土し、栽培草本はイネ、オオムギ近似種のほか、栽培か否か不明であるがソラマメ属近似種を出土した。そのほかの草本はメヒシバ属、イネ科、シロザ近似種、マメ科、キジムシロ属を出土した。なお、炭化していないシロザ近似種、エノキグサ、シソ属も出土し、これらは炭化していない木本の芽も含めて後世の混入の可能性が高いとみられる。

以下に出土した炭化種実のうち特筆すべき分類群の形態記載をおこなう。

オオムギ近似種：出土した種子は長さ４㎜で現在の栽培オオムギと比較するとやや小さい。基部が細く頂部は丸い卵形で、片面中央に縦に深い溝がある。

不明穀類：激しく焼け膨れた円筒状で長さ４㎜程度が多い。形状からイネの可能性が高い。

ソラマメ属近似種：完形種子が長さ3.2㎜で種子の厚さがあり球形から楕円形で、２個は種子長の半分程度の長さのへそが片面中央に残存し、へその幅は比較的広い。へそ上面に膜はなくむき出しの状態であった。半分に割れた種子があり、内面には僅かなくぼみが認められるのみである。以上の特徴で東北北部に分布することからソラマメ属の野生種に近似すると同定したが、本遺跡で出土したものはスズメノエンドウなどのようなほぼ球形のほかに、同様の特徴を持つ楕円形の種子もみられる。ダイズ属も検討の余地があるが本遺跡で出土した種子はかなり小さい。

（3）考　　察

本遺跡では利用植物として、竈焼土２試料からイネを、１試料からオオムギ近似種を出土し、甕内堆積物２試料からオニグルミを出土した。いずれも堆積物中の含有個数はかなり少ないがほかの雑穀などの出土は認められず、情報量は少ないがイネを主に利用していた可能性がある。本遺跡の竈焼土試料は炭化材破片の含有もかなり少なく、炭化物自体が少数しか確認できなかった。おそらく住居使用時は竈を十分に燃焼させ清掃して用いており、残存物が少ないまま住居廃絶に及んだことが考えられる。近隣集落の出土例では、平安時代ではあるが本遺跡から北に約10㎞に位置する隠里Ⅲ遺跡や隠里Ⅷ遺跡で同じように穀類の出土が全体的に少なく、イネとクリ、オニグルミを主体として出土しており、木戸井内Ⅳ遺跡ではイネよりもオオムギ、コムギ、アワ、キビ、ヒエの雑穀がやや多い傾向にあり、松山大地遺跡ではイネ主体であるがオオムギ、アワ、ヒエも随伴し、住居毎にも違いが見られる。立地条件や時期が同じ集落毎の出土傾向の違いの要因として、住居群である木戸井内の場合に雑

穀を伴い、鍛造工房集落である隠里では雑穀依存が低い、との推論をたてたが、本遺跡において鍛冶跡などは確認されていないため、時期が異なるためとも考えられる。また、本遺跡の竈脇甕内のみオニグルミの出土があるが、建物廃絶後から甕埋積までの期間が不明であるため、建物使用時の植物利用を反映している可能性は低いと考えられる。

表１　津軽石大森遺跡出土炭化種実

	試料番号	1	2	3	4	5	6
	時期	奈良前半	奈良	奈良	奈良	奈良	奈良
	遺構	2号竪穴	2号竪穴	2号竪穴	22号竪穴	22号竪穴	22号竪穴
	地点	1号竈焼土	2号竈焼土	3号竈焼土	1号竈焼土	2号竈焼土	竈脇甕No.6内土壌
分類群	部位／堆積物重量(g)	2000	1500	800	2700	2000	1600
オニグルミ	炭化内果皮小破片	-	-	-	-	-	11
ウルシ属	炭化内果皮	-	-	-	-	-	-
木本	芽	2	-	-	-	-	-
イネ	炭化胚乳完形	-	-	-	-	-	-
	炭化胚乳破片	-	-	-	-	-	-
	炭化不熟胚乳	-	-	-	-	-	-
オオムギ近似種	炭化種子	-	-	-	-	-	-
メヒシバ属	炭化種子	-	-	-	1	-	-
イネ科	炭化種子	-	-	-	1	-	-
不明穀類	炭化種子焼け膨れ	1	-	-	5	3	-
シロザ近似種	炭化種子半分	-	-	-	-	-	-
	未炭化種子	-	17	-	-	-	-
キジムシロ属	炭化核	-	-	-	1	-	-
ソラマメ属近似種	炭化種子	-	-	-	-	-	-
	炭化種子半分	-	-	-	-	-	-
マメ科	炭化種子焼け膨れ	-	-	-	-	-	-
エノキグサ	未炭化種子	-	4	-	-	-	-
シソ属	未炭化果実	-	-	-	1	-	-
核菌綱	菌核	-	-	-	-	-	-
不明	炭化種実破片	-	-	-	1	-	1
不明	炭化塊	-	-	6	-	-	-

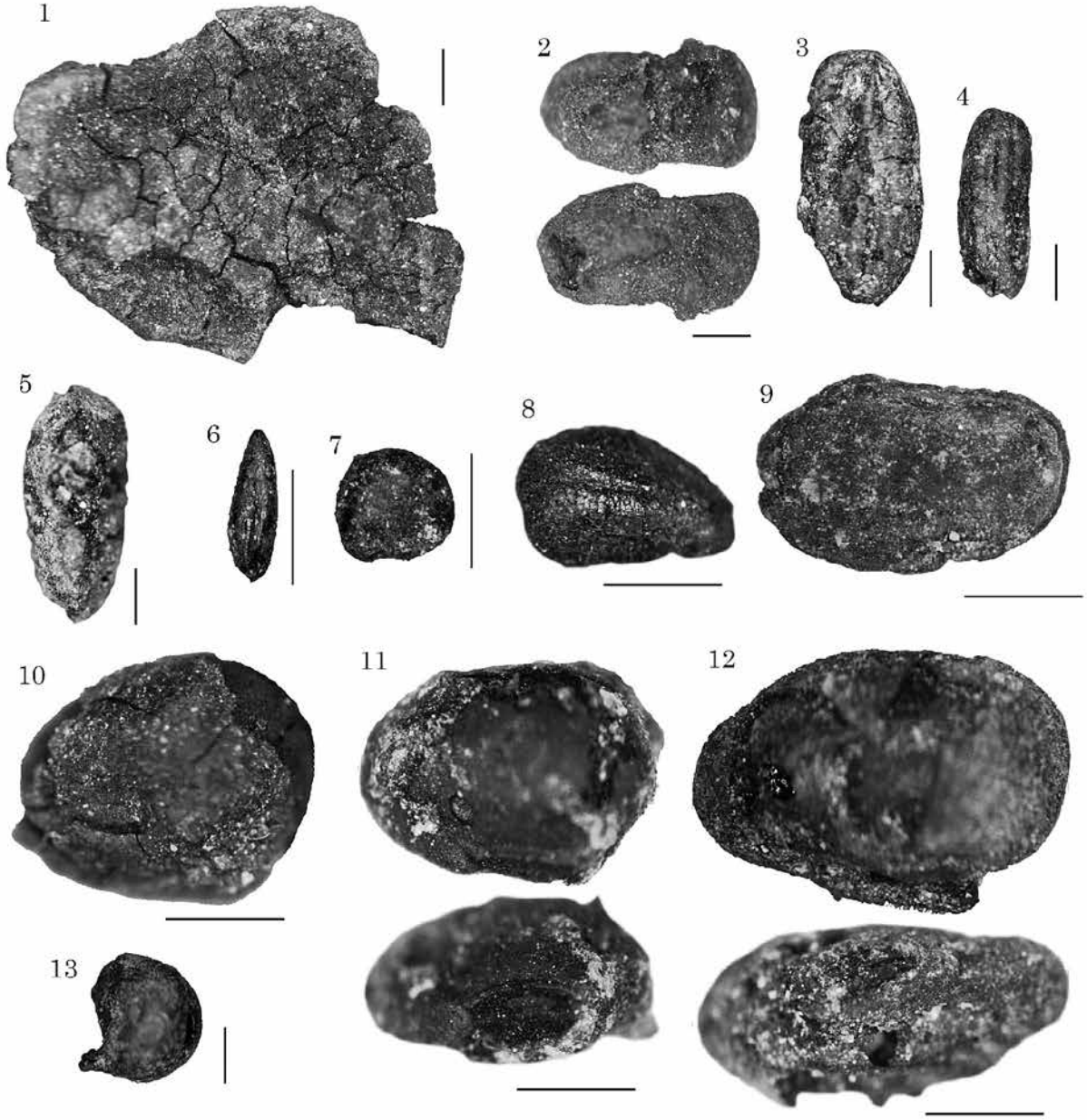
	試料番号	7	8	9	10	11	12
	時期	奈良	奈良	奈良	奈良	奈良	奈良
	遺構	22号竪穴	22号竪穴	23号竪穴	29号竪穴	30号竪穴	33号竪穴
	地点	竈脇甕No.7内土壌	竈脇甕No.8内土壌	竈焼土	竈焼土	竈焼土	竈焼土
分類群	部位／堆積物重量(g)	600	2000	900	2000	3500	400
オニグルミ	炭化内果皮小破片	-	18	-	-	-	-
ウルシ属	炭化内果皮	-	1	-	-	-	-
木本	芽	-	-	-	-	-	-
イネ	炭化胚乳完形	-	-	-	-	1	5
	炭化胚乳破片	-	-	-	-	-	4
	炭化不熟胚乳	-	-	-	-	1	-
オオムギ近似種	炭化種子	-	-	-	-	1	-
メヒシバ属	炭化種子	-	-	-	-	-	-
イネ科	炭化種子	-	-	-	-	-	-
不明穀類	炭化種子焼け膨れ	-	-	1	-	-	11
シロザ近似種	炭化種子半分	-	-	-	1	-	-
	未炭化種子	-	-	-	-	-	-
キジムシロ属	炭化核	-	-	-	-	-	-
ソラマメ属近似種	炭化種子	-	1	-	-	4	-
	炭化種子半分	-	-	-	-	2	-
マメ科	炭化種子焼け膨れ	2	-	-	-	2	-
エノキグサ	未炭化種子	-	-	-	-	-	-
シソ属	未炭化果実	-	-	-	-	-	-
核菌綱	菌核	-	-	1	-	-	-
不明	炭化種実破片	2	-	-	1	2	1
不明	炭化塊	-	1	-	3	-	-

引用文献

吉川純子．隠里Ⅷ遺跡より出土した種実.

吉川純子．木戸井内Ⅳ遺跡・隠里Ⅲ遺跡より出土した種実.

吉川純子．松山大地田沢遺跡より出土した種実



1．オニグルミ、炭化内果皮破片（22号竪穴竈脇甕No.８）２．ウルシ属、炭化内果皮（22号竪穴竈脇甕No.８）３．イネ、炭化胚乳（30号竪穴竈焼土）４．イネ、炭化不熟胚乳（30号竪穴竈焼土）５．オオムギ近似種、炭化種子（30号竪穴竈焼土）６．メヒシバ属、炭化種子（22号竪穴-1号竈焼土）７．シロザ近似種、炭化種子（29号竪穴竈焼土）８．キジムシロ属、炭化核（22号竪穴-1号竈焼土）９．ソラマメ属近似種、炭化種子半分内面（30号竪穴竈焼土）10．ソラマメ属近似種、炭化種子（22号竪穴竈脇甕No.８）11．ソラマメ属近似種、炭化種子（30号竪穴竈焼土）12．ソラマメ属近似種、炭化種子（30号竪穴竈焼土）13．不明炭化種実（29号竪穴竈焼土）　スケールは１㎜

図版１　津軽石大森遺跡から出土した炭化種実

4　鉄製品保存処理及び鉄製品分析

JFEテクノリサーチ株式会社
ソリューション本部（千葉）

岩手県埋蔵文化財センターのご依頼による表記出土品の7点の保存処理及び３点の分析業務が完了し、ここにその経緯について報告する。

（1）受託内容と経過概略説明

鉄製品７点について保存処理と３点について化学分析をしたいとのご要望があり以下の手順で行った。

①外観写真撮影（処理前）
②表面に付着していた泥と錆落とし
③純水浸漬による脱塩処理
④化学分析試料の採取
⑤採取部への充填、破断部の接合、及び全般の補色
⑥外観撮影（処理後）

（2）事　前　調　査

1）外観写真撮影

外観写真はmm単位まであるスケールを同時写しこみ撮影した。

撮影装置　　ニコンF601マイクロニッコール55mm

（3）保　存　処　理

1）クリーニング

エアブラシ・筆等を用いて外観写真を参考にしながら、付着土砂・錆瘤・汚れなどの除去を行い、ミニルーターによる錆落としを行なった。

2）脱塩処理・乾燥処理

脱塩の基本操作は、遺物総重量の5倍量の純水に浸漬させながら、室温下で、定期的に純水を交換し、吸光光度計で脱塩処理水の塩化物イオン（Ｃｌ$^-$）濃度の測定を行い脱塩の進行を確認した。

吸光光度法；(吸光光度計；島津製作所ＵＶ-160Ａ）検液約100mlをろ過し、ろ液20mlを100mlメスフラスコ２個に分液した。１個はブランク対象液用とした。残った方に（１+２）硝酸、２％硝酸銀溶液１mlを加え一定容量とし、15分放置後、直ちに波長390nmにおける吸光度を測定し、塩化物イオン（Ｃｌ$^-$）濃度を求めた。

3）樹脂含浸

アクリル樹脂（パラロイドB－72）の15％キシレン溶液を用い真空含浸装置内で30mmHgに減圧して樹脂含浸させた。

4）部分彩色・補彩・保存処理

樹脂含浸後、アクリル顔料を用い微小な樹脂補填部の古色（色合わせ）および艶消し行なった後、

乾燥器にて60℃で乾燥し、発錆の有無、仕上がり状況の不具合等の確認を行なった。その後、シリカゲルと共にハイパックに収め、発送に備えた。

（4）保存処理遺物の外観撮影

外観写真は㎜単位まであるスケールを同時写しこみ撮影した。
撮影装置　　ニコンF601マイクロニッコール55㎜

（5）鉄製品の化学分析方法と結果

1）化学分析方法
化学成分分析は鉄鋼に関するＪＩＳ分析法に準じて行っている。
鉄製品中成分の化学分析は、13成分（炭素C、シリコンSi、マンガンMn、リンP、イオウS、銅Cu、ニッケルNi、コバルトCo、アルミニウムAl、ヴァナジウムV、チタンTi、カルシウムCa、マグネシウムMg）を化学分析している。
2）化学分析結果
＜試料No.4（本書掲載No.426）鎌＞　メタルの化学成分分析結果を表2に示す。Cは0.34％で亜共析鋼組織の領域にあり、Siは0.11％、Alは0.041％、Tiは0.057％、Vは0.002％と少なく滓などの混入はほとんどない。Mnは0.003％、Cuは0.021％である。Pは0.037％、Sは0.038％である。以上から本試料は以上から本試料はCが0.34％の亜共析鋼組織の鏃と見られる。

＜試料No.5（本書掲載No.417）短刀＞　メタルの化学成分分析結果を表2に示す。Cは0.61％で亜共析鋼組織の領域にあり、Siは0.23％、Alは0.10％、Tiは0.026％、Vは0.001％と少なく滓などの混入はほとんどない。Mnは0.001％、Cuは0.015％である。Pは0.047％、Sは0.009％である。以上から本試料は以上から本試料はCが0.61％の亜共析鋼組織の短刀と見られる。

＜試料No.7（本書掲載No.416）短刀＞メタルの化学成分分析結果を表2に示す。Cは0.66％で亜共析鋼組織の領域にあり、Siは0.14％、Alは0.060％、Tiは0.010％、Vは0.003％と少なく滓などの混入はほとんどない。Mnは0.003％、Cuは0.003％である。Pは0.087％、Sは0.012％である。以上から本試料は以上から本試料はCが0.66％の亜共析鋼組織の短刀と見られる。

（6）終　わ　り　に

1）本来、樹脂含浸処理を行っても樹脂は残存金属の中までは浸透せず、錆化部との間に樹脂被膜を形成して空気中の酸素による酸化・発錆を阻止して遅らせる目的で実施するものであり、樹脂含浸処理を完全に行ったとしても、その後の保管状況（例えば、温度差の激しいところに展示・保管したり、湿気の多い室内での観察などの繰り返し）によって、遺物そのものが膨張・収縮を繰り返して厳密な意味での気密性が損なわれ、透過性の強い水分子や腐食性のあるガス等により再び錆化が始まることも十分注意しなければならない。
2）折損部を接合補修した場合、今回は小型遺物であったため比較的に軽作業ですんだが、搬送・移動の際は十分な注意が肝要である。

表１　調査試料と調査項目

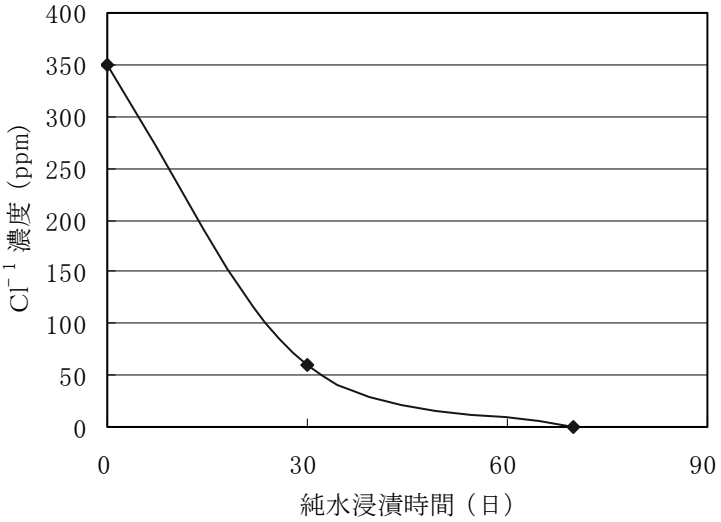
掲載No.	保存処理No.	器種	出土地点	層位	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	保存処理	化学分析
425	1	鏃	SI02	床No.5	13.1	0.55	0.60	13.94	○	－
420	2	刀子	SI08/	埋土	12.9	1.30	0.30	19.85	○	－
427	3	環状製品	SI16	埋土	2.4	2.1	0.90	4.35	○	－
426	4	鎌	SI22	埋土上部	14.55	3.55	1.10	39.83	○	○
417	5	短刀	SI23	埋土	25.70	2.50	0.35	74.93	○	○
422	6	刀子	SI28	埋土	10.00	1.20	0.40	12.08	○	－
416	7	短刀	ⅡB7b	Ⅳ層	26.45	3.00	0.40	159.58	○	○

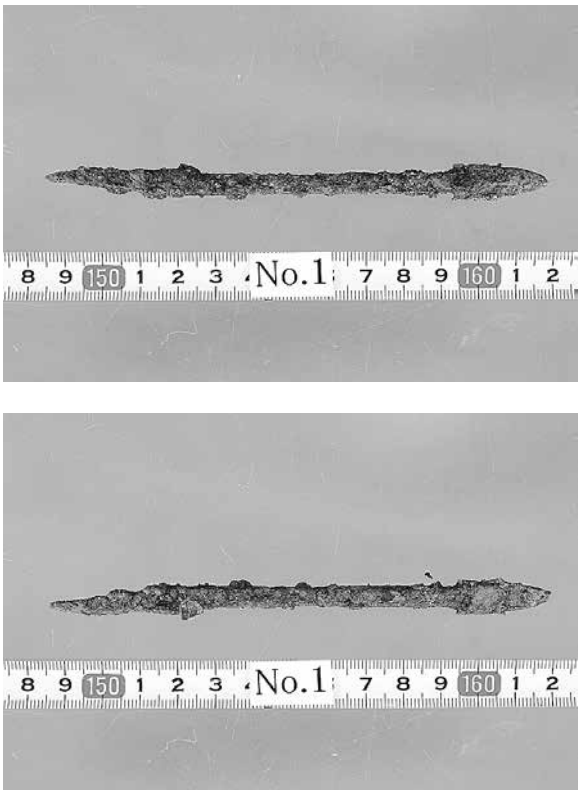
表２　メタルの化学成分分析結果（%）

掲載No.	試料No.	C	Si	Mn	P	S	Cu	Ni	Co	Al	V	Ti	Ca	Mg
426	4	0.34	0.11	0.003	0.037	0.038	0.021	0.049	0.11	0.041	0.002	0.057	0.014	0.011
417	5	0.61	0.23	0.001	0.047	0.009	0.015	0.026	0.070	0.10	0.001	0.026	0.015	0.008
416	7	0.66	0.14	0.003	0.087	0.012	0.003	0.010	0.017	0.060	0.003	0.010	0.013	0.006

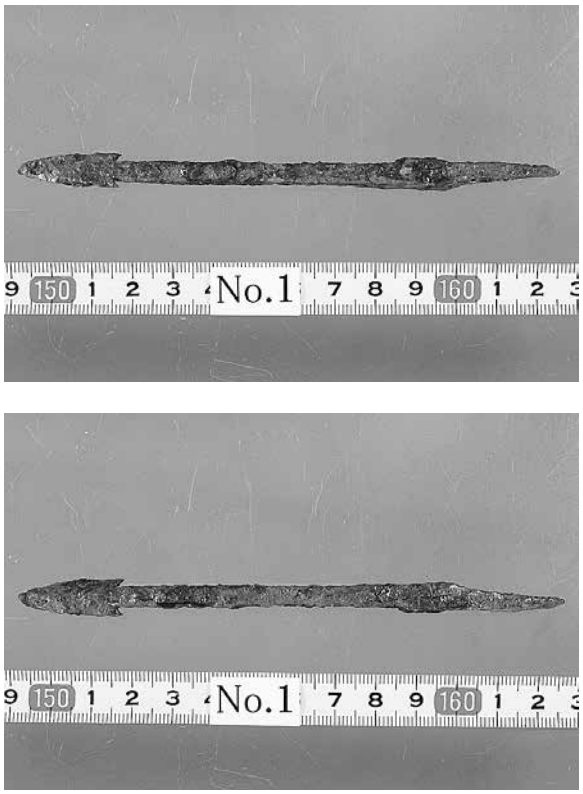
表３　塩素イオン濃度の測定結果

純水浸漬日数	塩素イオン
（日）	mg/l
0	350
30	60
70	0.9

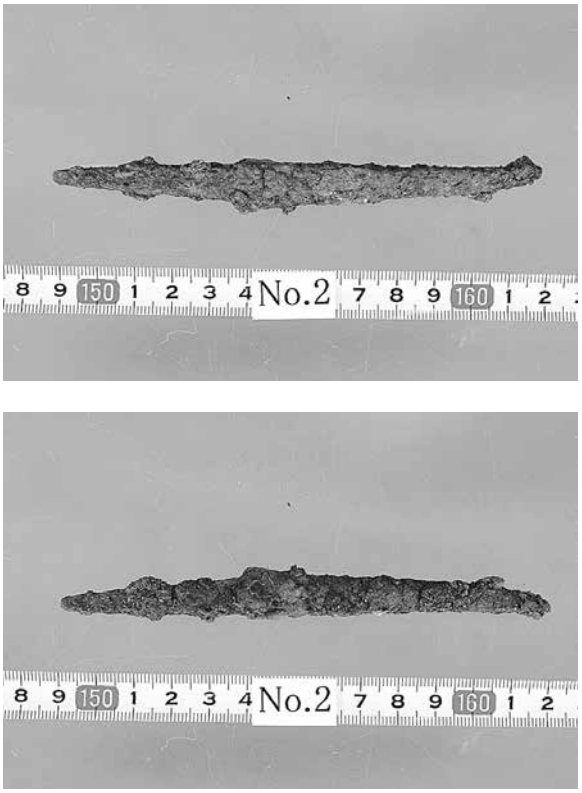




処理前外観写真　No.1（掲載425）

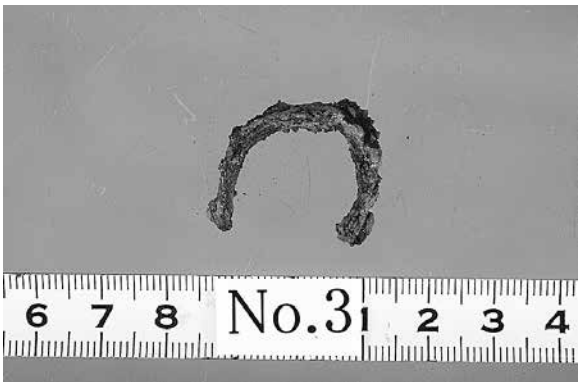


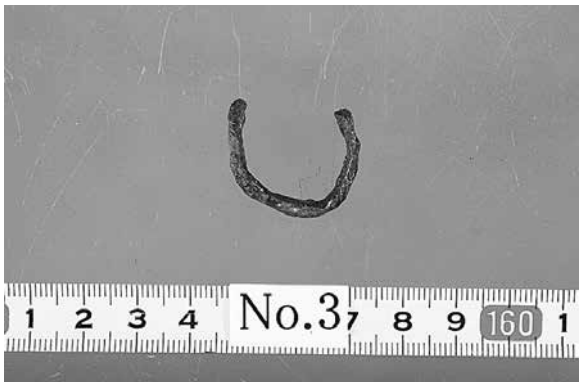
処理後外観写真　No.1（掲載425）

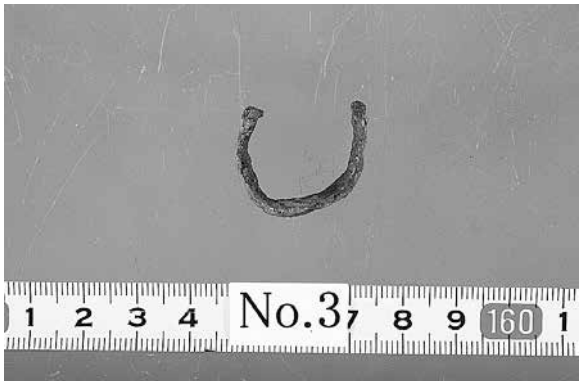


処理前外観写真　No.2（掲載420）

処理後外観写真　No.2（掲載420）

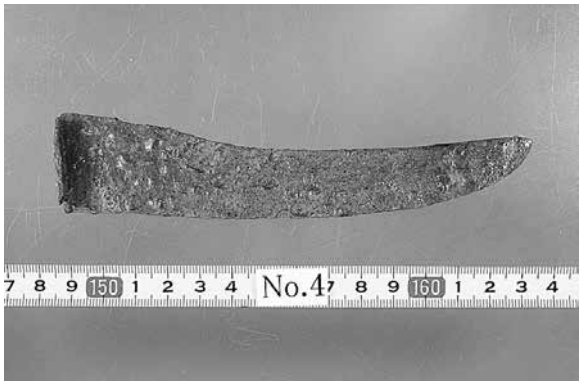






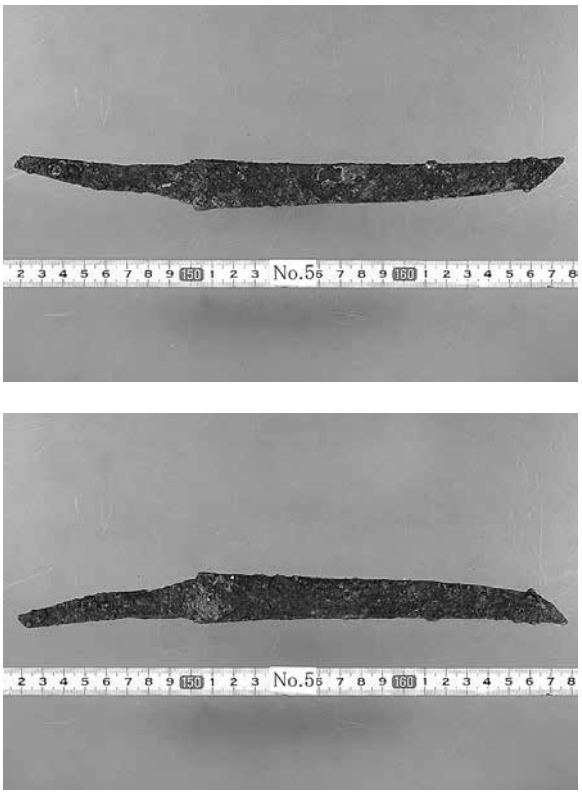
処理前外観写真　No.3（掲載427）

処理後外観写真　No.3（掲載427）

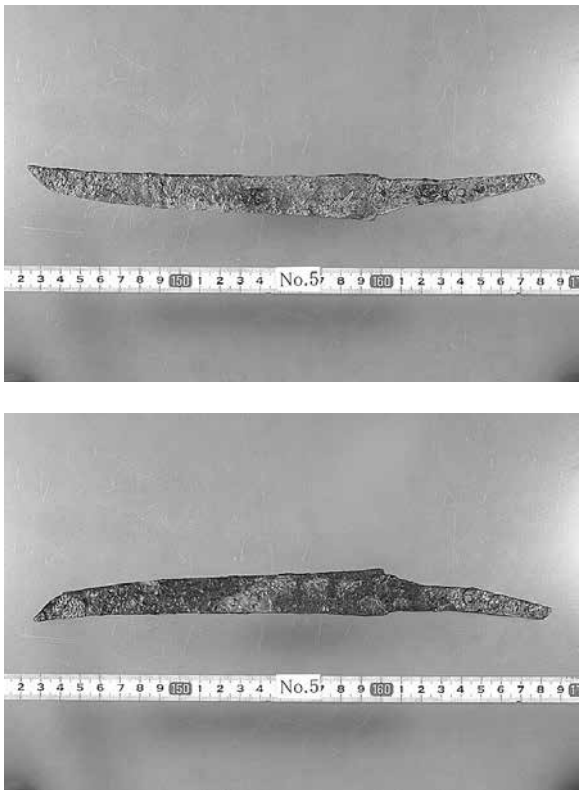


処理前外観写真　No.4（掲載426）

処理後外観写真　No.4（掲載426）

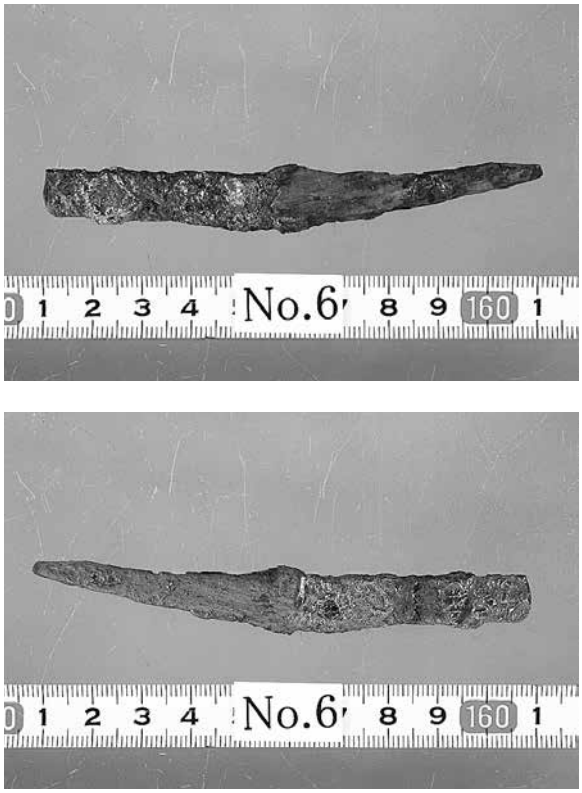


処理前外観写真　No.5（掲載417）



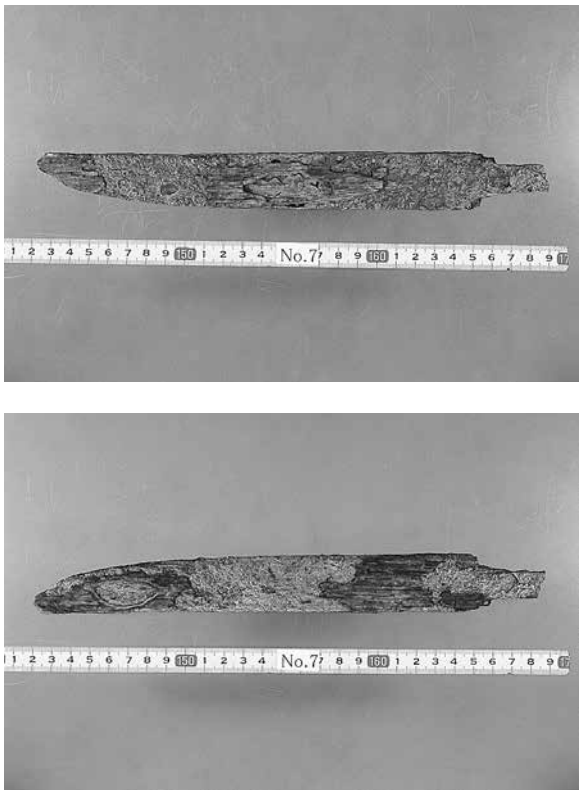
処理後外観写真　No.5（掲載417）

処理前外観写真　No.6（掲載422）

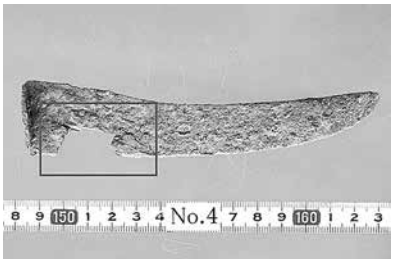


処理後外観写真　No.6（掲載422）

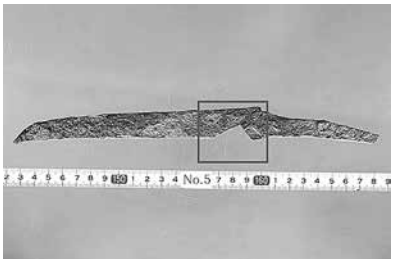
処理前外観写真　No.7（掲載416）



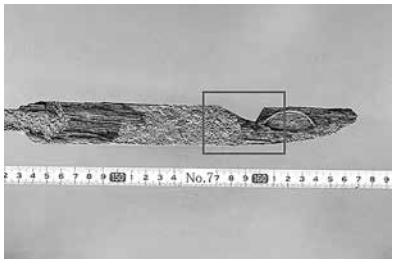
処理後外観写真　No.7（掲載416）



試料採取位置　No.4（掲載426）



試料採取位置　No.5（掲載417）



試料採取位置　No.7（掲載416）

5　分析結果所見

（1）年代測定値について

年代測定の目的は、相対年代とのクロスチェックである。本遺跡では複数の重複関係をもつ竪穴建物の調査を行うことができた。通常、２棟の重複だけでは測定値の差が顕著にみられない可能性があるが、３棟以上の場合は、何らかの変化があるのではないかと考えた。結果、７点の測定値を得た。このうち、沿岸部に顕著に表れる海洋リザーバー効果を受けたと考えられる資料の補正も行っていただいた。

22号竪穴建物資料３点は出土土器の内外面付着コゲを採取した。最も確認したかったのは205の椀と210の段状沈線をもつ甕の年代である。これまで発表されている編年で意見が割れることが多く、年代幅が広いと考えられていた。結果は、205が４～５世紀、210が１σで7世紀後半、213の甕が海洋リザーバー効果の補正値で7世紀代となった。205は想定外の数値であったが、210の7世紀後半については竪穴建物の重複関係と整合的である。205については海洋リザーバー効果の補正をしていない。

24号竪穴建物跡床面の232の甕内面コゲと、床面出土木炭でクロスチェックを行った。232は海洋リザーバー効果補正値１σで８世紀中頃～９世紀初頭、木炭は7世紀後半～末と８世紀中頃～後半の年代を得ている。24号竪穴建物跡は23号竪穴建物よりも古い。測定値と遺構の重複関係からは22号（７世紀後半）→24号（７世紀後半～８世紀）→23号竪穴建物跡の順番と言える。

（2）出土骨貝類について

骨と貝類は建物廃絶後に廃棄場として利用された竪穴建物跡から出土した。８・16・35号竪穴建物跡出土資料である。骨ではサケ科椎骨が抽出されたことが大きな成果である。現在の津軽石川は岩手県内でもサケの遡上する川として知名度が高く、流域にはサケの稚魚の孵化施設もある。サケ資源が古代においても活用されていた物的証拠である。

貝類は、イガイ、ムラサキインコ、マガキなど岩礁に生息する個体が多い。海浜の広がる津軽石川河口東側の赤前地区でみられるハマグリ、アサリなどは、本遺跡では低比率である。

（3）出土炭化種実について

宮古市域における穀物利用については、木戸井内Ⅳ遺跡と松山大地遺跡の成果から、奈良時代集落では雑穀類主体で、平安時代になるとコメが増加すると判明している。本遺跡は古墳時代後期後半～奈良時代を主体とする遺跡である。同定結果は奈良時代にも食糧としてイネが利用されたことが確認できた。ただし、多くの建物で主体的に利用していると言い切れる状況にはなく、どちらかと言えば、オニグルミ、雑穀類などが主体であると判明し、木戸井内Ⅳ、隠里、松山大地の成果と調和的と判断できる。

（4）出土鉄製品の分析について

分析目的は、微量元素分析による生産地同定を可能とするためのデータ蓄積にある。今回は鏃１点、短刀２点の一部を切除して分析した。結果は、鏃は器体が薄すぎて測定不能、短刀は２点とも測定いただいた。宮古地域は数多くの製鉄関連遺跡があり今後も奈良時代鉄製品の出土が見込まれる。

（米田）

Ⅴ 総　　括

1　調査成果概要

調査区は3,455㎡である。検出遺構は、竪穴建物跡37棟、陥し穴状土坑６基、土坑３基、柱穴14個である。竪穴建物跡は縄文時代早期末～前期初頭１棟、縄文時代中期前葉１棟、古墳時代後期後半～奈良時代33棟、平安時代２棟である。陥し穴状土坑は縄文時代、土坑は奈良時代１基と時期不明２基、柱穴は時期不明である。

出土遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、剥片石器、礫石器、土製品、鉄製品、鉄滓、陶磁器、琥珀片、炭化種子である。

2　遺　　構

（1）竪穴建物跡

ａ）縄文時代

20号竪穴建物跡（早期末～前期初頭）と18号竪穴建物跡（縄文時代中期前葉）の２棟である。20号竪穴建物跡は、早期～前期に特徴的な平面長方形の建物跡である。堆積土上部にTo-Cuが堆積していた。近年のTo-Cu降下年代は、暦年較正年代1σで5993-6,206calBPが報告されており（工藤・佐々木2007）、概ね約6,000年前の噴火イベントと認識されて議論が進んでいる。津軽石地区周辺でのTo-Cu降下以前の竪穴建物の調査事例は、八木沢地区の八木沢野来遺跡、重茂半島の千鶏遺跡がある。いずれも平面は長方形で、本遺跡の20号竪穴建物跡と類似の特徴を有する。20号竪穴建物跡と近い堆積状況は、３号陥し穴状土坑でも確認された。土地利用のあり方として前期前半までは、居住施設と罠施設が混在することが確認できた。この２つの遺構を完全に同時期とみることできないが、少なくとも当地域において前期前半までは、一定の場所に集落を固定して連綿と継続していく体制ではなく、緩やかな地域定着のなかで、猟場となるような場所にも小規模な集落を断続的に営む時代であり、集落、猟場を使い分ける段階には至っていない。

18号竪穴建物跡と同時期とそれ以後の遺物包含層が、谷状地形範囲に形成されていた。この縄文遺物包含層は、古代の竪穴建物建設に伴い削平が進んだと考えられる。中期前葉～中葉に該当する集落遺跡は、津軽石川東岸の赤前Ⅲ遺跡がある。

ｂ）古墳時代後期後半～奈良時代

32棟が該当する。年代では７世紀後半～８世紀にあたる。出土遺物の特徴から7世紀後半～８世紀前半に栄えた集落で、８世紀後半になると竪穴建物数は減少する。

＜集落の特徴＞

①鉄生産を行っていない。

②建物床面積の規模に差がある。

③大多数のカマドが北壁ないしは北西壁中央に設置され、集落内での斉一性がある。

①については、鍛冶作業の痕跡もなかった。宮古・山田地域は風化花崗岩帯に含まれる豊富な砂鉄

を原料とする製鉄業が平安時代以降に盛んとなる。山田町間木戸Ⅴ遺跡において、８世紀の遺物包含層よりも下位の地層から鉄滓が出土したことから、当該地域での製鉄開始時期が８世紀後半以前に遡る可能性が指摘されている（岩埋文2015）。宮古・山田地域での初期製鉄業が集落と隔絶した場所で行われている可能性も考えられるが、本遺跡では、集落内で製錬作業のみならず鍛冶作業も行っていないことは注意すべき点で、奈良時代までは、集落内で鉄製品の再加工を想定させる遺物（鉄床石、坩堝、鍛冶滓、鍛造剥片等）も出土していない。辛うじて砥石が竪穴建物床面から散見される程度である。この成果からは、製鉄業そのものを受容していない時期の集落であることと、鉄製品自体が非在地系の器材であり、希少品であったことが想定される。

②については、竪穴建物床面規模による比較を後述する。

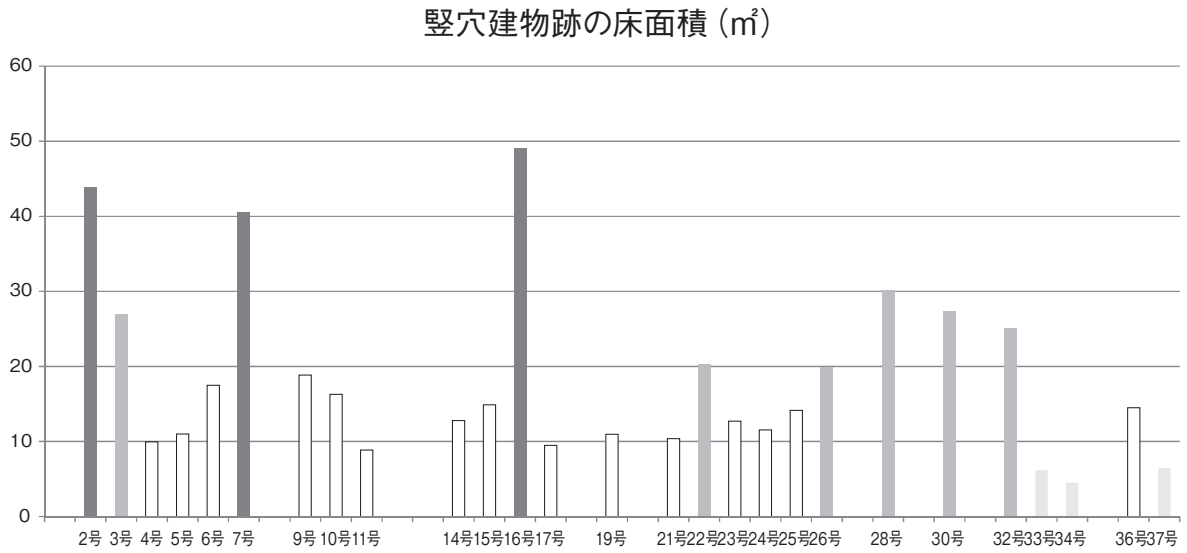
③については、カマド設置壁と建物壁長の特徴を後述する。

＜規模による比較＞

第Ⅲ章では、各竪穴建物の規模を大型・中型・小型の３類型に分けて記載してきた。ここでは改めて床面積による分類を行う。なお、これには第Ⅲ章の記載では不明としたものも推定可能な範囲で類型化して含めてある。第101図により、床面積①7.5㎡以下、②10㎡以上、③20㎡以上、④40㎡以上の４類型を抽出した。②のサイズが最多となることから、本遺跡の標準的な古代竪穴建物はこのクラスと言える。④の大型竪穴建物からは、小型竪穴建物と比べても出土する遺物の種類・量に特徴がみられた。④に該当する２・16号竪穴建物跡からは、須恵器坏や琥珀などの希少品のほか、食膳具とされる土師器小型坏と高坏が豊富に出土した。特定の遺物が集中するということは、その建物に暮らす構成人数が多いか、あるいは来客用に準備していた可能性が考えられる。建物規模は、階級差、季節差、時期差などを表す可能性があるが、④の大型竪穴建物は棟数も少ないうえ、居住に比重を置いた建物ではなく、集会場としての機能も想定される。

＜カマド設置壁と建物壁長＞

第Ⅲ章では、カマド設置位置と竪穴建物長軸壁か短軸壁かを表に記載してきた。竪穴建物跡は平面形状方形を基調とするが、正方形となることは稀で、僅かながらも長軸と短軸からなる長方形が一般的である。２・16・26・28・30号竪穴建物跡など主柱穴６個以上の竪穴建物に顕著であるが、竪穴建物短軸壁の中央にカマドが設置されている。これらは遺物量も多く、概ね７世紀後半～８世紀前半の年代と考えられる。一方、明確な平安時代遺物が出土した35号竪穴建物跡と、平安時代的なカマド設置箇所の11号竪穴建物跡は建物長軸壁にカマドが設置されている。奈良時代から平安時代にかけて竪穴建物内部の空間活用に違いが生じ、漸移的変化をもたらした可能性がある。建物内部での調理場空間の変化とも解釈できる。カマドの設置される竪穴建物は、古い時代には壁の中央部に位置する。あたかもカマドを中心に建物の設計がなされたかのごとくである。しかし、時代が下るにつれ、設置壁の中央よりも若干コーナーに近づき、10世紀代になると竪穴建物も小型が主流になり、コーナーに設置される事例も増加する。この現象を調理空間の認識変化と捉え、調理空間の重要性が、時代が下るにつれて低下するとの論考（外山2000）がある。また、カマド廃絶時の祭祀について検討した論考では、古墳時代には顕著であったカマド祭祀が平安時代にはほとんど行われないことを明らかにしている。このことから、古墳時代には心理的規制も窺われるほど重要であった調理場空間及びカマド位置が、平安時代にはあまり重要ではなく、次第に自由な設計を可能とするようになったと言える。その証拠に平安時代竪穴建物設置のカマド位置は、造り替える際に、最初のカマドと同じ場所にはこだわ



第101図　古代建物の床面積

らず、別の壁に取り付けることが多い。この古墳時代後期後半から平安時代にかけての漸移的変化が何時頃から始まり平安時代的な竪穴建物が集落の主体となるかを検討することは、各地域の実情に応じた居住空間の構造変化を読み取る作業でもあり、それが各地域での画期を決定する要素になりうると考えられる。

本遺跡の事例を見てみる。奈良時代の竪穴建物のなかで、カマドが北もしくは北西壁中央で建物長軸壁に設置されるのは、22～25・29号竪穴建物跡である。これらは谷状地形西側に集中しており、新旧関係も確認した。22・24号→23号、26号→25号である。29号は推定値のため省くが、８世紀中頃の赤彩壺が出土した26号竪穴建物跡は短軸壁設置で、それと重複する25号竪穴建物跡は長軸壁であり、８世紀後半と考えられる。一方、22～24号竪穴建物跡は7世紀後半～８世紀前半である。このことから、本遺跡では７世紀代に長軸壁設置が出現し、８世紀中頃から後半には主体となると言えそうである。

＜22号竪穴建物跡の検討＞

22号竪穴建物跡は、遺構の重複関係を有し、カマド１建物内に２基同時に機能しているとしか解釈できなかった珍しい事例である。北東北で特徴的な段状沈線を口縁に廻らす甕がカマド脇から出土するなど遺物も充実している。ただし、黒褐色土内で、黒褐色土の堆積土を検出したことから、壁面や床面の判断が難しく、誤った認識・解釈をした可能性も否定できないため、改めて特徴を列記し、問題点を整理しておく。以下に特徴を列記する。

①23号竪穴建物跡と重複する。

②同一床面に２基のカマドが存在し、西壁中央のカマド１が壊されることなく西壁北寄りのカマド２が機能している。野外調査時は、２棟の建物の重複を認識できなかった結果として、２基のカマドの存在と判断してしまっているのではないかと考え、壁の上端と床面ラインを慎重に検討した。また、カマドが壁中央に設置されていると仮定し、２棟であった場合の壁長を割り出してみると、いずれも新規に建物を構築する際に、互いのカマドを破壊してしまうはずである。しかし、カマド１・２とも残存状況は良好で天井部が自然崩落しているが、人為的な破壊の痕跡は見られなかった。

③黒褐色土を掘り込んで構築されており、堆積も黒褐色土である。ベルトを延長して壁を断割りながら壁を確認したところ、西・北・東壁は明瞭であったが、23号竪穴建物跡と接する南壁が不明瞭であった。23号竪穴建物跡の壁が破壊されていないことをサブトレンチで確認できた。

④床面、カマド内出土土師器の特徴を述べる。甕は東日本地域で７世紀後半に甕の長胴化がピークを迎えることが知られている。本遺構出土の甕類は、胴部が非常に長く、７世紀代の特徴を持っていると捉えられる。外面を幅広の工具でミガキ調整することも８世紀前半頃までの特徴である。椀については、８世紀後半に多い器形であるが、８世紀後半には内外面黒色処理の個体が一定量含まれ、器壁が薄手で、平底風であってもより平底を意識した器形なのに対し、本遺構の椀は丸底で内面黒色処理であり、金属器模倣形態と考えられる椀Ｂ（土器分類は３節を参照されたい。）に該当する。椀Ｂは７世紀に出現しており、７世紀の特徴を有する甕類との共伴関係に問題はない。

⑤３点の炭素年代年代測定値を得た。205の椀体部上半外面、210の甕口縁部外面、213の甕口縁部内面である。土器付着炭化物を採取し、測定を行った結果、海洋リザーバー効果のある数値が得られた。このうち、海洋リザーバー効果を100％受けていると仮定した補正値を213の甕で算出した結果、７世紀中頃をピークとする年代となった。210の甕はリザーバー効果を受けているか分からないが、７世紀後半の数値である。205の椀は外面のコゲであり、採取したサンプルが海産物の煮零れ痕と

は断定できないため、リザーバー効果の補正を行わなかったが、仮に100％影響しているとすると７世紀後半～８世紀中頃までに納まる。205については検討の余地があるが、210・213の測定成果からは、22号竪穴建物跡の土器使用時の年代を７世紀代とすることに問題はない。

⑥カマド設置壁は竪穴建物長軸壁中央である。上述の傾向に従えば、長軸壁中央のカマド設置は８世紀後半以降に主体となるが、本遺構の出土遺物の年代観と整合しない。本遺跡において、長軸壁中央のカマド設置の最古例となるが、他の竪穴建物跡が短軸壁設置を主体とする時期に、１棟全く規制を受けない建物という点が不審である。カマド２設置に際して建物の拡張を行ったのであれば、元々は４×４ｍ程度の正方形に近い形状であった可能性も想定されるが、検証できていない。

以上のことから、第Ⅲ章における記載で年代を７世紀後半～８世紀前半としたが、⑥の特徴が課題として残った。

＜遺構の重複関係からみる特徴の変遷＞

古代の竪穴建物の重複関係を見ていく。

①22・24→23号
②28→26→25号
③33→34号
④32→35号

①は３棟とも長軸壁カマド設置の竪穴建物７世紀後半～８世紀前半のなかでの重複関係である。22号は上述のごとく、７世紀代の可能性がある。24号は長胴甕と小型坏の形態から７世紀末～８世紀前半とした。年代測定値は海洋リザーバー効果の影響がないもしくは少ない木炭で、７世紀後半～８世紀初頭と、リザーバー効果のある資料が補正値で８世紀前半～９世紀前半である。23号は７世紀末～８世紀前半と捉えた。226の長胴甕の形状は、口唇部が受け口状となる点以外は22号竪穴建物跡出土の210・211などに類似する。新旧関係と各器種を比較すると、坏Ｂ・Ｃでは大差ない。内面段は顕著ではないが、内面ミガキ調整の方向が口縁部と底部では異なることから、段を意識しての調整が行われていた時期と考えられる。

②は３時期に区分可能である。３棟に共通する器種は壺であるが、一貫してハケ調整である。しかし、壺内面において、最も新しい25号の壺はハケ調整の痕跡が不明瞭であり、工具の押付ける意識が古い時期よりも希薄と考えられる。この現象は甕においても見られ、28号ではたとえ摩耗していても内面調整のハケメが認識できるが、26号では内面ハケ調整の明瞭な個体数が減少している。26号の238の赤彩壺は器形的には須恵器壺の模倣形態と考えられる。胴部～底部の形状は、猿投窯産によく見られる撫肩の須恵器長頸壺に近い。なお、猿投窯産須恵器長頸壺は、宮城県東松山市矢本横穴墓群13号横穴墓から出土しているが、この遺跡は、官衙と目される赤井遺跡との関連性が指摘される横穴墓群である。28号（７世紀後半）→26号（８世紀前半～中頃）→25号（８世紀中頃）と捉えておくが、年代測定では28号がリザーバー効果の補正値で３～４世紀、26号が７世紀前半～中頃の測定値をリザーバー効果の補正値で10世紀後半～11世紀前半であった。測定結果の幅が大きく、想定される相対年代とは開きがある。

③は北東カマドと北西カマドをもつ竪穴建物跡の重複である。遺構検出段階では北東カマドの33号が新しく、34号が古いと想定していたが、結果は逆であった。33号の南壁を壊して34号のカマドが設

置されている。33・34号とも有段坏は底部がケズリ調整である。７世紀末～８世紀前半に多い。壺・甕はミガキ調整ではない。291の椀は金属器模倣と考えられる半球形で、幅の狭い工具でのミガキ調整が丁寧に施されている。７世紀後半８世紀初頭に見られる器形である。

④は32号（７世紀後半～８世紀前半）→35号（9世紀後半～10世紀初頭）である。35号の堆積土中には32号に帰属する可能性のある丸底坏が含まれている。32号の甕はミガキ調整が顕著である。

ｃ）平安時代

12・35号竪穴建物跡の２棟である。北東壁の東寄りにカマドを設置する。カマドは建物長軸壁に設置されている。胴部径が広く口縁部が短い甕が特徴的である。鍛冶滓が微量出土している点は、奈良時代以前の竪穴建物跡と異なる。

（2）土　　坑

３基である。このうち、１号土坑は底面に長方形の窪みがあり、堆積土からは土師器坏類と鉄製品が出土していることから、土壙墓の可能性もある。内外面ミガキ調整で内面黒色処理の小型坏が一定量あり、７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

（3）陥し穴状土坑

６基である。調査区内の傾向としては、平面の形状や構築時期に関わらず、各々単独の構築である。堆積土上部にTo-Cuが堆積していた３号陥し穴状土坑は縄文時代前期前葉以前の構築である。本県において、平面がワラジ形もしくは長楕円形の２・４・５号陥し穴状土坑と同形状は、奥州市胆沢区宮沢原下遺跡での年代測定値から前期に多いと考えられる。１・６号陥し穴状土坑は平面が溝状で縄文後期以降に主体となる。

（4）柱　　穴

14個である。時期不明である。調査区北端部の平坦面で検出した。建物を構成する配置関係を見出すことができなかった。

3　出　土　遺　物

（1）縄文～弥生時代の遺物

18号竪穴建物跡（縄文中期前葉）・20号竪穴建物跡（縄文早期末～前期初頭）以外は、遺構外と古代竪穴建物堆積土出土である。土器は縄文中期前葉～中葉の出土量が多い。縄文早期の尖底土器、縄文前期の羽状縄文土器、縄文後期十腰内Ⅰ式相当が微量出土している。今回の調査範囲では地形と遺構・遺物分布の関係性は明瞭ではない。石器は石鏃、石匙、掻器、不定形石器、打製石斧、磨製石斧、敲磨器、磨石、敲石が出土している。ただし、古代竪穴建物床面から出土した敲磨器、磨石、敲石については古代に帰属する可能性がある。前述のとおり、製鉄業が開始されていない段階の古代集落の可能性があることから、それらの床面資料は、縄文時代以来引き続きその機能を失っていないと考えられる。

弥生土器は、沈線文と交互刺突を特徴とする後期の赤穴式土器が微量出土している。当該期土器の特徴は、薄手でRL縄文施文比率が高く、破片では縄文後期の沈線区画の小型深鉢・鉢類と見分けが

つかない場合がある。

（2）土　師　器

古墳時代後期～平安時代の土師器が出土している。遺物量は７世紀後半～８世紀前半を主体とし、８世紀後半、９世紀後半～10世紀初頭がそれに次ぐ。相対年代の構築を試みるのに有効な資料が豊富に出土している。各器種を細別し、竪穴建物の重複関係を利用して様式論的視座に立った土器の位置づけを行った。なお、AMS年代測定値は参考としつつも、海洋リザーバー効果や古木効果などの影響を考慮せざるを得ず課題が残る。

近年では、辻秀人氏を中心とした古代東北・北海道の土器研究（辻編2007）がある。このなかの宮城県北部地域の成果報告（佐藤2007）は、本遺跡地域との関係性を考えるうえで重要であることから、分類基準は基本的にこれに従った。ただし、佐藤分類の意図した基準に当てはまらない資料については、筆者が分類基準を追加した。第102～108図で、遺構内土師器と須恵器の集成図を行った。完形に近い資料を中心に各器種の分類を図中に示している。

ａ）坏類

＜坏Ａ＞　底部が丸底で、口縁部が外反し、内面に暈を形成する椀形の坏。古墳中期から継続する器形である。本遺跡では出土していない。赤色塗彩が多い。

＜坏Ｂ＞　底部が丸底で、屈曲して長い口縁部が外反あるいは直線的になる坏。いわゆる外反・外傾の有段丸底坏である。

＜坏Ｃ＞　底部が丸底で、体部で屈曲し、長い口縁が内弯する坏。いわゆる内傾・内弯の有段丸底坏。

＜坏Ｄ＞　底部が丸底で、体部で屈曲し、口縁が直立する坏。口縁と底部の境界は稜、もしくは段を形成する。須恵器模倣と考えられる器形である。

＜坏Ｅ＞　半球形の椀形の坏。北関東地方の坏に類似する器形を含む。内外面ミガキ・黒色処理されるものは金属器模倣の可能性が考えられる。この器形をもって直ちに北関東系に限定されるものではない。半球形であれば本類に含めた。

＜坏Ｆ＞　平底もしくは平底風のもので、口縁部が直線的である。

＜坏Ｇ＞　ロクロによる回転ナデ調整の坏。須恵器生産遺跡では８世紀前半には一時的に登場するが、継続せず、９世紀に主体となる。

坏Ｂ：坏出土点数の２割を占める。7・27号竪穴建物跡（竪穴建物跡を竪穴と略す）に多く、特に27号竪穴では主体を占める。

坏Ｃ：坏出土点数の６割を占める。16・21・23・30号竪穴、１・３号土坑で纏まっている。

坏Ｄ：客体的であるが、16号竪穴に纏まっている。坏Ｄは小型が多い。

坏Ｅ：客体的である。平安時代の35号竪穴と重複する32号竪穴帰属と推定される。

坏Ｆ：坏出土点数の１割を占める。16号竪穴で客体的に入る。

坏Ｇ：35号竪穴に纏まる。平安時代資料である。

特徴的なのは大型建物の７・16号竪穴である。７号竪穴で坏Ｂと坏Ｃ、16号竪穴では坏Ｃ主体であるが、坏Ｄ類が纏まっている。16号竪穴において、坏Ｄは饗宴等の儀器の役割があった可能性も想起される。また、坏Ｄは7世紀後半～８世紀前半の建物に伴っているが、８世紀中頃以降の建物には伴っていない。宮城県北・沿岸部で８世紀中頃以降、坏Ｃ・Ｆに集約されていく（佐藤前掲）が、本遺跡も同傾向と見なしても問題ないであろう。この傾向が岩手県沿岸の別遺跡でも確認されれば、少なくとも８世紀前半と中頃の区分は、宮城県北・沿岸部と連動していると見なせる。

ｂ）椀　口径／器高の比率が0.6前後からそれ以上の深身のもの。同年代の坏にくらべて深身となる。
＜椀Ａ＞　深い半球形の胴部から底部に、短めの口縁部が外反するもの。24号竪穴の228が該当する。
＜椀Ｂ＞　平底または平底風の底部から屈曲して立ち上がり、体部から口縁部にかけて内弯気味に外傾するもの。22号竪穴の205が該当し、33号竪穴の291も可能性がある。
＜椀Ｃ＞　ロクロによる回転ナデ調整のもの。

ｃ）高坏　坏Ｂ・Ｃ・Ｅ・Ｆの坏身に脚のついたもの。脚部は高脚や円形、長方形の透かし孔をもつものがある。透かし孔をもつ高坏は一般集落では出土しない傾向にある。須恵器や金属器の模倣と考えられる。
＜高坏Ａ＞　坏Ｂ・Ｃ・Ｆに脚のつくもの。16号竪穴の160が該当する。
＜高坏Ｂ＞　坏Ｅに脚のつくもの。金属器模倣と考えられる。

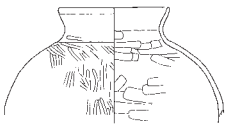
ｄ）鉢
＜鉢Ａ＞　有段丸底坏の口径20㎝前後以上のもの。127・131・154・190が該当する。
＜鉢Ｂ＞　口径20㎝前後以上の平底もしくは平底風で、被熱痕跡がないもの。159が該当する。

ｅ）壺
＜壺Ａ＞　胴部が球胴形で、直線的な口縁がつくもの。須恵器模倣と考えられる。123・238が該当する。
＜壺Ｂ＞　底部が平底で胴部が球形に膨らみ、短めの口縁部が外反する甕。頸部有段が多い。球胴甕と呼ばれていた器形であるが、コゲなど二次被熱痕跡がみられないことから壺としている。83・85・87・89・161・192・207・235・237・275・294が該当する。
＜壺Ｃ＞　底部が平底で、胴部が球形に膨らみ、頸部のしまりが弱く、短めの口縁が外反する壺。壺Ｂに比べて口縁が大きい。・162・239が該当する。

ｆ）甕　サイズに応じて分類した。
＜甕Ａ＞（大型）　Ａ１：胴部の丸みがある、Ａ２：胴部が楕円形、Ａ３：胴部下半が膨らむ、Ａ４：胴部最大径が上半にある、Ａ５：ロクロによる回転ナデ調整、Ａ６：胴部がバケツ形で、甑と類似形状
＜甕Ｂ＞（中型）　Ｂ１：甕Ａを小型化した相似形、Ｂ２：甕Ａの器高を低くした器形、Ｂ３：ロクロによる回転ナデ調整
＜甕Ｃ＞（小型）　Ｃ１：非ロクロのもの、Ｃ２：ロクロによる回転ナデ調整。スス・コゲなど被熱痕跡を有する資料を本類に入れているが、カマド内支脚に転用された小型壺が含まれている可能性もある。
甕Ａのなかでは甕Ａ２が主体で、90・121・138・164・209・210・211・216・226・231・253・254・268・266・281が該当する。甕Ａ３は195・314が該当する。宮城県北・沿岸部では、８世紀中葉以降に甕Ａ４が主体となり、器面調整もハケからケズリへ転換する（佐藤前掲）。本遺跡での甕Ａ４は233・279が該当するが、ハケ調整である。24号竪穴堆積土出土資料のため、遺構の年代を示す資料かは不明である。Ａ６は288が該当する。甕Ｂは、Ｂ１が113・166・200・265・280・287・285・295、Ｂ２が178・262・282・293である。甕Ｃは、Ｃ１のみで、91・124・133・134・165・167・196・212・213・214・227・232・241・242・251・258・286である。

坏類　　壺　　甕

84
坏C

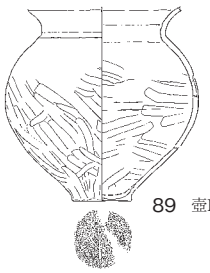

85　壺B

1号竪穴建物跡

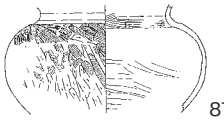
須
336

高坏
86

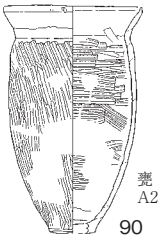
須
335


89　壺B

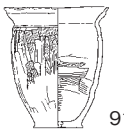
88


87　壺B

2号竪穴建物跡


甕
A2
90

3号竪穴建物跡


91　甕C1

341

92

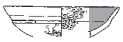
5号竪穴建物跡

93　坏D

99

94　坏C

100


坏B
95

坏C
98

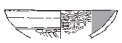
97　坏C

坏C
96

104

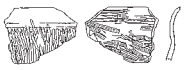
坏C
103

105


101　坏C

102　坏B

7号竪穴建物跡


107

108

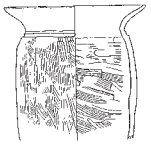
110

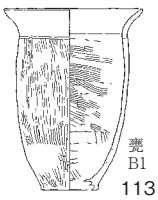
109

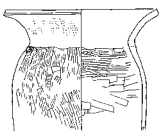
111

106

338


112


甕
B1
113

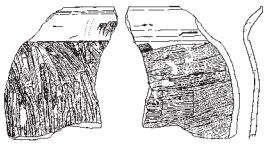

114

第102図　古代土器集成図1

坏　　鉢　　片口　　壺　　甕

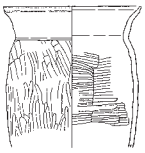
115
坏B

116
片口


119

117

C
118

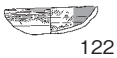

120

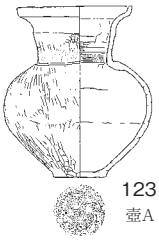
9号竪穴建物跡

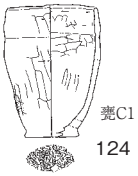
337

甕
A2
121

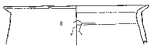
10号竪穴建物跡


122
坏C


123
壺A


甕C1
124

11号竪穴建物跡


125

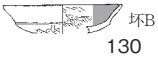
126

12号竪穴建物跡

坏C
128

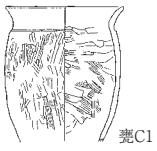
131　鉢A

坏C
129


坏B
130

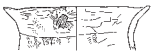
132

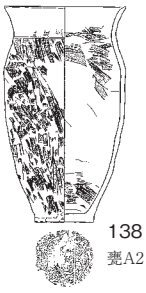
甕C1
134


甕C1
133

135

136


137

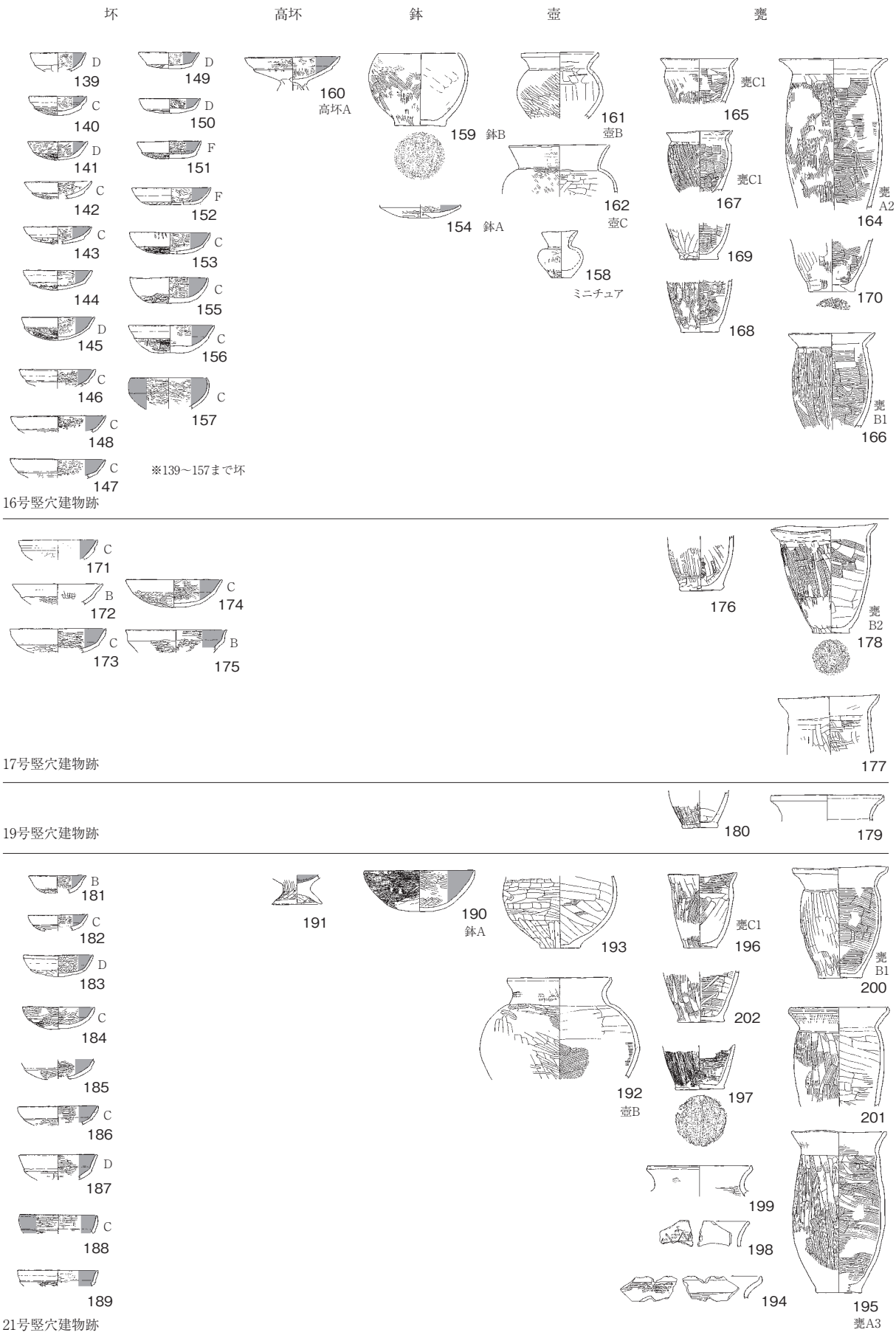

138
甕A2

14号竪穴建物跡

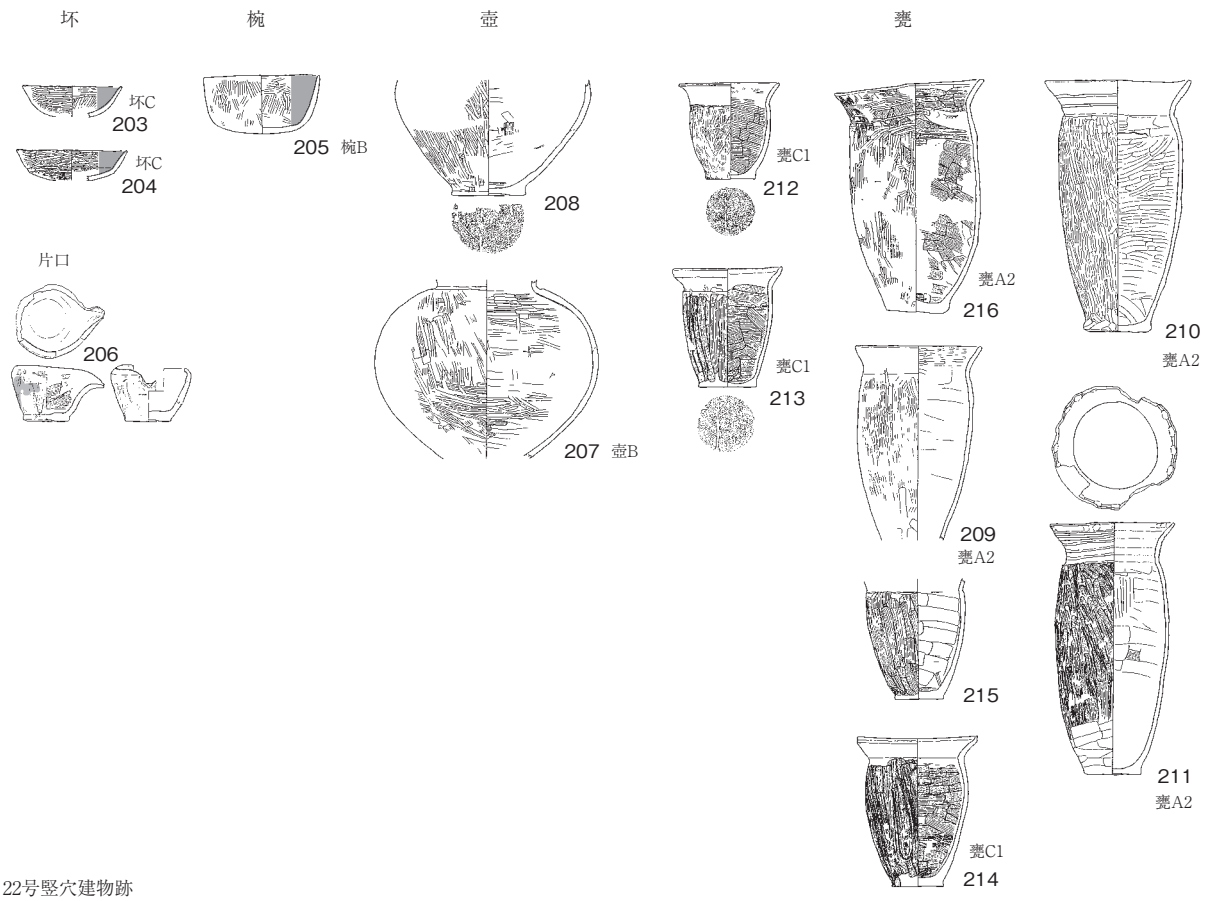
127　鉢A

15号竪穴建物跡

第103図　古代土器集成図2

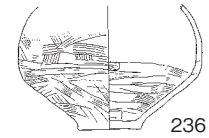


第104図　古代土器集成図３

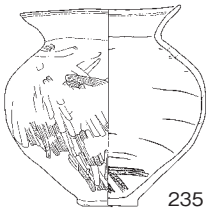


第105図　古代土器集成図４

坏　　壺　　甕

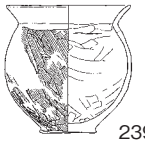

236

237　壺B

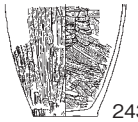

235　壺B

25号竪穴建物跡

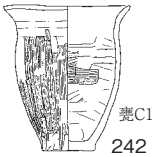
238
壺A


239　壺C

241


243

240


甕C1
242

26号竪穴建物跡

244

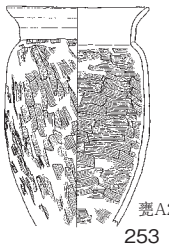
245

246

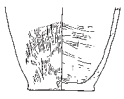
247

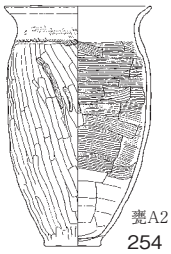
甕C1
251

250


甕A2
253

252


248

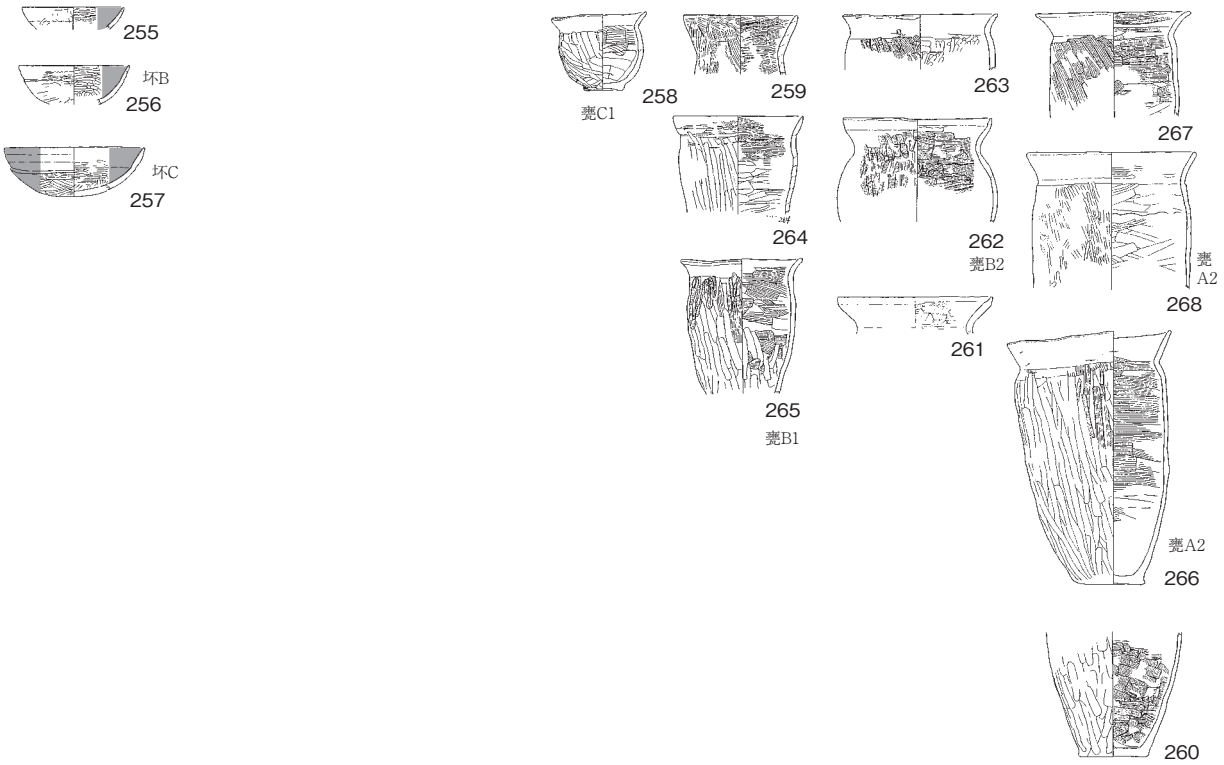

甕A2
254

249

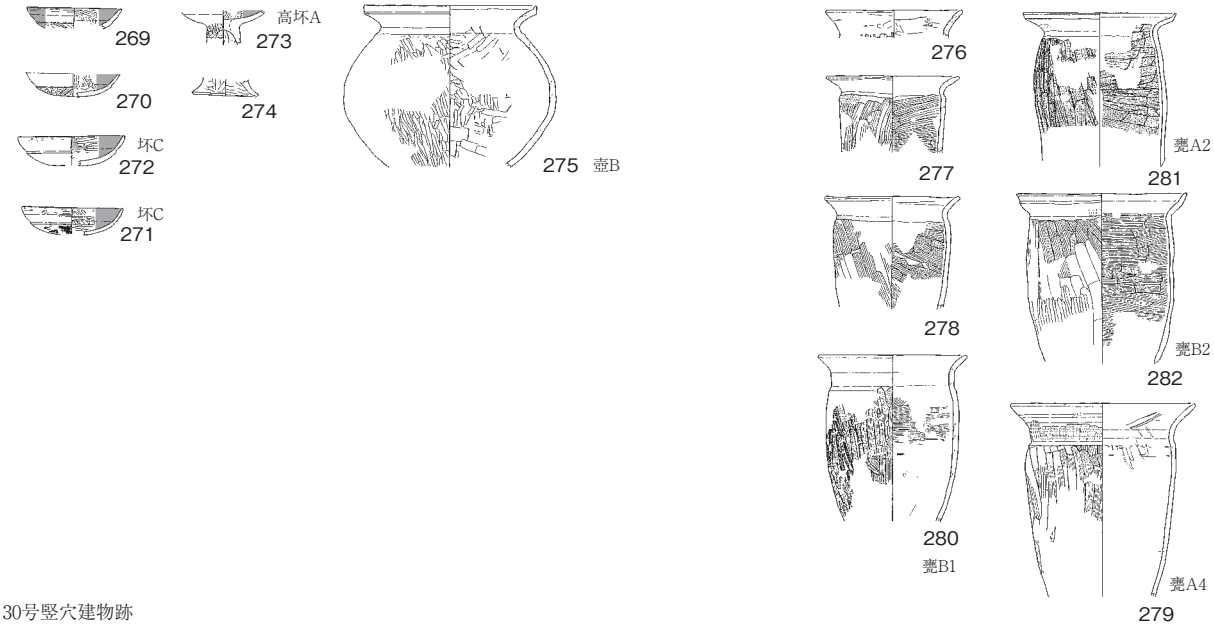
27号竪穴建物跡

第106図　古代土器集成図５

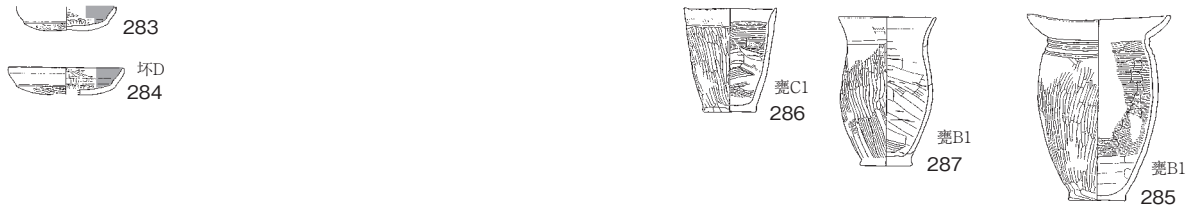
坏　　高坏　　壺　　甕



28号竪穴建物跡



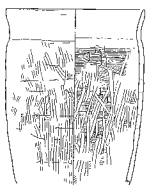
30号竪穴建物跡

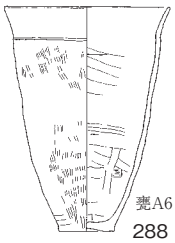


31号竪穴建物跡

第107図　古代土器集成図6

坏・椀・鉢　　壺　　ミニチュア　　甕

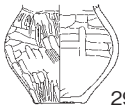

289

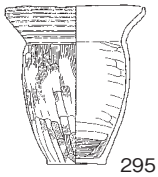

甕A6
288

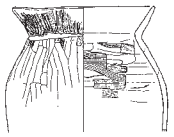
32号竪穴建物跡

290
坏C

291　椀B


292


295
甕B1


293
甕B2

294　壺B

33号竪穴建物跡

296　坏C

298

坏C
297

34号竪穴建物跡

坏
305

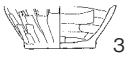
坏C
309

坏G
304

339

308
ミニチュア

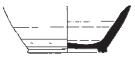
342

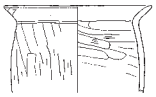

312

坏G
299

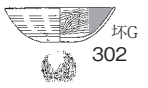
坏C
310

坏G
303


340


311

坏G
301


坏G
302

坏G
300

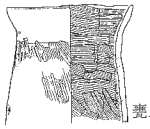
坏F
307

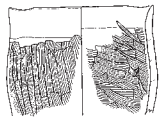
343

306

35号竪穴建物跡

坏C
313


甕A3
314


315

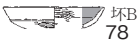
36号竪穴建物跡

坏C
73

坏C
77

80

坏C
74


坏B
78

坏C
75

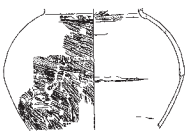
79

坏C
76

1号土坑

坏C
81

坏C
82


83
壺B

3号土坑

第108図　古代土器集成図7

また、分類群には含まれないが、本遺跡の甕の特徴の一つとして、Ⅲ章で記載してきた受け口状口縁がある。明確な受け口状は109・117・121・123・213・214・281・295が該当する。北東北太平洋沿岸部では、八戸市酒美平遺跡・同根城跡でも確認されており、これらの特徴をもつ土器が宮城県郡山遺跡Ⅱ期官衙ＳＥ157井戸跡から出土していることが指摘されている（宇部2013）。

ｇ）片口　９号竪穴の116が該当する。小型のものは東北北部地域に多いとされる。

ｈ）ミニチュア土器　手づくねと工具調整のものに分かれる。158・308が該当し工具調整である。158は壺Ａに形状が似る。308は坏Ｄもしくは坏Ｆに類似する。

以上、土師器の分類、特に坏と甕の様相から、本遺跡の古墳～奈良時代集落は７世紀後半～８世紀中頃以前が集落の主体と言える。

（3）須　恵　器

坏は２号竪穴で２点出土している。底部が平底風で回転ケズリと回転ナデである。８世紀第１～２四半期の特徴を有する。２号竪穴は７世紀後半～８世紀前半に位置付けられる。

壺は35号竪穴から１個体と考えられる壺（339＋340）が出土している。底部は回転ケズリ、胴部調整は回転ナデである。９世紀後半の特徴を有する。

甕は５号竪穴から341、７号竪穴から338、35号竪穴から342・343が出土している。

岩手県沿岸北部の７世紀～８世紀前半の集落での須恵器出土は珍しい。８世紀後半以降は集落内での須恵器利用は増加傾向にあるが、８世紀前半までで墓への埋葬はあっても、集落内出土数は少ない。近隣では古墳群と目される房の沢Ⅳ遺跡において、7世紀後半～８世紀初頭の須恵器丸底坏が出土しており、本遺跡と時期が近い。

（4）石　　器

竪穴建物跡出土資料の内、床面出土資料は非常に少ない。剥片石器は帰属時期が明確な資料がない。礫石器のうち、磨石、敲磨器の一部については床面出土資料である。

ａ）剥片石器　石鏃、石匙、掻器、不定形石器、剥片類が出土している。

ｂ）礫石器　打製石斧、磨製石斧、磨石、敲磨器、敲石が出土している。礫石器は、堆積土出土資料については判断できないが、床面出土資料については、古代に帰属すると捉えて問題ない。このなかで、磨石が特徴的である。磨石のなかには、磨面にススやタール状黒色付着物の見られる資料が一定量存在する。これらの資料の特徴は総じて亀裂状の磨痕が発達することが稀で、磨面が自然摩耗か人為的か判断しがたい点にある。これと同じ特徴が方割石にも見られる。方割石は皮鞣作業に用いられたと考えられており（高木2007）、竪穴建物跡内で皮鞣しもしくは皮のメンテナンスを行っていた可能性が想定される。

（5）土　製　品

すべて紡錘車で、糸紡ぎ具と考えられている。本書で図示した底面部が、使用時は上面となった機能面との説が有力である。しかし、慣例に従って断面が台形になるように掲載している。本書図示の底面部は、平坦で摩耗が著しく機能面であった可能性が高い。上面有孔部が窪むものが主体である。

また偏平な資料もある。

（6）鉄　製　品

鏃、短刀などの武器類、小型ナイフや調理具と考えられる刀子、農具と考えられる鎌が出土している。鏃は８世紀第１～２四半期と考えられる須恵器丸底坏が出土した２号竪穴建物跡の床面出土で、形状は古墳時代の影響を色濃く残す。鏃は先端部が小さい古墳時代からの伝統的な形態である。短刀は遺構外と23号竪穴建物跡の堆積土から出土している。鎌は22号竪穴建物跡の北壁付近の堆積土上部から出土している。刀子片は出土数が多く、すべて破損品である。

（7）陶　磁　器

４点を図示した。中世～近世である。428は無文の中国産青磁碗で16世紀、429は中国産天目碗で15～16世紀、430は肥前産陶器皿で18末～19世紀、431は肥前産染付磁器皿で18後半～19世紀である。

出土した中世陶磁器の年代は15 ～ 16世紀代である。本遺跡周辺では、背後の丘陵地に中世城館が築かれており、沼里館、山崎館、金浜館等がある。中世における宮古地域は、千徳氏、八木沢氏、津軽石氏など一戸南部系氏族の統治が及び、これら豪族間の争いが絶えない状況であったと考えられる。特に軍事物資である鉄資源を確保するうえで、宮古・山田地区の領有は支配層にとって生命線であり、製鉄業の安定は至上命題であったと推察される。戦国期の様相については、今後の三陸沿岸道路建設に伴う発掘調査によって徐々に明らかになっていくことが期待される。

（8）その他（琥珀・鉄滓）

琥珀塊が16号竪穴建物跡堆積土から出土している。出土位置は間仕切り溝もしくは根太痕と想定される溝2条に挟まれた範囲内である。また、鍛冶滓が35号竪穴建物跡（９世紀後半～ 10世紀初頭）から微量出土している。

4　古墳時代末～奈良時代の三陸沿岸部

古墳時代～奈良時代の岩手県三陸沿岸地域は、律令国家の統治下にない。六国史のひとつである『続日本紀』に霊亀元年（715年）、閉村の蝦夷、須賀君古麻比留が郡家の設置を願い出たとの記載がある。律令国家側の施設に先祖以来、昆布を貢献しているが、国府が遠くて納めに行くのが大変との理由による。閉村は、後の閉伊郡にあたる地域と考えられており、律令国家側からは蝦夷の地と認識されている。続日本紀の記載からは、蝦夷の有力者が先祖以来朝貢していること、昆布漁を維持管理していることが読み取れる。現在、閉伊郡郡家は推定地すら判断できていないが、宮古地域が岩手県沿岸部において発掘調査件数が比較的多いことから、７世紀後半～８世紀前半の様相を検討可能な数少ない地域となっている。文献記載事項と考古学資料に関する特徴を以下に整理する。

①宮城県石巻市赤井遺跡が牡鹿の柵擬定地と考えられている。関東系移民によって建造されたとみられ、須恵器も多量に出土し、周辺には矢本横穴群が存在する。その特徴は、掘立柱建物で構成される施設の存在、多量の須恵器と関東系土師器の出土があげられる。赤井遺跡のような規模ではなくとも、官衙施設であれば須恵器の搬入と関東系土師器が一般集落に比べて多い傾向にある。

②掘立柱建物跡群が存在する。官衙遺跡は律令規定により、食糧、武器を備蓄しなければならない。また、郡内の徴税物を治める正倉が設置され、複数の掘立柱建物で構成される。

③霊亀元年（715年）は８紀前葉にあたる。『続日本紀』の記載に従えば、少なくとも「先祖以来」もしくは「先祖代々」と表現可能な２世代以上前からの昆布貢納が行われていたと考えられる。60年程度前と仮定すると、655年の7世紀中頃にあたる。集落内が７世紀中頃以前から営まれているならば、律令国家側への朝貢を行っていた可能性が出てくる。

④昆布の貢献を物理的に示すのは困難であるが、集落内で昆布を採取していたかを検討することは可能である。昆布は採取されると浜辺で日干し作業を行うが、その際オビクイ貝が付着する(1)。集落に持ち込まれる魚貝類のなかにオビクイ貝があれば、生業として昆布採取を行う集落の可能性が出てくる。なお、本遺跡の８・16号竪穴建物跡出土貝層にオビクイ貝は含まれていなかった。

⑤律令国家側への朝貢によって得られる産物は、食糧、鉄製品を含む各種の加工製品が考えられる。食糧・飲料等は須恵器や官衙周辺の土器に入れられて持ち帰らせることも想定される。そのため朝貢を行っている集落では、持ち帰ったと考えられる須恵器、鉄製品が他の集落に比べて多い可能性がある。

以上のことから、郡家そのものは、掘立柱建物跡、多量の須恵器と関東系土器、貢献する蝦夷側では７世紀中頃以前から継続する集落、オビクイ貝の出土、周辺集落よりも多い器材の出土があげられる。津軽石大森遺跡で確認されたのは、周辺集落よりも多い須恵器と鉄製品のみである。ただし、発掘調査事例の増加によっては、宮古地区の集落すべて須恵器や鉄製品が多いという評価が得られることも今後十分に考えられる。津軽石大森が閉村の記載年代の頃の集落であること以外は、律令国家との関連性は不明である。

註(1) 高橋憲太郎氏ご教示による。

参考文献

＜報告書＞
（岩文振埋＝岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書は略して集数を記載）
(財)岩文振埋　1998 『房の沢Ⅳ遺跡』第287集
(財)岩文振埋　2000 『沢田Ⅰ遺跡』第318集
(財)岩文振埋　2007 『宮沢原下遺跡』第495集
(財)岩文振埋　2009 『木戸井内Ⅳ遺跡・隠里Ⅲ遺跡』第529集
(財)岩文振埋　2010 『松山大地田沢遺跡』第558集
(財)岩文振埋　2011 『八木沢野来遺跡第２次』第573集
(公財)岩文振埋　2015 『間木戸Ⅱ遺跡・間木戸Ⅴ遺跡』第640集
宮古市教育委員会　1999 『千鶏Ⅳ遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書第54集
＜論文・研究報告＞
宇部則保　2013 「古代馬淵川流域周辺の土器様相」『研究紀要』２　八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館
工藤　崇・佐々木寿　2007 「十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年」『地学雑誌』116　東京地学協会
佐藤敏幸　2007 「宮城県北部・沿岸部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』164　東北学院大学文学部
高木　晃　2007 「方割石に関する検討－北上川中流域における様相－」『須藤隆先生退任記念論文集　考古学談叢』東北大学大学院文学研究科考古学研究室・須藤隆先生退任記念論文集刊行会
辻　秀人編　2007 『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
外山政子　1998 「関東北西部の平安時代住居とカマド－群馬県矢田遺跡の検討から－」『法政考古学』24　法政考古学会
八木光則　2010 『ものが語る歴史21　古代蝦夷社会の成立』同成社

写　真　図　版

遺跡遠景（南から）

調査区全景（上が北東、下が北西）

写真図版１　遺跡遠景、調査区全景

中央尾根部　基本層序（東から）

調査区南部　完掘（南西から）

調査区南部　完掘（東から）

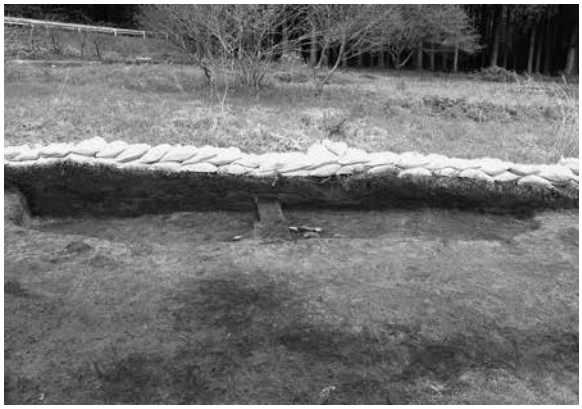
調査区北部　完掘（南から）

調査区北部　完掘（東から）

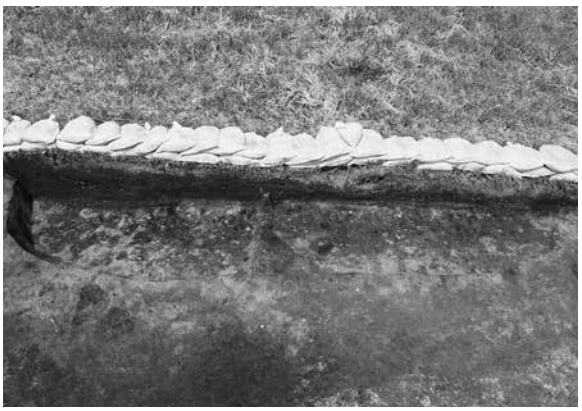
写真図版２　基本層序、調査区完掘

近景（南東から）

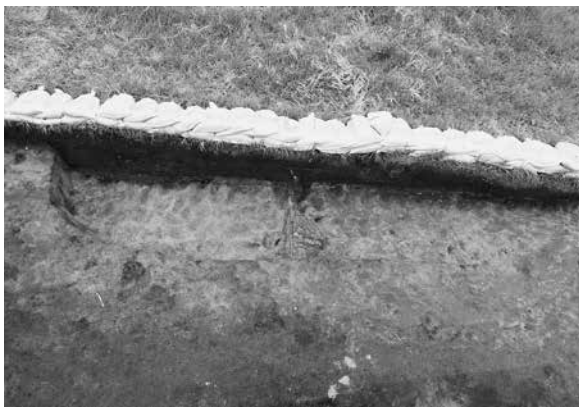
断面（南西から）



断面（南東から）



遺物出土状況（南東から）



掘形近景（南東から）

写真図版３　１号竪穴建物跡

近景（東から）

カマド近景（東から）

カマド断面（北から）

断面（南から）

断面（西から）

写真図版４　３号竪穴建物跡

近景（東から）

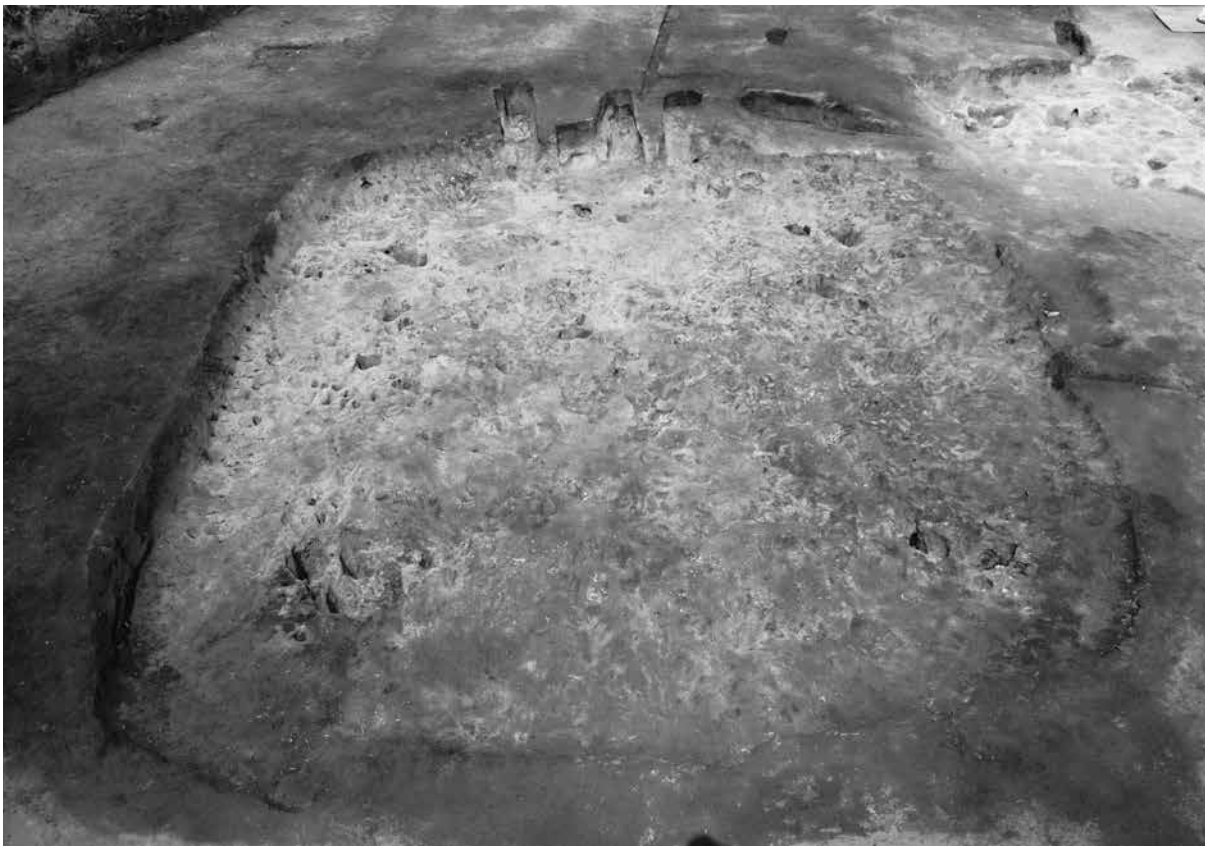
遺物出土状況（東から）

カマド１近景（東から）

カマド１燃焼部断面（東から）

カマド１建物壁付近断面（東から）

写真図版５　２号竪穴建物跡（１）

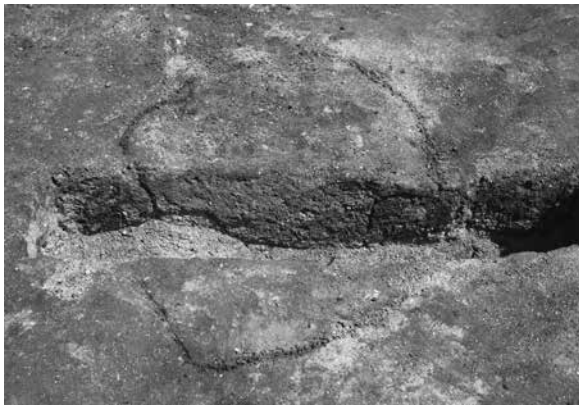


掘形近景（東から）

カマド２・３近景（東から）

カマド２煙道断面（南西から）

カマド３煙道断面（北東から）



焼土断面（南から）

写真図版６　２号竪穴建物跡（２）

近景（南東から）

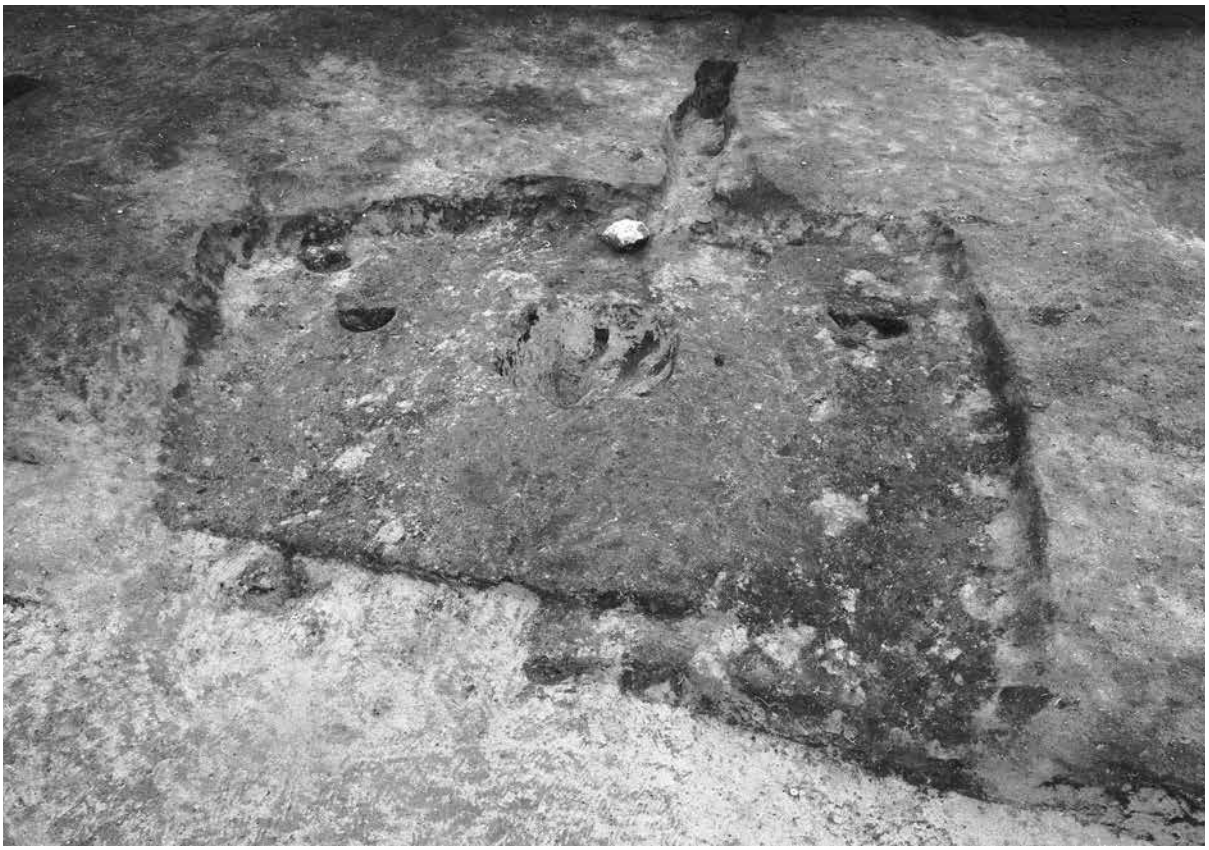
カマド近景（南東から）

断面（南西から）

断面（北西から）

掘形近景（南東から）

写真図版７　４号竪穴建物跡



近景（東から）

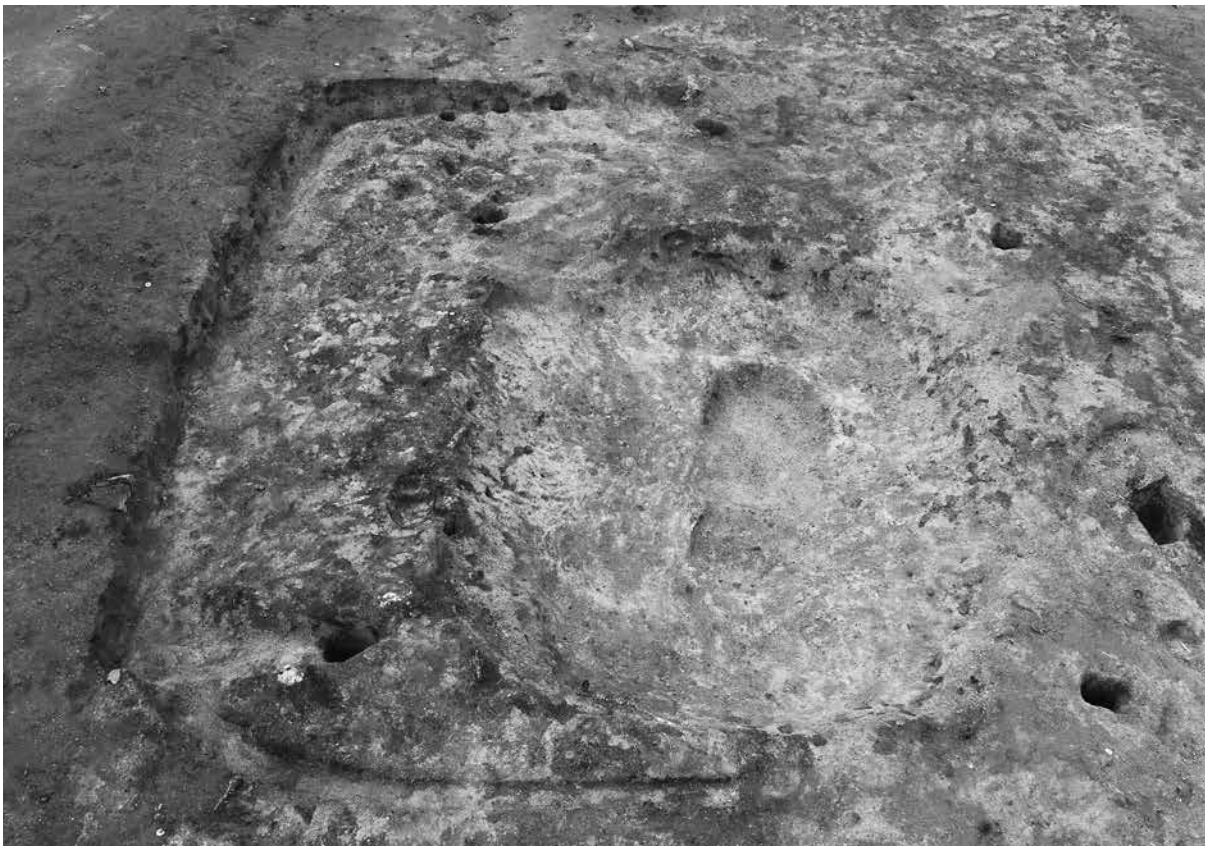
カマド近景（東から）

カマド断面（東から）

カマド断面（南から）

掘形近景（東から）

写真図版８　５号竪穴建物跡



近景（南東から）

カマド近景（南東から）

断面（南西から）

断面（北西から）

掘形近景（南東から）

写真図版９　６号竪穴建物跡

近景（南東から）

断面（北東から）

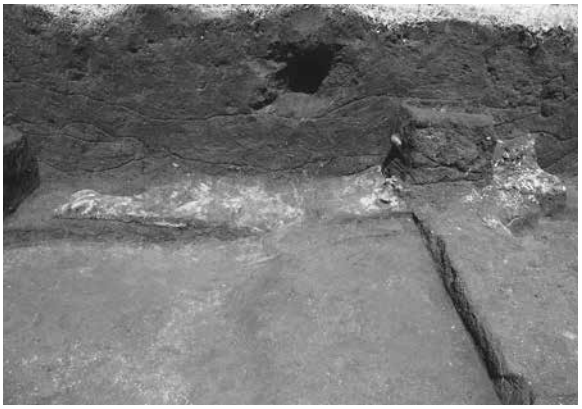
カマド断面（南西から）

煙道断面（南西から）

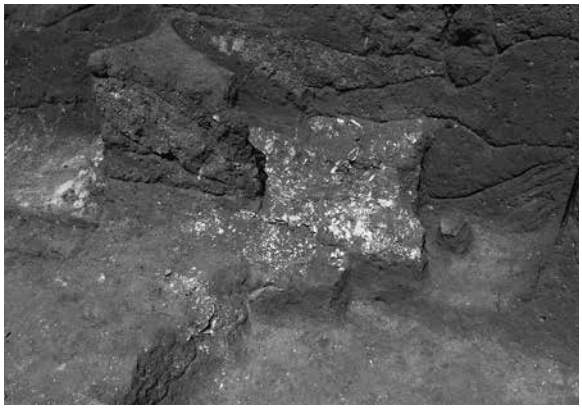
カマド近景（南東から）

写真図版10　７号竪穴建物跡

断面１（南東から）



焼土検出状況（南東から）



焼土・貝層検出状況（南東から）

断面２（南西から）

貝層検出状況（南東から）

写真図版11　８号竪穴建物跡

近景（南東から）

遺物出土状況（南東から）

カマド近景（南東から）

カマド断面（南西から）

カマド断面（南東から）

写真図版12　９号竪穴建物跡

近景（南東から）

遺物出土状況（南東から）

断面１（北西から）

カマド近景（南東から）

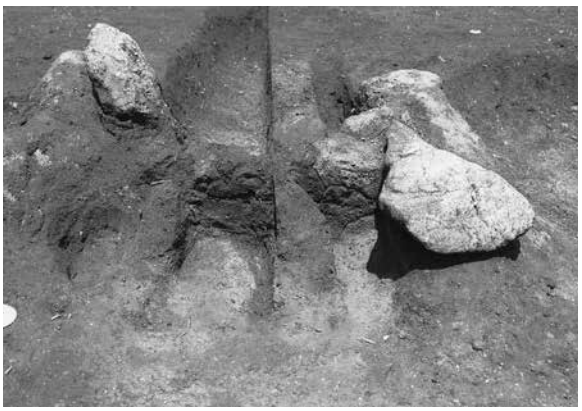
カマド断面（南東から）

写真図版13　10号竪穴建物跡

近景（東から）

遺物出土状況（南東から）

カマド近景（南東から）



カマド断面（南東から）

煙道断面（南西から）

写真図版14　11号竪穴建物跡

近景（南西から）

カマド近景（南西から）

カマド断面（南東から）

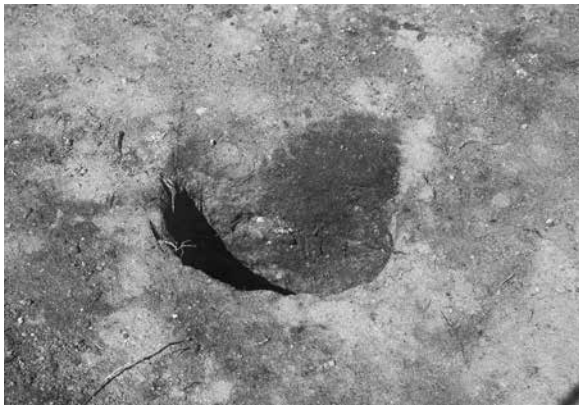
煙出し・煙道完掘（北西から）

掘形近景（南西から）

写真図版15　12号竪穴建物跡

近景（南東から）

断面（北西から）



竪穴建物跡Ｐ１断面（南西から）

竪穴建物跡内Ｐ２断面（南西から）

竪穴建物跡内Ｐ３断面（南西から）

写真図版16　13号竪穴建物跡

近景（南東から）

カマド近景（南東から）

カマド断面（南東から）

カマド設置痕（南東から）

掘形近景（南東から）

写真図版17　14号竪穴建物跡

近景（南東から）

カマド近景（南東から）

煙道断面（南西から）

カマド断面（南東から）

カマド設置痕（南東から）

写真図版18　15号竪穴建物跡

16号竪穴建物跡、３号土坑近景（南東から）

16号竪穴建物跡断面（南西から）

16号竪穴建物跡断面（北西から）

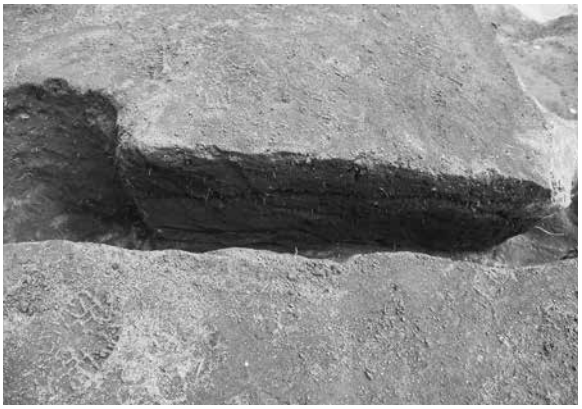
16号竪穴建物跡、３号土坑断面（北東から）

16号竪穴建物跡琥珀出土状況（北から）

写真図版19　16号竪穴建物跡、３号土坑（１）

16号竪穴建物跡カマド近景（南東から）

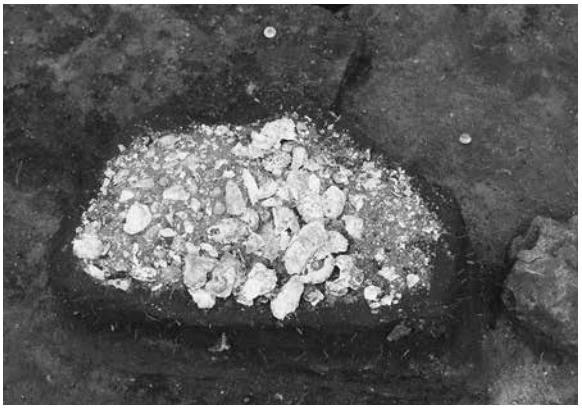
16号竪穴建物跡カマド断面（南東から）



16号竪穴建物跡煙道断面（南西から）

16号竪穴建物跡、３号土坑跡掘形近景（南東から）

16号竪穴建物跡貝層検出１（東から）



16号竪穴建物跡貝層検出２（東から）

３号土坑近景（南東から）

３号土坑焼土断面（東から）

写真図版20　16号竪穴建物跡、３号土坑（２）

近景（南から）

カマド近景（南から）

断面（北西から）

カマド断面（南から）

掘形近景（南から）

写真図版21　17号竪穴建物跡

近景（南東から）

断面（西から）

炉近景（南東から）

炉断面（南西から）

炉断面（南東から）

写真図版22　18号竪穴建物跡

近景（東から）

断面（北から）

カマド近景（東から）

カマド断面（東から）

煙道断面（南から）

写真図版23　19号竪穴建物跡

近景（西から）

断面（南から）

断面（西から）

遺物出土状況（北西から）

写真図版24　20号竪穴建物跡

近景（南東から）

遺物出土状況（南東から）

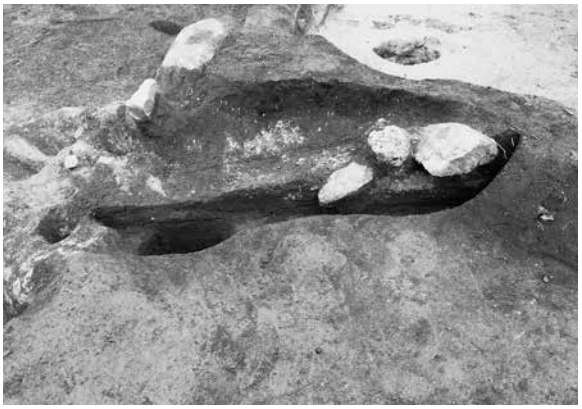
掘形近景（南東から）

カマド近景（南東から）

カマド断面（南東から）

写真図版25　21号竪穴建物跡

近景（南東から）



カマド断面（北から）

カマド断面（南東から）

刀子（417）出土状況（北から）

掘形近景（東から）

写真図版26　23号竪穴建物跡

近景（南東から）

カマド１・２検出（南東から）

カマド１・２近景（南東から）

カマド１近景（南東から）

カマド１断面（南東から）

写真図版27　22号竪穴建物跡（１）

カマド１断面（南西から）

カマド１煙道断面（北東から）

カマド１遺物出土状況（南から）

カマド２近景１（南東から）

カマド２近景２（南東から）

カマド２脇遺物出土状況（東から）

カマド２断面（南から）

掘形近景（南東から）

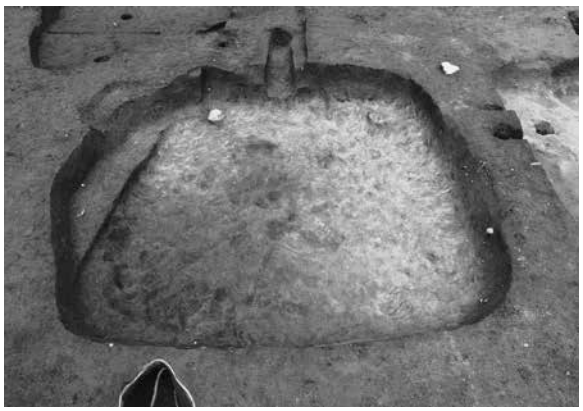
写真図版28　22号竪穴建物跡（２）

近景（東から）

カマド断面（東から）

カマド断面（南から）

遺物出土・炭化物検出状況（東から）



掘形近景（東から）

写真図版29　24号竪穴建物跡

近景（東から）

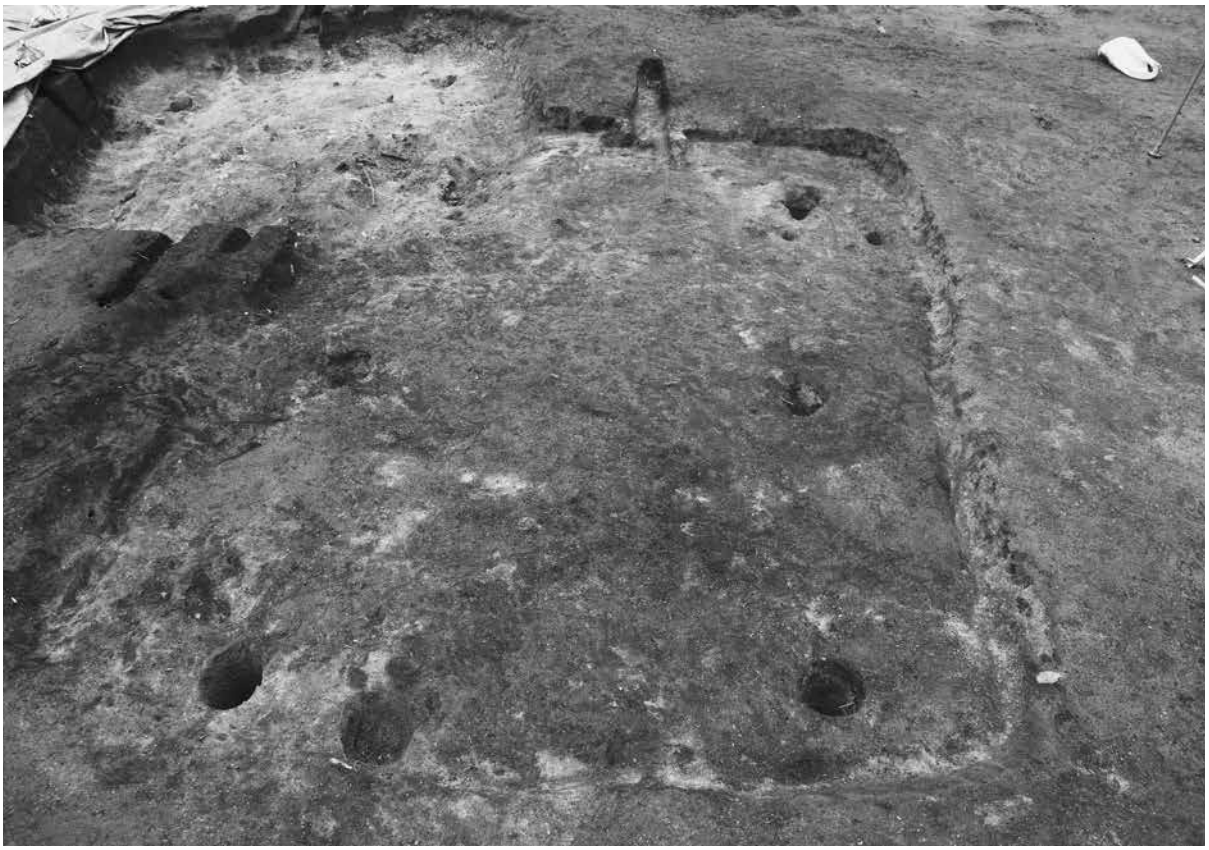
遺物出土状況（東から）

カマド近景（東から）

カマド断面（南から）

掘形近景（東から）

写真図版30　25号竪穴建物跡



近景（南東から）

カマド検出・遺物出土状況（南東から）

カマド近景（南東から）

カマド断面（南東から）

掘形近景（南東から）

写真図版31　26号竪穴建物跡

近景（南東から）

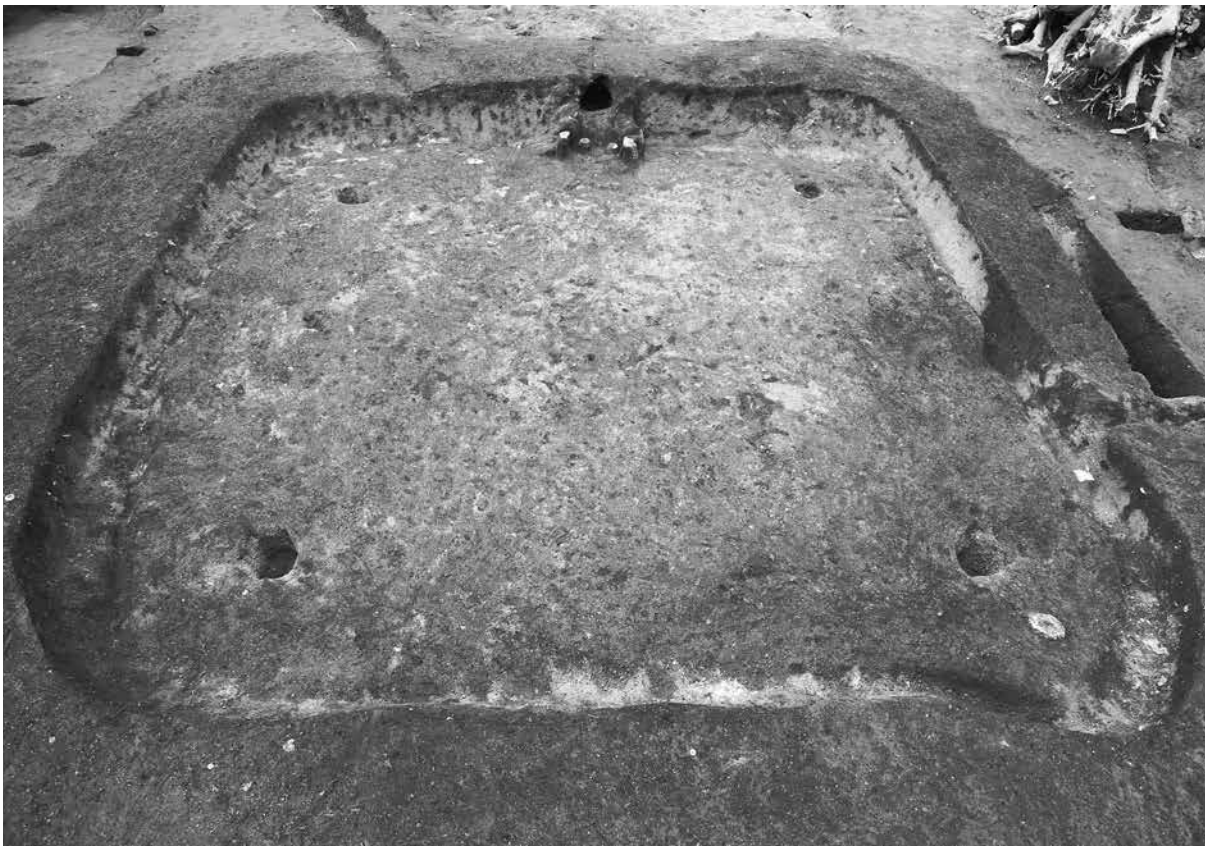
カマド近景（南東から）

カマド断面（北東から）

カマド断面（南東から）

掘形近景（南東から）

写真図版32　27号竪穴建物跡



近景（南東から）

遺物出土状況（南東から）

カマド近景（南東から）

カマド断面（南東から）

掘形近景（南東から）

写真図版33　28号竪穴建物跡

近景（南東から）

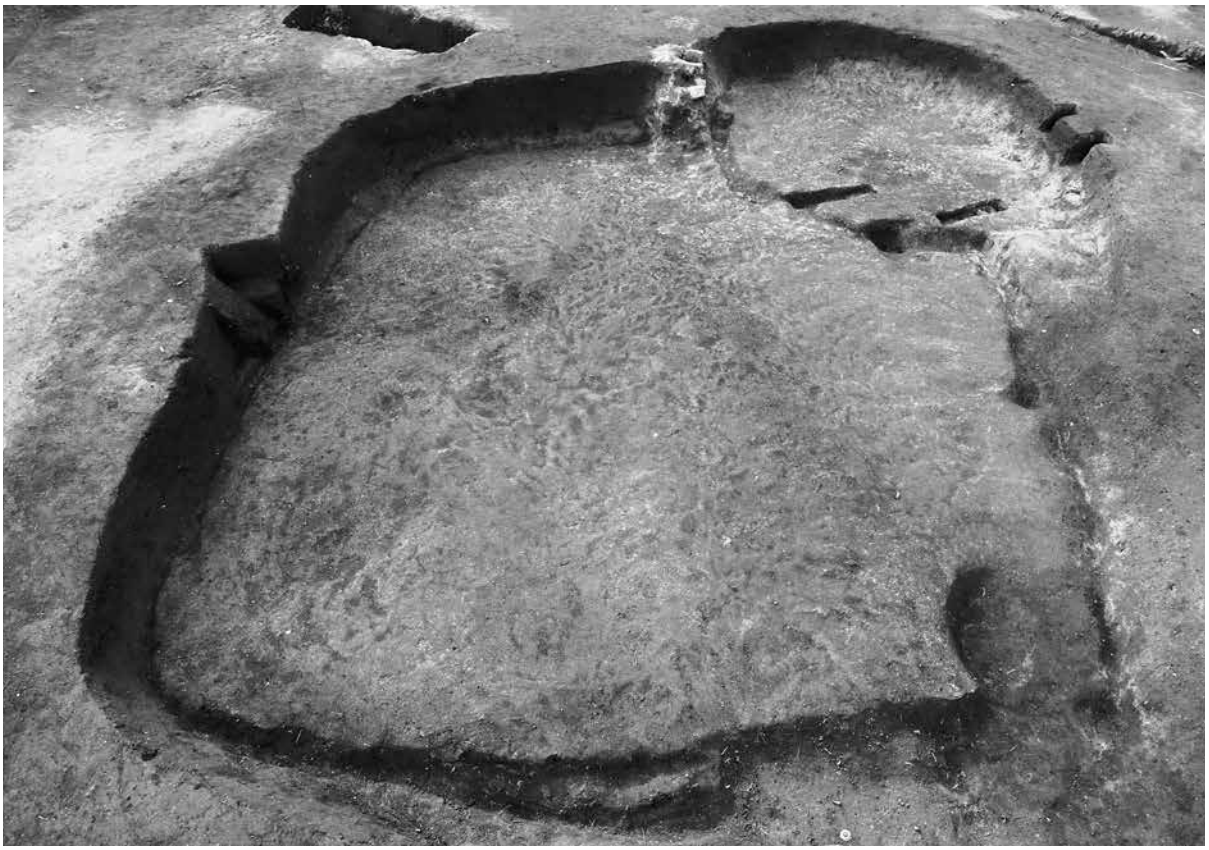
カマド近景（南東から）

カマド断面（南東から）

カマド断面（南西から）

完掘（南東から）

写真図版34　29号竪穴建物跡



30・37号竪穴建物跡近景（南東から）

30・37号竪穴建物跡断面（東から）

30号竪穴建物跡カマド近景（東から）

30号竪穴建物跡カマド芯材（東から）

30号竪穴建物跡カマド芯材（南東から）

写真図版35　30・37号竪穴建物跡（1）

30号竪穴建物跡カマド断面（南東から）

37号竪穴建物跡近景（南東から）

30・37号竪穴建物跡貼床断面（東から）

31号竪穴建物跡カマド近景（南東から）

31号竪穴建物跡近景（南東から）

写真図版36　30・37号竪穴建物跡（2）、31号竪穴建物跡

近景（南東から）

断面（北西から）

カマド断面（南東から）

カマド断面（南西から）

掘形近景（南東から）

写真図版37　32号竪穴建物跡

近景（南西から）

カマド近景（南西から）

カマド断面（南西から）

カマド断面（南東から）

掘形近景（南西から）

写真図版38　33号竪穴建物跡

34号竪穴建物跡近景（南東から）

34号竪穴建物跡カマド検出（南東から）

34号竪穴建物跡断面（南東から）

35号竪穴建物跡カマド検出（南東から）

35号竪穴建物跡カマド近景（南東から）

写真図版39　34・35号竪穴建物跡（1）

近景（南西から）

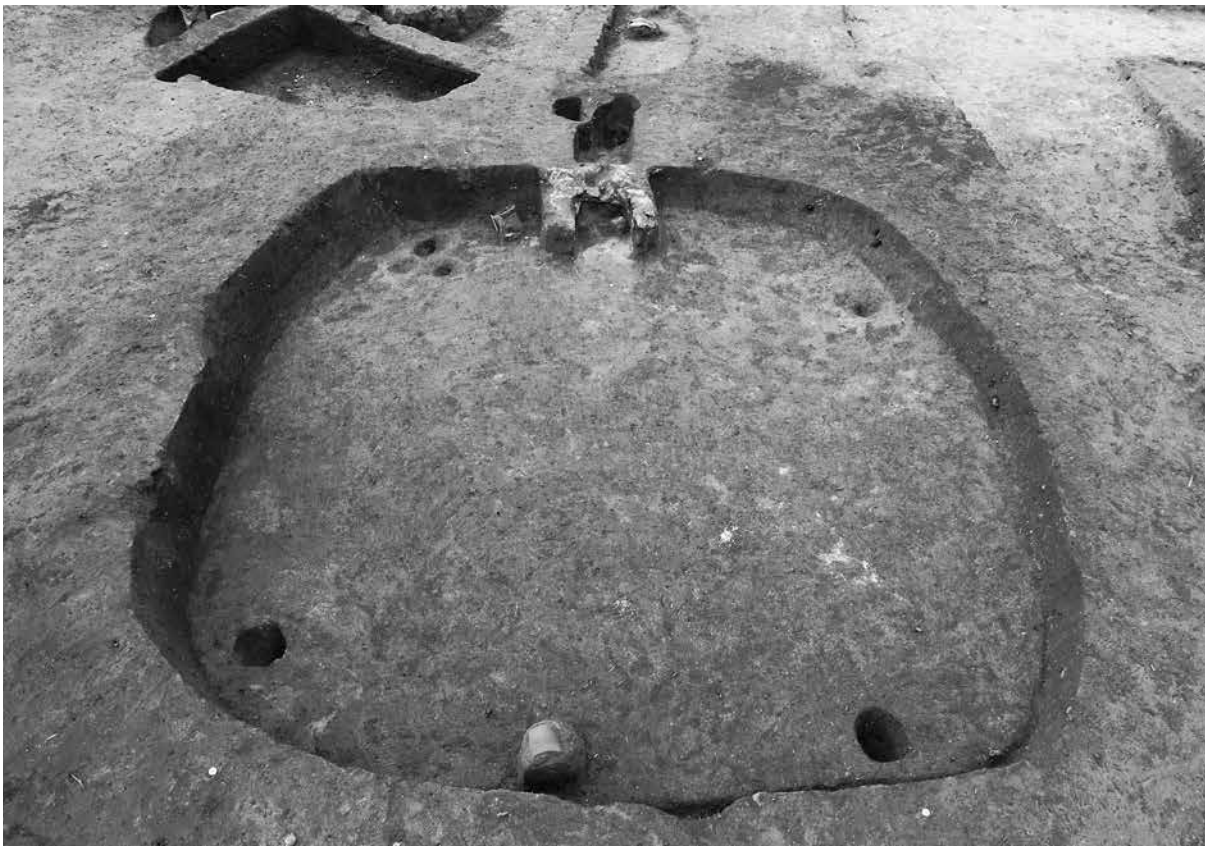
カマド断面（南西から）

カマド断面（北西から）

竪穴建物跡内焼土断面（南西から）

竪穴建物内Ｐ1断面（南西から）

写真図版40　35号竪穴建物跡（２）



近景（南東から）

カマド近景（南東から）

カマド断面（南東から）

カマド断面（南東から）

掘形近景（南東から）

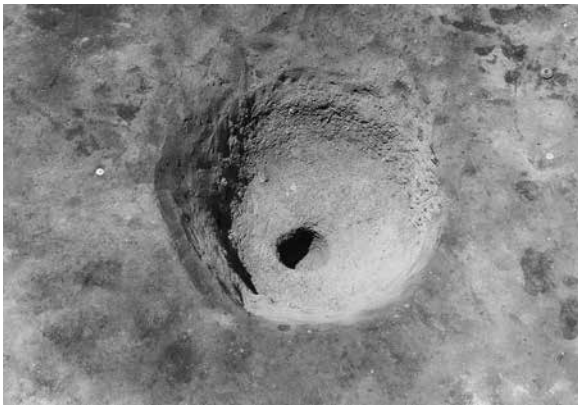
写真図版41　36号竪穴建物跡

１号土坑近景（北から）

２号土坑完掘（西から）

１号陥し穴状土坑近景（東から）

２号陥し穴状土坑近景（北東から）



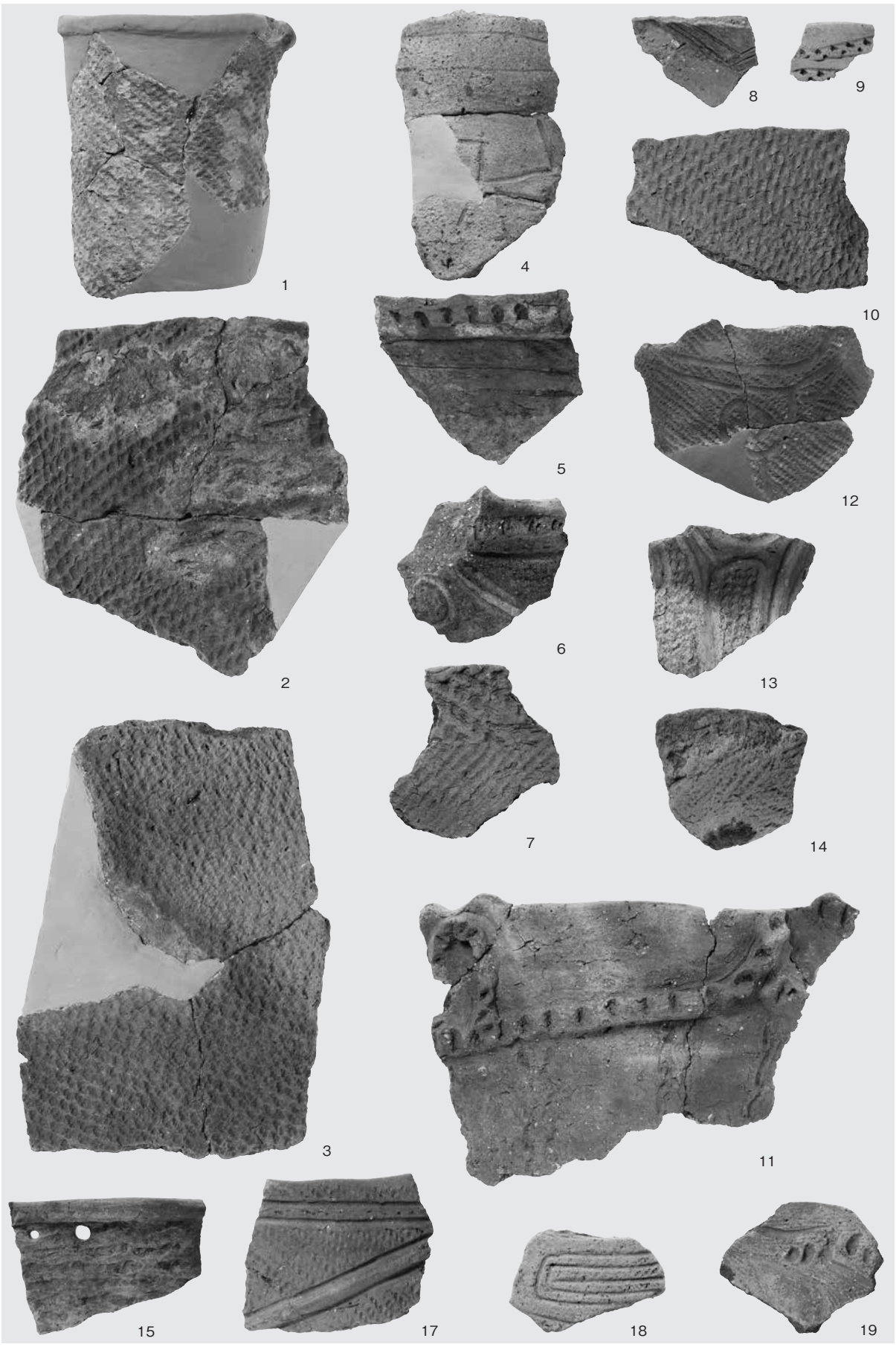
３号陥し穴状土坑近景（北から）

４号陥し穴状土坑近景（西から）

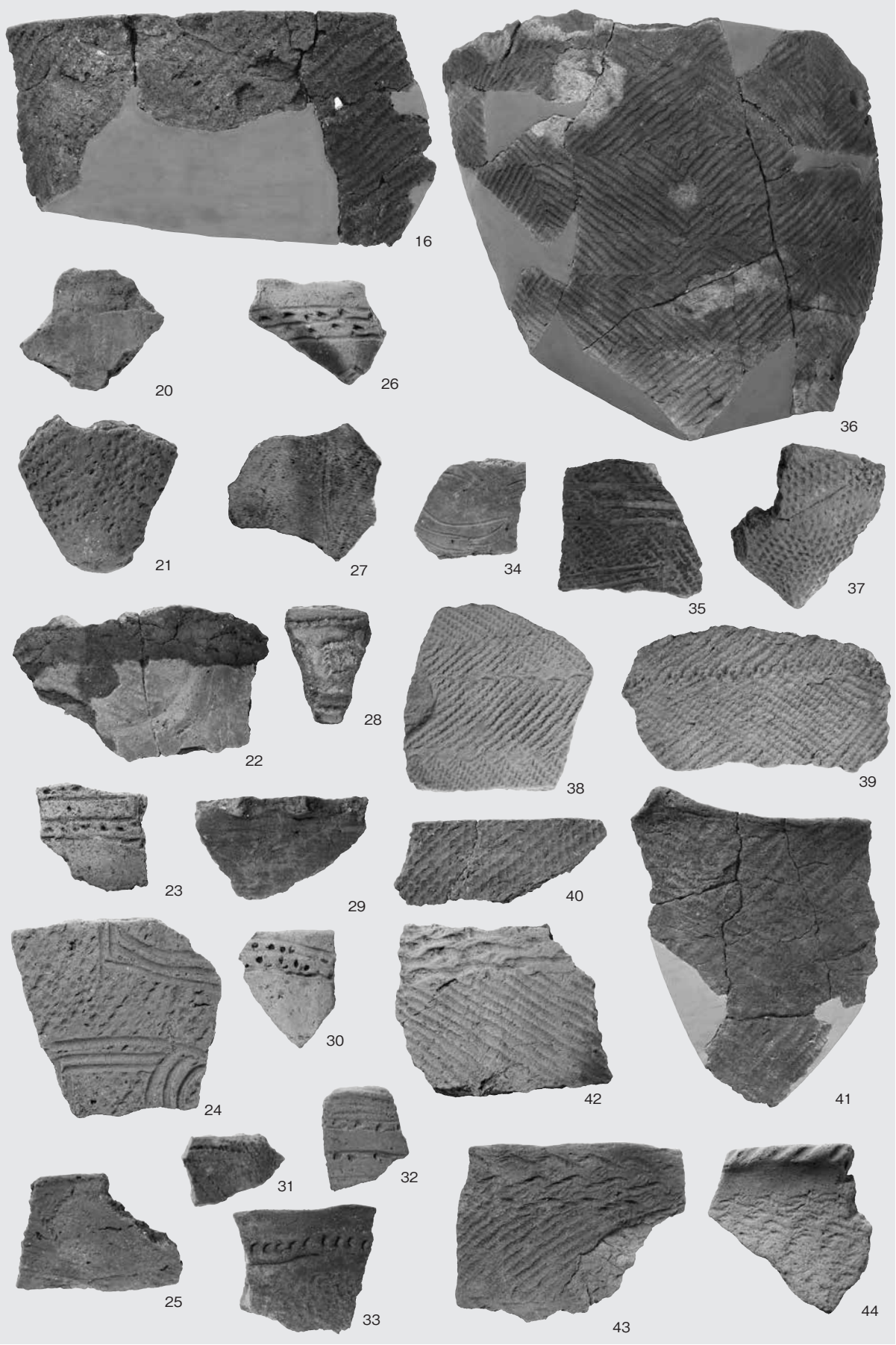
５号陥し穴状土坑近景（東から）

６号陥し穴状土坑近景（東から）

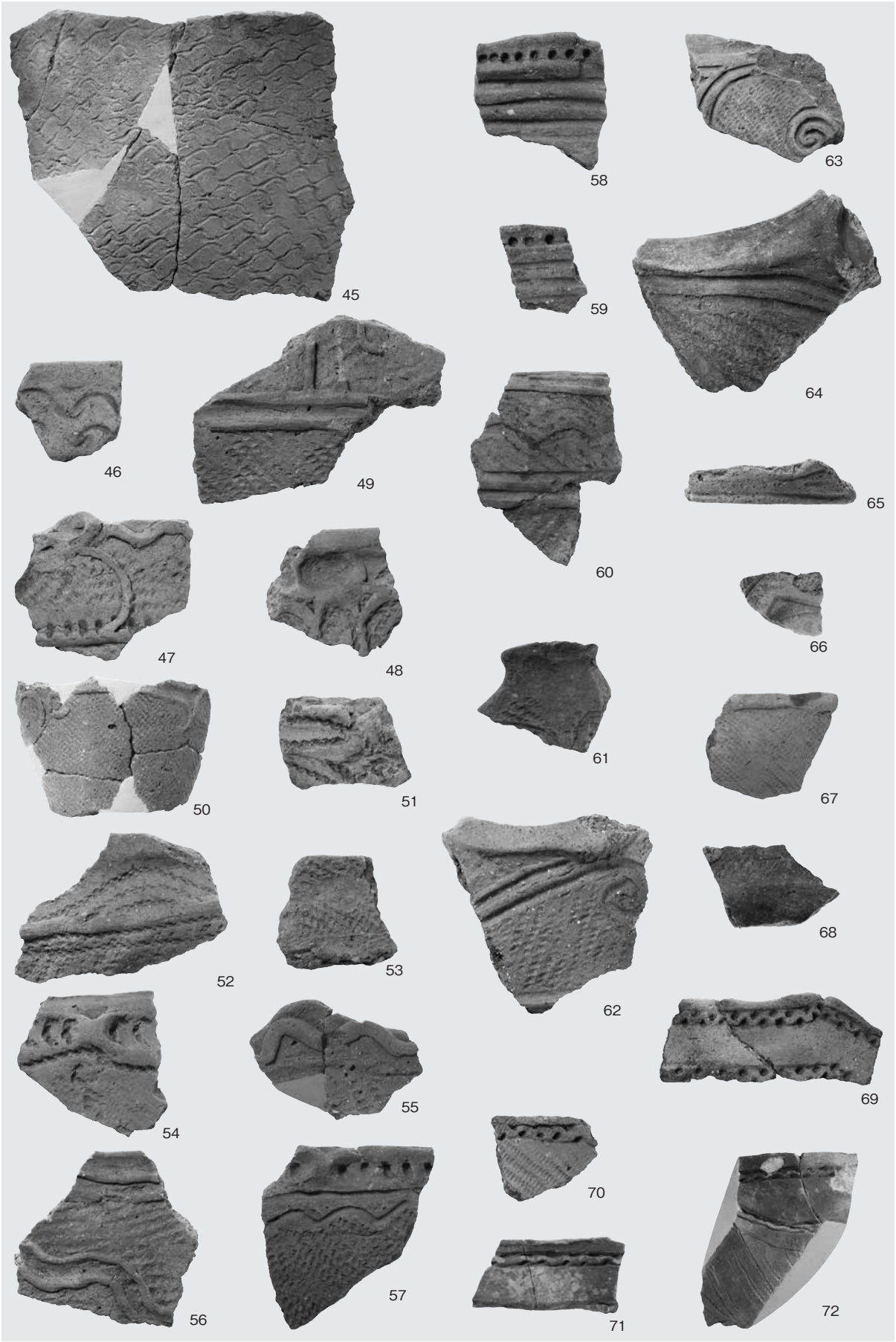
写真図版42　１・２号土坑、１～６号陥し穴状土坑



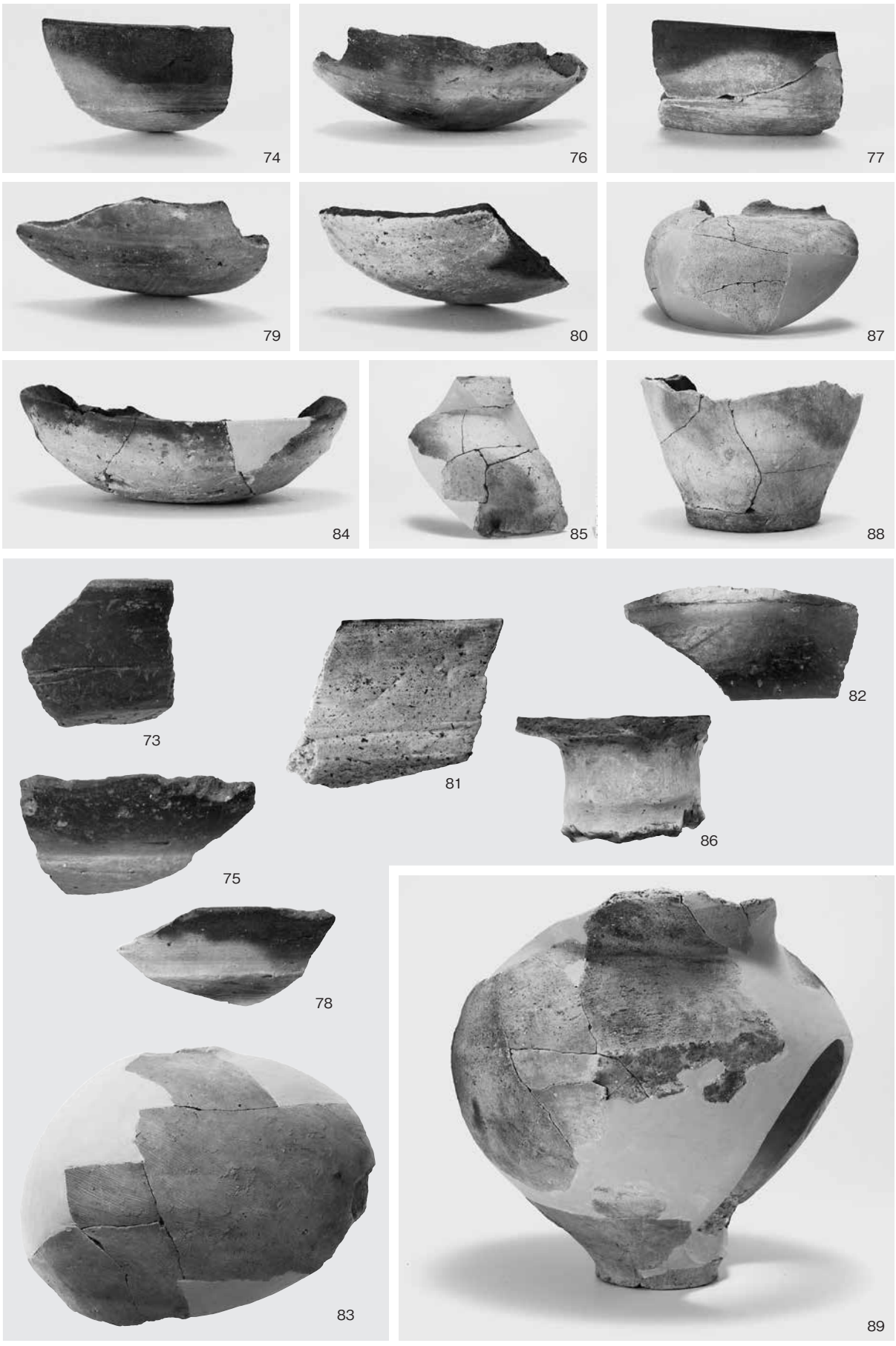
写真図版43　縄文土器・弥生土器1



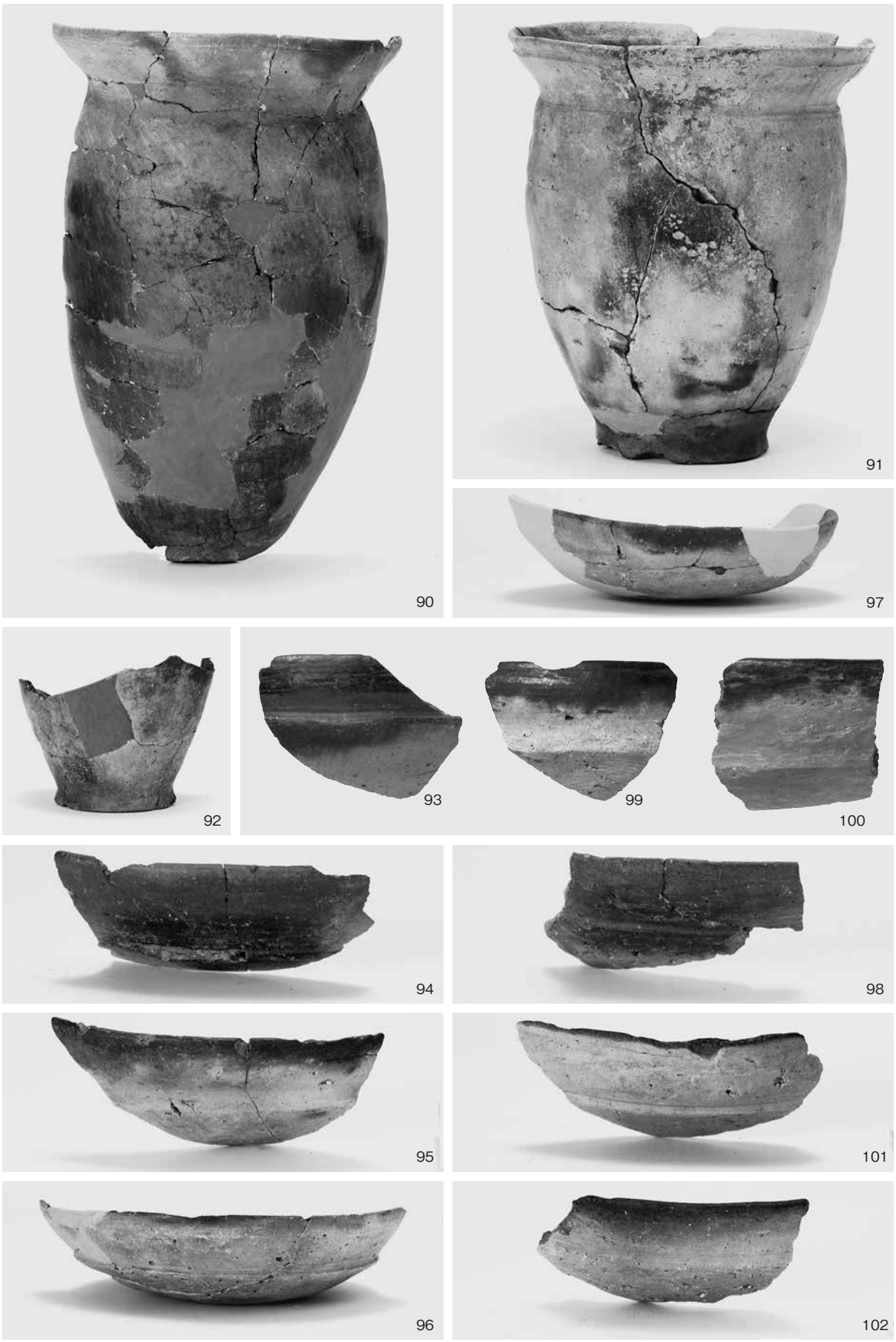
写真図版44　縄文土器・弥生土器２



写真図版45　縄文土器・弥生土器３



写真図版46　土師器１（１・３号土坑、１・２号竪穴建物跡）



写真図版47　土師器２（３・５・７号竪穴建物跡）

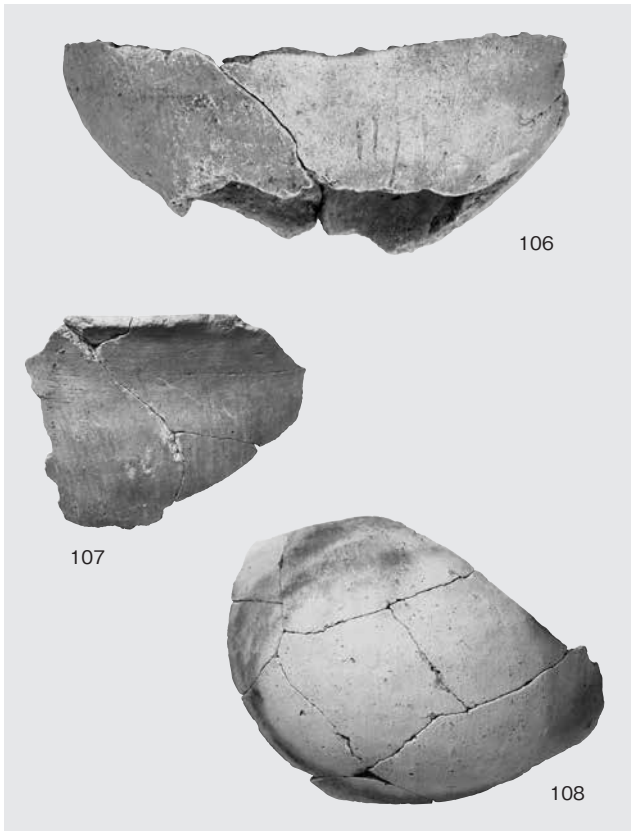
103

111

104

105

112


106
107
108

113

109

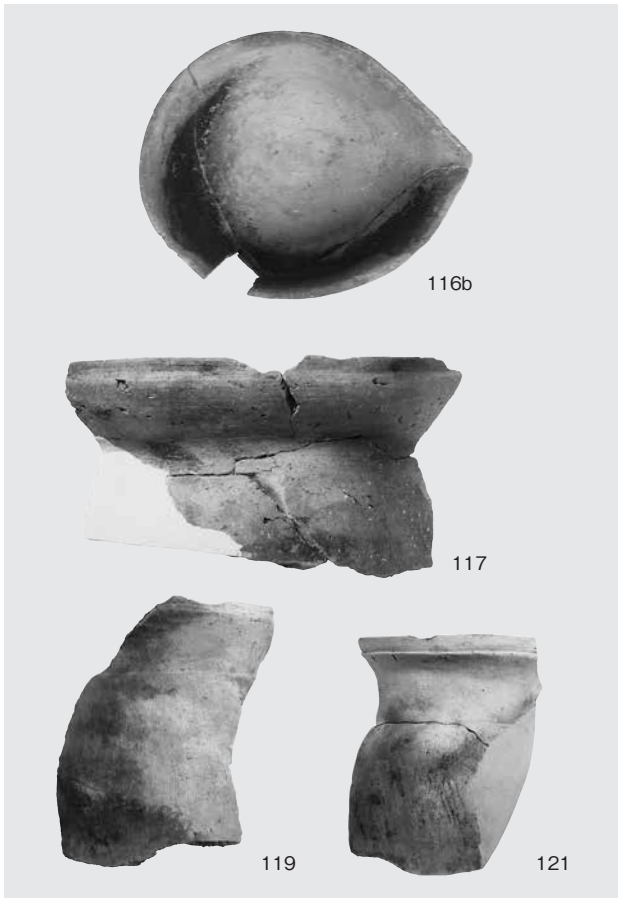
110

114

写真図版48　土師器３（７号竪穴建物跡）

115

116a


116b

117

119

121

120

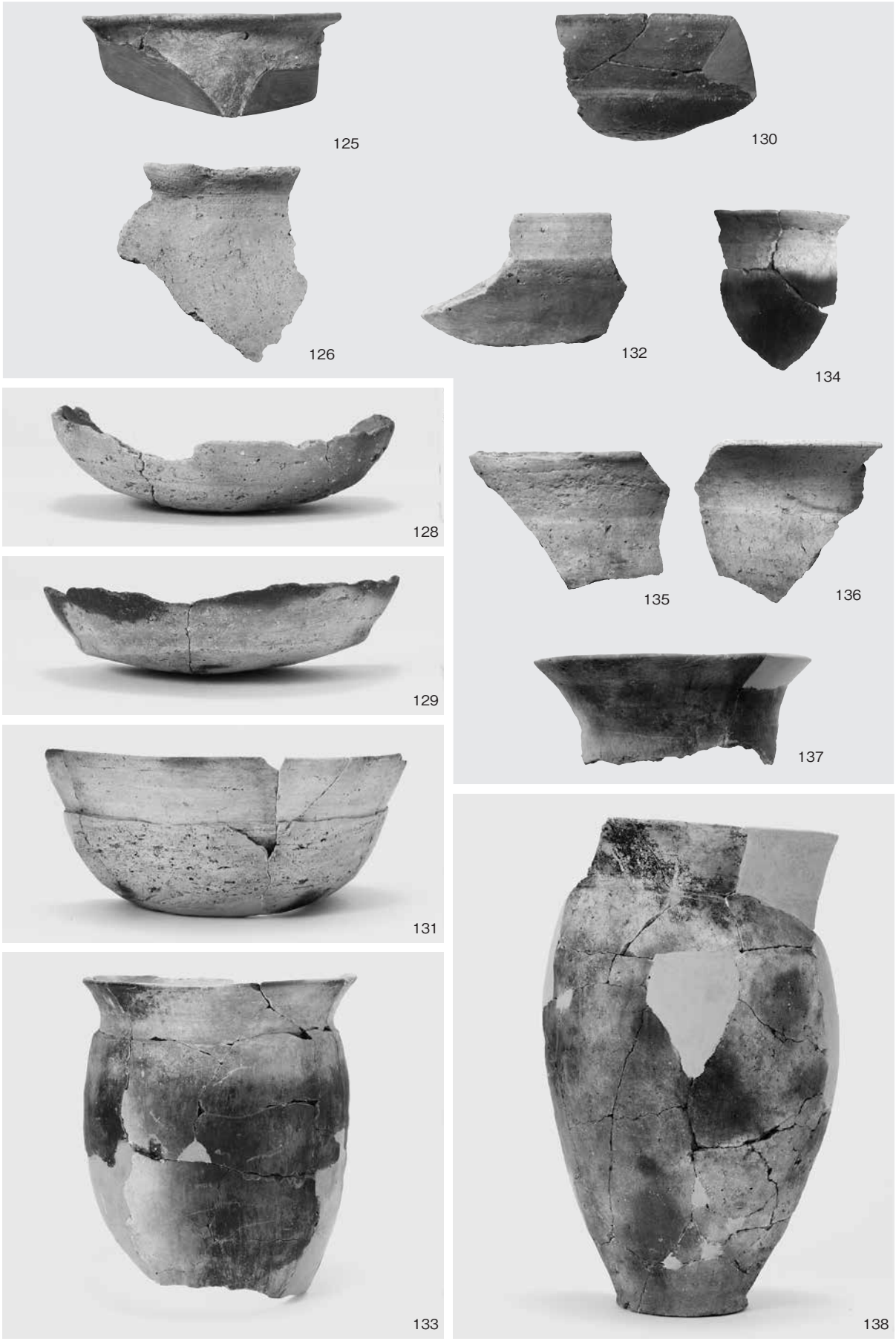
122

123

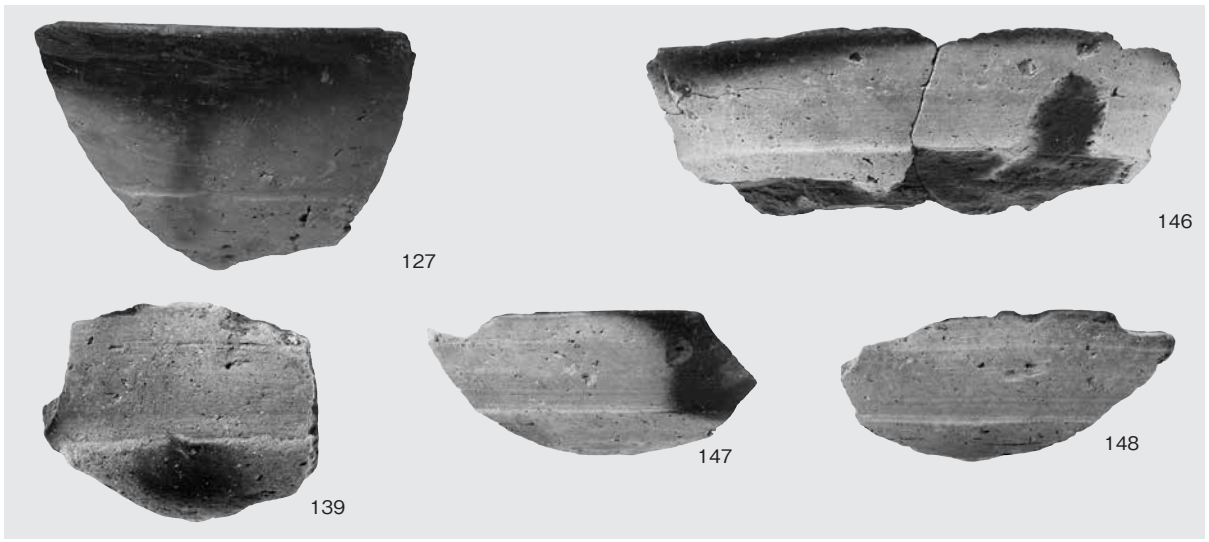
118

124

写真図版49　土師器４（９～11号竪穴建物跡）



写真図版50　土師器５（12・14号竪穴建物跡）



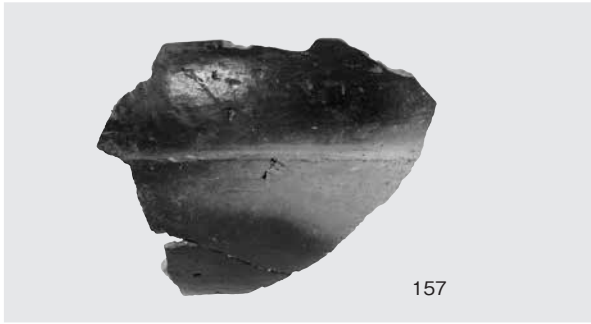
写真図版51　土師器６（15・16号竪穴建物跡）

153

154

155

156


157

159

160

162

158

161

写真図版52　土師器７（16号竪穴建物跡）

163

164

166

167

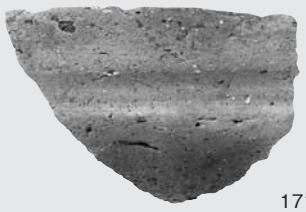
165

168

170

169

写真図版53　土師器８（16号竪穴建物跡）


171

172

175

177

179

178

173

174

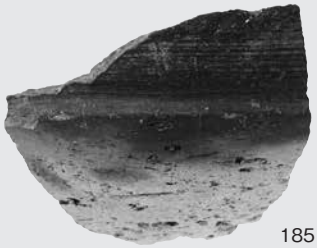
176

180

写真図版54　土師器９（17・19号竪穴建物跡）

181

182


185

186

187

188

189

190

191

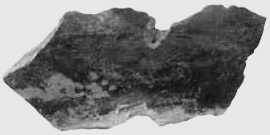
192

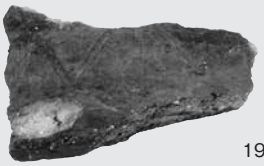
183

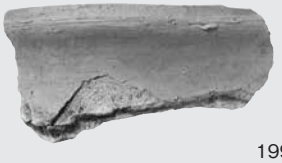
184

193

写真図版55　土師器10（20・21号竪穴建物跡）


194


198


199

195

200

196

201

197

202

写真図版56　土師器11（21号竪穴建物跡）

204

205

208

203

207

209

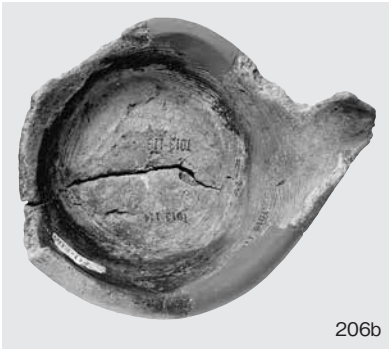
210

212

211

写真図版57　土師器12（22号竪穴建物跡）

206a


206b

206c

213

214

215

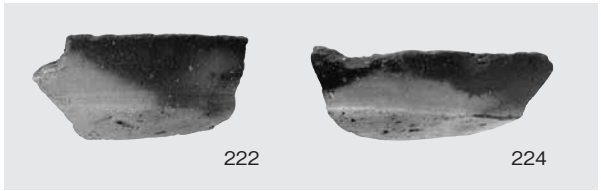
216

写真図版58　土師器13（22号竪穴建物跡）

217

220

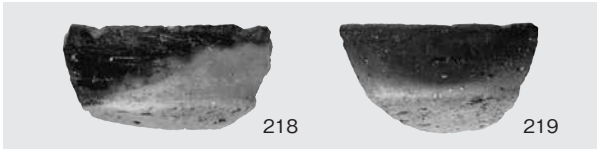
221


222 224

223

225

226


218 219

227

228

229

230

写真図版59　土師器14（23・24号竪穴建物跡）

231

232

233

235

234

236

237

写真図版60　土師器15（24・25号竪穴建物跡）

238

241

239

242

240

243

写真図版61　土師器16（26号竪穴建物跡）

244

245

246

247

248

249

250

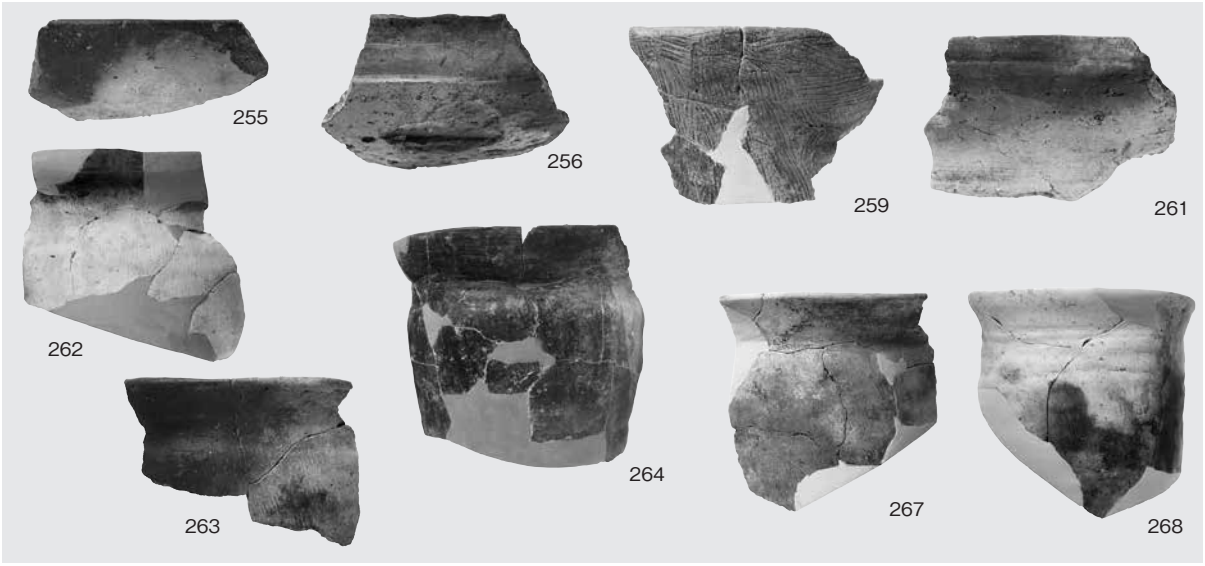
251

252

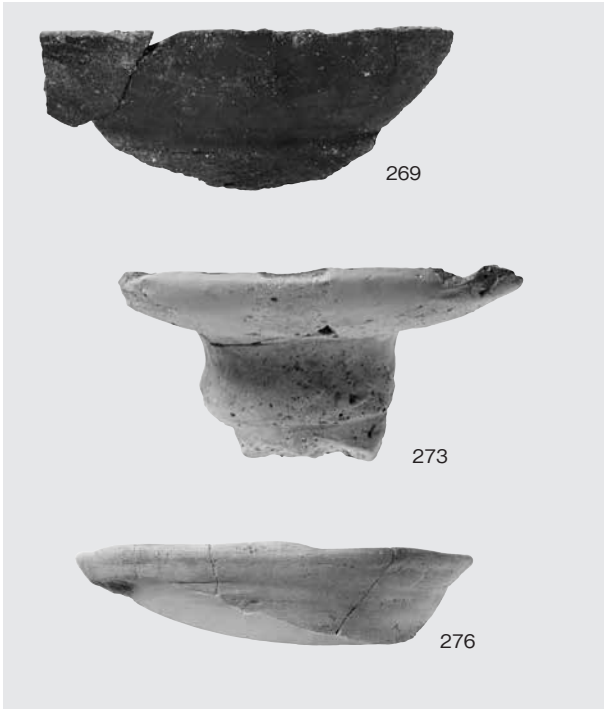
253

254

写真図版62　土師器17（27号竪穴建物跡）



写真図版63　土師器18（28号竪穴建物跡）



写真図版64　土師器19（30号竪穴建物跡）

283

284

285

287

286

288

289

写真図版65　土師器20（31・32号竪穴建物跡）

290

291

292

293

294

295

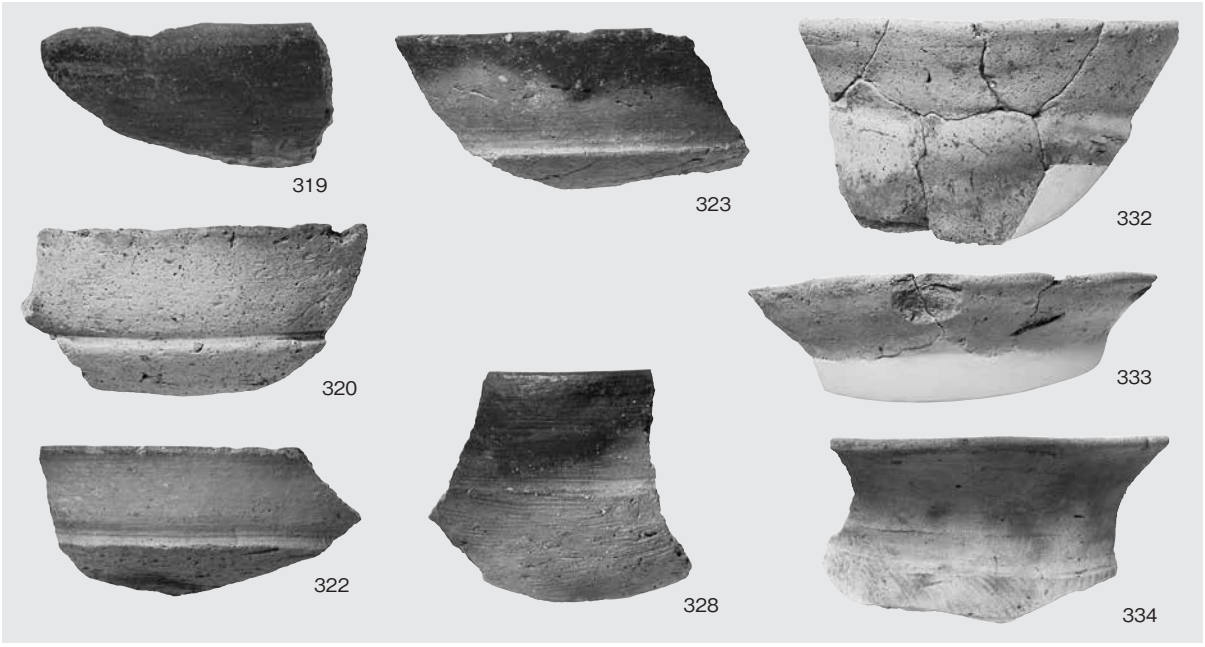
296

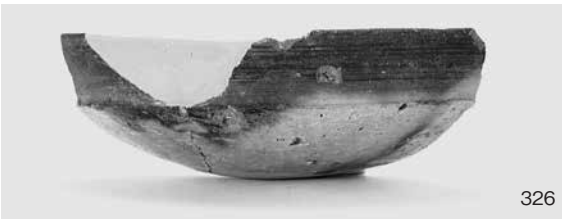
297

298

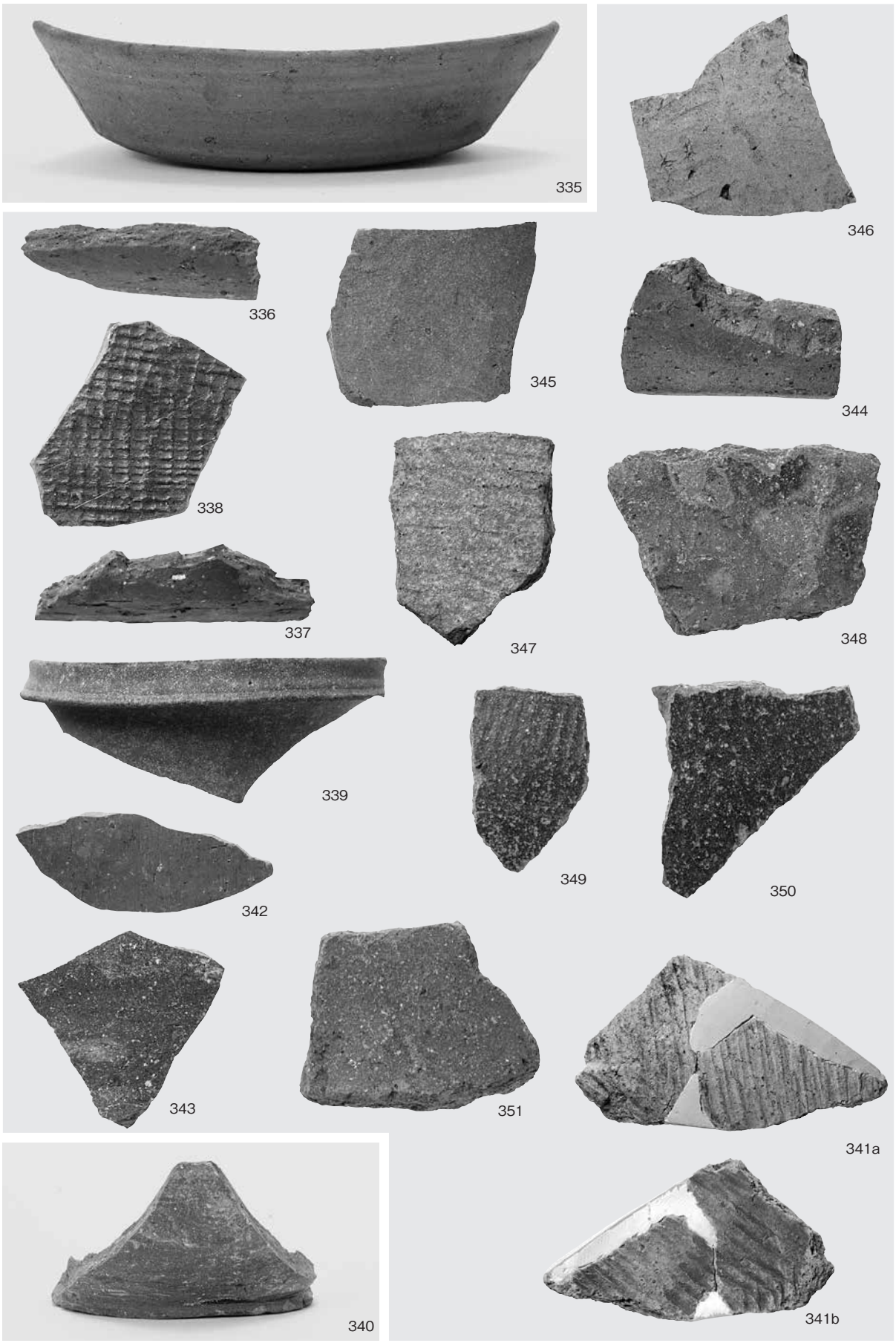
写真図版66　土師器21（33・34号竪穴建物跡）

写真図版67　土師器22（35・36号竪穴建物跡、遺構外）

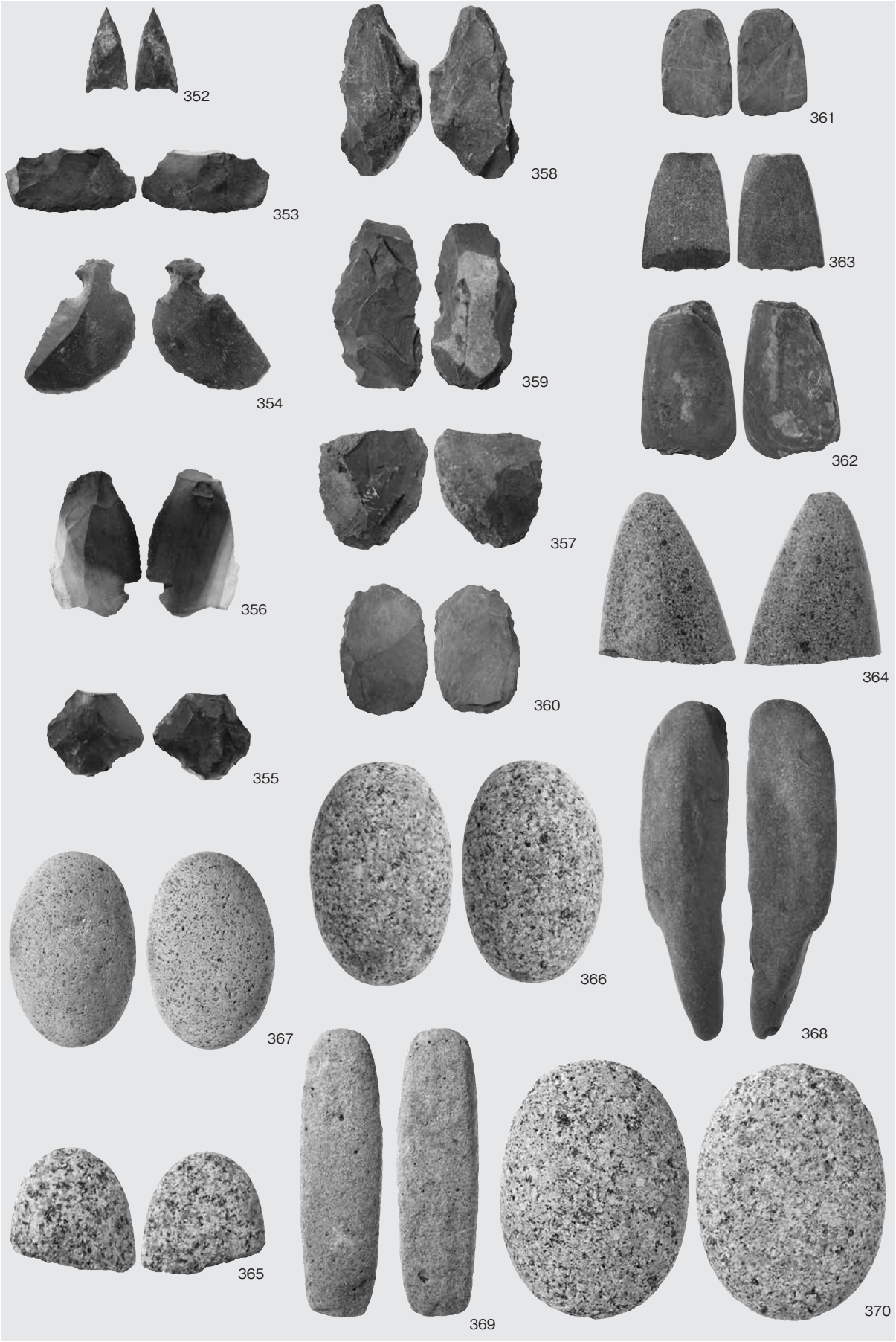




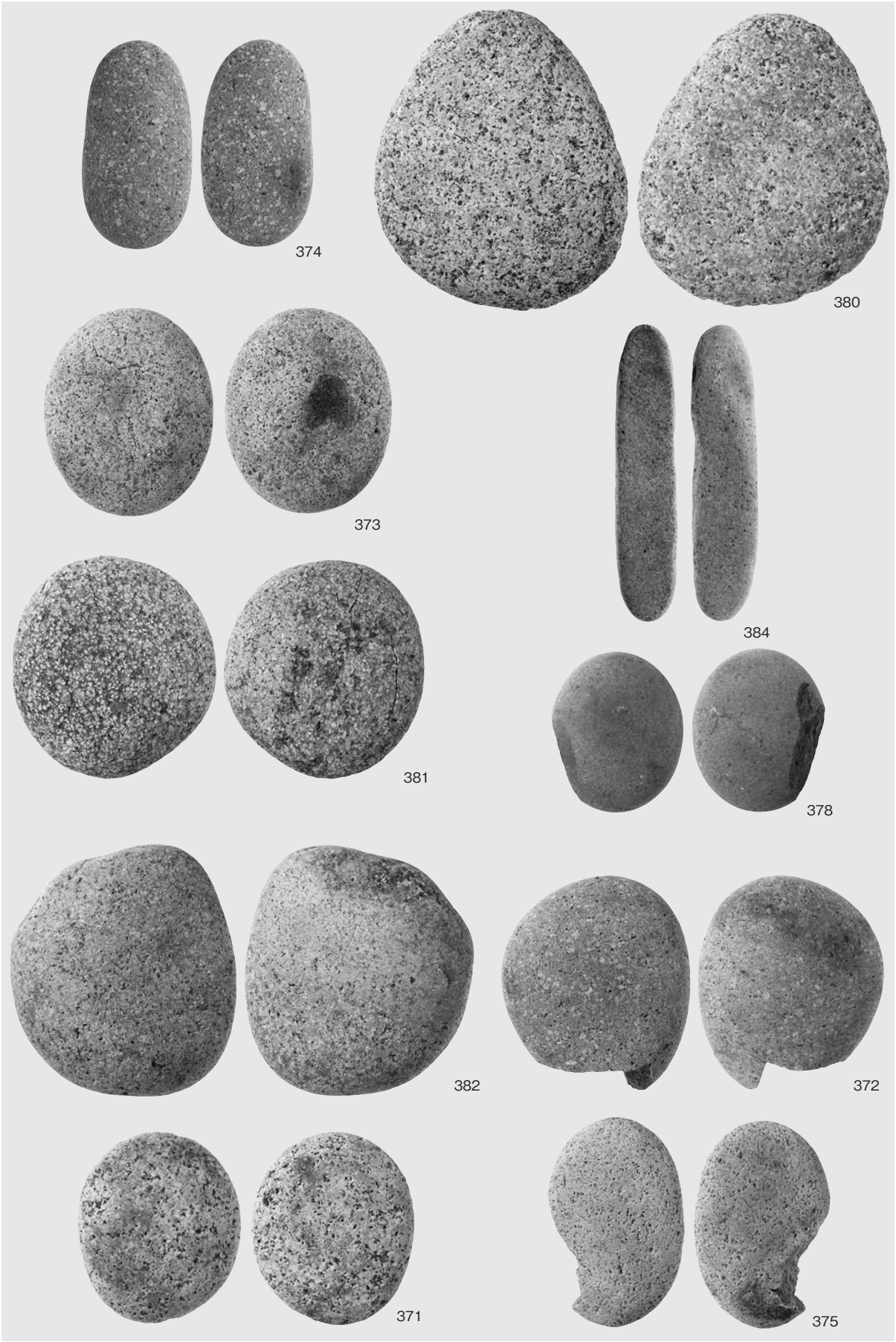
写真図版68　土師器23（遺構外）



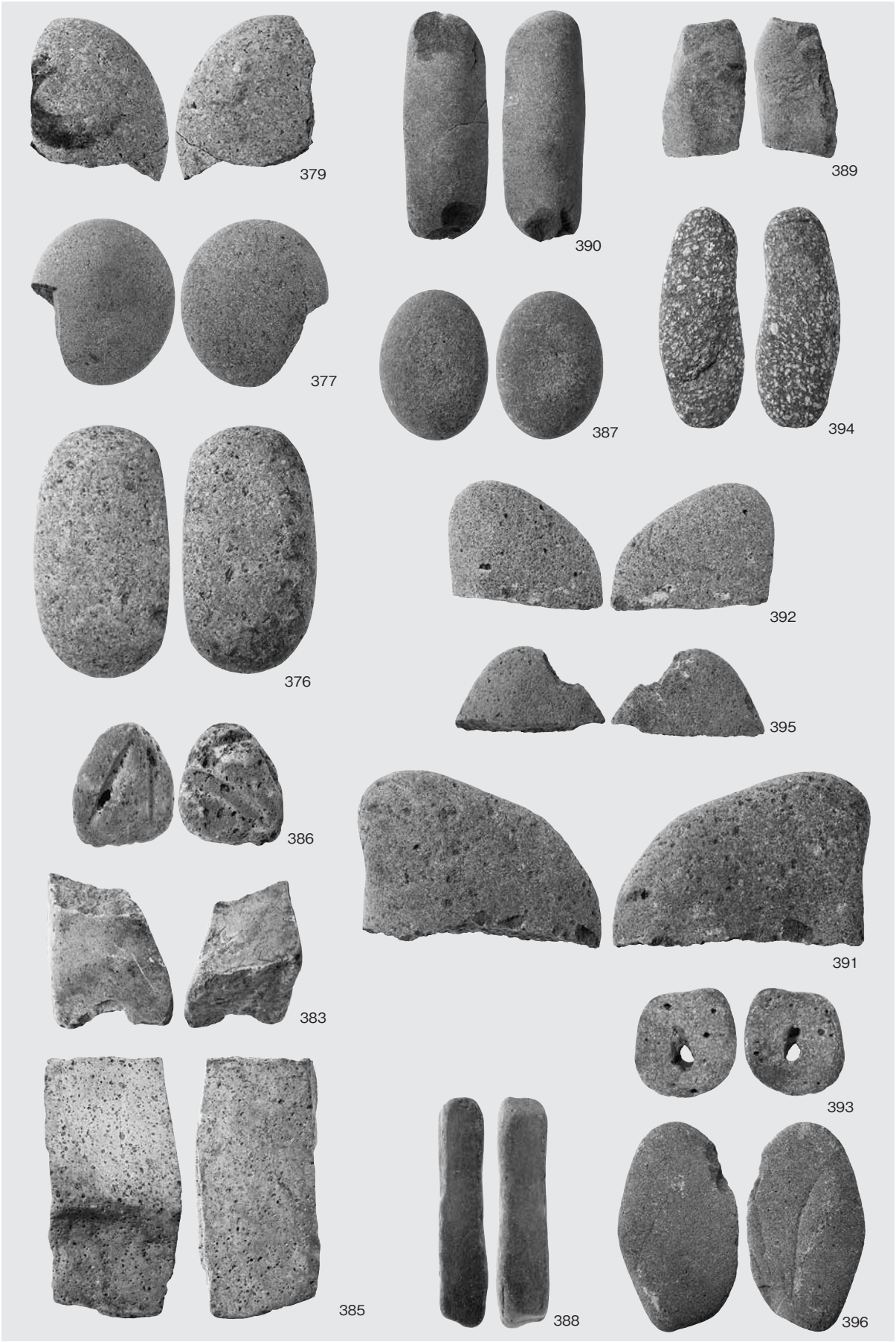
写真図版69　須恵器（2・5・7・10・35号竪穴建物跡、遺構外）


352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370

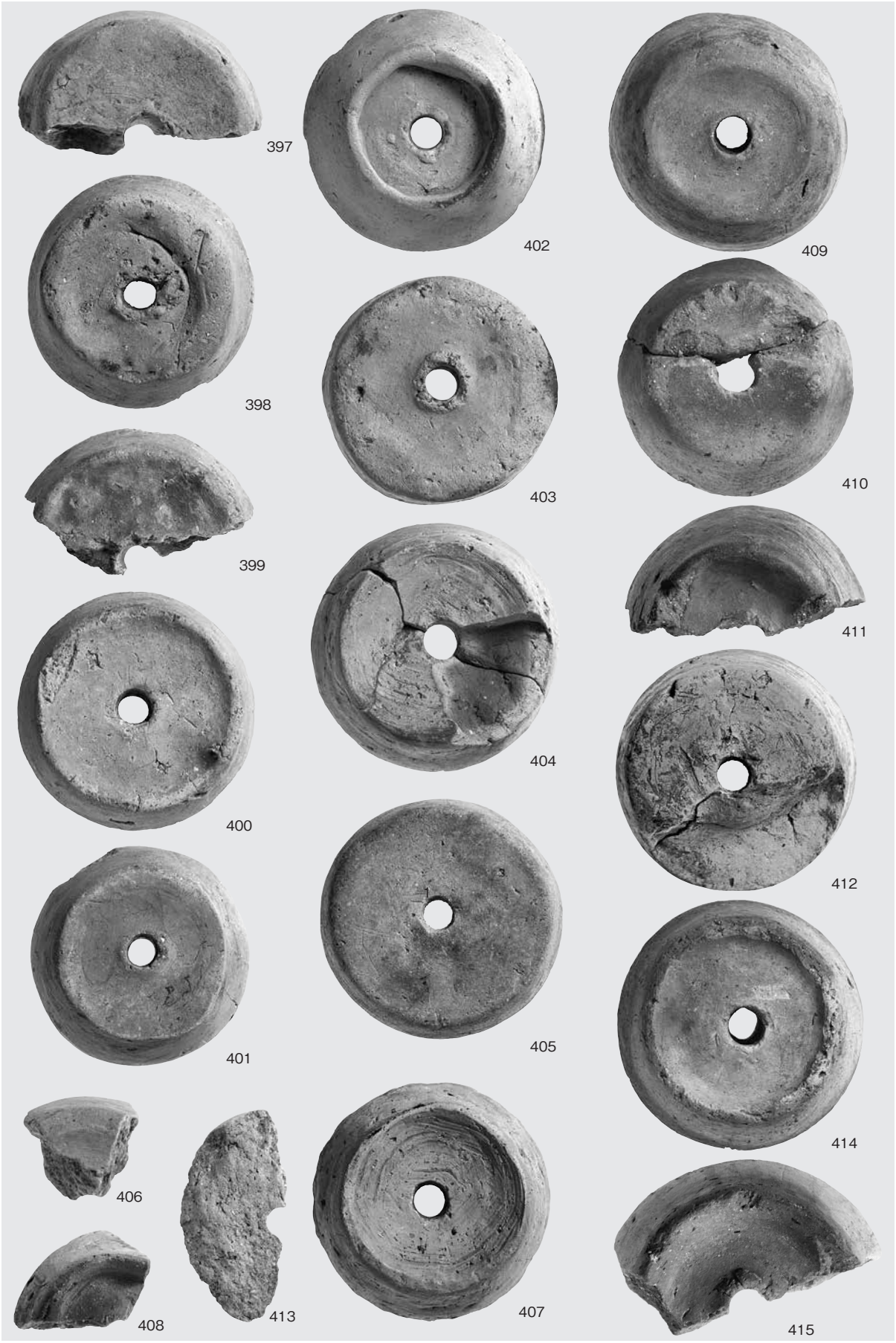
写真図版70　石器 1



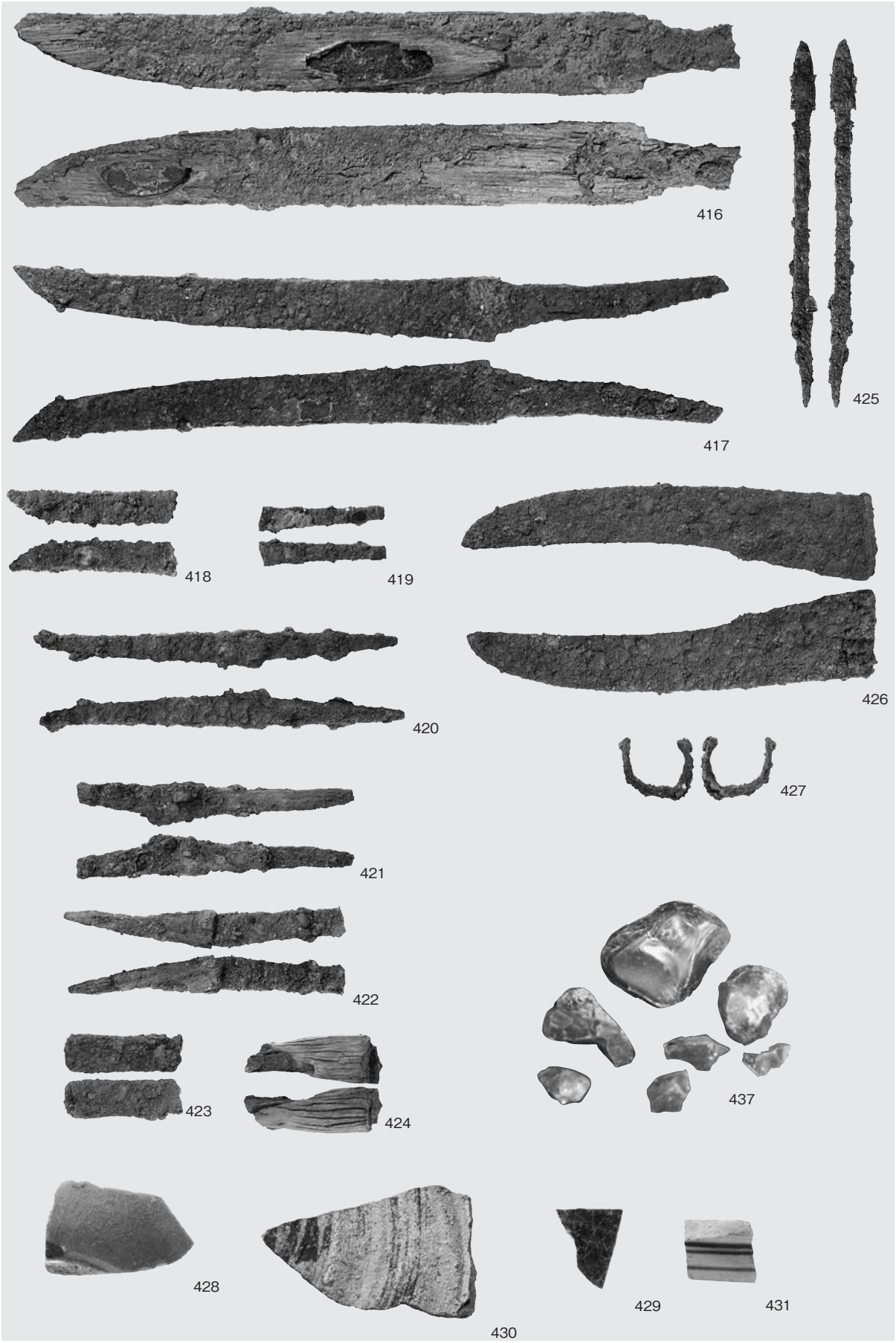
写真図版71　石器２



写真図版72　石器３



写真図版73　土製品（7・9・16・17・21～24・28・30号 竪穴建物跡、1号土坑、遺構外）



写真図版74　鉄製品、陶磁器、琥珀

※１～16はⅣ章２節表２の袋No.対応（p.p.189）

写真図版75　貝類（８・16・35号竪穴建物跡）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	つがるいしおおもりいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書 名	津軽石大森遺跡発掘調査報告書
副 書 名	三陸沿岸道路関連遺跡発掘調査
巻 次	
シ リ ー ズ 名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第641集
編 著 者 名	米田 寛
編 集 機 関	公益財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所 在 地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL（019）638－9001
発 行 年 月 日	2015年３月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
つがるいしおおもりいせき 津軽石大森遺跡	みやこしつがるいしだいちわり 宮古市津軽石第４地割 73－４ほか	03202	LG53－1207	39度 34分 57秒	141度 56分 00秒	2013.04.10 ～ 2013.08.27	3,455㎡	三陸沿岸道路 建設事業

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
津軽石大森遺跡	集落跡	縄文	竪穴建物跡 ２棟 陥し穴状土坑 ６基	縄文土器、石鏃、打製石斧、 磨製石斧、掻器、敲磨器類	縄文時代前期の指標火山灰To-Cuが堆積土に含まれる竪穴建物から早期末～前期初頭の土器が出土している。 古墳時代後半～奈良時代の集落で、奈良時代前半～中頃の建物が最も多い。蝦夷の儀器とされる赤彩壺が出土した。
		弥生		弥生土器	
		古墳～奈良	竪穴建物跡 33棟 土坑 １基	土師器（赤彩壺含む）、 須恵器、磨石、砥石、 方割石、鉄製品（短刀、鉄鏃、鎌、刀子） 貝殻、琥珀	
		平安	竪穴建物跡 ２棟	土師器、須恵器、鉄滓	
		中世以降		龍泉窯系青磁碗、陶磁器	
		時期不明	土坑 ２基 柱穴 14個		

要 約

津軽石大森遺跡は、岩手県宮古市津軽石第４地割に所在する。津軽石地区は、宮古湾に注ぐ津軽石川河口付近の西岸にあり、本遺跡は津軽石地区を見下ろす丘陵部の突端に位置する。遺構は、縄文時代前期と中期の建物と陥し穴状土坑、古墳時代後期から奈良時代の建物と土坑、平安時代の建物の調査を行った。特に古墳時代後期から奈良時代の建物は数が多い。岩手県の三陸沿岸部では、坏類が数多く出土する遺跡は少なかったが、本遺跡では非常に多くの坏類が出土している。また、蝦夷の儀器とされる赤彩壺も出土した。本遺跡は、のちの閉伊郡範囲と考えられている『続日本紀』記載の「閉村」内の集落の可能性がある。中世には、青磁碗の出土から、遺跡背後の丘陵地に城館跡の存在が想定される。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第641集

津軽石大森遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

印　刷　平成27年３月13日

発　行　平成27年３月20日

編　集　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話（019）638－9001

発　行　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
〒027-0029　岩手県宮古市藤の川４番１号
電話（0193）62－1711

（公財）岩手県文化振興事業団
〒020-0023　岩手県盛岡市内丸13番１号
電話（019）654－2235

印　刷　杜陵高速印刷株式会社
〒020-0811　岩手県盛岡市川目町23番２号
電話（019）651－2110

©（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2015